

ラブライブ！サンシャイン！！～大地と海の巨人～

カズオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

—これは輝きを求める少年少女たちの物語—

スクールアイドルを目指し、輝きを追い求める少女達、それを嘲笑うかのように突如として地球に現れる怪獣たち。

そしてそれらと戦い、人類を、地球を守ろうと光を手にした少年達の物語である。

そしてその物語はここ内浦で少年が光と、少女がスクールアイドルと出会うところから始まっていく—

—追記—9月5日、タグにウルトラマンアグルを追加しました

12月2日、完結しました。

目次

ver. 1 光を手

第1話	輝きたい!!／光をつかめ!	1
第2話	勇者立つ／海の音	10
第3話	海に還るもの／その名はガイア	23
第4話	天からくる者／ファーストステップ	35
第5話	ファーストライブ／もう一人の巨人	48
第6話	二人のキモチ／青の想い	62
第7話	ヨハネ墮天／アグル誕生	75
第8話	あざ笑う目／本当の自分	87
第9話	PVを作ろう!／星が消えた:	98
第10話	何かがいる:／夜空を照らす	111
第11話	アグル対ガイア／TOKYO	127
12話	失くしたもの／突きつけられたもの	140
13話	くやしくないの?／NEVER SURRENDER	151
14話	迷宮のルビィ／ガイアの怒り	163
15話	取り戻すために／並び立つ赤と青	178
16話	またみんなで:／アグルの決意	191
17話	すれ違いの果て／明かされる想い	205
18話	明かされる過去／未熟DREAMER	218
19話	シャイ煮はじめました／星の夜に	228
20話	明日なき対決／大切なもの	240
21話	決着の日／Daydream Warrior	251
22話	向き合う決意／新たなる戦い	263

23話 友情ヨーソロー／ヴァージョンアップ・ファイト！

276

24話 龍の都／はばたきのとき | 287

25話 悪魔のマユ／それぞれのステージ | 302

26話 サンシャイン!!／ガイアノチカラ | 315

Ver. 1.5 超時空の大決戦

一章 時空を超えた出会い | 324

二章 赤い玉 | 334

三章 最恐の怪獣 | 344

四章 光よ！ | 356

五章 光の星の戦士たち | 364

Ver. 2 輝きへ

27話 ネクストステップ／舞い降りる翼 | 373

28話 魂の激突!／普通怪獣の叫び | 384

29話 1年と3年と／海は何も答えない | 400

30話 雨の音／再会の空 | 412

31話 二兎追う為に／悪夢の第四楽章 | 425

32話 虹／もう誰も： | 439

33話 空中要塞／生徒会長の憂鬱 | 451

34話 ダイヤさんと呼ばないで／ガイアに会いたい！ | 464

35話 大地裂く牙／犬を拾う。 | 478

36話 呪いの眼／見えない力 | 493

37話 墮天使の望み／in this unstable | w

orld | 503

38話 アグル復活／護るべきもの | 513

39話	A q o u r s	W A V E	再会父よ	527
40話	残された時間	嘆きの大地		539
41話	君を守りたい	戦う選択		555
42話	残せるもの	赤い瞳		566
43話	遥VS遥	H A K O D A T E		577
44話	姉と私と	それまでは		591
45話	曲を作ろう!	伝説との闘い		602
46話	宇宙怪獣大進撃	A w a k e n	t h e p o w e r	
612				
47話	幼き日の記憶	魔人襲来		628
48話	命棲む星	シヤイニーを探して		640
49話	未来の選択	忍び寄る影		655
50話	浦の星	死神の囁き		667
51話	天空の遥	空中要塞墮つ		677
52話	アグル激情	右手に光を左手に君を		689
53話	彼の地へ再び	涙のムコウ		701
54話	戦士発つ	天使降臨		713
55話	暗黒の中で	遥の決意		727
56話	地球の叫び	M i s s i o n	G A I A	739
57話	地球はウルトラマンの星	光の海		750
58話	いつかの約束	怪獣の身代金		761
59話	遥の答え	破滅の人形		772
60話	卒業ですね	これが最後なら		783
61話	大地と海と	最後の輝き		794
62話	また、会おうよ	いつか	B e a t o n D r e a m	

よ再びㄱ

I 新たなる始まり

II これから

III A q o u r s イタリアへ

IV 自分を作ってくれたもの

V 叶えられなかった夢

VI キセキは再び

VII 僕を信じて

最終回 虹を越えた先

ver. 1 光を手

第1話 輝きたい!! / 光をつかめ!

「ここは…?」

僕は気がついた時、周りに岩しかなく空が赤い殺風景な場所、そんな所に僕はいた。

なぜこんな所にいるのか、果たしてここはどこなのか? そう思っていた時…

「デエヤア!」

「キユイイイ!!」

真つ赤に輝く巨人と、大きな龍が戦っていた。

「これは一体…?」

訳がわからない、あれはなんなのか? これは夢なのか?

混乱する頭で考えをまとめようとしていると、両者の戦いに決着がつこうとしていた。

巨人が両腕を広げ、その後かがみ込むようにしてエネルギーを頭頂部に集めていく…そしてそのエネルギーを、龍に向かって解き放つた。

「デュワー! ハアア…: デヤアアア!!」

その光は龍に直撃し、光の刃のようなものが怪獣を切り裂き消滅させた。

そのあと巨人はこちらを向いて、僕を見つめている…

「君が…君が僕をここへ連れてきたのか?」

僕は巨人に聞いた、でも巨人は何も答えない。

「君は一体…何者なんだ? ウルトラマン…」

巨人に更に問いかけようとした時、不意にその名前が出た。なぜそう呼んでしまったのか、自分でも解らなかった。

「…」

だが巨人はウルトラマンと呼ばれたことに対し、ゆっくりうなずいたのだった。

巨人に…いやウルトラマンに更に言葉を投げかけようとた時、周りが光に包まれていきなり引き離されるようにウルトラマンが離れていって、そして…

「お…て…きて…」

「ん…」

まだ意識がはっきりしないが女性の声がする…

「起きなさい！遅刻するわよ!!」

「うわあ！…っでえ…」

その声がいきなり大声になったので飛び起きた僕はそのままベツトから落ちた。飛び起きた僕の前にいたのは、赤紫色のロングヘヤーの少女だった。

「全く、今日入学式でしょ？遅刻するわよ」

目の前の少女…僕の姉、桜内梨子は呆れたような表情で告げる。

「えっ？ほんとだ時間ギリギリじゃん!!ごめん姉さんすぐ準備して行くよ」

「それじゃあ私も転入の手続きとかあるから、先に行くからね」

そう告げると、僕の部屋から出ていこうとしたが、ふと振り返って

…

「そう言えば、寝言で言ってたけど『ウルトラマン』って…何？」

「え…？僕そんなこと言ってたの？」

「覚えのない言葉ならいいわ、それとこの部屋もうちよつと綺麗にしたら？遙ももう高校生なんだから」

周りに参考書やら工具やらが散乱した部屋を見回しそう僕に告げる。

「はあい…」

僕の気の抜けた返事を聞くとそのまま部屋を出ていった。

その後新しい制服を着て、朝食をとってからバスに乗り今日から通う新しい学校…浦の星学院に向かう。

数年前までは女学院だったそうなのだが、少子化の影響で共学化したらしいそれでも生徒数は多くなく各学年1クラスずつ程度の人数ではあるのだが…

なぜ僕がこの学校に通うことになったのかと言うと、元々東京に住んでいたのだが、色々合って家族全員ここ内浦に引っ越して来ることになったので、姉の転入先の学校が共学なのでそこを受けただけなのだ。

夢のあれは何だったのか…などと考えても仕方がないのだが、入学式の間も新しいクラスでのホームルーム中も考えてしまつてほとんど周りの話が入ってこなかった…

「えつと…君の番だよ？自己紹介」

「え？」

ふと横の席の女子生徒につつかれながら声をかけられようやく今がなんの時間だったか理解する。

先生が「桜内くん、お願いします」と言われ「すみません」と一言謝りながら立ち上がり

「桜内遥といいます、よろしくお願いします」

それだけ言う座って、先程の女子に「ありがとう」と返しておく。結局そのあと夢のことばかり考えてしまつて他の生徒の自己紹介など耳に入りもしなかつた…

結局そのまま放課後となり、図書室で少しどんな本があるか眺めてからバス停に向かつた結果、数分前にバスが出てしまい次のバスまでかなりの時間が空くこととなつてしまつた。

「はあ…田舎は空気が美味しいのどこかいいんだけどこれは最悪だな…」

なんてぼやきながら、再び図書室へ戻ろうか考えていた時。

突如空が暗くなり、何事かと空を見上げると空ではなく、何やら別のどこかと繋がっているような渦が突如として現れていた。

まだ学校に残っていた生徒達が気になつて外へ出てきたその時…その渦の中心から巨大な生命体が降つてきたのだつた。その生き物は両腕は鎌のようになっており、その鎌を、額から出る光球で街を破壊し始めたのだつた…!

当然周囲はパニックにな少しでも遠くに逃げようとする生徒達、きつと町はもつと大変なことになつていゝるだろうことは容易に想像が着く。

「まさか…あの夢は、あの生き物達に破壊された世界なのか…?」

周りの人間達は遥には気づかず、バス停とは反対方向へ走つて逃げていく中で遥はそう呟いた。

自分達には何も出来ないのか?ただあの生き物に蹂躪されてしまふのか?ただ自分の無力感だけを感じていた。

「もう僕達には、何も出来ないって言うのか!」

叫んだところで何も変わらない、そう感じてしまい俯きかけた時…
「え?」

び込もうとしていた。そんな時に、慌てて駆け寄ってきたオレンジ髪の女の子に止められそうになったけど、強行した結果もつれて一緒に海に落ちてしまった…

「大丈夫？沖繩じゃないんだから…」

その子はそう言いながらも海から上がって震えていた私にタオルをかけてくれて、更に火もつけて暖を取れるようにしてくれた、自分も寒いだろうに。

「海に入りたいならダイビングショップもあるし」

そう言いながら私の横に座る少女、恐らく地元の…浦の星の生徒だろう、確か私が渡された制服も全く同じデザインのはず。

せっかくここまで気を利かせてくれた少女相手に理由も告げないのは申し訳なくなつて、どうして海に入りたかったか話す事にした。

「…私ね、海の音が聴きたいの」

「海の音？」

と少女は繰り返した後「どうして？」と聞いてきた。

私がどう答えたらいいのか考えていたら「じゃあもう聞かない」と言ってくれた。正直初対面の人にあまり言いたくなかった面もあったので助かった。

「海の中の音ってこと？」

結局また聞いてきた少女に対して思わずくすつと笑ってしまう。そして私も

「私ね、ピアノで曲を作ってるの、でも海の曲がイメージができなくて…」

そう答えていた。

「作曲なんてすごいね」と言ってくれる少女

ふと私が海に入る前まで水着の上に着ていた制服が気になったのか、

「この辺の高校？」

と聞いてくる、私は

「東京…」

そうぼつりと返すしか出来なかった。

「なんでわざわざ？」

当然だろう、どうしてわざわざ東京から平日に高校生が海に入りここまでするのか、私はなんでなのかを答えようと口を開こうとしたら遮るように。

「じゃあスクールアイドルって知ってる？」

そう聞かれた、私はスクールアイドルとはなんなのか、有名なのか一切知らなかったので少女は熱心に説明してくれる。

そしてそのスクールアイドルとやらの動画まで見せてくれたのだが、私の想像と違って、私たちのようなどこにもいる普通の学生がアイドルのように歌って踊っているように見えた、少女が「どう？」と聞いてくるので、「芸能人みたいなのを想像していたから、思っていたより普通」と思ったままに返していた。

「だよね」

「え？」

動画を見せる前、きつと驚くと言っていた彼女が肯定の返事をしたので思わず聞き返してしまう。

「だから、衝撃だったんだ。」

普通なのが衝撃なのか？そう思っていると少女は続ける。

「私ね、普通なの…。私は普通星に生まれた普通星人なんだから、どんなに返信しても普通なんだって、それでも何かあるんだって思ってたから気がついたら高二になってた…」

「まずい…このままじゃ本当にこのままぞ！普通星人を通り越して普通怪獣ちかちーになっちゃう！って」

「がおー！」と私に大口を開けながら迫ったあと「びー！どかーん!!」と怪獣遊びを始める彼女に思わず微笑んでしまう。

「そんな時、出会ったの。あの人たちに」

あの人たち、というのは恐らくスクールアイドルのグループだろうそう考え、彼女の話に聞き入る。

「みんなわたしと同じ高校生なのに、キラキラしてた。それで思った

の、普通の高校生でも努力してみんなですテージに立てば、こんなにかっこよくて、感動できて、素敵になれるんだって！」

そう語る彼女の姿が、眩しかった。

「スクールアイドルって、こんなにもキラキラ輝けるんだって！そして私も思ったの、仲間と一緒に頑張ってみたい、あの人たちが目指していたものを目指したい、輝きたいって!!」

「ありがとう」

「え？」

「なんだか今の話、頑張れって言われた気がする。」

「ほんとに？」

「ええ、スクールアイドル、なれるといいわね」

「うん！」

ここまで話してお互いまだ名前も何も知らないことに気がついた、向こうも同じなのか、先に自己紹介をしてくれた。

「わたし、高海千歌。浦の星学院って高校の2年生」

「私は桜内梨子。高校は、音ノ木坂学院。」

そう返した時、突如空から怪獣が降ってきたのが見えた。

「なに…あれ…?」

「ともかく逃げないで！」

そういうが早いか彼女は私の手を引いて駆け出した。

怪獣が落ちてきたのは沼津の方向でここまではまだ距離があるがあの巨体ならこちらへ来ようと思えばすぐだろう。どうすればいいのか解らずただ手を引かれるまま逃げていたその時だった…

『デヤアツ!!』

空が赤く光ったと思ったのもつかの間、赤と銀の巨人が大きな土煙を上げながら、巨大な生命体の前に着地したのだった。

第2話 勇者立つ／海の音

空から突然現れ、街を破壊しだした化け物。それに対して同様空から現れた赤い巨人：巨人は暫く自分の腕や体を不思議そうに見つめた後、正面の化け物に対して戦いを挑んで行った。

「あの巨人は一体…」

「わかんない、チカも初めて見るもん…でも、あの怪獣からみんなを守ろうとしているみたい。」

私と高海さんは逃げようとしている最中に現れた巨人の方を見ていた、あれは何者なのか、一体自分達の周りで何が起きているのかもわからないまま。

(なんだ…これ？僕がああ巨人になっているのか…?)

急に光に包まれたと思えば、さっきの化け物が自分より少し大きい位のサイズに感じられ、街並みが小さく見えた。それは、自分がさっきの巨人：『ウルトラマン』になっているからだということを理解した。

「ギエアアアアアア!!」

化け物が咆哮を上げながらこちらへ突っ込んでくる。今まで戦闘経験はおろか、喧嘩だってほとんどした事の無い僕はその突進をもろにくらい吹き飛ばされる。

このまま自分がやられてしまえば誰がみんなを守る？誰が姉さんを守るのか？いや、今みんなを守るのは自分だけなのだ、そう思い自分を奮い立たせそのままのしかかろうとしてきた化け物を勢いよく蹴飛ばして立ち上がる。

(負けない！僕はウルトラマンなんだ!!)

「デヤアッ！デユアア!!」

今度はこちらの番だと言わんばかりに化け物に拳の連打を見舞う、反撃しようと腕の鎌を振りかざす相手に対して足でその攻撃を払いその勢いのまま回し蹴りを見舞う。

「キュアアアア!!」

悲鳴を上げながら後ろへ後ずさる化け物に、追撃を入れようと走り出したタイミングで

「キュオオオオ!」

化け物の頭部から光球が数発発射される。咄嗟に反応出来なかったウルトラマンは、その攻撃をモロに受け後方に吹き飛ばされ倒れ込んだ。

その隙を見逃さまいと覆いかぶさって鎌で、牙で攻め立てる怪獣の攻撃を必死に凌ぎながらどうするか考える…

(そうだ、夢で見たあの技ならコイツを倒せるかもしれない…)

怪獣の一瞬の隙を付き、脱出し渾身の力で蹴飛ばし距離をとり、夢で見たウルトラマンのように両腕を広げエネルギーを貯めそのエネルギーを東部に集中させ、目の前の相手へ全力で放つ!

「デヤアッ!ハアアアア…:…デヤアアアア!!」

その光の刃は相手を全身を引き裂き跡形もなく爆散させた。

ピコンピコンピコン…

気がつけば胸に付いている青く輝いていた結晶のようなものものが音を立てて赤く点滅していた、まるでエネルギーが残り少ないのを告げるように。

もう化け物は退治したし、どうすれば元に戻れるのかという疑問に行き着いた時脳内にイメージが湧き、それに従うと巨人の姿があつたという間に縮んでいき、元の姿に戻っていた。

すると目の前に光の玉が浮いていた、きつとこれが自分を巨人に変えたのだらうと咄嗟に理解した僕は、持っていたシャーペンの芯のケースを空にしてその中に光を入れてみた。光は形はケースに合わさったようになってたが不思議と収まってしまった。

このままここにいと怪しまれる事に気がついたので、急いでその場を離れて帰宅する事にした。

巨人が怪獣を倒したあとそのまま消えてしまったのを、私達は結局出会った海の近くからほとんど離れずに見ていた。

「あの巨人って、何者だったんだろ？」

「きつと正義の味方なんだよ、私達を助けるためにやってきたヒーロー！わたしはそう思うな…」

私の疑問に対してそう高海さんは答えた。

「そうよね…きつとそう…」

私もそうだと思いたい、今度はあの巨人が街を襲えば…恐らく誰も止められないから…

その後私達は火の片付けをして、私は自分の制服を回収して彼女と別れて家に帰って明日からの生活に備えるのだった…。

何とか家に帰り着くと、親には心配をされ姉は何故か唇が紫気味になっっていた。

その日の夕飯の時見ていたニュースでは、さっきの化け物と、僕が変身した巨人の事で持ち切りだった。果たしてあの巨人は味方なのか敵なのか？またあの化け物―『怪獣』と呼ぶことか決定たらしいが

それがまた現れるではないか？どう対策していくのか？そんな話題で持ち切りだった。

正直自分がやった事なので誰にも気づかれてないとはいえ少し恥ずかしいので、直ぐに自分の部屋に戻ってきつき回収した光を別の入れ物に入れるべく少し工作を始める。

僕は、昔から手先が器用な方なのか知り合いに貰ったジャンク品でPCを組んでみたりといったことをよくやっていたし、勉強もできる方だった。その代わり運動はからつきだし、よく室内でそういうことばかりやっていたので小学生辺りまではちよつと浮いていたと思う：だから正直戦っている自分の姿はちよつと腰が引けていたと思う。

でも今はその器用なのが役にたちそうだ、どんな風にするか簡単にデザインを考えておいたし、側だけで良さそうなので早くできた。ウルトラマンの胸の青く光っていた結晶のようなのをイメージしたアイテムだ。

早速光をその中に移そうとシャーペンの芯のケースの蓋を開けると、光が出てきたので今作ったアイテムをかざすと今度はその中に入ってくれた。これで完成だ。

「光を解き放つんだから：『エスプレnder』がいいかな？」

などと考えながら、ふと時計を見るとそろそろ日付が変わろうとしていたあまり夜更かしするとまた朝叩き起されることになるので、あまり姉に迷惑をかけたくないのでそれは避けたいところではある。が、寝る前に何か飲もうかと思つてリビングに降りて少しまた、ニユースを流しながら水を少し飲む。

ニユースは相変わらず怪獣の事をやっていたが、たまたまドメを刺したシーンが流れていて、夢で見たイメージどおりの動きでイメージどおりの光線が頭から出ていた事を知る。

「うーん：光の刃だから、『フォトンエッジ』かな？：ふっ…」

両腕を、広げポーズを再現しようとしたその時…

「遥まだ起きてたの？また寝坊するわよ？：…って何してるの？」
梨子がリビングに入ってきたのだった。

「ああ…いやえつと…ストレッチ…かな？それこそ姉さんは寝ないの？」

「ごまかせる自信がなかったたので話を逸らしながら急に入ってきた姉に対して逆に質問する。」

「そうなんだけど…なんだか眠れなくてね、やっぱり不安なのかな…上手くやっつけられるか…。それに、夕方の怪獣騒ぎもあるしちよつと怖いんだ…」

目を伏せながらそう答えてくれた。

「大丈夫だよ、学校はいい人ばかりだったし！それに怪獣が出たってまたウルトラマンが倒してくれるって!!」

「そうだね…それは私もそう思う…ってウルトラマンって、なに？」

「えつと、あの巨人のことかな？大地が呼んだ赤い巨人『ウルトラマンガイア』なんかかつこよくない？」

「ふーん、そんな名前なんだ…？まあいいわ私もう寝るから、おやすみなさい」

「まあ…勝手につけただけなんだけどね…おやすみ、姉さん」

急にウルトラマンという、勝手につけた名称を出したせいで少し怪訝な顔をされたが姉はおやすみと言うとそのまま部屋に戻っていったので、僕もテレビを消して部屋に戻って明日からどうなるのか…その不安は自分にもある。でもそれでもみんなのために戦いたいし、自分のやりたい事のために高校もちゃんと行きたい、今はそうハッキリ思えるのできつと頑張れる。そう言いきかせて眠りについた。

次の日、何事も無かったかのようにみんな登校していたがクラスではやはり昨日の怪獣騒ぎの話題で持ち切りだった。ただ、当事者としては話に入りにくいしバレてしまったらどうしよう…?という気持ちの方が強いので、寝たフリでもしていようか…?などと思っていたが、このクラス今更気がついたが『男子が3人しかいない』後の2人は恐らく中学も一緒だったのかずっと2人でつるんでいるし自己紹介も聞かずにぼーっとしてるわ放課後図書室にいたわでろくにクラスメイトと話してなかったので完全に浮いてしまった…

しまったなどと思いはしたが、元々勉強はできたがそういうのには疎いし幼少期はイジメにもあったし、たかだか3年くらいはこのままでもいいか…と思うことにした。だから家族に着いてきてそのまま姉の転校先の学校を受けるのを周りに『本当にいいのか?』と念を押された意味を理解した。

その後、ホームルームで担任から伝えられたのは昨日の怪獣騒ぎで怪我等をした生徒はいなかったこと、学校がまた何かあった時の避難先に決定された事、1人学校に来てないが、怪獣騒ぎとは関係ない事を伝えられ、今日から授業が始まっていった。

そのまま放課後となり、今日は昨日の怪獣のような生き物が本当に地球にいるのか調べようと思ひ、図書室で生物の本を漁ってみることにした。

その途中姉とすれ違ったのだが声をかけようと思ったが何やら「ごめんなさい」などと言いながら、オレンジ色の髪的女子生徒から走って逃げていったので無理だった。

「なんだったんだ…一体…」

恐らくリボンの色からして2年生だろうし、転入初日で何か問題があったのか?と心配になっていたが、その後に来た灰色の髪のもまた2年生に「何かあったんですか?」と聞くと「いや大丈夫、ごめんねびつくりさせて」そのまま彼女たちの去っていった方へ行つてし

まった。

とりあえず当初の目的通り、図書室へたどり着いたのだが自分は理科は得意だが生物的な方面は正直苦手なのでどうするのがいいか：ネットで調べるのも考えたがまだ引越してきたあとでまだパソコンがネットに繋がっていないのでこうやって図書室に来たわけだ。昨日は純粹にこういう本があるかの興味で寄った訳だが…。

「本が好きなんですか…？」

「え…？」

ふと後ろから声をかけられて振り返ると、隣の席の生徒がいた。

「まあそうだね、昨日も来てたし…それに色々調べるの好きだからさ？えつと…君は確か隣の席の…」

困った、誰の自己紹介も聞いてなかったたので名前が解らない…

「あつ、マル…私、国木田花丸です、桜内遥君…だよな？」

「うっ、うん桜内遥です、国木田さんだねゴメン昨日ぼーつとして聞いてなかったんだ…」

「そうなんですな、というか難しい本読むんですな」

「そう言いつつ今遥が読んでいた生物学の本に視線を落とす。

「ああこれ？いや昨日の怪獣みたいな生き物がほんとにこの地球上に存在してるのかなって気になってさ？もしかしたらまだ僕らが知らないだけで怪獣がもつといるのかもしれないし」

「そ、そっか…オラ…いやマルにはちよつと難しいなあ…」

「そう？ところで、僕に何か用があったの…？多分呼び出されないといけないようなことはいはずなんだけど…」

「そんなのじゃなくて、昨日も今日も図書室にいたし、どんな本が好きなのかなあ…って気になったから、ごめんなさい邪魔しちゃって」

「いや全然大丈夫だよ、あと同級生なんだし敬語も使わないでいいからね。」

「うん、じゃあ用事あるから帰るね。またあした学校で」

「うん、また」

そう言うのと彼女は帰っていった、その時にここからは本棚の影に

なっていたところから赤髪の少女が出てきてなにやら親しげに話しているようだったので彼女も同級生なのだろう。そう思うとまた本に視線を落とす。それから暫くした後…

突然地響きが起こり、少し離れた場所にある山が突如崩れ4本脚で全身を硬そうな外殻で覆われた怪獣が現れ、なんと学校に向かってくるのだ！当然下校途中だった生徒達もパニックになり、校舎にいた教員達が必死に避難誘導を始めた。だがここまで辿り着くのは直ぐだろう恐らく間に合わない。遥も外に出て校舎の影に入り込み、周りに人が居ないのを確認するとエスプレンダーを取り出す。

「僕が今は…ウルトラマンなんだ！」

エスプレンダーを見ながらそう言い、自分を鼓舞するとエスプレンダーを前に突き出し叫んだ。

「ガイアアアア!!」

するとエスプレンダーから眩い光が放たれ、それに遥が包まれるとその光は上へと向かっていき、怪獣の前にウルトラマンガイアとして現れた。

私は、高海さんのスクールアイドルへの勧誘をしつこくしてくるのから逃げ、そのまま下校しようとした時に、今度ら地面から怪獣が出てくるところを目撃してしまった。やっぱりまた現れた…逃げないと…そう思うのだが脚が動かない、更に怪獣はさっきまでいた学校目指して突っ込んできている。ここもきつと危ないそう思うのだが、今は自分しかいない孤独感と、怪獣への恐怖で脚が動かず震えているだ

けだった…

その時だった―

「デヤアツ―」

まるで怪獣の前に立ちほだかるように昨日の巨人…ウルトラマンが現れたのだった。

「ウルトラマン…ガイア…」

弟が、昨日言っていた名前を呟く。みんなの言う通り彼は味方なのだ、私たちを助けに来てくれたのだと…そう思ったら安心出来た。

ガイアは、怪獣の突進を受け止めると首の当たりにしがみつき怪獣の upper body を無理やり起こし、腹に蹴りを入れる。そうすると怪獣は苦しそうな声を上げながらひっくり返る。

さらに畳み掛けるように怪獣の腹の上に乗る、頭に攻撃をしようとする。

…がしかし、怪獣の腹部の殻のような部分が突然開きマグマの塊のような物体が大量に放出される、モロに食らったガイアは不意をつかれたのと、その塊のあまりの熱量に吹き飛ばされる。

そのまま怪獣は後ろ足2本でたち、周りにマグマの弾丸を撒き散らし始めた。そのうちの1つが学校目掛けて飛んでいく…

「ダァー…ぐわあ…！」

それをみたウルトラマンは咄嗟に身を投げ校舎の、生徒の縦になったがそのせいでさらに数発のマグマの弾丸がウルトラマンを襲った。ウルトラマンは苦しそうにやっとの思いで立ち上がると、怪獣は打ち切ったのか殻を閉じ再び四足歩行で向かってくる。

『ピコン』ピコン』ウルトラマンの胸の結晶―ライフゲージ―が青から危険を知らせる赤に点滅を始めた。

ウルトラマンは突進してきた怪獣の背中を転がるようにし後ろに回り込み、尻尾を挿んでジャイアントスイングの要領で怪獣を人のない場所に放り投げると、昨日の怪獣を倒した時の技を放ち怪獣は爆散した。

するとウルトラマンはしやがみこみそのまま体が光ったかと思う

と、そこにはもう何もいなかった。

「はあ…はあ…よかった…学校は大丈夫だな…」

変身を解き、学校へ戻ってきた遙は学校や生徒に被害がないのを確認すると安心し、そのまま学校から逃げ損ねた生徒達に紛れ帰宅した。

家の前のバス停で降り、ふと前の砂浜を見ると姉と学校で見かけたオレンジ髪の生徒が話していた。姉は怪獣騒ぎで怪我などしてないか心配だったのでその方へ向かうと

「海の音を聴けば、何か変わるのかなって…」

そう姉が発したのが聞こえた、そうだ姉はピアノで行き詰まって…そして…やはりここは聞かないように離れた方がいいだろうと思いき先に家へ戻ろうとすると

「変わるよ、きつと」

そうやって姉の手を彼女は取ったのだった。

「私はスクールアイドルなんてやってるひまはないの」

姉がそう言って、スクールアイドル？と思考が1回止まる。そうい

えばそういう部活に勧誘してくる2年生がいるも噂になっていたよ
うな気がする、それなら放課後姉が言っていた「ごめんなさい」の意
味も納得が行く。

「それじゃ、海の音だけ聞きに行こう！スクールアイドル関係なしに
!!」

そうにこやかな笑顔で答えたあと、彼女はこちらに気づいて――

「あなたもスクールアイドル、やってみませんか？」

僕にそう言ってきた。

「え？僕？いや無理ですよだつて…」

「そんな事ない！あなた梨子ちゃんみたいに美人だし！もしかして妹
さん？あなたもやろうよ」

「いや…その…」

断ろうとした言葉を遮ってそう捲し立ててくる、どうしたものかと
困っていると姉が助け舟を出してくれた。

「あの高海さん？この子弟なの…男の子なの」

「へっ!?嘘!?あつ確かにそれ男子の制服…」

制服すら気がついていなかったのかこの人は…などと呆れている
と。

「本当にごめんなさい！」

すごい勢いで頭を下げられた、僕は顔の特徴が母親や姉に似てい
こうして間違えられることが確かにあったのだからさすがに高校でも
間違えられることになるとは思わなかった…

「いや、たまにあるんで大丈夫ですよ。顔を上げてください先輩」

「本当にごめんね？私は2年の高海千歌っていうんだ、弟って事は最
近こっちに来たんだよね？よかつたら今度の日曜海の音を聞きに行
かない？」

「僕は桜内遥って言います。海の音…ですか？興味はありますがいい
んですか？僕まで」

とてもいい笑顔で誘われたら断る訳にも行かず、結局僕も今度の日
曜同行することとなったところで、先輩とは別れ家に帰った。

「そういえば姉さん、怪獣出たけど大丈夫だった？怪我してない？」
「大丈夫よ、それにあなたが言ってた：ウルトラマンだっけ？がすぐ倒してくれたじゃない」

「そ、そうだよね、ならいいんだ」

高海先輩と話してて、聞きそびれたが姉はなんともなかったのを知れて安心した。その後親も無事だし街への被害もほぼなかったとの事だった。

しかし、その夜のニュースで今日現れた怪獣は地球上の生物と似通った特徴を多く持っていて、先日どこからか現れた怪獣はどこから違うところから謎のゲート『ワームホール』をくぐってやってきたと推測されること、今日現れた怪獣は地球で眠っていたのが、その影響で目覚めてしまったのであろうということが発表された。

そしてまだ多くそのような怪獣が地球で眠っている可能も示唆され、自衛隊や海外の軍隊はそれに対応するための活動も今後行うということだった。

「大変なことになったわね…」

母がそう呟いたのが耳から離れない…だが今は普段通りに生活し、また現れれば自分が倒すそう思う事にした。ともかく日曜は海の音を聞きに行くとのことなので、どういものか想像に、思いを馳せ不安を誤魔化したのだった…

夜の淡島で、1人の青年が青髪の少女と話していた。

「ヒロじゃん、今までどこ行ってたの!?急に学校辞めてみんな心配したんだよ?」

少女は青年にそう問いかけると、青年は

「果南、この先怪物がまた必ず現れる、今度は海だ。巻き込まれたくないならここから出ていくんだな。」

ヒロと呼ばれた青年は淡々とそう告げるが…

「何言ってるの!?そんなこと出来るわけない!ここは私の家だしダイビングショップなんだし、お客さんだって来るんだよ?出来るわけないじゃん!」

少女は思わず声を張り上げる。

「どうしたのヒロ?何があつたの?どうしちやつたのさ?」

少女はそう問いかけるか、青年は何も答えない。

「なら好きにするといい、だがウルトラマンがどれだけアテになるかな…?」

「あつ、まっつて!」

青年はそれだけ告げると踵を返し、夜の闇に消えていった、それを咄嗟に追うが、青年はもうどこにもいなかった…

「嘘…そんな…」

船に乗らずにこの島から出る方法なんてない、なのに青年は消えてしまった事に少女は戸惑いを隠せなかった…

そして遙や梨子…いや、ここに住む人々にとって未知の出来事が起ころうとしている事は、まだ誰も知らなかった…

第3話 海に還るもの／その名はガイア

今日は日曜、梨子や千歌と共に海の音を聞きに行く約束をしていた日だ、正直遙はついて行っていいものかと思っていたが折角誘われたのだから断る訳にもいかずについて行く。

その道中で、先日出会ったグレーの髪先輩とも合流しお互い自己紹介を簡単に済ませてから淡島のダイビングショップへ向かったのだが…

「うへ…気持ちわる…」

「大丈夫遙くん？ごめんねまさか船苦手だったなんて知らなかったから…」

見事に船酔いを起こしダイビングショップの前でノックダウンしてしまったものだから高海先輩は申し訳なさそうな顔をしていた。

「いや、船なんて初めて乗ったもんだから…僕も知らなかったんで、気にしないでください…」

「本当に大丈夫？遙…」

姉や曜さんにも心配されてる中、目の前のダイビングショップから青い紙をポニーテールにした女性が出てくる。

「いらっしやい。千歌、その子がこの前言った子？…ってあれ？そこの人は？大丈夫？」

「あつ果南ちゃん、紹介するね。この人がその海の音が聴きたいって言ってた桜内梨子ちゃん、彼はその弟の遙くん。ただ彼船初めてだったみたいで船酔いしちゃって…」

「それは大変、とりあえずお店の中で休んでてよお水も持ってくからさ。私は松浦果南、ここは私の家やってるお店なんだ。今日はよろしくね。」

「はじめまして、桜内梨子です。今日はよろしくお願いします。」

「さ、桜内遥です…すいませんお言葉に甘えさせていただきます…」

とりあえずお店のソファに横になった遙は今回は同行出来ない

いうことになってしまった…

それから暫くして、気分も落ち着いてきた遙は少し外に出て歩いてみようと思いい外に出た。店から少し歩いたところで、黒のジャケットに身を包んだ青年が海を眺めているのを発見する。恐らくダイビングの予約を入れている客だろうと思い、特に声をかけずに通り過ぎようとしたところ、青年はこちらを振り向くと、こう告げた。

「もうすぐ宇宙から巨人を観察していた奴が地球へ降りてくる、巨人を倒すために。そして海に眠っていた怪獣がその影響を受けて目覚めるはずだ。」

「どうしてそんなことがわかるんですか？ 貴方は一体…？」

突然そのような事を言う青年に対し、遙は訝しげな顔で問い返す。「簡単だ、奴らは地球を破滅させたいからさ。その為にまずこの星で知性を持った種である人間を滅ぼす、それに邪魔なんだよ。巨人の存在が」

青年は、淡々とただそう告げると、遙の横を通り過ぎようそのまま歩き去ってしまった。

「なんだったんだ…あの人…？ どうして僕にそんなことを…」

そう悩んでいると、ダイビングに行っていた姉達を載せた船が戻ってきたのでダイビングショップに戻ると、姉達は嬉しそうに『海の音が聴こえた』と言っていた。

良かった、これでまた姉さんが前に進んでくれればと、そう思ったのだった。

その日はそのまま解散となり家に帰ったのだが、帰りの船では再び遙は船酔いに苦しむ事になるのだった…。

「姉さん」

「何？」

「姉さんは、スクールアイドル高海先輩達とやるの？」

ダイビングから帰った日の夜、梨子に対して遥はそう聞いた

「まさか、私にはピアノもあるしそんな時間ないよ。」

梨子は首を横に振ってそう答える。

「そっか、ピアノ…頑張ってるね」

「うん、ありがとう。遥はもうやらないの？ピアノ」

「僕はいいかな？今は他にやりたい事あるし、大学で勉強したい事があるからその為に頑張りたいんだ」

逆に自分はもうピアノはやらないのか？そう聞かれたので遥はそう返した。遥も幼少期は梨子がやっていたピアノと一緒に習っていた時期があったのだ。

梨子と違いコンクールに出て賞をとったりというのは無かったが、学校行事でクラスの合唱の時にピアノを担当したりといった活動はしていたのだが、元々外で遊ぶタイプでは無かったこと、姉にとても似ていて女顔だった事、勉強が頭一つ飛び抜けてできていたことも相まっていじめを受けていた時期があり、その時以降、鍵盤に触れることをやめてしまったのだ

それもあって家族が引越すタイミングで、東京の高校に行かず一緒に着いてきたのだった。

「やっぱり、あの時のこと気にしてるの?」

「いや、今はそうじゃないけど…あの後機械弄るのにハマったじゃん?だから今そっちの方が楽しくて、そういう勉強しに大学行きたいからさ?だから今はいいんだ。」

「そう…でも最近は巨人の方に興味があるんでしょ?ネットの勉強友達とその話してるのがたまに聞こえるってお母さんが言ってたし、それに名前までつけてたし。えっと…なんだっけ…?」

「彼らとは将来やりたいたいことが似通ってるからよく一緒に話すんだよ、それにみんな今回のことは気になってる。ガイアだよ、『ウルトラマンガイア』茶化さないでよ、僕も思いつきでそう呼んだだけなんだから」

「そうなんだ…まあでもあんまり夜更かししないでよね?偶に夜遅くに何か喋ってるの聞こえて目が覚めちゃうことあるんだから」

「そっ…それはごめん…気をつけるよ」

「よろしい、じゃあおやすみ」

「うん、おやすみ」

そう言うとき梨子は部屋に戻っていった。

その後遙は先日PCとネットをようやく繋いだので、ネットで知り合った。自分が将来勉強したい分野を専攻している海外の友人とネット電話をしていた。

「って事があつてさ新しい部屋、壁あんまり厚くないみたいだからあんまり遅い時間まで話せないかもしれない」

『それなら防音材を買ってきて壁の前に配置するといい、まあ僕達も遅くならないように気をつけよう』

「ありがとうダニエル、僕もちよつと考えてみるよ。あまり迷惑かけたくないし」

今日話している相手はダニエルというアメリカで活動している青年で、遥より年上だが、温厚な性格で色んな分野に顔が広く遥によく色々レクチャーをしてきている相手だ。

『そうか、ボクとしてもハルカは教えがいがあるからね、そっちの時間であまり遅くならないようにしよう。それとこのことはまだ公表されてないんだが、最初の怪獣騒ぎの時と似たような反応が大気圏の上で確認されているんだ。』

「宇宙ってこと?」

深刻そうな顔に変わったダニエルに対して遥はそう返すと、

『そうだ、ただ違うのは地球の中に入ってこないことと、ここ暫く留まっているんだ、まるで何かを監視しているように』

「監視…もしかして、ウルトラマンとか?」

『かもしれない、現状それはあの巨人が活動している時、必ずその上にいたんだ、2回とも今君が住んでいるところのすぐだ、気をつけてくれ』

「わかった、でも世界はそれにどう対応するんだ?」

『簡単に言うると軍備強化だ、今度また日本に現れたとしたら自衛隊、米軍は直ぐ攻撃態勢をとるだろう』

「そうなんだ、ありがとうダニエル。今日は申し訳ないけどここからで寝るよ」

『わかったよハルカ、それとあの巨人君の言っていた『ウルトラマンガイア』を正式名称として採用されたよ。』

「ホントに!?!…まさかそれ提案したのダニエル…?」

まさかのダニエルの発言に思わず大声が出てしまった。家族に聞こえてしまったかもしれないがその後続いた言葉は小声になった。『みんな正式な名前が欲しかったんだけど思いつかなくてね、そういえばと思つて提案したらまさかの正式採用だ。やったねハルカ君が名付け親だ』

ダニエルはいたずらっぽくそう返す、彼はとても優しいいい人なのだが時々こういう茶目っ気が出る。

「まあいいや…今日言われたこと、覚えとくよ」

『ありがとう、頭の片隅にでもいいから入っててくれると嬉しい』

「うん、おやすみダニエル」

『ああ、グツナイハルカ』

そう言うのとP.Cを切りベッドに横になった遥はエスプレンダーを取り出して眺める。

「大丈夫、きっとみんなを守れる…たとえ何が来ても…」

次の日、学校に来た遥は入学式の次の日以降一つだけ席が空席になっ
ていているのが気になり、隣の席の花丸に何か知らないか聞いた。

「国木田さん、あその席、ずっと空席になってるみたいんだけど何か知らない?」

「え?桜内くん覚えてないの?喜子ちゃんの自己紹介のこと」

「自己紹介?」

遥はホントに聞いてなかったんだね。とあきれられながらも大まかに教えてもらった。何やらよくわからないことを口走ったかと思うと教室から飛び出してそれっきり来なくなった…ということらしい。

その後日は、そのまま一日が終わり、下校するバスで、梨子と千歌と曜と同じになる。

「あつ遥くん、こんにちわ」

「こんにちわ、高海先輩、渡辺先輩。それに姉さんも一緒なんだ?」

先輩二人に挨拶をすると、そういえばこの三人で帰ってるところを見たのは今日が初めてな気がする。そう思っていると。

「えつとね、梨子ちゃんが曲を作ってくれてるって言ってくれたから、こ

れからわたしの家で詞を作るんだ！」

そう千歌が教えてくれた。

「なるほど詩ですか。というか、スクールアイドル？でしたっけ、楽曲も自分たちでやらないといけないなんて大変ですね」

「そうなんだよ…でもこれができないとラブライブには出られないし…あっラブライブっていうのはね…」

と、バスを降りるまで延々とラブライブについて説明されていた。そして自分の家の最寄りのバス停で全員バスから降りる、先輩も近所に住んでいたのか。などと思っていたら遥の家の隣の旅館へ入っていかうとしていた。

「どこでするの？」

そういったのは梨子だった。まさかここに泊まるつもりなのだろうか？家でやるのではなかったのか？そんなことを思っているといると、中から一人の女性が出てきた。

「いらっしやい。千歌。その子が言ってた子？」

「あッ紹介するね。志満姉だよ。」

「初めまして、桜内梨子です。」

なるほど彼女の実家が旅館なのか、それなら中から姉が出てくるのも納得がいく。が、梨子は礼こそすれど旅館の入り口の近くの犬小屋にいる大型犬のほうを見ていた。

「よろしく。美人さんね、それとこちらの方は？」

と遥のほうを向いた。

「初めまして弟の遥といます。」

どこに行くのか気になって旅館の前にいた遥は近寄って挨拶をした。

「あれ？遥君だ。遥君も一緒に考えてくれない？人数多いほうがアイデア出ると思うし。」

そう千歌に言われるが、さすがに年上の…それも異性というの気が引けたので遠慮して家へ戻る。

家に帰ると、緊急のニュースをやっていた。何があったのかと思いついて見ると。この近く、富士の樹海に先ほど、謎の金属性の物体が、宇宙から飛来したという話だった。

「ダニエルが言っていたのはこのことだったのか…?」

そう呟いた遙は、自室でPCを使い、より多くの情報を得ようとするが、すぐさま調査に向かった研究チームが今向かっているという情報しかなかった。

今から変身して向かうことも考えたが、あまりにもウルトラマンの姿が目立つし、どうしたものかと考えていたところ、その金属の物体が人型をとなつて暴れだした、自衛隊も待機していたので攻撃を開始するが歯が立たない。

このままではまずい、そう思った遙は窓を開け無言でエスプレッダーを掲げると、光がほとばしり、樹海のほうへと向かっていく。

金属生命体の前に現れたガイアは、目の前の生命体の姿に驚く。

なんとガイアのライフゲージと同じものを胸に持ち、一つ目に銀色の身体ではあるがおそらくガイアを意識しての姿であることが、ファイティングポーズをとったガイアに対し、鏡写しではあるが、全く同じ態勢とったことから伺えた。

まず、先に仕掛けたのはガイアだった。金属生命体に対して拳を打ち出すがそれを相手も腕でガードし、ガイアに反撃の蹴りを入れようとする、ガイアはその足をつかみ、相手を投げ飛ばす。

そのあと距離をとった金属生命体は、体をさらに変化させる。肩や腰が西洋風の鎧のようになり、右腕が槍へと変化し、その姿はさながら西洋の騎士といったところだろうか？

その後、ガイアは槍のリーチと、鎧に阻まれ一気に防戦一方へと追い込まれた。

槍によって胸を疲れたガイアが後方に倒れこむと、金属生命体は体を8本の槍に変化させ、空中からガイアへ襲い掛かる、ガイアはとっさに起き上がるが、完全に囲まれてしまい、断続的に発射される電撃に苦しめられ、胸のライフゲージは活動限界が迫っていることを知らせる赤の点滅を始めた。

ガイアは力技で金属の槍をどかすのは無理だと判断し、一瞬の雷撃の感覚について空中に脱出し距離をとって着地すると、金属生命体は

再び先ほどもまでの人型へ戻る。

ガイアはそのすきに、左腕は曲げた状態で右腕を胸の前で横に広げ、左腕を右腕の内側へ抱えるように組み、右腕が盾にまっすぐになるL字を組むと、右腕の肘から手までの範囲から、熱線を発射した！金属生命体は、その攻撃をもろにくらい、周囲を爆発させながら倒れ、土煙を上げる。

ガイアは相手が倒れて見えなくなると、その場に崩れ落ち方を上下させていた。先ほどの猛攻に対し、辛くも逆転の一撃を見舞う事はできたのだが、もう立ち上がる力すら残っていなかった…。

すると土煙が晴れた中から、なんと金属生命体が出てきた！そのまま悠然とガイアの前まで歩み寄ってくると、槍を構え動けないガイアへ止めを刺そうと振りかぶった、その時。

横から青い光線が、金属生命体がけて飛んでくると、そのまま消し飛ばしてしまったのだ。

大爆発に巻き込まれたガイアは、はつきりしない視界の中、光線の向かってきた方を向くとそこには巨人がいた。青い体を銀にふちどられた、黒のプロテクターに覆われた、青い巨人が…。

(もう一人の…ウルトラマン…?)

ガイアはその巨人と目があつたが、そのまま青い巨人は後ろを振り返り、そのまま景色に溶け込むようにして消えてしまったのだった。

何とか変身を解き、光のまま家の前までたどり着くことができた遥はそこで両腕について息も上がって汗もかなりかいていて、まさに満

身創痕といった状態だった。

「クソツ…イメージではもっとうまく戦えるはずなのに!!」

遥は悔しかったのだ、青い巨人がもし現れなかったら自分は敗北し、おそらく誰もあの金属生命体に敵わなかったであろう事実が。

自分ならみんなを救える、そう慢心してしまっていた事実が、とても悔しかったのだ。

「ど、どうしたの遥!?何があったの?」

ちやうど今帰ってきた梨子が、はるかに気が付くと大慌てで駆け寄ってきた。遥は何とか立ち上がると、平静を装って

「ちよつと運動しようかと思っただけどき?張り切りすぎたみたい…ハハハ…」

と笑ってごまかしはしたが、その日はすぐ部屋で休むようにその後しばらくして帰ってきた母親にも言われてしまったので、その日はすぐ寝ることにした。

その夜、梨子は放課後作詞をしに千歌の家に行ったとき千歌が作りたいといっていた。μ、sの『ユメノトビラ』という曲のライブ映像を見ていた。本当に自分と変わらない普通の高校生だった人達がステージの上で歌い踊る姿がとても輝いて見えた。気が付くとその動画は終わっていた。

梨子はおもむろに立ち上がると、ピアノの前に立った。自分にとっては大切なピアノ、でもあの日以降一度も触れることができなかった…。梨子はピアノの前に座ると、おもむろに先ほどの曲を口ずさみな

がら、弾き始めたのだった。

歌が、ピアノの音が聞こえる…。遥はその音で目が覚めた。これは姉の歌声、そして大好きだった姉のピアノの音色だった。とても心の癒される思いでその音色を聞いていた遥は、姉は一步前へ進めたことを感じた。そして己も決心した。

もっと強くなる、そしてもう二度と負けないと—!!

そう決意した遥は、そのまま姉の音色を聴きながら再び眠りに落ちるのだった。

第4話 天からくる者／ファーストステップ

先日の千歌の家に行ったあと、心境に変化のあった梨子は何と、作詞作曲だけでなくメンバーとして活動することにしたという。

やはりあの日に何かあったのだろうと思いい「なんで急にそうしようと思ったの?」と遥は姉に聞いたが、何も教えてはくれなかった。

「ところで、何で遥まで朝から外に出てきてるの?」

千歌と曜と朝練をする約束をしていた梨子の家から出ようとする時、ジャージ姿の遥が一緒になって出てきたため。梨子はそう遥に聞いた。

「いや、ちよつと今日から体力づくりしようかと思って、この前ちよつと走ったら倒れて姉さんに迷惑かけたでしょ? だからちゃんとしようってさ」

「ふーん? まあ倒れないように気をつけなさいよ? この前は家の前だったからよかったけどそうじゃなかったら大変なんだから」

「わかってるよ、それじゃあね」

「ええ、気をつけてね?」

そう梨子と言葉を交わすと遥は道路沿いをランニングしようとして外に出たところで千歌と曜に遭遇する。

「あつ遥くん、おはよう」

「おはヨーソロー!」

「おはようございます、高海先輩、渡辺先輩」

「遥くんはこれからランニング?」

千歌と曜に挨拶を返すと、千歌が先ほどの梨子と同じ質問をしてくる。

「はい、ちよつと体力つけようかと思って」

「そうなんだくじゃあさ? 私たちと一緒に来ない?」

「いつ、いやそれはちよつと…、迷惑になりそうですし…」

正直なところ遥はこのぐいぐいくる千歌が、正直苦手だったのでやんわり断ろうと思ったのだがこの先輩はこんなことでは引き下がらない。

「そんなことないよ！それにみんなで作った方がさぼらないで続き、それにダンス客観的に見てくれる人ほしいし…」

ああ、きつと最後のが本音だったんだな。と、遥は思った。が、そうこうしていると、梨子も追い付いてきた。

「おはよう、千歌ちゃん、曜ちゃん。あら？遥どうしたの？」

「おはよう梨子ちゃん、今遥君をマネージャーに勧誘してるの！」

マネージャー？そんな話はしていないだろう。と言いつつそうとするが、梨子の口から思わぬセリフが飛び出した。

「そうねたしかに客観的な評価はほしいし、遥も少しならピアノも弾けるものね」

「それに部員五人にならないと部として認めてもらえないし」

これは曜、遥も三対一ではもう無理だと思い、「わかりました」と渋々返して三人の練習に付き添うのだった。

その後軽いランニングと柔軟を終えた後、三人はステップの練習をしていた。一台のスマホはメトロノームのアプリを、もう一台はカメラを起動して三人のダンスを撮影していた。遥はしばらくその様子を眺めていると、三人はいったんやめ動画を使つてのチェックに入つた。

「こここのところの蹴り上げが甘いね、それにこここの動きも」

曜がすぐ改善点をみつけ、千歌は「本当だ…」と漏らす。

「よく気が付いたわね」

「高飛び込みやってたからね、フォームの確認は得意なんだ」

と、感心していた梨子に対してそう得意げに答えた曜は、遥に対して「リズムはどうだった？」と聞いてきた。それに対して遥は。

「大体いいと思うんですけど…高海先輩が少し遅れているようにも

見えました」

と、一応請け負ってしまったのでしつかり見ていたうえで感想を述べると、「わたししかあゝ」と千歌が天を仰ぐと、一台のピンク色のヘリが視界に入る。

「何、あれ？」とそのヘリを指さす千歌に曜が

「小原家のヘリでしょ、新しい理事長もその人らしいよ？」

と返した。だが遥は一度も理事長などという肩書の人間をこの学校に来て見ていないので、理事長がいたのかなどと考えていると、ヘリがこちらに近づいてきている。

「なんか、近づいてきてない？」というが姉に「そんなわけないわよ」と返されるが、気のせいではない。「危ない！」そう言おうとした時にはヘリのローターの音以外何も聞こえないほどの距離にヘリが来ており、そのまま四人の前に、着陸したのだった。

「チャオ〜♪」

そのヘリから出てきたのは、浦の星の制服の上に緑のベストを着た、金髪の少女だった。

放課後、理事長室に来るように始業前に言われた千歌たち4人は、理事長室にきていた。

なんでも理事長が話があるのだという、いったい何の話だろうと内心びくつきながら理事長室の中に入っていくが、中にいたのは今朝の少女だけだった。

「この私、小原鞠莉が新理事長デース!!」

理事長はどこにいるのかたずねたところ、少女は得意げにそう答える。

「新理事長？」そう返したところに「イエース!!」と返してくる。

「でも気軽にマリーって呼んでほしいな」

「でもー」

「紅茶飲みたい？」

曜が言いかけたのを遮って聞いてくる、この人とまともに会話できないんじゃないか？そう遥が思っていたところ、千歌が「あの、新理事長ー」と言いかけたところ、「マリー！」とすかさず訂正を入れてくる。千歌がおそろおそろ。

「マ、マリー…」と読んでみると、とてもにこやかな顔押してくる、呼ばれ方に対してこだわりがあるのだろう、とりあえず話は進みようだ。

「そ、その制服は？」

千歌がそう続けて聞いたところ、彼女は不思議そうな顔をして。

「へんかな？ちゃんと三年生の色のリボンも用意してきたんだけど…」

と言っているがここにいる4人の疑問はもちろんそんなことではなく。

「理事長ですよね？」

かさねてそう聞くと今度は、

「しかーし…この学校の三年生であり理事長でもあるのよ！カレー牛丼みたいなものね。」

そう『カレー』の部分だけやたらといい発音でいつてくる、おそろく海外にいた経験でもあるのだろう。おそろくこのまま話は進まないと諦め、そんなことを考えていた遥のとなりで梨子が「たとえばわからない…」とつぶやくと、

「わからないの？」とすぐ詰め寄ってくる。

「わかるわけありませんわ！」

ふとそんな声とともに、一人の生徒が入ってきた。ロングの黒髪に

ストレートヘヤーをなびかせながら入ってきた彼女はリボンの色が三年生ということを示す緑だった。確か生徒会長だったはず、などとおもっていた遙をよそに、鞠莉はその生徒に飛びつく……

「ワッオー！ダイヤ久しぶり、ずいぶん大きくなって」
とその生徒、ダイヤに抱き着いた、だがそれだけでなく彼女の胸を触り始め、

「でも、こっちのほうは相変わらずね」

などと言い出すので、ダイヤも思わず。

「やかましい!!……ですわ……」

と怒鳴ったのだが恥ずかしくなったのか小声でそう付け足すようにつぶやいた。遙はとっさにとりの梨子に目をおおわてしまったので急にダイヤの怒鳴り声で「姉さん、何が起きたの？何も見えなんだけど……」というと梨子もびつくりしたのだろう「ごめん……」と言いながら話してくれた。

「全く、2年前に急にいなくなったらどういうつもりですか？急に理事長などと……どういうつもりですか？」

そういうダイヤをよそに窓際に向かって走っていった鞠莉はカーテンをつかむと

「シャイニー!!」

そう叫びながらおもいつきりカーテンを開け放ち、室内に日の光が注ぎ込む。本当にこの人はつかみどころがないしそろそろ疲れてきた遙たちをよそにこれ以上彼女のペースに乗せられてたまるかと思っただイヤは、鞠莉のネクタイを掴む、力づくで引き寄せると。

「人の話を聞かないのは相変わらずのようですね」

「イツツ ジョーク」

などとダイヤに言われてもエガをお崩さない、ダイヤはやれやれとといった様子でネクタイを話してあげると。

「理事長のほうはジョークじゃないのよねえ」

などと言いながら一枚の用紙をみせてくる。それには確かに小原鞠莉を新理事長に任命するといった内容が記されていた。

千歌が「嘘……」と言った直後にダイヤが「どうして……」とつぶやく、す

ると先ほどとはうってかわって真剣な顔になった鞠莉が。

「小原家のこの学校への投資はかなりのものなの、それにこの学校にスクールアイドルが誕生したって話をきいてね」

と、事情をはなしてくれた。だがダイヤは納得いかなかったよう
で。

「そんなことでは？」

「ダイヤに邪魔されちゃかわいそうだからね」

とダイヤの疑問に対してそう返してきた。

「本当ですか!？」と千歌は興奮気味に返す、そういえばまだ部としては正式に決まってなかったな、などと思いながら遙は黙って聞いていると。

「イエース、このマリーが来たからには心配いりませーん!。」と言いな
がらノートPCを開きがめんをみせつけながら

「デビューライブにはなんとアキバドームを用意してみたわ!!」

などというではないか、遙もその会場がどれだけ大きいかは知って
いたので思わずふきだす。

「奇跡だよ!!」

と千歌は興奮していたが、「イツツジヨク」と言いながらPCをた
たんでしまった。じとーつとした目で「ジヨークのためにそんなもの
用意しないでください」という千歌に対して「本当は…」と返す彼女
に全員が不安を覚えていた。

その後4人が連れてこられたのは体育館だった。なんでも、

「ここを満員にできれば、部員の人数に関わらず部として承認して上
げマース」

ということらしい、「もし、出来なかったら？」と恐る恐る聞く梨子
に

「その時はあきらめてもらうほかありません」と返す鞠莉に「そんな
…」と返す梨子と遙に対し遙は千歌のほうを向いて

「ここ結構広いよね、やめる?。」という千歌は
「いいや、やる!!」

装即答した、すると鞠莉は満足そうに「じゃ、決まりね」というと
去っていった。すると梨子が

「千歌ちゃん、この学校の全校生徒って何人?」

そう聞いてきた、なぜそんなことを?とおもったがほかの全員が
はっとした表情になると。

「そうたとえ全校生徒が入ってもここは満員にならない…」

そう梨子が続けた、そうこの学校の生徒はこの体育館を埋められる
ほどはいないのだ。

「どうしよう…」

帰りのバスで千歌がそうつぶやくと、

「でも、鞠莉さんのいうことも分かる。このくらいできなきやこの先
やっていくことはできないって…」

そう返す梨子の隣で曜は。

「じゃあ、やめる?」

そう千歌に言った。すると千歌は

「やめない!」

そう即答する。それを聞いた梨子が場に「なんでそんな言い方する
の?」と聞くと「そう言えば、千歌ちゃん燃えるから」そう答えた。

そんなやり取りをしながら遙も含めた4人はバスを降り、千歌の部
屋で作戦会議をすることになったのだが、千歌のおでこにはマジック
で『バカチカ』とかかかれていた、なんでも、もう一人の姉…3姉妹ら
しくその次女である美渡に会社の全従業員全員自分のライブに誘っ
て欲しいと頼んだ結果らしい。

「おかしい、完璧な作戦だったはずなのに」

素晴らしいながらウエットティッシュでおでこを拭く千歌に縫物をしながら曜が

「お姉さんの気持ちも分かるけどね」

というところ「曜ちゃん美渡姉派〜?」と不満げに言ってくる。それはそうだろう常識的に、と思いつつその近くでノートPCを使っていた遥が。

「とりあえず、ネットに載せる用の告知を作ってみました。高海先輩、渡辺先輩。見てもらっていいですか。」

素晴らしいつつ画面を二人に向ける。

「すごい、遥君こういうのも作れるんだ?」

と感心したように言う千歌に「いえ、ネットでいろいろ調べて見様見真似ですから…」と返す遥に今度は曜が。

「すごいえば遥君、よかったの?ここまで手伝ってもらって?」

「ええ、もう部員としてカウントされてるみたいです。実際に先輩たちが歌つてるところ見てみたくまりましたから」

そう返すと「ありがとう」と言ってきた千歌がそのあと

「そういえば、まだ苗字呼びだよ?名前で呼んでくれればいいのに」と言い、「そうだよ」と曜も乗っかってくる。最初は嫌がっていた遥も二人からずつと見つめられ、いたたまれなくなつたのか観念して。

「わかりました。千歌先輩、曜先輩…」

そう返すと再び千歌が

「あれ?梨子ちゃんは?」

と梨子がいなことに気が付く。遥が、トイレに行ったという旨を伝えると場所わかるかな?と思つた千歌が廊下に出ると、梨子がいいた。いたのだが…

梨子はつつぱり棒のように

、手足を壁につけて浮いていて、その下には犬のしいたけが寝ていた。

「何やってるの?」

そう千歌が聞くと、梨子は

「ライブのおしらせです」

といってビラを差し出すと、相手は「いつやるの?」「あなたが歌うの」と曜の話に興味を持ったようだった最後に「来てください」と言っ
てウインクすると、ふたりは当日の予定を確認しあいながら去って
いった、何とかひとはきてくれそうである。

それを見た千歌が「よーしわたしも」と言っ
て、一人でおそらく帰宅中であろう気の弱そうな女子高生に、「ライブします、来てくださ
い!」と言っ
てあろうことか壁ドンまでし
だした。

相手は非常に困った表情をした後、ビラを受け取るとそそくさと
帰って行
った。

「勝った」

などと言っ
ている千歌に、内心「何の勝負なんだ」と思っ
た遙もつ
いてきたのだから協力しようと思
い道行く人に声をかけるが、あまり
うまくい
かない。

その近くでは、ポスターに対して話しかける梨子の姿が目に入っ
たがもう突っ
込まないことにした。その梨子はそのあと、マスクにサン
グラスとい
った、明らかに怪しい人物の対してビラを私に言っ
たり、
陽は記念撮影を始めたりとなかなかカオスなことになっ
ていた。

暫くすると勝手がわかってきたのか、何とか自分が持っている分は
無くなり
そうだった。すると千歌が

「おーい、花丸ちゃんにルビィちゃん」と街中のほうから向かって
くる、同じ学校の制服に身を包んでいる二人の少女に声をかける、一人
は遙も時々本の話などを
する国木田花丸、もう一人は会話こそしたこ
とはないが同じクラスで最近先生などが名前を呼ぶので覚えた黒澤
ルビィだ
った。

花丸は、渡されたビラを見ながら「ライブ?」と首をひねっ
ていると千歌が「花丸ちゃんも来てね」と声をかけるた後、花丸の陰に隠れ
てうずくま
ったルビィの横にしゃがみ込むと、ルビィにもビラを渡
して。

「絶対満員にしたいんだ、だからルビィちゃんも来てね」

とそう声をかける、遙も花丸から聞いたのだがルビイは人見知り
で、特に男性が苦手だと知っていたので少し距離をとってその様子を
見ながら、同性でもやはり人見知りはするのかなどと思っていると、
花丸がこちらへ寄ってきて、

「遙君もライブやるの?」

「いや、僕は成り行きでマネージャーになったから一応手伝いをね…、
それこそ国木田さんたちはどうしてこっちに?今日は休んでる子に
ノート届る日じゃないでしょ?」

「今日はマルたちは本をね、そっか頑張ってるね」

「うん、ありがとう」

そう少しのやり取りののち、花丸とルビイは帰ろうとするがふとル
ビイが振り返って。

「あつあの、グループ名は…なんていうんですか?」

そう聞かれて、千歌ははっとしたような顔をして、

「まだ…決まってるない…」

そう返事をする、いつの間にか集まってきた曜と梨子も「し
まった」といった表情をしていた。

すると突然どこからか悲鳴が聞こえ、そちらを振り返ると。なんと
ビルが突然砂になって崩れ落ちたのだった。

「なっなに?」「いったい何が?」「ピギヤツ」

などといった声が女性陣から聞こえる中、遙は空にクラゲのような
物体が浮遊していることに気が付いた。おそらくアレの仕業だろう。
そう思ってから人に逃げるように提案しようとしたところ。戦闘機が
飛んできてその生物に攻撃を加えるが、すべてすり抜けてしまう。

それを見ていた花丸が。

「まるであの生き物、違うところにいるみたいすら…」

そうつぶやいたが、ここでここは危険だ、そう思った遙が、

「みんな、とにかく今は逃げよう!巻き込まれたら危ない!」

そういうが早いか駆け出すと、みんなついてきた。だが、本を抱え

た花丸とルビイはほかの3人と違って運動をする方ではないのです
ぐ息が上がって立ち止まってしまおう。それに気が付いた遥は

「姉さんたちは二人を連れて先に行つて、僕は近くに安全な場所がな
いか探してくる！」

「あつ、待つて遥！」

そういう梨子の声も振り切つて、建物の陰に入った遥はエスプレ
ンダーを取り出し、その身をガイアへと変えた。

「ウルトラマン…ガイア」

そう空を見上げてつぶやいた花丸たちの視線の先には、赤い光を放
ちながら空に浮かぶ上がったガイアの姿があつた。

空中に現れたガイアは、手から小さい手裏剣のようなビームを怪獣
に打ち込むが、やはりすり抜けてしまう。

何か打つ手はないかと考えたところ、先ほどの花丸の「まるで違う
ところにいるよう」といった言葉を思い出すと、目から光を放ち、周
囲を見渡すと、クラゲのような物体が様々な位置から現れ、1か所に
集まる。

するとガイアは、すかさずL字に腕を組むと光線を放ち、それを受
けた怪獣は炎を上げながら墜落する。

「やった！ウルトラマンが勝つたよ！」

そう千歌は無邪気にはしゃぐと、曜、梨子、ルビイも安心した表情
をするが、花丸は。

「いや、まだずら」

そういった、すると怪獣が落下した場所から黒い体をしたクラゲか
ら首の伸びた不気味な生命体が現れた。

ガイアは怪獣の前に着地すると、怪獣めがけて駆け出しその体に蹴
りをいれるが、もともとクラゲのような姿をしているからかあまり手
ごたえがない、ならばと思ひ触手を掴み、投げ飛ばそうと力を入れる
が、今度は電撃が走り、思わずうめき声がでる。

さらに怪獣は首を伸ばし噛みつきを行ってくるが、何とかもう片方

の腕でその首を掴み耐えるがその後も電撃による攻撃を受ける。

「ウルトラマンしゃん…」

そうつぶやいたのはルビィだった、初めて怪獣を見た日、ウルトラマンが助けてくれた、だから今回もきつと勝つてくれる…きつと自分たちを救ってくれるそう信じて勝利を祈った。

「ウワアアア…」

苦しむウルトラマンを援護しようと、先ほどの戦闘機が怪獣にミサイルを撃ち込む。

すると怪獣は今度はダメージを受けたようで、ガイアへの攻撃が緩む、そのすきにガイアは怪獣から離れると、両腕を広げ全身のエネルギーを頭頂部に集めるように屈みこみ…そのエネルギーを前方の怪獣めがけて解き放った。

その一撃を受けた怪獣は全身が燃え上がるとうめき声を上げながら地に付しそのまま燃え尽き消滅した。

怪獣を倒したことを確認したウルトラマンは、空へと飛び去っていった。

「やったよ、ウルトラマンが勝った!」

そういって千歌たちが喜びあっていると、遙が戻ってきた。梨子が「いきなり飛び出して行って、心配したんだから」と強めの口調で言うが、その表情は安心したといった感情だ読み取れた。

「ごめん姉さん、でもほら大丈夫だったから」

そう笑って答えると、もう日も暮れるしそろそろ帰ろうということになりその日は解散になった。

第5話 ファーストライブ／もう一人の巨人

昨日ルビイに聞かれるまで、誰一人覚えていなかった、グループ名を決めるべく放課後練習中に砂浜でストレッチをしつつその相談を始める。

「まさか…決まってなかったんですね…」

そう言ったのは遥だった、てっきり決まっているであろうと思っていたので一切気にしていなかったのだ。

「まさか誰も覚えてなかったなんて…」

「そういう梨子ちゃんだって忘れてたじゃん！」

「早く決めなきやだね」

梨子、千歌、曜がそれに続く、しかしこれは重大な問題だ。グループ名がなければ周りに覚えてもらうのは厳しいだろう。それに覚えやすさやインパクトも必要になるだろう、そう思い頭を悩ませていた。

「学校の名前が入ったほうがいいよね？浦の星スクールガールズはどうかな？」

そう千歌が提案するが、梨子が「まんまじゃない」と指摘する。

「じゃあ梨子ちゃんが決めてよく東京の最先端の言葉とか」

そう千歌が返すと、暫く考えたのちに梨子が提案したのは、

「じゃあ…3人とも海で出会ったから、スリーマーメイドっていうのは？」

そう提案すると二人は「いちに、さんしー」とストレッチを続行しだした。

「待って、今のなし!!」

顔を赤らめてそう訂正すると、今度は曜が。

「制服少女隊は？」

すると千歌と梨子は口をそろえて

「ないね（わ）」

というのだった、曜は「ええ〜？」と不満そうだったが…

「そうだ、遥君も名には案聞かせてよ」

「僕ですか？そうだな…」

来るであろうと思っただけはいたがいあ振られるととっさには出てこないものですよ。こし考えた後、

「そうですね…ブルーマーメイドとかどうでしょう？」

「おお…さすが兄妹…」

姉と似たような提案をしてしまった結果引かれてしまった…

その後いろんな案を出し合っていくがなかなか決まらない、そして「言い出しつpegが決めなきゃ」と梨子に提案され頭を抱えた千歌が、ふと砂浜に案として出した記憶のない文字を見つける。

『Aqours』

「えーきゅー…あわーず？」

そういつて首をかしげる千歌に曜が答え

「アクアじゃない？」

「水ってこと？」

そう梨子が返す、確かにアクアのスペルはそうではない、おそらく造語だろう。「んー水かあ」といった千歌が。

「いいんじゃない？グループ名に」

「これが？誰が書いたのかわからないの？」

「グループ名を考へてるときにこの言葉に出会ったってことが大事なんだよ！」

「そうかもね」

否定的だった梨子に対してそう返す千歌に、曜がそう反応する。

「まあこのままじゃ決まらないしね」

「僕もいいと思いますよ」

梨子と遥がそう答える、これで決定だ。

「それじゃあ今から、私たちは…」

「浦の星学院スクールアイドル、Aqoursです!!」

3人が声を揃えてそう言った、今日は町内放送でライブの告知をする日だった。

「今度の土曜日の14時から、学校の体育館でライブをやります。ぜひ来てください!」

そうやって順調に告知は序盤は進んでいたのだが、途中からぐだつてしまったらしい。

らしいというのは、そのタイミングで理事長に呼び出されていたので聞いていなかったからだ。

「どうしたんですか? 僕一人を呼び出して」

「来てもらってありがとう、でもソーリー話つていうのはスクールアイドルとは関係ないの」

「だったら…」

「君にちよつと聞きたいことがあるの」

「僕に…ですか?」

そういたずらっぽい笑みで言ってくる彼女に対して、遥は困惑気味に返す。この前呼び出されたときに思ったが、遥は彼女が苦手だ掴み所がなく話していて疲れる。

「イエース、君は確か。科学者の卵みたいなものでそういう人たちと繋がってるんでしょ? だから怪獣とかについてもし調べてる人がいて、何かわかったら教えてくれないかなって」

「まあ、いるにはいますけど…どうしてそんなことを？」

そういうと彼女は一転真剣な表情になり。

「それは、最近怪獣が出るようになって少し物騒でしょ？だから学校を守るために少しでも力になれるように頑張りたいの。何かわかれば、対策だつて考えられるかもしれないし…」

そう答えた、きっと彼女はまだ学生でありながら理事長でもあり、その責務を全うしたい。学校が本当に大切なんだ。そう思った遥は。「わかりました、そういうことなら断る理由はありません、出来る限りのことはやらせてください」

「本当に？ありがとうございます！」

そう答えると、彼女は嬉しそうは顔になりなんと遥に抱き着いた。

「うわっ…」

完全に虚を突かれた遥は顔を真っ赤にし、フリーズしてしまう。反応のなくなった遥に気が付いた鞠莉は遥から離れると。

「どうしたの？」と首をかしげるが遥は「だ、大丈夫です…」と返すしかなかった。

「それじゃ、よろしく頼んだわね」

そういわれ、「わかりました」と返した遥は理事長室を後にした。

そして迎えたライブ当日、残念なことに天気はかなり悪いく、槍のような雨が降り注いでいた。

遥は裏方として先にスタンバイしていた、きっとほかの三人のほうが緊張しているしここで満員にできなければ諦めなければならぬのだから…

最初で最後にしないための準備をしてきた。千歌たちのクラスメ

イトも協力してくれている。だからきつとうまくいく、もうそう信じることしかできないのだから。

「手、つなごっか」

そう千歌が言うのと曜と梨子が手を差し出す。三人とも不安だった、でもここでやめたくない。その一心でここまで来た。そしてリーダーである千歌が声をかける。

「さあいこう！今この瞬間を、精一杯輝こう！！」

「A q o u r s ! サンシャイン!!」

そして幕が上がる：

ライブに来てくれたのは、10人に満たない程度の人だった。それにその大半が制服を着た生徒だった：

一瞬化をを曇らせたものの、三人はすぐ表情を変え、来てくれた人たちの為にとライブを開始した。

「わたしたちは、スクールアイドル」

そう千歌が言うのと今度は三人で声を揃えて

「「A q o u r s です！」」

そう宣言する。

「それでは聴いてください。」

そういうと三人はポジジョンにつき、そして曲が始まる。

「「ダイスキだったらダイジョウブ！」」

歌もダンスも練習の時と比べて完璧と言える出来だった。少なく

とも遙はそう思っていた、これなら今は満員にできなくてもやっつけてるそう思っていた刹那――

『バチン』という音とともに視界が暗転する、恐らくどこかに雷が落ちて停電が起きたのだ。

遙はとっさに体育館から外に出た、たしか予備電源があるはず。せっかくここまで来たのだ、せっかく姉も前に進めそうなのだ、こんな終わり方はしてほしくないさせたくないの一心で飛び出した。

すこし迷いながら、予備電源がある倉庫へ駆け込んだ時にはそこにはもう人がいて、電機はたった今復旧していた。

「ありがとうございます！」

相手の顔を見るより言葉が先に出た、だがそこにいたのは意外な人物だった。

「勘違いしませんように、私は後者のほうに用事があったのに停電してしまったからこうしてきたのですわ」

「生徒会長?!」

そう、そこにいたのは生徒会長の黒澤ダイヤだった、彼女は口元のほくろをかきながらさういとうと、遙がずぶぬれなことに気が付くと怪訝な顔をし。

「それにしても、傘もささずにこの天気の中飛び出すのは感心いたしませんわ。あなた、そのまま戻るおつもりですか?」

「すみません、とっさに飛び出してしまっただけです…」

「全く…風邪をひいたらどうするおつもりですか?」

さういとうと彼女は、やれやれといった様子で

「傘に入れて差し上げますから、一緒に校舎へ行きましょう。保健室ならタオルも予備の体操服もありますから」

「すみません…ありがとうございます」

とてもではないが大丈夫ですと言える雰囲気ではなかったのさう答えて、彼女に言われた通りにした。

校舎まで来ると彼女は「それでは私はようがありますのでこれで、

事情はほかの方に説明しておきますから」そういうが早いか彼女は体育館のほうに行ってしまった。とりあえず遥は言われた通りにした後しばらくすると、空は晴れていた。

そのあと、姉たちと合流すると、開始時間を間違えてしまったこと、あの後たくさんの人が来てくれて満員になったこと、生徒会長にこの成功は過去のスクールアイドルと地域の方々の好意のおかげであるということ、それでも自分たちは続けていきたいと返したことを知らされた。

そして姉にもあの雨の中外に飛び出したことに苦言を呈されてしまった。

その夜、遥はダニエルと連絡を取っていた、先日理事長である鞠莉に怪獣について何かわかったら教えてほしいと頼まれたことを伝えた。

「彼女の家は僕たち『アルケミースターズ』の活動や研究に協力してくれていたグループの一つだからね、その息女が理事長になっているのには驚いたけど、そう言われると断れないね、ハルカ経由でいいかい?」

「そうだね、とりあえずはそうしてくれないかな?そういう風に頼まれてるから」

「わかった、僕としても人々の役に立つために研究を続けているからね、二年前に開発した『クリシス』だって、彼女の家のお蔭でもあるんだ」

「それってたしか、光量子コンピュータだよね?」

「そう、そしてクリシスは近い未来根源的な破滅をもたらすものがこの地球にやってくる」と予測していたんだ」

「それが、あの怪獣？」

「それだけじゃない、地球にもともと住んでいた怪獣だっている、今まで観測されなかっただけで。その怪獣たちを呼び覚ましてしまったのも、その破滅をもたらす者なのかもしれないけどね」

「そっか…そんなこともあったなんて…」

「まだハルカと知り合う前だったからね、これからはなるべく情報を提供するにしようよ。君の意見も聞いてみたいしね」

「もちろんさダニエル、君の力になれるなら」

「ありがとうハルカ、今日はこの辺にしておこう、また何かあれば連絡する」

そういうと通信が切れる、『アルケミースターズ』とはダニエルが作った天才集団のネットワークだ、最年少のメンバーは当時高校一年生の日本人だったと聞いている、なんでももうやめてしまったそうだが。

とりあえず、鞠莉との約束は果たせそうだ。遙もゆくゆくは彼らのような存在になりたいと、思っていた。知り合った当時はまだ中学生だったこともありメンバーではないがこうして連絡を取っているのも、ダニエルが遙をメンバーに加えたいと思ってくれているからだ。

次の日、ふとPCをみるとダニエルからメールが届いていた。

『まだ公表されていないが、そっちに向かう巨大な影が海中で確認されている、熱反応はないから生命体の可能性は無いが、一応知らせておく』

とだけ書かれていた、遙はとりあえず鞠莉に知らせようと思ったが、連絡先を知らない。確か淡島のホテルに住んでいると誰か言っ

いたな、と思いだしたのでとりあえず淡島へ向かう。

今回は最近始めた運動が功を奏したのか酔いは起こさなかった、淡島に上陸すると。この前の青年がいた。彼はこちらに気が付くと、こちらに歩み寄ってきてこういった。

「少し君と話がしたい。怪獣が来ると思っているんだろ？」

そう言ったのだ、「どうしてそれを？」と遥が聞くが、そのまま彼は船着場から離れた海岸を目指す、ひとまずそれに遥が付いていくと：

「君がああ赤いウルトラマンだろ？そうならオレに協力してほしい」

どうして自分がガイアだとばれたのか？そう思いながら遥は。

「どうして僕だと思っただんです？もしそうだととしても内容によるんじゃないですか？」

そこまで言うと、海から突然怪獣が現れ、内浦に上陸した。「やはり来たか」そういう青年に遥が「え？」と反応するも相手にしていない。

すぐに戦闘機が現れ、怪獣へと攻撃を開始するが、怪獣の身体から水蒸気が上がるだけでダメージを追っているようには見えない。

怪獣は魚のような姿をしていた、魚に手足をつけたような異形な姿をしていた、そしてその腕はハサミのようになっていた。幸い、無人地帯だったのでおそらくすぐには人へ危害が及ぶことはないだろうが野放しにはできない、そう思って青年から離れようとするが。

「あれがこの前君に教えてあげた怪獣だよ、姿は初めて見たが現れるのはわかっていた」

そういうと青年は右腕を上げると、ウルトラマンのライフゲージに角のような装飾が付いたブレスレットが付いているのが見える。

それが光ったと思えば角のようなものが左右に展開し羽になると、それを顔の前に掲げ、さらに180°回転すると上にあをい氷上が立ち上る。おもわず顔を背けると青年の姿はどこにもなかった。

その直後、怪獣の前に何かが轟音を立てて落下すると、砂煙の中か

ら現れたのはあの時の青い巨人だった。

「彼が…青い巨人だったのか」

そう遥がつぶやくと、巨人はこちらを一瞥すると立ち上がり、右腕を前に突き出して構える。ガイアと比較すると方に力の入っていないそんな落ち着いた雰囲気すら出ていた。

目の前に現れた巨人に怪獣が近寄っていくと、巨人は手から光弾を発射する。それをのど元に受けた怪獣は地面に他をれこむと、すぐさま駆け寄り、怪獣のしっぽを持ち、ジャイアントスイングで怪獣を投げ飛ばす。

怪獣の下にはガスタンクがあり怪獣に押しつぶされ派手な爆発が起こる。

すると再び水蒸気があたりを包むと、立ち上がった怪獣がその中から出てきた。すると巨人は今度は右腕から光の剣を出し、その怪獣の首元と胴体を切り裂いた。

圧倒的だ。そうその戦闘を見ながら遥はそう思った。

しかし―

完全に切断された断面がくつつき、怪獣はすぐさま動き出す、両腕のハサミで青い巨人を掴むと電撃を流し、巨人のエネルギーを吸収し始めた…！

巨人はとたんに苦しみ始めると、胸のライフゲージがガイアとはまた違った音を立てて赤の点滅をはじめた。

このままではまずい、そう思った遥もエスプレンダーを取り出し、あの名前を叫ぶ。

「ガイアー!!」

赤い巨人、ウルトラマンガイアが怪獣の前に降り立った―

その怪獣と青い巨人の先頭を遠くから見ていた人物がいた、国木田花丸である。

「ウルトラマンって、一人じゃなかったんだ…」

そのまま戦闘を眺めていたが、青い巨人は序盤こそ圧倒していたが恐ろしい再生能力により逆転されてしまった。そしてそのあとにガイアが現れたのだった。

「ガイア…」

そうつぶやいた彼女の表情はどこか悲しげだった…。

遙は、ウルトラマンガイアへ変身すると青い巨人を掴んでいる怪獣の腕めがけて手裏剣状の光線を二発放つ。すると怪獣の両腕が千切れ、そのすきに怪獣へ駆け寄り顔面へ回し蹴りを見舞う。

たまらず怪獣は後方へ倒れこむと、ガイアは青い巨人名前に立つ。後ろを確認すると首元に組み付いた両腕を引きはがした巨人は肩で息をしていた。

前方に視線を戻すと、怪獣が立ち上がったところだった。が、なんと怪獣の腕が次の瞬間再生したのだった！

その直後再び顔面に回し蹴りを見舞うと、今度は怪獣の頭を吹き飛ばしたのだがやはり再生してしまう。そして今度は怪獣がガイアを攻め立てるが、ガイアも何とか応戦する。

怪獣の足をはらい、カウンターに蹴りを合わせるがどれも怪獣への決定打とならない…徐々に追い詰められたガイアは首をハサミで挟まれ、投げ飛ばされてしまう。そのまますぐ立ち上がれないガイアを怪獣が後ろから羽交い絞めにして、再びエネルギーを吸収し始めた。

ガイアが苦しみ始めると、ライフゲージが赤の点滅を始める、そこでようやく立ち上がった青い巨人は腕を広げエネルギーを前面に集めると、それが青い球体になる。

それを見ていた花丸は

「ガイアもろともに撃つつもりずら…」
そうつぶやいた。

そして巨人はそれを、ガイアを羽交い絞めに行っている怪獣へ両腕の拳を上下に合わせた姿勢で打ち込むと、それは怪獣に直撃し、ガイアを巻き込んで大爆発を起こす。

それによって怪獣は観世善に蒸発してしまいその正気の中からガイアが現れる。その姿を見るとそのまま青い巨人は飛び去ってしまった。それを見た後、ガイアも飛び去っていった。

そして再び淡島へ戻ってくると、青い巨人に変身していた彼がいた。

「きみもウルトラマンなら、地球を救うためにその力を使うべきだ」

「僕はそのために使っている、みんなを守りたいから戦ってるんだ」

まるで自分の戦いは地球のためではないとも言いたげな青年にそう言い返す。すると彼はこう告げた。

「ウルトラマンは地球を守るものだ、だが存在意義のない人間まで守る意味はない」

「そんなこと…」

遙は思った、なぜこの青年はこんなことをいうのだろうか？理解ができなかった。だがかれは更にまくしたてる。

「人類は地球にとってガン細胞だよ！増殖し続け、地球を汚し続けるだけの存在だ。そんなものを守る必要はない!!」

「そんなことはない！あなたは絶対に間違っている!!」

そう言い切った青年に対し遙もつい熱くなる。すると突然。

「ヒロ？どうしたのそんなに声を荒げて…って遙君じゃない、どうしたのさこんなところで？」

そう聞き覚えのある声があったのでそちらを振り向くと果南が立っていた。だが彼はその声を無視し。

「ならくれぐれもオレの邪魔だけはするな、オレの言ってることが理解できるようにになったらまた話そう。」

そういうと去っていった。果南が「ちよつと」と声をかけるが青年は振り返らなかつた。

「全く、何の用があつてきてたんだろ?」

「果南さん、あの人と知り合いなんですか?」

そう遥は果南に問いかける、顔を合わせるのは二度目だが、相手のことを全く知らないのだ、向こうは遥のことを知っていそうではあつたのだが…

「え?知り合いじゃなかつたの?てつきり喧嘩かと思つたよ。」

「まあなんて言つてたかまでは聞き取れなかつただけだね?」と付け加えられる。

「彼は湊博樹―みなどひろき―私の同級生だつただけで二年前にいなくなつてから連絡つかなくなつただけで最近戻つてきたみたいなんだよね」

「そう…ですか…」

「それはそうとして今日は何か用事があつてきてたの?」

「まあそうだつたんですけど、怪獣騒ぎもあつたし帰ろうとしてたことです」

さすがに鞠莉とのことを言うわけにも、さっきの会話のことをいうわけにもいかずそうはぐらかす。

「ふーんま、いいけどさ?しばらく船来ないよ?よかつたら水上バイクで送ろうか?」

「いいんですか?お願いします」

そう提案してくれたので好意に甘えることとしたのだが、帰り着いたとき再び軽くではあるが酔つてしまったのは別のお話。

帰つて行つた遥を遠くから見ていた二人組がいた。

「彼は仲間にできそう?」

「いや、アイツはオレは間違ってると言い切ったよ。それよりそろそろ『パーセル』を使いたい」

「それは残念ね、せっかくここに来るように仕向けたのに…オーケー
あなたが作ったんだし、いいんじゃない？」

遥の知らないところで新たな計画が動き出そうとしていた…

第6話 二人のキモチ／青の想い

先日のライブの成功を受けて、晴れてスクールアイドル部は正式に部として承認されることとなった。そしてようやく部室を手に入れたわけののだが…

「片づけて使えって言われたけど…」

「これ全部!？」

片づけてから使うように言われ割り振られた部室は、段ボールやら本やらが散乱していた。

「とにかくやってしましましょうか、さすがにこのまんまってわけにもいかないし」

「そうね、とにかく片づけましょ」

そう言っただけで掃除に取り掛かったのだが、千歌がホワイトボードに書いてあるのを発見する。

「ん?何か書いてる…」

そう言っただけで目を凝らす千歌に残りの三人が同様にホワイトボードへ注目するが、かなり日数が経過しているのかインクが薄くなって読めない。

「これは…歌詞?」そうつぶやく梨子に曜が「どうしてここに?」と、それに「わからない」と答える。

「それにしても…」と机の上に山積みになった本を見て千歌が

「こんなにかくさんの本、どこにしまおっか?」

「恐らく、図書室の本かもしれないねこれ…」

そう遥が応じる、すると「ならとりあえず図書室に持っていきこっか」と千歌がいい、分担してひとまず図書室に持っていくこととなった。

「こんにちはー」

そういいながら千歌が図書室の扉を開き、三人がそれに続いて中へ入ると。カウンターには国木田花丸がいた。ふと、カウンターの陰か

ら赤い髪がちらつく、もう一人いるのだろうか？と遙が思っている
千歌が。

「花丸ちよんと…ルビイちゃん！」

と言つて、花丸のほうを見た後、カウンターのほうを指さすと「ピ
ギヤア！」という悲鳴が聞こえた後、黒澤ルビイがそこから「こ、こ
んにちは…」とと言つて出てくる。

確か、人見知りの激しい性格で花丸以外と話しているところは見た
ことがなかったな。と思つていたところで、ここに来た用を思い出す
と。

「この本、図書室のじゃないかって思つて持ってきたんだけど確認し
てもらつてもいいかな？」

そういうと「わかりました」と応じた花丸が本を確認すると確かに
図書室の蔵書である印が押されていた。

「多分そうです、ありがとうございます…」

そこまで言つたところで急に千歌が花丸とルビイの手を取ると

「スクールアイドル部へようこそ！」

などと言い出すのだった。しかも「正式な部になつたし悪いように
はしませんよお〜」などといういろいろと心配になる表情で言い出す始末
…

「二人が歌つたら絶対キラキラする！間違いない!!」

そういうが、二人もあまりに唐突だったからか少し困つた表情をし
ていたが、花丸が口を開く。

「オ、オラ…」

「オラ？」

思わず癖で自身のことをオラと言つてしまい、それを千歌たちが繰
り返し首をかしげる。

「いえ…そういうのマル苦手で…」

「ルビイも…」

と、ルビイも同調する。

「千歌ちゃん、無理やり勧誘したらかわいそうだよ」

「そうよ、入学したばかりなのにかわいそうよ」

曜と梨子にそうたしなめられると千歌は申し訳なさそうにし

「ふたりともかわいいから、つい…」

というと「そろそろ練習」と曜に促されると「またね」と言つて三人は部室から出ていく。

「ごめんね二人とも、ただ先輩にも悪気があつたわけじゃないんだ」

そう二年生三人が出て行つたあと、二人にそう告げると。

「遥君は、どうしてマネージャーやろうと思つたの？」

そう花丸に聞かれる。

「最初はまあ…なし崩し的に巻き込まれたつて感じかな？でも今はそうじゃないのかも、純粋に応援したくなつちやつたんだよね。」

「そっか…」

そう言つて納得したようなそぶりを見せる花丸に対し、やはりルビィは花丸の後ろに隠れていた。

「ほんとごめん。黒澤さんも迷惑だつたよね、それじゃ」

そういうと遥も二年生の後を追うべく部室から出ていく。

「スクールアイドルかあ…」

「やりたいんじゃないの？」

「え？でも…」

そうつぶやいたルビィに花丸は問うが、ルビィは口ごもるとそのまま顔を背けた。

「はあ…はあ…う、sも階段を上つたつていうけど…」

そうつぶやく千歌に曜と梨子も寄りかかるようにしてへたり込んでいた

「ここは淡島神社へ続く階段、なんでも？sは階段を駆け上つて体力

を鍛えていたというのでそれに倣って自分たちもやろう!ということだったのだが、傾斜もきつく距離があるのでかなりきつく。まだ体力的にの難があったため途中で座り込んでしまったのだ。

そしてその少し下で遙もへばっていた。

「遙くん男の子でしょ? わたしたちより先にへばつちやって…」

そう曜に言われるが「仕方ないわよ、遙も運動するタイプじゃないからこれでもかなりマシになったのよ?」と梨子が言うが、正直フォローにも何にもなっていない。

「千歌?」と聞き覚えのある声の上から聞こえてきた。

四人とも声のほうを振り向くと、松浦果南が走って降りてきていた。

「上まで登ってきたの?」と千歌が聞くと「一応ね? 日課だし」とまるで何でもないように答える。

「千歌たちこそどうしたの?」

そう聞かれて千歌が、

「スクールアイドルだもん、鍛えなきゃって」

そう答えると、一瞬だけ難しい顔を見ると

「そっか、まっ頑張って!」

そう笑顔で告げると下って行ってしまった。

「息一つ切れてないなんて…」

そう、四人全員が思っていた。

その日の放課後、花丸とルビイが部室へ来た。

体験入部させてほしい、そう告げると千歌は「本当!？」と言って目を輝かせて喜んでいた。

「はい、よろしくお願いします!」

そうふたりが声を揃えて言うのと、「やったー!」といって飛び跳ねた千歌が、曜と梨子の肩を抱き

「これでラブライブ優勝だよ!レジェンドだよ!!」

と言って喜んでいると、梨子が「仮入部よ、お試してこと、合いそうなら続けるけど、無理そうならやめるってこと」と告げると「そうなの?」と二人に問いかける千歌。

「すいません、いろいろあって…」

と苦笑しながら答える花丸に対し曜が「もしかして、生徒会長のこと?」と、聞くと

「はい、だからルビィちゃんがここに来たことは秘密でお願いします」と、申し訳なきように告げるが、一切理解できていなかった千歌は、ピラに勝手に二人の名前を書き込んでいたのでそれをみんなで止める。

「ところで、練習場はどうする?できれば学校の近くのほうがいいでしょう。」

そう梨子が言う、確かに全員で毎回海までいくのは時間のロスが大きい。

するとルビィが手を上げて、

「それなら、屋上はどうでしょう?」
「sも屋上で練習してたって」
そういうと千歌が「それいい!」と同意したのでひとまず屋上に上がってみることにした。

屋上に上がってみると、ほかには人は全くいなかった。今の時期では日の光があたたかく景色もいい。

ひとまずの練習場所は決定したので、練習にとりかかる。

ルビイは元々スクールアイドルが好きだったらしく、真似をやっていたこともあるらしくとても初めてには見えなかったし、なによりとても楽しそうだった、

そして最後に例の階段の前へ来ていた。

「ここを上るんですか？」と言う二人に対し梨子が「ライブで何曲もやるにはここを駆け上がるくらいの体力は必要よ」と言い。

自分のペースで無理せず怪我のないようにと言つて、全員でスタートした。

途中までは全員一緒に登っていたが、最初に花丸が遅れ始める。

「はあ…はあ…やっぱりマルには無理ずら…」

そう言つて立ち止まつてしまふ、とルビイが「一緒に行こう」と言つて花丸を待つが、それを花丸は

「だめだよ、ルビイちゃんは走らなきゃ」

「え？」

「ルビイちゃんはもつと自分の気持ちを大切にしなきゃ…」

そう言つてルビイの提案をはねる、途中でその様子に気が付いた遙も二人の元へ戻ってくる。

「自分にウソついて、他人に合わせても悲しいだけだよ」

「合わせてなんか…」

そこまで言うがルビイはそこからさききどう答えたものかと悩んでいた。

「スクールアイドルになりたいんでしょ？だったら…前に進まなきゃ…」

「でも…」

そう言つたところで遙が二人に追いつくと。

「国木田さん、大丈夫？」

「マルは大丈夫だから、ルビイちゃん、行つて？」

「黒澤さん、国木田さんは僕が。だから先に行つてて」

「でも…」

「さあ、行って」

それでも花丸が心配だったのだらうルビイは食い下がったが、花丸の言葉を聞いてにこっと笑うと、そのまま振り返ることなく上がっていった。

「遥君も、行って?」

「でもさすがにおいてけないよ」

「マルはもうこれ以上は無理だから、先に降り立って伝えてほしいの…」

「わかった、でも無理しないで休んでてね?」

「ありがとう」

花丸は来た道に戻っていった。遥も花丸が心配なので一緒に降りようかと思ったが、ひとまず先に行った四人に知らせないと余計に心配させると思い、再び登り始めた。

やっと登り切った遥は、事情を話しそれから降りることになったのだが。

階段を下っていく途中、中腹に設けられた休憩所のベンチに黒澤ダイヤがいた。

「お姉ちゃん!?!」

「ルビイ、これはどういうことなんですの?」

そういつてダイヤはルビイを睨み付ける。

ルビイは視線をそらすと「あの…その…」となんといいいかわからない様子だった。

「違うんです! 僕が彼女に…」

それを見かけた遥が口を開くが、

「いいの遙くん」そういつてさえぎったルビイはまっすぐダイヤを見て。

「お姉ちゃん、ルビィ…ルビィね…」

そこまで言ったところで突如空にワームホールが開き、金属の巨大な槍が四本降り注いだ。

それは一同から見るとこれから戻ろうとしていた先だった。

「ピギツ…」

「なっ何ですの!?!」

「とにかく、みんな逃げよう!」

突然の状況に一同は騒然とするが、千歌が逃げることを提案すると、ひとまず階段を上ることにするが、先に降りたはずの花丸がいない。

「花丸ちゃんは?」

「もう下まで降りてしまったのかも」

「そんな…」

曜と梨子がそう言って取り乱しかけたところで遥が

「僕が行く、だから姉さんたちは上に行つて」

「何言ってるの?そんなことできるわけが…」

「大丈夫、国木田さんを見つけたら一緒に安全なところに隠れるし、何よりみんなで行く方が危ないよ」

そういうと走って降りて行ってしまう、残された五人はひとまず階段の上へと逃げていった。

すると、金属の槍は一つにまとまると、この前のように人の形をとる。前回と違うのはその姿だった、胸には青い巨人と同じライフゲージがあり、顔は横に長い一つ目、そして角が生えていた。

その金属生命体が行動を起こす前に、生命体の前に青い光が立ち上

ると青い巨人が立っていた。

巨人の出現に生命体が動揺していると、巨人が再び光ったと思うと上空に出現し、急降下してけりを入れた。

そして倒れた喘鳴隊に駆け寄ると生命体の右腕が剣に変わり、巨人に切りかかるが、巨人はそれに反応し両腕でそれを掴んで止める。が、そのまま巨人の身体を右腕で持ち上げてしまう。

生命体は左腕を大砲に変化させ巨人の腹に突きつけると「フツフツフ」と不気味な笑みを浮かべ、砲弾が巨人の身体を貫くと、巨人の身体は後方へと吹き飛ばされる。

その様子を見ながら遥は必死に花丸の姿を探すと、木陰に隠れている花丸を発見する。

「国木田さん！」

そう言つて駆け寄ろうとするが、花丸は気が付いていない…。

すると巨人は立ち上がるとすかさずエネルギーを集中させ光弾を作り上げる。この向きだと生命体が爆殺すれば花丸は巻き込まれる。それに花丸はこちらに気が付いていない…

すると巨人は光弾をすぐさま発射するが、一発ではなく何発も連射しいくつかは生命体に当たらず、花丸が巻き込まれる、そのとき！

「ガイアー！」

間一髪でガイアが現れ、花丸の盾になになりその背で光弾と、それに倒れた金属生命体が起こした爆発に耐える。すぐにライフゲージが点滅をはじめ、ガイアは苦しそうな声を上げていた。

「ガイア…？…どうして…？」

そう花丸はつぶやくが、ガイアは答えない。ようやく攻撃が収まり、ガイアが振り返ると青い巨人はそのまま光に包まれて消えてしまった。するとガイアも倒れこむようにしてその姿を消した。

花丸はルビイたちが心配になり、戻ろうと再び階段がある方に歩を

進めようとすると、木陰に倒れている人物を見かけ、駆け寄るとそれは遙だった。

「遙君!? しっかりするぞら!」

そう言つて花丸は遙に駆け寄るが、気を失っているのか返事はない。

「そんな…オラのせいで…」

自分を探してくれて、そのせいで巻き込まれたのではないか、そう思うと怖くてたまらない。

「花丸ちゃん、大丈夫?」

そう声ができる方を見ると、二年生三人とルビィそれとダイヤがこちらへ向かつてくる。

「あれ…国木田さん…?」

そう言つて遙が目を覚ました。

「遙君…よかった…」

「そっか、僕は戦いの衝撃に巻き込まれたんだつた」

目を覚ましたことに安堵するが、すぐにケガはないかとみんな口々に聞か、遙は

「大丈夫、特にケガもしてないし、それより国木田さんは大丈夫?」

「マルは大丈夫、ガイアが守ってくれたから…」

「そっか、ならよかった」

そう言つて遙は笑うが。

「よくなってるよ、遙君ももっと自分を大事にしないと…心配してくれるのは嬉しいけど、それで遙君に何かあったりしたら誰も喜ばないんだから…」

「国木田さん、ゴメン」

そう泣きそうな表情で言う花丸に対して申し訳なきように謝る。

「まあみんな無事なんだし、とにかく今日は帰ろう? おうちの人も心配してるだろうし」

「そうですね、いつまでもここにいる方が危険だと思いますわ」

気まづくなつたところで、曜がそう提案しダイヤがそれに応じたことでその日は解散となつた。

「でも遙、国木田さんの言うことも正しいのよ？みんなあなたのこと心配してたんだから」

「ごめんよ姉さん、なんかいてもたってもいられなくなっちゃって…」

帰り際に梨子にそう注意を受けるが、

「でもちよつとうれしかったかな」

「え？」

「いつの間にかこんなになくましくなったんだなあって」

「そ、そうかな？」

「そうよ、遙も変わったんだなってそう思った」

そう言っただけは笑む梨子に、遙は「そっか、ありがとう」と答える
と「でも」と梨子が続ける

「でも、あんまり無茶はしないでね。何かあったら悲しむ人がいることを、忘れないで」

「姉さん…」

そういうと梨子は先に家の中へと消えていった。

「ごめん、それでも僕はきつとみんなのためにこの力を使いたいんだ」

そう言ってしまったていたエスプレンダーを撫でた、きつと自分がこの力を得たのには意味があるから。そう思っただけ。

その日の夜、遙はダニエルと連絡を取っていた。

「ダニエル、一つだけ聞いてもいいかな？」

『どうしたんだいハルカ？』

「湊博樹って、知ってる？」

遙の口からその名前が出たことにダニエルは少し驚いた顔をする
と、

『もちろん知ってるよ、彼はボク達とクリシスを作ったんだ』

「じゃあ彼が当時最年少のメンバーだったの？」

『そう、でもそのあとやめてしまったからね、ハルカが知らないのも無』

理はない、とどこどこで彼のことを知ったんだい?』

「えっと…淡島に住んでる先輩の口からきいた名前なんだ、今は連絡つかないけど頭のよかった友達だったって」

『そうか、彼は今どこににいるかわからないのか…できればまた仲間に なってほしいんだけどね』

そうやってその日のやり取りは終了した。

湊博樹がなぜ今日あそこまで必死にあの場所を守ろうとしたのか、 遥には分からなかったのだが、一つだけ仮説はできた。

「よろしくね!」

そういつて入部届を受け取って笑顔で言う千歌の前にはいたのは。

「はい、頑張ります!」

そう答えたのは、黒澤ルビイだった。

なんでもあその後、自分の気持ちをしつかり姉にぶつけた結果、反対 されることはなかったらしい。

「そういえば、国木田さんは?」

今日は花丸と一緒にではないのか?と、そう思った梨子に聞かれる が、ルビイは答えることができなかった。

「やっぱりきつかったのかな?」と千歌が言うと「昨日も辛そうだった しね」と曜が答える。

「やっぱり無理強いはできないよ」

そう周りが言い出したところで、「あの…」とルビイが言いかけるが

やめてしまった。

きつと彼女はルビイがスクールアイドルをやりたいのは気づいていて、だからその一步を踏み出す手伝いがしたかったのだろう、でもそれだけなのかそれで彼女はいいのか？ そう思った遥が提案した。

「黒澤さんは、国木田さんと一緒にやりたかったんだよね？ だったらその気持ち大切にしなきゃ、ホントの気持ちを、伝えてあげて？」

そう言われたルビイは部室を飛び出し、図書室へと向かっていった。

「どうしてあんな言い方したの？」

そう梨子に聞かれた遥は

「ただ、国木田さんも友達を優先して本心を抑え込んでるんじゃないかなって思ったんだ」

そう答えるのだった。

そうして図書室にたどり着くと「ルビイ、花丸ちゃんとスクールアイドルやりたい！」そんな声が聞こえてきた。

「マルに…できるかな？」

「私たちだってそうだよ、でも大切なのはやりたいかどうかだと思う！！」

そう言ったのは千歌だった、そうしてルビイが差し出した手を、花丸はとった。

こうしてAqoursは、五人となった。

第7話 ヨハネ墮天／アグル誕生

「うーん上がってないなあ…」

そう言っただけ千歌が見ていたのはスクールアイドルのランキングの出るサイトだ。

このサイトに登録されているスクールアイドルはライブ等の活動を動画として投稿することで人気によってランキング付けされるのだが、現在の順位は4768位、スタートが5000位だったことを考えれば上がってはいるのだが。

「まあ下がってもないけど…」

そう感想を述べる曜の横で「ライブの評判はいいんですけどね…」とルビィがフォローを入れると、コメントを読んでいた千歌が。

「新加入のふたりもかわいいって」

「そうなんですか!？」

そういうとルビィが嬉しそうに反応したのに対して曜が。

「特に花丸ちゃんの人気がすごいんだよね」

「花丸ちゃん応援してます、花丸ちゃんが踊っているところ早く見たいです、だって」

それにつづいて梨子がコメントを読むと、花丸は目を輝かせて

「おおお…これがパソコン?」

「そっか!？」

自分へのコメントではなくパソコンに興味津々な花丸に思わず曜は立ち上がって反応してしまう。

「もしかして、そこが知識の海につながっているというインターネット?」

「花丸ちゃん、もしかして触ったことないの?」

まるで始めてみるかのような反応をする花丸に対し千歌が問うと、

「マルの家お寺で…電化製品とかあんまりなくて…」

そういつて苦笑いを浮かべる花丸。いや、さすがに電気製品はあるだろうと思いはしたが口には出さずにいた。

「触ってみる?」

「いいんですか!?!」

そう言われると目を輝かせてパソコンに近寄ると、花丸は一つだけ光っているボタンが気になり…

「ずらっ」

押してしまった、当然そこは電源ボタンなわけで画面は消えてしま
う。

「どこを押したの!?!」

「いやあ一つだけ光ってるボタンがあるなあと思ひまして…」

そう言い終わる前に曜と梨子がPCに駆け寄ると「衣装のデータ保
存したかな…」とうつぶやいているのを聞くと、泣きそうな顔になり。

「マル、何かいけないことしました…」

「いや、大丈夫大丈夫」

そう言っ曜はフォローするが、スリープモードになっていただけ
だったのでデータ類は問題なかった。

練習着に着替えて屋上へ移動した一同だったが、花丸がパソコンに
夢中なのでなかなか始められない。

「おおー!こんなところに弘法大師空海の情報が…!」

空海の情報について調べているのだが、おおよそ女子高生の調べる
内容かは首をかしげるところはあるが。

「こうやれば画面が切り替わるからね」

「すいすいずらあ〜」

そうやって使い方を教えていた遙のよこで花丸は目を輝かせていた。

「もう、これから練習だつていうのに…」

そういつてしびれを切らした梨子が言う。

「まあまあちよつとくらいいいじゃん」

そういつたのは千歌だつた。

「それよりランキングどうにかしなくっちゃ」

「年々スクールアイドルは増えてますもんね…」

そう続けると、ルビィがそういつたのだが、千歌はあちこち景色を指さして。

「しかもこんな場所の地味アンド地味アンド地味なスクールアイドルだし」

「そんなに目立つことつて大事なの？」

そういう梨子に対して曜が「人気は大事だよ」というと、千歌は腕を組んで

「うくん何か目立つことか…」

そういつてしばらく考えていると梨子がふと思いついた案を言うてくる。

「名前をもつと奇抜なのにしてみるとか？」

そういつられると千歌は不敵な笑みを浮かべると。

「奇抜つて…スリーマーメイド？」

「もうそれは忘れてつていつてるでしょ！」

そんな感じでわいわい騒いでいると、ふと花丸の視界に人影が見えた。それはすぐさま校舎の中に戻つとしまつたので、それを追いかけて花丸も校舎の中へと入つてしまつた。

次の日、遥は学校に行くはずっと空席だった席についている少女がいた。確か、津島善子だったか、花丸に教えてもらった名前を何とか思い出す。

周りには人ばかりができていて、クラスのほぼ全員に質問攻めにあっていた。

「津島さん学校来たんだね」

そう花丸にルビイが言うと、花丸は「まるでお願いいきいたずら」と得意げに答えた。

「お願い？」と遥が聞くと、「危なくなったら止めて」と花丸が答えるが、何が危ないんだろう？と思いつながら、善子の様子をみていると。

クラスの女子の一人が、「津島さんって趣味とかないの？」と聞くと「う、占いとか…？」と答えると、占って欲しいという声上がり始めると、「今占ってあげるね」と鞆をあさり始める。

…のだが、まず自身の黒髪をシニヨンにまとめているのだが、そこに黒い羽根をさしたかと思うと、鞆から魔法陣の書かれた布を取り出し床に敷くとマントをはおりろうそくを取り出すと、「火をつけて」と頼むと、誰がつけてあげたのかわからないが火をつけると

「天界と魔界にはびこるあまねく聖霊。煉獄に落ちたる眷属たちに告げます。ルシファー、アスモデウスの洗礼者墮天使ヨハネと共に…墮天の時が来たのです!!」

そう言つて両腕を広げると、クラスメイトはおびえた表情をし花丸は冷めた視線を送っていた。

「どうして止めてくれなかったのよ！せつかくうまくいつてたの

にい…」

そうスクールアイドル部の部室でわめいているのは彼女…津島善子だった。

正直なんでここにいるんだと思わなくもないが、花丸が止めるのを条件に来ていたのでこんな文句を言っているのか。

「まさかあんなもの持ってきてるとは思わなかったぞら…」

そういう花丸を横に状況のわからない梨子は

「いったい何があったの？」

そう聞くが、遙は「僕にも全然…」と答えるとルビイが

「ルビイも最近花丸ちゃんに教えてもらったんですけど、善子ちゃん中学時代はずっと自分を墮天使だと思い込んで今でもその癖が抜けきつてないみたいなんです…」

俗にいう中二病というやつだろうか？彼女の言動を見ると自己紹介の時もこの墮天使が顔を出したんだろう。そう納得していると机の下から出てくるとこちらに背を向けたまま。

「わかってる、そもそもそんなもんじゃないんだし…」

そう絞り出すような声で言うと。

「だったらなんであんなもの学校に持ってきたの？」

そう梨子が指摘する。あんなものというのは喜子が先ほど占いに使った道具たちだ、そういわれた善子はピクリと反応すると。

「そ、それはあ…まあヨハネのアイデンティティみたいなものだし…それがなかったら私が私でいられないっていうか…ハッ…」

そういつて何やらポーズをとった後に再びしまったといった感じの表情になる。

「なんか…心が複雑な状態にあるってことは理解したわ…」

そう目を細めて言う梨子の横でルビイが「そうですね」といつてノートPCの画面を見せてくると。

「実際ネットで占いやってますし」

そう言って見せてきた画面には何やら黒い翼のついた衣装を着た善子が『またヨハネと墮天使しましょう』となにやらポーズを決めてしゃべっている動画が流れていた。

「わーやめて!!」

そう叫ぶとノートPCをたたむ喜子が、花丸に顔を近づけて
「とにかく私は普通の女子高生になりたいの!何かして〜!」
そう涙目になりながら訴えかけてくる。

「かわいい…」

そう漏らした千歌に「え?」と全員の視線が集中する。

「これだ!これだよ!」そう言っつて身を乗り出すと

「津島善子ちゃんいや、堕天使ヨハネちゃん。スクールアイドルやり
ませせんか?」

そう言っつたのだった。

放課後、ひとまず堕天使風の衣装を作ろうということになったのだが、遥は衣装のことは正直わからないので、用事があるといって抜け出すと淡島へと向かった。

ホテルオハラのある方面へと向かうと、やはりあの青年。湊博樹がいた。

「やっぱち、ここに来ればあなたがいると思いました・

そう言っつて声をかける遥に気が付くと

「何の用だ?ようやく俺の言っつたことが理解できたのか?」

そうかえしてくるが、その目は鋭くこちらをにらんでいた。

「それは無理です、この前の戦闘かなり必死に何かを守っているよう
でした。もしかしてここにあなたにとって重要な秘密があるんじゃない

ないんですか？」

そう遥が問いかけると。

「そんなものはない、オレはただアグルの聖地を守っただけだ。」

『アグル』？それがあなたのウルトラマンの名前？」

アグル、それが彼の変身するウルトラマンの名前らしい。つまり彼はこの地でアグルの力を授かったのだろう。

「それにあなたのこと聞きました。かつてアルケミースターズとしてクリシスを開発したメンバーの一人だって、どうしてあなたは辞めたんですか？少なくともその当時は人類の為にと思っていたんじゃないんですか？」

「その時はそうだった…だが今は違う！クリシスは今の地球の状況を予測していた。『根源的な破滅をもたらす者が近い未来地球へ来る』とな」

「それがどうして…？」

「クリシスは答えてくれた。地球を破滅から救う方法を、それが人類の滅亡だ！」

「バカな！そんなことあっていいはずがない！」

博樹の口から明かされた事実を遥は認めることができない。

「ほかに…ほかに方法があるはずだ！」

「あつたとして、今から探して間に合うのか？現にもう破滅をもたらす者は地球の外から次々とやってくる。これが確実に地球を救う方法だ！オレはそのためにこの力を手にしたんだ!!」

彼は間違いなく天才だった、だからこそ二年前にそれだけの偉業を成し遂げた。そんな彼でもほかの方法を模索することは叶わなかった、だから今こうして遥と対立している。

でもほんとうにそうなのか？それで本当に地球は救えるのか？遥はどうしても譲らない。

「わかった、お前とはどうやらわかりあうことはできないようだ。だが、もし邪魔をしたら容赦なく叩き潰す」

そういうと彼は去っていった。
すると、

「あれ？遙じゃない？どうしたのこんなところで」

そう声のする方を向くと、小原鞠莉がいた。

「いえ、ちよつと用事があつて来てたんです」

そう遙が答えると、鞠莉は「なるほど」「うなづくが。」

「でもこの辺に用事つて？今さつき人とトークしてたように見えただ？」

「ええ…まあちよつとあつて、というか鞠莉先輩は知ってますかね？湊博也さんつて人なんですが」

正直彼女のごことは得意ではないのだが、もしかしたらと思ひ聞いてみると。

「知ってるわよ？だつて二年前まで一緒の学校だつたんだから」

「本当ですか？彼にいったい何があつたんですか？」

そう鞠莉に言われ遙はおもわず話に食いついてしまふ。

「クリススつて知ってるかしら？」

「ええ、一応知ってます根源的な破滅をもたらす者から地球を救うには人類を滅ぼすしかないつて予測をされたことも」

「そう、なら話は早いわ。そのせいよ、正確には、それを実現できる能力も持つていたから…かしら…」

「能力…？」

そう聞き返すと、鞠莉は真剣な表情で続ける。

「そう、彼は天才だったの。ああいうものの開発に15歳で関われるくらいには、だからこそ人類を滅ぼす方法も思いつけた…」

「そんな…」

「それからよ、ヒロがそうだったのは」

「でも私たちはそれを見てることしかできなかった…だから…」

そう言いかけた時、突然地響きが起こると、山の中に散乱していた金属生命体の破片が一つに集まり、再びその姿を現す。

「生きていたのか…」

「あれはこの前の…？」

「とにかく逃げましょう！ここじゃ危ない」

そう言つて鞠莉の手を引いて走り出すと、鞠莉から「ちよつとス

トップ」といった声が聞こえるがそんな余裕はない、早く彼女を安全なところに連れて言いつて変身しなければ、遥の中にはそれしかなかった。

だが金属生命体はこちらにすぐ気が付き、右腕の大砲をこちらに向けて…。

「危ない！」

そう言つてとつさに鞠莉をかばおうとするが、すぐさま砲弾がこちらへ放たれる。

そのころ、遥の前から去つた博樹は、海を見ていた。

「この力は、地球を守るために授かつたんだ、だから俺は…」

そう言つて、変身の際に腕につけているアイテム『アグレイター』を見つめる。

彼がこの力を手にしたのは、今から二年ほど遡る。それはクリシスを完成させてすぐのことだった。

ダニエルや、ほかのアルケミースターズのメンバーたちと、完成したクリシスのテストを行つていたとき、銅突にクリシスは

【今から約二年後、地球に根源的な破滅をもたらす者が宇宙よりやつてくる】そういったものだった。

当初は、まだ発見されていないバグがあつたのか。そもそも設計に不備があつたのではないか？そう思われていたが、その予測はどうやっても覆ることがなかった。そこで、どうすれば破滅を回避できるのか？その答えを模索する方にシフトしていったのだが、どうしてもその結果は覆せず、ふと博樹は思つてしまった。

『現状の社会を顧みれば、人類こそが地球を滅ぼしてしまうのではないか?』と、その結果クリシスに人類が地球上からいなくなれば、根源的な破滅が回避できるのではないか? そう問いた結果…

「それだけが唯一地球を救う方法だという答えが返ってきた。」

やはりクリシスは完成していない。博樹以外のメンバーはそう結論付けるが、博樹だけはその結果を信じてしまった。そしてその日突然自分の周りがまばゆい光に包まれたとき、彼は見てしまった。

荒廃した地球、砂漠化し建物は朽ち果ててしまった人間はともではないが住めそうにない世界に一人たたずむ青い巨人を。

「これが人類の行きつくはてなのか?」

そう問いかけても巨人は何も答えず、気が付けば自分の部屋に戻ってきていた。そしてPCの画面に『AGUL』とだけ表示されていた。『アグル』それが巨人の名前なのだろう。

数日が経過したある夜、本当にこのままではさつき見たビジョンの通りになってしまう、ならどうすればいい? 海辺で一人考えていた彼は海の中にこの前見たものに似た光を見つける。それを見た彼はその光に惹かれるように海に飛び込んだ。この時、彼はアグルの力を手にしたのだった。

そして、人類を滅ぼさないと地球を救えないそう決意した博樹は、アルケミースターズを辞め、一人で根源的破滅招来体に備えてきた。

当時をふと思い出していた彼は、金属生命体が復活したことに気が付くと、再び海の中にあの時と同じ光を見つけ、また飛び込んだ。

すると青い光に包まれ、彼は巨人の名を呼ぶ。

「アグルウウ!!」

しかし、その砲弾は空中で爆散し、その直後青い巨人―アグルがこちらをかばうように現れた。

「どうして…?」

「ヒロ…」

なぜ自分たちを? そう思った遥にその横で鞠莉が小さくつぶやいた声は聞こえていない。

金属生命体のほうを向いて立ち上がると、アグルは両手を握りしめ金属生命体に殴り掛かる。

だが金属生命体のほうも、前にガイアが戦ったものと同様に、アグルの行動を学習しているのかアグルの攻撃を的確にさばき反撃してくるが、アグルもそれに対応し一進一退の攻防が繰り返られる。

だが、互いの腕をぶつけ合い拮抗した際に、金属生命体がアグルの姿へと突然変化する。

違いと言えば偽物のほうが目が細く少しピンクがかっていることだろうか?

アグルが突然の事態に動揺すると、この前のように口元を歪ませ笑うと、アグルの顔面に拳を見舞うと、アグルはたまらず後方へのけぞり、それに対し一気にニセモノが攻め立てる。態勢の崩れたアグルの腹部に蹴りを見舞いアグルの身体が吹き飛ぶ。

遥はアグルに加勢しようと思ひ、鞠莉に「ここにいてください」というと一気に駆け出し、鞠莉の呼びとめる声に振り返ることなく、鞠莉の視界の陰まで移動すると、エスプレンダーを構えるが、こちらに気が付いたアグルが手を突き出しそれを引き留める。

そのすきにこちらへ走ってくるニセモノに気が付くと、アグルは空中に飛び上がりニセモノに渾身のけりを放つと、更に倒れたニセモノを掴んで投げ飛ばす。暫く一方的に攻撃していたが、一瞬の隙をついて距離をとったニセモノはすぐにエネルギーをためアグルが放ったものと同じ光弾を作り出す。

ニセモノはアグルの技も使えるのか…そう思うのもつかの間、それがアグルに放たれ、アグルの身体が爆発に包まれる。

しかしアグルはその攻撃を受けきっていた! 偽物はそのことに動

揺するが、すぐさま今度は腕を上下に広げ、頭部にエネルギーをため始めた。

それを見たアグルも同様にエネルギーをため始めるがニセモノはすぐにそのエネルギーをアグルに向けて放った、だがアグルはまだための動作のままだった。

このままではアグルに当たる―そのタイミングでアグルもその力を解き放つが、二つの光線はアグルのほぼ目の前でぶつかり、なんとそのままニセモノの方へと押し切ってしまった。

完全に光線を押し返され、アグルの光線を頭部にうけたニセモノはその体を爆散させ今度こそ消滅した。

「まさか、強くなったのか…?」

そうつぶやく遥の前でアグルは光に包まれ、そして消えた。

その日、鞠莉と別れ家に戻った遥だったが、帰り着いたタイミングでなぜか姉が隣の旅館の窓からベランダへ飛び移っている姿が見えたりしたのだがそれはまた別のお話し。

第8話 あざ笑う目／本当の自分

『伊豆のビーチから登場した待望のニューカメラ、ヨハネよ。みんなと一緒に墮天しない?』

『しない』×4

「やってしまった…」

ここはスクールアイドル部の部室、先日撮影した新しいPVを部室で見ていたのだが、梨子は壁に頭を当ててそう呟いていた。

動画の内容も、全員墮天使風?な衣装に身を包んで何やらポーズをとっていたものだったのだが、全員がキメ顔な中梨子だけは苦笑いだった。

撮影の場に遥はいなかったもので、どのような状況だったか走らないがおそらく梨子だけは嫌がっていたのだろう。

「遥君、どう思う?」

ふと千歌に感想を聞かれる、正直本気でこの路線で行くのか?ともおもったがすでに投稿されているので「確かに、インパクトはあつていいんじゃないでしょうか?」と当たり障りなく答えておく。

そしてランキングの順位を見ていたのだが、なんと954位にまで上がっていた。

「嘘!」と驚いているとさらに上がって953位になった。

「効果あつたってこと!」

「コメントもたくさん、すごい!」

そう言つてルビイが喜んでいたが、コメントも大半がルビイに向けたものだった。

だがしかし、放送が入り。全員が生徒会室に呼び出されてしまった。

「こういうのは破廉恥というのですわ!!」

そういつて生徒会長に激怒される。

「いやあそういう衣装というか…」設定というか…」

そう曜と千歌はそう弁明するが、そんなものでは生徒会長は止まらない。

「だからいいの？って聞いたのに…」

そう梨子がぼやくが遥はそこで苦笑いを浮かべるしかなかった。

「そもそも！ルビィにスクールアイドル活動を許可したのは、節度を持って自主的にやりたいといったからです。なのにこんな破廉恥な方法で注目を集めようなどと…」

「ごめんなさい」

妹のルビィがさえぎって謝る。するとダイヤも一旦落ち着いたのかそれ以上たまたみかけてはこなかったが、曜が「でも順位は上がったし…」というの、

「そんなもの、一時的なものに過ぎませんわ。試しに今確認してごらん下さい」

そういわれ、ランキングを確認すると1526位にまで下がっていた。

「うそ…」

そう全員が驚くとダイヤは、

「本気で目指すのなら、どうすればいいかももう一度考えることです」

放課後、海辺で千歌たちはうなだれていた。

無理もない、行けると信じてやったことなのにあそこまで否定されてしまったのだから…

「確かにダイヤさんの言う通りだよね…こんな方法で、sみたいになりたいだなんて…」

そう千歌がつぶやくと、善子は悲しそうな表情でこう言った。

「いけなかったのは墮天使…やっぱり、高校生にもなって通じないよ」

「そんなこと…」

そう千歌が言いかけるが、すつと立ち上がった喜子に遮られる。

「スツキリした！明日から普通の高校生になれそう」

「じゃあ、スクールアイドルは？」

そうルビィが聞くが、「やめとく、迷惑かけそうだから」そう言つて断る。

すると善子は振り返つて。

「短い間だったけど、堕天使に付き合ってくれてありがとう。楽しかったよ」

そう言つてほほ笑むと帰つてしまった。

「どうして堕天使だったんだらう？」

そう梨子がつぶやくと、花丸がそれに答えた。

「まる、解る気がします。善子ちゃん、ずつと普通だったんです。私たちと同じで、目立たなくて…そういう時、思いませんか？これが本当の私なのかな？って」

そういふどこか悲しげな表情で答えた花丸は、さらに続ける。

「善子ちゃん、幼稚園の頃言つてたんです。『わたし、ホントは天使なの！いつか羽が生えて、天に還るんだ！』って」

きつと彼女にとつて、天使が特別な存在だったのだから。だから自分は本来天使だった、そう思うことで自分は普通じゃなくて特別なんだ、そうすることで自分を保つてきた…。

その日の帰り、急に地響きやし山の中に突如として目玉が現れた。

「何…あれ…？」

「不気味ね…」

「うん…」

「ピギツ…」

「ずら…」

5人が思い思いの感想をつぶやくが、肝心の目玉はただただ不気味

な笑い声を上げるだけで、何もしては来ない。

(なんだアレ…？生きているのか…？)

遙にとつてもあの目玉は不気味で仕方がなかった。ほんとうにそこにいるのかすら定かではないが、現にここにいる全員には認識できている。だから錯覚ではないしこの笑い声も幻聴ではないだろう。

どうすればいいかしらばし考えていると、空から戦闘機が現れると、暫く上空を旋回していた。様子を見ているのだろう。しかし目玉は突然周囲の岩を浮かせると、それで戦闘機を破壊したのだった。

「嘘だ…ありえない…」

遙はうづくまっつて頭を抱える。目玉だけが存在するわけがない、岩を浮かせてぶつけるなんて…あるはずがない。

そうして残った一機が反撃だといわんばかりにミサイルを二発放つが、目玉に吸収された後一発は撃ち返されそれが直撃し最後の戦闘機も撃破されてしまった。

満足げにあたりにな気味な笑い声を響かせた後、その目玉は蒸発するように消えてしまった。

「何だったのかしら、あれ…？」

「お化け…とか？」

そうつぶやいた梨子に、千歌がそう答えるが本当のところは誰にもわからない。

「ちよつと遙君、大丈夫!？」

うづくまっつている遙の顔が真っ青になって震えているのに気が付いた曜が、そう言つて声をかけて背をさすつてあげるが、遙は反応しない。

『ちよつと頭がいいからつて偉そうなんだよ!』

『人類に救う価値なんてない』

あの笑い声を聞いてから、少年時代のトラウマと、この前の博樹との会話が頭から離れない。

べつに偉そうにしていたわけではなかった、でも周りとは比べ大人しかったし、外に出るタイプでもなく、なんでも理論的言っていたのでそれがよくなかったのだろう、今ではそう思つていつし解決したこと

だと思っていた。

でもそんなことはどうでもいいはずだった、でもあの目玉の存在が理解できない、ただそれだけなのにそれが怖くて仕方がない、それにあの笑い声から自身のトラウマを想起させてしまったことが余計に遥を苦しめた。

「やめろ…やめろおおおおおおおお!!」

精神的に追い詰められた遥は突然叫んだ、それによって心配して背中をなでていた曜は「うわっ!?!」と驚いて尻餅をついた。

「遥どうしたのいったい?」

そう梨子に言われてようやく我に返った遥に、「ご、ごめん…嫌だった?」

そういわれてやっとな曜たちが自分を心配してくれていたことに気が付いた遥は「いや…そんなつもりはなくて…その…」言葉が詰まってしまう。言った方がいいのかもしれないが、このことは知られたくない。

「もしかして、遥君ってああいうおばけみたいなのが怖いのか?」

「そっそんなことないですよ…」

千歌に凶星ではないがそう思われるのもなんとなく嫌なので一応否定はしておくが、これでは凶星ですといているようなものだ。

「ほんとに、大丈夫なんで…先輩、すいませんでした。それじゃあ先に失礼します」

「別に気にしてないよ?体調悪そうだったし、明日も無理に練習しなくても大丈夫だからちゃんと休んでね?」

そういつて帰ろうとする遥に曜はそう返すと、花丸も「ちゃんと休んでね?」と言つて見送る。

「遥君も心配だけど、そこはお姉ちゃんの梨子ちゃんにいったん任せるとして…」

「わかったわ、遥も多分みんなから色々言われるとかえってダメだろうし、なんとかするわ」

「ありがとーそれじゃあわたし達は明日の朝…」

そう言つて千歌が切り出した内容は―。

「遙、何があったの？」

その日の夜、家で梨子にそう問いかけられた遙は、姉にならと思いい本心を打ち明けた。

「あの目玉見てたら、なんか昔の嫌なこと思い出しちゃって…」

「小学校の頃の？どうして？」

「あの目玉が何なのか、なんであんなことができるのか全くわかんなくて、こんなこと今までなくて…そしたら笑い声で急にそのこと思い出しちゃったんだよね…」

「そっか…でもいいんじゃない？それで」

「え？」

「だってみんな怖いものくらいあるわよ、だから遙が悪いわけじゃないもの」

「姉さん…ありがとう。明日みんなにもちゃんと謝るよ」

「どういたしまして、みんな心配してたから安心させただけ」

「うん」

遙は自分の心にかかっていた霧が晴れたような気がした、それはきっと打ち明けることができたからであろう。

その夜、ダニエルのほうから今日のことを心配して連絡があった。

「ダニエルはどう思う？今日の目玉みたいな」

『そうだね、データは届いてたから解析してはみたけれど、不可解なことしかないかった』

「不可解？」

『やっぱりさつき君が言った通りわからなことだらけさ、でも吸収し

たミサイルの金属反応と熱反応は探知できたから、今後どこに現れるかの予測はできるようになった』

「じゃああの目玉そのものには生物の反応は無かったってことかい？」

『そういうことになる、根源的破壊招来体を送り込んできた先兵の一体かもしれない、またなにかあったら連絡しよう』

「わかった、いつもありがとうダニエル」

『だがいつまた出てくるかわからない、キミも気をつけて』

そういうと通話を切つると「僕たちが戦っているのは、常識じゃありえないような存在なんだ：怖がってる場合じゃない、僕がやらないと守れないから……！」

次の日、なぜかこの前の墮天使風の衣装に身を包んだ千歌と梨子と沼津に向かったのだが、なぜか同様の衣装の曜、ルビイ花丸と合流した、遥は何をしに行くのかと聞いても「墮天使に合いに行く」としか言われなかったが、それだけで誰かわかってしまうわけだが……。

とあるマンションの前まで来ると、その一階部分にあるゴミ捨て場から出てくる人影があった、善子だ。すると千歌は彼女に声をかける。

「墮天使ヨハネちゃん」

すると喜子がこちらに気が付いてこちらへ振り向くと、5人が声を揃えて

「スクールアイドル、やりませんか？」

そういうが、彼女は一瞬間が空いたのち「はあ？」という声しか出てこなかった。確かにそうだろう、こんな朝早くに押しかけてきていったい何なんだ、そう思ったに違いない。

「ううん、入ってください。A q o u r s に！墮天使ヨハネとして！」

「なにいつてんの？昨日も話したじゃない」

「いいんだよ！墮天使で、自分が好きならいいんだよ!!」

千歌がそう言うが、善子は「だめよ」そう言って走り去ろうとするが、「待って！」と言って全員で追いかける。

「生徒会長にも怒られたでしょ」

「それは私が悪かったんだよ、だから善子ちゃんはそのままでもいいんだよ」

駅前を走り商店街を走り抜け、それでもあきらめずに追いかけてます。

「私ね、どうしてμ sは伝説を作れたのか、どうしてスクールアイドルがここまで続いてきたのか…考えてみてわかったんだ」

「もう、いい加減にして！」

走りながらそんなやり取りをつづける千歌と善子だったが、港の水門のあたりまで来ると、さすがに体力の限界が来た善子は膝に手をついて立ち止まるが、ほかの全員も同様に上がった息を整える。

「どう思われるとか、人氣がどうかじゃない！自分の好きな姿を…輝いている姿を見せることなんだよ！だから善子ちゃんは捨てちゃダメなんだよ！自分が墮天使を好きな限り!!」

きつとその言葉はきつと千歌が、どうしてスクールアイドルを目指したいと思ったのか、どうしてμ sを目標にしたのか、自身でも一度しっかり考えたからこそその言葉なのだろう。

「いいの？変なこと言うわよ…?」

そう喜子が言うとき曜が「いいよ」と答えて彼女に笑いかける。

「時々、儀式とかするかも…」

「そのくらい我慢するわ」

これは梨子が答える。

「リトルデーモンになれっていうかも」

「それは…」そこで苦笑しながら千歌は

「でも、いやだったらいやって言う！」

変に気を使ったりしない、ちゃんと仲間として向き合う。そう言っているようだった、そして千歌は善子へ近寄ると一つの黒い羽根を彼

女へ差し出す。

善子はそれを笑顔で受け取る、だがそこで突然地響きが起こる。

「な、なに?」

「まさか…」

そして地底から現れたのは、巨大な目玉に腕と足をつけたような、そんな異形の化け物だった。よく見ると全身のいたるところに目が付いている生理的に恐怖心をおおるような、そんな姿だ。

「何なのよ…あれ…」

そう言つて善子が後づさるが、だれもそれにこたえることはできない「とにかく避難しよう!」そう曜が提案すると全員一目散に怪獣から離れるべく走り出す。

すると怪獣はなんとこちららにむかつて歩いてきた。

「どうしてこっちくんによ!」

「わかんない、でもとにかく逃げよ!」

まさかこの中の誰かが狙いなのか?それとも市街地に入りたいのか?どちらにしてもこのままだと大変なことになる。

「ごめん、もう…無理…走れない…」

そういつて遥が立ち止まると、善子が立ち止まってしまう。

「アンタ嘘でしょ?この中で一番体力無いわけ?」

「僕はこの辺で隠れるから、先行つてて」

「そんなことできるわけがないでしょ!まっててみんなに声かけてみんなまで」

見捨てられるわけない、そういつた善子を遮るように「僕は一人なら何とでもできるから、みんな一緒のほうが危ない」そういつて喜子を行かせようとする。

「そこまで言うならわかったわ、でも絶対だからね」そう言つて善子は走つていく。すると遥は怪獣の方へ振り返りエスプレンダーを構える。

「もう怖くなんてない、お前を恐れる必要なんて、どこにもない!」

そういつとエスプレンダーを突き出し、そこから放たれる光によつて遥はガイアへと変わる。

空中に出現したガイアはそのままの勢いで怪獣を蹴り飛ばすと着地し、ファイティングポーズをとる。

「ウルトラマンガイアだ」

「来てくれたのね」

ガイアの出現によって安心するAqoursのメンバーたち。

相変わらず不気味な笑い声を上げながら立ち上がる怪獣に対し、ガイアは立ち向かっていく、果敢に蹴りや拳の連打を浴びせそのまま投げ飛ばす。

すると怪獣は立ち上がると目玉から光弾を発射し、まともにくらったガイアは体勢を崩してしまった。それを見て黒目だけを釣り上げて笑った怪獣はそのまま怪しい光をガイアめがけて出し、それに包まれたガイアは怪獣の体内に取り込まれてしまった。

「ピギツ…」

「そんな…ガイアが…」

「まだ、まだ負けたって決まったわけじゃないすら」

ガイアが吸収されたことよってうろたえる一年生三人だったが、状況はもつと深刻だった。なんと怪獣は再びこちらを向くところからへと向かってくるのだった。

「どうしてさつきからこっちに来るのよ〜！」

「それはわかんないけどとにかく逃げよ！」

そう叫んだ善子に曜はそう言って、再び六人は走り出す。怪獣は不気味な笑い声を上げながら追いかけてくる、まるで6人が狙いだといわんばかりに…

(ここは、あの怪獣の体内なのか…?)

なにもないただ一面真っ赤な空間、そこにガイアはいた。ともかく一度対策を考えようとあたりを見渡すと、突然あたり一面に目玉がびっしりと出現した。

それに驚いていると、再びあの不気味な笑い声が響き渡り、耐えら

れなくなったガイアは耳を抑えて苦しみ始める。

（このままじゃだめだ、またコイツはみんなを狙うかもしれない。もう負けないって決めたじゃないか！だから、諦めたりなんかしない！）

そう自信を奮い立たせたガイアは頭上にある目玉が一つだけ大きいことに気が付く。

（もしかしたらあそこから出られるかもしれない、賭けだけどこのまま終われない！）

その目玉めがけて飛び立ったガイアは両手を握ってそこに突撃する！するとガイアの身体は怪獣の頭を内側からぶち抜いて空へと飛び出す。

そして怪獣の身体は粉々に砕け散ってしまいもうその場になにも起こらないのを確認するとガイアは飛び去っていった。

「鞠莉さん、あのメールは何なんですか!?!」

理事長室でダイヤが鞠莉にそう詰め寄る。

「何って…書いてある通りデース」

鞠莉はそう言って目をそらすことしかできなかった。

少しづつ成長しているA q o u r sに新しい困難が迫ろうとしていた…。

第9話 PVを作ろう！／星が消えた…

「はあく疲れた…普通って難しい…」

そう言っただけに机に突っ伏したのは善子だ。最近はやんと来るようになったのだが、クラスではやはり普通でありたいのかクラスメイトと話を合わせたり苦勞しているようだ。結構な帰還休んでいたのも勉強面も正直心配だったが花丸がノートを届けたり、遥も少し教えたりにしていたので現状そこは問題は無いのだが。

「無理に普通にしようと思わなくていいから…よつと」

そういって花丸が善子のシニヨンに黒い羽根を差し込むと…

「深淵の深き闇から、ヨハネ墮天!!」

そういって立ち上がってポーズをとる。

「やっぱり善子ちゃんはそのじゃないと」

「ぷっ…」

「何笑ってんのよ遥!」

「い、いやあ津島さんと国木田さん仲いいなあって」

「なによそれ…」

やれやれといった様子で羽を外す善子、最初は突拍子のないことを言い出す変な子くらいに思っていたが根はいい子なのだ。入部してそれなりに日が経って遥も彼女たちと打ち解けるようになったようだった。

「大変、大変だよ!」

そういってルビィが教室に飛び込んできた。

「どうしたのさ? 黒澤さん」

「大変、学校が!」

「」「統廃合!」「」

部室へ移動して部員全員の前で告げられたのは、この学校が統廃合の危機にあるということだった。

「そうなんです、沼津の学校と合併して浦の星学院はなくなるかもつて…」

「いつ!?!」

ルビイが持ってきた廃校の知らせに全員が驚いた。

「まだ決定ではないんですけど、来年度の入学希望者の数を見てどうするか決めるらしいんですけど…」

確かに生徒数は少ないと言い切つていいだろう、全校生徒合わせても100人には届かないのだから。実際今かなり厳しい状況にいるのは間違いないだろう。

「…廃校?」

「え?」

千歌がボソツとつぶやいたのがよく聞き取れず梨子と曜が反応すると…。

「ギター! ついにギター! 学校のピンチつてことだよね!?!」

「心なしかうれしそうに見えるけど…?」

そう言った曜の言葉は届いていないのか、部室を飛び出して行つて何やら「廃校だよ」とか「音ノ木坂といっしょだよ」などと言いなから部室の外を一周回つて帰つてくると。

「これで舞台は整つたよ、わたしたちが学校を救うんだよ! そして輝くの! ああ、μ'sのように!!」

そう言い切つたのだった。

「そんな簡単にできると思ってるの?」

梨子がそう言つてやや冷めた視線を千歌に送る、そんなに簡単なことじゃない。それが難しいからこんな話が出てくるわけなのだから…。

「花丸ちゃんはどう思う?」

そう言つてルビイが花丸に視線を移すと、花丸も「統廃合く!?!」と言つて目を輝かせていた。

「こつちも!?!」まさかここにも喜ぶ人がいたなんて、そう思っている

と。

「合併っていうことは沼津の学校になるすらね？あの街に通えるすらよね!」

「ああ、この子は純粹に都会に行けるのがうれしいんだな、そう思った。」

「相変わらずね、ずら丸。昔っからこんなだったし」

「そうなんだ？」と聞き返す遙に保育園時代センサーでつく街頭ではしゃいでいたエピソードを話していると。「善子ちゃんはどう思う？」とルビイが聞いてきた。

「そりゃ統合した方がいいに決まってるわ！私のように、流行に敏感な生徒が集まってるだろうし！」

そういつてなにやら誇らしげに語るが、花丸の。

「よかったずらねえ、中学の頃の友達に合えるすら」

と言われ、「統廃合絶対反対!!」と手のひらを反すのだった。

「とにかく、A q o u r s は学校を救うために行動します!!」

「ヨーソロー！スクールアイドルだしね」

「でも行動って何するつもり？」

「へ？」

学校を救うための活動をする、そう言ったところまではリーダーとしてとてもよかったのだがなんとノープラン、何も考えてなかったのだ。

「結局、s がやったことって、ランキングに登録してラブライブに出て有名になって生徒を集める…」

「それだけ？」

「みたい…」

向こうは東京の高校だからそれでもいいかもしれないが、こちらはそうもいかない。なにせ住んでいる人の数が違うのだから…。

「内浦のいいところ？」

「そう！東京と違って外の人はこの街のこと知らないでしょ？だからまずこの街のいいところを知ってもらわなきゃって」

ハンディのビデオカメラを向ける曜に千歌がそう答える。この街のいいところを宣伝して、それで入学希望者を募る、そういう作戦だ。

「それでPVを？」

「うん！これをネットに公開して、みんなに見てもらおうの」

「知識の海ずら…」

善子の問いにそう答えると、ネットという単語に花丸が反応する。すると千歌は花丸とルビイの後ろへ回って「そういうわけでひとつよろしく！」という花丸とルビイは自分へ向けられたカメラにきがつき…。

「マルには無理す…いや、無理…」

そういつて視線を逸らす花丸と「ピギイ」といつてすかさずカメラの外へ逃げてしまったルビイ。

「あれ？」

ルビイは一体どこへ消えてしまったのか？そう思つてカメラをいったんおろし、あたりを見渡すがどこにも見当たらない、見私のない公園のはずなのだが。

「見えるーあそこー…よッ!!」

そういつて喜子が少し離れたところにある木々の枝を指さす、まさかこの一瞬であの木に登ったのか？そう思つてみると。

「違いますー！」

そういつてルビイが木とは反対側にある看板の陰から出てきた。すると曜は再びルビイにカメラを向けると、またルビイは逃げてしまった。

「なんかレベルアップしてる！」

「感心してる場合？」

その近くでそんなやり取りをする千歌と梨子。

だが花丸、ルビイ、梨子は今までも何度かPVを撮影しているが相変わらずカメラの前だと緊張してしまうし、台本無しでの撮影となったので一番こなれている千歌がメインで撮影することになった。

…のだが、富士山や海、ミカンをアピールポイントにしたのまではよかつたのだが、「街には…えっと、特に何もありません！」と云ってしまい、「それは言っちゃダメ…」と指摘されてしまうのだった。

ならばと思い少し足を延ばして沼津駅や付近の商店街、さらにはレインタルアイクルで伊豆長岡へ行ったのだが、沼津へはバスだと500円片道でかかるし、伊豆長岡へ自転車で向かうと、上り坂で疲れ切ったメンバーの様子しかカメラに捉えられなかった。

「もう、いい加減にして…」

疲れ切つて自転車ごと倒れてしまった善子が不満を漏らすのが、彼女を見た千歌はなにか思いついたようで「だったら…」と云って提案したのが。

「リトルデーモンの皆さん、墮天使のヨハネです。今日はこのヨハネが落ちてきた地上を紹介してあげます。まずこれが——土!!」

そう云つてただの盛られた土を指さして何やら高笑いを浮かべている、そんなもんがどうしたっていうのだ？ 工事の関係でできたものだろう、それはカラーコーンで囲われている。

「やっぱり善子ちゃんはそのじゃなくっちゃ」

そう云つて喜んでいたのは花丸くらいなものだった。

自分は移つても仕方ないし、マネージャーだからと撮影していた遥も苦笑いを浮かべるしかなかった。

「根本的に、考え直した方がいいかも…」

曜もそう言うしかなかったようだ…。

「どうして喫茶店なの？」

「だって梨子ちゃんしいたいけいるならうち来ないって」

「そんなこと云ってないわ、ただちゃんとおつないでおいてって」

「このあたりじや普通だよ?」

「そんなあ…」

なぜ今日は喫茶店なのか? そう言った善子の隣とその対面で千歌と梨子がそんなやり取りをするのを(姉さん、犬だめだからなあ…)と思いつながらその隣で遙は聞いていた。

その後ろの席では、花丸がおいしそうにどら焼きを食べているのをその隣でルビィが眺め、対面で曜がそれを撮るという光景が広がっていた。ここもP.V.で使えるかもしれないと思ったのだろう。

「ワン!」

「またまたあ…」

後ろで犬の鳴き声がある、梨子はさすがに喫茶店にはいないだろうと思っていたのか、そういつてコーヒーを飲むが、再び「ワン!」と言った泣き声が聞こえ「ま、まさか…」と言つて振り返ると、そこには黒毛の子犬がちよこんと座っていた。

「ひいっ…!」

「こんな小さいの!?!」

悲鳴を上げて梨子が足を浮かせてどう見てもおびえているので、しいたけのような大きな犬がダメだと思つていた千歌にとつては心外だったらしい。

「大きさとか関係ないの、そつその牙…:そんなので噛まれたら…:死…」

「噛まないよ、ね? わたちちゃん」

そういつて千歌はひよいと子犬を持ち上げると自分の顔の前に持つてきて暫く見つめると。

「そうだ、わたちゃんでなれるといいよ」

そういつて梨子の顔の前に子犬を持つていくと、梨子は何とも言えない表情をしたまま固まつてしまったが、鼻の頭をなめられた瞬間立ち上がると、一目散にトイレへ向かつていき閉じこもってしまった。

「梨子ちゃん?」

「話ならここで聞いてるから早く進めて!」

曜が呼びかけるが、梨子はよほど怖かったのだろう、恐らく終わるまで出てきそうにない。

「しようがないなあ〜…」

「すいません、姉さん犬はホントダメで…」

仕方ないからこのまま進めよう、そう思っていると、善子はすでにPCを操作していた。

「津島さん、どんな感じ？」

「簡単に編集してみたけど、とても魅力的とは…言えないわね」

そういつて肩をすくめる。もともと動画配信をやっていた彼女をもつてしてそう答えるということは結構厳しいのかもしれない。

「やつぱり、ここだけじゃきびしいんですかね…」

そうルビィが力なくつぶやくと。

「じゃあ沼津の華やかな街並みを混ぜて…」

「そんなの詐欺でしょ！」

そう言いかけた千歌の言葉を梨子がそう遮った、大方「ここが私たちの街です！」って言うつもりだったのだろう。

「なんでわかったの!？」

「だんだん行動パターンがわかってきたのかも…」

そう驚く千歌の横でそう言って苦笑いを浮かべる曜。

喜んでいいのか悪いのか、そう思っ肩を落とす千歌。

「うわッ終バス来たよ！」

そう言っ善子と共に曜は帰る準備をして外に出ようとし

「では、また…」

「ヨーシコー！」

そういつて走っバス停のほうへ走っていった。

「なああああああああ！」

今度はルビィが突然大声を出したかと思えば、「もうこんな時間、失礼します」そういつていまだにどら焼きを食べていた花丸の襟元を掴むと引きずるようにして帰って行く、花丸はそのままこちらへ手を振っていた。

気が付けばもう19時になろうとしていた、もう夏が近づいてきているからかこの時間でも全然明るいので、あまり実感はわかかなかったが。

「意外と難しいんだなあ…いいところを伝えるのって」

「住めば都、済んでみないとわからない良さだつてあるだろうし」

トイレから梨子のそんな声が聞こえてくる、声は落ち着いているがまだ子犬でも怖いのだろう。

「でも、学校がなくなつたらこんな毎日もなくなるんだよね…」

「そうね…」

そういつて子犬を下すと、バックヤードのほうへとととと歩いて行った。

「スクールアイドル、頑張らなきゃ」

「今更？」

ようやく梨子がトイレから出てきた。

「今気が付いた、なくなつちやダメなんだつて、わたしこの学校が好きなんだ」

「そうですね、僕もこの場所をなくしたくないです…絶対に」

「そうだよね、頑張らないとっ！」

遙の決意の言葉にはウルトラマンとしてみんなを守るということも含まれているのだが、千歌も梨子もそのことなんて知る由もないのだが…。

『遙、大変なことになった』

「大変なことって？」

その日の夜、ダニエルから急にビデオ通話がかかってきた、なんで

も早めに伝えたほうがいいと思つてのことらしい。

『宇宙開発局からの情報なんだが、星が消えたらしい。それもその消えた星の位置がほとんど地球に近づいてきている』

「もしかして…根源的破壊招来体なのかい?」

『恐らく…、まだ正体がかめていないが君たちの住んでいるあたりに出現することが、現在観測されている中では一番頻度が高い、だから用心はしていてくれ、僕たちもできる限りのアシストはする。』

「ありがとうダニエル、助かるよ。気持ちの準備だけでもできてた方がそのとき冷静でいられるし」

『そう言つてくれると助かる、またなにかあつたら連絡するよ。突然すまなかつた、お休み』

「ありがとうダニエル、おやすみなさい」

『以上、がんばルビィ!こと黒澤ルビィがお伝えしました』

先日作成したPVを理事長室で、理事長である鞠莉に見せていた。

「ど、どうでしょうか…?」

「…はっ!」

「もう、本気なのに!ちゃんと見てください!!」

寝るほど退屈だったのだろうか?必死で作った本人としてはさすがに腹立たしいところではあつたので千歌は思わず声を荒げた。

「それでこのテエイタラクですか?」

「ていたらく?」

装はん諾する千歌の横で曜と梨子が、「それはひどいんじゃないですか?」「そうです、これを作るのがどれだけ大変だったか」そう口々

に言う。

「努力の量と結果は比例しません！」

そう鞠莉に一蹴されてしまった。

「大切なのはこのタウンやスクールの魅力をちゃんとわかっているか
デース」

「それってつまり…」

「私たちはわかってないってことですか？」

ルビイが言いかけた言葉を花丸が引き継ぐと、それに重ねるように
喜子が。

「じゃあ理事長は理解しているってどういうの？」

そういつて食いつくのだった。

「少なくとも、あなたたちよりは…知りたいですか？」

「いや、聞かないでおきます」

そう千歌が答えた時。

とつぜん警報が鳴り響いた。

「な、何!？」

「とにかく外へ！避難しましよ」

遙はそう言つて全員に避難を促したのち外へ出る。

すると空にワームホールが開き、そこから何やら怪しい色のバリア
に包まれた二枚貝のような物体が降りてきたのだった。それはなん
とバリアを広げ、周りの建造物を取り込み始めたのだった。

「あいつは…何が目的なんだ…」

「やつの身体は反物質で構成されているのさ」

先に外へ出た遙がそうつぶやくと、突然そんな声が聞こえた。

「湊博樹さん…」

「この宇宙で反物質がわずかにしか存在しないのは、ビックバンの時
に反物質が物質より1少なかったからだ、だからやつはこの地球を反
物質化した後バリアを解くことで再びビックバンをおこすつもりだ、
そうすれば再びサイコロはふられ、うまくいけば反物質の世界ができ

る」

「そんなこと!!」

地球はおろか宇宙そのものを吹き飛ばすなんてそんなことは絶対に止めなければ! そう思っただけでエスプレンダーを取り出した遥の腕を博樹は掴んで止める。

「ウルトラマンの質量を考えろ!! そんなことをすれば、巨大な爆発が起こる」

そう。物質と反物質が触れ合うと対消滅を起こし、膨大な熱エネルギーとなってしまうのだ、米粒大の反物質を地面に置くとスイカ大のクレーターができるらしい。

「じゃあ…どうすれば…」

「アグルの力でガイアのバリオン数を反転させれば、反物質ウルトラマンになれる」

「ならそれで…」

「だがいいのか? もし俺が気まぐれをおこしてお前を元に戻さなかったらお前は一生反物質の世界をさまようことになるぞ?」

博樹の提案した案以外に活路を見いだせなかった遥だが、そんな遥を挑発するように博樹はそう言った。

「それでもいい、それでもこのままでいるよりましだ!」

「いいだろう、反物質化したらすぐにあのバリアの中へワープしろ! いいな?」

遥の決意は固かった、この場所を守るためなら、出来ることは何だってやる、その一心での決断だった。すると博樹もそれに応じその後の指示を飛ばすと、それぞれウルトラマンになるためのアイテムを構えると、それぞれ赤と青の光が迸ると、バリアの上空に二人のウルトラマンが現れた。

「ガイア、行くぞ!! ハアアアア…」

アグルが全身のエネルギーを集中し、ガイアへ放射する。それを受けたガイアはバリアの中へとテレポートする、そこで大爆発が起こらないということは成功したのだ。

ここに反物質ウルトラマンが誕生した!!

ガイアは怪獣に駆け寄ると格闘戦を挑むが、相手は左右に身体を開いて、ヒトデを横に並べたようなシルエツトとなり、ガイアと比べて横のサイズが大きく、攻めあぐねていた。

足を掴んで持ち上げて投げ飛ばすが、回転してうまく着地されず。ならばと駆け寄って頭部を狙うが、今度は身体を閉じられ挟まれてしまう。

されにその状態で電撃を流され、ガイアのライフゲージはエネルギーの危険を知らせる赤の点滅をはじめてしまう。

ガイアは渾身の力で怪獣の腹を蹴り、そのままバク転し左腕を右腕に抱えるようにL字を組み光線を発射し、怪獣の頭部の触角のような機関を粉碎すると、バリアが縮み始め、範囲の外に出たものはすべて物質に戻っていった。

だがしかし、先ほど破壊した怪獣の破片がそのままバリアの外に出してしまう。するとバリアの外で見守っていたアグルが光線で物質化した後、光弾で破壊したのだった。

狭まるバリアの中、ガイアは怪獣の身体を捕まえるとそのまま飛び立ち、ワームホールの中に怪獣を送り込む。

その様子を見ていたアグルは、ワームホールを閉じるべく光線を放とうと構える。

(今閉じればガイアは戻ってこれない、そうすれば邪魔者は消える…)

そう思っただけでもそれを実行することはできなかった。するとガイアが出てきたのでそこでようやくワームホールを閉じると、ガイアが目の前までやってきて。

「さあ、早く戻して下さい」

そう言ってくるが、そこで再び戻さなければ…と思ひ躊躇うアグル

…
だが先ほどとは違う光線を浴びせることで、再びガイアの身体は物質に戻る。

「ありがとう」

そう言ってガイアは先に地上へ戻って変身を解く。

「やっぱり、僕はあなたと手を取り合って、この星のみんなを守ってい

きたい」

そう言つて遙は博樹に手を伸ばすが、博樹がその手を取ることはない、何も言わずに立ち去ってしまった。

「やっぱり今思った、あなたも僕も、求めているものは同じなんだって」

そうつぶやく声は、誰にも届くことは無かった。

第10話 何かがいる…／夜空を照らす

「どうして聞かなかったのよ?」

放課後、下校時間となり下駄箱で、昨日のPVをダメ出しされたとき、鞠莉にこの学校、町の魅力を聞かなかったのはなぜかと善子は千歌に問いかける。

「なんか聞いちゃダメだっておもったから」

「何意地張ってんのよ?」

「そんなんじゃないよ、自分たちで気づけなきゃPV作る資格なんてないよ…」

確かにそうだ、ほかの誰でもない自分たちが学校を存続させるためにこの街の宣伝をしようと思ったのだ。自分たちがこの街のよさに気づけなければ、それは他人に求められた動画になってしまう。

「そうかもね」

そう応じた梨子の横で曜は敬礼をし「ヨーソロー!それじゃあ千歌ちゃん家で作戦会議だ!」そのおかげですこしだけは明るくなった気がした。

「あー忘れ物した…先行ってて!」

そういうと千歌は走って校舎の中へと戻っていった。

「全く、さっきまでカツコよかったのに…」

「まあ千歌ちゃんらしいわね…」

やれやれと頭をかきながら呟いた遥に梨子がそう言うので、「全くだ」と同意する。

「ちよつと追いかけてよっか?もしかしたら見つかん無くて困ってるかもだし」

「そうね、あんまり時間かけられても困るしね」

曜の提案に善子が同意し、全員で千歌の後を追って部室へ向かう。

「私たちも学校続いてほしいって…なくなってほしくないって思ってるんです」

体育館へ着くと、そう言っている千歌の声が聞こえた。

「一緒にやりませんか？スクールアイドル」

一体誰を勧誘しているんだろう？そう思つて千歌の視線の先を見るとそこには黒澤ダイヤがいた。

まさかあれだけ部を認めないと言つていた彼女をさそつたのだろうか？怒られるのでは？そう思い恐る恐る彼女のほうを見るが、彼女は表情を一切出さずに、すとん。とステージから飛び降りると。

「残念ですけど、あなた達のその思いは嬉しく思いますわ。お互い頑張りましょう。」

そういうと、千歌の横を通り過ぎ去つていった。するとさつきまで彼女が経つていた場所に一枚の書類が落ちていることに気が付いた千歌がそれを拾い上げる。

〈署名のお願い〉

そう書かれていた、彼女も学校を存続させるために行動しているのだ。『お互いに』と言つたのはそういう意味だったのだ。

彼女が去つていった方を向くが、彼女はもういない。するとそれを見計らつたかのように曜が口を開く。

「ルビイちゃん、生徒会長つてスクールアイドルのことが…」

「はい、ルビイより大好きでした…」

それを聞いた千歌が再び勧誘しに行こうとダイヤが向かつていた方へ行こうとするが、ルビイがすぐ立ちはだかり。

「今は言わないで！」

そう言つたのだった、普段は気の弱い彼女がここまで強気に意見を言うことは珍しい、すぐに「ごめんなさい…」と付足されたが、よほどの事情があるのだろう。そう思いさらに追及することは誰もしなかった…。

ダイヤはあの後廊下を歩いていると、鞠莉に遭遇し、

「逃げていたって、何も変わらないわよ？進むしかない、そう思わない？」

そう彼女の前を通り過ぎようとしたタイミングで声をかけられた。するとダイヤも立ち止まり。

「逃げているわけではありませんわ、あの時だって…それより、あなたが戻ってきたところに彼も戻ってきたそうじゃありませんか、何を考えられているんですか？あなた方は？」

「ダイヤ…」

それ以上鞠莉は何も言うことができなかった。

「学校のため、スクールアイドルをやる為、それ以外のことがきつとあるのでしよう？どちらにせよわたくしはそのどちらにもかかわることはしませんので」

そう言うときダイヤは立ち去っていったが、鞠莉にはそれを追うことはできないし、彼の目的も何も話すことはできない。

「しいたけいないよ」

千歌の家に移動したメンバーたちだったが、しいたけを警戒して部屋に入ろうとしない梨子に遥がそう言って早く入るように促していた。

「ね、千歌ちゃん」

そう曜がいうともぞもぞと布団の中でうごめく。なんで千歌は布団にくるまっているのだろうか？そう思いながらようやく梨子は部屋に入ってきて、ベットに腰掛ける。

「それよりもPVよ、どうすんの？」

そう切り出す善子に花丸も「まだ何もおもいついてないぞら」と言っただけだ。

「それはそうだけど…」

と梨子が言葉を詰めさせたところで「あらいらっしやい」という声が聞こえてくる。長女の志満がお茶を持ってきてくれたのだ。

「ありがとうございます」と言って遙が受け取ると、「みんなで相談？」と聞かれ「はい」と梨子が答えると、

「相談はいいけど、明日はみんな早いんだからあんまり遅くなっちゃだめよ?」

そう言われたところで、「明日って何かあるの?」と梨子と遙が口をそろえて首をかしげる。

「海開きだよ」

そう言う千歌の声が『廊下』から聞こえ、千歌が部屋に入ってくる。

「じゃあ…」

そうつぶやく梨子の顔が青くなり、後ろの布団がめくれ上がり、中からしいたけが出てくる。

「わん」

そう吠えると梨子が悲鳴を上げたのはまた別のお話し。もちろんいないといって騙した遙は家に帰っても暫く口を聞いてもらえなかった。

「ふわあああ…ねむ…」

まだ時計は朝の4時前なのだが、遙はあくびを噛み殺しながら起き

上がる。

「海開きだからって、こんな朝早くなくてもいいんじゃない？」

そんな不満を漏らしながら学校指定のジャージに着替えると家を出て海岸へ向かう。梨子は先に行ってしまったのか、家にはいる様子がなかった。「まだ起こってるのかなあ…」そんなことを思いながら海岸へ向かうと、町の人や学校の生徒で砂浜を埋め尽くす勢いだった。「遥君、こっちだよ」

ふとそんな風に自分を呼ぶ声があったのでそちらを向くと、花丸、ルビィ、善子の三人が一緒に清掃活動をしていた。

「おはよう、国木田さんに黒澤さん、津島さんも」

「お、おはよう」「おはよ、あとヨハネ」とそれぞれ言葉を交わすと清掃活動にとりかかる。

「そっかやアンタ、二年生は名前で呼ぶのに私たちは苗字呼びなのはなんでなの？」

急にそんなことを善子に聞かれる。

「えっ？なんでって言われてもなあ…名前で呼べって言われて無理やり…ほら、クラスメイトはみんな苗字で呼んでるし」

「ふーん…」

「な、なんだよ？」

「ま、いいんじゃない？無理に呼ばなくても」

「なんだよそれ…」

そんな会話をしながら清掃作業をしていると。

「あのーみなさんー！」

そんな声が聞こえ、声のしたほう向くとそこにいたのは千歌だった、階段のてっぺんというみんなからよく見える位置にいた。

「わたし達、浦の星学院でスクールアイドルをやっているAqour sです！わたし達は学校を残すために、ここに生徒をたくさん集めるために皆さんに協力してほしいことがあります、みんなの気持ちを、形にするために!!」

沼津をPRする動画は、新曲のMVも兼ねてやることになった。スカイランタンをみんなで作って飛ばす、ということになったのだ。た。

放課後などの時間を使つての作業となり、Aqoursのメンバーは曲の振り付けや衣装作成も行つていたので、なかなか多忙なスケジュールとなったが、順調に進み打ち上げるタイミングや撮影場所も打ち合わせが終わり、スカイランタンももう少しですべて完成というところにまでこぎつけていた。

そんなある日の放課後の時間。遥と千歌は部室で最後の確認を、ほかのメンバーは教室でほかのクラスメイト達と残りのランタンの作成を行っていた。

「明後日くらいには本番いけそうだね」

「ですね、打ち上げも町の人たちや学校の皆が手伝ってくれますし、絶対成功しますよ」

そんな会話を千歌と交わしていた遥だったが、その時に突然自分の携帯が着信音を奏で始める。

「おかしいな？ マナーモードのはずなんだけど…」

そう思いつつ画面を見るとそこには非通知着信の文字が並んでいたが、遥は無意識下で危険を察知していたのか。

「非通知なんて取らないよ身に覚えもないのに…」

そう言つて鞆に再び携帯を放り込むと、色んなところから着信音が鳴り響き始める。

「あれ？ 誰だろ…非通知？」

「なんか…嫌な予感がします、千歌先輩、とらない方がいい…」

「もしもし、高海です…」

とらないように促そうとしたが既に千歌は電話に出てしまつていたが、彼女はそこまで言いかけると無表情になり…

「あれ？先輩？」

悪ふぎけにしては夕チが悪い、本当にどうしたというのだろうか？そう思いつつ千歌に声をかけるがまるで反応がない。すると今度は部室の外からも着信音が鳴り響く…。

「おかしい、なんでみんな同じ音なんだ…」

「電話だよ…」

ふと疑問に思った遥の隣で千歌がそう言って自身の携帯をこちらに突き出してくる、彼女の携帯は再び着信音が鳴っていた。

「いや、それ先輩のだから…」

そういつて遥は後ずさるが千歌はどんどん寄ってきて「電話だよ」と言い続けるのだった。絶対におかしい、やはりさっきの電話がまずいのだろう、そう思つて遥は自身の携帯の電源を切ろうとするが再び着信が入り、着信拒否しても切れず、電源も落とせなかった。

「なんだこれ…」

本格的に危機感を覚えたころ、部室の扉が勢いよく開いて一人の少女が飛び込んできた。

「大変！みんなが!!」

「国木田さん!？」

「みんな一斉に電話が鳴つてそれに出てから様子がおかしいすら」

「全く急に走つて生徒会長あたりに見られたら大変よ…つてなにかあったの?」

どうやらその時は教室から離れていたらしい善子が花丸が走つていったのを目撃したらしく部室に入ってくる。

「花丸ちゃん、善子ちゃん、電話だよ…」

そういつて千歌が携帯を差し出してくる

「千歌ちゃん…?」

「全く電話がどうしたつていうのよ…」

そういつて善子が携帯に手を伸ばすが。

「とっちやだめだ!!」

そういつて遥がとっさに千歌を突き飛ばした。

「何すんのよ!!」

そう文句を言う善子に対して遙は、「電話をとってから様子がおかしくなったんだ」そう言っただけのことの顛末を伝えるが、「ふざけてるんじゃないの？」そう言っただけ納得しないがもう一人部室に飛び込んでくる。

「大変だよ花丸ちゃん、二年生も三年生もみんな様子がおかしいの！」
「そんな……」

ルビイの報告に花丸はそう言っただけ肩を落とすがそんな余裕はなくなかった。

「ちよつと……後ろ……」

そう言っただけ恐る恐る部室の外を指さした善子のその指先の方向を振り向くとそこにいたのは、さっきまでの千歌のように携帯を持って近寄ってくる生徒たちだった……。

「ピギツ……」

「な、なんか様子が変よ……」

「だから言っただろ……ともかく逃げよう」

「逃げるってどこに？」

「こつちだ！」

そう言っただけ遙は他の生徒たちが来た方の反対側の扉を開けると三人を引き連れてその場を走り去る。

「参ったなあスマホ忘れて出てきちゃったよ……」

果南は、母親から買い出しを頼まれて内浦のほうへ来たのだが携帯を忘れて出てきてしまい、再び海を渡って家に戻るのも時間がもったいないと思って仕方なくそのまま向かっていた。

すると町の大人たちが、くわやら何やらを持って出てきた。

「こんばんわ、こんな時間に収穫ですか？」

と言つて普段から大人と接する機会の多い果南は挨拶をするが、直後に異変を察してその場から走り去る。

「何？何が起こつてるの？」

理解ができない、いや最近の怪獣騒ぎやら何やらも正直理解の範疇を超えてはいたわけだが今回はここに住んでいる人たち全員の異変だ。

ともかく誰か他にこの異変に気が付いている人に相談できればと思いつつにかく逃げた。

するとこのあたりの交番に努めている警官を見かけたので。

「お巡りさん、みんなの様子が変なんです！」

そう言つて声をかけると警官はこちらを振り向くところにつこりと笑う。よかつたこれでひとまず助かつた。そう思つたのもつかの間、警官は果南に携帯していた拳銃を突きつけた。

「え……？」

その後、発砲音が周囲にこだましたのだつた……。

「ひとまず図書室に逃げ込んだのはいいけど……」

「いつまでもこのままつてわけにもいかないわよねえ……」

その後図書室に逃げ込むと鍵をかけて、ひとまずやり過ぎた遙たち一年生だったが、このままずっとここにいても何も解決はしないだろう。そう思つて口から出かかつた言葉を引つ込めたルビィを善子が代弁する。

「図書室のパソコンを使って、何か情報が得られればつて思つたんだけど……」

「無理ずらかか？」

「そうだね、インターネットは切断されてるし、携帯電話は使えない。助けを呼ぼうにもこれじゃあね…」

何とかして突破口を…そう思っつてパソコンを使う遥の様子を眺めていた花丸だったが、電子機器に疎くてもこれでは何の役にも立たないことは察せてしまった。

「まさか…これも天界からの刺客…」

「バカ言っつてる場合じゃないすら」

突然わけのわからないことを言い出す善子に花丸がそう切り返す。

「わかっつてるわよ…」

「でもどうしよう…お姉ちゃんも心配だし…」

「そっか、姉さんも…」

暗い空気が漂い始めるが、現実はそれすらも許さなかった。突然ドアを無理やり開けようとしたような音がした後、ドアへ体当たりする音が実内へ響いた。

「もうばれたんだ…」

「グラウンドにも人影が見える…」

「屋上へ行っつてみましょ？あそこなら遠くの様子もそれなりに見えるだろうし」

そう善子が提案したのに反対の意見は出なかつたので、四人は窓から一旦外へ出ると、再び構内へ忍び込み、屋上へと上った。

「こうやって物を置いとけば入っつてこれないだろ…」

そう言っつて屋上へと入る唯一のドアの前に、道中に拾つた掃除用具や机を幾つかドアの前に置き、即席のバリケードを作った。

これなら簡単には入っつてこれないし、町のほうに異変に気が付いた人がいれば、ここから助けが呼べる。そういう算段だった。

拳銃の発砲音が聞こえた瞬間果南は目をそらしたが、だが痛みも何も感じない。もしや自分はなにも感じることもなく死んでしまったのか？そう思い恐る恐る目を開けるがそこにいたのた、倒れた警官と、その後ろに立つ青年がいるだけで、自分の身を銃弾が貫く、そんなことは起こらなかった訳だ。

その青年は果南にとって見知った青年——湊博樹だった。

「ヒロが、助けてくれたの？」

「やつらは人間に興味を持った。ここはその実験場に選ばれた」

「何を言ってるの…？ヒロ、全くわからないよ…」

「果南が知る必要はない、命が惜しかったらこの街から逃げるんだな」
果南を助けたのにも関わらずそう突き放すように言い放つとそっぽを向きそのまま立ち去ろうとするが、果南はそれを追いかける。

「そんなことできないよ、私たちここで育ったんだよ？それにダイヤと鞠莉もきつと同じような目に合ってる、お願い助けに行こう？」

「無駄だ、存在価値のない人間はそのうち消える」

「え…？どうしてそんなこと言うの？幼馴染じゃないのさ！どうしてそんなことが言えるの！?!おかしいよ!!」

博樹の言い草に思わず果南はそう強く言い返すが、博樹は何も答えなかった。

「もう頼まない！私一人で行くから」

そう言って拳銃を拾い上げる果南に対して「せつかく助けてやった命をわざわざ…」そうつぶやく博樹に、

「人間の存在価値なんて誰が決めるのさ…ヒロやつぱり変わっちゃったんだね二年前、みんなの前から消えた時から…」

そう言って学校のほうへ走り去る果南の顔は、とても悲しげだった。

その後遙たちは完全に日が沈んでしまつてあたりには校庭のあたりにある街頭程度でぼんやり周りが見える程度の屋上で途方に暮れていた。

「ごめん、私が屋上がいいなんて言い出したばかりに…」

言い出しつぺだつただけに責任を感じてそう言い出したのは善子だつた。

「しよがないよ善子ちゃん、マルたちだつてそれがいいと思つて賛成したわけだし…」

「でもルビイたち、どうなつちやうのかな…」

善子を慰める花丸の隣でそうルビイが漏らす。

「ねえ、天国つて本当にあると思う？」

そう言い出したのは花丸だつた。思わず「え？」と遙が聞き返す隣で善子は「あるに決まつてるじゃない」と普段の様子で言う。

「フッフッそうだね」

そういつてルビイが笑うと、ようやく少し場の雰囲気明るくなつた気がした。そのとき――

ここから少し離れた森に突然浮かび上がるようにして怪獣が現れた。その外見は依然沼津で建物を砂に変えた怪獣が二本の足で立ち腕を二つつけたような見た目だつた。

「あれはあの時見た…」

「うん、クラゲみたいなの姿をしてたやつぞら…」

そうつぶやく面々の前で怪獣は目を数回光らせると、操られているかのように様子のおかしかった生徒たちが凶暴化し、屋上のドアを無

理やりこじ開けにかかり始めた。

「どうしよう…」

「まずいわね、とんでもない勢いでたたいてるわよアレ…」

このままじゃここに入ってこられるのも時間の問題か…そう思い再び恐怖が勝り始める三人だったが、すぐさまドアは破られ人がなだれ込んできた。

そして数の暴力によって押さえつけられる四人だったが抵抗も虚しく形態を押し付けられ、虚ろな表情になる善子、花丸、ルビイの三人の近くで暫く抵抗していた遙だったが、すぐに抑え込まれてしまった。

「くっそお…：ガイアー!!」

エスプレンダーを取り出しガイアに変身すると、その時の光によって周りの人は後ろに倒れこんだ。

そのままガイアは怪獣の前で巨大化し、怪獣へと肉薄する。

そのまま怪獣の首を蹴り上げ、ひじ打ち、拳を撃ちつけ有利に勝負を運んでいたガイアだったが、突然飛び上がった怪獣に対応しきれず、怪獣の腹から発射される光弾によって空爆を受けるが、とっさに放った小さい光弾で怪獣を打ち落とすと、怪獣の身体が振動をはじめ、再び周囲にあの着信音が鳴り響く。

すると町の人々が怪獣とガイアの前に立つ、まるでガイアから怪獣を守るかのように…。

するとガイアも人々を巻き込むわけにもいかず攻撃の手を止めてしまった。

すると怪獣の両腕が伸び、ガイアの右腕と首を絞めつけ、電撃を流し始めた。

この攻撃によってガイアのライフゲージが点滅を始めた。

このままガイアが敗北するようなことがあればこの人たちは恐らく助からない、だがガイアがこのまま怪獣を倒してもその余波に巻き込まれて助からないであろう…

そのとき!

「みんなを元に戻せ！」

そう言つて一発の弾丸が怪獣の首に当たった。だが所詮人間と怪獣では圧倒的なサイズ差がある、人の命は奪えても、怪獣にとっては蚊に刺された程度にも感じないだろう。

しかし怪獣にとつては自身の能力から逃れていた果南が気に入らなかつたのか、ガイアの腕を離すと果南の方へ向くと、腹部から光弾を彼女に向けて発射した。

ガイアはすぐさま助けに行きたかつたが、怪獣のうでが首を強く締め付けていて抜け出せず、動くことができなかつた。

果南は向かつてくる光弾から顔を背けるが、今度こそ誰も助けられないだろうと本能的に理解してしまつた。

（あー、今度はダメかなあ…ゴメンヒロ、せつかく助けしてくれたのに…）

しかしその攻撃が彼女に届くことは無かつた、空中で破裂したその光弾は青い光によって彼女に届くことは無かつたのだつた。恐る恐る目を開ける果南が見たのは、青いまばゆい光の中から現れてこちらを見つめる青い体を持つ、もう一人の巨人だつた…。

「あれは…」

そうつぶやく果南の前で、うずくまっていた巨人はすつと立ち上がると怪獣の方を向き、くいくいつと手招きをして怪獣を挑発する。

すると怪獣はガイアを放り投げると、アグルへと突進を行うが、アグルは高速移動で怪獣の背後に回り込むと怪獣の背に回し蹴りを見舞う、すると体制を崩した怪獣は今度は飛び上がり攻撃を仕掛けるが、最小限の動きでかわされ、尻尾を掴まれそのままジャイアントスイングをくらい、かなり堪えたのかすぐには起き上がれなかつた。

するとアグルは右腕を掲げ、エネルギーを額のクリスタルに収束させる、腕を振り下ろしそのエネルギーを怪獣めがけて放つ。

それをまともに受けた怪獣は粉々に爆散するが、付近にはまだ操られていた人々がいたため、ガイアはとっさに人々の盾となつて爆発から人々を守るが、アグルはその様子を冷ややかに見つめた後そのまま飛び去ってしまった。

「青いウルトラマンも、私たちの味方なのかな…?」
そうつぶやいた果南にこたえるものなどどこにもいはしなかった…。

「本当に覚えてないの?あの日の放課後のこと」

「そうなんだよね、気が付いたら屋上に倒れてて…」

「私も、教室でクラスのみんなどいたはずだったんだけど、気が付いたら夜になって…」

後日、学校やA q o u r sのメンバーにあの日のことを聞いても誰一人として操られていたことはおろか、電話に出たということすら覚えていなかった。

「マルたちみんながおかしくなった後大変だったずら。でも、最後はどうなったのか覚えてないんだ…」

「ルビィも…」

「私もよ、はっ…まさかこれも天界の仕業…!?!」

「街の人も覚えてないって言ってたし、ほんと不気味だよね」

そんな感じで誰一人として覚えていなかった。もちろん、遥がガイアに変身したことすらも。

「まあとにかく今は最高のパフォーマンスをすることに集中しよ!」

「ヨーソロー！せっかくみんなに手伝ってもらって準備してきたしね」

「撮影は僕が、任せてくださいみんなスタンバイOKです」

「それじゃあいこう！」

新曲のタイトルは『夢で夜空を照らしたい』その曲名の通り、夕暮れの空を照らす無数のスカイランタン、それはこの街のよさに気が付き、そしてそこに住む人々の協力によって作られた景色だ。

ここに住む人たちの温かさ、優しさ、それに触れたことよってこの景色は作られたのだ。そしてこの景色を失わないために、学校を残すために彼女たちのスクールアイドルとしての活動はこれから続いていくのだ。

第11話 アグル対ガイア／T O K Y O

湊博樹はアグルの力を使い地底へと潜り、そこで眠っている怪獣の頭部に何やら装置を取り付けていた。

「この怪獣…『ゴメノス』にパーセルを使って…やはり人類を滅ぼすことですか、地球は救えない」

そう言う作業が終わったのか再びアグルへ変身し地上に戻る。

「この前のPVが5万回再生!?!」

「本当に!?!」

夏服に衣替えをし、セミの鳴き声が聞こえ始めた日の放課後、暑いのでうちわで涼む千歌に曜がそう聞き返すと、PCに張り付いていた一年生組から善子が細くの説明を入れてくれた。

「ランタンが綺麗だって評判になったみたい」

そしてそのPCの画面の隅にランキングが表示されており。

「99位!?!」

「ずらら!?!」

99位、その文字を見た梨子と花丸がそれぞれ驚きの声を上げる。

「キタキター!それって全国でってことでしょ?全国に5000いるスクールアイドルの中で100位以内ってことだよね!?!」

そう言って詰め寄る千歌の隣で梨子も「一時的な盛り上がりってこともあるかもしれないけど、それでもすごいわよね」そう言って喜ん

でいた。

「ランキング上昇率では一位」

「これはすごいよ」

ルビイがさらに情報を提示するとそれに遥がすごいと感想を述べる。

「これなら、ラブライブで優勝もできる気がする」

「そんな簡単じゃないでしょ」

「それでもできる気がする」

千歌はこれなら優勝できる。そう思ったようだが梨子はそんなに甘くないと苦言を呈するが、それでも千歌の思いは変わらなかった。「でもまだ上はいますからね、簡単ではないですけど…全然狙える位置まで来たんじゃないですか?」

その近くで遥ももしかしたら…と、そう思っていた。

そんな時PCに一通のメールが届いたので、ちようと操作していたルビイがすぐさまそのメールを開こうとする。

「まつてルビイちゃんこういうのは怪しいっ…て…」

この前の電話のこともあったのでとつきに引き留めようとする遥だったが、メールをそのまま開いてしまう。そしてそのメールに記されていた内容は。

「Aqoursの皆さん、東京スクールアイドルワールド運営委員会…って書いてあります」

「何焦ってんよの遥」

「い、いやあこの前のがトラウマになったみたいで…」

ルビイがメールのタイトルを読み上げるとそのとなりで善子が遥に対して怪訝な視線を向けながらそう言うのと、遥は正直に答えるしかなかった。

「東京ってあの…東にある都…」

「なんの説明のもなっていないけど…」

思ったことをとりあえずそのまま口に出したような言いぶりの千歌に梨子はそう返すと、周りの面々も千歌を少し覚めたような目で見つめた後、「東京だ!!」そう声を揃えて叫んだ。

千歌たちにとっては憧れの地、そして梨子と遥にとっては少し前まで生活していた土地だ。

「東京…か…」

「一体何がどうしたの…?」

十千万に集合して東京へ前日入りして観光しよう。そういった話になったので集合場所の十千万へ家が近いこともありほかのメンバーより早くたどり着いた梨子は、千歌の格好を見て思わずそう呟いた。

遥は女性のファッションは全く解らないのだが、一つだけハッキリ解ったのは、ダサイ。あまりにもダサイという事だった。どんな格好だったかは伏せさせていただけが。

「かわいーでしょ?」

恐ろしいかな本人にそんな自覚は一切無いのだった。遥は思わず「東京行くくらいで何をそんなに…」そう呟くと千歌はすぐさま反応し。

「梨子ちゃんと遙くんはいいよ、内浦から東京へ行くなんて一大イベントなんだからね?」

そう言うのだった、その後方、暖簾の影で笑いを必死に堪える美渡が言えたので、(ああ、犯人はこの人か…) そう気がついた。

「おはようございます」

一体どうしたものかと思っていたところで花丸とルビイの声が聞こえたので彼女達にもなにか言って貰おうそう思って2人の方を振り向いた遥は絶句した。

「どうでしょう…ちゃんとしていますか?」

そう言ったのはルビイだったのだが遥の目には千歌とどっこいどっこいに見えなかった。あの生徒会長は止めなかったのだろ

うか？もしや彼女もこういう感性なのか？そう思わずにはいられなかった。

「これで渋谷の険しい谷も大丈夫ずら？」

そう言ったのは花丸だった、彼女は前2人と比較すると奇抜ではないのだが一体どこに探検に行くのか？そう聞かずには入れなくなるような格好だった。

「何その仰々しい格好…それに渋谷は険しくないよ…？」

遙がそう言うと2人は「ガーン」と言って驚愕していた。それを千歌がぷくくと笑いながら言った。

「2人とも地方感丸出しだよ？」

「あなたもよ」

「ええええええ!？」

梨子に冷たくそう返されて千歌も驚愕するのだった。

「遅いなあ…」

沼津駅前でスマホを見ながらそう呟く曜、それもそのはずみんな1度家に戻って着替えてから向かっているのだから。

そんなことは知らない曜は視線を駅前にできた人だかりに向ける、そこには割と普段通りなゴスロリ調の服に身を包んだ善子がいた。いや、それだけなら人だかりなどできない翼を背負ってやたら長い付け爪をしてさらに意味は解らないが顔面の白塗りメイク：絶対知り合いだと思われたくない。だから声をかけずに千歌たちの到着を待っていたのだ。

「善子ちゃんも…」

「やってしまいましたね…」

「善子ちゃんもすっかり墮天使ずら」

そうやって先ほど普段通りの服装に着替えてから出直した三人が口々に言い善子のことを笑うが、さっきまでのあんたらも五十歩百歩

だ。そう口から出そうになるのを遙はこらえたが、こちらに気が付いた善子が。

「善子じゃなくて…ヨハネ!!」

そう叫び腕を広げたものだから周囲の人だかりはびっくりし、一気に離れて行ってしまった。

「せっかくのステージ！たまりにたまった墮天使キャラを開放しまくるのよ」

そう宣言するが、遥からしてみればもうそこは好きにしていいでその通報されかねない格好は辞めてください。そう思うしかなかった。

「遥君、そう言えば許可が取れなかったから今回はこれないんだよね？見送りに来てくれてありがとう」

「これくらいしできませんが…頑張ってきてください！」

曜から見送りに来たことへの礼を言われるが、今回はあくまでステージに上るA q o u r sの6人への招待だったこともあり、遥は今回同行できなかつたのだ。

「ありがとう！頑張ってくるね」

そんな会話をしていると、千歌の同級生が差し入れをもって見送りに駆けつけてくれた。

「これクラスのみんなから、これ食べて浦の星のすごいところ見せつけてきて！」

「わぁ〜ありがとう」

そう言って嬉しそうに受け取る千歌の後ろでほかのメンバーも「頑張ってくる」そう口々にメンバーはそう言うのと、電車に乗って東京へと旅立っていった。

東京へ旅立っていったメンバーを見送った遙は、沼津に用事があるといって、ここまできるところには志満にみんな車で送ってもらったのだが、帰りは自分で変える旨を伝えていたので、すこし歩いて回ろうかと思っていると、ある人物と目が合った。

「あれ？黒澤先輩？」

「はっ遙さん!?どうしてここに?」

「それはみんなの見送りですよ、先輩も直接言っただけだよ、よかったのよ」

「私はただこちらに用事があったてきただけですわ…」

なぜここにダイヤがいるのか?見送りなら一緒に来てよよかったのに、そう思っただけ声をかけた遥だったが、ダイヤは口元のホクロを人差し指でかきながらそう答えた。

「それより遙さん、一つだけお願いしてもよろしいでしょうか?」

「なんですか?」

突然遥に真剣なまなざしでそう告げるダイヤに、遥は少しだけ困惑するが聞く姿勢に入る。

「今回のイベントで、皆さんは大きな壁に直面すると思います…それでもあなたには彼女たちを支えてあげてほしいのです。」

「それって…どういうこと?」

確かに大きなイベントにいきなり出れば全国のレベルというものを目の当たりにするだろう、でもどうして彼女の口からそんな言葉が出てくるのかわからなかった。

「きつと解る時がきます、その時は、お願いいたします」

そう言っただけ彼女は遥に頭を下げる。

「大丈夫です、僕はA q o u r sのマネージャーですから。それが僕の役目です」

「ありがとうございます」

もしそうなら支えるのは自分の役目だ、そう言うたダイヤも安心したように微笑む。

「でも、どうしてですか?先輩はあんなにスクールアイドルに反対してたのに…」

「それは…今はまだお教えできませんが、時が来ればお話ししたいですわ」

どうして反対していたのか?反対していたのにどうしてそんな心

配をするのか？そう思ったからこそその質問だったが、今はまだ教えられない。それが彼女からの答えだった。

「わかりました、なら今は聞きません。でもその時はみんなに話してあげて頂けませんか？」

「もちろん、その時は皆さんにお話しいたしますわ」

「ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとうございます」

そんな会話をしばらく交わしたのち「また学校で」そう言ってダイヤと別れようとしたところで、突然あたりに地響きが起こる。

「な、なんですよ!？」

「地震？いやこれは…」

地響きが起こり、それによってあたりはパニックになるその刹那、街並みから外れた山岳地帯より、崖を崩して怪獣が現れた。

「あれは…」

「あれは『ゴメノス』地底に住む怪獣だよ」

ふと後ろから遙のつぶやきに対する答えが返ってくる、振り返るとそこにいたのは湊博樹だった。

「あなたは…」

「博樹さん!？あなた今までどこに行っていたんですの？果南さんも心配していたんですよ」

「久しぶりだなダイヤ、まさかここで会うとは思わなかったよ」

まさかこの二人は知り合いなのか？そう思った遙だったがすぐに別の問題に気が付く、ここにダイヤがいるとここで変身できない。怪獣を野放しにしてしまうことになる。

「あの怪獣はこの近くにある最近設立された怪獣の対策のために作られた基地を襲うのさ」

「どうしてそんなことがわかるんです？」

怪獣の目的を言う博樹にそう遙が問い返すと、彼は何でもないようにこう返した。

「そうすることで人類の抵抗力を弱めるのさ、そうすることで地球を救うことがより現実的になるからな」

地球を救うには人類は必要ない、その姿勢を崩さない彼にとって、あの怪獣が街を襲おうがなんでもないかのようだった。するとそんなことを考えているとは知らないダイヤが。

「何を言っているんですの？それにどうしてあの怪獣について知っているんですか？」

そう口をはさんだダイヤに、博樹は「昔なじみだから」そう前置きをして、理由を教えてくださいました。

「おれが作った装置、パーセルをあの怪獣の頭部に取り付けている、それでそうするように仕向けたのさ」

「そんな…」

天才の彼にとって、そんな装置を作ることは難しいことではないのだろう。だがそんなことが許されるはずもない、そう思いさらに食って掛かろうとするダイヤだったが何かを言う前に遥が引き留めると。

「人間は変われます、今のままだとあなたの言う通りになるのかもしれない、それでも人は変われるんです！どうしてそんなことができるんですか？」

「それはいつだ？今日か？明日か？そんな曖昧なものにすがっても地球は救えない、こうするしかないんだ！」

一瞬苦しそうな表情をしながらそう言い返した博樹に何も言えなくなる遥とダイヤだったが、博樹はそのままヘッドセットのような道具を取り出すと、音声で怪獣へ指示を出す。するとその通りに怪獣は基地を襲うべく動き出す。

すると戦闘機が現れ、怪獣との戦闘に入った、恐らく基地の防衛を最優先に動くことになったのだろうが、街が近い上にまだ非難する人が多い中容赦ない攻撃を怪獣へ向けていた。

「先輩、早く避難してください」

「遥さん？あなたはどうするんですの？」

「僕が彼を止めます…」

「止めるといってもどうやって…？」

このままでは被害が出る、その前に何とかしたいがダイヤに自分がガイアだということがばれるわけにはいかない、そう悩む遥だった

が、怪獣を倒すべく現れた戦闘機が現れるが、怪獣には歯が立たず。あろうことか流れ弾がこちらに飛んできた。

「なっ…」

突然の状況に動けなくなるダイヤだったが、彼女を見捨てることは絶対にできない。そう思い遥は悩みを振り切つてエスプレンダーを突き出し叫ぶ。

「ガイアー!!」

遥の身体は赤い光に包まれると流れ弾のミサイルを破壊し、そのまま怪獣へと向かっていく。

するとその赤い光からガイアが現れ、怪獣に蹴りの連続攻撃を浴びせ、怪獣を吹き飛ばす。

「そんな…遥さんがウルトラマンだったなんて…」

そうつぶやくダイヤの横で博樹は「ゴメノス、ガイアにかまうな」そう指示を飛ばしていた。

「博樹さん、もうやめてください。こんなこと…」

「そうよヒロ、やめましよう?」

そう言つて現れたのは鞠莉だった。博樹は鞠莉を怪訝な目で見ただ後、「どういう意味だ?」そう言つて彼女を睨み付けるが、彼女は臆することなくこう続けた。

「パーセルはマリーが使うから、ヒロはガイアを止めて? そうすれば目的も果たしやすいでしょ?」

「鞠莉さん? どうしてそんなことを!」

鞠莉は博樹に協力していたのだった、そんなことはもちろん知らないダイヤは彼女のいうことが理解できなかった。だが博樹はパーセルの装置を外すと鞠莉に渡した。

「確かにそうだな、ゴメノスはお前に任せた」

そう言うのと右腕に装着したアグレイターを掲げると、そこから青い光が迸りアグルへとその姿を変えた。

ゴメノス相手に有利に戦闘を進めていたガイアだったが、突然現れたアグルに突き飛ばされ、アグルとの戦闘に入る。

ガイアはそのつもりは無かったのと、完全に不意を突かれたので、

アグルの攻撃に防戦一方になってしまおう。

「鞠莉さん？本気であなたも博樹さんと同じことを考えているのですか？」

「それは違うわ」

まさかあんなに学校を愛している彼女が学校はおろか人類に対して博樹と同じことを思っていたのか？そう問いただすダイヤに、鞠莉は否定の言葉を述べる。

「ならどうして…」

「二年前…ヒロが変わってしまったヒロと留学先でたまたま再開したんだけどね、やっぱり私は果南とダイヤと同じようにヒロも大切な友達だと思ってる、だからまた四人で笑いあえるようにしたいの…」

そう言う鞠莉に対して「だったら…」とダイヤが言い返そうとするが、鞠莉はそれを止め、震える声で。

「ヒロも簡単には変わらないのよ…だから私は協力したし、それが無理だつて気づいて戻ってきてほしい、でもこのままじゃ戻れなくなっちゃおう！私はそれが嫌なの…」

「鞠莉さん…」

すると鞠莉は、「ゴメノス、地底に帰って」そう指示をするが、戦闘機を振り切った怪獣は市街地に入りかけたところで硬直し、指示を受け付けなくなっていた。

「どうして？…どうしてなの…？」

装置がおかしくなったのか？そう思って色々試している鞠莉をダイヤは見ていることしかできない。

更に怪獣の後方では、アグルとガイアが戦っている、最初はやられていたガイアだったが、戦う気になったのか、反撃に出るがアグルが優勢なのは誰が見ても明らかだった。蹴りも拳も紙一重で避けられ反撃を受ける。

そしてついには首を掴み持ち上げられライフゲージが点滅を始めたガイアだったが、ついにゴメノスが動き出すと、頭部につけられていた装置に気が付き、腕でそれを破壊してしまった。

そしてニヤリと笑うと、ダイヤと鞠莉がいる場所へ火球を発射して

きた！

「ダイヤ危ない！」

「え？」

突然のことに反応できないダイヤをとっさに鞠莉が突き飛ばしたので、ダイヤは軽く擦りむいた程度で済んだが、鞠莉は頭を打ってしまったのか、頭から血を流してピクリとも動かない。

「鞠莉さん!?鞠莉さん、しっかりしてください」

そう言っただイヤは鞠莉に声をかけるが、彼女に意識が戻らない。

「嫌…そんな…」

そう震える声を絞り出す彼女とその隣で倒れる鞠莉の姿に爆発音で気が付いた二人のウルトラマン、アグルはその光景に茫然とし、ガイヤを離してしまう。

(そんな…許さない…絶対許さないぞ!!)

一方ガイヤはそのことに怒り狂った。

ガイヤは茫然とするアグルを全力で殴り飛ばすと、ゴメノスのほうに駆け寄ると尻尾を掴み街とは反対側に投げ飛ばすと、馬乗りになって怪獣の顔を殴る。

「もういいです…その怪獣も被害者です…ですから…」

もうやめて、その言葉をいいかけたダイヤだったが、ガイヤはそのままゴメノスから離れると両腕を広げエネルギーを頭部に集めると、その力を開放し光子の刃ーフォトンエッジーをゴメノスめがけて放った。

その一撃を受けたゴメノスは木っ端微塵に吹き飛ばしたのだった。

そして鞠莉とダイヤのほうを見つめるガイヤだったが、表情は変わらないウルトラマンの顔だが、どこか悲しそうに見えた。

『無事に東京について今旅館にいるわ、そっちはまた怪獣が出たらしいけど大丈夫だった？』

「よかったそっちは問題なかったんだね、こっちも町に被害は出ちゃったけど僕は大丈夫だよ」

『そう、なら安心したわ。』

梨子とその夜電話をしていた、あの後怪獣が出たというのはニュースにもなったらしく、みんな心配していたが、夜まで遙が電話に出なかったのだ。

あんなことになってしまいそれどころではなかった、というのが正直なところだったのだが、明日に本番を控えるみんなにそんなことは言えるわけもなく…。ダイヤと相談し、伝えないことにしたのだ。た。

「うん、こっちは大丈夫だから、みんなには応援してるって伝えて」

『ええ、解ったわ。それじゃあもう切るわね？おやすみ』

「うん、おやすみなさい姉さん」

そう言って電話をきったが、ため息が出た。

あの後変身を解いた遙は二人のもとに向かい、すぐ救急車を呼んだのだが。鞠莉は集中治療室に連れていかれ、遙とダイヤはその前でただ待つことしかできなかった。

二人の間に流れる沈黙ののち、先に口を開いたのはダイヤだった。「いつからですか？あなたがウルトラマンとして戦っていたのは…？」

「入学式の日…ですかね？どうして僕だったのかは、わからないんですけど…」

「そうですね…、そのことはお姉さんたちは知っているんですの？」

「いいえ、誰にも教えてません…だから、誰にも言わないでもらえると、うれしいです」

「わかりましたわ、そのお気持ちは、わかりますから…」

「ありがとうございます…」

そう言っ頭を下げる遙だったが、ダイヤは「助けていただいたのは私のほうですから、お礼を言うのは私の方ですわ」そう言ったのだった。

「本当に、ありがとうございます」

そう言ったところで、治療中のライトが消え、医師が出てきた。

「先生、鞠莉さんは？」

立ち上がると医師のほうへ駆け寄りそう問いかけるダイヤに医師は、「幸い、命に別状はないが頭を負傷しているからね、まだ何とも言えない状況だ」

そう答え、鞠莉の家族へ連絡するといっってその場を離れたのだった。

そののち、時間ももう遅いからと病院を後にし、帰宅して、現在に至るのだった。

「絶対に許さない…アグル…」

そうつぶやく遙の表情は、とても険しいものだった。

次の日の朝、鞠莉が目を覚ましたと連絡を撃て、病院へ行った遙とダイヤ、そして怪獣騒ぎで怪我をした。という部分だけダイヤに伝えられた果南はすぐさま病室へ駆け込んだ。

「鞠莉、大丈夫!?!」

一番にそう発した果南に気が付いた鞠莉は、その直前まで窓から外を見ていた視線をこちらに向けると、不思議そうにこう言ったのだった。

「ごめんなさい、どちら様ですか？」

「「え?。」」

遙、ダイヤ、果南は頭の中が真っ白になり、何も言うことができなかった…。

12話 失くしたもの／突きつけられたもの

昨日の戦闘に巻き込まれて鞠莉が怪我を負ったのを目撃したアグルは、そこで動きが止まってしまいガイアがゴメノスを倒した後も暫く動くことができなかった。

人間に価値は無い、人類は滅ぶべき、口でそう言っているもやはり鞠莉やダイヤ、果南とは長い付き合いであり、やはり彼女たちが傷つくことを心のどこかで恐れていたのだ。

だがそれを自覚した時にはもう遅すぎた。ガイアが変身を解いた後に自身も変身を解き、救急車で搬送される鞠莉を遠目に眺めた後、破損したパーセルをそのまま放置されていたことに気が付く。

このデータを活かせばもつと効果的なものを作れるのかもしれない、だがそうしようという意思は全く浮かんでこなかった。

彼の中にあっただのは後悔と、操ることではなく、怪獣たちの意思によつて人類の滅亡も行われるべきだという発想だった。

だから彼はデータを保存してあるチップをそのまま踏み割るとどこかへと去っていった。

場所は戻って病院。鞠莉が目を覚ましたとの連絡を受けて病室に向かった遙、ダイヤそしてダイヤから昨日のことを聞いた果南の三人だったが、鞠莉には不思議そうな顔で「どちら様ですか？」そう告げられたのだった。

「鞠莉さん、ふざけている場合ではないのですよ？」

「そうだよ、流星に怒るよ」

ダイヤと果南は口々に言うが、鞠莉の表情は悲しげなものとなり：「ごめんなさい、本当に解らないんです…」

そうつぶやく鞠莉の声は震えていて、とても嘘をついているようには聞こえなかった。

「そんな…」

彼女になんと声をかけるべきか悩んでいた三人は、医師に呼び出され別室へと移動していた。

「鞠莉さんは、頭部に強い衝撃を受けたことによる一時的な記憶障害だと思われまます」

そう切り出した担当の医者に、ダイヤは「ということは、鞠莉さんは治るのですか？」そう一抹の希望をもって聞き返す。

しかし医者は暗い顔をしたまま首を横に振った。

「今のままでは、いつになるかも見当は付きません…なにかきつかけがあれば、戻るとは思うのですが、それが何なのか、どのタイミングでなのかも今の状況ではわからないのです」

そう告げられた。

「どうしたらいいんだろ？…どうしたら思い出してくれるのかな…？」

検査があるからと一旦面談は終わりとなったので気持ちを整理しようとして外へ出た三人だったが、果南がそう切り出した。

「悔しいですが、見当もつきませんわ…もとはと言えば私を庇ったせいなのに…」

「そんな、先輩は悪くないですよ！悪いのは…」

アグルがガイアの邪魔をしたせいだ。そう言いかけた遥だったが果南がそれを遮るように言い放った。

「悪いのはウルトラマンだよ、あそこで争わなきや鞠莉達が巻き込まれることも記憶を失う事もなかったんだよ」

「果南さん…」

果南に何かを言おうとしたダイヤだったが、果南のつらそうな表情を見ると何も言えなくなってしまうが、ちらりと遥のほうを見た。

果南は遥がガイアであること、ましてや博樹がアグルであることを知らないのだ。だが、今そのことを知ってしまったら果南は遥も博樹のことも許せなくなってしまうだろう。だからこそ何も言うことができなかった。

「そうです、悪いのはウルトラマン達です…」

そう言ったのは遥だった。

「僕はウルトラマンが許せない、あんなところで争ってみんなを危険

にさらしたウルトラマンが」

「遥…」

そう言った遥の表情はとても険しく、その声は震えていた。

「それに僕だってあの場にいたのに何もしてあげられなかった…僕はそれが悔しいんです…」

「そんなの相手は怪獣だよ？仕方ないよダイヤも遥も自分を責めないで」

果南は二人をフォローするためにそう言ったつもりだった。いや、実際そうなのだがウルトラマンの正体を知らない果南には知る由もなかった、その言葉が結果的に余計に遥を苦しめてしまったことを。「そうですね…」

遥はそう返したが、その表情は二人には見えなかった。

その後、鞠莉の検査が終わり、再び面会を行うか？医師からそう聞かれたが今の鞠莉になんと声をかけるべきか、気持ちの整理が付かないままだった三人はそれを断り帰路についた。

ちょうどその入れ違いで病院へと入っていく人物がいた。湊博樹だ、彼自身も責任を感じていたため、鞠莉の状態を確認しておこうと病室へと足を運んだのだ。

「どなたですか？」

病室の前までたどりついた博樹に鞠莉が中からそう声をかけたので、博樹は病室の中に入る。

頭以外にもけがのせいで包帯を巻いていたがその姿は比較的健康そうであったので安堵したのだが、その安堵もすぐに打ち崩される。「ごめんなさい、私記憶喪失みたいで、あなたのことも分からないんです…」

「…ッ！」

その言葉に顔を引きつらせる博樹だったが、鞠莉はさらに続けた。「さつき来た人たちにも同じよな反応をされました。悔しいですよね、きつと大切な人なのに名前すらわからないなんて…」

そこまで言ったところで、それを遮るように博樹はただ一言「すまない…」そうつぶやいたのだった。

「え？」

なぜ自分が謝られなければならないのか？それが藤儀でならないような反応をする鞠莉に博樹はつづけた。

「おれが君を巻き込まなければこんなことにはならなかった、だからこれは俺のせいなんだ。謝って済むことじゃない、恨んでくれてかまわない。だがこれだけな君に伝えておかなければと思っただから来た。」

そう淡々と語る博樹に彼女は微笑みかけると。

「そんな風に自分を責めないでください、何があったのか今の私にはわからないけど、あなたの辛そうな顔は見たくない、そんな気がします」

「そうか…」

そう励まされるも博樹はそれだけ言うとは病室を後にした。背後から鞠莉の「また来てください」そんな声があったが、振り返ることはなかった。

それに博樹はもう自身は戻れないところまで来ている、そう思っていた。

「だから俺は…もうこうするよりほかにないんだ」

その手にはアグレイターを強く握りしめていた。

「もうすぐ帰ってきますわね、千歌さんたち」

病院を出た後、それぞれ自分たちの家に戻った遙たちだったが、Aoursのみんなを迎えに行くべく沼津駅に移動すると、そこで再びダイヤと出会った。

「そうですね、思えばこの二日間いろんなことがあつてずっとあつてないような気すらします」

「そうですね、私自身整理が追いついていませんわ…でもひとまず忘れましょう、きつとこのままあつてしまえば、彼女たちに心配をかけてしまいますもの、このことは気持ちが落ち着いてからお伝えするべきだと思いますわ」

「強いんですね、先輩は…」

彼女たちに余計な心配はかけたくない、学校を残すためにと言つて活動し、その成果として東京のイベントに呼ばれた彼女たちには。そんな気遣いが見えるダイヤに対して遙はそう思った。

「遥さんも立派ですわ、今までずっと一人で戦つてこられたのですから。だからあまり自分を責めないでください、私でも相談くらいならできると思います。ですからご自身大事にしてください」

「わかりました、とにかく今はみんなにちゃんとおかえりって言います、後のことは今は考えません」

そういう会話をしていると、駅のほうから6人が出てきたが千歌のクラスメイト達のほうが先に千歌たちに「おかえり」と言つて駆け寄つていった。

「どうだった、東京は？」

そう聞かれた千歌は最初こそ「あゝ、うん…」となんとも言えない反応だったが、すぐ普段の様子に戻ると。

「すごかったよ、なんかキラキラしてた」

そう答えるのだった。それにほかの子らが「ちゃんと歌えた？」「緊

張して間違えたりしなかった？」などと質問を重ねてくる。

「うん、それは何とか。ね？」

そう曜が答えると梨子に目配せをし、梨子も「そうね」と合わせていた。

「ダンスのミスもなかったし」

「そうそう」

そう言って話を切り上げたのは千歌だった、遥は彼女たちが何かを誤魔化しているような雰囲気を感じ取ってはいたが、そこでは何も言うことはできなかった。

「今までで一番のパフォーマンスだったねってみんな話してたところなんだ」

「じゃあじゃあ、ラブライブ優勝本気で狙えちやうつてこと？」

千歌の言葉にクラスメイトの一人がそう反応すると、千歌の表情は固まった。そんなことには気が付かないクラスメイト達は興奮した様子で「そうだよね、東京のイベントに呼ばれるくらいだもんね」などと言っただけで盛り上がった。

千歌たちの様子に気が付いていた遥は何と言っただけで彼女たちに声をかけるべきか悩んでいるとダイヤは彼女たちのほうへ行き。

「おかえりなさい」

「お姉ちゃん…」

ただ一言いってほほ笑みかけるダイヤに最初に反応したのはルビィだった。すると彼女は涙を浮かべながらダイヤの胸に飛び込んだ。

そのまま泣き始めてしまったルビィの頭をなでながら「よく頑張ったわね」そう言うダイヤの顔はとても優しかった。

「おかえりなさい、姉さん」

「うん、ただいま。遥」

暫く姉妹の様子を見ていた遥も、ようやくおかえりと声をかけることができた。ただいまと返す姉もまたその表情は何とも言えないものだった。

「得票、0ですか…」

クラスメイト達と別れ、川辺に移動した彼女たちだったが、ルビイは疲れてしまったのかダイヤの膝を枕にして寝てしまっていた。そんな妹の頭をなでながらそうつぶやくダイヤに千歌は「はい…」とだけ返事をした。

「今のスクールアイドルの中ではやはりそう言うことになってしまったのですね…」

そうつぶやくダイヤに対して、

「先に行っておきますけど、あなたたちは決してダメだった訳ではないのです。スクールアイドルとして十分に練習を積み観客を楽しませるに足るパフォーマンスもしている」

なら何が足りないのだろうか？そもそもあれだけ活動に批判的だった彼女がこれだけの評価をAqoursに下してくれているのか？それがメンバーには分からなかった。

「でも、それだけではだめなのです、それだけでは…」

「どういうことです？」

そう聞き返した曜にダイヤはこう問いかける。

「7236…何の数字かわかりますか？」

「それはヨハネの…」

「違うすら」

「ツツコミ早ッ!!」

その問いに善子が普段の調子で反応するが花丸が即座に否定する。そんな様子を見ながらほほ笑んだダイヤは答えを述べる。

「去年、ラブライブにエントリーしたスクールアイドルの数ですわ、第一回大会の十倍以上」

「そんなに…」

そうつぶやいた千歌の表情はとても暗かった、実際ランキングに登録している数よりずっと多い、それなら今回のイベントに呼ばれなかったグループにもまだレベルの高いグループはいるのかもしれない、遙はそう思った。

「スクールアイドルは確かに、以前から人気がありました。しかし、ライブの開催によってそれは爆発的なものになった。A―R I S Eとμ'sによってそれは揺るがぬものとなり、アキバドームで決勝大会が行われるようになり、レベルの向上を生んだのですわ」

そう説明してくれるダイヤの話聞いて、やっぱりこの人はスクールアイドルが好きなんだな、そう思った。

「あなた達が支持されなかったのも、わたくし達が歌えなかったのも仕方のないことなのですわ」

さりげなく放たれた一言に一回は「え？」といった反応をする。

「歌えなかった？」

「どういうこと？」

そうそれぞれ反応するメンバーたちにダイヤは過去のことを語り始める、ルビィも気が付けば目を覚ましていた。

「二年前、すでに浦の星には廃校の噂がありましたね…」

ダイヤの口から語られたのは、二年前高校に入学したころに既に廃校の噂が立っていたこと、それを阻止するべく、当時μ'sに憧れていたダイヤはスクールアイドルをやってライブに優勝することで学校を有名にし、かつての音ノ木坂のように廃校を阻止しよう。と言ったものだった。

そして意外だったことは鞠莉は最初はスクールアイドルに興味がなく、ダイヤと果南が無理やり誘って仲間にしたことが語られた。

そしてA q o u r sと同じように東京でのイベントに招待され、ここで名前が売ればライブ優勝はより現実的なものにできる、そう思っただけでそのイベントに出たこと。

「でも、歌えなかったのですわ」

そう告げる彼女の顔は、とても悲しげだった。

「他のグループのパフォーマンスと、会場の空気に圧倒されて、何も歌

えなかった」

いや、実際悲しかったのだろう。スクールアイドルを夢見て活動を始めたのに厳しい現実に打ちのめされてしまったことが。

当初千歌たちがスクールアイドルを始めた時に批判的だったのは、自分たちと同じ苦しみを受けてほしくない。そんな優しさの裏返しだったのだろう…。

「あなた達は歌えただけ立派なのですわ」

「じゃあ、今まで反対してたのは…」

「いつかこうなることがわかっていたから…」

同じゼロという結果でも、実力を出し切って出た結果か、発揮できずに出た結果では意味合いは変わってくる、でもそれはなんの慰めにもならないし、そういつた意図はないのだろう。

ダイヤの口から明かされた、二年前の出来事、そして今のスクールアイドルの現実。それを受けて彼女たちはどうするのか？とにかく今日その答えを出す必要はないし、何よりみんなには休んで一度気持ちを整理する時間が必要だ。

ともかくその日は解散となり、家が近い曜と善子は徒歩で、ダイヤとルビィは家の車で花丸を送ってから帰るらしい。

梨子と遥は千歌と共に十千万の車で送ってもらうことになったのだが、車に乗り込もうとする千歌に背後から曜が声をかけた。

「千歌ちゃん、スクールアイドルやめる?」

こう聞くと必ず千歌は「やめない!」と返してくれる、千歌と曜のお決まりのやり取りだと言っていた。だが、今回ばかりは千歌は何も答えず、そのまま車に乗り込んでしまった。

「早くお風呂入っちゃいなよ?」

帰りの車を運転してくれて美渡にそう言われるが千歌は屈みこん

でしいたけをなでていた。

「梨子ちゃんと遥君もちゃんと休んでね？」

「はい、ありがとうございます」

「千歌ちゃん、大丈夫？」

梨子は千歌にその声をかけた。千歌がきつと一番つらいはずそう思っただけの心配だったが千歌は梨子のほうを振り返る。

「うん、ちよつと考えてみるね？わたしがちゃんとしないとみんな困っちゃうもんね」

そう悲し気な笑みを浮かべて語る彼女に対して、なにも声をかけることができなかつた。

「ねえダニエル、記憶喪失ってどうやったら治ると思う？」

『どうしたんだい突然？』

「ちよつとね…」

その夜、ダニエルと連絡を取っていた遥だったが、アルケミースターズならなにか鞠莉を救う方法を知っているかもしれない。そう思った遥だったが、ダニエルは。

『うくん、こうすればぜったい思い出す。そういった方法は今のところ聞いたことないね。悪いけど僕はわからないな、こういう事例に詳しくそうな知り合いいるから今度聞いてみるよ』

「ほんとに!?!ありがとうございますよ」

『それくらい大したことじゃないよ』

そう言っただけで笑ってくれるダニエルを見て、遥は少しだけ気持ちが軽くなった気がした。

一方博樹はアグルの力を使って、あらかじめ手に入れた世界中に眠っているであろう地底怪獣の位置情報を元に世界を飛び回り、地底にエネルギーを送り込んでいた。

「もうこれしかない…怪獣たちの力で地球を…その結果が人類の滅亡でも構わない！もう俺は止まれないんだ」

そうつぶやく博樹だったが、何度もアグルの力を短時間で行使したせいか、顔色は悪かった。

そしてその情報はダニエルのもとにも届いていたのだが、こればかりは無駄に不安を煽るだろうと判断され、遥の耳に入ることは無かった。

13話 くやしくないの? / NEVER SURR
ENDER

次の日の朝、結局眠ることもできなかつた梨子はベランダから海を見ると、千歌が海へと昨日の格好のまま海の中へと入っていきこうとしているのが見えた。

恐らく昨日家へと帰ったのはいいがそのまま風呂に入ることも眠ることもできなかつたのだろう。梨子自身も気持ちの整理がつかずぼーっとしてそのまま気が付けば外は曇ってはいたが、うつすらと明るくなっていたのだった。

こんな時間からどうしたのだろうか? 昨日のこともあつて心配になつた梨子は海岸へと飛び出したが、千歌の姿は見えない。

「千歌ちゃん! 千歌ちゃん!」

もしかして…そんな恐怖を感じた梨子は彼女の名前を呼び続けた、水中に音は届きにくいけどそれでも呼び続けた。

すると近くで水しぶきをあげて千歌が出てくる。

「あれ? 梨子ちゃん?」

そう言ってくる千歌の表情はいつもと変わらないように見える。

一体私の心配は何だったのか? そう思うと大きなため息が出てしまった。

「いったい何をしてたの?」

「何か見えないかなあつて思つて」

「え?」

「ほら、梨子ちゃん海の音を探して潜ってたでしょ? 私も何か見えないかなあつて」

梨子がかつて海の音を求めて海に潜っていたときも彼女には今の梨子と同じように見えていたのかもしれない。そう思った。

「それで、何か見えたの?」

そう聞くと彼女は笑みを零す、きっとあの日のことを思い出したのかもしれない。

「ううん、何も見えなかった。でもだから思ったんだ、続けなきゃって」

そこで彼女の表情は一変して曇ってしまいが、彼女はつぶけた。「わたし、まだ何も見えてないんだって、ここでやめても0は0のままなのか…1になるのか、10になるのか…ここでやめたら、解らないままなんだって…」

これは曜に昨日聞かれた、「辞める？」に対する千歌の答えだった。「だからわたしは続けるよ…スクールアイドル。だってまだ0だもん…」

そう言っとうつぶく彼女は顔の前に拳を握りしめるとさらに続ける。

「あれだけみんなで練習して、衣装も作って、PVも作ってがんばってがんばって…輝きたいって…なのに0だったんだよ？悔しいじゃない！」

そう叫ぶ千歌、きつと昨日からずっと口にすることができなかつた、彼女の本当の気持ちだった。やつと、やつと本当の気持ちを口にすることができたのだった。

「差があるとか、昔と違うとか…そんなのどうだっていい！悔しい…やっぱりわたし…悔しいんだよ…」

そう言う千歌の頬には涙が伝っていた。梨子は自身が濡れることもきにせずそんな千歌を後ろから抱きしめてのだった。

「よかった…やつと素直になれたね…」

「だってわたしが泣いたら、みんな落ち込むでしょ？今まで頑張ってきたのに…せつかくスクールアイドルやってくれたのに…だから…」
自分が言い出しっぱだったから…自分が誘ってみんながそれに応じてくれたから…だからその自分が泣いてしまうわけにはいかない。そう思っただけで我慢していたのだ。

「ばかね、みんな千歌ちゃんのためにスクールアイドルをやってるんじゃないの。自分で決めたのよ？わたしも」

梨子は千歌から離れるとそう言った。すると砂濱のほうから「おい」と声がするのでそちらを振り向くと、そこにいたのは曜、ルビィ、

花丸、善子の4人がいた。

「曜ちゃんもルビィちゃんも花丸ちゃんも、もちろん善子ちゃんも」
「でも…」

「だからいいの、千歌ちゃんは感じたことを素直にぶつけて…声に出して」

そう言つて梨子は千歌の手を取った。

「みんなで一緒に歩こう？一緒に…」

みんなで同じものを見て、それぞれ思うことを素直にぶつけ合つて、そうして一緒に進んでいこう。

「今から0を100にするのは無理かもしれない、でも0を1にすることはできるかもしれないと思うの、私も知りたいの…それができるかどうか…」

「うん…」

泣いていた千歌だったが、そこでようやく表情に笑顔が戻った。きつともう大丈夫、これからはもつと上を見て頑張つていける。そう思えたのだった。

そして気が付けば結構な時間が経っており、車もちらほら通過し始めていた。そして空は曇り空から一転、太陽が空には輝いていた。

そしてキラキラとした光の結晶のようなものが降り注いでいた。

「なにこれ…？」

「綺麗…」

誰も見たことがない結晶の美しさに周りは夢中になるが、遥だけは何か嫌な予感がしていた。

「私、…ク…ルア…ルやめようと思う」

「どうして？まだ引きずっているの？…で歌えなかったくらいで…」

辞めようと思う、そう言ったのはどこの学校だろうか？制服に身を包んだ少女だった。

そのことに対してそう問いかける金髪の少女がいた。

「ま…、りゆ…くの話が来てるんでしょ？行くべきだよ」

「その話は断ったって言ったでしょ」

「だ…やも同じ意見、続けても意味はないって…終わりにしよう」

そう言うところらへと背を向けて去っていくポニーテールの少女ともう一人、黒髪ロングの少女に金髪の少女はその背に手を伸ばすが、それは届くことは無かった…。

「…夢？」

病室で目を覚ました鞠莉だったが、きつと記憶に関係する夢を見ていた。そんな気がするが内容はしつかりと思い出せない、だが鞠莉の頬に、つーつと涙が流れていた。

「あれ？わたし…なんで涙が…？」

何故か悲しい気持ちになっってしまう、きつとあの夢は自分にとってつらい出来事の記憶だったのだろう。

そう思っていると病室に来客が入ってきた。

「おはようございます、鞠莉さ…どうされたのですか!？」

そう言っ駆け寄ってきたのはダイヤだった。だが鞠莉はただ内容は覚えていないが夢のせいだろうということを伝えるとダイヤはほっとしているようだった。

やはりダイヤは鞠莉のことが放っておけず、昨日も遥たちと別れた後もう一度会っていたのだった。

だから鞠莉はダイヤから果南と自分は友達だということ、遥は今年入ってきた後輩だという事など一通り教えてもらっていた。

「ごめんなさい、心配させちゃって…それに今日も会いに来てもらっちゃって」

そう言って鞠莉はダイヤに謝るが、以前の…記憶を失う前の鞠莉ではあり得ないであろうダイヤに敬語を使う姿に、ダイヤも胸を締め付けられるような気持になる。

「いえ、友達ですから心配するのは当然です」

そう言っただけほほ笑みかけるダイヤだったが、鞠莉の表情は浮かぬままだった。

「まさか私たちが東京に行ってる間にそんなことが…」

場面は十千万へと移り、A q o u r sのメンバーにこの前の出来事を伝えた。

本当は真っ先に伝えたかったのだが、みんなの状況を考えて後回しにしていたのだった。

「ごめん、本当はすぐに伝えるべきだったんだろうけど…本番前に心配させたくなくて…」

「ううん、ありがとう。わたしたちのこと考えてくれたのことも大丈夫、きつとすぐ良くなるよ」

黙っていたことを謝る遙に千歌はそう言っただけほほ笑む、他のメンバーも誰一人として遙を責めることは無かった。

「でも、記憶喪失だなんて…」

「どうすれば治るのかな…?」

「こうなったらヨハネの魔力で…」

「思い出の場所に行ったりするといいつて本で読んだことがあるすら」

曜とルビイの心配の隣で善子はいつもの調子で答えるが、周りは相手にせず花丸は本で得た知識を伝える。

「無視!？」

「ちよつと今まじめな話してるんで…」

突っ込みを入れる善子だったが遥がそれを遮る。

「とにかく、お見舞いに行ってみない?」

そう提案したのは梨子だった。それに全員が応じたことでひとまず病院へと向かうことになったのだが…。

「ごめんなさい、やっぱり思い出せないわ…」

「そうですよね…仕方ないですよ…」

学校の理事長として、A q o u r s の活動を認め、応援してくれていたこともやはり覚えてはいないのだった。

「あの…いつ頃になれば、外に出られるんですか?」

そう恐る恐る聞く花丸に対して鞠莉は

「もう少ししたら、外出できるみたい、でももうしばらくは経過観察で入院だって先生はおっしゃってました」

そう答えるが、その顔は穏やかなものだった。

「もし外に出られるようになったら、思い出の場所に連れて行ってください、そしたら何か思い出すかも?」

そう遥が、みんなより先に病院へ来ていたダイヤへと伝える。

「なるほど…解りましたわ」

「そこにいけば、思い出せる…」

そう囁みしめるように鞠莉は呟くが、あくまで可能性があるというだけだったが少し希望が見えたようで彼女は嬉しそうだった。

「みなさん、ありがとうございます」

「さて、あまり長くいますと他の患者さんの迷惑になるかもしれませんし、今日は帰りましょう」

そう提案するダイヤに賛成し、その日は解散になった。「また来ます」「鞠莉さん、また今度」そう口々にするメンバーたちに「ありがと

うございしました、また来てください」そう鞠莉も返すのだった。

「遙さん、みなさんに伝えたのですね」

「はい、もうみんな大丈夫だと思ったので」

昨日は伝えないということでも話をしていたが、遙の判断で伝えたことをみんながお見舞いに来るまで知らなかったダイヤにそう伝える。

「そうですねか…ありがとうございます、これからもみなさんを支えてあげてください」

「わかってます、だってマネージャーですから」

「ふふっ、そうですね」

思わず笑ってしまうダイヤをみて、遙は思った。彼女自身も沢山のことや一度に起こりすぎて大変なはずなのに、こうやって周りを気に掛ける彼女がすごいと。

ほかのみんなも談笑しながら駅まで移動し、そこで沼津に住んでいる曜と善子とは別れ、黒澤姉妹には家から迎えが来たらしく、花丸も送ってもらおうとそこで別れた。

こうして遙と千歌、梨子で電車で帰ることとなった。

「鞠莉さん、ちゃんと思いい出せるよね…」

「千歌ちゃん…」

病院では表に出さなかったが、やはりショックだったし心配なのだろう。

「果南先輩も心配してました…それにウルトラマンが怪獣そっちのけだったせいだって」

「そう…」

全員の前では明かさなかったことをここで口に出す遙だった。

「ねえ遙はどう思ったの？」

「そう聞いてきたのは梨子だった、彼女の発言の意図が読めなかったが、遙は正直に答えた。

「怖かった…でも、先輩のこと諦めたくないから…僕は治るって信じ

てる」

「そっか…」

それ以上梨子何も言わなかった。

「あの日目の前で先輩がけがするところ見て、何もできなかったけど…でももう同じ思いはしたくないから、だから頑張って前を向くよ」

「そうだね、今は前を向いて進んでいかなきゃね」

そう言った遙に千歌も同意し、ひとまず暗い話ばかりするのはやめよう、そういうことになった。

その夜

「ダニエル、今日僕が見た結晶なんだけど…なんとかして調べられないかな?」

『そうだね、他の地域で同じようなものを見たって話は聞かないし僕も興味があるよ、君たちの近くに住んでるメンバーになんとかサンプルを入手できないか聞いてみる』

「ありがとうダニエル」

今朝見た光の結晶がなんなのか気になった遙は、ダニエルと連絡を取って調べてもらえるように頼んでいた。

『それにしてもそっちは最近色んなことが起こって大変だね』

「そうなんだよ、みんな普段通りに生活してはいるけどやっぱり不安だよ」

『そうだよね、僕たちも早くみんなが安心できるように頑張るよ』

「じゃあアルケミースターズも色々技術提供しているのかい?」

『そうだね、怪獣を追い払うための兵器とかね、本当はこんなもの作りたくはないけど…みんなの生活のためだ』

「そっか…」

自分の作ったものが命を奪うかもしれない、科学者としてそれは嫌なんだと前にダニエルは語っていた。そんな彼もまた、みんなのために戦っているのだ。

『悲しそうにするなハルカ、ともかくまた何かわかれば連絡する、君の観察眼は確かだ今回のもきつと何かあるはずだ』

「わかった、お願いするよ」

そう言って通話を終了したが、このときの遥はこれが後に恐ろしい存在であったことを知ることとなる…

「お姉ちゃん…」

「どうしたんですの？ルビィ」

黒澤家ではルビィとダイヤが話していた。

「ルビィね、怖いんだ。今までは怪獣が出たってウルトラマンさんが助けてくれたた…でも鞠莉さんがけががしちゃって…」

今まで周りの人間含めて自分も危険な目にはあわずに済んでいた、でもそれはたまたまだつたと気が付いてしまい、またいつ現れるかわからない怪獣への恐怖だった。

ルビィだけでなく、おそらくみんなが抱えている不安、そう感じた。

「そうかもしれません、でもそれは必ず安全でないとしても不安におびえていても仕方ないでしょう？私達はそれでも精一杯生きていかなくはならんです」

そう諭すように言うと、ルビィもそれ以上は何も言えなかった。

「それに皆さんがいます、皆さんといればきつと何が起きても乗り越えられますわ」

「そうだよね、お姉ちゃん…」

「ええ、ですからルビィ、気持ちを強く持つて」

次の日の放課後、A q o u r s は普段通り練習をしていたのだが、遥は先生に呼び出されていて練習には参加していなかった。

「それでさ、今度みんなでステージをやろうよ。鞠莉さんのために、もしかしたらきつかけになるかもしれないしね」

そう提案する千歌にメンバーも「いいと思う」とおおむね好評だったのでなるべく早い段階で実行しよう。そういう話になった。

「そういえばいつから外に出れるようになるんだろうね?」

そう言ったのは曜だった。

「今度の検査の結果次第って言ってたし、それが終わらないことにはわからないんじゃない?」

そう指摘する梨子に千歌は「じゃあそれがわかり次第予定を立てるってことで」そう提案し、一応それでいこうという風になった。

そして、その話を鞠莉にしようということになって、病院の近くまで来たのだが、突然空が曇り空になりワームホールが開き、中から怪獣が出現した。

その怪獣は二本足で歩行し、頭部には山羊を連想させるような立派な角が生えていた。

「また怪獣…」

「とにかく避難しないと」

そう言って避難しようという風になったのだが病院には鞠莉がいるから彼女も連れて行こう、そう思いついたん病院へと向かった。

「皆さん!? どうして…?」

看護師に連れられて車いすで運ばれている鞠莉に遭遇し、そのまま一緒に逃げることにしたのだが、怪獣は角から電撃を放ち、次々に街を破壊していく。

「あ…ああ…」

怪獣の街を破壊するさまを見て鞠莉がおびえ始めた、きつと記憶を失う直前のゴメノスからの攻撃を無意識化で焼き付けられているだろう。

だが周りはそんなことに気が付く余裕もなく、彼女を心配する声を飛ばす。

そして怪獣の雷撃がこちらへと飛んできたその時…

赤い光がそれを弾き、その中からウルトラマンガイアが現れた。

「ガイア…」

梨子がその名を呟くと、こちらを向いてかばうようにしてかかんでいたガイアはゆっくり頷くと立ち上がり、そのまま跳躍し怪獣の後ろへと回り込むと、尻尾をつかみ、人のいないほうへと放り投げる。

すると怪獣はすぐさま立ち上がり、ガイアへと突撃するが、ガイアはそんな怪獣を蹴り飛ばしそのまま角を掴むと巴投げの要領で怪獣を投げる。

すると怪獣は今度は尻尾を振り回して攻撃を仕掛けるが、一回目は尻尾の下を転がって躲かれ、二発目は逆に尻尾を掴まれそれを抱えるように投げられ転んでしまう。

しばらくガイアが優勢で格闘戦が進んでいたが、怪獣の力もかなりのものだった。

格闘だけでは分が悪いと悟ったのか怪獣は電撃を飛ばして攻撃するが、ガイアはそれを飛び上がって躲しそのまま降下する勢いのまま怪獣の頭を蹴り飛ばす。

そのまま攻めたてようと頭を掴むガイアだったが今度はそれを待っていたかのように掴まれた瞬間にガイアに電撃を浴びせる。

そしてその攻撃に怯んだガイアにさらに電撃を浴びせ続け、倒れたところを蹴り、ガイアが立ち上がれないようにする。するとガイアのライフゲージが赤く点滅を始める。

ようやく距離をとって立ち上がるガイアだったがさらに怪獣は電撃の威力を上げ、周りの建物もその攻撃によって炎上し、ガイアも炎の中に倒れてしまう。

そのままガイアはしばらくうめき声をあげ、立ち上がれずにいるのを見て、怪獣は勝ち誇ったような仕草を見せた後、とどめを刺すべくガイアへと歩み寄る。

「ガイア！ 負けないでッ！」

気が付けば梨子はそう叫んでいた。このまま負けるのを見ているのは嫌だ。その思いが突き動かしたのだ。

ガイアはその声が聞こえていたかは定かではないが怪獣が目前まで迫っているタイミングで跳ね起きると、右腕を左腕に合わせてエネルギーをためる。

そしてその腕を今度は右腕が縦になるように動かし右腕で左腕を抱えるようなL字を組むと、熱線を放つ。

その熱線―クアンタムストリーム―をまともに受けた怪獣はその威力によって10歩以上後退し、やがてその威力に耐えられず木端微塵に吹き飛んだ。

「やったガイアが勝ったぞら」

「うん、やったよ花丸ちゃん」

そう言つて喜ぶ花丸とルビイの隣で「よかった…」そう安堵する梨子だった。

ガイアもこちらの無事を確認しようとしてこちらへと歩み寄ってきたのだが。

「来ないで!!」

そう言つた声によって立ち止まる。

周りにいたみんなが思わず声のした方を向いたが、その声の主は鞠莉だった。

「来ないで」そういう彼女は怪獣の時より怯えているようだった。

「鞠莉さん、どうしたの!？」

そう言つてみんな鞠莉を心配するが耳に入らないのか「来ないで」そうしばらく繰り返した後意識を失ってしまった。

ガイアはそれ以上近寄ることはなく、そのままどこかへと飛び去って行った。

「一体どうしてあんなにおびえてたんだろ？」

そうつぶやく曜に答える人はいなかった。

14話 迷宮のルビイ／ガイアの怒り

「きつと鞠莉さんは無意識下で記憶を失う直前の事を覚えているのかもしれないわね…」

戦闘の後、学校へと戻った遥だったがちようどダイヤと遭遇した時に、表情が暗かったので何があったのかきかれ、鞠莉にウルトラマンの姿を強く拒絶されたことを話したのだった。

「そうかしれませぬね…思い出せないだけでトラウマになってしまっているのかも…」

「遥さんが悪いわけではありませんわ。ただ、怪獣やウルトラマンに対して強い恐怖を感じているのは間違いないでしょうね…」

そう遥に推論を述べるダイヤの表情も暗いものだった。

「そうですね…あんな目に合ってるわけだしこればかりは仕方ないのかもしれないね…」

「もつと気を使えたことが言えればいいのですが、ごめんなさい私ではあまり力になれそうにありませんわ…」

「いえ、先輩以外にこんなこと話せる人いませんから僕としては聞いてもらえるだけでありがたいです」

申し訳なさそうに話すダイヤに遥はそう言って笑いかける、それは遥の本心だった。

今まで誰にも正体を悟られないように、心配をかけないようにと思っただけにも明かすことができず、隠し続けていたのだがそのつもりはなかったとはいえ、最初に知ることになってしまったのがダイヤだったのは、ある意味幸運だったのかもしれない。

「そうですね？それならいいのですが…」

そう言っただイヤもそれ以上謝るような発言はしてこなかったが、どこか納得のいかないような表情をしていた。

彼女は恐らく遥が知る限りこの学校で一番まともな人だと思っただけ、最上級生というのと姉という立場にいるのもあって姉がいる遥にとっては色々打ち明けやすかったのかもしれない。

「それとずっと聞きたかったのですが、博樹さんとはどうしてあんな

風に争っているんですか？」

「そういえば、とってダイヤがずっと抱えていた疑問をぶつけてきた。」

「初めて会ったのも最近ですよ？でもその時からあんな感じの人だったから結構ぶつかっちゃうというか…」

「そうなのですね…」

「そう答える遥に対し、ダイヤはそう答えると寂しそうな顔をしてうつむいてしまった。」

「先輩たちは元々知り合いなんでしたっけ？」

「え？ええそうですね…二年ほど前まではよく四人一緒だったんですがクリシスが完成してからは疎遠だったんです、まさかあんな事を言うだなんて…」

「先輩…」

「以前鞠莉や果南にも聞いてはいたが現在の博樹の言い分、変わりようは相当ショックだったのだろう。だからこそ止めたいと思ったのだらうしそれだけ彼女たちにとって、湊博樹は大切な存在なのだ。」

「だから、あまり彼を責めないでくださいませんか？」

「え？」

「遥は彼に対する怒りを見透かされたようで動揺してしまう。」

「鞠莉さんが怪我を負ったときの遥さん…いえ、ガイアからとても強い怒りを感じました」

「それは…」

「でもきつと誰もあなた達が争うことは望んでないはずですが、それだけは覚えていてください」

「そうですね…それは判ってます、きつと分かり合えるきつと変わる…」

「それはきつと遥が胸に抱いていた事だった。でもあれ以来どうしてもそうなる未来を、想像することが出来ないでいるのも事実だった。」

「きつとあなたなら大丈夫です、遥さんは優しいですから」

「いえ…僕はそんな…」

「そんなことはありませんわ、以前淡島でも花丸さんを身を挺して守っていたではありませんか。だからきつと大丈夫ですわ」

遙ならきつと博樹を止めてくれる、またみんなで笑いあえるようにしてくれる。そんな期待がダイヤの中にはあった。

一方練習中のAqoursは屋上でダンスの練習をしていた。

「ワンツースリーフォー、ワンツースリースリーフォー」

曜がリズムを取りながら周りがそれに合わせて動くのだが、ふとルビイのほうを見ると様子がおかしい。どこか上の空のようで動きもおぼつかない。

「危ない！」

咄嗟に千歌がそう叫ぶと、ふらーっと善子の方に寄ってしまったルビイに気が付いた善子がつきにかわすがバランスを崩し尻餅をついてしまう。

「痛ッ…」

「あつよ、善子ちゃん…ごめん…」

「もう…気をつけなさいよね」

みんなが善子とルビイの元へと駆け寄ってくる。

「善子ちゃん大丈夫？」

「平気よこのくらい、それよりルビイどうしたの？」

心配した梨子がそう声をかけるが、敏子は何ともないそうだったが、それよりいつもと違うルビイの様子が気になっていた。

「ルビイちゃんもしかして体調悪いずら？」

「い、いや…なんかボーっとしちやって…体調が悪いとかじゃないと思うんだけど…」

「とりあえず今日は休んだら？もしかしたら疲れがたまってるのかもしれないし、怪我したら大変だからね」

ボーっとしてしまっていたと言うらしくもないルビイの様子を心配した曜がそう提案すると、ルビイは「ごめんなさい、今日はもうお休みします…」とだけ言うのと帰っていった。

「でも心配だよね、いつもなら一番集中してるのに…」

そう言って心配する千歌に全員同意するのだった。

練習後、下校しようとしていたところでダイヤと遥が校門前で偶然ではあったがみんなと合流した。

「みんなお疲れ様」

「あつ遥くん、お疲れ様〜」

声をかける遥に気が付いた曜がそう言って手を振ってくれるが、ルビイの姿が見えないことに気が付いたダイヤが。

「お疲れ様ですみなさん、ルビイはどうしたのですか？」

「えっと、ルビイちゃん今日調子が悪そうだったんで先に上がってもらったんです」

「そうでしたか、ご心配をお掛けしてしまつて申し訳ありません」

そう説明した花丸にダイヤはそう言って頭を下げる。

「いえ、それは全然…でもルビイちゃんいつも一番真剣に取り組んでるのに今日は上の空だったから心配で…一人で先に帰っちゃつてそれで良かったのかなつて思つて…」

そう梨子が説明するのを聞いて、ダイヤも遥もその場にこそ居なかつたものの皆の反応を見るとやはり心配になつてくる。

「とにかく今日はもう遅いですし帰りましょう。ルビイの事はひとまず私に任せて頂きたいのです」

「分かりましたダイヤさん。お願いします」

そう言つてその日は解散になったのだが、梨子と千歌と一緒に帰っていた遥だったが、練習の時に何があつたのか詳しく聞いていた。

「そう言う事だったんだね、やっぱり心配だよね」

「そうなんだよ、ちゃんと家には帰ってるらしいから大丈夫だとは思
うんだけどね？」

遥に対し千歌は本人からそうメールが先ほど届いたらしくそのこ
とを伝えてくれたことで少しは安心できたのだが、今度は梨子が遥に
対して。

「そういえばどうしてダイヤさんと一緒にいたの？最近よく一緒にい
る気がするけど？」

「わかった！遥くんダイヤさんが好きなんですよ？」

まさか本当の事をそのまま伝える訳にもいかず、何と云って誤魔化
すか考えていたがすぐに横から千歌が反応してきた。

「いや、そんなのじゃないんだけどちよつと色々相談に乗ってもらっ
てるんだよね…」

嘘ではない、ただ一番肝心な理由をぼかしてるだけでそう自分に言
い聞かせる。

「そっか、ざんねくん…。そのままスクールアイドル部入ってくれた
りしないかな〜とか思っただけに…」

「千歌ちゃん…、まあ遥がそう言うならそう言う事にしておくれ」

ああ、この先輩が余り頭が回る人でなくて助かった。そんな失礼な
事を思っていた遥だったが、梨子もこれ以上追及してこなかったの
この話はここで終わった。

そして次の日学校へと登校した遥だったが、クラスの中に黒澤ル
ビイの姿は無かった…。

「え？今日ルビイちゃん学校来てないの!？」

「はい：先生が言うには体調不良だって…」

放課後、部室に集まったのだがそこで二年生三人はルビイが来てないことを知ったので、遙がそのことを説明する。

「でも昨日の今日だし心配だよね…」

「じゃあみなでお見舞いに行く？」

「それは流石におうちの人に迷惑になるんじゃない？」

二年生が各々自分の考えを言いあい始めたのだがそこに口を挟んだのは花丸だった。

「とりあえずマルはこの後ノートとか届けに行こうと思ってます」

「そっか、したらルビイちゃんに会えたら様子を教えてほしいかも」

「分かったずら、じゃあそろそろ行こう？遙君」

急に花丸から話を振られた遙は「え!?!僕も!?!」と言って驚くが、花丸は当然だろと言った様子で。

「だってノートとったの遙君ずら、ちゃんと最後まで責任持たないと」

「いや、まあそうかもだけど…」

そういつて言いよどむ遙をよそに「じゃあ決まりずら」花丸はそう言いつて遙を引っ張つていく。

そのまま花丸に連れられて黒澤家に到着した遙だったが、その家を見て驚愕した。

「ねえ…ホントにあつてる？怖い人出てきたりしない？」

和風な作りの立派なお屋敷だったので思わずうろたえる遙だったが、花丸に「そうずら」とあつさり言われ、そういえばダイヤの口調やら立ち振る舞いを見るとおかしくないのかも？と思うことにした。

「あら？花丸さんに遙さん、どうなさったのですか？」

後ろからそう声をかけられたので振り返ると、ちようど下校してきた黒澤ダイヤの姿があつた。

「マルたち、ルビイちゃんにノートを渡しに」

「ルビイちゃん、どこか悪いんですか？昨日も調子が悪そうだったそうですね…」

「そうなのですね、ありがとうございます。大丈夫ですわ、ちよつと寝込んでしまつて…きつと疲労がたまつていたのかもしれないわね」

そうダイヤは返すと、「せつかくですし会つていつて頂けませんか？」そう言つて家の中へと消えていった。

それからしばらくしてダイヤは出てきたのだが、「ごめんなさい今眠っているようなので…でも明日は登校できると思いますので心配なさらないでください、ノートは私から渡しておきますわ、お二人ともありがとうございます。」そう申し訳なさそうに伝えてくれたのだが、遥も花丸も「わかりました」と返し、それではまた明日学校でと言うとそのまま帰つて行つた。

「ルビイ、本当によかつたんですの？」

遥と花丸が帰つた後ダイヤはルビイの部屋の前で彼女にそう問いかける。

「うん、今は誰にも会いたくないの…」

「そうですか…ノートを取つてくださつたそうなので置いておきますわね」

そう言つて部屋の中に入ってノートを机の上に置くとそのままダイヤは部屋から出てそのまま自室に向かつていった。

「ラピス…ルビイね、やっぱり怖いんだ、でも大丈夫だよ？ラピスがいてくれるもんね？」

そうつぶやくルビイの前にいるのは西洋風の洋服に身を包んだ、紺色の髪を腰まで伸ばした少女の姿があつた…。

『ハルカ、この前言った粒子の解析結果が出たぞ』

「本当かい？ダニエル」

その日の夜、この前見た粒子を解析した結果が出たという連絡がダニエルから届いていた。

『ああ、これはけっこう厄介だぞ…基本的には無害なんだが人間に幻覚作用をもたらす可能性があるらしい、君は大丈夫かい？』

「僕もその場にいた皆も何ともなかったけど…」

そこまで言いかけて遥は止まってしまふ。いや、一人いた。最近様子がおかしい子がひとりだけ…

「それってどうしたら治るとかわかる？」

『いや、まだどういう条件を満たせばそういった影響を受けるのかも、どうすれば脱せることができるのかもわからないんだ…』

一層真剣な表情でそう聞き返す遥に対してダニエルは申し訳なきそうに返す。

「そっか、ありがとうダニエル。暫くは気をつけるよ」

『そうだね、また何か分かれれば連絡するよ』

そう言っただけその日はお開きとなったのだが、遥の中で懸念していたことが現実となったことでその不安はさらに大きなものになってしまった。

「もしかして…ルビィちゃんが危ない!!」

そう言っただけスマホを取り出すとそのまま家を飛び出して行った。

「遥、こんな時間にどこ行くの？」

そう母親に尋ねられるが「ちよつと友達の家を忘れ物！」とだけ言っただけ外の暗闇へと消えていった。

「え？ルビイちゃんがない!？」

「ええ、ラピスさんという方と会うと言ってあの後出ていったきりで…連絡もつかないのです…」

遙が向かった先はルビイの家だった、こんな時間に何を考えているのかと怒られるかと身構えたがそんなことはなく、出てきたダイヤにルビイの不在を上げられるのだった。

「遙さん、ラピスさんという方に心当たりはありますか？学校の生徒ではないと思うのですが…」

「いや…僕も分らないですね…」

クラスにそんな呼ばれ方をしてる子は居なかったはず、もしかしたら花丸か善子は知っているかもしれない。そう思って善子にメールを送った後花丸の家へ電話をかけるが、やはり2人とも知らないとの事だった。

「やっぱみんな知らないみたいですね…」

「…もしかしたら、行き先に心当たりがあります」

「本当ですか？」

ダイヤが行き先に心当たりがあると言うのもうそれにかけるしかない、そう思ったところで善子から電話がかかる。

「もしもし善子ちゃん？」

『そう言えばルビイって家にいるのかしら？夜こっちでルビイっぽい人が1人で歩いているの見かけたんだけど…』

「ほんとに!?!どこで!?!すぐ行く!!！」

『え？今から!?!沼津駅の近くのモールよ?』

「沼津だね?分かった!ありがとう善子ちゃん」

直ぐに電話を切ってしまう遙だったが、ダイヤへ「行きましよう」と言うとそのまま黒澤家の車で送ってもらいダイヤと2人でルビイを探すのだった。

その頃ルビイは夜の沼津の街を歩いていた。

「ラピス…」

彼女が思い出していたのは幼い日の思い出、家族で買い物に出かけたとき、一人はぐれてしまったこと、そしてその時に自身に声をかけてくれた少女の名が…ラピスだったことを。

「ひぐつ…おねいちゃ…どこ…?」

「どうして泣いてるの?」

「え?」

「一緒に遊ぼう?」

そういつて自身に差し伸べられた手をとったことを…。

「お姉さん、そのままだと戻れなくなるわ」

「え?」

思い出に浸っているとき、ふとそう声をかけられとっさにそちらを見ると、ゴスロリ風の服に身を包んだ、金髪をツインテールにしたまだ小学校低学年くらいの少女だった。

「あなたは…?」

「私の名はシルビア、あなたは夢を見てる…偽物の夢を…」

シルビアと名乗った少女は淡々とそう告げ、ルビイの隣を通り過ぎる。だがそれは友達の存在を否定するような発言だった。

「どうしてそんなこと言うの!?!…あれ?」

思わずそう言い返し、少女が通り過ぎた方を向くが、そこにはもう少女の姿はなかった。

『ねえ、早くわたしと遊ぼうよ』

「うん、もうちよつとで…ラピスと…」

ふと聞こえるラピスの声、それに従ってルビイの姿もまた夜の暗闇

へと消えるのだった。

「こつちです、ここにルビイがいるはずですよ」

そう言って閉店間際のショッピングモールへと駆け込んでいく。

「やっぱりルビイ家に居なかったのね…こんな時間に何考えて…」

そう言って遥とダイヤに追いつく人影があった、それは善子だった。

「善子ちゃん!? どうして?」

「この墮天使ヨハネにかかればこの程度…」

そんないつもの調子で答えようとする善子だったが、走ってきたのだろう。息が上がってしまつて続きが出てこない。

「で、やっぱりこの辺にいるのね?」

呼吸を整えた善子がそう聞くのに対してダイヤは「おそらく…」と答えた。

そうして中を探して回ったが、見当たらず。最後の望みをかけてと、屋上の駐車場へと出る、そこには車一台存在しなかったが、その隅に腰掛けるルビイがいた。

「ルビイ、心配したんですのよ?」

「そうだよ、今まで何してたの?」

ダイヤと遥がそう言つて声をかけるが、彼女はどこかぼんやりとした様子だった。

「ルビイね、ラピスと遊んでるの…」

そう答えるが、彼女の周りには誰もいない。そんな彼女に対し善子は「何言つてんの? ホラ、帰るわよ」そういつてルビイの手を取ろうとしたのだが…。

「触らないで！」

そう明確な拒絶の意を示した彼女との間に電気のバリアのようなもの張られ、善子の体は弾かれる。

「キャッ!？」

「善子さん!?!ルビィ、おやめなさい!ラピスなんて方はいないのです」

善子を心配し、駆け寄るダイヤがルビィにそう告げる。

「お姉ちゃんまで…どうしてそんなこと言うの?ラピスはここにいないのに!」

「それは違うよ!ルビィちゃんは幻影を見せられてるんだ、そのままじゃ帰って来れなくなる!帰ろう?みんな心配してるよ?」

ラピスなんていない、そう言われたことが気に入らなかったのであろう彼女はダイヤに声を荒げるが、それを遮って遥は手を差し出す。

「うわっ…!」だがその手も電撃に跳ね除けられてしまう。

「みんなそう言ってる…ラピスはここにいないのに…」

そう言うルビィの頭上にワームホールが開き、その中から以前二度も戦ったクラゲのような怪獣が現れる。

「ルビィね…これからラピスのお家に遊びに行くんだ」

そう語る彼女の後ろに着地した怪獣は前回と似たような姿だったが、今回は腹部に石膏で作ったかのような顔がついていた。だが今回は以前のように街の住人を操っている様子はなかった、だが今回はルビィに幻想を見せて利用しているようだった。

「あいつは…」

「ルビィ、早くこちらへ!怪獣ですわ」

怪獣を睨む遥の隣でダイヤは妹の身を案じてそう叫ぶがルビィは来ない。

「先輩、善子ちゃん、ルビィちゃんを頼みます」

「遥はどうすんのよ?」

「…分かりましたわ」

「え?ちよっと!」

ダイヤは察したのか少し間はあったが了承してくれたが、善子は状況が呑み込めないが、それに構っている余裕はなかった。

「ラピスがみんなを追い払うって言うてる…」

そう言うルビイの後ろでついに怪獣が動く、建物ごとここにいる全員を叩き潰すべくその腕を振り上げた。

「…くっ！」

遙はとつさにエスプレンダーをかけた、その身をウルトラマンガイアへと変える。

怪獣の真後ろに出現したガイアはそのまま怪獣を羽交い絞めにし、モールから離れた位置に押しつける。

そのままガイアとの戦闘に突入するが、怪獣は電撃を使い、ガイアを寄せ付けず、ガイアも攻めあぐねていた。

「え？遙が…？」

そう啞然とする善子の隣でダイヤはルビイへ声をかけ続ける。

「ルビイ、この前も話しましたが、みんな怖いのです。でも、それでも前を向いています。あなただってそれが出来るのです」

「そうよ！だってルビイのお陰で、ずら丸も私もA q o u r sに入っただんだから！この前のことだって気にしてない！だから!!」

そう言つて善子も必死にルビイへと声をかけ続ける。

「あ…ル、ルビイは…」

ようやく彼女の心が動いた、だがそのタイミングで彼女の後ろに少女が現れる。

「ねえ？早く遊ぼう？そのためなら、メザードが全部やつつけてくれるよ？」

「ラピス…」

それによつてルビイはその少女の方へ歩み寄っていく。

そして怪獣はそれによつて力を増したのか、より強力な雷撃を放ち、ガイアは地に伏してしまった。

そして怪獣は再びこちらを向く、邪魔な善子とダイヤを始末するために…。

「ルビイ、ラピスなんて方はいないのです！なぜならそれはあなたが昔ここで無くしてしまった、人形の名前だからですわ」

「え？」

ラピスは、実在しない。

その事実を思い出したことよって、ラピスと呼ばれる少女の姿が鏡のように砕け散る。そしてその向こうに見えるのは怪獣の腹部についた醜悪な顔だった。

「ピギャアアアアア!!」

ルビイは悲鳴を上げると、その場に倒れこんでしまった。

ルビイが幻覚から覚めてしまったことで、それを糧に力を得ていた怪獣は腹部の顔からよだれを垂らし苦しみ始める。

(人の心を弄んで…絶対に許さない!!)

ガイアは土を握りしめ立ち上がると、怪獣の上を回転しながら飛び越えると、ルビイたちと、怪獣の間に着地すると、怪獣の腹部に蹴りを入れ、怯んだところを更に首へ回し蹴りを入れる。

更に尻尾を掴むとジャイアントスイングで怪獣を投げ飛ばす、起き上がった怪獣はガイアへ電撃を飛ばすが、ガイアはそれを正面から受けつつ怪獣へ走ると、今度はリアットで怪獣をなぎ倒す。

そしてバク転で距離を取ると、クアンタムストリームの発射態勢に入る。

怪獣も苦し気に立ち上がると、残りの力を振り絞って電撃を発射するが、それと同時に放たれた一撃に完全に押し切られ、その身を大炎上させた後、爆散し、後には何も残らなかった。

それを見届けた後、ガイアはその場から飛び去った。

「ルビイ…良かった…」

そうルビイを抱えるダイヤは呟いた。

「全く、心配かけて…」

そんな事を言う善子の目にも涙が溜まっていた。

「遥君、善子ちゃん。この前はありがとう」

あの後、もう何日か検査やらで学校を休んでいたルビイだったが、特に異常は無かったらしく、元気に学校へ来ていた。

「なんともなくて安心したよ」

「全く、この堕天使ヨハネを心配させるなんて…」

などと普段のペースを崩さない善子だったが、その表情はとても安心したようだった。

「それに遥君…えっと…」

「そうよ、あたしも結局何も聞いてないんだけど？」

ルビイは何か言いかけて止まってしまったが、遥も善子も察したのだが、善子もまだ聞いていないのでそう言って代わりに詰め寄る。

「えっと…僕がガイアだってことは内緒にしてほしいな…」

そうお願いするしかない遥だったが、暫く二人からの質問攻めが続くのだった。

15話 取り戻すために／並び立つ赤と青

「あれがガイア…この星が産み出した、この星を守護する存在の片割れ…」

暗闇の中で少女が呟やいた。

「でももう片方と敵対してるなら、わざわざあんな下賤な生き物を使う事なんてない…もつと、うまくやって」

そう言う闇の中へと消えていくのだった。

「そういえば遙君、最近ルビィちゃんと話すようになってきたずらね？」

「え？そうかな？」

放課後図書委員の仕事を手伝っていた遙は、ふと花丸にそんなことを言われる。

「だって前はルビィちゃん人見知りだし、男の人には特に。やっぱりノートとってあげたのがよかつたずらか？」

「あく…どうなんだろう？」

まさか自分がガイアだとは言えず、そのことについて問い詰められたりしていたとは言い出せなかった。

「でも良かったずら、遙君ちよつと距離を取ってるみたいだったから」
「別にそんなつもりはなかったんだけど…僕以外みんな女の子じゃない？」

いくらマネージャーとはいえ自分以外女の子なのだから仕方がない、そう言いたげな遙だったが。

「でも千歌ちゃんには女の子の間違えられてスカウトされたんでしょ？」

そう意地悪な表情で笑う花丸に対して、遙は顔を赤くして「いや、それは関係ないだろ！」そう強めに言い返すが、「赤くなってるずら」そ

う言ってからかわれたのであった。

「やめてよ、ちよつと気にしてるんだから…」

「ごめんごめん、でもそういう反応するの新鮮だったからつい」

「全く…」

やれやれといった様子の遥だったが嫌そうな様子は感じられなかった。

「そうですか…私のために、ライブを…」

二年生三人は鞠莉の病室へ行って、この前話をした彼女のためにライブをやりたいという旨を伝えた。

「はい！何か私たちも出来ないかって思ってた」

そう語る気持ちは本心だった、厳しい条件ではあったが彼女がいたからこそ自分たちは、浦の星のスクールアイドルとして認められた。だから彼女が何か思い出すきっかけになればと思って行動を起こすのだった。

「ありがとう、でもごめんなさい。いつなら外出できるって今は断言できないの…だから返事はまってもらってもいいですか？」

「そう…ですか、でも分かりました。私たち待ってますから」

「ありがとうございます、やっぱり皆さん優しいですよね」

そう言っただけで笑む鞠莉に、「それじゃお大事に」と言っただけで三人は帰るのだった。

そんな千歌達と入れ違いになるように現れたのは、果南だった。

「こんにちは鞠莉、調子はいいい？」

「果南さん、こんにちは。おかげさまで、もう傷はほとんど塞がったそうです」

自分をさん付けで呼ぶ鞠莉に対し、一瞬だけ辛そうな表情をするが、すぐに笑みを作る。

「それじゃ、もう少しで退院できるかもね？そしたらどこか行こう？」

「そうですね、いろいろ見て回りたいです。早く思い出せるように…」

「…そっか、そしたら私も協力するよ」

「それと、一つ教えて欲しいことがあります」

「何？」

記憶に関することを言い出すときの鞠莉は、必ず辛そうな表情を見せる、そのことが果南にとっても辛かった。

記憶を失う少し前、しつこくスクールアイドルに勧誘してきた鞠莉に対しては「もう顔も見たくない」とまで言いつつ突き放してしまったが、それでも自身にとって大切な友人であったことには間違いない、だからこそ心を痛めるのだった。

「スクールアイドルについて教えてください、あなたも以前、私とダイヤさんと三人で活動していたって聞きました。でもその時のことを誰も教えてくれない…でも知りたいんです」

「…っ！」

「お願いします！ただイベントで歌えなかったからってことしか教えてもらえなかったんです…」

「…それが全部だよ、それで嫌になったの。本当にそれだけ…」

一瞬動揺した果南だったが、苦し気にそう言うのと俯いてしまう。

「やっぱり、教えてくれないんですね…」

「ごめん、この後お店あるから帰る…」

そう言つて、そのまま鞠莉の反応を待たずに病室から出て行ってしまった。

「果南さん…やっぱり何か隠してる、きっと私にとって思い出さないう方が悪い事なの…？」

そうつぶやく鞠莉の表情もまた、辛そうだった。

「最近遥君の様子がおかしい？」

病院を出た後、梨子が遥の様子を気にしているような発言をし、曜と千歌がそれに反応する。

「ええ、元々運動するタイプじゃなかった遥と一緒に練習に参加するのは、ちゃんと体力作りしなきゃって思うようになったのかな？くらいに思ってたんだけど…」

「だけど？」

「なんか、結構本格的に筋トレ始めたり格闘技の本読み始めたりして…何か知らない所で危ない事してるんじゃないかって思っちゃったの」

「そういう梨子の様子もふざけてるようではなく、思い詰めているようだった。」

「気にしすぎじゃない？学校にもプレロス同好会とかあるし、遥君も男の子だしそういうのやってる友達がいるんだと思うよ？」

「ならいいんだけど…」

「そういう曜に梨子はいまいち納得ができていないようだったが、千歌も」
「そういう気にしすぎだって、遥君も色々やってみたいんだよ」
「そう告げるのだった。」

「二人がそういうなら、きっとそうよね」

「夏祭り!？」

「屋台もでるぞら…モグモグ…」

十千万で今後の打ち合わせを行っていたのだが、今度の花火大会でライブをしてくれないかといったオフアールがA q o u r sに舞い込んできたのだ。

そのことに目を輝かせるルビイの隣で花丸はのっぽパンなるものを食べながら屋台のことを口にする。

沼津ではかなり大きな規模のお祭りらしく、屋台を楽しみに訪れる人もいるだろう。

「これは…痕跡…僅かに残っている、気配…」

そういつて木製の長椅子に寝転がり頬ずりをする善子、正直何が言いたいのか全く持って意味不明だ。結構会話するようにはなったのだがこの墮天使モード?とでもいえばいいのだろうかこの状態の時は正直言つて、話の内容は理解できないことがほとんどだ。

「どうしよう…善子ちゃん東京へ行つてからすっかり元に戻っちゃつて…」

「ほつとくずら」

困つたような反応を示すルビイとは対照的にスルーを決め込む花丸に遥も「あはは…」と苦笑いを浮かべる。

「沼津の花火大会つていったら、ここらへんじゃ一番のイベントだよ。そこからオフアールが来てるんだよね?」

この春引つ越してきたばかりの梨子と遥に曜はそう説明する。

様々な目的の人が集まるイベントだ、自分たちのことをもつと多くの人々に知ってもらおう絶好の機会だ。だが一つだけ懸念要素があるのだが…。

「でも、今からじゃあんまり練習時間ないよね…」

その懸念をルビイが口にする。

「私は、練習に専念した方がいいと思うけど」

そう提案するのは梨子だった。少ない練習期間で中途半端なパフォーマンスになるくらいなら今回は見送つて、しっかり練習して実

力を上げたほうがいい、そう思つての発言だった。

「千歌ちゃんはどう思う?」

曜から聞かれ、一人メンバーとは離れ、フロントに座る千歌は立ち上がつてこちらの方へ来ると、近くの柱から顔をのぞかせると。

「私を出たいかな」

そう笑顔で告げるのだった、「そっか」と言つて笑う曜と「千歌ちゃん…」そういう梨子もまた嬉しそうだった。

「今の私たちの全力を見てもらう、ダメだったらまた頑張る。それを繰り返すしかないんじゃないかな?」

それはきつと東京で悔しい思いをしたからこそだろう、悔しかったから、だからこそそ上を目指していくために…。

「ヨースロー!了解であります!」

敬礼する曜に同意するように残りのメンバーもうなずく。

「それじゃ、花火大会でライブをやるのは決定ですね?」

そう確認をとる遙にメンバーはうなずいたことで、それに合わせての予定づくりが始まり、出来れば新曲をとということとなつたのだつた。

突然空に魔法陣のようなものが現れ、白い人型の竜をモチーフにしたようなロボットが現れた。

「なに…あれ?」

「ロボット…だよな?大きいけど」

突然それは空から現れ、十千万の裏の山へと降り立った。外へ出た千歌と梨子は思い思いの感想を口にする。

「まさか…天界からの使者?」

そう謎のポーズを取りながら言う善子に花丸は「きつとまた破滅招来体とかいうやつすら」そう冷静に返す。

「それより、避難しないと…」

そう提案するルビィに、曜も「そうだね、ともかく早めに避難した方がいいと思う」そう言つてみんなに避難を促すのだった。

だがその時、地響きとともに以前ギールが出現した、学校付近の山

から四本足の背中に山のような外殻を背負った怪獣が現れる。

「今度は怪獣!？」

「あっち学校だよ？避難場所なのに逃げられないよ…」

「とにかく、反対方向へ逃げましょう！僕は他に誰かいないか見てきます」

更には怪獣まで現れたことよってパニックに陥るみんなだったが、遥がそう言ってどこへ逃げるかの案をだしつつ自分は変身すべく建物の陰へ行こうとする。

「待って！」

そう言って遥の腕を掴んだのは梨子だった。

「そんなことさせれる訳ないじゃない！どうしていつも危ない事ばかりしようとするの？」

「それは…」

遥は何も答えられなかった。自分がウルトラマンだという事は数人にはバレてしまっているが梨子はまだ知らないのだ。それに遥は梨子に知られてしまう事を恐れていた、今までも心配を掛けてきた姉に今度は命を懸けて戦っているなんて知られてしまったら…。そう思うと彼女にだけは知られたくない…。

「行って、遥君！」

「え？」

そう言ってくれたのはルビィだった、すると今度は善子が。

「そうしたいんでしょう？でも怪我でもして心配かけたらゆるさないわよ」

そう言って遥の腕を掴んでいる梨子の手に触れる。

「ありがとう、行ってくるよ」

そう言って遥は駆け出した、そのことに梨子は不満げな表情を見せたが千歌も「大丈夫だよ、信じようよ」そう言われて梨子も「そうよね…今は信じるわ」そういうのだった。

「ともかくここから離れよう」

そう言ってその場を離れようとする6人だったが、突如ロボットは動き出し胸部が開くと大量のケーブルのようなものが千歌めがけて

襲い掛かってきた。

「え？」

咄嗟のことに身体が動かない千歌だったが、寸前で梨子が「千歌ちゃん危ない！」そう叫んでとっさに千歌を突き飛ばした。

だがしかし代わりに梨子とそのケーブルに捕らわれ、ロボットの胸部に収納されてしまった。

「そんな…梨子ちゃんが…」

学校の方向へ走り出した遥だったが、皆と別れてすぐ湊博樹と遭遇していた。

「さて遥、ここであの怪獣を倒すつもりか？」

「だったら何だってんです？僕はもう誰にも傷ついてほしくないんだ」

そう言つてエスプレンダーを構えようとする遥を博樹は制して話を続ける。

「あの怪獣、ゾンネルは背中に膨大な量のエネルギーを秘めている、そんなことをしたらあたり一面が吹き飛ぶことになるぞ」

「そんな…ならどうすれば…？」

構えたエスプレンダーを下ろし俯く遥だったが、博樹はもつと気にすべきものがあると言つて続ける。

「それよりあのロボットだ、今は動いていないがやつは間違いなく地球に害を及ぼすはず、アイツを倒すことが先決のはずだ」

「怪獣は既に街を破壊しているんだぞ？そっちの方が先なんじゃないのか？」

先日の事もあり、遥は博樹に対して怒りのような感情を強く持っているためだんだん言葉が強くなる。

「考えてみる、今まで宇宙から送り込まれてきたのは地球を滅ぼすという目的を持っていた。ゾンネルもその存在を排除するために目覚めたのさ」

確かにゾンネルは街を破壊しているが、ロボットの存在に気が付くと最短ルートでそちらへ向かっていた。

「怪獣が根源的破滅招来体の影響で目覚めたのは地球を守るためだ、不要な人間が消えれば地球は救われる」

「そんなこと…」

そう言いかけた遥だったが、突然ロボットのほうから声が出たので、反射的にそちらを向く。

『この世界の解析は完了した。』

各地で起きている紛争、差別、残虐さを理解した。

この世界のために、争い全てを停止させる。別の世界でもそうさせてきたように、全ての争いを止める。すなわち、この世界をリセットする。それが我が使命。我が正義。』

そう言つて突然ロボットは宙に浮かぶと前面に魔法陣のようなものを展開すると光線を胸から放ち、それをまともに受けた怪獣も付近の木々もすべて消し飛ばしてしまった。

「なっ…」

「っ…!」

まさかの状況に博樹も言葉を失ってしまう。そんな周りの様子は他所に、再び地上に降りたロボットはこう続ける。

『我が名はギャラクトロン、この星の解析は完了した。我は全ての争いを止めるために産み出された、この星の文明は絶えず争いの歴史を繰り返してきた。それはこの星の文明が食物連鎖という誤った文化の上に成り立っているからだ。よって我は全ての争いを終わらせる為、この星の全ての命をリセットする』

「なに言ってるの…? 梨子ちゃん…?」

梨子の声で話すロボットに対して千歌がそう呟く、それに対して花丸が。

「きつとあのロボットに言わされてるすら、でもさっきの攻撃をまたやられたらもう…逃げる所なんて…」

無い。そう思ってしまった。だがみんなが絶望しているわけではなく。

「大丈夫だよ、ウルトラマンならきつと梨子ちゃんも助けてくれる」

そう言っただけは励まそうとするが、ガイアの正体を知ってしまったルビィと善子は表には出さなかったもののガイアがあロボットと戦うことに不安を感じていたのだった。

それっきりロボットは、暫く動く素振りは見せないがなにやらエネルギーをチャージしていることは予想できた。

さっきのような攻撃はどうやら連発できないのだろう。それならまだ対策の余地はある、そう思った遙だったが、博樹の口から予想外の提案が飛び出した。

「ガイアとアグル、二人がかりでなら、あのロボットを破壊出来るかもしれない」

「え?」

「オレもお前も、あのロボットに地球をリセットさせるわけにはいかない、なら共闘してでもあれは倒すべきだ」

「わかりました、信じていいんですね?」

「ああ、必ずあれは破壊しなければならぬ」

すると二人はそれぞれ巨人へと姿を変えるためのアイテムを掲げ、その光を迸らせるのだった。

再び起動するギャラクトロンの前に今、二人の巨人が立ち上がる

…!

『アヤッ!』

『デュワー!』

それぞれのファイティングポーズをとり、ロボットへと肉薄する。だが、2対1という不利な状況でもロボットは的確に二人のウルトラマンの攻撃をいなしていく。

自身に近寄ってくるガイアをアームのような右腕で殴り飛ばし、その後ろから蹴りをすかさず入れてくるアグルには、大剣の様になっている左腕の剣の腹で受け流す。足止めをしようとガイアが足の関節部めがけてとっさに放った手裏剣状の光弾、ガイアスラッシュは、読んでいるかのように魔法陣をバリアにして防いでしまう。

その隙に後ろから光剣、アグルブレードで切りかかるが、後頭部の辮髪上になっている部位に腕を絡まれて持ち上げられ、そのまま後方に回転した右腕から出た光線によって吹き飛ばされてしまう。

それならば、と今度はガイアがクアンタムストリームを胴体めがけて放つと、さつきと同様に防がれてしまうが、立ち上がったアグルがその隙に辮髪のようなパーツを切り捨てる。

漸くダメージが通ったが、アグルは先ほどの攻撃でダメージを受けたのか、膝をついてしまう。そのアグルに振り向いて攻撃を加えようとするが、今度はガイアによって抱え上げられ、そのまま放り投げられる。

このままいけば勝てる、そう思ったガイアだったが、突如耳に飛び込んできた叫び声によってその考えも消えてしまう。

「まってガイア、あのロボットのの中に梨子ちゃんがいるの!お願い助けてあげて!!」

そう叫んだのは千歌だった、なんと5人とも戦闘が行われている山の方へ移動してきており、必死にロボットを破壊しないように叫んでいるのだった。

「大事な友達なんです、お願い!」

「マルからもお願いします、助けてください!」

曜と花丸もガイアへとそう必死に叫ぶ。

「みんなの言ってることは本当なの！お願い！」

「アンタが大変なのはわかってる、でもお願いよ！」

事情を知っているルビィと善子もそう懇願する。そのことよって戦意を失いかけるガイアだったが、相手もそれは見逃さず、目から光線を放つ。

ガイアはそれに反応し、フォトンエッジをチャージこそできなかったものの放ち、何とか相殺させるが、反動によつて吹き飛ばされライフゲージが点滅を始める。

アグルはその隙に、ロボットを粉碎させるべくエネルギーをため、前面に光球を作り、それを両拳で打ちだそうとする、だがロボットの右腕が外れアグルめがけて光線を放つ。

が、アグルも反応し作った光球——リキデイター——をその右腕へと放ち右腕を粉碎する。

今度は左腕の大剣を飛ばすが、アグルによつて掴まれそれを使って胸部装甲を殴打される。

「えっ、何!?どうなってるの?！」

その衝撃によつて梨子の身体に巻き付いていたケーブルが外れ、梨子は正気を取り戻したのだが目の前でウルトラマンが自分目がけてなにやら鈍器のようなものを振り上げているではないか！

「う、嘘…冗談よね…?！」

だがウルトラマンは…アグルは中の梨子のことなどお構いなしにそれを振り下ろし、それによつて胸部の装甲がついに破損し、かなりの衝撃が梨子を襲う。

「ぎゃあああああー！」

「やめて！梨子ちゃんが死んじゃうよー！」

梨子の悲鳴や、やめるように叫ぶ千歌たちの声など無視してアグルはもう一発と言わんばかりに再び振り上げる。

『やめろ！中に人が捕らえられているんだ、その人を殺す気か!?!』

そう言つてガイアが止めに入るが、アグルは

『言つたはずだ、必ず破壊すると！それに人間のことなどどうでもい

い」

そう言い返すのだった、ガイアは『そんなこと…』そう反論しようとするがチャンスと見たロボットは再び目から光線を放ち、二人のウルトラマンを吹き飛ばす。

ここでアグルもライフゲージが点滅を始めるのだが、ガイアより早く立ち上がると、両腕を頭の前で組み、エネルギーをためつつ上下に腕を広げる。

そして頭部へと集めたエネルギー―フォトンクラッシュヤー―をロボットのめがけて放つ。

ロボットはついに抵抗する事も出来ずにその一撃を受け、粉々に爆散してしまったのだった。

「うそ…梨子ちゃん…」

そう呟いた千歌はその場に力なく膝をつくのだった…。

16話 またみんなで…／アグルの決意

「そんな…梨子ちゃんが…」

曜は信じられなかった。今まで幾度となく自分たちを守ってくれたウルトラマンが、自分の友達をとらえていたロボットを友達諸共吹き飛ばしたことが。

「青いウルトラマンはやっぱり、人間を守ってるわけじゃない…」

かつて淡島でアグルとアルギユロスの戦いに巻き込まれ、ボクラグをガイア諸共に攻撃したアグルの姿をみていたので、その発想へたり着けた。

「うう…そんな…そんなあ…」

泣き崩れるルビィ、無理もない。幼いころから知っていた鞠莉が怪我で記憶を失い、今度は梨子が。そう思うと彼女の心の痛みは計り知れない。

「いや違う…みんな見て！」

ただ一人、その光景を最後まで見届けていた善子がそう声を張る。それによってみんな涙で濡れた目で前を向くとそこには…。

爆煙の中から赤い光が立ち上ると、その中からガイアが現れ、その両手で何かを大事そうに抱えていた。

「ガイア…？」

なぜギヤラクtronが爆散した場所にガイアが？そう思った面々だったが、ガイアはA q o u r sのメンバーへと歩み寄ると、そっと手を下ろし、その中に抱えていたものを皆の前にそっと降ろす。

「梨子ちゃん!？」

ガイアが抱えていたのは梨子だった、ガイアはアグルが技を放つ直前に赤い球体となって装甲の隙間からギヤラクtronの体内に入り込み、梨子を守っていたのだった。

その甲斐あってか、梨子は軽度な擦り傷程度で大した怪我は負っていない様子だった。

「ん…あれ？私…」

「よかった…よかったよおおお…」

「ちよつと、千歌ちゃん!」

泣きながら梨子に抱き着く千歌に、少し困惑気味だったがガイアが梨子の無事を確認するとその場から飛び去ろうとしたところに声をかける。

「まってー!」

再び梨子たちのほうをガイアが見下ろすと、梨子は「ありがとう、助けてくれて」そう声をかけた。

他のメンバーも口々に感謝の言葉を述べるが、ガイアはただ一度だけ領くと今度こそ飛び去っていった。

アグルもまた、敵を倒したことによってそのまま青い光に包まれて消えてしまった。

「どうして姉さ…人が捕らわれていたのに、そのまま撃破しようとしたんですか？」

遥は博樹にそう問い詰めた。

「いったら、人間まで守る意味はないと」

そう冷たく言い返す博樹に、遥は本気で怒りが込み上げてきた。

「あなたにはいないんですか？守りたい人や、大切な家族が！」

思わず、かなり強めの口調でそう言い返す遥だったが、その発言が博樹の逆鱗に触れてしまった。

「オレにそんなものは無い！そうやって無駄なものに惑わされて、せっかくの力を有効活用できないお前には解るはずがない。第一、お前は自分の都合で倒すものと救うものを線引きしている。そんな奴には地球は救えない！」

「なんだと…？」

「そうだろう？お前は甘すぎるんだ、そんなことじゃ地球は守れない」

二人の意見は平行線だったが、今回の一件で遙も博樹に対してかなり強く敵対心を持ってしまったので、依然と比較してもかなり強く言い返してしまう。

「それにもう時間がない、お前の甘さにはうんざりだよ遙」

そういうと博樹は踵を返すと、そのまま歩み去ってしまった。

「やっぱり僕たちは…分かり合えないんですね…」

遙はその背中を眺めながらそう呟くのだった。

「ホントに大丈夫なの？」

「もう、異常なしだったって言ってるじゃない」

翌日、学校へ向かうとき。途中のバスの中で、千歌と曜にそう聞かれた梨子はそう答えるのだった。

昨日はあの後病院で一応精密検査を、と。みんなに勧められて受けたわけなのだが、結果は異常なしだった。それでもなおみんな心配で気が気でなかったのだ。

「遙からも言ってるよ、もうみんな心配しすぎるから逆に疲れちゃった」
などと冗談交じりで話す梨子に、遙は「まあ仕方ないよ、一歩間違ったら大怪我じゃすまなかつただろうしき」と答えるのだった。

「でもホント奇跡だよ！ホントに無傷だったなんて」

そう言ったのは千歌だった。医師の診断の結果も怪我は恐らくアグルが殴った衝撃で何か金属でこすった怪我だろうという話だったし、所々絆創膏が見えるが後は残らないそうだ。

「本当よね、でも…」

「でも？」

何と言えればいいのか、そんな雰囲気で言葉を詰まらせる梨子に、曜がそう聞くと。

「何て言えればいいのかな？ガイアの光っていうの？なんかとても暖かくて…懐かしい感じがしたの…」

「懐かしい？」

そう言った梨子に遥がそう聞き返すと、梨子は困ったように笑い「なんでか解らないけどね」そう付け足すのだった。

「どうして戻ってきたの？」

「か…ん…相変わらずが…」

「もうやめてあなたの顔、もう見たくないの」

誰かがそう聞いてくる、私は彼女を知っている？でもなんて呼んだか解らない。でも、彼女はそう言って踵を返すと立ち去ってしまった。

「待ってー！」

そう言いたかったが、その言葉は出ずに夢は終わる。

「夢…」

病室で目が覚める鞠莉だったがやはり引つかかっていた。

(またこんな夢…やっぱり、少しづつ思い出してるのかな?)

最近何度も夢に見る、きつと過去の自分の記憶。でもそれはいつも突き放すような別れ方で終わってしまう、最近やつとよく出てくるワードが『スクールアイドル』だと聞き取れるようになったが、やはり何の事なのか思い出せず、考え込んでしまうことが多々あるのだ。

「小原さん、入りますね」

ふとそんな声が聞こえ、看護師が入ってくる。

「小原さん、もうけがの方は大丈夫だって先生も言っていましたし、今週中に退院できますよ」

「本当ですか?」

「ばあ、と表情が明るくなる鞠莉に看護師はさらに続ける。

「そういえばお見舞いの品が届いてますよ、病室には来ないで帰ってしまったんだけど…」

そう言って看護師が差し出したのは花束だった。

「綺麗、いったい誰からですか?」

「男の人だったわよ、多分高校生くらいだと思っただけ…もしかして彼氏?」

思い当たる人間はいるが、そう言って茶化してくる。

「いたって覚えてないですよ」

そう笑って言い返すが、もしかしてなんて思ってしまう自分がいる。

「それじゃあ他の仕事もあるから行くわね、また何かあったらすぐ呼んで?」

そう言つて看護師は病室から出て行つた。

暫く花束を見つめていた鞠莉だったが、ふと中に何か入つているとに気が付く。

「これは…?」

中には手紙が入っていた。

『すまなかつた』

ただそれだけ書かれていたのだが、鞠莉はそれを見て差出人を確信したのでした。

(あなたは何を考えているの…?)

そう考えても、答えは出なかつた。

「ヒロ…鞠莉のお見舞いに行つていたの?」

たまたま街中で博樹の姿を見かけた果南がそう声をかけるが、博樹は答えようとしない。

「ねえ?ヒロは何がしたいの?この前は人間に存在価値はない…なんて言つてたけど」

「ウルトラマンは根源的破滅から地球を救済する者だ」

質問に対して答えになつていない回答をする博樹に、果南はため息交じりにそれならばと問いかける。

「じゃあなんでウルトラマン同士が戦つたりするのさ?そのせいで鞠莉だつて…」

「やるべき事が解つているかどうかの差だ。」

「やるべき事?」

「地球を救う事と人類を救うことは、イコールじゃないんだよ。そし

「俺は地球を救う事だけ考えている」

「何が言いたいのさ？それじゃあ自分が青いウルトラマンだって言うてるように聞こえるよ？」

地球を救う事。人類を救う、ではないと言い切って、ウルトラマンを話題に出す博樹の言い分はそういう風に果南には聞こえた。

「でも、そんな訳ないよね？だってそしたら、私は助けて貰ったけど。梨子ちゃんごとロボットを吹き飛ばそうとしたって話だし…」

千歌から聞いた、この前の騒ぎでロボットに捕まった梨子をアグルは梨子ごと倒そうとした事を。そしてウルトラマン同士が争っていたせいで、鞠莉は怪我をしたことも。

「お前の言う通りかもしれないな」

「え？」

「俺は、自分がウルトラマンだと誰かに知ってほしかったのかもしれない」

「やめてよ…なんでそんなこと言うの？それがホントなら…私、ヒロの事許せない。鞠莉を傷つけたこと…」

そう言っって果南は博樹を睨み付けるが、当の博樹は不敵な笑みを浮かべ。

「ずいぶん優しいじゃないか。前は顔も見たくないって言っって突き放したっって聞いたぞ」

「ヒロには解んないよ…私の気持ちなんて…」

そう言っって果南は顔を伏せてしまう。

「そうか、ならお前も俺の気持ちは解らない。それでいいじゃないか。それじゃあな」

そう言っって立ち去ってしまった博樹に、果南は何も言えず、立ち尽くすしかなかった。

その後、アメリカのとある山中にアグルが現れたのだった。

現地はその時間は夜だったのだが、キャンプを楽しんでいた若者たちがアグルを見つけ、「ウルトラマンだ!」「どうしてここに?」と口々に騒ぐが、アグルはそんな人々に見向きもせず。

「ハアアアアア…ゼヤアツ!!」

突然拳を掲げ、エネルギーを拳に集中させたかと思うと、地面を殴ってそのエネルギーを地底に送り込むのだった。

それから数日間、世界各地で同様の行動を起こすアグルの目撃情報が相次いだ。

その結果『青いウルトラマンの目的とは?』などと言った見出しでニュースやらメディアが騒ぎ立てることになってしまったのだった。

そのような話題で持ちきりになってさらに数日後、驚くべき事実が明らかになるのだった。

『青い巨人が現れた個所、地底怪獣が生息すると思われる地域と合致』

「何だって…?」

丁度週末で学校もなく、朝家でニュースを見ながら朝食を摂っていた遙は、そのニュースを見て絶句した。そしてアグルの狙いも少しづつ想像がついていくのだった。

そしてその日は丁度鞠莉の退院する日となっていた。

「退院おめでとうございませすわ」

「やっと退院だね、鞠莉」

退院するにあたって着替えだったりを持ち出すのに、鞠莉の両親は仕事でどうしても日本に帰ってこれなかったもので、それならばとダイヤと果南が手伝いという名目で退院祝いに来ていた、そして少し街中を歩いて回ってから、家へ戻る予定で、少し街を散策しているところだった。

「二人ともありがとうございませす」

「落ち着いたら色々行ってみよ？きつかけになるかもってみんな言ってたし。それに私ももう復学するから学校も同じくらいのタイミングになるのかな？」

「そうですね、それに家や学校でも何か手掛かりになるかもしれないし」

「そう言う果南とダイヤに対して「楽しみ」そう答える鞠莉だったが、ある人物を見かけてそちらへとかけていく。

「こんにちは、博樹さん」

鞠莉にその声をかけられ、振り向いた博樹だったが、顔色はとても悪いものだった。

「大丈夫ですか？顔色が…」

「そう続けるが、博樹は「鞠莉…」と言いかけたところで気を失って倒れてしまった。

「まさか病院に戻ってきちゃうなんてね」

「仕方ないですわ、目の前で倒れられたんですもの」

「せつかく病院から出られるようになったのにその日のうちに戻ってくることになるなんて…。そんな会話をする二人に鞠莉は意を決したように問いかける。

「二人に聞きたいことがあります…私たちが、『スクールアイドル』をやっていた時期の事です」

「そう切り出した鞠莉に果南は少しムツとしたような表情を見せると。

「この前話したことが全部、もうないっていつも言ってるじゃん」

「そう言い返すのだった。だがしかし鞠莉も」

「嘘です、だってその時の事…ぼんやりとで内容まではしっかり解らないけど夢に見る…とても、とてもつらい気持ちになるの…だから本当の事を知って、乗り越えたいの！」

涙を浮かべながらそう言い返す鞠莉だったが、ダイヤに「ここで言
いあうのはおやめなさい、病院ですわ」そう言われてしまつて引き下
がるしかないのだった。

「ごめんなさい、ちよつと外します」

そう言つて鞠莉は談話室のほうへ行つてしまった。

「もう今の鞠莉さんに全部話した方がいいかもしれないわね…」

「わかつてる、でも…」

ダイヤの言葉に同意するもまだ何か思うところがある様子だった。

その頃、この前アグルが現れたアメリカの山中では、以前ギャラク
トロンによつて倒された怪獣、ゾンネルの別の個体と思われる怪獣が
現れていた。

そしてあつという間に戦車部隊を殲滅させてしまったのだった。
突然ニュースもこの事に切り替わつてしまい、騒然とする病院の談話
室だったが、とある車いすの少年はこう言つたのだった。

「きつとウルトラマンが来てくれるから大丈夫だよ！」

と…。

それと時を同じくして、遥は家を飛び出すとガイアへ変身し、アメ
リカへと飛ぶのだった。

「また怪獣が…」

「最近どんどん増えていきますわよね…この春から世界中で…」

病室でまだ目の覚めない博樹を心配しつつ、スマホで怪獣のニュー
スの速報の記事を見ていた果南とダイヤだったが、突然博樹は目を覚
ますのだった。

「お前はまたそうやって、地球の意思に逆らおうとする！」

そう叫びながら起き上がると繋がっていた点滴を勢いよく引き抜
いて叩き付ける。

「ちよつとヒロ!?何やってんのさ?」

「そうですわ、まだ安静にしないと…」

そう言つて止めようとする二人を振り払い。

「地球を破滅へと導くのは、人間の愚かさだ！それを解つていて邪魔するやつを、俺は倒さなければならぬ！」

そう言つて病室から出ていこうとする博樹だったが、まだ本調子ではなくふらついていたので、その隙に果南は病室の出入り口へと先回りして出られないようにする。

「ならなんでもの時私を二回も助けてくれたの？もうやめよう？こんな、ヒロが辛いだけだよ……」

そう言つて両腕を広げる果南だったが、博樹はそれを押しつけて外へと向かう。

「俺が救うのは、この地球だけだ!!」

そう言い切つたタイミングで、突如地響きが起こり、地底から怪獣……ギールが出現した。

突然のことに騒ぎになる病院、そこにいる人々はみな、慌てて非難するべく外を目指す。

車いすの人、杖をついた人、看護師に肩を持つてもらつて歩く人、逆走つて行くお見舞いで訪れたであろう人……

「ちよつと待つてよ」

そう言つて博樹に追いつこうとする果南だったが、廊下に人が溢れていたため思うように距離は縮まらない。

「鞠莉さんは?」

ダイヤは病室から出た鞠莉の姿が見えないことに気が付くがやはり思うように身動きが取れないでいたし、何より杖をついていた老人が目の前で転んでしまい「大丈夫ですか？」そう言つて駆け寄り介抱していた。

そんな中博樹は前を通りがかった病室から聞こえた声に足を止め、そちらを見る。

「ウルトラマン、早く来てーウルトラマン!!」

そこにいたのは、地響きのせいで車いすが転倒してしまつたのか、倒れた自身の体勢と車いすを起こそうとしている少年の姿があつた。そして床についている方の手に握られていたのは一枚の画用紙だつ

た。

ただその少年と、その絵に視線を落とす博樹だったが、そこに描かれていたのは、手を繋ぐガイアとアグルの姿だった。

「大丈夫？」

後ろからそんな声とともに入ってきたのは果南と鞠莉だった。鞠莉がどこにいたかは知らないが、なんでも、外に出たはいいが少年の姿が見えなかったので心配で戻ってきたらしいことが、果南と鞠莉の会話から察することができる。

倒れていた少年を見つめるだけで何もしない博樹を果南は睨み付けてると。

「地球だけ救いたいんでしょ？早く行きなよ」

「果南さん、そんな言い方…」

言いすぎだと思った鞠莉はそう口を出すが、博樹はそのままどこかへと去ってしまった。

そして病院の屋上に上がった博樹は、こちらへまっすぐ走ってくる怪獣を見据えると。アグレイターを握りしめそちらへ視線を落した。

「無駄だと解っていて…それでも護るのか？人間を…それが、ウルトラマンだとかのかッ!!」

アグレイターはその問いに答えるかのように、弱々しいがそれでもはつきりと青い光を博樹に見せる。その光を見て決心がついたのか、アグレイターを右腕に嵌めると、その翼が開き海の力を開放する。

「あつ、お姉ちゃん見てウルトラマンだ」

二人がかりで少年と車いすを起こした果南と鞠莉だったが、少年がそう言っ指をさした方向を見る。

「あれは…」

「ヒロ…?」

二人の目に映ったのは、ギールを受け止めるアグルの姿だった。

ただ、世界中を飛び回った疲労のせいかわグルのライフゲージは初めから音を立てて点滅しているのだった。

それでも4本足で突撃するギールの上半身を抱え上げると、回し蹴りで吹き飛ばしたのだった。

「もしかして、エネルギーが少ないの?」

そう呟いた鞠莉の視線の先でアグルは膝をついてしまう。それでも少年は「頑張れ」と必死に応援していた。

アグルは長期戦になれば、たださえ疲弊している今の状態では確実に負けると判断し、ギールが起き上がり、マグマ弾を放つべく腹部の甲殻を開いた瞬間に、フォトンクラッシュの発射態勢に入る。

そしてギールから放たれたマグマ弾を押し返し、そのまま開いたままの腹部を貫く。

そのエネルギーに耐えられなかったギールの身体は粉微塵に吹き飛ぶのであった…。

「やった、ウルトラマンが勝った!」

そう言って大はしやぎする少年の後ろで、鞠莉はゆっくりとこちらを向くアグルと目が合う。

「…ッ!」

突然電流が走ったような感覚に陥ると、今度は頭痛が襲ってくる。それに耐えきれず蹲ると頭を抱えて身体を震わせていた。その様子に気が付いた果南が「ちよつ、どうしたの?大丈夫?」そう言って鞠莉の心配をする。

ともかく一度離れたほうがいいのかもわからない。そう思いつていると少年を探しに看護婦がやってきたので状況を説明し、少年を預けたのだが鞠莉はどうするのがいいのか頭を悩ませていた。

「大丈夫、ウルトラマンは何もしてこないよ」

以前ガイアに対してかなり恐怖心を抱いていたという話を聞いていたので、もしかしたらと思つてそう声をかけてみたが意味はない。

冷や汗を流しながら、荒い呼吸でようやく顔を上げた鞠莉は、アグルを見つめてこうつぶやくのだった。

「…ヒロ?」

その様子を見たアグルはそのまま青い光となって消えてしまったが、鞠莉は今青い巨人の事をヒロと呼んだ。やっぱりヒロが正体だった

たのか。そう思った果南だが、もっと重要なことに気が付いた。

今の鞠莉は博樹の事を覚えていなかったはず、一度病室は訪れたそうだったが彼は名乗らなかったと聞いているし、自分たちにもさん付けな今の彼女が博樹をあだ名で呼ぶなんてありえない。

「鞠莉…もしかして記憶が…？」

「か…なん？私…思い出した、何もかも…」

果南の問いに、そう答えたのだった。

17話 すれ違いの果て／明かされる想い

アグルが沼津の病院前でギールを撃破した頃、ガイアはアメリカでゾンネルと対峙していた。

(遅かったか…)

軍の戦車部隊が出動したというニュースは、家を飛び出す前に見ていたのだが現地に到達したときには、もう全滅してしまっていた。夜の闇に浮かび上がるのは月の光に照らされる怪獣と、燃え盛る戦車の残骸のみ…。

いくらウルトラマンといえど、一瞬でたどり着くことは叶わない。だがそれでも数分でもたどり着いたはずなのだが、それだけあの怪獣が協力だという事だろうか？

(それでも…)

負けるわけにはいかない、そう覚悟を決めたガイアは両手の拳を握りしめゾンネルへと駆け出すのだった。

だがゾンネルも大人しくやられる訳もなく、口から火球を吐いてガイアを牽制してくる。戦車部隊を殲滅したもので、その威力はかなりのものだが、ガイアは後ずさり回避し、ガイアスラッシュを放つが堅牢な外殻には傷一つ付かない。

それならばとガイアは顔面に蹴りを見舞い、肉弾戦でダメージを稼いでいくが1度距離が離れてしまったところに火球をもろに食らってしまい体制が崩れたところに、さらに追い打ちをかけるように突進攻撃をくらい吹き飛ばされてしまい、岸壁に激突してしまう。

『ピコン…ピコン…』

そのタイミングでエネルギーが危険域であることをライフゲージが赤く点滅し始めたことでそれを知らせる。

このままでは負ける…。そう思い止めを刺そうと歩み寄ってくるゾンネルに、フォトンエッジを放とうと両腕を広げエネルギーを頭部へ集め屈みこむ。

『やめてください…その怪獣だって、被害者なんです…』

「…ッ！」

以前アグルが呼び覚ましたゴメノスを怒りのままに撃破した時にダイヤに言われた言葉が脳裏によぎった事で、発射寸前で行っていたフォトンエッジを中断してしまう。

その結果、エネルギーはあたりに霧散してしまった。

だがゾンネルはそんな事など構いなしにガイアへ向かってくる。

しかし、ガイアもここで倒れるつもりはなく、再び腕を広げてエネルギーを集中させる。その予備動作はフォトンエッジに酷似していたが、ガイアが放ったのはそれではなく。普段ならそのまま振り下ろす両腕をそのまま前方へ突き出し、緑色の光線を放った。

『ガイアヒーリング』本来傷を癒したり回復させる目的で使用する技なのだが、今回ガイアはゾンネルに使用することによって、ゾンネルを癒すだけでなく、その怒りを鎮めようとしたのだった。

それを受けたことよって脚を止めたゾンネルだったが、暫く立ち止まってガイアを見つめ首を傾げたりしていたが、そのまま振り返ると本来自分が眠っていた場所へと去っていった。

ガイアはそれを見届けると、再び光となつて日本へ沼津へと帰還するのであった。

「果南ちゃん、どうしてスクールアイドルやめちゃったんだろ？」
「生徒会長が言ってたでしょ？東京のイベントで歌えなかったからだって」

放課後、練習中にふと千歌がそう口にしたので、そう善子が返す。
「でも、それくらいで諦めるような性格じゃないと思う」

「そうなの？」と聞き返す梨子に対して「うん、小さいころはよく一緒に遊んでて——」

『ここでやめたら後悔するよ、絶対できるから！』よくそう言っていたことを話す。

「そんなことが……」

「とてもそんな風には見えませんが……ハッ！すみません……」

相槌を打つ遙の隣で、そう漏らすルビィだったが、千歌は「もうちよつとスクールアイドルやってた頃のことかわかったらなあ……」と呟き囁も「聞くまで知らなかったもんね」と続く。

ここにいる全員が、ダイヤからその事を聞くまで知らなかったのだ。

「ん？」

ダイヤから？遙がそう思ったタイミングでみんな同じことを感じたのか視線が一斉にルビィへと向く。

「ピギツ……」

一斉に全員の視線が向いたことに驚いたのか思わず声を上げてしまいうるビィだったが、2年生三人が口々に畳みかける。

「ルビィちゃん、ダイヤさんから聞いてない？」

「小耳に挟んだとか？」

「一緒に住んでるんだもの、何かあるはずよ？」

上から順に、千歌、曜、梨子にそう問い詰められたルビィは耐えら

れなくなったのか、踵を返して走り去ってしまおう。

「あつ逃げた!」

「ギラン」

千歌がそう言うや否やなにやらそんな擬音を口にするのと駆け出した善子がルビイにコブラツイストをかける。

「墮天使奥義!墮天流鳳凰縛!!」

なんだそれは…そう呆れている遥をよそに花丸は善子に歩み寄るとその頭にチョップをかまし。

「やめるすら」

「あつ…ひゃい…」

そう言つて辞めさせたのだが善子の返事もえらく気の抜けた返事だったので思わず笑つてしまったのであった。

「…なによう…」

「いや、別に?」

笑つてる遥かに善子がジト目でそう聞いてくるので慌てて誤魔化するのだった。

「ルビイが知ってるのは、東京のライブで歌えなかったことくらいでそれっきりスクールアイドルの話はしなくなったので…ただ…」

「ただ…?」

その後、家に鞠莉が来てダイヤと何やら話している所をお茶を出しに行つた時に聞こえた姉の言葉を皆に伝える。

『逃げてる訳じゃありませんわ。だから、果南さんの事を逃げたなんて言わないで』

「逃げたわけじゃない…か」

そう呟いた千歌だったが、ここで自分たちが考えてもその答えは出ないだろう。

やはり、その事は3人に聞くしかない。そう思ったのだった。

「果南ちゃん、今日から学校くるって」

朝登校中のバスで、曜がそう切り出す。

「それに鞠莉先輩も退院したらいいですよ」

遙も昨日ダイヤからメールでそう聞いていたのでその事を伝えると「本当!?!よかった」そう口々に言う。

これでまた、自分たちの日常が戻ってくる。そう思うことができた。

「でもどうしたらいいんだろ…」

千歌は教室のベランダでそう頭を悩ませていた。

どうすれば3人の過去が解るのか、普通に聞きに行っても絶対に口を割らないであろう。

でも何がきっかけになったのかも気になるので話はしたい。でもそうすると絶対過去のことを掘り下げて聞いてしまいそうで…。

「何悩んでるの?」

そう言って千歌の隣にきたのは梨子と曜だった。

「果南!」

鞠莉は彼女の名を呼びながら、かつて自分たちが新曲として作っていた曲の為に制作していた衣装を目の前に広げて見せる。

「はあ…」

ため息が出た。記憶が戻ってくれたのは嬉しかったし安心したが、

今度はまたこの調子では呆れてしまう。
そして果南は鞠莉へと歩み寄ると…。

ふと千歌達3人は上を、三年生の教室のある方を見上げると、何やら1着の服がひらひらと舞い落ちてきた。地上まで落ちていくであろうそれを見つめる3人だったが。

「くんくん」

それが自分達の視線の高さまで落ちてくるとそうやって鼻をならす人物がいた。

「制服う！」

その正体は曜だった。そう叫んでその服目掛けて飛びついていった。

だが思い出して欲しい、ここは二年生の教室のベランダ。つまりは二階である。

「ダメエエエエエ！」

「あっ…」

千歌と梨子は同時に叫ぶと曜の腰に抱き着くと、なんとか転落を免れたのだった。

「これって…」

「スクールアイドルの衣装…?」

改めてその制服をよく見ると、どうやら衣装のようだった。そしてそれは3階から落ちてきた訳で…。

3人は3年生の教室を目指して階段を上るのだった。

「離して！離せて言ってるの！」

果南は自分の腰へしがみついて離さない鞠莉を引き剥がそうとしていた。

「離さない！良いって言うまで離さない!!」

鞠莉も鞠莉で離されてなるものかと意地になっていた。

その周りではクラスメイト達がどうすればいいものかといった様子で二人を見ていた。

「強情も大概にしておきなさい！たった一度の失敗でいつまでもネガティブに……!」

「うるさい！いつまでもはどつち?!もう二年前の話なんだよ！大体、今更スクールアイドルなんて私たちもう3年生なんだよ!」

「二人ともおやめなさい！みんな見てますわよ!」

その近くでダイヤが仲裁に入ろうとしているが、ヒートアップした二人は止まらない。

「ダイヤもそう思うでしょ?」

「おやめなさい！果南さんはもうスクールアイドルをやることはありませんわ」

鞠莉はダイヤに同意を求めるが、ダイヤにそれは無いと拒否されてしまう。

「どうして?あの時の失敗はそんなに引きずること?チカっち達だって再スタートを切ろうとしてるのに何で……」

「千歌とは違うの!」

そう果南が言い返すが、そのやり取りを見ている人間の中に千歌がいることには気が付いていなかった。

「いい加減に……しろおおおおお!!」

突如教室に怒声が響いたと思いきやそれを見たと千歌がドカドカと教室内に入り込んできた。

「もう!いつまでもなんだかよくわからない話をずうつとずうつと……!隠してないでちゃんと話しなさい!」

「千歌には関係な……あるよ!!」

果南の言葉を遮ってそう断言する千歌にダイヤも「いや、ですが……」と困惑気味だったが千歌はもう止まらない。

「ダイヤも鞠莉さんも、三人そろって放課後部室に来てください」
「いや、でも…」

何か言いたげな果南だったが千歌はさらに言葉を強める。

「いいですねッ!!」

「はい…」

千歌の迫力に圧されたのか3人はそう折れてしまった。

「千歌ちゃん凄い…」 「三年生に向かって…」

その様子を見ていた曜とルビイに言われ、そこで千歌は自分のしたこと気が付く。

「あ…」

「だから、東京のイベントで歌えなくて」

放課後、嫌々部室に訪れた果南は気に食わないのか椅子にふんぞり返ってそう言い放った。

「それはもうダイヤさんから聞いた」

千歌がそう言い返すと果南はダイヤを睨みつけるが、ダイヤはそれに一瞬怯むがまた口を結ぶとそっぽを向いてしまう。

「でもそれで諦める果南ちゃんじゃないでしょ?」

「そうそう、チカつちの言う通りよ、だから何度も言ってるのに…」

鞠莉がそう言って千歌の後ろで彼女の肩を持つ。

「何か事情があるんだよね…?」

その問いには果南は答ええない、恐らく凶星だろう。

「ね?」

そう言って念を押すとようやく返事が返ってくる。

「そんなものないし、さっき言った通り私が歌えなかっただけ」

「あー! イライラするうう!」

千歌がそう言って頭を抱えると「その気持ちよく解るよ、腹立つ

よねコイツ」そう言って鞠莉は果南を指さす。

「勝手に鞠莉がイラついてるだけでしょ？」

そう果南が言い放つが「でも」とルビイがここで口を挟む。

「前見かけたとき、踊ってたような…」

以前たまたま練習中にランニングしている所をみかけ、後を皆でつけた際踊っている所を見かけたらしい。らしいというのは、遥はその場面には最初にバテてしまったためついていけなかったからだ。

よほど恥ずかしかったのか、顔を赤らめるとルビイを睨む。ルビイは「ピギャツ!？」と悲鳴を上げるとそれ以上は何も言わなかった。

「おく赤くなってる」

「うるさい」

鞠莉がそう茶化して顔を覗き込むが、果南は顔を背ける。

「やっぱり未練あるんでしょう？」

そう言われると無言で果南は立ち上がると、

「うるさい、未練なんてない。もう嫌になったの、スクールアイドルは絶対やらない…!」

そう断言し、果南は部室から出ていく。そんな彼女を、誰も止めることはできなかった。

「ダイヤさん」

突然梨子に声をかけられてダイヤはピクツつと一瞬だけ体を震わせる。

「何か知ってますよね？」

「いついえ…? わたくしは何も…?」

「じゃあどうして果南さんの肩を持ったんですか？」

「そっそれは…」

痛いところを突かれたのかそう誤魔化すように言いながら立ち上がると、次の瞬間全力で部室の外へ走り去って行った。

「善子ちゃん!」

千歌が善子を呼ぶと察したのかダイヤを追いかけると、この前ルビイにしたように再びコブラツイストを決めるのだった。

「だからヨハネ〜!」

やはりそこは譲れないらしい…。

「やっぱり姉妹ずら」

そう呟く花丸の視線の先には「ぴぎやあああああああ！」と悲鳴を上げるダイヤがいた。

「わざと!?!」

長くなるからと黒澤家へと場所を移したのだが、そこで2年前に真実が語られたのだった。

「そう、東京のイベントで果南さんは歌えなかったんじゃない、わざと歌わなかったのですわ」

その発言に鞠莉の反応は下級生よりは冷静だった。

「どうして?」

そう鞠莉は聞くが善子は「まさか闇のまじ…」茶々を入れようとしたので花丸が口を押えて黙らせた。

「どうして?」

「あなたの為ですわ」

「わたしの?」

ダイヤは答えるが、鞠莉には意味が解らないといった様子だった。横で聞いている遙も解らなかった。なぜそれが彼女のためと成り得るのか?ただ悔しい思いをして終わってしまうだけだと思うのだが…。

「覚えていませんか?あなたはあの日、足を怪我していたでしょう?」

その日は、足を練習で捻挫していたのでテーピングをして本番に臨んだのだ。だが、それは練習のせいで負ったものでとてもその状態で満足のいくパフォーマンスはできないことは明らかだったが、彼女は2人を押し切ってステージに立ったのだ。

「わたし、そんなこととして欲しいなんて一言も…」

「あのまま続けていたら、どうなっていたかと思っっているんですの?」

鞠莉の言葉にダイヤはそう反論する。

「あのまま続けていたら、事故になることもあり得た…」

「でも…」と鞠莉が言い淀んでいると「だから逃げたわけじゃないって…」そうあの日のダイヤの言葉にルビィが納得する。

「でも、その後は？」

「そうだよ、怪我が治ったら…つづけたって…」

そう曜と千歌が口を挟むが、鞠莉の声は降り始めた雨による雨音によつてかき消されそうだった。

「そうよ…花火大会に向けて、新しい衣装もダンスも完璧にして…なの…」

夏祭りでは完治させ、練習を積む時間も十二分にあつたはずだった。それなのに、なぜ…。

「心配していたのですわ、あなた留学の話を全部断っていたでしょう？」

「そんなの当たり前でしょう!!」

思わずそう叫んでいた。自分にとって浦の星でスクールアイドルをやる自分が自分にとって最も大切なものだったのだから。

「果南さんは思っていたのですわ。自分たちのせいで鞠莉さんの未来の色々な可能性を消してしまうのではないかって…」

「まさか…そんなことで…」

鞠莉はそれで全てを悟ってしまった。元々もつと他の高校へ進学することも勧められていたがどうしても浦の星がいいと言つて譲らなかつた。スクールアイドルの活動は最初は二人と違って元々興味は無かつたのだが、今日の逆で果南に「やるつて言うまで離さない」と言つてハグされて最終的に折れた形だった。

でも留学の話を断っていたことを後から知つて、自分を誘つたことに対して責任を感じてしまったのだろう。だからあんな終わり方になつてでも…そういう事だったのだろう。

ふらふらと立ち上がつて、玄関の方へ向かおうとする鞠莉にダイヤは「どこへ行くんですの？」と問いただす。

「ぶん殴るー！一度も相談しないでそんなこと…!」

「おやめなさい、果南さんはずっとあなたの事を見てきたんですのよ」できればあんな別れ方はしたくなかつた。3人が納得できる形で

終わらせたかった。でもそれは不可能だと思った、だからこれが一番マシな終わり方だと…そう思ったのだ。

そして果南も鞠莉を思うからこそ、自ら悪役になってまで鞠莉の為にと行動をした、ずっと鞠莉を見てきたから…。

「あなたの立場も、あなたの気持ちも、そしてあなたの将来も…誰よりも考えている」

「そんなのわからないよ、どうして言ってくれなかったの？」

そう真相を語るダイヤに鞠莉は聞く。

「ちゃんと伝えていましたわよ？あなたが気が付かなかっただけ…」

鞠莉は黒澤家を飛び出していった、バケツをひっくり返したかのような土砂降りの中、傘もささずに自分がどんなに濡れても気にも留めずに。ただ走り続けた、転んでしまってもすぐに立ち上がって…。

今彼女の中にあるのは、あの日々の思い出。3人でスクールアイドルとして活動していた毎日、あれはやっぱり3人みんなにとってかけがえのない日々だった。それを取り戻すために…彼女は走ったのだった。

「ヒロ…どうして…？」

果南は家に戻ってきていた。結局あの日鞠莉の記憶が戻ったとき、一応検査だけと再び病院に戻っていたが、博樹は怪獣を倒した後そのまままた行方が分からなくなっていた。

地球は救うが人類を守る必要はない。そう言い続けてきた彼がどうして再び自分たちを守ってくれたのかわからない。もし叶う事なら、また一緒に笑いあえる日が来てほしい。

自分が鞠莉の事をあんな風に突き放しておいてそれは虫のいい話かもしれない。それでも今の彼をそのままにしておくことはできない。そう感じていた。

そして彼と…湊博樹と初めて出会った日の事を思い出していた…。

18話 明かされる過去／未熟DREAMER

「ねえ?どうして一人でいるの?」

初めて声をかけたのはいつだっただろう?小学校の低学年の頃、ずっと教室の隅にいた彼に自分から声をかけたのは間違いない。

「関係ない、ほっといてくれ」

少年はそう突き放すように言い捨てたのだった。

「なんで?一緒に遊ぼうよ」

「子供の遊びなんか興味ない」

「君も子供じゃん、わたし松浦果南。君は?」

「…湊博樹。どうしておれに構う?周りみたいに『親無し』とか陰で言っただけいい」

「え?」

自己紹介をしたら、少年も名前を覚えてくれたがその後の発言に思わず言葉が詰まる。

後から少し掘り下げて教えてくれたのだが、彼は物心ついてすぐに事故で親を失っていたのだ。そして子供というのは残酷なもので自分たちと違う存在は敬遠してしまうもので、その結果孤立してしまっていたのだ。

それから毎日声をかけ続けるのだが、よくて「ほっといてくれ」悪い日には睨み付けるだけで素通りする。でも果南も折れなかった。どうしてかは解らないが、恐らくやめてしまったら負けた気がするとか、そんなことを当時の自分は思っていたのだろう。

そんな日々もひと月程たって、ようやく進展が訪れた。

「お前も懲りないんだな?」

「だって人数足りないんだもん」

呆れ気味でそう言った博樹に、果南は頬を膨らませてそう答えた。

「…今回だけだぞ」

「ホント?ありがと」

それから「人数が足りない」と言っただけで博樹を誘っては、みんな遊ぶようにしていたのだった。

それから博樹を周りもだんだん受け入れていったし、博樹も元々の言い方のキツさや自分から積極的に接しようとしないとところは変わらなかったが、少しずつ周りに馴染んでいった。

そして、ダイヤや鞠莉とも話すようになって、そして中学に上がるころには天才少年と周りに騒がれ、色んな発明をするようになっていった。その頃には世界中で若い天才たちがネットを通じて情報を共有したりしていたらしく、博樹は最年少メンバーとしてちよつとした有名人だった。

「ねえ？今度は何作ってるの？」

「クリシスって言って、まあ果南に解るように言えば…世界一凄いコンピュータってところだ」

「なんかそれ馬鹿にしてない？」

「してないさ、ただ難しい言葉を避けて俺が説明できない」

中学の時、休み時間も何やらノートPCを持ちこんでなにやらやっていたので聞いてみたところ、そういう返事が返ってきたのだ。

「博樹さん、また学校にそんな物持ち込んで…」

「いいじゃない、また例のジーニアスグループの発明なんですよ？」

休み時間とはいえ教室で私物のPCを触っているのは如何なものかとダイヤに苦言を呈されるが、鞠莉はアルケミースターズでの発明だということを察してフォロワーを入れる。

「まあな、今作ってるプログラムを今日中になんとか区切りをつけたいんだ」

そう言って休み時間はずっと何やら唸っていたっけ。

そんな彼は15歳、高校に上がる頃には『クリシス』そう呼ばれる世界最高のスーパーコンピュータを完成させていた。

でも、そんな時だった。完成させて、世間でもニュースになるような出来事だったのに、彼は開発に関わっていた時より何か悩んでいるように思えた。

でも聞いても答えてくれないのは今までの付き合いで解っていたし、何より専門的なことだとばかり思っていたから力になれるとも思えなかった。

そんな時だった、東京のイベントに招待されたのは。そしてイベントが終わった数日後、彼は学校を辞めて私たちの前から姿を消した。そんな訳で、彼自身は私たちがスクールアイドルを始めた頃は開発が佳境に差し掛かっていてあまり接する機会もなく、できたらでできた居なくなってしまったので、高校に上がってからずっと疎遠だったといつて間違いない。

そんな彼が春になって戻ってきて、役二年ぶりに再会したのだが。ウルトラマンとなっていて、地球を救う為に人類を滅ぼす。そう言った時はショックだった。

元々人に心を開くタイプでは無かった彼だが人を傷つける事は嫌っていたはずだったし、何よりみんなの為にとアルケミースターズに入ったはずだった。

そんな博樹がなぜ、怪獣を呼び覚まして人を襲わせたのか？どうして鞠莉に記憶を失うような怪我を負わせたのか？そしてどうして自分の事は助けたのか？きつと二年前からずっと悩んでいるのだろう。

でも今の自分にはどうする事もできない…。ましてや鞠莉に対して自身も突き放すようなことを言っている自分には偉そうなことは言えないか。

そう自虐的な笑みをもらすと一通のメールが届く。

『今すぐ部室に来て』

ただそれだけが記されたメールの差出人は鞠莉だった。

いい加減彼女にも諦めてほしい。そんなことを思いながら夕立が止んだのもありもう一度学校へ向かうのだった。

「何の用？」

「いい加減、決着をつけようと思って」

わざと不機嫌な声音を作って部室に入りながら鞠莉に声をかけるが、鞠莉の返事も今までの雰囲気とは違っていた。それに一步部室へ

入ると、『ぴちゃり』と水たまりを踏んだような感覚に陥り、足元を見ると鞠莉の方へとかなりの量の水滴が落ちていた。

まさかあの雨の中を傘もささずに外に出ていたのだろうか？そんなことに一瞬気をとられるがこちらに背を向けたまま鞠莉は話し始める。

「どうして何も言ってくれなかったの？思ってる事ちゃんと話して！」

果南が私の事を想うように私も果南の事を考えてるんだから!!」

ダイヤはついに全部教えたんだな。ならもう誤魔化すことなんてできない。そう覚悟を決めるのだった。

「将来なんかどうでもいい…留学？全く興味なかった！だって果南が歌えなかったんだよ!?!放っておけるはずない！」

そう言つてこちらを振り返つた鞠莉は目に涙を浮かべていた。思わず果南は目をそらしてしまう。

こんなやり取りをするために二年前にスクールアイドルを諦めた訳じゃない…こんなはずはなかった…。

春に内浦に戻ってきた時も、この二年間を無駄にしないために冷たく突き放してきたけどやっぱり本気でそんな事を思っていた訳じゃなかったし、この前怪我で入院して記憶喪失になったと言われた時は頭の中が真っ白になったし、涙も出た。

口ではどれだけ強く突き放すことを言つて悪役になろうとも、鞠莉は果南にとつて大事な親友なのだ。

『パシィン』

唐突にそんな音がした。一瞬何が起こつたか解らなかつた果南だったが頬の痛みで自分が鞠莉にビンタされたことに気が付く。

「私の果南を想う気持ちを、甘く見ないで!!」

その叫びが、鞠莉の本心だった。

「だったら素直にそう言つてよ！リベンジとか負けられないとかじゃなくて、ちゃんと言つてよ！」

どうして一番肝心な事は言ってくれなかったのか。言ってくれればあんな真似する必要もなかった。二年間こんな気持ちを抱えなくて済んだのに、再開した後も冷たくし続ける必要もなかった。

そう思うと、こちらも強めの言葉で言い返してしまう。

「だよね…。だから…」

そう言つて鞠莉は自分の頬を指さす。私がやったように果南も…。これでこの話は終わりにしよう。そういうつもりだろう、それを察した果南は右腕を振りかぶる。

そこで果南は、鞠莉と初めて出会った時の事を思い出した。

小学校低学年の頃、ホテルのオーナーの娘が海外から引越してきたと聞いて敷地内にダイヤと二人で忍び込んだっけ。

ダイヤは「見つかったら怒られますわ」と生真面目なことを気にしてたけど「平気だよ」って返したらそれを聞かれたのか、こちらに気が付いた鞠莉に「あなたは？」って聞かれてなんて返そうか迷つて咄嗟に出た言葉が…「は…ハグ…」

やっぱり、あの時と同じようにしよう。そう思つて振り上げた手を下ろして…。

「ハグ、しよう？」

そう言つて両腕を広げると、鞠莉は涙を流して泣きながら胸に飛び込んでくる。もうきつと二度とこんな日は来ない。そう思つていた果南も再びその日が来た事に思わず涙が流れた。

遠くから二人の様子を眺めていたダイヤは校門まで戻つて安堵のため息をついた。

「ダイヤさんつて本当に二人が好きなんですネ」

そこで千歌達7人がダイヤを待ち受けていて千歌がそう声をかける。

「それより、二人を頼みましたわよ。ああ見えて二人とも繊細ですから」

照れ臭そうに誤魔化しながらダイヤにそう頼まれる。

「それなら、ダイヤさんもいてくれないと」

「私は生徒会長ですわよ？そんな時間はとても…」

千歌からの返しは想定外だったのか驚く仕草を見せた後そつぽを向いてしまう。

「それなら大丈夫です、鞠莉さんと果南ちゃんと、あと7人もいるので」

他のみんなもダイヤへ笑顔を向ける、彼女はどうしたらいいか迷っている様子だったが、ルビィが彼女の、姉であるダイヤの正面に立つ。

「親愛なるお姉ちゃん、ようこそAqoursへ！」

そう言つて差し出したのはかつて作った衣装だった。曲とダンスも作成中だったがあの一件によって結局一度も袖を通さなかった衣装…。

ダイヤもほほ笑み、その手を取った。

『未熟DREAMER』

この前話した、花火大会で9人となってから初めてステージで披露したこの曲はかつて三年生が三人で活動していた時に作ろうとしていた曲。それが二年の時を経て9人となったAqoursによって完成したのだった。

花火をバツクにステージ上で踊る彼女達の姿はとても輝いていた。

そして博樹もまた、会場の端からそのステージを見ていた。

「よかったな、お前の言っていた。かけがえのない時間を取り戻せて」

二年前、海外でたまたま鞠莉の留学先の学校の近くの研究所でパールの基礎設計を行っていた博樹は鞠莉と数か月ぶりに再会していた。

「ヒロじゃない、どうしてこんなところに？」

「鞠莉：お前こそスクールアイドルはどうした？」

そこで博樹は自身がアグルの光を手に入れ、クリシスの示した地球を根源的な破滅から救うには人類を排除するしかない。それを実現させるための準備を始めるために故郷を離れた直後に幼馴染達の間で何があったのかを知る。

「ねえ？ヒロはどうして学校を辞めてしまったの？みんな心配してたわよ？」

「もう俺には行く必要がないと思ったからやめただけだ。それにアルケミースターズなんて仲良し集団もな」

「どうしてそんな事言うの？この前まであんなに楽しそうに…」

「お前には関係ない」

以前は大変そうではあったが楽しそうに開発に打ち込んでいた博樹は今となっては正反対と言っている思想で行動している。その事を指摘されてしまい思わず語彙が強くなり睨み付けてしまう。

「…っ、でも放っておける訳ない…何があったの？」

『何だよ喧嘩か？』

心配そうに話しかける鞠莉に何か言いたげな博樹だったが、それは乱入者によって遮られる。

「姉ちゃんこんなやつ放つといてオレらと遊ばないか？」

「てかこいつ東洋人か？何しに来た？」

俗にいう不良というやつだろう、博樹も標準的な体系だし背も170程度なのでこの国の同年代と比べると小柄に見えてしまう。それに不良たちは結構がっしりした体系をしていたので、ここは逃げるべきだと思った鞠莉だったが、2人組の不良の片割れに肩を掴まれてし

まう。

「やめて離して！」

鞠莉は叫びながら抵抗するが体格差もあって全く振りほどけそうにない。

「俺が何しようとお前たちに関係ない、今すぐ立ち去れ」

博樹は不良たちの神経を逆撫でするようなセリフを吐くので鞠莉は一瞬呆気にとられてしまう。

「何だとお前生意気だな」

そう言つてもう一人の方の不良が博樹の胸倉を掴むが、博樹はすぐさまそいつを殴り飛ばすのだった。

「てめえ！」

すぐさま立ち上がると殴り返すが、博樹はそれを捌いて見せていたが、鞠莉を掴んでいた方が加勢に入ったことで一転して一方的に殴られてしまう。

「やめてー！」

そう鞠莉が叫んでも聞く耳など持たない不良だったが、次の瞬間。博樹の姿が光ったと思うと不良二人は吹き飛ばされ壁に激突して気絶してしまつたのだった。

「え……？」

鞠莉は状況が飲み込めず暫く呆気にとられていたが光の中から博樹の姿が見える直前、青い身体を持つ見たことのない存在を目にしてしまう。

博樹はそのままその場から立ち去ろうとするが、鞠莉は「待って！」と声をかけたので彼は立ち止まる。

「ねえ？今のがヒロの変わってしまった原因なの？その姿は何？」

アグルの姿を見られてしまった博樹は、観念したのかクリシスの予測した事、それを踏まえて自分が何をしようとしているのか。それを全て話したのだった。

「だったら私も手伝う」

「本気で言ってるのか？第一、何ができる？」

「クリシスの開発だつてウチの親のグループが資金提供とかしていた

のよ？そのメンバーのヒロの支援だつてうまく誤魔化せば場所とかくらは私でも何とかして上げれる」

鞠莉はもう博樹を説得して止めることはできないと思った。だから協力すると言い出したのだった。

最初は幼馴染一人に重い十字架を背負わせたくないという気持ちからだった…。それは博樹も察していたんだと思う。でもそれはやがて、彼なら引き返せる段階で無理だと理解して道を踏み外さないで済ませてくれるはず。だからそれまで彼が一人ぼっちにならないように…。

そんな思いが変わっていった。そして鞠莉が日本に戻ったとき、同じタイミングで根源的破壊招来体が現れ、それに対応するかのようにもう一人のウルトラマンが現れた。だから行動を起こすために博樹も日本へ戻ってきたのだった。

「鞠莉、もうお前の助けはいらない、だからこれでサヨナラだ」

そう呟いた博樹は踵を返すと、お祭りの会場から立ち去るのだった。

「それにしてもA q o u r s かあ…」

パフォーマンスを終えて、舞台裏へ戻った時にふと果南がそう切り出した。

「私たちのグループもA q o u r s って名前だったんだよ」

「え？そうなの？」

「そんな偶然が…」

驚く千歌の隣で梨子は顎に手を当て何やら考え始める。

「私もそう思ってたんだけど…」

果南は偶然か鞠莉の入れ知恵かと思っていたのだが、鞠莉も何も知らないらしい…。

そこまで考えたところで一人輪から外れて余所を見ている人物に視線が向く。

「千歌達も私も鞠莉も、多分まんまと乗せられたんだよ、誰かさんに」

全員の視線の向く先は、きつとここにいる誰よりもスクールアイドルが大好きで、二年間ずっとその気持ちに蓋をし続けてきた生徒会長だった。

そしてそのステージを遠く離れた場所で木の枝に腰掛けて眺める人物がいた。

「綺麗…でも、あの花火みたいにもうすぐ全部消えてしまう…ヤツがもうすぐ来る。そうなれば、もうこの星は終わり…：そうなればもうここに用はない。残念ね、お姉さん…：あなたの輝きも花火のようにすぐに消えてしまうの」

会場から遠く離れた場所から A q o u r s と花火を眺めていた少女はそう抑揚のない言葉でそう呟くが、その表情はどこか寂しげだった。

そして、座っていた木から飛び降りると夜の闇へと溶けていった。

まるで最初から少女など居なかったかのよう。

地球に、過去最大の脅威が迫ろうとしていた―。

19話 シャイ煮はじめました／星の夜に

「ここは…？」

遙は気が付いたら辺り一面が砂に覆われた場所にいた。

ここはどこなのだろう？なぜこんな所に自分はいろのか？何か手掛かりがあるはずと思ひあたりを見渡すと二つの砂丘があった。

その中の一つ、自分の目の前にある砂丘は、まるでガイアの頭部を模しているようだった。

まさかと思ひ足元を見ると、ライフゲージの形で砂が盛り上がっている。そんなはずはない、そう思つて足元の砂を掻き分けると、光を失つたライフゲージが浮かび上がる。

あり得ない…そんなはずはない…そう思ふ遙だったが、もう一つの砂丘はアグルを模したような不自然な形をしていた。

—まるでここは、ガイアとアグルが争つた結果、砂漠と化した地球のようだった。

「うわあああああああああああ！」

頭を抱え絶叫する遙だった。これは一体何なんだ？そう考えるが答えなどでない。

「…きて…お…て…るか…」

そんな声が聞こえる。そこで遙は自分がさっきまで見ていたものが夢だったことを理解すると同時に意識が覚醒した。

「ゆ、夢か…」

「大丈夫？かなりうなされてたわよ？」

どうやらかなりうなされていたらしい、時計を見るとまだ普段起きる時間より小一時間程早い時間帯だった。

それに夏休みに入ったので部活があるとはいへ、いつも通りの時間に起きる必要もない。

「うん、大丈夫だよありがとう。母さん」

部屋が一階と二階で離れている母親が心配して起こしてくれたようだった。

「それならいいけど…汗もビツシヨリだしシャワー浴びたほうがいいわね、お湯沸かすから浴びてきなさい」

「うん、そうするよ」

（あれは何だったんだろう…？）

あの夢は以前ウルトラマンの力を手に入れた時のように何か意味があるのではないか？ そう思ったがやっぱり答えは思いつかなかった。

（君はどうして僕に力を授けてくれたんだ？ 僕にこの力で何をさせたんだ？）

母親が出て行った後、エスプレンダーを取り出して、ガイアの光にそう問いかけるが、やっぱり光は何も言ってはくれないのだった。

「あついで」

「ずらあ…」

「天の業火に、闇の翼が…」

夏の炎天下の中屋上に集合したメンバーだったが、千歌と花丸はあまりの暑さに肩を落とし、日よけのつもりなのか黒いローブを羽織った善子も暑さにやられていた。

「その服やめたほうがいいんじゃない？」

「全くだ、そもそも黒色っていうのは熱が籠るんだから…」

そう指摘するルビィに遥も同意する。

「それより、どうしたんですか？ 全員集めて」

曜がこの場に全員を集めたダイヤにこの集まりの目的を訪ねと、ダイヤは「ふふふ…」と不敵な笑みを浮かべ。

「さて? いよいよ今日から夏休み…」

「サマーバケーションといえば…?」

そう言つて鞠莉が乗つかつてくると、ダイヤは「はい、そのあなた!」と千歌を指さす。千歌は話の意図が全く解らないといった様子で戸惑いつつもなんとか答える。

「やっぱり、海だよね…」

「夏休みはパパが帰ってくるんだ」

その次は曜だった。

「マルはお婆ちゃん家に」

これは花丸。

「夏コミ!」

これはローブを翻し大げさなポーズをとる善子が。

夏コミなんてイベントあったなそういえば…。なんて遙が考えていると、ダイヤは回答が気に食わなかったのか、わなわなと肩を震わせ。

「ブツブツですわ!」

いきなりそんな怒声を上げるものだから、一部を除いてビクツ!つと体を震わせた。この人こういうキャラだっけ?

「あなた達それでもスクールアイドルなのですか? 片腹痛い片腹痛いですわ!」

さすがにこの暑さで屋上で話し込むのはしんどいという事で部室へ場所を移したのだが、今度は何やら円グラフを書いた紙をホワイトボードに張り付け始める。

「いいですか皆さん? 夏といえば…」

そこまで言いかけてダイヤは視線を移し、「はいルビィ」と妹を指さす。

「多分、ラブライブ!」

話が読めてきたのか、そう自信満々に答えるのだった。

「流石は我が妹、可愛いでちゆねよくできましたあ」

そう言って妹を猫なで声で褒めながら頭を撫で始めた。

「がんばルビィ」

満更でもなさげなルビィはルビィで決め台詞をポーズ付きで言うてくれるが、呆れ顔の善子に。

「何？この姉妹コント…」

「あはは…」

そんな事を言われてしまいが遙も思っではいたが自身のダイヤのイメージからかけ離れていたので苦笑いを浮かべるしかなかった。

「コント言うな!!」

普段とはかなり違う口調で囁み付くダイヤだったが、気を取り直して続ける。

「夏といえばライブ！その大会が開かれる季節なのです!!」

するとダイヤはホワイトボードに張り出した紙を指刺し。

「ライブ予選突破を目指して、A q o u r sはこの練習メニューをこなします！」

そう宣言するのだった、紙の正体は練習メニューと一日の時間割を書いた円グラフだった。

遠泳10kmやランニング15kmに腕立てや腹筋を100回などど正直無茶苦茶なものだった。オリンピックでも目指すつもりなんだだろうか？

「これは私が独自に入手した、sの練習メニューですわ」

「お姉ちゃん凄いや！」

ルビィは目を輝かせていたが他のメンバーも遙と同じで無茶苦茶だと感じたのだろう。訝し気な視線を送っていた。

「こんなの無理だよ…」

そう呟く千歌だったが、

「ま、何とかなるでしょ」

「そうそう、僕もこんなのやったら人が出るとおも…え？」

流星にこれをこなすのは無理がある、そう言いたかったが一名何とかなると言っただけのける人物がいた。果南だ、これには流星にキョトンとしてしまう遥だったが、

「熱いハートがあれば何でもできますわ！」

一昔前のスポコン漫画みたいな事を言い始めるダイヤに対して曜は、

「どうしてこんなにやる気なの？」

そう疑問を口にするのだったが、それに答えたのは一番はしやぎそのうな人物だった。

「ずっと我慢してた、今までの気持ちにシャイニーしたのかも」

二年間ずっと誰にも明かせず押さえつけてきた気持ちの蓋が外れた反動という事なのだろうが、だからこのメニューをこなせるかはあくまで別問題であって…。

「何をぐちゃぐちゃと…さあ！外へ行つて始めますわよ！」

ダイヤは張り切っているが周りは置き去りになっていた。

「そういえば千歌ちゃん、海の家の手伝いがある。って言ってなかった？」

曜がここでわざとらしくそう切り出した。

「ああ、そうだよそうだよ。自治会で出してる海の家を手伝うように言われたのです。」

こちら芝居臭いしやべり方をしますが、嘘ではないらしい、本当に毎年この時期にやっていることのようなようだ。

「あ、わたしもだ」

果南も家のダイビングショップの手伝いがあることを思い出す。確かに夏休みは一年で一番繁盛しそうなイメージがあるし、手伝わないわけにもいかないだろう。

「そんなあ…特訓はどうするんですの？」

ガックシと肩を落とすダイヤだったが、

「残念ながらそのスケジュールでは…」

そう曜が申し訳なさそうに言うのと千歌も。

「モチロン、サボりたいわけではなく…」

そう付け足すと、ダイヤは腕組みをして暫く考えると、代案を思いついたので凄く悪そうな顔で不敵に笑う。「ひっ…！」と千歌と曜は悲鳴を上げる。

まさか海の家を手伝いながらこれを全てこなせとでもいうのだろうか？そう戦慄していると鞠莉から助け船が出た。

「じゃあ全員で海の家を手伝って、涼しいモーニングアンドイブニングに練習したらいいんじゃない？」

「それ賛成すら」

花丸もその代案に賛成するが、ダイヤは気に入らなそうな様子だった。

「そんなあ…それでは練習時間が…」

「それなら、夏休みだしうちで合宿にしない？」

そう千歌が切り出したのだった。

「合宿？」

そう全員が反復する。

「ほら、うちって旅館でしょ？頼んで一部屋借りれば全員泊まれるし」

「移動がない分、練習できるしね」

そう果南は言うが、花丸はまだ懸念がある様子だった。

「でも、全員でいきなり行って大丈夫ずらか？」

彼女の言い分はもつともだった。この客入りがよくなるであろうシーズンに一部屋使えなくなるだけでも不利益になる可能性は高い。

「大丈夫、何とかなるって。じゃあ決まり！」

だが当の千歌はそんなことは全く考えている様子はなかった。

「それでは明日の朝四時、海の家に集合という事で！」

ダイヤのその言葉でその日は解散となったのだが、全員が明日その時間に起きれる気はしなかった…。

雲一つない青空、日の光を反射させ輝く海、そこで千歌達は各々水着で大はしゃぎしていた。

こうなる気はしていたが各々が海水浴を楽しむ光景を見て梨子のため息が出た。

「結局こうなるのですね…」

腕組みをしてそう漏らすダイヤだったが、花丸はダイヤに対しても不満があるようで。

「朝四時に来たら、マルと遥君以外誰もいなかったぞら」

そう嫌味たらしく言う。

「当り前よ、そんなの無理に決まってるじゃない！」

そう善子が皮肉を垂らす。結局言い出しつぺのダイヤですら寝坊して現れなかった訳だからこれには何も言い返せない。

「ていうか、遥はなんで寝てるの？」

そう梨子が言うと、全員の視線が花丸の隣で気持ちよさげに寝ている遥に向く。

「遥君、朝マルが来た時はもういてー」

それは朝の四時前の事だった、花丸が時間通りに海の家の前に到着するとすでに遥は海を眺めていた。

「おはよう遥君、早いぞらね」

「あ、おはよ花丸ちゃん。なんか眠れなくてね」

そう花丸の方を振り向いた遥は目にクマができていた。

「大丈夫？クマできてるよ？何かあったの？」

「大丈夫だよ？ちよっと、怖い夢を昨日見ちゃって…それで眠れないのかも」

「夢？」

心配そうにしている花丸に対して、遥は全て説明するわけにもいかないの、申し訳ないと思いつながら嘘にならないように説明する。

「うん、ウルトラマン同士が争って地球が砂漠になっちゃう夢…かな？」

「そっか…でも二人で力を合わせて戦ったこともあるずら。だからきつとそんな事にはならないと思うずら」

そう優しく語り掛ける花丸に遥も「そっか…そうだよね」と答えるのだが、まだ納得しきれてはいないようだった。

「あのロボットと戦ったのは、きつとどちらも地球を守りたいからだ」とマルは思ったずら、きつと目指してるものは同じだから、ね?」

目指しているものは同じ。確かに花丸の言う通りだ、彼も地球を救う為に戦ってくれた。ただそのやり方が違うから反発しあうだけで、その結果地球を滅ぼす事になってしまうことは望んでいない。

「その通りだよね、ありがとう」

「どういたしまして」

「なんか、眠くなってきたかも…」

花丸にそうほほ笑みながら礼を言う遥だったが、あの夢への恐怖が薄れたことで今度は睡魔が襲ってきたのだ。

「練習始まったら起こしてあげるから、寝てていいずらよ」

「うん、ありが…と…」

そう言う遥は眠ってしまった。

「そんなことが…」

「きつと梨子ちゃんを青いウルトラマンが攻撃したりしちやったから、心配になったんだと思う」

そう花丸が梨子に対して答えるが、ガイアの正体を知っているダイヤは遥が抱え込んでいる不安はきつとそれだけではない、そう思うのだった。

「遥さんはもう少し寝かせてあげましょうか」

「そうずらね」

とりあえず手伝いが始まるまで寝かせてあげよう、そう話をする。今度はダイヤがきよろきよろし始める。

「はて、そのお店はどこですか?」

真後ろにあるぼろい海の家と書かれた小屋を視線に入れないうよう

にするダイヤに花丸は「現実を見るすら」と冷たい視線を送る。

残念だが自分たちが手伝う海の家は古い簡素な作りの小屋だった。肩を落とすダイヤだったが、ほかにも要因があった。

そのすぐ隣にある海の家は所謂南国風な作りとなっていて、海水浴の客もそちらの方にほぼ流れてしまっているのだから。

「都会すらあ」

花丸はただ一人それを見て嬉しそうにしていた。

「都会の軍門に下るのデエスカ？ 私たちはラブライブ決勝を目指しているんでしよう？ あんなチャラチャラした店に負けるわけにはいかないわ！」

唐突に鞠莉がそんなことを言い出すのでみんなの視線はそちらへ向く。周りとしては別に競うつもりなど微塵もないのだが…。

「鞠莉さんの言う通りですわ！」

そう言っただイヤが一人で燃え始めたところで手伝いがスタートしたのだった。

ダイヤの指示の元役割分担をしたのだが、そこで燃え上がっていて忘れていたのか遙は全員が持ち場へ移動した頃に花丸によつて起こされたのだった。

「ごめん、ずっと寝ちゃってた。もう練習終わっちゃった？」

「いいや、結局みんな遊んでたから大丈夫だよ、それより顔色もよくなつてよかつたぞら」

「ごめんね、もう大丈夫だから。ところで僕は手伝いつて何したらいいの？」

「多分マルとルビィちゃんと接客でいいと思うよっ。」

「そっか、了解！」

そう言っつてようやく遙も活動し始めたのだが、客数はあまり多くなく。売れるのも曜の作った『ヨキソバ』なるオムそば的な料理ばかりで、残り二人の調理担当の鞠莉の作る『シャイ煮』というなにやら色々似たものと善子の作った『墮天使の涙』なる得体のしれない真黒なたこ焼きは全くと言っつていいほど売れないのだった。

「これ…大丈夫なの？」

遥は思わずそう口にしてしまったのだった。

結局集客もあまりうまくいかなかったらしいのだが、千歌がクラスメイトを誘ったところクラスメイトのおかげで繁盛することができた。

ちなみにヨキソバ『は』ほぼほぼ完売したらしい。

「やっぱりお店の後だと、ちよつとキツイね…」

その日の手伝いが終わった後、夕日の輝く中練習を行ったのだが、さすがに海の家で働いた後は体力を消耗しているもので、普段よりもきつく感じる。

そもそもあんな練習をいきなりこなせるはずもないのだが…。言い出しっぺのダイヤもさすがに堪えた様で砂浜に倒れこんでしまった。

結局その日は遠泳はもう日も沈むし、何より溺れかねないから危険だと遥が必死に言い聞かせてその日の練習は終了となったのだった。

遥は流石に女子に紛れて泊まる訳にもいかないし、何より遥自身が耐えられないので一人家に戻ったのだが、結局電話で「自分達の売れ残りは自分たちで処理しろと言われたので手伝え」そう言った旨の連絡が来たので再び海の家に戻るようになったのだが、そこで待っていたものは…。

「本当に、申し訳ない（デース）！」

そうやって机に指を立てて頭を下げる善子と鞠莉の姿があった。なんでも自信満々に作ったのはいいがほぼ全くとっていい程売れなかったのでヨキソバはほぼ完売だったのに対してこの始末であった。

花丸とルビイが未知の食べ物に興味を示したので、作ったときのよ

うに自信満々で「さあ、召し上がれ！」と大量に皿に盛り付けるのだった。

だが存外食べてみるとシャイ煮はかなり美味しかった。

美味しかったのだが、食材が鞠莉が世界中から取り寄せた高級食材を使っているらしく、一杯あたり10万円程すると言い出すものだからみんな吹き出してしまった。

「これだから金持ちは…」と果南もあきれた様子だったが、気を取り直して墮天使の涙をルビイが食べたのだが、暫く固まった後、「辛い辛い辛い」と顔を真っ赤にして外に飛び出して走り回るのだった。

「ちよつと！一体何が入っているんですの!?!」

そうダイヤが問い詰めるが、善子は何食わぬ顔で一つ取ると、

「タコの代わりに大量のタバスコで味付けした…これぞ、墮天使の涙」
そう言つて取つた分を口に含むと、とてもおいしそうに咀嚼するのだった。

そんなの辛いどころじゃ済まないのでは? そう思った遥は怖くて手は出せなかった。

「ごちそうさまでした、ちよつと友達に頼まれてることがあるんで僕はこれで…」

そう言つて立ち去ろうとするが花丸に止められる。

「遥君細かいしもつと食べたほうがいいと思うぞら」

すると鞠莉も「そーよまだまだあるんだから」とシャイ煮を勧めてくる。

「いや、あの…」

結局後片付けまでずつといることになってしまった訳だが、家に戻る途中で遥はあることに気が付いた。

「あれ…星がおかしい…」

ふと夜空を見上げなのだが、東京と違ってかなり綺麗に星空が見えるのだがその星々が渦を巻くように動いていた。

「一体…何が起きてるんだ…?」

「やつと気が付いた? もう一人の方はかなり早い段階で気が付いて行動を起こしたわ」

「誰？」

他のメンバーは十千万へ行つた筈、なら唐突に後ろから聞こえた声は誰のものなのか？そう思い振り返るとそこにいたのは、黒いドレスを着た金髪の少女だった。

「私の名前はシルビア。あなたは知らないでいい、そうすれば仲良しグループと一緒に苦しまずに消えることができる…」

シルビアと名乗った少女は淡々と遥にそう告げる。

「なら君は何を知っているの？僕は皆を護りたい、だから何も知らないでいる事なんてできる訳ないんだ！」

「本当に知りたいのなら、それは自分で探さないとダメ…あなたが本当にこの星を護りたいなら…」

そう告げると少女は夜の闇に去っていった。

「あつ、待って！」

そう言つて遥は駆け出したが、彼女の姿を見ることはできなかつた。

「もう一人はもう行動を起こしている—まさか!？」

アグルが怪獣を呼び覚ましたのは、大きな脅威に対抗する為。その結論にたどり着いたのだった。

「それでも、やっぱり僕は…」

エスプレンダーをとり出した遥は、自分の決意を固めるのだった。

決戦の日は近い—

20話 明日なき対決／大切なもの

『政府は、青いウルトラマンの出現によって世界中で怪獣が出現していると断定し。これに対し嚴重な警戒態勢をとる事を発表しました。』

昨日の事もあり、遙は朝練は休むように言われてしまったのでゆっくり朝食をとりながらニュースを見ていた。

「物騒よね、怪獣だけでも大騒ぎなのにウルトラマンまで…」

「そう…だね…」

そう語るのは母親だった、そう言えば梨子が居らず母親と二人でいることはかなり久しぶりな気がした。

「そう言えば遙、梨子から何か聞いてない?」

「何かって?」

「ほら?もうすぐピアノのコンクールじゃない?あの子出るとも出ないとも言わないのよ」

「そう言えばそんな時期だね…僕は何も聞いてないよ?」

梨子がないからこそ、ここで母は聞きたかったのだろう。だが遙も何も聞いていなかった。遙も知らない訳では無かった、だが今の姉はきつとラブライブの予選を優先する、A q o u r sを優先するだろう、そう思っていた。

二日目の海の家の売り上げは昨日と比べればかなり良かった。クラスメイトの口コミなどのお陰で色んな人が客として訪れてくれたし、千歌や梨子、果南も客引きに慣れてきたのもあったと思う。

まあ、それによって店内で接客していた遙、花丸、ルビィは昨日より大変だったわけだが…。

「どこ行くの?」

そんな時、果南が梨子を連れてどこかへ向かおうとしていたので千歌がそう声をかけた。

「梨子ちゃんとダンスの相談、来る?」

「いいの?」

2年前のA q o u r sでダンスを考案していたのは果南らしく、今度の新曲でも色々考えてくれているのでその相談だろう、最も肝心な歌詞はまだなので作詞担当の千歌も一緒の方が作業も捗るだろうということになり、一旦3人は離脱する。

そして相談を行うに当たって海岸から近いし旅館では迷惑だろうという事になり梨子の部屋へとな所を移したのであった。

「大切なもの?」

「それが次の曲のテーマ?」

「うん、まだ歌詞の出だししか書いてないんだけど…」

そうやって千歌は歌詞ノートをまず梨子に手渡す。

A q o u r sの曲は最初に千歌が作詞をし、それをもとに梨子が曲を作る方針をとっているのです、テーマも基本千歌が決めているのだ。た。

「大切な…もの…」

歌詞を読んで、再びその言葉を復唱すると梨子は自分の机に置いてある、ピアノコンクール用の歌詞に目を向ける。

(私にとって…大切なもの…)

昨晩は千歌に外へ連れ出され、ピアノコンクールには出ないのか? そう聞かれたときは、ライブの予備予選と日程が被っているからこつちを優先する。そう答えたのだが、果たしてそれで良かったのか

？ふとそんな気持ちが続から湧き上がるのだった。

「梨子ちゃんも読んでみて、どう？」

果南にそう聞かれたことで我に返る梨子だったが千歌は梨子が、譜面を見ていたことに気が付いていた。果南から譜面は完全に死角なので彼女に気づかれることは無かったが…。

「じゃあそろそろ戻ろっか」

いい加減店の手伝いに戻って練習に入らないとダイヤがうるさそうだし、と果南が切り出して梨子の家を出る。

「じゃあみんなのトコまで競争！」

そう言っただけ飛び出した千歌は歩道に出たとたんにとたんにとぶつかってしまう。

「あつごめんなさい…」

咄嗟に謝ったが、千歌がぶつかってしまった青年は何も答えずに千歌を睨む。

「…ヒロ？」

果南は千歌がぶつかった相手が、博樹だったことに気が付く。

「ごめんなさい、大丈夫ですか？千歌ちゃんも気を付けないと…」

そこに梨子も追いついてくるが、博樹は梨子の顔を見て一瞬固まるが、すぐに普段の調子に戻ると、

「オレの方こそすまなかった、大丈夫だ。今後気を付けてくれ」

千歌にそう言うとそのままだち去ろうとするが、そこで3人を呼びに来た遥と鉢合わせになってしまう。

「博樹さん、大変な事が起ころうとしている」

「やっと気が付いたか…オレはヤツが来る前に、世界中の怪獣を目覚めさせるつもりだった。」

「やっぱりあれはそれが目的だったんですね？」

「お前が鈍すぎるんだ！」

「最低だぞ！怪獣だって望んで出てきた訳じゃないのに」
「遅かれ早かれ目覚めることになる」

「貴方はウルトラマンの力の使い方を間違っている！」

お互い段々と口調が強くなってくるが、周りは何の話をしているのか解らず、会話に入れない。

「オレが本当のウルトラマンだ!!」

そう強く言い切った博樹に千歌と梨子は「え？」と反応する、ウルトラマンの正体は人間だった。その事実を知らないのはここにいる5人のうち、この2人だけなのだ。

「違う！本当のウルトラマンは…ぐっ」

遙がそこまで言った所で、博樹は遙の顔面を殴りつける。

「ちよつとヒロ！」

「くっそお〜」

果南は博樹に避難の声を飛ばすが、起き上がった遙は博樹を殴るとその上に跨り追い打ちをかけようとする。

「やめて遙！」

「止めないで！コイツはこの前姉さんだつて…！」

殺そうとした、そう言いかけた遙だったが梨子の顔を見ると拳を降りし博樹から離れるのだった。

「そんな風に人を殴る遙を、見たくないもの…」

そう悲し気に言われると遙もそれ以上何もできなかった。

「やっぱりお前は甘いよ、遙」

そう言つて立ち上がった博樹は右腕につけているアグレイトーを見せる。

「折角会つたんだ、本気を出せる場所で決着をつけてやる」

そう言う一面を青い光が塗りつぶすと、博樹が立っていた場所にはウルトラマンアグルが立っていた。

「この人が…」

「青いウルトラマン…」

千歌と梨子はこの前の事もあり、目の前のアグルに対して後ずさるが、アグルは再び光に包まれると巨大化した。

そしてあるうことか、果南と千歌、それに梨子を手に乗せて飛び去ってしまう。

「まってっ！」

遙も追いかけてよとしようとするがここでは人目に付く、幸いアグルはゆっくり飛んでいるので追いつける。そう思い場所を移そうとする。

「ヒロ、こんな事して何になるの？」

そう果南が問うがアグルは答えずにゆっくりと飛び続ける、すると青いウルトラマンへの警戒態勢を強めるといったニュースの通り、すぐさま戦闘機がスクランブル発進するが果南達が人質となっているため迂闊に手出しができない。

「ハルカ！何があったの？」

アグルがすぐ近くから飛び立つところを目撃した残りのメンバーが何があったのかと遙に声をかける。

「姉さんが…千歌先輩も果南先輩もあいつに…」

「嘘!？」

「そんな…」

そう答える遙に善子は驚き、曜は連れていかれた3人の身を案じる。

「僕はアイツを追いかけます！皆はここにいて」

そう言つて遙は駆け出すが、それは思わぬ人物の思わぬ言葉によって止まってしまふ。

「ダメ…行かないで、行かないでウルトラマンガイア!!」

「え？花丸…ちゃん？」

そう言つて引き留めたのは、正体を知っているダイヤでもルビイでもましてや善子でもなく、花丸だった。

「遥君なんですよ？ガイアなのは」

「花丸ちゃん、いつから…？いつから知ってたの？」

遥は花丸に知られていたことによりかなり動揺してしまうが、なんとか平静を取り戻してそう聞く。

「てことは…遥君が、ガイア…」

曜も会話の流れがようやく解ったのか、そう呟くと花丸は遥の問いに答えた。

「もしかしてって思ったのは2回目にガイアが現れた時で、淡島でかばってくれた時に間違いない…っておもったずら」

「じゃあ、どうして今まで言わないでいてくれたの？」

「それは、きつとみんなに秘密にしておきたいって思ってると思ったから」

ならどうして他にも人がいるのに…。そう思わないでもなかったが「でも…」と花丸は続ける。

「昨日言ってた夢の話、無理やりにも止めないと現実になると思ってたから…」

ウルトラマン二人が砂漠化した地球で砂に埋もれる光景―それが現実になるかもしれない。それを彼女は危惧しているのだ。

「遥さん、行ってあげてください。そのかわりに、梨子さん達を頼みましたわよ」

ここでダイヤが初めて口をはさんだ。

「そうね、ハルカ行ってあげて。そのかわり彼も止めてあげて？きつともうガイアしかアグルは止められないから…」

そう語る鞠莉の顔は悲しげだった。自分では博樹を止めることができず、自身の負傷によって彼の心に余計に影を落としてしまった。彼女の願いでもあった。

「ありがとうございます、行ってきます！」

そう言つて遥は駆け出すと、全員が見ている中でエスプレンダーを掲げる。

「ガイアアアアアアア!!」

すると赤い光が天に昇り、ウルトラマンガイアが飛び立っていった。

「さてと、マリー達も追いかけましょ？みんなが心配だし」

そう悪戯っぽく笑うのだった。

『おれ、海を知りたいんだ』

『海を？』

『だって皆宇宙の事ばかり知りたがって、地球の七割は海なのにみんなその海の事を知ろうとしない。おれの夢は海の本物の姿を知る事なんだ』

中学の時に果南は博樹に夢を聞いた。そしてその時の彼の答えだった。海を知りたい…

『だからクリシスができれば、もう開発には追われなくてすむ、その時はおれをダイビングに連れて行ってよ』

そう語る彼の顔は晴れやかで、眩しいものだった。

なのに今の博樹はずっと何かを思い詰めた様子でいつも険しい顔をしている。

そして今度は自分たちを連れて空を飛んで、彼は何がしたいのか解らない…。

「私達、どうなっちゃうの…？」

そう震えていたのは梨子だった。無理もない、彼女は以前アグルによって命の危機に陥ったのだから。

「梨子ちゃん見て、海が近いよ」

そう言って励ましたのは千歌だった。自分も怖いだろうが、それでも梨子を勇気づけようと思っただけで、気丈に振舞っていた。

そんな時、後ろから風切り音が聞こえ、すぐさまガイアが追いついてきた。

ガイアはジェスチャーでアグルに降りるように伝えようと、アグルは陸地に向きを変えるとゆっくりと地面に着地し果南達を降ろそうとした。

千歌と梨子はすぐ地面に降りると不思議そうにアグルを見つめるが、果南は降りることを拒んだ。

「だめ！私も一緒に連れて行って、そうすれば誰もヒロを攻撃できない！ヒロが無理をして傷つく事ないんだよ？」

そう訴えかける、ガイアがくると自分たちをすぐ降ろしたのはきつとガイアと戦うためーきつと連れ去ったのもガイアを誘き寄せるため。でも果南は2人が争ってはいけない、直感でそう思ったのだ。

だがアグルはもう片方の手で果南を掴むと、そつと地面に降ろすのだった。

するとアグルはそつと飛び立つと、ガイアが着地した開けた空間へと着地した。ここなら巻き込むものはないし、お互いが全力を出せる。そういった判断なのだろう。

『どちらが本当のウルトラマンか、決着を付ける時が来たようだな…』『僕は負けない…！ここでお前を止めて見せる！』

ゆつくりと構えるガイアとアグル。夕日をバックに今二人のウルトラマンの戦いの火ぶたが切つて落とされた！

最初に仕掛けたのはガイアだったが、アグルは向かってくるガイアに対して、アグルスラッシュを発射し、ガイアの動きをけん制すると、ガイアはそれを躲す為に足を止めた。それを見逃さなかったアグルは逆にガイアへ駆け寄ると、飛び上がってガイアの胸を連続で蹴りつけ、最後は顎を蹴り上げる。

たまらず後方へ倒れるガイアだったが、起き上がったところに更に連続の蹴りを見舞われるが、これはバク転で回避し、大ぶりの回し蹴りをしてきたところを脚を掴んでアグルを投げ飛ばす。

そのまま起き上がろうとするアグルの肩を掴むと立たせてさらに腹を連続で殴りつけた。

だがアグルも咄嗟にガイアの腕を掴んで今度はガイアを投げ飛ばす。

一進一退の攻防を繰り返していた。

「ダメだよ、ヒロ…なんで…？」

果南は力なくうなだれそう呟く、千歌と梨子はどうしたらいいのか解らず、ただ二人の巨人が戦っているのを眺めることしかできなかった。

「果南、大丈夫？」

「梨子さんも大丈夫ですか？」

「千歌ちゃんも何ともない？ウルトラマンに何かされてない？」

その時残りのメンバーがこちらへ合流してきた。

「曜ちゃん？それにみんなもどうやってここまで？」

千歌は突然現れた皆に驚いてそう聞くが、鞠莉が、

「マリーがここまでへりを手配したのデース！ウルトラマンって目立つからすぐ見つけられたわ」

あつさりとそう答えるのだった。

「鞠莉、どうしたらあの二人を止められるのかな？」

果南はそう鞠莉に聞くと、彼女も真剣な表情になる。

「わたし達じゃ無理よ、でもきつとここでガイアと戦わなかったらアグルはもう引き返せないと思う」

「引き返せないって？」

「地球を救うのに必要なのは、『人類を抹消する事』それがクリシスが二年前に出した答え…アグルはそれを真に受けてここまで戦ってきた」

鞠莉の口から出てきたのは、かつて遙に語ったのと同じ内容だった。

「でもきつと心のどこかでそれはおかしいって思ってるの…その答えを、彼はこの戦いで見つけるはずよ」

「鞠莉…」

「果南さん、私達にはもう見守ることしかできません…でもこの戦いできつと何か変わる。そう信じましょう」

ダイヤはそう言って果南の肩に手を添えるのだった。信じるしかない、博樹が…幼馴染が…ここで止まってくれる事を。

「花丸ちゃんは どう思う？」

「マルは、やっぱり嫌な予感がするぞら…」

ルビイに尋ねられた花丸はそう答えた、やはり脳裏をよぎるのは昨日聞いた遙の見た夢。まさに今、それが再現されてしまうのではないかという不安だった。

「大丈夫に決まってるじゃない、信じてあげましょ。仲間なんだから」
「善子ちゃん…」

やれやれといった風に口を挟む善子だったが、「だからヨハネよッ！」とそこはこんな時でも訂正するのだった。

「梨子ちゃんも大丈夫だった？本当に何もされてないよね？」

この前の事もあり、曜は本当に不安気にそう尋ねるのだった。

「うん、大丈夫よ。本当に手のひらに乗せられて飛んでただけだし：それに千歌ちゃんもいたから」

そう答える梨子に曜は「なら良かったんだけど」と答えたのだがあまり表情から不安の色は消えたようには見えなかった。

「心配性だなくむしろ新鮮な体験だったよ」

なんて千歌は言うものだから、思わず三人とも笑ってしまう。

「でも、どっちが勝つんだろう…？」

「きつとは…：ガイアが勝つよ」

どちらが勝つことになるのか？そう呟いた梨子に、曜はうっかり遙だと言いかけるがここに来る道中にあの3人は遙がガイアだと知らないで黙っておいてあげて欲しい。そう言われたのを思い出し慌てて誤魔化す。

「でも青のウルトラマン、何か辛そうだった…：本当は、こんな事する必要無いんじゃないかな…？」

そう告げる千歌の表情もまた、辛そうだった。

『デヤアッ!!』

『ドウワアッ!』

2人のウルトラマンの戦いも佳境に差し掛かろうとしていた。

2人の攻撃が交錯する度に、強大なエネルギーの余波で突風が吹きすさぶ。

お互いの蹴り同士がぶつかり、アグルがガイアを投げそれを食らったガイアがアグルの足を払い起き上がる。

お互いの拳がお互いの顔面を貫く、その衝撃で両者の体は大きく吹き飛び倒れこむ。すると両者のライフゲージが点滅を始める。

すると2人のウルトラマンは同時にそれぞれ最大のエネルギーを籠めた技を放つ為の態勢に入る。ガイアはフォトンエッジをアグルはフォトンクラッシャーを、それぞれ最大の出力で放つつもりだ。

『デュワ！ハアアア…』

『デヤツ！ハアアア…』

「もうやめて！これ以上戦う事なんて…」

「果南!？」

「果南さん!？」

駆け出した果南を鞠莉とダイヤが慌てて追いかける。

「おやめなさい、あなたが行ったところで何も…」

「そうよ、果南まで怪我することないわ」

「離して！このままじゃヒロが…」

そう叫ぶ果南を二人がかりで押さえつけるが、無情にも2人のウルトラマンは止まらない。

『デヤアアアアアアアア!』

『ドウワアアアアアア!』

今迄、数々の怪獣を葬ってきた必殺の一撃が激突する。赤と青の光がぶつかり合い、周囲のその余波による嵐が吹きすさぶ。

そしてその膨大なエネルギーは天へと昇っていき、辺りは光に呑まれ何も見えなくなる。

21話 決着の日／Daydream Warrior
or

ガイアのフォトンエッジとアグルのフォトンクラッシュャー、2人の必殺の一撃が放た時に発生した膨大なエネルギーは天へと昇りその光によって、辺りは眩い光によって塗りつぶされてしまった。

「きやあつー！」

「何が起きてるの?」

「まさかこれが神々の黄昏ーラグナロクー…?」

「ここで見ていた全員が、あまりの余波に驚くもどうすることもできない。」

「一体…どちらが勝ったのですか?」

光が収まり、日は既に沈み辺りは夕闇に包まれる。そしてそこにウルトラマンの姿は無かった…。

「ヒロは?」

そう言つて博樹を探して駆け出した果南を鞠莉とダイヤも追いかけていった。

「私も」

そう言つてその後に続く梨子に、千歌も付いていくが、残りのメンバーは遥を探しに、さつきまでガイアがいた辺りを探すのだった。

「遥君!大丈夫!?!」

辺りを手分けして探そう。そう言つて別れたのだが最初に遥を見つけたのは曜だった。

「曜先輩…?どうして…?ぐうつ…!」

「みんな心配で追つてきたんだよ、それよりケガしてる…早く手当てしないと!」

そうは言つても絆創膏くらいしか今は手元がないし、そもそもそのまま貼るわけにもいかず、ひとまず携帯で一緒に探しに来た一年生三

人を呼び出し、近くにあった公園まで遥を運んだ。

遥は肩が外れているのか右腕は力なく垂れ下がり、動こうとすると激痛が走るのか玉汗を浮かべていた。

「ウルトラマン同士が、こんな風に戦っちゃいけない…解ってたのに…僕は他の選択ができなかった」

「何言ってるの？アンタ姉を連れ去られたのよ？怒ったって誰も攻めやしないわ」

戦ったことを悔やむ遥に善子はそう告げる。

「そうだよ、この前だってあのウルトラマンは梨子ちゃんを…」

そう言ってルビィも遥に気を遣ってそう言っただけ。

「とりあえず肩外れてるっぽいから治すね。遥君、痛いけど我慢して」

「お願い、します…」

曜がそう言うのと遥の腕をつかみ、外れた肩を戻す。遥もかなりの激痛だったようで暫く呻いていた。

「とりあえず傷口も水で流してから絆創膏貼ったし、今やれる手当てはやったぞら」

花丸も遥が顔やら腕やらに怪我を負っているのですこの手当てをしてくれたのだった。

「ありがとう、みんな…」

「でも、いつからガイアとして戦ってたの？どうしてみんなに黙って…」

そう曜は遥に問いかける、遥はやっぱり聞かれるかといった表情で自分が初めてガイアになった日の事を話した。

「じゃあ初めて会った頃にはもうガイアだったってこと？」

「ですね、あと姉さんにはまだ、言えてないんです…自分でちゃんと伝えるから、秘密にしておいてくれませんか？」

「…解った！了解であります！」

「まだ多分気が付いてないだろうし、いいんじゃない？」

「やっぱり、自分でお姉ちゃんに伝えたいもんね」

「遥君、頑張るぞら」

「ありがとう、みんな」

そこまで話していると、曜のスマホに着信が入る。千歌からだつた。

『曜ちゃんたち大丈夫？居場所教えてくれたら鞠莉ちゃんが迎えを呼んでくれるって言ってるんだけど』

との事だったので、ひとまず博樹を探しに行った5人とは別に十千万へ戻るのだった。

一方で博樹を探しに行った果南達だったが、そこで梨子と千歌は3年生3人と博樹の関係を知る事となった。

「そういえば果南ちゃん、青いウルトラマンの人と知り合いなの？」

「え？まあそうだね…」

「彼は湊博樹さん。私達とは幼馴染ですわ」

どう話すか果南は困り気味だったのでダイヤが助け舟を出した。

「確か…光量子コンピューターのクリシスを開発した人の一人ですよね？最年少メンバーだった」

梨子も名前は聞いたことがあるらしい。やはり当時彼の話題性は凄かったんだなと思ってしまう。

「そうです、でもクリシスが完成した後2年程行方が分からなくなっていたのですが」

「それはマリーがたまたま留学先であった時に聞いたわ。クリシスによって根源的破滅招来体が来ることが予測されて、それから地球を救う方法として示されたのが『人類を地球から排除する』事だった…ヒロはそれしか方法は無いと信じたから…この2年間そのために生きてきたの…」

そう付け足す鞠莉の表情も暗いものだった。

「本当はこんなことになる前にヒロにはやめてほしかった、でも何もしてあげられなかったの…」

「鞠莉…」

果南もその事は初耳だったのか初めて聞いたという反応を示した。「でもきつと博樹さんはそれが本当に正しいって思えなかったから、

あんなに思いつめた顔をしてたんだと思う…」

「千歌ちゃん…」

「私もそう思う、何か無理をしてる…そんな風に思えたから」

自分達も博樹のせいで傷ついたハズなのに、彼の事を心配する2人の優しさだった。

そしてようやく博樹を見つけてのだったが、彼も怪我がひどく気を失っているのだった。

「ヒロ、しっかりして!」

そう訴えかけるも、今の彼に果南の言葉は届かなかった。

ひとまず通報し救急車によって博樹は病院に運ばれる事になった後、ほかのメンバーと合流するのだった。

「遥、どうしたのよその怪我…」

梨子がそう心配するのも無理はない、今の遥は絆創膏を顔に何枚か貼り更に右腕にはタオルをギブス代わりに巻いていたのだ。

「いや、ちよつと転んじやって…」

それは無理があるだろう、一緒にいた4人にそんな冷ややかな視線を向けられる遥だったが、梨子もそれ以上は何も言わなかった。

その時、丁度フォトンエッジとフォトンクラッシュヤーが激突した場所の上空―つまりそのエネルギーは向かった先にワームホールが開いたのだった。

「何…?あれ?」

「今までとは違う…大きい!」

最初に気が付いたのは千歌だったが、その視線の向く先を見た遥はそのワームホールが今までとは規模が違いすぎる事に気が付いた。

「何が起きているというのですか…」

「わかんない…けど」

「ここにいたらまずいわね…」

3年生3人がこのままでは危ないと判断し、全員に逃げるように促す。

「ここは僕が…」

「そのケガで何ができるといいますか!」

「でも…」

遙が、ガイアの力を使って解決させようと考えたのだが、ダイヤに厳しく叱責される。

そんな時に、遙のスマホに着信が入る。こんな時に誰かとイラつきながら画面を見ると、相手はダニエルだった。

「ダニエル？どうしたの？」

『遙、今君は家に居るかい？』

「まあ、家の前に居るよ？」

『君たちが住んでる場所の近くで巨人が戦っただろ？その地点の上空にかつてないほど巨大なワームホールが開こうとしているんだ。何が起るかわからない、すぐ避難するんだ！』

「クリシスでも解らないのかい？」

やはり何か危険なことが迫っているのだろう。ダニエルの声はかなり切羽詰まっていた。でもクリシスなら何か予測できているのでは？そう思って聞き返すのだが、ダニエルは迷ったのか少し間を空けて。

『クリシスは…暴走した…』

「暴走!?どうして?」

『解らない…だが何かワームホールと共鳴してるようなんだ…今クリシスを強制シャットダウンさせようとしているところだ』

「そんな…」

『ともかく危険だ、こちらも準備はしてきたつもりだったけど間に合わなかった、本当にすまない…』

「仕方ないよ…僕も頼まれてたやつ完成できてないし…」

周りはその発言に「頼まれてたやつ？」と首をかしげるがダニエルの『それはまだかなり先にならないとこちらも完成しないから大丈夫』と言われた後、すぐ非難するように念を推されてから通話を切られた。

「どうしたの？ハルカ」

電話を切った後、鞠莉にそう問いかけられたので遙は今のダニエルとの会話を全て話した。

「じゃあ…博樹さんが信じていた予測は…」

「全て仕組まれたこと…?」

3年生3人はその結論にたどり着いたのだった。

「じゃああのワームホールがさっきの場所にできたのは…」

「ウルトラマン同士の戦ったエネルギーを使って、ここまで来た…」

梨子の呟きに、千歌がそう返す事で、ここにいる全員が今の状況の重大さに気が付く。すると遂にワームホールから巨大な竜の頭が出てくるが、その大きさは今までの怪獣とは比べ物にならずワームホールの中へ消えていく首の先がどうなっているかも知当がつかないし、今まで見た怪獣だって50m程あるウルトラマンよりも一回り大きいものばかりだったのに、こいつはその怪獣を丸のみにすることなど造作もなさそうな外観をしていた。

「何…あれ…?」

「大きい…」

「まさか…天界からの使い…?」

各々がその巨大怪獣に対しての感想が口から出るが、今はそんな場合ではない。

「逃げましょう、距離はあるけどあんな大きさの怪獣が暴れたらここだって安全とは言えません」

今の自分ではあの怪獣と戦う事なんてできない、さっきダイヤに指摘されなくても解っていた。だから心配させないために全員で逃げることを提案するのだった。

「遥君はそれでいいの?」

全員で逃げているとき、ふとルビィにそう問われた。

「うん、今の僕じゃ被害を予測してみんなと避難するくらいしかできないよ」

そう返事をする遥の顔は辛そうで、自分達の引き起こした戦いでいまの現状があると責任を感じているのは明白だった。

「遥君、マルたちが誤魔化しておくから行ってきていいよ?」

そんな遥を見て、花丸がそう告げる。

「え?」

「こんな無責任な事言いたくないけど、何とかできる可能性があるのも遥だけなの…だから遥が後悔しないようにして」

何を言っているのか解らない、そんな表情を見せる遥に善子もそう告げる。

「僕が…後悔しないように…」

言われた言葉を呟く遥は、暫く下を向いていたが。決心がついたのか顔を上げる。

「ありがとう3人も。行ってくるよ、やっぱりやれることをやりたいんだ」

そう答える遥の目に迷いは無かった。あの怪獣をなんとかしたい、その気持ちが強まっていた。

「そう言うと思った、気をつけなさいよ？」

「遥君、がんばルビィ」

「絶対…無事に帰ってきてね？」

1年生3人の激励を受けて遥は前に行く姉たちに黙って、怪獣の方へ走る。

「僕は負けない…絶対に守って見せる！」

そう自分を鼓舞し、エスプレンダーを構えるが、そこで思わぬ人物に出会う。

「まだ決着はついていないぞ！遥…」

「湊…博樹…！」

博樹は元々怪獣を呼び覚まして周っていて身体を酷使していた分、遥よりダメージは深刻だったはずだが、病院を無理やり抜けて遥と決着をつけるべくここまで戻って来たのだった。

「そんな場合じゃない、アイツは僕たちのエネルギーを使っでこまで来たんだ。だからアイツを倒すことが先決じゃないのか？」

「くだらん、何を根拠に…」

「クリシスが暴走した」

遥の言葉に耳を傾けようとしないう博樹に、遥はそう真実を告げた。

「しかもあのワームホールに共鳴しているらしい、きつと最初から何者かに細工されていたんだ」

「何のためにだ？」

「根源的な、破滅をもたらすために……！」

「……ッ！」

そこで博樹の表情が一変した、無理もない自分がこの2年間信じてきたものが、敵によって仕組まれたもので自分は相手の手の上で転がされていたのだから……。

「うわあああああああ！」

頭を抱えて絶叫する博樹の身体は震えていた……。

「でも、アイツを倒せるのは僕たちしかない！ だったら、戦うしかないじゃないか!!」

ここで事実打ちひしがれていても何も解決しない。ともかく2人であるの怪獣を何とかするしかない。そう思っている遥はそう言つて博樹を立ち上げらせようとする。そして自身もガイアへと姿を変えなるべくエスプレnderから光を開放しようとするが、博樹に腕を掴まれる。

「そんな体で、いったい何ができる?」

そういうや否やアグレイターの翼が開き、真ん中のライフゲージを模した部分から青い光の球体を開放する。

「アグルの力を一緒にしろ。そうすれば少しはマシに戦える」

「君はどうするんだ?」

突然光を手放した博樹に、遥はそう問いかける。だが博樹は悲し気な笑みを浮かべるだけだった。

「大切なものに……信じていたものに裏切られる気持ちだが、お前に解るか?」

そう語る博樹は、きつと自身のしてきたことに対する罪の意識に苛まれていたのだろう。

「俺にはもう……守るものなんて何も無い……」

そういうと博樹は踵を返して歩み去ろうとする。だが遥もどうすればいいのか解らなかつた。

空では軍隊が出動し、怪獣への攻撃を開始するが。現代の兵器では有効打を与えることは不可能だった。

さらに怪獣も火を吐いて攻撃する。そしてその流れ弾が近くに着弾し、野が焼ける。立ち尽くす遙に気が付いたのか、博樹は一度だけ立ち止まると。

「光をとれ！遙…」

一言だけそう告げると再び歩み去る、そしてその博樹の真後ろに再び飛んできた炎が着弾し、爆炎によって遙から博樹の姿は見えなくなった。

意を決した遙は、エスプレンダーを掲げ、その中へアグルの青い光を迎え入れる。

「大事なものなんて…いくらでもあるじゃないか!!」

そして右腕のギブス代わりにタオルを外すと右手にエスプレンダーを持ち帰ると、左胸の前に当てた後、前方にその手を突き出し、戦士の名を叫ぶ。

「ガイアアアアアツ!!」

その頃、学校の近くまで逃げてきたメンバーたちは、遙がいないことに気が付く。

「あれ？遙君は？」

「あの子また…」

千歌が遙のいないことを指摘すると、梨子が若干苛立ち気味にそう呟く。無理もない、遙がガイアだと知らないしいつも肝心なところではないくなって心配をかけているのだから…。

「まさか…」

そう呟いた曜とダイヤ、鞠莉は気が付いてしまった。本当はそんなはずがないと思いたかった。最初に遙を発見したのは自分だったから、遙の怪我がどれ程のものか解っていた。だからあんな体で戦いに行くはずがないと。だが現に遙は居ない。

学校にはほかにも生徒や近所の人々が集まってきていた。もしか

したらはぐれてその中にいるかもしれない。そう信じたかった。

だが今怪獣によつて無残にも破壊される自然、打ち落とされる戦闘機を見て絶望するもの、泣き叫ぶ子供、それらの中に、遥の姿は無かった。

「ウルトラマンガイア、来てくれるよね?」

ふと、子供たちからそんな声が聞こえてくる。

「ウルトラマンは…」

親が何か言いかけるが言葉に詰まる、ウルトラマン同士が戦って相打ちになったから来ないのではないか。そんな言葉が他の大人たちの会話から聞こえてくる通り、恐らくもうウルトラマンはいないと思っっている大人が大半なのだろう。

「遥君…大丈夫だよね?」

「大丈夫に決まってるじゃない!結局行かせちゃったんだしもう信じるしかないでしょ?」

思わずそう漏らしたルビィに善子はそう答える。

「そうずら、遥君は強いもん。マルたちは信じてあげよう?友達なんだし」

「そうだね、絶対勝てるよね」

花丸たちは信じるしかなかった、遥が…ガイアがああ怪獣に勝利すること。そしてそれを信じて待っているのだ。

そしてその時、天に青い光が立ち昇った。

「あれは…」

「ヒロ…?」

「アグル…じゃない、ガイア?」

ダイヤ、果南、鞠莉は最初アグルが現れたのかと思っただが、その中から現れたのはガイアだった。

青い光にさらに赤の光を纏い、夜の闇に現れたガイアは胸の赤いプロテクターが青く光った後、それが黒に変わった。ウルトラマンガイアV2（ヴァージョンツ）誕生の瞬間だった。

ガイア自身もそれを不思議そうに見つめていたが、それが受け取っ

たアグルの力の影響であることに気が付く。そして右腕を気にする
ように少し動かした後、上空の怪獣に対して構える。

「梨子ちゃん、ガイアだよ」

「無事だったのね…」

ガイアに気が付いた千歌は、梨子にそう声をかけると、周りの人々
もガイアの出現に歓喜するのだった。

ガイアは飛び立つと、怪獣目掛けてクアンタムストリームを放つ。
しかし怪獣には効果がないのか微動だにせず、逆に火炎攻撃によつて
撃ち落とされてしまう。

そのまま追い打ちをかけるように数発更に火炎攻撃がガイアを襲
うが、ガイアはこれを前転して回避すると立ち上がる。

『アグルの力を貰ったんだ、これで！終わるか!!』

「セアツ！ハアアア……」

ガイアは両腕を上には伸ばすと、その手の間に青い光が産まれる。そ
れを両腕を降ろし胸の前に合わせ、それから両腕を広げ、もう一度上
に一周腕を回し、その光をその身に纏う。

「ガイアが変わる！」

光を纏うガイアに全員の視線が注がれる。千歌はその光景が、光り
輝くガイアに何か感じるものがあつたのかもしれない。

その光が消えた時、ガイアの姿はこれまでとは全く異なるものだつ
た。

これまでと違い、銀色の部分が減り、全身がほぼ赤く染まり、肩か
ら二の腕にかけて金色に縁どられた黒のプロテクターができ、さらに
体の側面にアグルを彷彿とさせる青いラインが走る。

更に体格もこれまでと違い、マツシヴな印象を与える。

ガイアは再び飛び立つと、怪獣の首元―ワームホールへガイアス
ラッシュを放つとワームホールが不安定になつたのか怪獣が苦しみ
始める。

その隙にガイアは怪獣の口から体内に飛び込んだ。その後、怪獣の
体が光つたかと思うと、次の瞬間怪獣の体は粉微塵に砕け散り、ワ
ームホールが閉じる。

するとガイアは爆風の中からゆっくりと飛翔すると、そのまま飛び去って行った。

その後遙は学校裏で変身を解くと、皆に合流した。

「遙、どこ行ってたの？」

梨子にそう聞かれて困る遙だったが、花丸たちのおかげで何とか誤魔化すことができた。だが後から特にダイヤからは説教を受ける羽目になったが…。

（生きてますよね？きつとまた、一緒に戦えますよね？）

行方の解らなくなった博樹に、遙はそう思うのだった。

エスプレンダーの中には、元々のガイアの赤い光とアグルの青い光が輝いていた。

22話 向き合う決意／新たなる戦い

あの日、その後千歌と梨子は2人だけ学校に残っていた。

そこで千歌は梨子に、彼女が作った曲を弾いてほしいと頼むのだった。

「考えてみたら、聴いた事無かったなって」

音楽室まで移動し、千歌は梨子に「ここなら思いっきり弾いても大丈夫だから」と弾くことを促す。

「梨子ちゃんが自分で考えて、悩んで一生懸命作った曲でしょ？聴いてみたくて」

「でも…」

「お願い、ちよつとだけでいいから」

千歌にこの曲を聴かせることにためらいがあるのか、ためらっている梨子に千歌はそう食い下がる。

「そんないい曲じゃないよ？」

そう言つて梨子は椅子に腰かけると、鍵盤の蓋を開ける。それでもまだ鍵盤にすぐ触れることができなかつた。そういえば人前で演奏するのは何時以来だろうか？

意を決し、鍵盤に指をのせ演奏を開始する。弾き始めてしまえば、先程まで感じていた緊張も何も感じなくなる。ただ、思うままに梨子は演奏を続けた。

海に還るもの

梨子が内浦にやってきたときに聴きたがっていた海の音、それを千歌と曜と出会ったことで聴こえた海の音。それが曲となったものだった。

「良い曲だね」

演奏が終わると、それまで黙って聴き入っていた千歌が口を開く。

「すつごくいい曲だよ、梨子ちゃんが詰まつた」

梨子は照れ臭いのか顔を逸らす。

「梨子ちゃん。ピアノコンクール、出て欲しい」

その言葉に梨子は、はつと息を呑む。コンクールは、ラブライブの予備予選と日程が同じだった。つまり、コンクールに出るといふ事は、予備予選では梨子のいない8人で行けるといふ事なのだ。

「こんな事言うの変だよ、滅茶苦茶だよ？ スクールアイドルに誘ったのはわたしで、梨子ちゃんはAqoursの方が大切って言うてくれたのに」

きつと千歌は梨子が、Aqoursの方が大切。そう言ったものの、どちらをとるかまだ本当は悩んでいることに気が付いているのだ。

「私と一緒にじゃ…いや？」

「違うよ！一緒にいいに決まってるよ!!」

自分でも卑怯だと梨子は思った。こういうえばきつと、千歌は予備予選に出ることに反対できない。

「思い出したの、梨子ちゃんを最初に誘った時の事。あのときわたし、思ってた。スクールアイドルと一緒に続けて、梨子ちゃんの中で何かが変わって、またピアノに前向きに取り組めたら素晴らしいな、素敵だな、て」

「でも…」

梨子だつて覚えている、でも本当にそれは今なのだろうか？ そう思って梨子は目を逸らすと、何かが手に触れた。それは千歌の手だった。

「この町や学校が、みんなが大切なのは解るよ？ わたしも同じだもん、でも梨子ちゃんにとってピアノは、同じくらい大切なんじゃないの？ その気持ちに、答えを出してあげて」

そう千歌は語り掛ける。

「わたし、待ってるから。どこにもいかないって。ここでみんなと待ってるって、約束するから。だから」

コンクールに出て欲しい。そこまで言わなくとも梨子には伝わったし、気が付けば千歌に抱き着いていた。

「ホント、変な人…」

梨子の為に、一人欠けるといふリスクを負ってでもコンクールに出て欲しい。千歌は、そういう人間だ。本当に、みんなを大切に思っている―

「大好きだよ」

例え立つステージが違ってても、気持ちはみんな繋がっている。想いは一つだから。

「梨子ちゃん、しっかりね」

「お互いに」

駅の改札前で、これから東京のピアノコンクールに向かう梨子に千歌がそう言うと、梨子からそう返される。

これから梨子は一人でコンクールへ向かうのだ、今日は全員でそれを見送りに来たのだ。

「梨子ちゃん、がんばルビィ」

「東京に負けてはダメですわよ」

ルビィが激励の言葉を贈る隣でダイヤがそう食い気味に告げる。

東京に負けるの意味が解らないしそもそも半年前まで住んでいたのだが…。

そんな事を思っていると、電光板へ目を向ける曜が、

「そろそろ時間だよ」

そう告げる、確かにそろそろホームへ向かわないと乗り遅れる、梨子は「うん」と応じ荷物を手にする。

「チャオ〜梨子」

「しっかりね」

「ファイトずら」

鞠莉、果南、花丸にそれぞれ激励の言葉を貰った梨子は、遥と目を合わせる。

「姉さん、頑張ってね」

「遙も、しつかりね」

「もちろんさ」

マネージャーとしての仕事を指しての言葉だと思っ
ている遙だったが、梨子のその言葉に別の想いがあることを知るの
は、まだ後の事だった。

「梨子ちゃん！次のステージは、みんな一緒に歌おうね!!」

「もちろん!」

千歌の呼びかけに、笑顔で応じた梨子はホームへと去っていった。

「さ、練習戻りますわよ」

梨子を見送った後、ダイヤがそう切り出す。次のステージに9人で立つために、これから練習だ。

「これで、予備予選で負けられなくなったね」

果南は最初から負けるつもりなどない、そんな様子で言うと、みんなも一層気が引き締まった。

「なんか気合いが入りマース!」

みんなも鞠莉と同じ気持ちだった。絶対に予備予選は突破できる。そう思うのだった。

「特訓ですわ!」

部室で再び集合したメンバーだったが、ダイヤが一人で盛り上がっ
ていてルビィですらPCを操作して無視を決め込んでいた。

「また?」「本当に好きずら!」そんな声がちらほらメンバーから上
がるが、PCの画面に夢中だったルビィが「あつ」と声を上げたことで
全員の視線がそちらへ注がれる。

ルビィが見ていたのは、すでに行われた別の地域での予備予選の映
像だった。

「これって、Saint Snow!」

千歌が興奮気味にそのグループ名を言う。

「へえ、これが千歌達が東京で会ったっていう」

そう果南が興味ありげに言うのと、そういえばその時はまだ6人だったな、と思い出す。遙も東京には行けなかったが、話は行ったメンバーから聞いていた。

惜しくも入賞こそ逃したが、圧倒的なパフォーマンスをする2人組だったと。

「先に行われた北海道予選をトップで通過したって!」

「頑張ってるんだ…」

記事を興奮気味に読むルビイの言葉を聞いて、千歌も嬉しそうにそう漏らす。

「気持ちには解るけど、今は目の前の予備予選。そこに集中しない?」

そう口を挟む果南を鞠莉はからかうように、

「果南にしてはずいぶん堅実ね」

「誰かさんのお陰で勉強したからね」

そんな軽口を叩くとダイヤが「では」と言って手を叩く。

「なんでこうなるの…?」

思わず千歌がそう漏らすのも無理はない、何故ならダイヤは特訓だといったが移動したのはいつもの屋上ではなくプール、しかも今からここを清掃するというのだ。

「まさかこんな時期にプール掃除なんて…」

遙も本音が漏れてしまう、確かにそう言えば一学期中にプールの授業なんか無かったが、まさか掃除もされてないなんて…。

「文句を言っていないでしっかり磨くのですわ!」

プールサイドに立つダイヤが監視しているがそう激を飛ばす。

周りを見ると花丸はぬかるみに足をとられて転倒し、その近くにいたルビイも驚いて尻餅をついていた。

「これで本当に練習になるの?」

「ダイヤがプール掃除の手配を忘れていただけね」

千歌の疑問に鞠莉が悪戯っぽく答えると、ダイヤが噛み付いてきた。

「忘れていたのは鞠莉さんでしょう！」

「言ったわよ？夏休みになったら何とかしろって」

「だから何とかしてるんじゃないですか！」

僕らがね、そう口から出そうになった皮肉をなんとか引つ込めた遥だったが、

「なんなのが理事長と生徒会長で大丈夫なの？」

「私もそう思う」

鞠莉とダイヤの言い合いに巻き込まれないように離れて傍観していた善子の眩きに、果南も同意する。

千歌もダイヤが加入した時に生徒会の仕事を手伝うといったのでしようがないといって全員で清掃に励むのだった。

「そうだ、ここで練習しない？」

プールも綺麗になり、無事清掃が終わったので果南がそう提案する。

今から屋上まで移動する時間を短縮できるしいい案だとみんな賛同する。

「じゃあみんな位置についてください」

その遥の声で全員が予備予選でやる曲のポジションにつくが、ここで何か違和感を覚えた。

「あれ…」

千歌も気が付いたらしく、そこでみんな曲の初めのポーズを解いてダンス担当の果南が違和感の正体を口にする。

「そっか、梨子ちゃんがないんだね」

「そうになると今の形はちよっと、見栄えが良くないかもしれませんわ

ね」

ダイヤもそう指摘する、元々9人で綺麗に見えるように作った振付なので一人欠けるだけでもかなり見栄えは悪い。

「変えるずらう？」

花丸のその質問に果南が「それともー」と代案を思いつく。

「誰かが梨子ちゃんの位置に入る？」

元々千歌と梨子がセンターの予定だったので、梨子の位置に誰かを配置してセンターはそのままの形で行く方が変更も少なく済ませれるのでそれが望ましいだろう。

「遙くん、踊ってみる？」

「レギュレーション違反で失格になりますよ」

「冗談だって」

千歌の言う事は冗談に聞こえないんだよなあなんて思いながらも全員が、その位置に一番向いているであろう人物の方を見る。

「え？わたし？」

千歌とも付き合いが長くて、即席でもコンビネーションがとれるであろう人物。それは曜だった。

「私が悪いの…」

「違うよ、私が曜ちゃんに合わせられなくて…」

しかししなかなか上手く二人の息は揃わなかった。

「まあ、体で覚えるしかないよ。もう少し頑張ってみよう」

とにかく、合うまで練習するしかない。果南の意見に2人も意義は無く、ここまでで既に10回は失敗しているがとにかく今は練習あるのみ。

「あ、ごめん…」

「私が早く出すぎて…ごめんね、千歌ちゃん」

再び二人の肩がぶつかってしまつと、お互い申し訳なさそうにしているが遙にも、2人は必要以上にお互いに気を使っているように見え

た。

結局、その日の練習ではものにする事ができず、夕方帰りに立ち寄ってコンビニの駐車場の一角でも練習を2人だけで行っていた。

「やっぱ難しいのかな?」

それを眺めながら何か自分にできることは無いだろうか? そう思う遥だったが、自分も素人なので気休めの言葉しかかけられないだろう。

コンビニの中では花丸とルビィはアイスを食べていて善子はなにやらくじを引いていた。3年生3人は、生徒会室に用事があると言って、そのまま学校で別れている。

もう当たりも夕日でオレンジ色になっていて時間帶的にそろそろ帰った方がいいのかもしれない…。

何度目の失敗だっただろうか? そういう次元に達するくたいずっと練習に打ち込んでいて、そろそろ止めないと疲労で余計にうまくいかないのではないか? そう思ったころ、

「わたしがいけないの…、どうしても梨子ちゃんと練習してた歩幅で動いちゃって…もう一回やってみよう」

千歌がそう言っているのが聞こえてくる。「じゃあいくよ」と準備する千歌を曜が呼び止めて、

「千歌ちゃん、梨子ちゃんと練習したとおりに動いてみて」

そう提案すると、千歌は「でも…」と言いよどむが「いいから」と曜が押し切ってその通りに動いてもらう。すると今までの失敗が嘘のように上手くいった。

「おおー天界的合致!」

気が付いたら様子を見て来ていた善子がそんなよくわからない声を上げる。

「これなら大丈夫でしょ?」

「さすが曜ちゃん、すごいね!」

確かに元々梨子と千歌でやることを前提としたものだったので、確

かに曜が梨子の動きをコピーできれば千歌は今まで通りの動きで済む。でも一発でそれをこなすなんて…本人以外はみんな驚いていた。

その時、着信音が聞こえた。千歌のスマートフォンからだった。

「あっ梨子ちゃんだからだー！」

そううれしそうな声を上げると、そのまま通話に出た。

暫く千歌が笑顔で嬉しそうに話していたが、「みんなに代わるね」というの耳を離しスピーカーに切り替える。

「花丸ちゃん」

その時たまたま一番近くにいた花丸に千歌がスマホを向ける。

「え、えくと…もすもす？」

咄嗟に出してしまった訛りで梨子にも相手が誰かすぐ解ったのか『花丸ちゃん？』とスマホから梨子の声が聞こえる。

「み、未来ずらあ〜」

と驚いた様子で驚いた表紙に後ろに仰け反る。流石にもう普及してそれなりに経っているいるのだが…。

「何驚いてるのよ、流石にスマホくらい知ってー」

『善子ちゃん？』

花丸の様子に呆れている善子の声に梨子が反応する。

「フフフ…ヨハネは墮天に忙しいの、別のリトルデーモンに代わりますー！」

そう言うや否やルビィを代わりにスマホの前に突き出す。

『もしもし？』

若干呆れた様子の声が怖かったのか、「ピギイイイ！」と悲鳴を上げると駐車場の木の陰に隠れてしまう。

「どうしてそんなに緊張するの？梨子ちゃんだよ？」

不思議そうにしている千歌に、花丸はいまだにスマホを見つめたまま。

「電話だと緊張するずら、東京からだし」

「東京関係ある？」

そんな話をしている2人を見つめっていると、「じゃあ曜ちゃん！」そう言っ曜にスマホを差し出す。

「梨子ちゃんに話しておくことない?」

そう問われると、曜はしばらく迷っているような様子を見せるが、そこで千歌のスマホが電池残量が残り少ない事を告げる。

「あ、電池切れそう」

そう言つてスピーカーを解除して通話する千歌だったが、「またとか言わないでよ、ただけど…」なんて罰の悪そうに笑う千歌だったが、少しして電話を切る。

「よかった、喜んでるみたいで…」

そう言つてスマホを大切そうに抱きしめる。

「じゃあ曜ちゃん」

「…え?」

急に名前を呼ばれた曜が困惑気味に反応すると、

「私たちもうちよつとだけがんばろっか」

「うん、そうだね…」

そう答える曜の手に握られていた2人の分のアイスは、もう溶けていた。

「曜先輩、何かあったんですか?」

「え?なんで?」

「なんか、コンビニにいた時辛そうに見えたので…僕でよければ話してください」

あの後、曜の様子の変化に勘付いた遙は、他のメンバーが先に帰ったあとそう切り出した。

「い、いや?…なんでもないよ…?」

「けど…姉さんと電話してたあたりから辛そうでした。何か我慢していることがあるんじゃないんですか?」

何でもないと言つて答える曜にそんな筈はないと言は食い下がる。

「遙くんには解らないよ…」

「え?」

「だって遙くん男の子だし、ウルトラマンなのずっと隠してたし…遙

君に何が解るの!？」

思わず少しづつ言葉が強くなって言い返してしまう。

「そ、それは…」

その発言が曜の逆鱗に触れてしまったのか、遥は痛い所を突かれて言葉を詰まらせてしまう。

「あ…ごめん…」

そう言って曜はその場を走り去ってしまう。

「先輩、待ってください…」

「はいストップ！」

自分の言い方が悪かったのだと思った遥は、曜を追って訂正しようとしたとき突如後ろから声をかけられる。

「…っ誰だ!？」

「チャオ〜ハルカ」

「鞠莉先輩」

彼女は学校での練習の時点で何かに気が付いていたらしく、自分たちの用事が終わった後、遥と曜が何やら言い合っていたのを見かけたのだという。

「どうしてそんなこと…」

「まあまあ、とにかくここはマリーに任せて? ガールズトークの方が良い時もあるの」

「…解りました、お願いします」

「オツケー」

そう言って曜が去っていった方へ向かって行くと暫くして曜の悲鳴が聞こえた気がした。

後から聞いた話によると、後ろから抱き着いた結果背負い投げを食らったらしい。

2人つきりになれる場所で話をしよう。鞠莉にそう連れられてやってきたのは沼津の展望水門だった。

「ちかっちとはどう?」

「千歌ちゃんど?」

天文台の中に入るや否やそう鞠莉は切り出した。

「うまくいってなかったでしょう?」

「ああ、それなら大丈夫。あの後ふたりで練習してうまくいったから」
「そういえばあの後別行動だったから彼女はダンスがうまくいくようになったことは知らないんだ。そう思って曜はそう答えるが、鞠莉が言っているのはその事ではない。」

「いーえ、ダンスではなく…」

「え?」

「ちかっちを梨子に取られて、嫉妬ファイヤ〜♪が燃え上がってたんじゃないの?」

「しっ嫉妬!?まさかそんな事…」

「そうやって取り繕うとする辺り凶星なのだろう。曜の言葉を両のほっぺをつまみ遮ると。」

「ぶっちやけトーク!する場ですよここは」

「鞠莉ちゃん…」

「話して?ちかっちにも梨子にもましてやハルカにも話せないでしょ?」

「そう言っつてベンチに腰掛けた鞠莉は、隣の席を叩いて曜に座るように促した。」

「そこで曜は、初めて胸の内を明かすのだった。」

「危ない時は、いつも助けてもらった。本当にアグルがいなかったら勝てなかった事は何回もあった…」

「あの後遙は、一人海を眺めて物思いに耽っていた。」

「でも、もうアグルはいない…これからは僕が一人でみんなを守って」

いかなきやいけないんだ)

遙自身も曜の様に悩んでいたのだ。アグルの力を貰ってパワーアップを遂げたが、それは同時にこれからは自身の力だけで戦わなければならぬという事だった。

「でも、できるのかな…」

「君はどうして、僕に力を授けたんだ？」

そうエスプレンダーをとり出して、そう光に問いかけるが赤と青の光の玉が浮かび上がるだけで返事は返ってこない。

「先輩の言う通り、僕の方がずっと隠してたのにね…」

遙もまた、自分との戦いが始まるのだった。

23話 友情ヨーソロー／ヴァージョンアップ・ファイト!

「本音をぶつける…か」

昨日鞠莉にもらったアドバイスだった。本当に大切な友達なら、本音をぶつけるべきだ。

それが2年前でできなかったからすれ違った彼女だから言えることだったのだろう。

「よしー!」

意を決して部室の扉を開ける。

「おはよ〜」

翌日朝、練習の為に部室に曜が最後にやってきたのだが、

「曜ちゃん見て見て!」

そう言って千歌は右手首にはめたオレンジのシユシユを見せてきた。

「わあ可愛い、どうしたのコレ?」

「みんなへのお礼って梨子ちゃんが送ってくれたんだ」

千歌がそう答えると、他のメンバーもそれぞれのイメージカラーの色のシユシユを嵌めているのを見せてくる。

「梨子ちゃんもこれつけて演奏するって、曜ちゃんのもあるよ」

そう言って差し出された水色のシユシユを受け取ると「ありがとう」と返した。

「さて、練習を始めますわよ」

ダイヤがそう告げると、練習の為に屋上を目指す。

「曜ちゃんも着替え急いでね」

「千歌ちゃん!」

先に屋上に向かう前に、千歌がそう声をかけてから部室から出ていくのを曜が呼び止めるが、

「頑張ろうね」

「うん!」

曜はそれしか言う事が出来なかった。

「僕が、隠してる事、か……」

練習後、遥は一人音楽室にいた。かつて姉と一緒に事がしたい。そう言っただけのピアノだったが、小学校の頃周りと違う自分を意識した時に投げ出してしまったものだ。

—おねーちゃん、ぼくピアノやめたい

—どうして？

—おかしいんだって、男の子のぼくがピアノやってるの。それにみんなより勉強ができるのも

それは遥が周りと比較して頭脳が優れていた事、それでいて姉の梨子には遠く及ばないがそれでも、同年代の中ではピアノも堪能で周りと違って外に出たがらなことが重なって起きたことだった。

子供というものは残酷で、みんなと違うものを時として輪から追い出してしまふ。

だから遥はそれから目立つことを嫌った。成績なんて黙っておけば解らない、人並みにしか理解してないフリもした。だからピアノも弾けないことにした。

でもそんな時にたまたまネットを使って知り合ったのがダニエルだった。彼はアルケミースターズを立ち上げ、優秀な頭脳を持った若者を世界中から集めてその能力を役立ててきた。そのお陰で遥は自分の才能を伸ばす事を望むようになった。

高校に入って、全くゼロから人間関係を築くことになったのも幸いし、少しずつトラウマを乗り越えてこれた。

でもそれでも怖かったのだ、自分がウルトラマンになったことを人

に知られることが。

だから今までも自分から望んで正体を明かすことはしなかったし、梨子には心配をかけたくなかった。

そつと鍵盤に指を伸ばし、一つだけ音を出す。

その感触を味わった後、椅子に腰かけて少しだけ弾いた。当時大好きで弾いていた曲、不思議と体は覚えている物でいくら小学生で弾ける曲だったからといって目立つミスもなく弾けてしまう。

「遥つて、ピアノ弾けたんだ」

暫し夢中で弾いていて、人が来たことに気が付かなかったが。演奏をやめた時その声が聞こえる。

「まあね」

相手が善子だった。多分花丸とルビィは図書室にでもいるのだろうか？彼女も正直個性が強いが意外と後の2人より気を遣わずに会話できるから楽だと感じる。最初は苦手だったが…。

「まあ姉を見るとそこまで以外じゃないか」

「家にもピアノあるし、作曲も少し手伝ったりしたからね」

まあ遥は絶対ピアノは触れなかったから梨子以外に弾けることを知らない訳だが。

「上手なのになんで弾かないの？」

「色々あつてやめちゃったんだよね、今日はちよつと気が向いたというか…」

「そういうことにしといたげるわ、遥はあんまり知られるの嫌そうだし」

そうやって誤魔化す遥に善子はそれ以上追及することはなかった。

「ありがとう」

「ま、まあヨハネにはリトルデーモンの事なんてお見通しだけどね」

そうやってすぐいつもの調子になるのもあまり聞いてこないのも彼女なりの優しさだろう。

そんな時、学校の近くの空が突然輝き。ウルトラマンガイアが現れた。

「どうして？ 遙はここにいるわよね？ まさかドツペルゲンガー？」

「わかんない、けどあれはウルトラマンじゃない…きつと何者かがガイアのデータを使ってる…」

「そんな事分析してる場合!?」

目の前に遙がいるのに突如現れたガイアに善子は動揺するが、遙は落ち着いた様子で現状を分析する。

「ちよつとどこいくの!?!」

突然音楽室を飛び出した遙を、善子も追いかける。

もし本当にガイアのデータをどこから盗み出してガイアの姿を真似ているのなら、きつと能力も本物と互角。だが今のガイアはその場に佇むだけで何もしない。

まるで、本物が現れるのを待っているかのように…。

「なんで、ガイアが…」

今日は一人で帰っていた曜も、自身の近くに現れたガイアに驚いた。

特に怪獣が現れたとかそういう話も聞いていない。ならどうして遙はガイアに?—

そう思ったときガイアと目が合う、するとガイアはこちら目掛けてクアンタムストリームの発射態勢に入った!

「うそ!? なんで!?!」

まさか昨日ひどい事言っただけ…などと考えてしまうが、本物はそういうことをする訳がない。そう思うが目の前の現実が変わらない。もう逃げられない…。

そう思い咄嗟に目を伏せた時だった。

「デヤアアアアア!!」

恐る恐る目を開けた曜が見たものは、何者かに蹴り飛ばされ転倒するガイアと、それを蹴り飛ばした正体が宙返りをして派手な土煙を上げながら着地したところだった。

「ガイアが…2人？」

その存在もまたガイアだった。両者の違いは胸のプロテクターが赤か黒かの差しかなかった。

今現れた方のガイアが黒で、曜を攻撃しようとしたガイアが赤だ。つまり、赤い方が偽物で過去のガイアのデータをもとにしているのだが、ガイアV2はゾーリムと戦っている時の僅かな時間だけだったので、周りの人間にはどちらが本物か解らない。

「遥…勝てるわよね？」

飛び出した遥が目の前でガイアとなつて、もう一体のガイアへ挑んでいくのを見た善子はそう呟いた。

「善子ちゃん、何があつたずら？」

「なんでガイアが2人いるの？」

そう言つて花丸とルビィも善子の方へ駆け寄ってくる。

「解らないわよ、でもさつき街を攻撃しようとした方が悪者に決まつてるわ」

そう言つてぶつかり合う二体の巨人の方を見る。きつと自分たちが知つているガイアが勝つと信じて。

お互い同じ構えで暫くにらみ合っていたが、本物のガイアは力を抜き、アグルの様に片腕を突き出す構えに変わる。

「デュワツ！」

「デヤアツ！」

偽物のガイアがフォトンエッジを放つと、本物はなんとフォトンクラッシュャーを放つた。アグルの力を得てパワーアップしたガイアは、アグルの技も習得したのだ。

本来なら完全に互角の威力の技なのだが、ガイアがパワーアップしたことで威力が上昇しており、フォトンクラッシュャーが完全に押し切った。

「やった！」

それを見ていた一年生三人は歓喜の声を上げるが、押し切られた偽物は吹き飛ばされ爆炎に包まれるも、その中から出てきたのは金属生命体だった。

その姿はアパテーやアルギュロスと違い、ライフゲージはなく全体的にごつごつしており腕や脚、背中には鋭利な金属片が付いている。

ガイアもその姿に一瞬驚くような仕草を見せるが、両者駆け寄っていき肉弾戦に移行していった。

金属生命体の拳を片腕で受け流すともう片方の腕で胸を殴りつけ、回し蹴りをバク転で回避して全力のドロップキックを見舞う。

だが相手もガイアの攻撃が効いている筈なのにその動きは全く衰えない、両者起き上がると取っ組み合いになるがガイアが押し切ろうとすると逆に巴投げを食らってしまう。

ガイアは起き上がると咄嗟に再びアグルの技であるリキディターを放つ。咄嗟に撃てて瞬間の火力ならクアンタムストリームに勝るのだが単発攻撃なので攻撃し続ける時間は短いのだ。

だが金属生命体も仰け反りはするもののやはり効果的なダメージは与えられていない。

すると金属生命体は背中の中の2つの金属片をブーメランに変形させて射出してきた。

最初のうちは様々な方向から飛んでくる攻撃にも反応して躲していたが、それをみて相手は更に腕と足の金属片もブーメランに変形させて飛ばしてきた。

6つのブーメランが全ての方向からランダムで襲い掛かってくるので、ガイアも反応しきれず次第に攻撃を受け始める。何発か食らってしまったところで、ブーメランをさらにさす又状に変形させ、それがガイアの首を捉えた。

その勢いでガイアは後方へ倒れこんでしまうが、残りの金属片もさす又に変形させ、ガイアは地面に張り付けにされてしまった。

「遙くんが……」

曜は自身を助けてくれたガイアを助けることはできない、昨日は酷いことを言ってしまった自分に何も言わず更に身を挺して守ってく

れた後輩に今してあげられることなどない…。

金属生命体は勝ち誇ったような声を上げるとガイアへ歩み寄る。

「お願いガイア、負けないで！」

気が付いたら曜はそう叫んでいた。

「私、友達に言わなきゃいけないことがある！昨日ひどい事言っちゃった事謝ってない！だから…だから負けないで…」

段々泣きそうな表情になりながらそう訴えかける。今何もしてあげられる事ができない、このままでは自分の言わなきゃいけないことを伝えることができなくなってしまう。

「私何もしてあげられないけど、ガイアが勝つのを信じてる！ここで見てるから！」

ガイアはゆっくりと曜の方を向き、目が合う。

（先輩…僕も謝らないといけないんです…それにここで負けたら、誰がみんなを…姉さんを守るんだ？そうだ…ここでやられてたまるかあッ！）

目前に迫った金属生命体に視線を戻すと全身に力を込める。するとガイアの四肢が赤く輝き、さす又を力づくで引き抜くと飛び起きる。

突然の事に相手も完全に虚を突かれたのか動きが止まってしまう。

「デュワッ！ハアアア…デヤッ!!」

その隙にガイアは両腕を突き上げ、大地と海の光を完全開放するとそれを身に纏う。

ガイアの姿が変わったが、金属生命体は今度こそガイアを倒そうと駆け寄ってくる。

しかし、ガイアはそのまま相手の体を掴んで放り投げると、起き上がろうとする相手を掴み、今度は背負い投げをかける。

さらに起き上がった相手に駆け寄って再び投げ飛ばす。

「凄いい…」

「圧倒的ずら…」

「うゆ…」

その光景を見ていた一年生組は、普段の遥から想像できないような

戦いに圧倒されるのだった。

金属生命体はその名の通り全身のほとんどが金属と同じもので構成されており、強固な身体を持つ反面重量がある、したがって投げ技なら、その重さがダメージになるので格闘より効果がある。そう思っ
ての戦法だった。

だがガイアの猛攻は止まらない、今度は起き上がる前に相手の上半身を掴んで抱え上げて自身の背中へ持つていきそのまま頭から地面へ落とす。その次は完全に頭上に持ち上げて遠くへ投げ飛ばす。

反撃に蹴りを放つ金属生命体の足を掴んで反対側に投げ飛ばし、起き上がろうとする所を飛び上がって近くに着地すると再び持ち上げて頭から落とす。

もがき苦しんでいる所を足を掴んで更に放り投げたので、金属生命体はもうボロボロで立ち上がるのが精一杯といった様子だった。

ガイアは右腕を突き上げると、両腕を大きく振りかぶってエネルギーを収束させる。

「デヤッ！ハアアア……デヤアアアア!!」

そしてそれを胸の前で合掌するように手を合わせ、右手を下にスライドさせてそのエネルギーを解き放つ!

光子の奔流―フォトンストリーム―新たな姿を得たガイアの最強の一撃だ。

それをまともに受けた金属生命体は一瞬にしてチリも残さず消滅してしまった。

そしてガイアは再び曜の方を向くと、サムズアップをする。

「へへっヨソロー!」

曜も嬉しそうにそう言って敬礼をするもう遥にとつても馴染み深いポーズだ。

するとガイアもそれに敬礼で返すと、そのまま飛び去って行った。

「…ありがと、遥くん」

曜は飛び去るガイアを見ながらそう呟いた。

「曜先輩、大丈夫ですか？」

ふと声のした方を見ると、そこには遥が立っていた。

「遥くん、何で？」

たしか帰るとき学校に残っていたはずだったので、学校に戻ったものだと思っていた。

「いや、さっき戦った時。近くに先輩がいたから怪我とかしてたら大変だって……」

「ううん、わたしは大丈夫」

「よかった……」

曜はすぐガイアが現れたおかげで無傷だったし、ガイアが離れた場所に相手を吹き飛ばしたお陰で戦闘の余波も受けずに済んだのだ。それに遥は安心したように胸をなでおろす。

「それより、昨日はごめんね。心配してくれたのに……」

「僕の方こそすいませんでした、僕も皆には色々秘密にしてるのに偉そうにあんなこと聞いて……」

そう言つて遥は頭を下げた。

「や、やめよう？ 遥君は悪くないから……」

曜もそれには流石に慌ててやめるように促すのだった。

「きつと先輩、姉さんがコンクールに出たせいで自分の役割が増えて大変だから……。そう思っただんです」

「え？」

「それに姉さんに話しちゃったんです。姉さんのポジションを先輩がやることになった。って、そしたら『曜ちゃんには曜ちゃんに合ったやり方があるから、変えてもいい』って確かにもう本番まで時間がないけど、それは僕も賛成です」

「でも……」

もう梨子の動きを曜がトレースすることで話は纏ってしまった。

それにさつき言ったように時間がない。そう言いかけた曜だったが、遥は続けた。

「それに千歌先輩も言ってたんです。『ずっと曜ちゃんと一緒に何かやりたかったんだ』って、先輩は曜先輩の誘いを断ってきたの気にしてたらしくて、だからスクールアイドルは絶対やり遂げるんだって。うちで曲作ってるときよく言っていました」

その言葉に涙が出そうになり、何も言えなくなる曜だったが遥は気が付いていないのか更に続ける。

「だから、もう一回千歌先輩と話して2人が納得できる形にしましょう。僕もできることがあれば手伝いますから」

「うん、ありがと」

泣きそうなのを悟られないように顔を伏せる曜は、一言だけ感謝を述べる。

「お礼を言うのも僕の方ですよ、先輩の応援がなかったらきつと今日を負けてました。だから、ありがとうございました」

遥もそれが一番伝えられたのか、言い終わると「じゃあまた練習で」それだけ言って走って帰っていった。

想いよひとつになれ

それが予備予選の為に作った曲、『大切なもの』がテーマとなった曲

だ。

恐らくAppursがステージに立っている頃、梨子もコンクールのステージでピアノを演奏している。たとえば、今いる場所が離れていても想いは一つだから。だから今、9人全員同じ気持ちで不安も孤独も感じず、ただ自分の思うがままのパフォーマンスを行っているだろう。

そしてその気持ちを分かち合って、遥もまた戦っていくのだ。

「そうだ、僕も一人じゃない……」

24話 龍の都／はばたきのとき

「さあ、今朝捕れた魚だよ。みんな食べてね」

予備予選結果発表の翌朝、部室に集合したときに果南はそう言ってクーラーボックスに入れて、刺身の船盛を持ってきた。

無事に予備予選を突破することができた。今日はそのお祝いと称して果南はこれを持ってきてくれた。

「なんでお祝いにお刺身なの?」

千歌は呆れ気味にそう聞いてくる。

「だって干物じゃお祝いっぽくないじゃん?」

「それ以外にもあるでしょ夏みかんとか!」

「パンとか」

果南に対して千歌は夏みかんを、パンを提案したのはパンを今頬張っている花丸が。どちらも自分が食べたいものだろう。

「見てください!」

そう言わずとPCを操作していたルビイが、その画面を皆に見せる。

そこに映っていたのは先日の予備予選でのパフォーマンスだった。他の参加スクールアイドルの映像もあるのだが、予選を突破した他のスクールアイドルと比較してもA q o u r sのPVは頭一つ抜き出していた。

「凄い再生回数!」

その再生回数を見た曜が興奮のあまり声を上げる。なんとその回数158, 372回。

「それだけじゃなくて、コメントも沢山ついていて」

そう言つてコメント欄もルビイは見せてくれるが、そのコメントはいずれも好意的なものばかりだった。

〈かわいい〉

〈全国に出てくるかもね〉

〈これはダークホース〉

「ダークフォース!?!」

最後のコメントに善子は反応するが、「それ違うから」そう遥が言うがそれは周りの言葉に掻き消される。

「よかった、今度はゼロじゃなくて」

そう言って安堵する千歌だったが今度はスマホが着信音を奏でる。

「あ、梨子ちゃんからだ！」

そう言って嬉しそうに電話に出ると、スピーカーに切り替えて机の上に乗く。

『予選突破おめでとう』

「ピアノの方は？」

『うん、ちゃんと弾けたよ。探してた曲を弾けた気がする』

「じゃあ、今度は9人で歌おうよ！全員揃って、ラブライブに!!」

千歌と梨子の会話を聞いていた曜がそう言って両腕を広げる。

『そうね、9人で』

その言葉に梨子はそう応じる。

「そして、ラブライブで有名になって浦の星を救うのですわ」

ダイヤそう告げる。「がんばルビィ！」ルビィも姉の意見に同調する。

「これは説明会も期待できるんじゃない？」

「説明会？」

果南の口から出た説明会というワードに千歌は首をかしげる。

「セプテンバーに行くことにしたの」

鞠莉がそう告げると、

「きつと今回の予備予選で学校の名前も知れ渡ったはず」

「そうね、PVの再生回数からだと説明会の参加希望者の数も…」

ダイヤの言葉にそう応じながらスマホを操作する鞠莉だったが言葉詰まらせる。

「ゼロ…ゼロ…だね…」

「嘘…嘘でしょ!？」

「一人もいないってこと!？」

ダイヤが悲痛な声を上げるが、曜の言葉で全員が今の現実を直視す

るのだった。

「東京へ？」

その後の夜、千歌からメンバー全員へ電話があった。

あの後、μ'sはこの時期にはすでに廃校を回避していたことを知った千歌は、自分たちと何が違うのか？どうすればいいのか？その答えを知るために、再び東京へ行きたい。そう告げた。

「解りました、今度は僕も行きます。僕もその答えが知りたい」

『ありがとう、じゃあみんなにも聞いてみるから。日程はまた伝えるね』

そう言って彼女は電話を切る。

「東京…か」

今姉がコンクールの為に訪れている場所、そして遥にとってもかかって自分が暮らしていた土地。

「皆さん、心をすっかり、負けてはなりませんわ。東京に吞まれぬよう」

東京に着くや否や、ダイヤがそうやってなぜか周りを鼓舞するように声をかける。

「大丈夫だよ、襲ってきたりしないって」

そう千歌が笑って言うが、ダイヤは千歌にぐいと顔を近づけると。「あなたは解っていないのですわ!」

そう言っただけで食ってかかる、何をそんなに敵対視しているのかルビィは何か知っているんじゃないかと思っただけで尋ねると。

「お姉ちゃん、小さい頃東京で迷子になったことがあるらしくて…」

「なるほど、まあ確かに住んでも普段行かない場所に行こうとすると迷ったりするしね。僕も小さい頃何回かはぐれちゃったりしたなあ…」

そんな事を遥が遠い目をしながら呟く。それなら小さい頃ダイヤが迷うのも仕方がないのかもしれない。

「トラウシだね」

「トラウマね」

千歌が間違っただけの言葉を言うが、隣にいた善子がすぐさま訂正を入れる。

「そう言えば梨子ちゃんは何?」

そう曜が聞くと、「ここで待ち合わせのハズなんだけど…」と千歌が周りを見渡すと、コインロッカーの前で荷物をロッカーに押し込む梨子の姿を見つける。

「梨子ちゃん?」

千歌が梨子に近づいてその声をかけると、梨子は零れ落ちそうな荷物を必死にロッカーに背中で押さえつけると、不自然な笑みを浮かべ。

「ち、千歌ちゃん?それにみんなも」

「何入ってるの?」

「えっと…お土産とかお土産とか…お土産とか…」

中身が気になったのか駆け寄ってそう聞く千歌に、そう言うがやはりどこか様子がおかしい。

「わあお土産!」

嬉しそうに駆け寄った千歌に驚いた梨子は、その拍子にロッカーに入れようとしていた荷物の一つを落としてしまう。

それが何か見ようと屈みこむ千歌に、梨子は声にならない悲鳴を上げると千歌の目を両手でふさぐ。

「わあ見ええないよー」

梨子にとつてはとても見られたくない代物だったのだろう。その後なんとか荷物をロッカーに収めた梨子だったが、何もなかったかのように「さあ行きましようか」そう切り出すのだった。

「ところでどこへ行くの？」

曜がそう聞く、遙も^スゆかりの地を巡る。とは聞いているものの具体的な場所は何にも聞いていない。

「ツリー？・ヒルズ？」

「遊びに来たわけではありませんわ」

鞠莉が思いついた場所を上げていくがダイヤにそうあしらわれてしまう。

「そうだよ、まずは神社」

千歌が本来想定していた行き先を告げる。

「実はね、ある人に話を聞きたくてすっごい調べたんだ。そしたら、会ってくれるって」

「ある人？」

「いったい誰なのか見当もつかないが花丸ものだろう、そう聞くが「それはあってからのお楽しみ」そういつてはぐらかされてしまう。

だが、その時顔を近づけると花丸は怯えてしまう、無理もない千歌の顔には梨子に抑えられた跡がくつきり残っていたのだから。

「でも話を聞くにはうってつけの凄い人だよ」

千歌はそう自信ありげに告げるのだった。

神社への階段を登り切ると、そのにはSaint Snowの2人がいた。

「お久しぶりですね」

不敵な笑みを浮かべたまま、そう挨拶してきたのは青紫色の髪をサイドテールにした少女、鹿角聖良。Saint Snowは姉妹でのユニットで彼女は姉だ。その隣で無愛想な表情を浮かべて一言も発さない背の低い赤紫色の髪をツインテールにしている少女が妹の鹿角理亞だ。

「お久しぶりです」

千歌も笑顔でそう返した。

「な〜んだ」

そう失礼なりアクションをとってへたり込んだのは黒澤姉妹の2人だった。

「それと、そちらの方はメンバーではないですよね？」

聖良が遥の顔を見ながらそう聞いてくる。前にあった時は3年生もメンバーになる前だったがPV等で見てくれたのだろう。

「初めまして、マネージャーの桜内遥といます」

そう言っつて遥は頭を下げると聖良も「初めまして」と頭を下げてくれる。

「ここで立ち話も何ですし、場所を変えましょうか？」

聖良の提案で、全員で移動する。

「その人、ちよつとええかな？」

「え？！僕？」

一緒に神社を後にしようとした時、遥は後ろから声をかけられて立ち止まる。

ことを祈ります」

「ありがとうございます」

そう言つて遥の隣を通り抜けた女性の言っていたことが、納得いかない遥は呼び止めようと振り返るが、

そこに女性の姿は無かった。

「いない…どうして?」

ここは開けた場所のはずだ、そんな一瞬で見失うなんてそうそうありはしない。首をかしげる遥だったが、そのまま階段を降りて、皆に合流すべく移動を開始した。

「私と理亜は、A—RISEに憧れてスクールアイドルを始めました」
UTXという、かつてμsと並んでスクールアイドルの今の人気を作ったグループ、A—RISEというスクールアイドルがいた学校。そのカフェスペースに来ていた。

「だから、私たちも考えた事があります。A—RISEやμsの何が凄いのか?何が違うのか」

そう聖良は語る。きつとこの疑問はスクールアイドルを目指した者は皆、一度は同じことを悩んだ事があるのかもしれない。

「それで、答えはありました?」

千歌の問いかけに、聖良は首を横に振る。

「いいえ。ただ、勝つしかない。勝って追い付いて、同じものを見るしかないのかも…つて」

スクールアイドルの頂点に立ち、かつてのμsやA—RISEと同じものを見るしかない。それが彼女達2人の得た答えなのだろう。

「勝ちたいですか?ラブライブ、勝ちたいですか?」

千歌のその問いに2人は目を丸くすると。

「姉さま、この子バカ？」

理亞のその発言に聖良は何も言わずに千歌に問いかける。

「勝ちたくなければ、何故ラブライブに出るのです？」

「それは…」

「μ，sやA—RISEはどうしてラブライブに出場したのです？」

その問いかけに千歌は答えることができない。どうして既にスクールアイドルの頂点にいたA—RISEがラブライブに出場したのか、既に廃校を阻止したμ，sがラブライブに出場したのか。その答えは千歌には解らない。Saint Snowの2人の様に、優勝して同じ景色を見ることが答えだとも思えない。

「そろそろ今年の決勝大会の発表になります、見に行きませんか？ここで発表するのが恒例になっているんです」

そう告げると聖良は立ち上がる。それに千歌達も続いてカフェテリアを出る。

UTXの外にあるモニターの前には、既に沢山の人だけができていた。

聖良に続いて全員がモニターの前に来た時、丁度モニターが切り替わり、ラブライブ決勝大会の場所を告げる。

「アキバドーム…」

かつてμ，sが優勝した時の会場、その名前を梨子が呟く。

「本当にあの会場でやるんだ…」

果南がそう感慨深そうに言うと、千歌も「想像できないな」そう呟いた。まさに憧れの舞台、次の地区予選を突破すれば、その舞台に立てるのだ。

「やっと追いついた…」

そこでやっと遙が追いついてきた、この人だから探すのは大変だっただろう。

「どこ行ってたのよ？」

「いやあ…関西弁の巫女さんに話しかけられて…」

「何言ってるの？」

梨子に何をしていたのかと問われ、それに答えるも梨子には首を傾

げられる。

その時、突然地響きと共に付近の池から龍の首が現れる。

「あれは…?」

「龍?」

その存在に理亞と聖良も気が付く。

「一体だけじゃない、色んなトコに」

誰かがそう叫ぶと、皆付近を見渡す。巨大な龍の首が、様々な場所に地面を割き、水面から立ち上る。

「電話が繋がらない!」

「見て、モニターも!」

気が付けばモニターは消灯しており、電話も繋がらず。ガスや水道といったライフラインも全て停止してしまったのだ。

だがその龍はそれ以上は何もせず、ただそこに居続けるだけだった。

「とにかく、避難しましょう。みんなはぐれないように」

「そ、そうですね。皆さん行きましょう」

遙の声にダイヤがそう言って周りに避難するよう促し、全員でその場を離れるのだった。

(倒すなって言われても…このままじゃ…)

遙は先程の女性との会話を思い出す、あれはやはり遙がガイアだと解つての発言だったのだろう。だが遙にこの状況を黙っておくことはできなかった。

こつそりと周りと離れて路地裏に入り込むと、遙はエスプレンダーを天に掲げその光を開放する。

「ウルトラマンだ!」

逃げ惑う人々の中から、ふとそんな声上がる。その声に千歌達も一斉に光が立ち昇る方へ視線を向ける。

「ガイア…」

ガイアの出現に街の人々は歓喜した。怪獣を倒してくれ。そんな

声が聞こえる。

龍の首は、ガイアが現れると出てきた地底や水面に一番巨大な首を残して戻っていく。

何が起こっているのか解らないガイアは、ただ周囲を警戒することしかできないでいると、遂に龍の全身が地上に出てくる。

他の龍の首は、その龍の尻尾だったのだ。長い首に額の水色の水晶、4本の脚と龍の首となっている8本の尻尾、それがあの龍の姿だったのだ。

「あの龍…本で読んだ事あるぞら」

その姿を見た花丸にルビイは「本当？」と声をかける。

「ミズノエノリユウ…確か、大地の守り神ぞら、本当にいるなんて…」

「そんな龍が、どうしてここに？」

「もしかして、この場所を人間から取り戻そうとしているのかも…」

人間よりずっと昔からこの土地に住んでいたミズノエノリユウは、この地を見守ってきた。でも最近の土地開発によって地脈を破壊された、だからこの土地を取り戻すために現れたのだ。

ガイアは龍に向かって駆け出した。あの女性の意図が何であったにせよ、このままでは犠牲者が出る。それだけは見逃せなかった。

しかし龍の頭を攻撃すれば、尻尾の龍の攻撃を受け。頭と尻尾、合計9つの龍に攻めたてられガイアは手も足も出なかった…。

だがガイアもただやられていたわけではない。龍の攻撃の際を突き、その首元に渾身の拳を叩きこむと怯ませ、その隙に距離をとる。

「大地を守護する者…」

先程の女性は神社からガイアの戦う様子を見ていた。だがその表情はとても難しい顔をしていた。

「この戦い、どちらが勝利しても意味がない」

そんな呟きも届かぬ中、ガイアと龍は互いに睨み合っていた。龍が口から雷を吐くとガイアはそれを咄嗟に避け、両腕をL字に組んでクアンタムストリームを放った。本来の威力には遠く及ばないが、それでも龍を怯ませ時間を作るには十分だった。

そのまま今度は両腕を広げ、フォトンエッジの発射態勢に入るが、

龍の尻尾からの雷撃によってそれは防がれてしまう。

その後、頭部の水晶が光ったかと思うと、ガイアの体が薄い水色の光に包まれその体が宙に浮く。ガイアが龍の念力によって持ち上げられ、ライフゲージが赤く明滅し、活動限界が近付いていることを知らせる。

「お願い、地に戻って。あなたの想いはガイアに届いてる」

女性のその訴えが届いたのか、龍は念力を解きガイアは地面に落下する。だがそれ以上は何もしてこようとしない龍を不思議に思ったのか、ガイアは暫く警戒していたがやがてその構えを解く。

ガイアとミズノエノリュウは暫く見つめ合っていたが、ミズノエノリュウは青い球体となって出てきた地面の裂け目から地底へと帰って行くのだった。

ガイアも女性の声に気が付いており、そちらを向くと女性と目が合った。

「ありがとう、キミのお陰で地の龍の怒りは収まった。キミのお陰で龍はチャンスくれた、そう思うんよ」

その言葉にガイアは頷くと、そのまま飛び去って行った。

「あなたは知ってたんですね？僕の事…」

あの後再び神社に戻った遙は女性にそう問いかける。

「さあ？どうやろうね？でも、全力で倒しにはいかないでくれた。それが全部やん？」

「それは…」

例え全力で持っている力を全て開放しても、ガイアにはミズノエノリュウを倒すのは難しいかもしれない。そう言いかけるが、女性は続けた。

「ありがとう、これでまたウチもここを見守っていられる…」

「それって、どういう…？」

「じゃ、この星のことは任せたから。ウルトラマンくん？」

「え？」

その時、突風が吹き遙は思わず顔を逸らして目を閉じてしまう。そして遙が再び目を開いた時、周りには誰もいなかった。

「結局、東京へ言った意味はあったんですの？」

帰りの電車でダイヤがそう尋ねる。あの騒ぎの後、9人で音乃木坂へ行ったらしいのだがその生徒にμ、s何も残していなかった事を告げられたらしい。まあ遙はまた神社に行っていたのでその事を知らないのだが、当然その事については梨子とダイヤに絞られたようだ。

「そうだね、はっきりとはわからなかったかな」

そう果南は告げた、結局μ、sと自分たちで何が違うのか？何が凄かったのか？その明確な答えは出なかった。

「果南はどうしたらいいと思うの？」

鞠莉はそう問いかけた。

「わたしは…学校は救いたい、でもSaint Snowの2人みたくには思えない…あの2人、一年の頃のわたしみたいで…」

「ビッグになったねえ果南も」

「訴えるよ」

果南の胸に顔をうずめながらそう言う鞠莉にそう返して、とりあえず引き剥がす。

「ねえ？海見ていかない？」

海沿いの駅に電車が停車した時、千歌がそう提案して立ち上がるや否や電車を降りる。

「ちよっと、千歌ちゃん!？」

それに反応し、全員慌てて電車を降りて千歌の後を追うと、千歌は砂浜に立ち夕日が沈もうとしている海を眺めていた。

「わたしね、わかった気がする。μ、sの何が凄かったのか…多分、比

べちやダメなんだよ。追いかけたらダメ、μ、sもラブライブも、輝きも…」

「どういうこと?」

「さっぱり解りませんわ」

千歌の言葉に、善子とダイヤはそう声を上げる、きつと理屈では無いのだろう。でもそれを説明することはとても難しい。

「そお?わたしは何となく解る…」

果南は千歌の言いたいことが何なのかわかった、そして梨子も

「一番になりたいとか、誰かに勝ちたいとか、μ、sってそういうのじゃなかったんじゃないかな」

「μ、sの凄い所って、きつと何も無い場所を全力で走り抜けたことだと思う。みんなの夢を叶えるために」

ずつと探していた自分たちの輝きの答え。そんなものはどこにも無かったのだ、ただ自分たちで走り抜けて見つけなくてはいけない。他の誰も正解なんて持っていないのだ。

「μ、sみたいに輝くってことは、μ、sの背中を追いかけらるってことじゃない。自由に走るってことなんじゃないかな?」

そう告げる千歌の表情はとても眩しかった。

「自由に走って行ったら、バラバラにならない?」

「どこを目指して走るの?」

善子の指摘ももつともだ、何か目的がないと各々が違う場所へ向かってしまう。だから梨子はそう問いかける。

「わたしはゼロを1にしたい。あの時のままで終わりがたくない、それが今向かいたいところ」

その言葉に全員が賛同する、これでAqoursは本当の意味で、一つになれた気がした。

「ゼロから1へ!今全力で輝こう!!Aqours—」

『サンシャイン!!』

これから新しい目的に向けて進みだす彼女達の物語は、まだ始まっ

たばかりだ。

きっとこれから自分達だけの輝きに向かって、羽ばたいていくのだから。

25話 悪魔のマユ／それぞれのステージ

「善子ちゃん、今のところ気持ち急いで！」

「承知、空間移動をつかいます！」

果南の指摘に善子は普段の調子で反応する。正直本気で言っているのかふざけているのかよくわからないのが少し困りどころではある。

地区予選にむけて練習に臨むAqoursのメンバー達だったが

：

「よし、じゃあ休憩しよっか」

「暑すぎずら〜…」

「今日も真夏日だつて…」

果南の号令で休憩になると、花丸とルビィは背中合わせでへばつてしまった。

「はい、二人とも」

そう言つて遥が二人に水の入ったペットボトルを手渡す。

「ありがとう」

「すらあ〜」

この夏休み全員で決めた事だった。熱中症対策として、のどが渴いていなくても水分補給はしっかりと摂る。

「今日もいい天気」

水分を補給しつつ屋上から海を眺めている果南はそう呟いた。するとその両隣にダイヤと鞠莉が来る。

「休まなくていいんですの？日向にいと体力もつていかれますわよ」

「果南はシャイニーの子だからね」

暫く内浦の景色を眺めていた3人だったが後ろからうめき声が聞こえたので思わず振り返ると、真黒なローブに身を包んだ善子が暑さにやられて寝転がっていた。

「だから黒い恰好はやめたほうがいいとあれほど…」

「黒は墮天使のアイデンティティ、黒がなければ生きていけない…」

「死にそうですが…」

黒のローブなんて熱が籠って仕方がないはずなのだが頑なに脱ごうとしない善子に、ダイヤは呆れ気味に指摘するが、善子はそれが本望とでも言いたげな表情を浮かべているのでそれ以上は言わなかった。

「千歌ちゃん」

梨子が千歌にペットボトルを投げ渡した。それをキャッチすると「ナイスキャッチ」そう言って曜が敬礼のポーズをとる。

「飲んで」

「ありがとう」

そう礼を言うのと千歌は一口水を飲んだ後、ペットボトルの中の水を日光に充てる。

「わたし、夏好きだな。なんだか熱くなれる」

「私も！」

千歌の言葉に曜も同感だったらしい。すると千歌は「よし」とやる気が漲ってきたようで。

「そろそろ再会しよっか」

そう言って一歩踏み出したのだが、

「ぶつぶぶ〜」

ダイヤが突如千歌の眼前に出てくるので思わず千歌は後ずさってしまう。

「オーバーワークは禁物ですわ」

「by果南」

そう鞠莉も付け足す。

熱中症になってしまったら元も子もない、これまでの頑張りを無に還す危険もある。

「ラブライブの地区予選も近づいて焦る気持ちも解りますが、休むこともトレーニングのうちですわよ」

三年生の教訓でもあった。無理をして怪我をしてしまったては元も子もない、本番で一番のパフォーマンスを行う為に休息も重要だと。

これからの時間帯が一番暑くなる時間帯なので、ひとまず図書室でアイスを食べた涼みながら休憩をとっていた。

ジャンケンで負けた人が代表して最寄りのコンビニまで買いに行くのが恒例になっているのだが、善子はいつもあのへんなチョキしか出さないの、善子が行くまでが恒例になっている。

「そうだ、学校説明会の参加者って今どうなってるの?」

千歌がふとそう切り出すと、鞠莉が図書室のパソコンを使用し学校のホームページを開いて学校説明会ページを開く。

「今のところ―」

「今のところ…?」

「ゼロ―!」

「そんなあ…」

がつくしと千歌は机に突っ伏してしまう。

「そんなにこの学校って魅力ないかな、一人くらい来てくれたっていいのに…」

思わずそう漏らす千歌だった。

「あれ?」

図書室が休憩所になっているのを見て、千歌の同級生の3人。よしみ、いつき、むつが困惑の声が聞こえてきた。

「むつちゃんたちどうしたの?」

それに気が付いた千歌が彼女たちにそう声をかける。

「図書室に本を返しに…」

「もしかして今日も練習?」

図書室に本を返しに来たらしい彼女たちに今日も練習していたのかと聞かれ、千歌は「もうすぐ地区予選だし」そう答えるのだった。

「この暑さだよ?」

「だけど、毎日だから慣れちゃった」

そうなんでもないことの様に笑いながら答える千歌に3人は驚愕の表情を浮かべる。

「毎日?」

「夏休み?」

「練習してたの!?!」

「そろそろ始めるよ」

そうしていると果南のもうすぐ練習を再開しようという声が聞こえたので「じゃあね」と言ってお千歌は図書室の出口へ向かう。

「頑張ってるね」

同級生のその声を背に。

その日の練習は最後はランニングで締めくくったのだが、果南と曜だけは終わった後もしっかり立っていたが、残りは膝に手をつけて息が上がっている。

「今日も目一杯だったね」

「でも、日に日によくなってる気がする」

先頭でプールの前まで走ってきた果南に曜はそう答える、だがそれは全員が感じていた手ごたえだった。

「ところで、歌の方はどうなんですの?」

ふとダイヤにそう聞かれる。

「花丸ちゃんと歌詞を詰めてから、果南ちゃんとステップを決めるところ」

そう答えたのは梨子だった、毎回歌詞は千歌一人だったのだが今回は花丸が手伝ったことで普段より語彙の幅が広がった曲が産まれそうだ。

「それに遙も曲作るのに最近ピアノ弾いて色々案も出してくれるから」

「いや、僕は大きく弾けるわけじゃないから…」

あの後から、少しずつピアノに触れるようになっていった遙なのだが。曲を作るのに以前は音楽知識があるので意見を出したりはしていたが、最近では実際に弾いて見せたりしていたのだが、客観的に判断できるとして、意外と好評だったりした。

ただ本人は皆の前で言われるのが恥ずかしかったらしく、そう言っ
て視線を逸らすのだった。

「とにかく、疲れをとってまた明日に備えよう」

そう提案した果南はなんとそのままプールに飛び込んだ。鞠莉と善子もそれに感化されて同じくプールに飛び込む。

「また服のまま飛び込んで、はしたないですわよ!」

「だって気持ちいいんだもん」

やはりダイヤに注意されるが果南はそう言っ
て受け流す。

「だ、男性もいるのに…」

「あ、ぼっ僕先に帰りますね!お疲れさまでした」

そのまま上がってくれば濡れた服が透けてしまう、それに遙という男性がいる。それを解っていたダイヤのつぶやきを聞いて何かを察した遙は顔を赤らめ、脱兎の如く走り去って行った。

「別に気にしないのに」

「もつと乙女としての恥じらいをもってください!」

なんで遙が先に帰ってしまったのか理解できない果南に対してダイヤの声が響き渡った。

「ねえ遙、少しいい？」

「別にいいよ？でも今手が離せないから部屋に入ってもらっていい？」

その日の夜、唐突に梨子にそう聞かれた遙は、そのまま自分の部屋に入ってくるように促す。

「…何やってるの？」

梨子が遙の部屋に入ると、遙は机の上でパソコンやら書物やらを睨みつけ、何かを一生懸命入力していた。

「これ？ちよつと頼まれてさ、何に使うのかは言えないんだけどある装置のプログラムだよ」

そう答える遙だが、この時は珍しく姉の方を一切見なかった。

「ふうん？まあ多分聞いても解らないから詳しくは聞かないけど…。それよりラブライブの地区予選の事なんだけど…」

「もしかして、曲の相談？」

それならこつちを優先するとはかりにそこで遙は手を止めると振り返る。

「いや、そうじゃないんだけどね？クラスの子が、一緒に歌いたいって言うってきたんだけどー」

「それはエントリーしてるメンバー以外はダメって規定だから無理だよ」

「そうよね…でも千歌ちゃんそれが解ってないみたいで、私言い出せなくて…」

「…なるほど、とにかく本番までにはちゃんと伝えないとまずいね」

遙が帰ったあと、あの三人が私達にもなにかできないか？そう言っ
てそれを提案してくれたのだが、規定によってそれはできない。なの

に千歌は一緒にやろうと言ってしまったらしいのだ。

「まあ、僕も伝えられるタイミングがあつたら言うようにするよ。でも姉さんの方が一緒にいる機会多いんだから姉さんが言った方が…」

「そうよね、私もちゃんと言えるように頑張ってみるわ」

「うん、おねがい」

「解った、じゃあ私もう寝るから、遙もあんまり遅くならないようにね？」

「うん、おやすみなさい。姉さん」

そう言うとき梨子も「おやすみ」と言いつて遙の部屋を後にするのだった。

「えーっと、待ち合わせ場所は…」

そう言いつて千歌はスマホを確認し、集合場所である地区予選会場の最寄り駅である名古屋駅の駅前の噴水に来ているのだが、待ち合わせ相手の同級生三人の姿が見えない。

「むっちゃん達、来てないね」

「多分、ここであつてははずんだけど…」

見当たらない事に対して曜がそう告げると、千歌はやっぱりここで間違いなんだけどなあと漏らす。

するとターミナルの方から「千歌！」と呼ぶ声とともに駆け寄ってくる足音が聞こえる。

「ぐめんちよつと道に迷っちゃって」

それでもこの夏の猛暑の中走ってきてくれたとなると、やはりうれ

しい気持ちになる。

「それで、他の子たちは？」

曜がそう聞くと三人は表情を曇らせる。

「うん、それなんだけど実は…」

まあ夏休みに家の都合もあるだろうにそう何人もこれるものではないだろう。

「そっか」

「しようがないよ、夏休みだし」

それを理解している千歌と曜もそう返事をしたのだが。

「私達、何度も何度も言ったんだよ？でも、どうしても…」

そこまで言うると三人の表情が明るくなると、

「みんな準備はいい？」

「「イエーイー！」」

浦の星の全校生徒がサイリウムを持って応援に駆け付けていた。

「全員で参加するって」

「びつくりした？」

そう悪戯が成功したように笑いかけると、千歌も嬉しそうに笑う。

「うん！これで全員で歌ったら絶対キラキラする！学校の魅力も伝わるとよ！」

「ごめんなさい！」

皆が喜んでいる所にそう口を挟んだのは梨子だった。

「実は…ステージで歌えるのは事前にエントリーしているメンバーに限る。それに、ステージに近づいたりするものダメみたいで…もつと早く言えればよかつただけど」

そう言っって頭を下げると、千歌もちゃんとそこを確認せずに了承したこと責任を感じたのか「ごめんね、むっちゃん」と謝るが、彼女たちは特に気にした様子はなく、笑顔のまま。

「いいのいいの、いきなり言い出した私たちも悪いし」

「じゃあ私達、客席で宇宙一の応援するから。浦の星魂、みせてあげる！」

そう息巻くのだった。

「だから宇宙一の歌、聴かせてね」

「うん！」

その言葉に、千歌は力強く答えるのだった。

「じゃあ、明日は頑張ってね！」

そう言っただけで彼女達と別れた。沼津からここまででは東京より時間がかかるのと、予選の開始時間が早いこともあり前日に移動し、今日はホテルに泊まる算段になっていた。だが他の生徒たちも同じ場所だという訳にはいかず、ここに宿泊しているのはA q o u r s の9人と遥だけだ。

「じゃあみんな、明日は頑張ろうね」

その日の夜、夕食をとった後そろそろ休もうかという話になった。その時だった――

空から突然、蜘蛛とゴキブリの姿を掛け合わせたような不気味な用紙を持つ怪獣が空から飛来した。

「何あれ…?」

「気持ち悪い…」

ただでさえ虫の特徴が強い怪獣だ、それもぜんちょう60m程はある巨体なのでその姿からくる気味の悪さは特に女性には辛いかもしれない。

その怪獣は飛来した途端に、近くにあった建造物に糸を吐つけ、巣のようなものを作り上げてしまった。

「あの建物、まさか…」

「むっちゃん達が泊まってるホテルじゃ…」

その事に気が付いた千歌達の顔が真っ青になる。

「遥、何してるの?」

梨子がノートパソコンを操作し始めた遥にそう聞いた。

「あの怪獣の情報だよ、今からアルケミースターズのネットワークにアクセスして、どんな対応をとるのかとか色々知らないよ…」

『ハルカ、大変な事になった。』

「僕もすぐ近くのホテルに泊まってるから良く見える。」

すると遙にダニエルから通話がかかってきた。

『あの怪獣、恐らく目的は産卵…あのホテルには救助部隊が今向かってる。キミ達も避難するんだ!』

そう言っ通話が切れる。

「…ここも危険です、避難しましょう」

遙がそう苦虫を噛み潰したような顔で告げる。

「でも、あそこにはみんなが!それにせっかくここまで来たのに…」

千歌がそう言っ飛び出そうとする。

「どこに行くんですの?」

「助けなきゃ!だっわわたしたちの為に皆来てくれたんだよ?見捨てられるわけない!!」

「救助が来ます、それに先輩が行っても…」

遙とダイヤは千歌をなだめるが、怪獣は動き始めた。救助のへりを追い払おうとその場で暴れ始めたのだ。怪獣のせいで近づけない。

遙もガイアになったとしてもすぐそばに人がいるとなれば戦えない。今は救助してくれるのを祈るしかなかったが、それも期待できない。

「千歌ちゃん、今は信じて待ちましょう?」

「嫌だ!何もできないなんて…そんなの…」

梨子もそう言っ千歌を励まそうとするが、千歌はその場に屈みこんでしまった。曜も鞠莉も果南もその表情はとても辛そうだった。無理もない、みんな大切な友達なのだから…。

「僕が行きます!僕が救っ見える!!」

「はるか…くん…?」

「遙…何をいつてるの?」

やるしかない、自分があの怪獣を倒して皆を救う。何度だっわやってきたことだから…

「遙くん、解ってる？あそこで戦えば、皆を巻き込むかもしれないんだよ？」

花丸が遙にそう告げる、今戦えば付近に被害が出る。それは遙も解っていた、でもこのまま待っていても事態は好転しない。そう思ったから、自分が行く。そう決心した。

「解ってる…でもこのままじゃここにいる皆も犠牲になる…ならやるしかないじゃないか！」

遙にそう怒鳴るように言われた花丸は思わず後ずさる。

「ちよつとそんな言い方…」

善子がそう苦言を呈すが遙は聞いてはいなかった。

「僕が行く、だからみんなは逃げるんだ！」

『パシン』

乾いた音が鳴り響いた。

「え？」

「ふざけないで！遙一人で何ができるの？置いて行く訳ないじゃない！」

梨子が遙の頬を叩いたのだった、そして梨子にそう強く言われる。

「梨子ちゃん、遙くんは…」

曜が仲裁に入ろうとするがそれを遙が制す。

「ごめん姉さん…でも僕が行くよ。ウルトラマンだから」

「うそ…」

遂に言ってしまった。そう遙は思った、梨子に心配をかけたくなくて黙っていたけどこのまま黙っていても余計に彼女を心配させる。そう思ったから。

「じゃあ、遙くんが…ガイア…」

「だからあの時ヒロと」

千歌と果南も遙の言葉に驚くが、以前博樹に出会った時に遙と争ったこととガイアとアグルが戦ったことが繋がったようだった。

「どうして…どうして遙なの？」

「解らない…でも僕が選ばれたのには意味があるんだと思う。それに、これが僕にとってのステージなんだ、皆が学校を救いたいように。」

僕も皆を救いたい…だから僕は行くよ」

どうして自分の弟が怪獣と戦わなければならないのか？そう泣きそうな声で告げる梨子に遥はそう優しい声で答えた。

「ハルカ、皆を頼むわよ…」

「任せてください、鞠莉先輩」

そう言つて遥はエスプレレンダーをとり出す。

「花丸ちゃん、さつきはごめん…」

「気にして無いすら、気を付けてね」

「ありがとう」

さつきの事を花丸に一言謝つてからもう一度梨子を見る。

「姉さんごめん、でもちゃんと話すから。こんな所で僕も終わりたくないから…だから、行つてきます」

「遥…」

そう言つて遥は梨子の言葉を待たずに駆け出した。そしてエスプレレンダーを突き出してその光を解き放つ。

「ガイアーツ!!」

赤と少しの青の光に包まれて、夜の街中にウルトラマンガイアが現れる。

「デュワツ！」

ガイアは怪獣に組み付くと、ひとまず建物から引き剥がす。するとその隙に救助部隊が建物へと接近する。

そのまま怪獣との肉弾戦に突入したのだが、怪獣の力も強く。ガイアの拳もものともせずに反撃してくる。

「みんなは知ってたの？遥がガイアだって…」

避難している時、梨子がそう切り出した。

「それは…」

曜も何と言つて答えたらいいか言葉に詰まっていた。

「どうして教えてくれなかったの？どうして!？」

「おやめなさい、遥さんは梨子さんに心配をかけたくなってずっと黙っていたんです。本当は知った時にすぐ伝えるべきだったのでしょうが、どうしても自分の言葉で伝えたいから。そう言っていたの

です」

思わず曜を攻めそうになる梨子をダイヤがそう言って諭す。

「心配するにきまつてる…」

「話は後にしよう？ちゃんと本人から後で聞かなきゃだけどね」

「そーそーそれにいつまでも近くにいるなら気になって戦えないでしょ？」

果南の言葉に鞠莉も同意し、一刻も早く離れるべくもう後ろは振り向かなかった。

戦闘機も現れ、怪獣を攻撃し始めていた。今まで周囲への被害を警戒していたのだが、ガイアの出現によって怪獣を引き離すことができたからだ。

ガイアもその攻撃に乗じて怪獣へ肉薄すると、その顔面に拳を叩きこむ。しかし追い打ちをかけようとしたところで怪獣に脚を咬まれてしまう。

怪獣の顎の力は凄まじく、すぐに脱することができずに苦しむガイアだったが。なんとか腕づくでその顎を引き剥がしたのだが、そのダメージで思わず膝をついてしまう。

そんなガイアを援護しようと戦闘機が援護射撃を行うが、怪獣が弾き飛ばしたミサイルが巣にされたホテルへと飛んでいく。

「危ない！」

結構な距離を走って、なんとか避難場所にたどり着いた千歌がそう叫ぶ。

するとギリギリのところまでガイアがその間に飛び込んで守ったのだが、その隙に怪獣がガイアに糸を吹き付ける。

後ろには学校のみんなもいるので回避することのできなかつたガイアは繭に閉じ込められてしまい。怪獣は勝ち誇ったように腕を振り、鳴き声を上げるのだった。

「遥あああああ!!」

梨子の悲痛な声が、夜空にこだました。

26話 サンシャイン!!／ガイアノチカラ

怪獣から吐き出された糸を避けることができずに繭の中に捕らわれてしまったガイア―遙の姿に梨子の悲痛な叫びがこだました。

「ガイアが、繭の中に…」

「嘘よね…どうすんのよこれ…」

誰も考えなかった…いや考えたくなかったガイアの敗北に花丸と善子も茫然とするしかなかった。

「大丈夫だもん、ガイアが…遙君が負けるわけない」

「ルビィ…」

ただ一人、ルビィを除いて。

「だってルビィが怪獣に操られた時だっていつも助けてくれた。だからきつとガイアは負けない」

そう言い切ってみせるのだった。

「ルビィは信じてる、絶対みんなを護ってくれるって。明日みんなです選に行くんだって…!」

しかし怪獣は無情にも勝ち誇ったように動き始めると、巣にしたホテルに近づいていく。

「まずい、このままじゃ…」

「何とかできないんですの?」

「もしあのまま怪獣が卵を産んだら…」

3年生からそんな声が出る。あのまま卵を産んでそれが羽化してしまつたら大変なことになる。だがそれは政府等も理解しているようで、少しでも怪獣を足止めしようと攻撃は激しくなるが、ほんの少しの時間稼ぎにしかない。

だがその隙にレスキュー部隊が突入し、少しずつ授業員や宿泊客の救助が始まった。

「よかった、この間に助けられれば」

千歌の表情に少しだけ元気が戻って来た。そのタイミングで千歌のスマホに電話がかかってきた。相手はむつだった。

「もしもしむつちゃん、無事なの!」

『うん、なんとかね…千歌たちは？』

「私達はみんな平気！それより他の皆は？」

『今救助の人が来てくれてるし、みんな怪我はしてないから』

「よかった…」

『でもウルトラマンが私たちを庇って…』

無地を確認できて安心した千歌たちだったが、その言葉で再び表情は暗くなるが最初に口を開いたのは梨子だった。

「大丈夫、ウルトラマンはきつと」

「梨子ちゃん…」

『そうだよね、じゃあまた後で！』

そう言って電話が切られたのだが、そこで怪獣はついに戦闘機を振り切ってしまう。

「ダメ！もう少し…」

「お願い遥…みんなを助けて…」

まだ救助は完了していない、このままでは…その時――

『ハアアア…デヤアアアッ!!』

ガイアを閉じ込めた繭が赤く輝いた後、砕け散ったのだった。まるで梨子の想いに答えるかのように。

「あの姿は…？」

「梨子ちゃん、よかったね！」

「うん！よかった…ホントに…」

その中から現れたガイアの姿は、体の側面が青く染まり全体的に赤の面積が増えた。大地と海の光を全て開放した姿――
最高のウルトラマンガイア
スプリーム・ヴァージョンだ。

「よかった、本当に…」

「全くこのヨハネを心配させるなんて…」

「遥くん、信じてた」

花丸、善子、ルビィもガイアの姿を見て安心していたが、目じりには涙が浮かんでいた。

「デヤッ！」

ガイアは力強くファイティングポーズを取ると、怪獣に肉薄する。怪獣とホテルの間に入り込むと、素早い拳の連打と回し蹴りで怪獣を後退させていく。

鉤爪で反撃する怪獣だったが、ガイアはそれを捌いて腕を掴むとそのまま怪獣の太ももを蹴り転ばせる。

そのまま今度は起き上がりとうとしたところを、下顎を蹴り上げ今度は頭部へチョップを放つが、両腕の爪と顎でガイアの手首を噛みつきそれを受け止める。

やはりかなりの力なのか、ガイアは苦しそうな声を上げるが、無理やりその腕を下ろして力づくで引き抜くと、怪獣の顎を破壊してみせた。

怪獣は悲鳴を上げて後退するが、ガイアは追い打ちをかけるように怪獣の側頭部に回し蹴りを放ち怪獣の巨体が大地を転がる。

「すごい…」

「何て強きですの…」

「アメイジング…」

初めて見るこの姿のガイアの圧倒的な力にダイヤと果南、鞠莉も圧倒される。

「やっぱりあの姿のガイアは凄いや」

「曜ちゃん見たことあるの?」

以前ミーモスを圧倒して見せたガイアの姿をみた曜は思わずそう呟くと、梨子にそう聞かれる。

「うん、予備予選の前にガイアに化けた怪獣に襲われた時にね」

「そんなことがあったのね…」

怪獣を圧倒する姿に、自分の知らないところで起こっていた戦いに梨子は何か感じるものがあったのかもしれない。

「でも、これならきつとみんな助かるよ」

「やっとうみんなの表情に希望が戻って来たのだった。」

「ウルトラマンー!がんばれ!!」

沢山の人々の声援を受け、ガイアは怪獣と戦っていた。学校の皆を、A q o u r s の皆をそして何より大切な姉を守るために、ガイア

はこの怪獣を必ず倒さなければならない。

ガイアは怪獣を片手で持ち上げるとそのまま空高く投げ飛ばした。

「セヤッ！ハアアアア…デヤアアアアアア!!」

そのまま両腕を大きく振りエネルギーを集め、フォトンストリームを放ったのだった。

その一撃を受けた怪獣は、木っ端微塵に砕け散るのだった。それを見届けたガイアは夜空を飛び去って行った。

「本当!?みんな無事なんだね?よかった」

『ほんとにね、だから明日の応援、期待しててよね』

「うん!じゃあまた明日ね」

その後怪獣の繭のせいで当分ホテルが使えなくなってしまったのだが、レスキュー部隊や戦闘機部隊、なによりガイアの活躍の結果、宿泊客にけが人はでなかった。

だが学校の皆は臨時字で手配されたホテルに今夜は泊まることになってしまったので、結局次に会うのは予選本番となってしまった。

「おーい!」

自分達もホテルに戻ろう、これならきつと明日の予選は開催されるだろうから。と、ホテルに戻る道中に、遥が手を振って駆け寄ってきた。

「遥!」

その姿を見た梨子は、遥に駆け寄ると抱きしめた。

「ね、姉さん?」

「よかった…本当に心配したのよ?」

「ごめん姉さん、でもみんな無事で良かった。僕も怪我とか全然ないし」

そう言って遥は笑って見せると、梨子もほほ笑んで遥を開放した。「ところで、あのガイアは何なの?以前と姿が違うけど…」

鞠莉が遙にそう聞く。このことはダイヤにしか話していなかったし、博樹―アグルとの間にあったことをどこまで話せばいいか解らなかった。

「あの時、ゾーリムと戦う前にアグルから光を授かったんです」「じゃあアグルはどうなったの?」

アグルである博樹も、あの日以来姿を見せない。ならどこに行ったのかそう果南が問いかける。

「彼は、根源的破滅招来体によつて歪められた予測を信じていた…でもそれが間違いだつて気が付いて、戦う誇りを失つてしまつたんです…でも信じてます、いつか彼と肩を並べて戦えるって」

「そっか…そうだよね」

そう言つて果南は笑つた、きつとまた会える今度こそダイビングも行ける。そう信じて。

「まあとにかく!みんな無事だったし、あとは明日の予選に備えないとね!」

「そうですね、曜先輩」

曜のその言葉に遙も笑顔で返す、本当によかつた。皆無事で。

「遙くん」

「何ですか?」

「ありがとね?」

「はいっ!」

戻ろうとした時、千歌に呼び止められた遙に千歌はそう告げる。マネージャーとして自分たちを支えてくれていた陰で、ウルトラマンとして戦ってくれていた。それに報いる為にも明日は絶対に最高のパフォーマンスをしよう。そう思つたのだった。

「実は、まだ信じられないんだ…今、こうしてここにいることが」
「マルも…夢見たすら」

当日、楽屋でメイクをしている時にルビイがそう漏らしたのに、隣で同様にメイクを行っていた花丸もそう同意する。

「何今更言ってるの？今こそがリアル、リアルこそが正義」

反対側の机でメイクを行う善子がそう反論した。

「ありがとね」

「…え？」

それに続いて呟かれた、他のグループの会話に掻き消されそうな音量の言葉に花丸とルビイは振り返ろうとする。その善子の表情を見る前に、善子は2人の間に飛び込み肩を抱く。

「さ、あとはスクールアイドルとなってラブライブに墮天するだけ！」

「うん！」

「黄昏の理解者すら…」

そう応じるルビイと花丸の目には涙が溜まっていた。

「さあ行くわよ！墮天使ヨハネとリトルデーモン達！ラブライブにい…降ろ臨ッ!!」

そういつていつものようにポーズを決める善子の目もまた、涙にぬれていた。

「高校3年になってから、こんな事になるなんてね」

他に誰もいないホールの観客席で果南はダイヤと鞠莉と3人でいた。

「全くですわ、誰かさんがしつこいお陰ですわね」

果南のつぶやきに、ダイヤもそう同意する。

「だね、感謝してる。鞠莉」

鞠莉がずっとまた3人でステージに立つことを諦めないでくれたから、今の自分たちがある。そう思うと鞠莉には感謝してもしきれない。そう思った。

「感謝するのは私だよ、果南とダイヤがスクールアイドルになって、ずっと待つててくれたから諦めずに来られたの」

その言葉に皆涙があふれた。始めた時はこっちから誘ったのに、最後まで諦めなかったのは最初は興味を示さなかった鞠莉だった。でもそのお陰で再びここに戻ってこられた…。

果南は両隣にいる2人の腰に手を回し告げた。

「あの時置いてきたものを、もう一度取り戻そう!」

「勿論ですわ!」

そう返すダイヤも、自然と手すりを掴んでいた手に、力が入った。2年前置いてきてしまったものを、今こそ取り戻そう。そう誓って。

「不思議だなあ…内浦に引越してきたときは、こんな未来が待つてるなんて思ってもみなかった」

舞台裏で梨子がそう感慨深そうにつぶやいた。内浦に引越してきたころは、スクールアイドルなんて知らなかったし。ましてや弟もマネージャーになって、こんな舞台に立って歌うなんて想像したこともなかった。

「千歌ちゃんがいたからだね」

そう曜が嬉しそうに言う。千歌が…彼女がいたからここに9人でスクールアイドルとして踊る、きつと千歌が居なかったら、誰もこの場にはいなかった。そう感じた。

「それだけじゃないよ」

「え?」

千歌の口から出た否定の言葉に、思わず目を丸くする。

「ライブがあったから、μ'sがあったから、スクールアイドルがいたから、曜ちゃんと梨子ちゃんがいたから」

普通の女子高生が、ステージで歌って踊る様が輝いて見えた。自分達も彼女たちの様に自分も輝きたい！そう思ったからスクールアイドルを始めた。

でも自分たちは自分達だけの目標を見つけた。だからここはゴールじゃない、その先にもっと大きなものを見つけられる、そう信じて。「これからも、色んなことがあると思う。辛いことも大変な事もいっぱいあると思う」

この予選で、学校が廃校を免れることができるとは限らない。

「それでもわたし、それを楽しみたい。全部を楽しんで、みんなと進んでいきたい！それがきつと『輝く』ってことだと思う！」

「そうね」

「9人もいるし」

その声に後ろを振り返ると、A q o u r sのみんながいた。

「僕もいますよ」

「じゃあ10人か」

その後ろに、遥の姿もあった。

「僕は客席から、学校のみんなと応援してます、大丈夫！ここまで頑張ってきたんですその努力は、絶対に報われます」

「ありがと、遥」

そう言ってみんなで笑い合う。そうだ、遥もいれてこのみんなで、これから進んでいける。千歌だけでなく9人みんながそう思ったのだった。

「行くよ!!」

そう言って千歌が、ステージへ続く扉を勢いよく開いた。

—M I R A I T I C K E T—

この光輝くステージで、彼女たちが披露した曲の名前。

このサイリウムの放つ青い光が、きつと未来への道しるべになる—
そうなることを願って

―私たちがゼロから作り上げたものってなんだろう？
―形の無いものを追いかけて
―迷って、怖くて、泣いて
―そんなゼロから逃げ出したいって
―でも、何もないはずなのに、いつも心に灯る光
―この9人でしかできないことが必ずある
―そう信じさせてくれる光
―わたし達A q o u r sは、そこから生まれたんだ！
―叶えてみせるよ、私たちの物語を！この輝きで！！

「君の心は―」

「輝いてるかい？」

Ver. 1. 5 超時空の大決戦

一章 時空を超えた出会い

これは、ラブライブ地区予選を終えて結果が発表される前の残り僅かな夏休みにあつた、不思議な出会いの物語。

居る筈のない…でも確かにそこにいた。そんな私の、大切な弟との出会いの物語。

予備予選の次の日、今日くらいは休まないという話になって久しぶりに一日何も予定のない休日を通りかかっていた。

「遙ー、何してるの?」

「んー?この前の続きだよ、もう完成目前なんだ」

だというのに遙はずっと部屋で何かをしているので、梨子は少しは羽を伸ばしに外出した方がいいのではと思つて遙に声をかける。

「それもいいけど、たまには遊びに行つてりしないの?ずっと部活かそれじゃない」

「いいんだって、これも好きでやってることだし。何よりこうやってパソコン弄ってるの好きだから」

「そう?私はちよつと出かけてくるから外出するときは戸締りお願いね」

そう言つて梨子は遙の部屋から離れていく。

「もうちよつとで完成だ…」

そう言つて遙はキーボードを操作していた。

—助けて

「え?」

ふと聞こえた声に、遙は周囲を見渡す。

「…疲れてるのかな？ちよつと休憩しようかな」

親は今仕事に行っているし、姉もさつき出かけて行った。だから今家に居るのは自分だけのハズだし、何より自分の部屋には自分しかない。

気のせいだ、きつと昨日まで色々あったから疲れたのつかなど思い立ち上がる。

―助けて

また聞こえてきた、この声はどこから聞こえるのか？さすがに不審に思い周囲をもう一度見渡す。

「姉さん？誰かいるの？」

そう廊下に出て声をかけても返事は無い「おかしいな…」そうぼやいて首をかしげる遙だったが、ひとまずアイスでも食べて休憩しよう。そう思つて階段を下りてリビングへ向かった。

すると自身のスマホに着信が入る。誰からかと思つて画面を確認すると相手は姉だった。

「あれ？姉さんどうしたの？」

『もしもし遙？この後千歌ちゃんたちとうちでお菓子食べるんだけど遙も欲しいものある？』

「あく…じゃあアイスかポテチかな？アイスもう冷蔵庫に無いし」

『わかった、じゃあ私力ギ忘れて出ちやったから家で待つてて』

「りようか〜い」

なるほど、だからほしいものを聞かれたのか。そう思つて電話を切るのだった。

「さて…と、じゃあ仕上げに入ろうかな」

そう言つて伸びをすると自身の部屋に戻つて再びパソコンの前に座つたのだが。

―助けて

再びその声が聞こえた。

「どこから聞こえるんだ？これ…気のせいじゃない…」

部屋にいと聞こえてくる「助けて」の声、もしかしてパソコンからなのでは？そう思つてパソコンの画面を注視した。その時―

「うわっ！」

パソコンの画面が光、視界が真っ白になる。驚きの声を上げる遙だったが、遙の意識はそこで途切れてしまった。

「だい…ぶ…か？…じょう…です…」

遙にとつて聞きなれた声が聞こえる、あの後自分は気を失ってしまったのだろうか？そう思いつつ遙の意識は覚醒し、目を開く。

「あれ…ここは？さつきまで家にいて…それで…」

遙が目を開くとそこは学校のグラウンドだった。そして遙に声をかけていた人物は…

「良かった、目が覚めたんですね？グラウンドで人が倒れてたからびっくりしました」

「ねえ…さん？」

「？」

そう声をかけると彼女は首をかしげる。他人の空似だろうか？普段の梨子とは雰囲気が違う。

「人違いじゃないですか？私一人っ子だし」

「し、失礼しました…すいません助けてください…」

そう言われ、気恥ずかしさを感じた遙は慌てて起き上がるとそう頭を下げる。

「いえ、私は本当にここに倒れているのを見かけただけですから…」

「僕、桜内遙っていいいます」

心なしかちよつと目をあまり合わせてくれない少女に、遙は自分の

名前を告げると、彼女の繭がピクリと動いた。

「わ、私…桜内梨子です。珍しいですね同じ苗字なんて…」
「え…」

間違いない、やはりこの人は姉さんだ。そう思ったが、同時に彼女はふざけてこんなことをしているわけではないことも、雰囲気から察した。ではなぜ…？そう悩んでも答え何てでない。

「梨子ちゃんー！」

「あつ千歌ちゃん」

どう切り出せばいいのか悩んでいると、ふと声が聞こえそちらを向くとオレンジの髪の少女がこちらへ駆け寄ってきた。

「あれ？この人誰？梨子ちゃんの妹？」

間違いなくその少女は千歌だった。彼女もやはり不思議そうな目で遙を見ると、そういつか言われたようなことを聞いてくる。

「いや、初めてあったはずなただけど…」

梨子がそう呟く前で遙は逡巡すると口を開いた。

「いや、僕は男なんですけど…僕桜内遙って言います」

どうなっているか解らないが、こちらも初対面を装った方がいい。そう判断したのだったが、二人とも一瞬固まった。

「そうなの？とてもそっくりだったからつい…ていうかここ女子高だよ？男の子が何してたの？」

「え？浦の星学院って共学でしょ？だって僕ここの1年生…」

「ここ、浦の星『女学院』だよ？」

千歌にそう告げられて、遙は頭が真っ白になる。

「あの…大丈夫です？」

啞然とする遙に、梨子がそう聞いてくる。

「え？いやまあ…そうだ、生徒手帳見せれば…あつ…」

夏休みだし何よりついさつきまで家に居たはずなのだ。当然生徒手帳をポケットに入れているはずもなく…。

「嘘…財布もスマホも持ってない…。これじゃ証明できない…」

「ほんとに大丈夫？」

千歌にそう聞かれるが、今の遙に答える余裕も無かった。さつきま

で家に居たはずなのに気が付いたらグラウンドに倒れていた…でも自身の格好は家に居た時のまま何も持ってない。

「あの？ほんとに僕をからかっているわけじゃないんですよね？」

そう言っと思って思わず詰め寄ってしまう。

「僕はここの生徒で、姉さんの弟で、A q o u r s のマネージャーの桜内遥です」

思わず口調もきつくなってしまったが、梨子は少し怯えた様子でこう返した。

「なんで…A q o u r s の事知ってるんですか？」

「そんな…」

「そもそもからかってなんかないよ？君の方こそ意味わかんないこと言っつて梨子ちゃん困らせて、私も怒るよ？」

そう千歌に言われてしまった。遥は「嘘だ…」そう呟くとその場へへたり込んでしまう。

その時だった、突然空が曇ると町はずれに雷が落ちる。

「きゃあっ！」

「な、何?！」

突然の出来事に梨子と千歌は動揺する。遥は「まさか…」と呟くと、その地点を睨み付ける。

するとすぐ空は晴天に戻るのだが、雷の落ちた地点から怪獣が出現した。

「あれは…」

真黒な身体に首のない腹のあたりまで縦に長い黄色に光る目のような器官に人のように2本の腕と2本の脚という、不気味な姿の怪獣だった。

遥はとっさに羽織っていたシャツの胸ポケットに手を入れる。幸いエスプレッダーは持っているので、ガイアとして戦うことはできる。

「嘘…怪獣…?！」

「ま、まさか…あんなの空想の生き物のハズでしょ？」

遥の後ろで千歌と梨子がそんなやり取りをしているが、2人とも震

えていた。

「あいつは僕が何とかするから、2人は逃げて！」

「何とかするって…」

「あなた倒れていたのよ？そんなことできるわけ…」

そう2人に言われるが、怪獣は待つてはくれない。怪獣の目が光ったかと思うと、雷撃がこちら目掛けて飛んできた。

もうだめだ、そう思つて目を伏せる千歌と梨子だったが、その前に躍り出た遙はエスプレnderを掲げ、その光を解き放つ。

「ガイア!!」

あたりが赤い光に包まれ、ウルトラマンガイアが雷撃を弾き飛ばしながら現れた。

「あれは…?」

「保育園の子供が行つてたヒーローじゃない？そつくりだし」

「あれはフィクションでしょ？」

ガイアの出現にも何やらそのような会話をしているのが、ガイアの耳に入るが、ガイアは今はともかく逃げるようにジエスチャーで知らせると、理解してくれたようでその場を離れてくれた。

「ジュワツ！」

構えるガイアに、怪獣は再び雷撃を飛ばして攻撃してくる。ガイアはそれをバリアーで弾いた。そして再び構える。

『ピコンーピコンー』

なんともうライフゲージが点滅を始めた。ガイアもこれには想定外だったようで、一瞬動揺するそぶりを見せるが、怪獣は腕から2本の鋭い爪のようなものを伸ばすと、ガイアに駆け寄ってくる。

ガイアも咄嗟に右手を赤く光らせると、そこから青い光剣―アグルセイバーを展開すると、すれ違いざまに怪獣の爪を右腕ごと切り裂いた。

しかし、この技はただでさえエネルギーの消費が激しいため、ガイアはすぐ技が解け膝をついてしまう。

腕を切り落とされた怪獣は怒り狂い、ガイアへと突進を開始する。だがガイアはそのまま振り返ると両腕を上に掲げエネルギーを収束

させると、フォトンエッジを放ち怪獣を貫く。

もろにその一撃をくらった怪獣は、粒子となつて霧散してしまいその粒子もすぐさま消えてなくなつてしまった。

「ウ…グア…」

ガイアはそのまま両手を地面につくと、赤い光に包まれて縮むようにその場から消えてしまった。

「ハア…ハア…どうして?こんな早くエネルギーが?」

変身が解けたガイアは、苦戦こそしなかったものの想像をはるかに上回る速度でエネルギーを消耗したことを不思議に思っていた。

「大丈夫!?さっきのは何なの?」

変身を解いて蹲っている遙に、千歌と梨子が駆け寄ってくる。

「何って…あれは怪獣ですよ、僕はアイツらから皆を守るためにウルトラマンの光を授かったんです」

「授かった…?あれって撮影か何かじゃないの?本物なの?」

キョトンとした表情の千歌にそう聞き返されてしまい、遙も啞然とする。

「あれ…テレビでやってる。男の子が見るような番組のヒーロー?じゃないんですか?」

そう言つて梨子にスマホの画面に動画サイトを移してある動画を見せてくれる。

「これは…」

そこに映っていたのは『ウルトラマンガイア』というタイトルのテレビ番組のオープニングだった。

「近所の保育園に行つてる子が好きで、よく真似してるのみてたから…」

そう梨子は補足してくるが、遙の耳には入っていなかった。

「ここは、僕のいるべき世界じゃない…」

「どういうこと?」

「僕がいたところでは、この番組の中みたいに本当に怪獣が現れて、そ

れに苦しむ人がいて、僕はそんな人たちを助けるためにガイアの光を手にしたんです」

だからきつとここは元々遙がいた世界じゃない。そう思ったのだった。

「そんな非現実的な…」

「量子物理学には多世界解釈って言うのがあって、こことは違う世界で別の自分たちが生活している。そんな考え方があるんです。」

「どういうこと？ 梨子ちゃん解る？」

「いや、私も全然…」

遙の説明についていけない千歌が、梨子に助けを求めるが梨子もあまりよく解らないといった様子だった。

「えつと、SF映画とかでパラレルワールドって聞いたことありません？ 要はそれです」

「それなら解るよ！ヘーコーせかいつてやつ」

「じゃあ遙さんは、その平行世界から来たってこと？」

「どうしてか解らないんですけどね？あと遙でいいですよ、なんかさん付けだとむず痒くて…」

伝わったのはいいが梨子にさん付けで呼ばれることに何とも言えない気持ち悪さを感じてしまう。

「そ、そう？..じゃ、じゃあ遙くんで…」

「じゃあじゃあ、遙くんがいたところってどんな世界だったの？」

「そうですね…」

遙は自分の世界であつたことを話した、春に転校してきたこと、梨子の弟であること、A q o u r s のマネージャーをやっていること、気が付いたらこの世界に迷いこんできたこと。

「だから梨子ちゃんにそっくりなんだ」

「でも私、一人っ子だよ？」

納得したような反応を見せる千歌に反して梨子は自分の弟だと言われても納得がいかなかった。

「信じるよ、だってあんなの見ちゃったんだもん。もう何が起きても驚かないよ」

「ありがとうございます」

「千歌ちゃん梨子ちゃん、探したよ」

何とか遥が違う世界から来たことだけでも梨子にも納得して貰ったところで、再び誰かが駆け寄ってきた。遥も聞き覚えのない声だったので、怪訝な目でそちらを向くと、そこにいたの水色の髪をまつすぐ伸ばして毛先はふわっと膨らんでいて、赤いカチューシャを付けた、千歌よりも少し背が低い少女だった。

「あれ？チサちゃんだ。どうしたの？」

千歌にチサと呼ばれた少女は、呆れた様子で答える。

「どうしたじゃないよ。さつき変なのが暴れてた方へ走っていくのが見えたから心配して追いかけてきたの！早く戻ろう？もうみんな練習しに集まってる頃だよ？」

「もうそんな時間？やばっ急がないと」

そう言われて慌て始める千歌達だったが、チサは一度遥の方を見ると怪訝な顔をして「この人誰？」と聞いてきたので千歌が、

「桜内遙くん、平行世界からきたんだって」

などと言うものだから更に不思議そうな顔をしたが

「そっか」

その一言だけ残して、千歌達を連れて居なくなった。

ただその前に一瞬遥と目があつた時の彼女の表情が、少しだけ寂しげだったのが遥には気にかかった。

「ねえ、お兄ちゃんがウルトラマンガイアなの？」

「誰？」

ふと後ろから聞こえた声に振り返ると、そこにいたのは小学校中学年くらいの少年だった。

「ぼく、相川裕翔（あいかわゆうと）お兄ちゃんなんでしょ？だって僕が呼んだんだもん、ウルトラマンに会いたいわって」

「君が…ウルトラマンを呼んだ？」

そう繰り返し聞いた遥に、少年―裕翔は頷く。

「うん、この赤い球に願えば何でも叶うんだって」

そう言つて裕翔が差し出してきた赤い球体は、ただのガラス玉にし
か見えなかった。

「それに願えば？じやああの怪獣は？」

「それは…」

その後少年の口から語られた内容は、遥にとつても想像を絶するも
のだった。

二章 赤い玉

少年、裕翔から語られたことに遥は驚いた。

「それ、本当なんだね？」

「嘘じゃないよ！本当に願いが叶う玉なら何かお願いしてみたら？ってお姉ちゃんに言われて、そしたらすぐにウルトラマンは現れなかったけど…」

「けど？」

にわかには信じられなかった遥は念を押して確認するが少年の意見は変わらない。

「そうしたら…デザイナー？って人がさっきの怪獣を僕から赤い球をぶんどって出したんだ…その人は玉が光ったことに驚いて落っこしてどっか逃げちゃったけど」

「そっか、じゃあその球少し見せてくれないかな？」

「なんで？お兄さんはもう帰りたいの？僕もつとガイアを近くで見たいんだ」

「球は僕だけじゃなくて怪獣だって出したんだ。もつと危険なものだって出すかもしれない、だからそれを防ぐためにこの球の事を知りたいんだ」

元の世界に戻りたいのも本音ではあるが、今はこの危険な球を何とかする方が先だと感じた遥は、そう訴えかけると裕翔は渋々ながら遥に赤い球を差し出す。

「何してるの！」

受け取ろうとしたところで飛び込んできたその声に驚いて遥は赤い球に触れようとしていた手を引っ込める。

「女子高のグラウンドで寝た次は小学生にカツアゲですか？大した度胸ね」

黒髪の少女が腕を組んでこちらを睨みつけていた。その後ろに視線を向けると9人の少女がいた。この世界のAqoursなのだろう、先程のマネージャーらしい少女以外は見知った顔なので。

「そんなんじゃないやありません、さっきの怪獣はこの赤い球が原因なんで

す。だから僕はこの球を調べてもうあんなことが起きないようにしたいんです」

「適当な事を…どうせ何かの撮影でしょう?」

彼女はやはりダイヤなのだろう、口調こそ違えど梨子ほど自分の知る彼女との差は感じない。

「適当な事なんて言ってます、それにまた現れたらどうする気なんですか?」

「それは…」

強気に言い返す遙に、ダイヤは何も言い返せなくなってしまうが、「その時はまたウルトラマンがやっつけてくれるよ!」

「裕翔君…」

そう言つて裕翔が間に割つて入る。

「でも、そうならない方がいいもんね…お兄ちゃん、これ」

そういつて遙に赤い球を差し出した。

「裕翔君、本当にいいの?」

そう聞いたのはチサと呼ばれていた少女が、裕翔にそう聞いた。

「いいの、だって僕のウルトラマンに会いたいつて願いは叶ったもん」

そう裕翔が答える

「それに、やっぱり怪獣に町を壊されるの…嫌だもん」

「ありがとう」

「ちよつと待つて貰おうか」

遙が裕翔から赤い球を受け取ったその時、今度は男性の声 that それを邪魔した。

「この人だよ! きつき怪獣を出したの!!」

その男性を指さして裕翔が叫ぶ。

「失礼だな君は、私は岸間海造(きしまうみぞう)デザイナーだ」

そう名乗った男性は年齢としては30半ばくらいだろうか? 自分たちの親と同じか少し若いくらいの印象を受けるが、その目に遙は狂気を感じた。

「そんな人がなんの用ですか?」

遙は海造を警戒しながらそう告げるが、相手は何の事でもないかの

ようにこう返した。

「なあに、簡単なことだよ。その球は何でも願いが叶うという、そんな危険なものを君たち子供に持たせておくのは大変危ない。だから大人である私が預かろうと言っているのだよ」

それを聞いて、他のみんなも海造の危険さを察知したのか少し表情が険しくなる。

「その子の話が本当なら、怪獣を出したのはあんたらしいけど?」

そう言っただけで食ってかかったのは善子だった。だが海造はなんのこともないような様子を崩さない。

「それが? 私は怪獣のデザインを生業にしているね、本物を知りたかっただけだ」

「そんなの間違ってる! それで一体どれだけの被害が出ると思ってるんだ!」

そう言っただけで遥が詰め寄る。だがその時だった、赤い球が輝くと浮き上がり海造の手の中に入り込んでしまった。

「嘘…」

「本当にただの玉じゃない…」

驚きの声を彼女たちが口々に上げる中、海造はにやりと笑うと

「ほら、球も私の元に来たがっているじゃないか」

「ふざけるな! 怪獣が出たら、みんなが怪我しちゃうじゃないか」

「ガキが偉そうに、まずはお前を踏みつぶさせてやる!!」

裕翔が気に食わなかった海造はそう叫ぶと、赤い球は先程とは違い辺りを真っ赤に染め上げる眩い光を放つ。

「な…何?」

「まさか本当に怪獣が…?」

その光が収まった時、彼女達の視線の先にいたのは、渦を巻く用な青と黒の非対称な模様をもつ巨人だった。胸にはオレンジに光るカラータイマー、顔の作りもウルトラマンのようだったがその目は赤く目元には黒い模様がありつま先は反りあがってその先は尖っている。

「あれは、ウルトラマン?」

「違うよ!」

遙のそのつぶやきに裕翔は否定の反応を示す。

「ウルトラマンだ、ただし『カオスウルトラマン』だがな。お前の好きなウルトラマンに踏みつぶされてしまえ」

そう捨て台詞を吐いて海造は赤い球を持ったまま走り去ってしまったが、その時赤い球が先程より一回り大きく、それでいて球の形が少し崩れて歪な形になっているように見えた。

「ま…まて!!」

遙は後を追おうとしたが、目の前の巨人に意識を無理やり逸らす。

「裕翔くん、君は皆と逃げるんだ。あれはウルトラマンじゃない、ならここに居続けるのは危険だ」

「わかった、お兄ちゃん頑張ってるね」

「ああ!」

遙は裕翔に肩を持つとそう優しく告げると、裕翔は頷いて遙に激励の言葉を贈ると、千歌達に駆け寄っていく。

「お姉ちゃん達逃げよう、ここにいたら邪魔になっちゃう」

「でもあの人は?」

そんな言い合いが始まりそうになるが、巨人もこちらへ歩み寄ってくるので遙はエスプレンダーをとり出し、その中の光を見る。

その光は、弱々しいものだったが、それでもやるしかない。覚悟を決めた遙はその光を解き放つ。

再び辺りは赤い光に包まれると、先の巨人に立ちはだかるようにガイアが現れる。

「何がどうなってるの?」

「あれもさっきの人が呼び出したの?」

「違うよ」

ガイアの登場で、更に混乱する一同だったが、裕翔はガイアがこの世界に現れたのは自分が赤い球で『ウルトラマンに会いたい』そう願ったからだと言ったこと…

「じゃあやっぱり遙くんが言ったこと…」

「本当…なんだろうね…」

千歌と梨子はその話を聞いて、遙が本当に別の世界から来たことを

信じるしかなかった。

「そんな話本当にあるわけ…」

「事实は小説より奇なり、今本当に目の前で起こってるから信じるしかないぞら」

「そ、そうだよね…」

ダイヤはまだ信じられないといった様子だったが、さっき現れた巨人を見ただけでもう信じるしかないと言われれば横でルビィは震えながらそう同意した。

ガイアは目の前の巨人に構えるが、その直後にライフゲージが点滅を始める。やはり先程の戦いで急激に消費していたエネルギーは全然回復していなかった。

（やっぱりこの世界だとエネルギーの消耗が激しい…でも負けるわけには…!）

巨人もガイアに対して敵意をむき出しにして駆け出してくる。

ガイアは巨人の拳を何とかいなして反撃しようとするが、巨人の一撃一撃がとても重く腕で防いでも威力を殺しきれずに後ろへ仰け反る。

仰け反ったガイアの首を巨人は片手で掴んで持ち上げるが、ガイアは相手の腹を蹴ってなんとか脱出し距離をとる。

そのまま両腕を上突き上げ、スプリーム・ヴァージョンヘヴァー・ジョンアップしようとしたがエネルギーが足りず失敗に終わってしまう。

「ッ!？」

「グオオオオオオオ!!」

ガイアは想定していなかった事態にうろたえるが、相手はそれをチャンスだと思ったのか雄たけびを上げるとガイアへ駆け寄ってきて、その腹に渾身の拳をいれ、怯んだところで顔面を殴り飛ばす。

「嘘、やられてるわよ…」

「なんかエネルギーが足りないのかな？最初から疲れてたよね？」

一方的にやられるガイアを見て鞠莉と果南がそう漏らす。その横で裕翔は必死に「ガイア頑張れ！」と応援していた。

「このままじゃ…」

「遥くん…」

千歌と梨子が心配そうに見守る中、ついにカオスウルトラマンの前にウルトラマンガイアは立ち上がる力も失ってしまい、ライフゲージの点滅の速度もかなり早まってしまった。

勝ち誇ったように雄たけびをあげながらゆっくりとガイアへと歩み寄るカオスウルトラマンを見て、誰しもがもうだめだと思った、その時！

銀色の光が両者の間に立ち上り、その中から青い身体をもつ巨人が現れた。

(アグルじゃない…他にもウルトラマンが…?)

ダメージで途切れそうになる意識をなんとか繋ぎ止めながらガイアはその巨人の背中を見つめる。するとその巨人はこちらへ振り向くと、ゆっくりと右腕をガイアへ向ける。

その巨人は青い身体に銀色のラインを持ち、現れる際に纏っていた光もどこか暖かさを感じた。

するとその巨人はその手から光をガイアに放出し、その光を浴びたガイアのライフゲージは明滅にペースがゆっくりになる。すると巨人はカオスウルトラマンの方を向く。

「イヤアッ!!」

「グオオオオオ！」

構える青い巨人に対して威嚇するようにカオスウルトラマンも吠えると、巨人に向かって駆け出した。しかい青い巨人はその攻撃を全て捌き、要所所で平手でカウンターを入れていく。

「あれもウルトラマンってやつなの?」

「コスモスだ！ウルトラマンコスモスだよ」

裕翔はその巨人をウルトラマンコスモスと呼んで、その登場を喜んだ。

「コスモス…ウルトラマンってたくさんいるの？」

「うん、他にもまだいるよ」

チサのその質問に興奮気味に答える裕翔だったがすぐに目の前でおこっている戦闘にすぐ意識を戻す。

お互いに有効打をなかなか与えられない状況が続いていたが、コスモスがカオスウルトラマンを平手突きでのけぞらせた後、右腕を上に掲げ赤い光を身に纏っていく。

「ハアアア…」

そこにいたのは先程までとは違って、赤い身体を持つ巨人だった。赤い身体に左右非対称の銀と青のラインに、頭部の形も先程までとは違っていた。

月の優しさを持った青いルナモードから、太陽の力強さを持つコロナモードへとチェンジしたが、そのシルエットはカオスウルトラマンと酷似している。

「ダアッ!!」

先程までとは打って変わって拳を握り駆け出したコスモスは力強く攻撃を繰り返す。

(強い…これがあのウルトラマンの力…)

エネルギーこそコスモスのお陰で回復したがダメージは抜けきっておらず、未だ膝をついたままその戦闘を見ていたガイアは思った。自分ももつと強ければ…そう思わずにはいられなかった。

だがカオスウルトラマンも負けておらず、攻撃を受け流しては反撃を行っていたが、次第にコスモスが圧倒していった。

しかしお互い決着を付けるべく腕を広げ胸の前にエネルギーを球状に収束させていき、それを両腕で押し出す。

「ハアッ！ハアアアアアア…デリヤアアア!!」

「オオオオオオオ…タアッ!!」

コスモスのブレイジングウェーブとカオスのダーキングショットが激突する。

本来、カオスウルトラマンはコスモスのコロナモードをベースにコスモスの能力をコピーした存在であり、ダーキングショットはブレイ

ジングウエーブのコピーであるため理論上威力は同等なのだが…。

「ハアッ！」

お互いの光線が拮抗した時、コスモスが出力を更に上げ、カオスウルトラマンを吹き飛ばした！そして地に伏したカオスウルトラマン目掛けて再びエネルギーを収束させると、今度は手をL字状に組み。コロナモード最強の技、ネイバスター光線を放つ。

起き上がったところにその一撃を胸に受けたカオスウルトラマンは、もがき苦しんだ後虹色の光の粒子をまき散らすようにして消滅した。

「君、大丈夫？」

変身を解いた遙に、そう声をかけてきたのは一人の少女だった。黒髪をツインテールにした、どこかの学校の制服だろうか？少なくとも沼津周辺で遙の知る限りでは見たことのない制服に身を包んだ少女だ気づけば遙の目の前に来ていた。

「ありがとう、でも大丈夫」

遙はそう返すが、やはりダメージが残っているのか肩で息をしていた。

「とにかく間に合ってよかったよ、それにしても君はこの世界じゃエネルギーの消耗が激しいみたいだね？」

そう聞いてくる彼女に遙は自分の事がばれていることを察した。

「そうみたい、ところで君は？君が助けてくれたの？」

「私は高田菜生（たかだなお）、ウルトラマンコスモスと一緒に戦っている」

「一緒に…君はウルトラマンじゃないの？」

少女の言葉の意味が解らないといった様子で遙はそう聞き返す。すると彼女はううんと首を横に振る。

「コスモスと一体化しているの、地球に居られる時間が短いから」

「世界が違えば、色々変わってくるのか…」

「ま、そんなところ。君も気が付いたらこの世界に飛ばされてたつてとこでしょ？この状況を打破するために協力しない？」

そう言つて菜生は手を差し伸べる。

「わかった、よろしく頼むよ」

その手を、遥はとつたのだった。

「じゃああなたも遥くんと一緒に、気が付いたらここにいたつてこと？」

その後Aqoursのメンバーと合流した遥と菜生は浦の星のスクールアイドル部の部室へとメンバーたちとともに移動していた。

「そうだね、でも私は気が付いたら海辺にいたんだよね。それで戦つてるのを見てこっちに來た感じ」

そう笑つて答える菜生に一同は信じられないと言つていたメンバーだったが、菜生もかなり驚いているらしい。

「だって私が通っている虹ヶ咲学園なんてないつて言うし、そもそも私東京に住んでるのにいきなり沼津にいたんだよ？」

そういつて大げさに手を振る菜生に周りは少々困惑気味だったが…。そして菜生もマネージャーの少女以外のメンバーの事は知つてゐる様子だった。

「そういえば、私が知つてるAqoursもマネージャーさんはいなかつたな…」

これも世界が違うことによつて生じた誤差なのだろうか？

「あつちサちゃんは春にここに転校してきたんだ！」

「九条チサつて言います、さつきは疑つてごめんなさい」

千歌にそう紹介されたチサは先程遥をかなり疑つていたので、その

事を謝罪した。

「逆の立場なら僕だって疑うし、気にしないでください」

「とにかく！私や遙くんだけじゃなくて怪獣も呼び出した赤い球って
いうのを何とかしないとね」

そう言つて菜生は立ち上がる。

「どうするつもりなの？」

「とにかく、そのおじさんを探してみるよ」

「でもあのおじさん怪獣を出すのにためらわないし、危ないよ！」

赤い球を引き渡すように説得する、そう語る菜生に裕翔はそう強く
引き留める。

「大丈夫だって、コスモスも一緒にいるし。私達、強いから」

「教えてください！どうしたら君みたいに強くなれるの？」

遙が思わず菜生にそう詰め寄る。先程力オスウルトラマンに歯が
立たなかったのがくやしかったのだろう。

「君だって十分に力をもってるはずだよ」

「でも：僕は、コスモスが来なかったら：」

「力で勝つだけが強さじゃないよ」

もつと強くありたい、そう訴えかける遙に菜生はそう告げる。

「遙くんは皆の為に戦える優しい人だよ、でもだからこそ忘れないで
？力でねじ伏せるだけが強さじゃないってことを」

「力だけが：強さじゃない：」

「君は本当は答えを知ってる、今は色んなことがあって混乱している
だけで。私みたいにウルトラマンが何かを教えてくれることは無
かったかもしれない、でも君の仲間がその答えを気づかせてくれたは
ずだよ」

そう言つと、菜生は部室を後にした。

「そうだ、皆僕を信じてくれた。だから僕は皆の為に戦えた：」
気が付くと裕翔が遙の隣に立っていた。

「僕も行くよ、最初に使ったの：僕だから」

「わかった、一緒に行こう」

遙は裕翔を連れて、海造を探すことにするのだった。

三章 最恐の怪獣

「探すって言っても、どこに行ったか見当もつかないな…」

思わずそう漏らすのは遙だった、何とかしなければ。そう思って行動を起こしたのはよかつたのだが…

「でもまた怪獣が出たら大変でしょ？はい」

そう言っ後をついてくるのは千歌だ、あの後裕翔と行こうとしたのだが流石に心配だということだ。

「これは？」

千歌に手渡されたお菓子を受け取る。

「うちで売ってるお饅頭、よかつたら食べて」

遙と千歌と曜。裕翔とチサと梨子で別れることとなったのだが、これにも一応理由があった。

裕翔も遙もスマホを持ってないので、別々にした方がいいという提案が出た事、裕翔がチサと梨子になつていること、遙が梨子の事を気が抜けるとすぐ「姉さん」と呼んでしまうのを嫌がられたことが原因だったりする。

「そういえばデザイナーって言ってたし、そういうのを作ってる場所にいるんじゃない？」

「そういう場所、先輩たち解ります？」

曜の提案に遙はそう聞き返すが「全然？」なんて答えるものだから思わず滑ってしまう。

「そういえばもう一人の子、菜生ちゃんはどこに行つたんだろうね？」

「どうなんでしょう？そう言えばあの人も多分僕みたいにスマホとかは元の世界に置きっぱなしになつてるだろうし…」

「そうだよね、ちよつと心配」

そんな会話をしていると、たまたま通りがかつた小さな模型店から海造が出てくるのに遭遇する。

「なっ…お前たち…」

「あの球を渡してください！あれは危険なものなんです!!」

目があつてしまったところで海造はうろたえるが、遙はそうやって

すかさず詰め寄る。

「う、うるさい！私は最強の怪獣を生み出さなければならぬんだ！
邪魔をするな」

そういつて手に持っていた袋から赤い球を取り出す、やはり最初に見た時より大きくなっているようだった。

「ウルトラマンよ元の世界へ帰れ！」

「なっ…！」

「そんなのあり？」

「その球を…」

驚く一同だったが、遥はその前になんとしてでもその球をと駆け出したのだがもう間に合わない。

「なんだ…？急に、意識が…」

すると遥の身体は銀色に光った後、泡に包まれるようにして消えてしまった。

おそらく菜生も同じようにして消えてしまったのだろうか…。

「本当に…消えた？」

「嘘…とりあえず梨子ちゃんたちに知らせないと…」

目の前で人が消える、それを目の当たりにした千歌と曜は青ざ狼狽えてしまうが、その隙にまた海造には逃げられてしまう。

「しまった、また逃げられちゃった…」

一方その少し前、裕翔たちは菜生と合流していた。

「あれ？梨子さんにチサさんに裕翔君だっけ？どうしたの？」

沼津の商店街まで移動したところで、たまたま菜生と遭遇した。

「いや、私たちも探そうと思って…」

「それに裕翔くんにホントなら使ってみたらっていったの、私なんだよね」

チサの口から語られたのは、たまたま裕翔が見つけた赤い球。それは裕翔の夢にも現れ『望めば全て叶う』そう告げたらしい。それを聞いたチサは、「もし本当なら素敵じゃない、試しに願ってみたら？」そ

う言ったらしいのだ。

そしてその結果、本当に願いが叶うどころか怪獣まで現れてしまい遙と菜生は元々自身の存在しないはずの世界に来てしまった。

「ごめんなさい、あの時私がちゃんとしていれば…怪獣なんて現れなかったのに…」

「違うよ！チサお姉ちゃんは悪くない！僕が何も願わなければ…」

菜生にそう言って謝るチサを裕翔がそう言って庇う。

「誰も悪くないよ」

それを黙って聞いていた菜生はそう答える。

「私だってきつとそうするよ？それに街を壊すのが望みじゃない訳だし」

そう言って笑って見せた。

「私の世界はね、怪獣も地球の一部だからってなるべく保護したり、共存できるようにしてきたんだ。でもその為には力が必要だって思ってた時期もあって…その時助ける筈だった怪獣を死なせちゃったんだ」

「そんな事が…」

「だから遙くんが焦ってたのも解るんだ」

「菜生ちゃん…」

「きつと遙くん、Aqoursのみんなを守りたくて戦ってきたんだよ。でもこの世界のAqoursのみんなは遙くんを知らない。だから遙くんを信じてあげて欲しい、別の世界の君たちはきつとそうしたはずだから」

一転してまじめな表情でそう語った菜生だったが、最後はそう言って笑って見せた。

「菜生ちゃんも、そうやって戦ってきたの？」

「そうだよ？ニジガクのみんながいたから、コスモスが居てくれたから」

梨子にそう問いかけられたのでこう答えた。きつと菜生も遙と同じように悩みながら戦ってきたのだろう。

「みんながいたから…」

「それより、早く見つけないとねじやないと…」

そこまで言った所で菜生の声にノイズが入って聞き取れなくなる。

「お姉ちゃん、体が…」

裕翔が震える声で菜生を指さすと、菜生の体もノイズが走る。

「やばッ時間切れ？いい？絶対に…めっちゃ…め…戻って…るか…」

「消えた…」

そんな時千歌から電話がかかってくる。

『梨子ちゃん大変、遙くんが消えちゃった！』

「本当に？菜生ちゃんも今消えちゃって…」

「戻っちゃったんだよ、元の世界に…」

裕翔のその言葉に、頷く事しかできなかった。

「遙？遙！」

僕を呼ぶ声が聞こえる…。ずっと呼んで欲しかった、その声が。

「あれ…僕は…姉さん？」

「やっと起きた、帰ってきたら部屋で倒れてたから心配したのよ？」

遙が目を覚ますと、梨子はほっとしたようにそう言う。

「あれは…夢だったのか？」

「夢？」

さっきまでの出来事は夢だったのだろうか？そう一人考えていると、梨子は心配そうに顔を覗き込む。

「本当に大丈夫？」

「え？うん、大丈夫大丈夫」

そう答えるが梨子は本当に大丈夫なのだろうか？といった表情をしましたがそれ以上追及はしなかった。

「ならいいけど、何かあったらちゃんと言うのよ？最近色んなことがあったし、みんな心配してるんだから」

「うん、ありがとう」

「梨子ちゃん、遙くん起きた？」

そう言つて千歌も入つてくると、ほっとしたような仕草を見せるのだった。

「遙くん大丈夫なの？」

「心配かけちゃってすいません、ちよつと疲れてるのかもです」

そう言つて笑つてごまかすと、ふとポケットに何か入っていることに気が付く。

「これは…」

「何それ？お饅頭？」

千歌も初めて見るかのような反応を示す。

「夢じゃ…なかった、僕は本当に…時空を超えたんだ！」

「どういうこと？」

千歌と梨子の疑問に遙は何と言つて説明すればいいのか少し悩んだが、ガイアであることを明かしたときに、心配をかけないために伝える事の重要さも知ったので、この数時間の間に何があったのかを話した。

「それって夢じゃないの？」

「夢なんかじゃないさ！それにこのお菓子が証拠だよ。千歌先輩に貰ったのに、見たことないなんておかしいじゃないか」

「じゃあ、本当に…別の世界があつて、そこでも私達とよく似た人たちが生活してるってこと？」

やはりこんなSF映画みたいな話、すぐには信じられないだろう。だが向こうの世界で千歌に貰ったお菓子を持つて帰つてきていること、カオスウルトラマンにやられた箇所が痣になっていることが何よりの証拠なので、梨子と千歌は信じざるを得なくなる。

「でも何でも願いが叶うなんて凄いいね。怪獣が出ちゃうのは嫌だけど…」

そう言つて千歌は苦笑いを浮かべるが遙も「ええ」と同意はするが、やはり向こうの世界が心配なのだろう。その表情は真剣そのものだった。

「じゃあ遙は、向こうの世界の私たちを助けに行きたいのね？」

梨子にそう聞かれた遙は、こくりと首を縦に振った。

「向こうの世界に僕はいないから、向こうの人は僕の事なんて知らないし、かなり怪しまれたけどでもそんなの関係ないんだ。だって向こうの世界の A q o u r s も守りたい！いや、守らなきゃいけないんだよ」

そう力強く遙は答えた。

「でも、どうすればいいのか解らないんだ…」

「遙…」

向こうの世界へ自力で行く方法を持たない遙は、自身の無力さに打ちひしがれていた。

—なら一緒に行こう！

そんな声が聞こえた気がした。その時家の近くに「ズシン！」という音とともに何かが落下してきた。

「何!？」

「まさか…」

遙にとつて聞き覚えのある声があった。もしやと思ひ外に駆け出すと、そこには銀色の身体に紫のラインを持つ巨人がいた。

「ウルトラマンコスモス…？菜生さんなんですか？」

遙のその問いかけに、巨人は頷くと菜生の声で語り掛けてくる。

『私とコスモスなら時空を超えられる、でもそれをするとなエネルギーの消費が激しいんだ…だから手伝ってくれない？もう一つの世界に住む、君のお姉さんを守るためにさ』

「行きます！僕はあの世界の A q o u r s も守りたい！お願いします、連れて行ってください!!」

遙はそう叫んだ。すると遙の後を追って飛び出してきた梨子と千歌も、コスモスの姿を目の当たりにする。

「ウルトラマン…?」

『解った、この世界に寄り道した甲斐があったよ。じゃあ行こうか!!』
遥の言葉に満足したかのように菜生はそう告げると、遥の後ろにいる2人にこう言った。

『時間が無いから説明できないけど、弟君と別の世界に行ってください。大丈夫、私達ウルトラマンを信じてください』

「姉さん、千歌先輩。帰ったら全部話すから、家で待ってて。必ず勝つて戻ってくるから!」

そう笑顔で遥はそう告げるのだった。

「わかった!遥くんなら大丈夫だよ!ね、梨子ちゃん?」

「そうね。遥、この世界で待ってるから別の世界みんなの事…頼んだわよ」

遥の目をしつかり見て、2人はそう言っつて遥を見送る。

「ありがとうございます!!」

遥はエスプレンドーの光を開放すると、その身をウルトラマンガイアへと変える。

『じゃあ行こうか?しつかりついてきてね』

『はい!』

「シューワッ!」

「ジュワッ!!」

2人の巨人が宇宙に向けて飛び立つと、コスモスの能力で宇宙空間に平行世界へのゲートを開くとその中目指し光を超えたスピードで加速していった。

一方、遥と菜生が元の世界に送り返されてしまったが、それでも赤

い球を何とか取り戻して怪獣が街を破壊する。そんな結末だけは防ぎたい。そう思った裕翔やAqoursのメンバーたちは、海造を探していた。

「こっちにそのデザイナー？の人が働いてそんな場所があるの？」

「沼津のあたりで考えるならそこしかないわ、ただよその人間でそこに戻ったとしたらもう打つ手はないけど…」

そう言ってみんなを案内したのは善子だった。最初は遥や菜生もあまり信用できないといった様子の子の1年と3年だったが、それでも怪獣が出てしまうのは嫌なので、6人でも探してくれていたようだった。

結局、遥と菜生が元の世界に強制的に戻されてしまったという連絡を受けて、全員合流したわけなのだが。やはり見つけられそうにない。

「どうしたら…」

「今度は何をするか解らないもんね…」

遥たちが居なくなってから結構な時間が経った。気が付けば駅前に戻ってきていたが、付近は夕暮れが近付いてきて空もオレンジがかってきた。

「そろそろ限界ね、帰らないとバスもそろそろ最後だし」

「でもそれじゃ球は…」

「明日出直しましょう？こんな話きつと誰も信じないし、このままじゃみんなの家族に心配かけちゃうし」

球を何とかしないともっとひどいことになる。そう思っている裕翔はそう言っただけで食いだる下がるが、チサがそう言っただけで宥める。

その時だった、空が突然曇り赤い雷が沼津の街中に落ちる。

「何が起きてるの？」

「球だ、球の力を使ったんだ」

赤い稲妻が落ちた場所から現れたのは、この世界の住民の誰も見たことのない怪獣だった。

二本の脚に二本の腕、トカゲのような体に3つの赤い目、腹部には何本もの牙、黄色い骨ばった翼。テレビでもどこでも見たことがない怪獣だ。

「最恐怪獣、『キングオブモンス』だ」

そう言って現れたのは海造だった。更に巨大化し、棘の生えたより毒々しい姿となった赤い球を持って。

その姿はまるで悪霊にでも取りつかれたかの様だった。

「様子がおかしい?」

「最強の怪獣を生み出す事が私の願いだ。球はそれを叶える道具に過ぎない」

「その為なら街がどうなってもいいんですか?」

「何が悪い?元々怪獣は街を破壊するための悪役に過ぎない、私の仕事はその怪獣を作る事だった。なのに上の奴らは私の作品を破壊し、私が賞を取るのを邪魔した!その時に作った怪獣たちの無念、ここで晴らしてやる!破壊しろ、キングオブモンス!!」

そう叫ぶと赤い球は更に輝きを増し、怪獣の3つの目の真ん中の目がそれに呼応するように光を増す。

すると怪獣は破壊光線を吐き、ビルを薙ぎ払う。

逃げ惑う人々、破壊される街、沼津の街は大混乱に陥る。

「どうしたら…」

このままではここも危険だが、あの球をこのままにしておくこともできない。それにあの男も簡単にあの球を離したりはしないはず。

「うわああああああ!」

裕翔が海造に体当たりをしようと走り出したが、それは躲されて裕翔は転んでしまう。

「このガキが、ふざけた真似を…」

「うっ…」

海造は怒り狂った様子で裕翔を踏みつける。「裕翔君!」Aquoursのみんなも裕翔を助けようとするが、海造は赤い球を突き出し、「変なことをしたら別の怪獣をだしてお前たちを襲わせてやる」

そう言うのだった。下手に動けば裕翔を危険にさらすだけでなく、

怪獣まで増やしてしまう。

「きつとウルトラマンが来てくれる！」

「馬鹿をいうな、もうウルトラマンは現れない！この球で元の世界に戻したのだ、もうこの世界にウルトラマンは現れない!!」

裕翔がウルトラマンがくるというと、海造はそう勝ち誇ったように叫ぶ。

するとキングオブモンスの口から放たれた光線がこちらへ向かってくる。避けようにも恐らく間に合わない、悲鳴を上げ目をそらすみんなだった。

「助けて…遙くん…」

梨子の脳裏に浮かんだのは、自分に似た容姿をした別の世界での自分の弟だと主張した少年の顔だった。

初対面の人間に姉と呼ばれるのが怖くて拒んでしまったが、自分の為に体を張ってくれた優しい少年。出来る事ならもう一度彼と会いたい。そう思った時。

「シエアア!!」

上空から何者かが降り立つと、バリアを張ってそれを防御した。青と銀の身体を持つ巨人、ウルトラマンコスモス・ルナモードだ。

「デヤアア！」

そして空から降ってくるようにして怪獣を蹴り飛ばした存在がいた。

赤と銀の身体をもつ巨人、ウルトラマンガイアV2だ。

「ウルトラマンガイア！」

「遙くん…」

「じゃあこっちのウルトラマンは菜生ちゃん？」

しかしコスモスはエネルギー残量がもう少ないのかカラータイマーは赤く明滅しており、そのままその場に崩れ落ちるようになってしまう。

「やっぱり…これ以上は無理か…遙くん、あとは頼むよ…」

菜生はその場に膝をつく、汗で顔に髪が張り付いており息も上がりきっていた。

「大丈夫!？」

菜生に曜と千歌が駆け寄ると、菜生は「ちよつと疲れちゃったかな？ごめん私は今戦えないや…」そう申し訳なさそうに答えるのだった。

「なぜだ…どうやって来たんだ…？」

ガイアとコスモスの登場に裕翔達は喜び、海造は想定外の事に動揺し、思わず裕翔から離れてしまう。

「お願い！街を、皆を守って！」

裕翔のその言葉にガイアは頷くと怪獣へ向き直り駆け出した。

怪獣もガイアへ駆け出したが、ガイアは裏拳で怪獣を殴り飛ばし、ファイティングポーズをとる。

「シューー！」

「くそ、何をやっている！捻り潰せ!!」

海造がキングオブモンスが押されていることに激昂し、そう叫ぶと赤い球が輝きキングオブモンスもそれに呼応する。

ガイアとそこから腹部の牙を駆使し、ガイアを接近戦において苦戦させていく。近づきすぎるとその牙に体を咬まれ、その腕力でガイアをなぎ倒す。

ガイアは地面を転がりながら距離を取ると、そのまま起き上がりぎまに振り返りフォトンエッジを放つ。

数多の怪獣を葬ってきた一撃は、キングオブモンスの翼を用いて展開されたバリアによって全て逸らされてしまう。

「ウォア…」

まさかの完全に無力化されたことにガイアは驚いてしまう、するとキングオブモンスはお返しとばかりに口から破壊光線を吐くと、ガイアはこれをバリアーで弾こうとするが、完全に威力を殺しきれずバリアーを破られてしまい、破壊光線がガイアの胸を焼く。

「ガイアが…」

それでもガイアは果敢に立ち向かい、肉弾戦ではほぼ互角を維持したがそれでも必殺技が効かなかった以上、ハンデを背負っているのは誰が見ても明らかだった。

「いいぞ！そのままガイアを倒して、この世界を滅ぼしてしまえ!!」

勝ち誇ったかのように海造がそう叫ぶ。すると赤い球はさらにキングオブモンスに力を与え、キングオブモンスにとって最大の、それできて恐ろしい能力が開花してしまうのだった…。

四章 光よ！

赤い球によってついに新たな能力を開放したキングオブモンス。その能力は、

『無限の増殖』

キングオブモンスの全身が赤く光ると、その赤い腹部が蠢き四本足の水生生物のような特徴をもち、それでいて体のほぼ半分が口として開く怪獣、『スキューラ』が現れ、翼が倍に増えると、背中から、その増えた分の翼を自身の翼として、四枚の翼に二本の脚を持ち、全体的に銀色のカマキリのような怪獣『バジリス』が天に飛翔する。

「まずい…：数でガイアが不利だ…：」

菜生がそう悔しそうに漏らすと、三体の怪獣はガイアを取り囲むと一方的にガイアを痛めつける。

スキューラが高速で突進を行うとガイアの身体が宙を舞い、それをバジリスが両腕の鎌で叩き落とす。そして起き上がろうとするガイアをキングオブモンスが腹に蹴りを入れる。

地を転がるガイアは、なんとか起き上がろうとするが腕に力が入らないのか中々起き上がれずライフゲージも赤く点滅を始める。

「菜生ちゃん、なんとか助けられない？」

「ごめん、コスモスも今日の戦闘と二元の世界からここに来るまででエネルギーを使い果たして…：」

千歌にそう悲痛な表情で聞かれるが、菜生は悔し気にそう答えると視線を伏せる。

「このままじゃ…：ガイアが死んじゃう！」

裕翔はそう悲痛な叫びをあげるが、ここで悲しんだところでガイアが3体の怪獣を相手に一方的にされるがままになっている現状は変わらない。

「あの球に、怪獣を消すように願ってみるのは？」

「それだ！」

咄嗟の提案に望みをかけて、全員で海造から赤い球を奪おうと動き出す。

「こいつら…そんなに死にたいか！」

合計12人に赤い球を狙われれば流石に取られないようにするというのは無理がある。だが海造の取られまいとする願いを赤い球はゆがんだ形で叶えようとする。

—奪わせない為に、殺してしまおうと—

その結果赤い球が召喚したのは、青い装甲と黄色のモノアイをもつロボット兵器、ヘルズキングだった。

「あれは…まずい！みんな逃げて!!」

想定外だった新たな敵の出現に、菜生はその怪獣ロボットに覚えがあるのか皆に逃げるように促す。しかしヘルズキングはすぐには動こうとせず立ち尽くしていた。

ロボットはガイアには目もくれず真つ直ぐ裕翔達を狙って行動を開始するが、皆巻き込まれまいと菜生の誘導に従って一目散に駆け出した。

だが一方でガイアも3体の怪獣はどれも今まで戦ってきた相手の中でも上位に入る力を持っているので活路を見いだせずにいる。

キングオブモンスに攻撃を加えようとすればバジリスとスキューラが、他の2体のどちらかを狙っても残りの2体に攻撃を与えられ窮地に立たされていた。

その時飛翔したバジリスの体当たりをくらったガイアの身体がビルの屋上へと叩き付けられその重さに耐えられなかったビルを粉碎し、ガイアは暫く立ち上がれなかった。

そしてキングオブモンスは駅の方へ破壊光線を吐き戦闘を行っていた場所からこちらまでを一直線に薙ぎ払った。

「ぎゃあああああああ！」

「うわあああああああ！」

その爆風で全員の身体が宙を舞い地面にたたきつけられる。

「いったあ…」

「み、みんな大丈夫!？」

菜生と果南、曜は受け身を咄嗟に取れたのだが、他の全員はそうもいかなかった。幸い頭を打ったり瓦礫によって怪我をした人はいな

かったが、ヘルズキングもこちらを見据える。

「それ見た事か、私に逆らうからこうなるんだ！」

運よく被害を免れた海造がそう吠える。恐らく赤い球によって破壊衝動を刺激されているのだろう。その目は最初の頃と比べて異様に血走り、声もエコーがかかったようになっていた。

「あの人…まるで操られてるみたいじゃない？」

「多分球の力で破壊衝動みたいなのを暴走させられてるんだ」

それは花丸も感じていたことらしい、そして菜生もそれを感じたらしく周りの皆を起こしながら推論を述べる。

「壊せ壊せ壊せ！破壊しつくせ!!」

海造がそう叫んだ時、ヘルズキングが腕の装甲を展開し菜生達目がけて破壊光弾を放つ。

『菜生、変身を！このままでは全員助からない』

菜生の脳裏に一体化しているコスモスからテレパシーが送られる。すると菜生はスティック状のアイテム、コスモプラックを突き出し、その先端の蕾を花開かせる。

「コスモース!!」

「シュワー！」

その時辺りは光に包まれ、ウルトラマンコスモスが光弾を弾きながら千歌たちを庇うように現れる。

「コスモス…」

コスモスはヘルズキングと見合うようにして向き合おうと、右腕を天に掲げ太陽の如き熱きエネルギーを身に纏い、ルナモードからコロナモードへと変化する。

だが、やはりエネルギーは消耗したままなのかカラータイマーは先ほどと同じで赤く明滅していた。

「ダァ!!」

コスモスはヘルズキングに駆け出すと、そのボディに連続でパンチを繰り返すが、ヘルズキングはビクともせず逆にコスモスを跳ね飛ばしてしまう。

そして起き上がったところに腕の装甲を再び展開し、破壊光弾を今

度は両腕から連射しコスモスを襲う。コスモスは最初の数発は避けたり腕で弾き落としていたが、3発ほど胸にくらっついてしまい再びその体が宙を舞う。

その戦闘の振動で遂に駅の建物が完全に崩壊する。そしてその瓦礫にいた海造はそれに気が付くことができずに瓦礫に押し潰されてしまった。

「裕翔君見ちゃダメー！」

チサがとっさに裕翔の目を覆ったことで裕翔はそれを見なくて済んだが、その光景に他の全員が目を背けた。そして海造の身体は見えなくなっていたが、裕翔の足元には赤い球がまるで新しい主人を求めるとかのように裕翔の足元に転がってくる。

「球だ…」

チサが手を放した後、足元に転がる球に気が付いた裕翔はその球を持ち上げる。

そして裕翔はガイアの方へ目を向けると、ガイアは3対の怪獣に囲まれて地に倒れ伏していた。そしてコスモスもヘルズキングの攻撃に耐えられず一方的に攻撃を受けていた。

そして裕翔は何を願うかを決心し、球にむかって叫んだ。

「怪獣を消して、ウルトラマンを助けて!!」

そう叫ぶと、赤い球が光るだろうと思いい目を瞑るが何かが起こったような気配を感じることができず、恐る恐る目を開くと、眼前には先ほどまでと変わらない景色が広がっていた。

「どうして…願いが叶わないんだ？」

『一度実体化したものを、消せはしない。全て、手遅れだ』

裕翔の疑問に答えるかのように、赤い球は淡く光りながらそう告げる。

「そんな…そんなあ…」

裕翔は膝から崩れ落ちると、赤い球を地面に叩き付けようとする。

「もういいよ裕翔君、何も変わらないわ」

チサが裕翔の肩を持つと、優しくそう告げる。

「チサちゃん、変わらないことなんて絶対ないと思う」

そうチサの言葉を否定したのは千歌だった。千歌はそんなことないと強く言い切って見せたのだった。

「そうだよ、2人が頑張ってくれてるんだし私達もどうすればいいか考えよ！」

曜もそう言って裕翔を励ます。すると他のメンバーも「そうだよ、これで終わりって嫌だしね」「それに、他の世界から助けに来てくれているのに、私達が諦めたんじゃ悪いわよね」そう言ってみんなでどうにかしようという流れができた。

「そうだ、一人じゃない…ウルトラマンも…！」

そう裕翔が呟いたとき、バジリスの吐き出した破壊光球が、こちらへまっすぐ飛んできた。そしてあたりが爆炎に包まれた、その時だった。

「光よー!!」

ただ一言、いやほほ叫び声と言ってよかった。その裕翔の声に赤い球は今度こそ輝いたのだ。

「あれ…？」

「みんな大丈夫？」

「私は大丈夫」

「わたしも！」

気が付けば全員、何か白く輝くものの上に乗っけてはるか下では駅があった場所が炎に包まれていた。そして上を見ればこれもまた白く輝く巨人のシルエットが見える。そしてその光が収まりその巨人の正体に驚いた。

正確には巨人は二人いて、全員がそれぞれそのどちらかの手の中に居たのだ。そしてそのうちの一人は赤と紫に銀のラインが入った巨人―ウルトラマンティガ―もう一人は銀を基調とし、赤と青の身体を持つ巨人―ウルトラマンダイナだ。

そしてガイアとコスモスの身体も一瞬輝き、それぞれのライフゲージとカラータイマーは青い光を取り戻していた。

ティガとダイナはみんなを戦闘に巻き込まれないであろう少し離れた場所にそっと降ろすと、ガイアを取り囲む怪獣の方を振り返る

と、同時に手裏剣状の光弾をバジリスとスキューラへ発射する。

するとガイアも起き上がるとキングゴブモンスの首元に渾身の拳を叩き込み、その巨体を後退させる。

3対の怪獣が仰け反った隙に、ガイアは距離を取り、逆にティガとダイナはガイアの両隣に駆け寄って行った。

「テヤツッ！」

「テヤツッ！」

「シヨワ！」

各々フアイティングポーズを取ると、3人のウルトラマンはアイコンタクトを取ると、それぞれ自身の正面にいる怪獣へと駆け出していった。

ティガはスキューラの背に乗るとその頭を殴りつけ、ガイアはキングゴブモンスの頭を掴むと首に蹴りを入れ後退させ、ダイナはバジリスの両腕の鎌で接近しづらそうに見えたが、うまくかわしてその腹に蹴りを入れる。

ティガは一度振り落とされてしまうが、今度は尾びれと背びれを掴んでスキューラの巨体を持ち上げると、ジャイアントスイングの要領で振り回す。しかしその間にダイナがバジリスの両腕の鎌に挟まれて投げ飛ばされてしまい、その間フリーになったバジリスがティガを切り付け、スキューラの身体は宙を舞い、そのまま海中に姿を消した。そのままバジリスはティガに肉薄するが、すぐさまダイナが両腕を額の前でクロスさせエネルギーを集めると全身を赤く染め上げ、ストロングタイプへとチェンジし、両者の間に割って入るとバジリスを殴りつけ、怯んだところを掴んで投げ飛ばす。

その様子を横目にみたティガは、スキューラが消えた海の方を向くとダイナのようにエネルギーを集中させ、全身を紫に染め上げスカイタイプへとチェンジすると飛び上がり猛スピードでスキューラの消えた海中へ飛び込んでいった。

ガイアは最初に戦闘に突入した頃のようにキングゴブモンスと一進一退の肉弾戦を繰り返していたが、蹴り飛ばされて破壊光線を吐かれそうになるが、ダイナがキングゴブモンスを殴りつけて発射を阻止

してくれた。

しかし、その隙にバジリスが天高く飛び立ってしまい、ダイナはそれを追うべく赤と青のボディのフラッシュタイプへ戻ると、バジリスを追いかけて同様に飛び去ってしまった。

一方でエネルギーが球の力によって回復したコスモスは、先ほどの劣勢が嘘のようにヘルズキングと直角にまで持ち込んだ。そしてコスモスは菜生にさらなる力を使うように促す。

（みんなが私たちに力をくれた…行こう、菜生）

『うん、コスモス…！』

両腕の拳を同時にヘルズキングの腹部に叩き込んでヘルズキングをよろけさせると、両の拳を上突き上げ、黄金のエネルギーを身に纏う。

赤と青に銀体に金のプロテクターといったこれまでより派手な印象を与える模様コロナともルナとも違う頭部。さらにはカラータイマーの周りも銀から金へと変化した。コスモスの強さと優しさを体現した姿―エクリプスモードだ。

「コスモスが…また変わった…」

千歌たちから一番近い場所で戦闘を行っていたコスモスの変化に思わず見とれてしまう。

「フンッ！ハアッ!!」

一層力強く構えをとるコスモスに、ヘルズキングは駆け寄ってくる。しかしコスモスはその場で軽く飛び上がると一瞬でヘルズキングへと肉薄し、連続蹴りでその巨体を吹き飛ばした。

そしてスキューラを追って海底へと潜ったティガは、スキューラとの戦闘に突入していた。そして見かけ通り水中では地上より俊敏かつパワフルな攻撃に翻弄されていたがスカイタイプの俊敏さを活かして攻撃を最小限の回避に留め確実にカウンターでダメージを稼いでいく。

一方ダイナはバジリスを追って大気圏外まで飛翔し、バジリスの破壊光弾を腕で弾きながら接近し、飛行態勢のままバジリスの顔面や腹

部に蹴りや拳による殴打を浴びせていった。

そしてガイアもキングオブモンスとの戦闘ではキングオブモンスに力で押されてしまい、今度は胸を踏みつけられてしまっていた。そして何とかその脚を掴んで持ち上げようとするガイアだったが、キングオブモンスの巨体からくるパワーを前に苦しめられていた。

「がんばれガイアー！」

裕翔やA q o u r sの皆からガイアを鼓舞する声が飛ぶ。そして梨子も今日何度もウルトラマンが戦っているのを見て、ガイアに：いや遙にその思いを叫ぶ。

「お願い遙君！勝って!!」

その梨子の叫びが届いたのか、ガイアはキングオブモンスを跳ね除けると起き上がり側転で距離を取ると、両腕を上突き上げヴァー・ジョンアップポーズを取るとその身をスプリーム・ヴァー・ジョンへと変化させた。

その変化に動揺するキングオブモンスをガイアは回し蹴りで腹部の牙を粉碎しさらにその巨体を大きくのけぞらせた。

大地と海、そして宇宙で行われている。光の巨人と怪獣との決戦は、決着の刻が近づいていた。

五章 光の星の戦士たち

コスモスとヘルズキングの戦いは、コスモスがエクリップスモードへとチェンジしたことにより、コスモスが圧倒的に有利な状態で進んでいた。

ヘルズキングの拳や蹴りをコスモスは完全に腕や脚でさばききっていた。それでいて先程までと違いコスモスの拳はヘルズキングの装甲に阻まれることなく、着実にダメージを重ねていく。

接近戦での戦いが不利だと悟ったヘルズキングは、両腕の装甲を展開し光弾を高速で連射し始める。しかしコスモスは高速で移動しながらこれを叩き落す。

「ハアッ！・ハヤア!!」

拳を握りしめたコスモスはファイティングポーズをとると高速移動し一瞬で間合いを詰めると、連続蹴りを放ちヘルズキングを再び吹き飛ばす。そして止めを刺すべくコスモスは両腕を胸の前で交差させ、左右の腕をゆつくり体の外へ向けて円を描くようにし、今度は右ひじを支えるように左手を添える。

「ハアアアアア…ハヤッ!!」

そして右腕を前に突き出すことで放たれるウルトラマンコスモス最強の一撃―コスミューム光線―その一撃を受けたヘルズキングの身体を粉微塵に粉碎するのだった。

そして海底でスキューラと戦うティガは、紫と赤のマルチタイプに再びチェンジすると格闘戦を挑んでいた。しかし、スキューラの方が水中での活動に向いているので地上で戦っていた頃のようにはいかない。

ティガのパンチを口を大きく開けて躲すと、バランスを崩したティガをその口で挟む。顎の力も凄まじくティガは両腕で上あごを持ち上げようとすが持ち上げることができないでいた。

「タアッ！」

ティガは再び額の前で腕をクロスさせるとエネルギーを集中させ

今度は全身を赤く染め上げ、肉弾戦に特化したパワータイプへと変化し強化された腕力で無理やり顎をこじ開けて脱出すると、再びマルチタイプにチェンジすると、両腕を突き出し交差させるとそれを水平に開きエネルギーをためる。

そして、腕をL字に組みティガ最強の光線―ゼペリオン光線を放った。これを受けたスキューラは耐えられず爆散するのだった。

そして宇宙で繰り広げられているダイナとバジリスの戦闘も、決着の 때가近づいていた。

一度はバジリスの鎌に切り付けられ、距離を取られてしまったもののバジリスの光弾を全て腕で弾く。そのまま再び距離を詰めると首を掴んで頭部を殴りつけ、反撃の鎌を今度は躲して逆に腹部へ蹴りを入れて吹き飛ばす。

そしてバランスを崩して回転するバジリス目掛けてダイナは、腕を十字に組んでソルジェント光線を放つ。

「ダアツ！」

これをまともに受けたバジリスは全身が炎上し、大気圏に突入するとすぐさま爆散した。

そしてその頃、地上でのガイアとキングオブモンスの戦闘も、終盤へと差し掛かっていた。

スプリーム・ヴァージョンになったガイアの猛攻によって、それまで不利だったのがウソのようにガイアが攻め立てる。キングオブモンスの首を掴むと投げ飛ばし、起き上がろうとしたところを膝に蹴りを入れ妨害し再び投げ飛ばす。

これまでは元々活動していた世界と違う地球だったためか、エネルギーの消耗が激しくスプリーム・ヴァージョンになれるかすら怪しい状況だったので苦戦を強いられたが裕翔やAqoursのみんなの願いにより、赤い球によって本来の力を取り戻したガイアの敵ではな

いのだ。

起き上がったキングオブモンスは口から破壊光線を吐き、再びガイアを吹き飛ばそうとするが、パワーアップしたガイアのウルトラバリアによって全て弾かれてしまう。

するとキングオブモンスは飛び上がり、そのまま空中へ逃走しようとする。しかし、この時宇宙でバジリスが、海底でスキューラが倒されたことで、キングオブモンスの翼と腹部の牙が完全に破壊されてそのまま地面に墜落してしまう。

「デヤツ！ハアアアア…：：：デイヤアアア!!」

ここを勝機と見たガイアは、そのまま起き上がろうとするキングオブモンスにフォトンストリームを放った。そして今度こそ、赤い球に破壊の意思によって生み出された獣達は、完全に消滅したのだった。「やった！ウルトラマンが勝ったんだ!!」

裕翔がそう言っただけで喜ぶと、皆「よかった…」と言っただけで安堵した。

裕翔やAquoursの前に立ち、彼女らを見下ろすガイアの周りにティガ、ダイナがゆっくりと降り立つ。それぞれの場所で勝利を収めたあと、この場に戻ってきたのだ。そしてコスモスもまた、その隣へと歩み寄ってきた。この4人のウルトラマンが、この世界を救ったのだ。

「ありがとう、ウルトラマン…」

千歌のその言葉に、ウルトラマンたちはゆっくりと頷いた。

そして、ガイアとコスモスの身体が光に包まれると小さな球体となり、皆の目の前に降り立つと中から遥と菜生が現れる。

「遥兄ちゃん、菜生姉ちゃん!」

そう叫んだ裕翔が2人に駆け寄った。

「僕怖かったけど…本当は怖かったけど…」

「かつこよかったよ、裕翔君」

「そうそう、裕翔君のお陰で私たちは勝てたんだから」

涙を浮かべながらそう訴えかける裕翔に、遥と菜生はそう言っただけで裕翔の機転による願いを褒めた。

「球、小さくなっちゃったね…」

千歌とチサが、気が付けば足元に転がっていた赤い球に気が付いた。恐らくティガとダイナが現れた願いを叶えた時の爆風で落としてしまったのだらう。球は力を失ったのか初めて赤い球を目撃した時と同じ手のひらくらいのサイズに戻っていた。

「どうする？今度は新しい街を作ってもらう？どんな願いも叶えられるよ？」

そうチサが提案するが、千歌は「ううん」と首を横に振った。

「ダメだよ、この球があつたら今度こそ世界を滅ぼしちゃうよ。だから球がなくなるように願うかな……」

そう答える千歌に一瞬驚いた表情を見せるチサだったが、満足したように優しい気な笑みを浮かべた。すると赤い球はうっすら輝くと浮き上がり、チサの手の中に入り込む。

「…キミだったんだね」

菜生がそうチサの方を見ると、チサはこくりと頷いた。

「数えられない世界の破滅を見てきた…でも、その旅もやっと終わるかもしれない…」

「どういうことですか？」

そう遥が聞くと、チサは自分の秘密を明かした。

「私とこの球は一つの存在なの、『心に思い描いた事を全て現実にする』それを可能にする為に造られた存在…。でも人の欲望に終わりは無い、その結果沢山の世界が人の欲望の為に滅んだ…造られるべきじゃなかったんだよ、私…」

「そんなことない！チサちゃん私たちの友達だよ？これからも…」

自分は造られるべきじゃなかった。その言葉に特に千歌が反論する。無理もない、彼女たちはこの春から夏休みの終わり前の今まで、ずっと一緒に過ごしてきたのだ。彼女が人間でない。その事実も彼女たちは受け入れられるはずもない。

「チサちゃん、本当なの？」

梨子は恐る恐る聞くと、チサは笑って

「ごめんね？ずっと黙ってて…千歌ちゃん、私はさっきの願いを叶えて欲しいな？」

「でも…でも…それを叶えたら、チサちゃんは消えちゃうんでしょ？」
そう言つて球を千歌に手渡したチサだったが、千歌はチサと別れたくない。だからその願いを口にすることができなかった。

「千歌ちゃん…」周りのみんなもその続きの言葉をいうことができなかった。

「皆、もうどうすればいいか解つてるはずだよ？もう今日の事は繰り返しちゃいけないんだ」

そう菜生が優しく諭すように言う。

「千歌先輩、僕からもお願いします。チサさんを救つてあげてください」

遙もそう告げると、千歌も意を決したのか「すう」と息を吸うと、一息に願いを言い切る。

「球よ、消えろー！」

そう叫ぶと、球は青く光るとチサの身体も光の粒子に包まれる。

「ありがとう、皆は未来を守ったんだよ」

そう告げると、九条チサの姿はもうどこにもなかった。

そして球は浮かび上がるとティガとダイナの間に浮遊し、2人の巨人を光に包む。

「裕翔君、ごめんね？僕たちも元の世界に帰らないと」

遙は腰を落として裕翔に視線を合わせると、そう告げると。裕翔も目に涙をためながらも笑顔で

「うんーありがとう、怪獣を倒してくれて。これからも僕、ウルトラマンのこと応援してるから！」

そう返事をするのだった。そして遙は笑顔で頷くと裕翔の頭を撫で、立ち上がると梨子と視線を合わせる。

「ねえさ…梨子さん達も、ありがとうございました。みんなが信じてくれたから、僕たちも最後まで戦えました」

「本当に帰っちゃうの？まだいてくれても…」

そう曜が口を挟むが、菜生がそれに対して。

「私のいた世界も、遙くんがいた世界も、まだ崩壊の危機に瀕してるから…私たちはそれぞれ自分の世界に戻らないといけなんだ。それに、

またいつか会えるよ」

そう笑顔で告げたのだった。

そして梨子は遙の前に出ると、遙の目をまっすぐ見て今までずっと遙をどことなく避けていた彼女だったが遙にとっては、意外な言葉を投げかけた。

「ねえさんって呼んで？遙くんは、弟なんですよ？」

「え？でもこの世界じゃ…」

「住む世界は違っても、遙くんは私の大事な弟なんだって気づいたから…ごめんさい、ずっと避けちゃって…」

そう申し訳なきように告げる梨子に遙は「ありがとう、姉さん」そう告げるのだった。

「寂しいけど、ずっと応援してるから。遙くんの世界の私によろしくね」

「ありがとう…また、また会いに来るから…！」

涙ぐみながら、遙はそう返すのだった。

「そうだ、千歌先輩お饅頭ありがとうございました。これのお陰でこの世界に来た証拠が残ったから、僕はまたここに来れたんです」

「そっちの世界には、あれ売ってないんだね。また食べにおいでよ」

「はい、いつか…必ず」

千歌としてはなんの意図もなくただ持っていた饅頭を上げただけだったのだが、それが予想外の形で遙が時空を超えた証拠になったのだ。

「私ともここでお別れだね」

そう菜生が告げると、菜生と遙の体も少しづつ光に包まれ始めた。

「きつと球の影響は全部無かったことになるんじゃないかな？だから球の力で元の世界に帰れるよ」

そう菜生は笑って告げる。

「菜生さんもありがとうございました、コスモスがいなかったら僕は負けてました」

遙は菜生の方に向き直るとそう告げる。すると菜生も「私も一人じやきつとどうしようもできなかつたよ…またいつか一緒に戦おう」

そう返すのだった。

「裕翔君そして、A q o u r s の皆さんありがとうございます。さようなら、またいつか」

「お互い、それぞれの世界のラブライブ頑張らましょー！」

そう遥と菜生がそれぞれ告げると、2人は光と共に消えてしまった。そして後ろにいたティガとダイナ、そして球も消えてしまい、世界は眩い光に包まれていった。

そして…

気が付けば遥は家の前の砂浜に立っていた。ついさつきまで沼津の駅前でA q o u r s のみんなと裕翔、そして菜生といたはずだったが、赤い球によって光に包まれた後その光が収まるところに立っていたのだ。

「帰ってきたんだ、僕はあの世界を護れたんだ…」

「遥（くん）！」

「姉さん、千歌先輩まで…」

遥をずっと待っていたのか、梨子と千歌が遥を見つけると駆け寄ってくる。

「本当によかった…心配したんだから！」

「ごめん姉さん…でも僕、勝ったよ。別の世界のA q o u r s を守れたんだ」

梨子は抱き着くと、そう涙ながらに言うのだった。無理もない、いつも心配かけていた遥が、今度は別の世界という全く梨子たちが干渉できないところにいたのだから。もし帰ってこなかったら？そんな不安と戦っていたのだ。

「でも気になるなく別の世界の私達って」

「千歌先輩はあんま変わりませんでしたよ？でも姉さんは凄かったな」

千歌が、別の世界の自分たちに興味がわいたらしく実際行ってきた

遙にそう聞くと、遙は少しおどけたように答えるのだった。

「どういうこと？ 私が凄かったって？」

「えくつと、すっごい大人しくておどおどした感じが新鮮だった…かな？」

梨子にそう問いただされると遙は目を逸らしつつそう答えるのだった。

「それどういう意味よ!？」

「他意はないんだってば〜」

「あつ待ちなさい！ 遙〜」

少しおちよくなるような言い方が過ぎたのだろうか、梨子にすごまれるように問いただされるので遙は逃げ出した。

千歌はただその様子を笑って眺めるのだった。

これを読んでいる人も、信じられないかもしれませんがあの光が収まった後あんなにボロボロだった沼津の街並みも駅も、まるで最初からウルトラマンと怪獣が戦ったりしてないみたいになり通りになりました。

その事を覚えていたのも、私達A q o u r sの9人と裕翔君だけ…。そして私と同じタイミングで転校してきた九条チサちゃんのこと、他の人は誰も覚えていませんでした。

でもあの日の事は夢じゃなかった。裕翔君の願いが、この不思議な出会いを起こしてくれて千歌ちゃんの願いでみんな元の居場所に帰

る事が出来たんです。

それに夢じやない証拠もあります。あの時、実は遙くんから貰ったものがあるんです。それはピアノの譜面、向こうの私はコンクールで賞を取るくらいピアノが堪能らしくてちよつと羨ましい。同じ人物のはずなんだけど、私は特に遙くんの世界のみんなと違いが激しいらしいんです。

遙くんから貰った譜面、まだ曲の名前も決まっていないうし本人は未完成って言ってたけどいい曲だと思ったし、いつか本人の演奏で聴いてみたいって思いました。

話が脱線してしまっただけど、私はあの日の事を忘れることは絶対にありません。住む世界は違うけどその世界から来た私の大切な弟。きつとまたいつか会えるって、そう信じて…。

—世界は滅びたりしない

—君たちが明日を信じる限り

Ver. 2輝きへ

27話 ネクストステップ／舞い降りる翼

二学期初日の始業式、全校生徒は体育館に集合していた。現在は理事長でもある鞠莉が代表してスピーチを行っている所だった。

「ハローエブリワン！本日より、セカンドシーズンのスタートです！」

「セカンドシーズン？」

「二学期ってことよ」

訝し気な表情を浮かべた曜と梨子がそんなやり取りをしているのが聞こえる。鞠莉は理事長挨拶の名目で生徒の前に立っているわけだが、普段のペースを崩さない。

「そこは浦の星の生徒らしい、節度を持った行動と勉学に励むんだ、と…」

「雪像を持つ？」

ダイヤが小声でそうもつと知事長らしい挨拶をするように促すが、鞠莉はとぼけた仕草を見せるので思わず声を荒げそうになるがなんとか思いとどまる。

そんな普段通りの様子に、同級生である三年生は苦笑いを浮かべていた。

「でも惜しかったわよね」

「うん、あと少して全国大会だったみたい」

「過ぎたことをいつまで言っても仕方ないすら」

そんな朝礼の様子を見ながら、善子、ルビィ、花丸がこの前の地区予選の事を思い出していた。

結果から言うと、Aoursはラブライブの全国大会に行くことはできなかったのだ。あと少して全国大会というかなり惜しいところまで行ったのだが、全国に行けなかった。その結果は覆らない。

「しっかー！参加賞が二色ボールペンってどうなの!？」

善子は参加賞が気に食わなかったらしくそんな声を上げる。

「全国大会に行くよ、三色になるとか？」

「みらいずら〜」

「どっちでも変わらないだろ…」

それにルビィと花丸はそんな話で盛り上がりかけるが、遙が水を差したことで3人は遙を睨む。

「何さ…？」

「シヤラ〜ッブ!!」

思ったより声が出てしまっていたらしく、鞠莉のそれを窘める声が体育館を反響する。正直あなたが一番うるさいと思わずにはいられないが…。

「確かに、全国大会に進めなかったのは残念でしたけど—」

「でも、0を1にすることはできた。ここにいる皆さんのお陰ですわ」
そう言つてスピーチを再開した鞠莉の隣に、ステージの端に隠れていたダイヤが現れそう続ける。

「そして、それだけではありませんわよ」

「本日発表になりました。次のラブライブが!」

鞠莉とダイヤがそう告げると、体育館の扉が音を立てて開き、千歌が入ってきた。そういえば朝学校へ行くときバスの中に彼女の姿は無かったが…。

「トウ〜レイト」

「大遅刻ですわよ」

そう告げる鞠莉とダイヤだったが、その表情に千歌を責めている感情は微塵も感じられない。

「千歌ちゃん、どうする?」

「聞くまでもないと思うけど!」

恐らく全力疾走で来たのだろう。息の上がつている千歌に曜と果南がそう問いかける。

「出よう!ラブライブ!!そして、1を10にして、10を100にして、学校を救つて…:そうしたら、わたしたちだけの輝きが見つかると思っ!きつと…輝ける!!」

今度こそラブライブの全国大会に出場し、入学希望者を増やして学

校を存続させる。その先に彼女達の求める輝きが見つかる。そう信じて。

「ゾーリムもダメだったみたい」

「でもウルトラマンは一人消えました。もう一人を片付ければ、もう後は簡単です。何、『彼女』を救うまであと少しです」

暗がりですら少女と落ち着いた男性の声が響く。だが少女の人影は見えるが、男性らしき人物の姿はどこにも見当たらなかった。

「簡単に言うけど、あなたも私もまだ手を出すときじゃない…理解、してる?」

少女は、一層声のトーンを下げ睨みつけるようにそう告げる。

「解っていますとも、そして出番もありませんでしょうよ」

そう男性の声は悪びれる事なくそう返すと、姿の見えないその男性の気配は消えてしまった。

『死神』が、よく言う…」

少女はそう毒付くように呟くと、そのまま闇によけるようにして消えてしまうのだった。

「善子ちゃん、相変わらず体固いね」

放課後、屋上で練習前にストレッチを行っている時、果南が前屈をする善子の背中を座って押す。

「ヨハネ！うう…この身体はあくまで仮初…」

「ふふっ…」

そう言い訳をする善子に、果南はそう悪戯っぽい笑みを浮かべると、善子にさつきより体重をかけると善子は「痛い痛い！」と悲鳴を上げるのだった。

「花丸ちゃんはずいぶん曲がるようになったよね」

「毎日やってるすら、腕立ても。見てるすらよ〜」

ルビイと柔軟をやっていた花丸が、そう言うのと腕立て伏せをする体勢になるとみんなが花丸の方を注目した。

「いいいいいいいい…」

結局、一度も伏せたまま上がってくることなく、『ぺしゃん』と音を立てて突っ伏してしまふのだった。

「完璧すら…」

「花丸ちゃんすごい！」

「イツツミラクール！」

なぜかやり切った感を出す花丸に、それに感動したかのような様子のルビイと鞠莉に「どこがよ！」と真っ当ツツコミを入れたのは善子だった。

「まあ…腕を曲げるのもちよつと前までほぼできてなかったし、いいんじゃない？」

「遥はできるの？」

そうフオローする遥だったが、自分に飛び火すると困った表情を浮かべる。

「そりやあ僕も毎日やってるし…怪獣だって持ち上げられるし？」

「それ変身してる時だけでしょ？」

「わーった、やります。やりますよ…」

そんな言い訳を並べると果南にそうバツサリ言い切られてしまう。まあ実際にウルトラマンに変身していないときにやれと言われてもできないのだが…。嫌々腕立て伏せをやってみせる。

「それで、次のラブライブっていつなの？」

「多分、来年の春だと思うけど…」

「ブツブツですわ！」

そう言えばと曜が聞くと、梨子がそう答えたのだがダイヤがそう言って顔を目の前に持つてくる。

「その前に、やるべきことがありますわよ」

そう得意気に言うダイヤに対して、心当たりが全くないといった曜と梨子だったが…。

「忘れたんですの？入学希望者を増やすのでしよう？」

「学校説明会…」

「あ、そうだ」

もう当日まであまり日はないことも予告されていた学校説明会の事を思い出した梨子と曜に鞠莉も

「オフコース！既に予告済みだよ」

そう告げるのだった。

「折角の機会です。そこに集まる見学者たちにライブを披露して、学校の魅力を伝えるのですわ！」

「それいい！」

ダイヤがそう得意気に宣言すると、そんな賛成の声がすぐさま飛び込んできた。たった今屋上へ上がってきた千歌によるものだった。

確かに学校説明会でもライブを行うことは、Aqoursの魅力をしてして学校の魅力をアピールする絶好の機会だ。そしてそれが、廃校を阻止するのに効果的だと全員が思っていた。

そして時を同じくして、地球に新たな脅威が迫っていることなどこの時は誰も想像すらしていなかった。

「そっか、秋になったら終バス早くなっちゃうんだね」

練習後バス停で時刻表を見ながら曜はそう言って肩を落とす。

「日が暮れるのも早くなっちゃうから、放課後の練習時間も短くなっちゃうかも…」

「説明会まで日がありませんわよ？練習時間は本気で考えないと…」

その曜のつぶやきに、黒澤姉妹も苦い表情を浮かべながらそう返した。屋上で練習している以上、日が暮れてしまっただけで危なくて練習などできない。練習時間を確保するためには、何か手を打つ必要があるのだ。

「じゃあ朝、二時間早く集合にしようか？」

果南がそう提案すると、全員が首をかしげて唸るがすぐに他の案が上がってくることは無かった。

「じゃ、決まりね」

「早過ぎるわよ!!」

すぐ他の意見がないなら決定と、豪快に決める果南を善子がそう言って引き留める。実際始発に乗ってもそんな時間に集合はできないのだが…。

「それと善子ちゃん、もう少し早く帰ってくるように言われてるんではしょっ…」

「ギクウ…どっとうしてそれを!?!」

梨子にそう指摘された善子は、そう言って明らかに動揺して見せた。どうやら本当に言われているらしいし、梨子に知られているのは想定外だったようだ。

「うちの母親が、ラブライブの時に善子ちゃんのお母さんと色々話したらしくて。なんか部屋にも入れてもらえない、って」

「だ、だからヨハネは墮天使なので…あくまで母親は仮の同居人というか…」

よほど自身にとって不都合な事らしく、そう言って誤魔化そうとする善子の顔は真つ青だった。

「お母さんってどんな人なの？」

ここで千歌がそう言って会話に入ってくる。確かに善子の母親に会ったことはない、実際どんな人物なのか興味はある。

「学校の先生なんだって」

そう笑顔で教える梨子に、花丸とルビィ、遙は悪戯っぽい笑みを善子に向ける。

「「へえ〜」」

「善子ちゃん、3歳まで哺乳瓶離さなかったから、お母さん大へー」

「うにやあああああああ!!」

これ以上暴露されてしまったのはたまったものではない善子の絶叫で、梨子のその続きの言葉はかき消されるが、一同からは笑い声が上がった。

「まって、沼津からこっちに来るバスは遅くまであるのかな？」

ここでふと疑問に思ったので、梨子が元々こっちの住民であるみんなにそう聞く。

「え〜と…、仕事帰りの人がいるから…」

そこまで呟いた千歌が何か思いついたらしく、ぱあつと表情を明るくすると。

「向こうで練習すればいいんだ！」

学校前から沼津の方面への終バスの時間は早まるが、沼津から内浦へのバスの時間は変わらないらしい。それなら確かに名案だ。

「それなら時間も確保できるぞらー！」

「ルビィ賛成！」

「そうだね、鞠莉は？」

集合時間を早めようとした果南もこの提案には意義は無いらしく、鞠莉はどう思うか問いかけるが若干上の空だった鞠莉は「え？」と上ずった声を出すですがすぐ普段の調子に戻ると。

「ノープロブレム！」

そう笑顔で返すのだった。

「よし！じゃあ決まり!!」

「練習場所は、また明日そうだんして決めましょうか?」

反対意見もなく、概ね好評だったので千歌がそう言って遙はもうバスの時間なので練習場所の相談は明日にしよう。と提案した。

「新たなリトルデーモン達を増やそうぞ!」

「善子ちゃん張り切り過ぎずら」

「ヨハネ!」

そんな普段通りなみんなと談笑していたのだが、鞠莉だけは物憂げな顔で海を眺めていた。そしてそれに気が付いていたのは、果南だけだった。

そんな時だった。街中に警報が鳴り響いた。

「何だ!？」

「何が起こってるの?」

突然の事態にさっきまで談笑していた面々の表情に緊張が走る。地区予選以来、一度も怪獣が現れることは無かった。しかし今回の警報で再び怪獣が現れるのはほぼ間違いない、そうここにいる全員が思った。

その時空から巨大な黒曜石のような物体が飛来した。そしてそれを追うように見たことのない戦闘機が3機、同じく空から舞い降りてきたのだった。

「何?あの戦闘機?」

「完成したんだ、ファイターが」

『ファイター』遙は現れた戦闘機をそう呼んだのだ。3機のうち1つは青とシルバー、残りの2機は赤とシルバーに塗装されていて、青いのとはシルエットも違うが、一番の違いは両翼にミサイルポッドが仕込まれているのだ。その戦闘機たちは黒曜石の結晶体の上を旋回し

ており、この巨大な物体がどのようなものなのか警戒しているようだった。

「ねえ遙、あの戦闘機の事知ってるの？」

学校の方へ避難した一同は、校舎には入らず街の様子を見ていると、梨子が遙にそう聞いた。この中で唯一戦闘機の事を知っているそぶりを見せたのは遙だけなのだから。

「開発コード『ファイター』アルケミースターズが新しく開発した、『リパルサーリフト』っていう反陽子浮遊システムを搭載した今までの飛行機の常識を覆した戦闘機だよ」

「何…そのリパルサーなんてかって…？」

聞きなれない単語が飛び出して、千歌達は困惑させてしまったので遙は「ええ〜つと」と頭をかきながら簡潔な説明を考えると。

「ヘリコプターみたいなホバリングと旋回もできて、宇宙も飛べる世界一速い戦闘機…かな？まあ僕はリパルサーリフトの開発も簡単な部分をちよつと手伝っただけだけど…」

そう語ると「だから夏休みパソコンばかり触ってたんだ」と一定の納得は得られたが、やはり普段接することのない専門知識なども飛び出したので、やはり難しそうな顔を浮かべるのだった。

そしてその時、巨大な黒曜石の結晶体が砕け散ると、中から白いコツヴが現れたのだった。

コツヴの出現を確認したとたん、3機のファイターはコツヴの周囲を飛び回ると、レーザー機銃やミサイルで攻撃を始める。しかし、従来の戦闘機の攻撃と比較すれば効果はあるようだが、それでも倒すにはまだほど遠い。

「だめだ、あれじゃファイターの特性を生かしきれない」

遙はその戦闘の様子を見るとそう呟いた。従来とは違う飛び方ができるとはいえ、元々の戦闘機の乗り方が恐らく抜けきれないのだ。無理もない、まだ完成して1か月も経っていないはずなのに実践投入されたのだから。

そしてコツヴの放った光弾によって赤いファイター2機が撃墜さ

れてしまった。そして青いファイターが1機で奮戦するも弾薬が付きってしまったのか、一度戦線を離脱してしまった。

「あの怪獣、春に現れたのと同じ…」

梨子がコツヴをみてそう呟いた。思い返せばあの時全てが始まったのだ。あの時感じた怪獣という、未知の存在への恐怖を思い出ししてしまう。

「大丈夫、僕がやっつける」

そう言って遥は皆を安心させようとほほ笑む。

「気を付けてね」

「解ってる、でも絶対負けないから」

そう言って遥は学校の敷地外に飛び出すと、周りに誰もいないことを確認しエスプレンドーの光を解き放った。

そして空が赤く輝くと、コツヴに立ちはだかるようにウルトラマンガイアが土砂を巻き上げながら着地した。

「デヤッ！」

コツヴに対してガイアは駆け出して肉薄すると、その胴体に蹴りを入れる。反撃にコツヴが両腕の鎌を振り上げるが、それをガイアは腕を蹴り飛ばしてそれを躲す。

今度は光弾を発射しガイアを攻撃するが、それをギリギリで回避しながら距離を詰めるとコツヴの頭を掴んで、顔面に膝蹴りをかまし、的確にダメージを積み上げていく。

そしてガイアはコツヴの頭上を飛び越えると尻尾を掴み、ジャイアントスイングで市街地から離れた位置に投げ飛ばす。

そして右腕を突き出した後、それを左手首に添え、ゆっくりを右腕を縦になるように動かして左腕を右腕に抱えるようにし字を組むと必殺の熱線。クアンタムストリームを放つ。

そしてその一撃をまともに受けたコツヴは木っ端微塵に吹き飛ばすのだった。

「シュワッ！」

コツヴを倒したことを確認したガイアはそのまま大空へと飛び去って行くのだった。

「ふう…」

学校の敷地の外の人気のない場所で変身を解いた遥は、そう息を吐いた。

「遥くん！」

自信を呼ぶ声がし、そちらを振り返るとそこには花丸をはじめとした、Aqoursのみんなが駆け寄ってきた。

「よかった、怪我して無くて」

「ごめんね、でも大丈夫」

そうほっとしたような様子のみんなにそう言って笑って見せた。

「でもあの戦闘機、一体どこが作ったんだろう…」

その秘密を遥は知っていたが、まだそれを明かすことを禁じられていたのでその事を皆に伝えることはできなかった。

その夜、ダニエルと通話を行ったのだがやはりまだファイターのことは一般に公表されるまで詳しいことは口外禁止だと言われてしまったのだった。

そして口が裂けてもリパルサーリフトの事をうっかり言ってしまったのは言える訳もないのだった。

28話 魂の激突！／普通怪獣の叫び

「千歌ちゃん、何かいいところあった？」

大きなあくびをかみ殺している千歌に、曜がそう問いかける。

「なかなかないんだよね〜…」

次の日の朝、部室の集合して新しい練習場所の候補をみんなで話し合おうということになったのはいいが、なかなか難しい。

「ずら丸のウチお寺でしょ？大広間とかないの？」

「ウチのお寺で本当にいいずらかああ？」

そんな様子を見て、善子がそう花丸に話を振るが、パンを食べていた花丸が大げさな言い方をして驚かすと、善子とルビィは目に見えて怯えるような反応を取った。

「あと、うちは遠いから無理すら」

「花丸ちゃん、ほっぺにパンついてるよ」

そんな3人の様子を隣で見ていた遙はそう言っただけで自分の頬をつついて大体の位置を合図して教える。

「え？ほんとだ…」

「だったら善子ちゃんのお家のほうが…」

そう言っただけで食べかすを落とす花丸から善子へ視線を移したルビィがそう言っただけでみるみる。

「どこに…そんなスペースがあるのよ!!」

なんて叫びだして立ち上がるが、正直何を想像したのかはよくわからないが前に全員で押し掛けた時の事を思い返すと、9人が練習するスペースなんて普通マンションにはないだろう。

もともと、善子の反応からすると純粋に墮天使グッズが散乱しているからなのだろうが…。

「あれ？そういえばダイヤさん達は？」

「さっきまでいたはずなんです…」

曜が最初に3年生の姿が見えないことに気が付いた。結局暫くして戻ってきたのだが、この後とんでもない現実と直面することになってしまっていた。

遥は、昼休みクラスの残りの2人の男子生徒に絡まれていた。

「なあ桜内、お前もプロレス同好会入ってくれよ」

「そうだよ、助っ人でもいいからさ。もう3年生引退しちゃって人が居なくて練習にも困ってるんだよ」

そう言ってきたのは、橋本と大和という背丈も梨子とほとんど変わらない遥と違って170前後ある男子生徒だ。

「え〜？勘弁してよ…」

苦い表情をして嫌がる遥だったが、「そこをなんとか！」なんて言っ
て頼み込まれてしまう。

「それにお前も体力作りしてるんだろ？この前筋トレの本とか読んでたじゃん」

「それにどうしても勝ちたい相手がいるんだ、協力してくれよ」

「それは純粹に体力つけようと思っ
てやってるだけ、それにマネージャーの
仕事もあるし」

そう言っ
て断ったのだった。正直この2人はこの地
にきて初めての男の友達だったし、できる事なら協力はしたい。でも遥のもう一つの顔、『ガイア』としてその望みを叶えることに引け目を感じていたのも事実だ。

「スクールアイドルだっけ？お前の姉ちゃん美人だよな」

「大和、お前姉さんに手をだしたら二度と課題写させないからな」

大和は背は高いが、どちらかと言うと細めで顔も良いのだがナンパっぽい所があるのだが、性格はいいので女子受けはいい。だが姉の

事を話題に出した瞬間遥は機嫌が悪くなる。

「いやいや！さすがにそんな事しねえから」

「この前フラれたとかわめいてたからだろ」

そう言っつて高橋はそんな大和の様子を見て笑っていた。

「ま、無理強いしても仕方ないしな。気が向いたら来てくれよ」

そう言っつて2人は部活のミーティングがあるらしく部室の方へ行っつてしまった。

一学期の時点で唯一地元出身でない遥はすぐさま勧誘を受けていたのだが、男子にしては小柄な体系も幸いして筋トレなどのアドバイスは受けても練習に混ざったりすることは無かったのだが、三年生引退を受けて再び勧誘を受けているという訳だ。

「悪いけど僕はスポーツでも人と戦いたくないんだ…」

2人が見えなくなったところで一人そう呟く遥だったが、そこで遥のスマホが鳴った。

「これっつて…」

画面をみた遥は、送られてきたメールの内容に驚いたのだった。

「初陣でファイターSG二機が墜落、SSも弾薬切れでコックピットを倒すには至らず…」

「やはり完成して間もなく操縦に慣れていない機体でのミッションは困難かと」

そんな討論を行っている男性の声が二つ。ここは根源的破滅招来体に対して結成された組織の指令室なのだが、ここにきてようやく対抗し得る兵器がようやくロールアウトされたのだが、いきなりの作戦で苦汁を舐めさせられた。

「それと、リパルサーリフトの設計に関わったという少年からここへ

連絡もきていました」

「リパルサーリフトの？」

「ええ、どう対応しましょうか？」

「我々にも未知の領域の兵器だ。アドバイザーは貴重だ」

「そう灰色の制服を着た男性が、青い制服の男性に告げる。おそらく彼が上官なのだろう。」

「解りました、またその少年とコンタクトを取ってみます」

「そういつて男性は指令室を出ていく。」

「えっと……ここで良いんだよね？」

放課後、遙はメールに指定されていた場所で待機していた。

遙は先日のコツヴとの戦闘の後、ファイターの戦闘について意見があったのでそれを所持する組織にメールを送っていたのだが、昼休みその返事が来ていたのだ。

放課後、本来なら新しい練習場所の候補の場所へ行こうと言われたのだが、これを断って学校近くで指定された場所で待っていたのだ。すると一台の普通車が遙の前に止まると、中から青い制服を着た30代中頃程の男性が降りてきた。

「桜内遥君だね？待たせてすまない、XIG（シグ）の堤だ」

「初めまして、桜内遥です。すいません、わざわざ来ていただいたて」
男性の持つオーラのようなものを感じ取った遙は若干恐縮気味に頭を下げる。

「いや、我々にとつても未知の領域のマシンだからね、開発に関わった人間の客観的な視点でのアドバイスは貴重だ。是非聞かせてほしい」
「そう堤と名乗った男性は告げると、「詳しい話は基地で」と言われ車に同乗しファイターを格納されている基地へと車を走らせた。」

「ここが我々の基地、ジオベースだ」

市街地からかなり外れた場所にその基地はあった。最も怪物が現れる頻度が高かったのが沼津周辺だったこともあり、学校からそこまで時間はかからなかった。

「いいんですか？ 民間人の僕が入って？」

偉そうにファイターの戦闘に口を出した遥だったが、いざ到着してみるとやはりその場所から感じ取れる『非日常』の雰囲気は気おされてしまう。

「本来はそうなんだが、実物を見ながらの説明が欲しくてね。基地の中での事を口外しないでくれれば大丈夫だ」

そう告げられ、それならばと遥も堤の後に付いて基地―ジオベースの中へと踏み込んでいく。

「ファイター2（ツー）、北田が墜落したのはターゲットの前方……」

格納庫近くのブリーフィングルームへ案内され、中に入るとパイロットらしき3人がミーティングを行っていた。そして堤が入ってくるのに気が付くと、中断して敬礼をする。

「初陣の失態は、次回必ず挽回します！……そちらは？」

そう先程までしゃべっていた人物が告げる。と、その後遥に気が付いたのか一瞬不思議そうな表情をする」

「彼は桜内遥、ファイターの操縦にアドバイスがあるそうだ」

「学生が……ですか？」

堤にそう遥の事を紹介された3人は、明らかに不機嫌そうな表情になる。

「パイロット経験のないものが、防衛隊のトップガンだった我々にアドバイスですか……？」

ここで引き下がっては来た意味がない。そう思った遥は真剣な表情で頷くのだった。

「ファイターは三軸のモーメントを持ちます。普通の戦闘機と同じで

ジェットで飛行していますが、浮力をもたらすのはリパルサーリフト。だからヘリのように滞空して攻撃することができるとです」

飛行訓練用のシュミレーターを用いた遙がそう説明しながら画面上の想定敵を撃破していく。

「うまいもんだな」

北田と呼ばれていた隊員がそう言っただけで遙の操縦を褒める。そしてシュミレーションが終了し、遙のスコアが表示されると、何と一位だった。

「ホントに高1かよ、ハイスコアだ！」

もう一人の隊員もそう言っただけで同意する、彼は大河原と言っただけで最初に墜落したファイターのパイロットだった。

「ゲームセンターじゃない！」

そう言っただけでリーダー格の隊員がたしなめると、バツの悪そうな表情を浮かべる。

「アドバイスは貴重だよ、梶尾リーダー」

そんな声と共に別の3人組が入ってきた。

「米田リーダー……」

「チームファルコン……」

その声の主に対してそう呟いた。

「我々にも是非、レクチャー願いたい」

「ファルコンとクロウにも、来ていただくつもりでした」

米田と呼ばれたリーダーの男性はそう続けると、堤はそう返事をす。最初に出会った3人がチームライトニング。そして今現れたチームファルコン、そしてもう1チーム存在するらしい。

暫くシュミレーターは稼働していたが急に動かなくなる。

「どうした？ 遙君、大丈夫か？」

シュミレーターのコックピットを開き、堤がそう声をかけると遙はぐったりした様子で座り込んでいた。

「いえ、Gがきつくて……やっぱり経験のない僕に操縦は無理ですね」

そう苦笑いを浮かべる遙だった。

一方その頃、A q o u r sのメンバーは沼津にあるとある複合施設のあるビル内にある練習用スタジオのような一室に来ていた。

「パパの知り合いが借りてる場所なんだけど、しばらく使わないからって」

この場所を提案した曜がそう告げると、千歌は「流石船長！」などと感心したような声を上げるが「関係ないけどね…」と苦笑いを浮かべられる。

「広〜い！」

「ここに鏡もありますし〜！」

屋上と違って室内というのもあり余計に広く感じる。そしてルビイがカーテンの向こうに鏡を発見すると…。

「いざー！鏡面世界へ!!」

そう言って鏡へ向かって駆け出そうとする善子を、花丸がチョップで止める。

「やめるぞら」

「ひゃっはい…」

なんてやり取りをしているが、3年生3人の表情は暗い。

「じゃあさ、皆で一度フォーメーションを確認しない？」

千歌達が談笑している中、曜がそう提案する。

「ちよつと待って、その前に話があるんだ」

しかし、果南はそう言ってそれを制した。ダイヤも鞠莉も表情は暗く、いい知らせではないことは明らかだった。

「実は…学校説明会は、中止になるの…」

そう告げたのは鞠莉だった。「え…？」と千歌も突然の知らせに反応しきれずにいた。

「どういう意味？」

「そのままの意味だよ、説明会は中止。浦の星は正式に来年度の募集をやめる」

梨子も意味が解らないといった様子で聞き返すと、果南は淡々とそう告げる。

「いきなり過ぎない？」

「そうすら、まだ二学期も始まったばかり…」

その言葉に善子と花丸がそう言い返すが、それにはダイヤが答える。

「生徒からすればそうかもしれません。しかし、学校側は二年前から統合を模索していたのですわ」

「鞠莉が頑張ってお父さんを説得して、先延ばしにしてもらっていたの」

果南がそう続ける、もうどうしようもないとでも言いたげに。

「でも、入学希望者は増えてるんでしょ？ゼロだったのが10になって、これからもっと増える。って…」

「勿論それは言ったわ…でも、それだけで決定を覆す理由には…」

曜の言い分はもっともだった、やっと希望者が増え始めたのにやめてしまうなんて…。けれど鞠莉も辛そうにそう告げるが、遮るように千歌が鞠莉に詰め寄る。

「鞠莉ちゃん、どこ？」

「チカっち？」

「私が話す！」

鞠莉の答えを待たずして、歌は駆け出した。

「千歌ちゃん!？」

「待って、アメリカよ？」

曜と梨子がそう言って千歌を呼び止めようとするが、千歌は部屋を飛び出して駆け出した。

「いてっ」

「きやつ…」

そこで、皆の居場所を最初に聞いておいたことでみんなと合流すべくここまで来た遙に激突してしまった。

「遙!?!」

「千歌ちゃん、大丈夫!?!」

部屋を飛び出すや否や激突事故が起こったことで、心配して皆飛び出してくる。

「いてて…って千歌さん、大丈夫ですか!?!」

起き上がった遙は相手が千歌だったこともあり遙は慌てて千歌に駆け寄るが、千歌は遙の肩を掴むと…。

「遙君! 私と付き合って!!」

「え? えええええ!?!」

突然のカミングアウトに遙は顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。

「千歌ちゃん!?!」

「お願い、今すぐ私をアメリカに連れて行って!」

「アメリカ?」

動揺する皆をよそにそう続ける千歌に、遙だけは状況が呑み込めなかつた。

「あのね遙…」

梨子が事情を説明すると、遙は「なるほど…」と頷くところこう答えた。

「ダメです、ウルトラマンの力はその為に使うべきじゃない」

「どうして!?! 遙君は何とも思わないの?」

千歌はそう言って食い下がるが、遙はとても辛そうな表情を浮かべると。

「そんな訳ないじゃないですか…でも違うんです、ウルトラマンの力を使うこととは…」

「遙君…」

千歌もそれ以上は言わなかつた。

「チカつち…ごめんね?」

鞠莉はそう言って笑って見せるが、強がっている笑顔なのは目に見えていた。

「違う…そんなんじゃない。そんなんじゃない…」

千歌はそれ以上の言葉は出てこなかった。何も言えなかったのだ、この場にいた誰もが感情を整理できなかった。

結局その日は練習どころではなくなくなってしまったのだが、すぐに帰る気にもなれず解散する頃にはすっかり日が沈んでしまっていた。

「先輩…」

遥は千歌に何か声をかけたかったが、やはり言葉が出てこない。気まずい雰囲気の中バスに乗って梨子と千歌と3人で家に向かっていった。

「千歌ちゃん、また明日」

「先輩、すみませんでした」

「ううん、わたしの方こそごめん。また明日ね」

そう言って十千万の前で千歌と別れようとした。その時だった――

「うわああああああ！」

急に叫び声がこの先の道から聞こえてきた。それに反応した遥が真っ先に声の方向へ駆け出すと、千歌と梨子もそれに続く。

「何あれ…」

そこにいたものは、中年の男性に襲い掛かる人型の狼のような異形のそんざいだった。異形は遥たちに気が付くと「グルルル…」と威嚇するよううめき声をあげると、なんととびかかってきた。

「キャアッ！」

「やめろ！」

千歌と梨子が思わず目を伏せると、遥は逆に異形に向かっていき梨子たちを庇う。

「遥（くん）!?!」

千歌達の目の前で異形と戦う遥を、ただ見ていることしかできなかった。

「くはッ！」

しかし奮戦虚しく異形に投げ飛ばされた遥がコンクリ壁に背中を

打ち付け、息が詰まる。

「フウウウウウ…」

異形は千歌と梨子に振り向くと歩み寄っていく。

「やめ…ろ…」

遥は異形に手を伸ばすがその手は届かない。今に彼女たちにとびかかるうとしたその時だった。黄色い閃光が闇夜を駆け抜け、異形の身体を貫いた。

そして異形の身体は跡形もなく消滅した。

「大丈夫か？」

その閃光を放った主からそう声が飛ぶ。声の正体は梶尾だった。

「あなたは…」

「ガッツは認めるがこういう時は逃げろ。勇敢と無謀は違う」

そう言つて遥に手を差し伸べると立ち上がらせる。

「見て！あれ」

そう梨子が指さした方には光る物体が浮遊していた。すかさず銃を構える梶尾だったが、その物体は不規則は軌道を描いてそのまま夜空に消えてしまった。

「最近この辺で化け物を見たって通報があつてな、見回りをしてたんだが本当らしい…学生は暗くなる前に家に帰れ、いつも助けてやれるわけじゃない」

そう厳しく言われたが、家までしつかりと送り届けてくれた。

次の日の朝礼で全校生徒にも説明会が中止の連絡がされ、せつかく作った説明会のポスター等はすべて剥がされることになった。

そしてこのあたりで不審者が出るようになったので全生徒は日没までに家に帰るように。とも言われた。どのみち誰も練習をする気にもなれず、放課後は集まることなく解散となった。

放課後そのまま下校した遥は、千歌と梨子が浜辺にいるのに気が付いた。

「私ね、廃校が決まったのは残念だけど…ここまで頑張ってたって良かったって思ってる。東京と違ってこんな小さな海辺の町の私達がここまでよくやってこれた。って」

浜辺に座り込む千歌の前に立ってそう告げる梨子は背中を向けていて、その表情は見えない。

「それ、本気で言ってる？本気で言ってるんだったらわたし、梨子ちゃんの事…軽蔑する」

2人に声をかけようと近寄った遥だったが、そのやり取りを聞いてしまい、はつと息を呑んだ。姉はどうしてこんな事を言うのか、それを受けた千歌もどうして今までの関係を壊すような事を言うのか、遥は解らなかつた。

「ガオーツッ！」

急に梨子が千歌の目の前に顔を近づけて叫ぶ。

「ピードカーン！普通怪獣りこっぴーだぞくくくええ！梨子ちゃんビーム!!」

などと突然怪獣ごっこを始めた梨子は空に向けて腕を十字に組む。

「こんなんだっけ？」

それを見て千歌はくすつとふきだした。

「やつと笑った…私だって、A q o u r s のメンバーよ？皆と一緒に歌おう…曲も一杯作ろう、そう思ってた。いいなんて思うわけない…これでいいなんて…」

「梨子ちゃん…」

「どうすればいいか解らないの…どうすれば…」

そう震える声で呟いた梨子はその場に座り込んでしまう。その答えは自分で見つけるしかない、だって誰も正解なんて用意できないのだから…。

「グルルルル…」

「ッ!？」

突如聞こえたうめき声に振り返ると昨夜の異形がこちらを見据え

て立っていた。

「千歌先輩！姉さん！逃げて！」

そう叫んで遥は異形に立ちほだかり、盾になる。するとポケットに忍ばせたエスプレンダーが淡く輝き、ガイアの光は遥に力を授ける。その力に強化された身体能力で飛び蹴りを食らわせる。

「キャウウン…」

そう甲高い悲鳴をあげて異形はよろけ、逃げだした。

「待てッ！」

それを追って遥も駆け出すが、常人を遥かに凌駕した跳躍力で森の中へ逃げ込まれ追いつけない。だがその異形が逃げた先に今度は昨夜の飛行体が現れ、異形へなにやら光を浴びせるとなんとその異形は巨大化し、怪獣となった。

「ガイア！」

突然現れた怪獣に騒ぎになるが遥はすぐさまその身をガイアへと変えると、光と共に宙に浮かびそのままの勢いで飛び蹴りを食らわせた。

「ジユワツ！」

そして起き上がろうとする怪獣に対してファイティングポーズをとる。

「遥くん…」

異形を追いかけた先で現れた謎の飛行物体に怪獣、そしてガイアを見て千歌は遥の身を案じる。

ガイアは怪獣に対して駆け寄ると、蹴りや拳で攻めたてる。そして怪獣から反撃の攻撃を受けるが、逆に腕を掴んで受け流して背後に回り込むとバックドロップをかます。ガイアが圧倒的だと誰もが思った。しかし――

「ウワァー！」

円盤がガイアの背後に回り込むとガイアの背にビームを放ち攻撃をする。これには堪らずガイアは仰け反るが、今度はそこを怪獣に攻撃を受けその巨体は地に伏せる。

「遥（くん）！」

起き上がれば円盤に攻撃され、怪獣によって地に伏されるガイア―
遙を見ていることしかできない。その時だった。

『ファイター各機、ウルトラマンガイアを援護せよ!』

「了解!この前の借りは返すぜ」

三機のファイターが現れ円盤とのドッグファイトに発展する。

すると円盤からの攻撃が止んだことでガイアは怪獣を攻撃し距離
をとり、ヴァージョンアップポーズをとり、光の中でスプリーム・
ヴァージョンへとその身を変える。

「ガイアが輝いてる…」

そしてそのまま怪獣へと肉迫するが、口から炎を吐いてガイアを牽
制するがガイアはバリアーでそれを防ぐと怪獣に駆け寄り投げ飛ば
す。

そして起き上がりにフォトンストリームを放ち怪獣を木端微塵に
吹き飛ばすのだった。

そして怪獣が撃破されたのを見た円盤は逃走しようとファイター
を振り切ろうとする。

「逃がすわけにはいかないんでねッ!北田、大河原!一気に行くぞ!!」

「了解」

梶尾の声で、三機のファイターは散開して囲い込むようにして円盤
にミサイルの集中砲火を浴びせて撃墜する。

「借りは返したぜ」

そうガイアと目が合った梶尾はそう告げると、前期帰投するのだっ
た。

次の日の朝、何となく早く目が覚めた遙は始発で学校に向かおうと

すると梨子は既にバス停にいた。

「姉さん早いね？」

「遥だって、どうして？」

「なんか、怪獣が出そうだからさ」

そう言つて笑つてみせると、梨子も「ホントにね」と言つて笑う。そして校庭に入ると、千歌を除く全員が集まっていた。そんな時。

「がおー！ツツ!!」

そんな叫び声とともに千歌が校庭に駆け込んできた。

「起こして見せる！絶対に奇跡を！それまで泣かない、泣くもんか！」

それは千歌の決意だった。まだ自分たちにできることがあるはず。最後の瞬間まで諦めないどんなにピンチの連続であつたとしても…。

「やっぱり来た」

「曜ちゃん…どうして？」

そこで曜が千歌に声をかける、すると千歌は不思議そうにそう聞くが。「解らない、けどほら」そう言つて曜が視線を逸らすとその先には皆がいる。

「気が付いたらきてた」

「何かよくわかんないけどね」

梨子と曜がそう告げる。

「そう？わたしはわかるよ」

「きつと諦めたくないんだよ」

果南が言いかけた言葉を、千歌が紡ぐ。

「諦めたくない、鞠莉ちゃん頑張つてたのはわかる。でもわたしもみんなもまだ何もしてないんだよ」

まだ何もしてない。そう言うには無理があるほど色んなことをしてきた。でもまだこの先の可能性を考えれば何もしてないと変わりはしない。そう思った。

「無駄かもしれない…けど、最後までがんばりたい！諦めたくない！ほんの少し見えた輝きを探したい、見つけたい！」

「諦めが悪いからね、千歌は昔から」

「それは果南さんも一緒ですわ」

「お姉ちゃんも！」

「ええ!？」

果南がそう言つて冷やかすとダイヤが、ルビイがと連鎖する。そんな光景に思わず笑みがこぼれる。

「みんなはどう？」

「いいんじゃない？やるからには精一杯あがこうよ」

千歌の問いかけに果南はそう答える。

「やるからには奇跡を！」

「奇跡を！」

ダイヤにルビイもそう続く。そして皆「奇跡を！」とその言葉は紡がれていく。

「起こそう奇跡を！あがこう精一杯！全身全霊、最後の最後まで!!」

29話 1年と3年と／海は何も答ええない

『各国の連携により、各国を防衛するためにG・U・A・R・D。（対根源的破滅地球防衛連合）が極秘に結成され。これまで極秘にされていたのは、無用な混乱を防ぐためであり、更に衛星軌道上に対へ空間レーザーシステムを配備したことで、宇宙からの脅威から皆様を護る為に…』

TVではこの前現れた戦闘機についての会見が行われていた。X IGはその中でもエキスパートで結成された組織なのだ。

G・U・A・R・Dは根源的破滅地球防衛連合の略で、クリシスの予測の時点から時間はかかったが各国の連携によって結成された組織なのだ。

「でもいきなりあんなの飛ばしたら騒ぎにもなるわよね…」

そう呟いたのは母親だった。

「でもあの飛行機遙も関わったんでしょ？」

「え？いやまああ…浮くための装置造るのにね…」

朝ニュースを観ながら朝食をとっている中、突然そう話を梨子に振られた遙はそう返した。

「アルケミースターズが関わっているのね…」

そう呟いたのは母親だった。遙がアルケミースターズと一緒に色々やっていることは知っていたが、ファイターの事までは伝えていなかったのだ。

「でもこれで怪獣からの被害が少なくなるだろうし、いいことなんじゃない？」

「だといいいけれど…」

梨子がそう言ったが、母親はそう何か含みのある言い方しかしなかった。

時を同じくして、淡島の一角にポツンとある海に沿いに立つ墓前に立っている人がいた。

『湊麗華』そう書かれた墓石の前に立っていたのは、黒いシャツに黒のズボンといった出で立ちの青年だった。そう、湊博樹だった。

博樹はその墓前に花束を添える。ここに眠っているのは博樹が幼くして失った母親のお墓だった。

「お母さん、オレは全てを失った……。なのにまだ奴等は生き残っている。アグルの力はもう戻ってこない……。地球はもうオレに語り掛けてはくれない……。だがまだ人間として、オレにもやれることがあるはずだ。そうだろ……？」

博樹は遙にアグルの力を授け、ゾーリムが撃破された後も地球を襲撃する根源的破滅招来体に対抗しようと一人きりで行動していた。そしてその間にここ淡島に戻り、アグルの光を手にした海に飛び込むも何も得ることはできなかつた。その事を母の墓前で呟くも、当然返事などあるはずもない。

ふっ。と自嘲気味に笑うと、博樹はその場を後にするのだった。人間としてやれることを、するために。

墓前には白いユリの花束が一つだけ海風に晒されていた。

そしてその日、ジオベースに侵入し、対空間レーザーシステムのコンピュータを書き換えようとした人物がいたことが発覚するのだった。

「まさか予備予選がこんなに早くにあるなんて思ってたんだもん…」

その日、部室で千歌がそう言って頭を抱えていた。

結論から言うと、学校説明会の中止は撤回された。鞠莉が父親に「何人入学希望者を集めれば統廃合を撤回してくれる？」その問いへの答えは100人だった。

説明会を行って、年末までに入学希望者が100人を超えれば、浦の星は来年度も生徒を募集する。そうならばみんなこの学校で高校卒業を迎えられる。

「出場グループが多いですからね。この地区の予備予選は来月始め、場所は特設ステージ」

そうダイヤが答える。もう1か月を切っている、だが足掻くと決めた以上そうするしかない。

「有象の魑魅魍魎が集う宴ッ！」

その隣で善子は意味の解らないことを口走ってはしゃいでいる。

「でも、どうして早いと困るずら？」

「それは…その…」

「歌詞を作らなきゃならないからでしょ」

花丸が不思議そうに聞くと、千歌は答えあぐねるが梨子が代わりに答える。

「なるほど」

そう鞠莉は納得する、学校説明会も新曲でいこう。そう説明会が行われることが確定した時にみんなで決めたのだが、説明会と予備予選の間はわずか1週間、2つの曲を同時に進めなければならないのだ。ラブライブで発表する曲は、未発表のものでもなければならぬ。その規定の為、ステージのたびに曲を作る必要があるのだ。

「わたしはばかりズルい！」

「梨子ちゃんも2曲作るの大変って言ってたよ」

思わずそう不満を叫ぶ千歌に、曜がそう言ってプレッシャーをかける。千歌の歌詞作りが遅ければ、その分梨子が短い期間で曲を仕上げなければならなくなるのだ。

「それを言ったら曜ちゃんも」

「9人分だからね…」

梨子にそう言われて曜も苦笑しながら答える。曲が増えればそれに合わせた衣装も必要になる。合わせて18着と考えると曜の負担もかなり大きいものになる。

「厳しいよ…ラブライブ…」

「それを乗り越えたものだけが、頂点からの景色を見ることができるとはいいですね」

千歌の弱音も止まらないが、ダイヤはそう言ってもすぐ曲ができる訳でもない。

「まあでも、このまま千歌たちに任せっぱなしっていうのもね」

「じゃあ果南、久しぶりに作詞やってみる？」

果南が千歌の様子をみてそう言うのと、鞠莉が食いついてくる。

「い、いや…わたしはちょっと…」

「前は作ってたじゃない」

「それを言ったら鞠莉だって曲作ってたじゃん」

そう言っただけで言い合いになる。すると梨子が「じゃあ衣装は？」と聞いた。

「まあそれは私と…」

そう言っただけでダイヤがルビィに視線を向ける。

「そっかルビィちゃん裁縫得意だもんね」

すると曜は納得したように頷く。

「得意っていうか…」

そう言っただけで謙遜するルビィだったが、「これもルビィちゃんが作ってくれたはずら！」そう言っただけで花丸がクマやらの刺繍の施されたバックを出す。

そんなやり取りを見ていた鞠莉が立ち上がると、ある提案をする。

「じゃあ二手に分かれてやってみない？チカつちと梨子に曜が説明会用の曲を作っただけで、他のみんなでラブライブの曲を作る。これなら負担も減るでしょ？」

「でも、いきなりラブライブ用の曲なんて…」

その提案に異議を申し立てたのはルビィだった。初めて作る曲が、予備予選のための曲となればプレッシャーになるのも無理はない。「でも、一回ステージに立ってるし案外、チカっち達よりいい曲ができるかもよ?」

「かもではなく、作らなくてはなりませんわね。スクールアイドルの先輩として!」

「おお、言うねえ〜」

鞠莉の言葉に触発されたのか、ダイヤと果南もやる気になると千歌も「それ良い!」と賛同するのだった。

「じゃあどっちがいい曲作るか競争だね!」

そう言って、二手に解れたのであった。

「やっぱり、鞠莉さんの家では作業になりませんわ!」

そう言ったのはダイヤだった。最初は鞠莉の家―即ちホテルオハラで作業をという話になったのだが、結局そこで出されたお茶や菓子に夢中になってしまい、誰一人として作業を進めるに至らなかったの。でこうして黒澤家に移動してきたのだ。

「え〜?」

「あつちがいいはずら」

「もつとポップコーン食べたかったのに!」

そう言っってはぶたれるのは善子と花丸だった。この2人は特に出されたお菓子を気に入っていたので、まあその気持ちも解らなくはないが…

「太るよ…」

そう思わずつぶやいた遙だったが2人に睨まれ「ヒツ…」と声を上げて静かになる。

「やりますわよー!」

そんな感じの3人だったが、ダイヤがそう言って凄むと「へい…」と凄い渋々返事をするのだった。

「ではまず、詩のコンセプトから。ラブライブの予選を突破するには」「はい!」

ダイヤがそう言って仕切って話を進めると、花丸に考えがあるのか打って変わって手を上げる。

「ずばり…『無』すら」

スケッチブックにでかかど『無』とかかかっている。果南は「無?」と首をかしげる。

「そうすら、即ち無というのは全てが無いのではなく、無という状態が有るということすら。それこそまさに無」

「はあ?」

花丸の言っていることが理解できず、ダイヤは「はあ?」と鞠莉も「ワツツ?」と首をかしげている。この場にいる全員が理解できていない。そう思っていたが…

「何それ…かっこいい!」

ここに解っている?人が一人いた。

「善子さん」

花丸は善子にそう視線を送る。

「そも無が有るといふことこそ、私たちが到達できる究極の境地すら」「ヨハネ…無…つまり漆黒の闇、そこから出する力…」

そのやり取りを聞いて察した『ああ、善子も解ってないけど言葉だけ聞いてかっこいいから便乗してるんだな』と。

「それでラブライブに勝てるんですの?」

そうダイヤがもつともな疑問を投げかける。結局の所、難しい事を題材に取り扱っても、それが聴き手の心に響かなければラブライブの舞台で通用しないのだ。

「テーマが難しすぎるよ」

「オフコース！もつとハッピーなのがいいよ！」

果南も鞠莉もそう言った、少なくとも3年生3人からするとこの意見はナシのようだ。

「理解できないとは…」

「不幸ずら…」

ここにいる全員が理解できたとして、ライブで理解されなければ意味はないのだが…。

「そういう鞠莉さんは何かアイディアはありますか？」

そこでダイヤがそう鞠莉に話を振ると、鞠莉は自信たっぷりな表情を浮かべると。

「まっかせなさい！ずっと温めていた、飛びつきりで斬新でハッピーな曲がありマース！」

そういつてスピーカーに自身のスマートフォンを差し込む、まさか既に曲を作っていたのは想定していなかったが、これは期待できそうだった。しかし—

ヘビイメタル風の音楽が、爆音で響き渡る。そんななか鞠莉はごきげんで踊っているし、果南とダイヤはそんな楽曲に慣れているようだった。

「なんかいいね、体を動かしたくなるっていうか」

「確かに、いままでやったことのないジャンルではありますわね」

そんな風に二人からは好評だったのだが、花丸がなんとかプレイヤーの停止ボタンを押す。三年生に対して、一年生はあまりの音量に伸びてしまった。

「ルビィ、こういうの苦手…」

「耳がキーンってする」

「ただの騒音ずら…」

「僕も右に同じ…」

そう言っでぐったりする4人に、3年生3人は、苦笑いを浮かべることができなかった。

一方2年生組は、千歌の家で作詞を行っている最中だった。

「浮かびそうにない?」

「うーん…『輝き』ってことがテーマだとは思っただけど…」

机に突っ伏して頭を抱える千歌に、曜が問いかけると千歌からテーマは決まっているという返事が返ってくる。

「『輝き』ねえ…」

梨子はそう呟く、ずっと『輝き』を追い求めてきた訳だからそれをテーマとして押し出した曲を作ることに異論はないが、やはりそう簡単に思い浮かぶものではない。

「早くしないと果南ちゃん達に先越されちゃうよね…」

「だよね…」

競争しているわけではなくても、やはり先に完成したといわれてしまえば余計にプレッシャーになってしまう。そんな事を気にしているとスマホに1通のメールが届く。

『早く来て』

ただその一言のみのメールだったが、送り主はルビィだった。何かあったに違いない、そう思った3人は事前にどこで作業をするか聞いていたので、黒澤家に急ぐのだった。

「嘘?!もうできた…の?」

ルビィたちがいる部屋に通されて、部屋に駆け込むや否やそう聞いた千歌はその中の惨状に言葉を詰まらせた。

「それでは予備予選は突破できません!」

「じゃあその曲だったら突破できるっていうの?」

そう言ってダイヤに噛み付いたのは善子だった。1年生と3年生で対立して睨み合っているという構図が出来上がっていた。

「まあまあ落ち着いて…」

「遥は黙ってて！」

「ひゃい…」

遥も仲裁に入ろうとしていたが2人に睨まれて大人しくなる。

「花丸の作詞よりマシデース！」

「でも、あの曲はA q o u r sには合わないような…」

そう言い放つ鞠莉にルビイは恐る恐る言い返すが。

「新たなチャレンジこそ、新たなフューチャーを切り開くのデース！」

「さらにそこにお琴を！」

「無の境地すら」

なんて各々が好き勝手言い始めるからさあ大変、ようやく状況が飲み込めた千歌たちも苦笑いを浮かべるしかなかった。

「やはり、一緒に曲を作るといいうのは無理かもしれませんわね…」

「趣味が違いすぎて…」

鞠莉、果南、善子、花丸の4人を部屋に残して玄関前で一旦落ち着いて話を聞いてみるとダイヤとルビイがそう言った。

「いい考えだと思っただけだなあ…」

「もう少し話し合ってみたら？」

そう曜と梨子が言うが、遥も「散々話し合ったけどやっぱり好みがバラバラなんだよね…」と困ったように言う。

「バラバラ…」

そう呟く千歌の隣で曜は「確かに1年生と3年生、全然タイプ違うもんね」と納得した様子だった。

「でも、それを言い訳にしてたらいつまでも纏まらないし…」

「確かに、その通りですわね」

梨子のいう事はもつともだったし、ダイヤもそのことに対しては自覚があった。

「私達は、決定的にコミュニケーションが不足しているのかもしれないわせんわ」

「前から1年生と3年生、あんまり話してなかったもんね」

そう告げるダイヤに曜も同意する。確かに今までずっと2年生を中心に話が纏まっていた中で、急にその2年生を抜いた結果それが明確になってしまったのだ。

「善子ちゃんと花丸ちゃんはあんまり人と話す方じゃないし：果南ちゃんと鞠莉ちゃんもああ見えて人見知りなところがあるし：」

そう千歌がここに居ない4人のことを思い返せば、やはりそうなのかもしれない。

「どうしたもんか…」

「となると…」

頭を悩ます遥をよそに、ダイヤは何か思いついたようで再び3年生と1年生7人で頑張ってみるこことなった。

「ホントに大丈夫かなあ？」

十千万に戻る途中、千歌がそう呟く。自分が2曲準備できれば避けられた事態ではあったので、どうしても気になってしまう。

「でも、この問題は解決しておかないと…」

梨子はそう返す、こればかりはみんなを信じるしかない。それにメンバー全員が個々でもコミュニケーションをとれるようになることも重要だ。

「あれ？あの人…？」

そんなやり取りをしているとき、船着場の前を通りかかった際ある人物が千歌の目に留まる。

「どうしたの？知り合いですか？」

千歌のそんな様子に気が付いた曜がそう聞くと、千歌は「知り合いですって訳じゃないけど…」と歯切れの悪い返事をする。そして梨子も

その人物に気が付いて息をのんだ。

そして千歌はその人物に歩み寄っていくと声をかける。

「無事だったんですね」

「君は確か…」

千歌が見つけた人物、それは湊博樹だった。千歌に声をかけられて振り返った博樹も、千歌の顔を見て名前は知らないので無理もないがどう呼んだらいいか困っているようだった。

「わたしは高海千歌っていいいます、どうして果南ちゃんたちに来てあげなかつたんですか？心配してたんですよ？」

千歌はそう博樹に告げる。あの日、ガイアに光を与えた後行方をくらませた博樹を、特に3年生の3人は酷く心配していた。あんな風にガイアと戦うための人質のように連れ去られた果南も、彼が引き起こしたことで記憶一時期失う事になった鞠莉でさえ。

「事情はダイヤさんや鞠莉ちゃんから聞きました。でももう遥君と協力できない理由なんて無いんでしょ？同じウルトラマンなんですよね」

「あるさ」

千歌の言葉をそう言って跳ね除けた博樹は続ける。

「オレのせいでたくさんの人が傷ついた、オレは心のどこかで自分の力に溺れていた。オレはその償いをしなければならぬ」

「でも、あなたの立場ならみんな同じことをするよ！」

「違うんだよ、実際にすること…仮定の話は」

そう言つて博樹は千歌の隣をすり抜けると、梨子に気が付いたのか彼女の前に立ち止まると。

「君にも悪いことをしたな、悪かった」

そういうと歩み去ろうとする博樹に、千歌は「博樹さん！」と呼びとめようとする。

「遥に会ったら伝えてくれ、今度会った時は手加減するな、じゃないとお前が怪我をすることになる。ってな」

そう言つて今度こそ居なくなつてしまった。

(待つている…遥！)

博樹によって、ある計画が動き出そうとしていた。

30話 雨の音／再会の空

「仲良くなる？」

さつきまでそっぽを向いていた面々が、ダイヤの言葉に目を丸くする。

「そうですね、まずはそこからです」

そう告げるダイヤに、「曲作りは、信頼関係が大事だし」とルビイが補足を入れる。

「ふふっ任せて」

それをきいた果南がそう言って立ち上がる。「何かあるの？」と首をかしげる善子だったが、果南が自信たっぷりに告げる。

「小さいころから知らないこと仲良くなるには…まずは一緒に遊ぶこと！」

そして場所は移り変わって校庭、1年生vs3年生でドッチボールをする事に…。

「何…これ？」

果南が投げたボールが凄まじい速度で善子と花丸の間を駆け抜けると、そう言つて二人は顔を見合わせる。

さすがに制服でやる訳にもいかず、全身体操服に着替えたのだがさすがに女子に混じってドッチボールに興じる気になれなかった遥は外で審判の名目でその光景を眺めていた。

「どうして…」

運動でコミュニケーションを取るといふのはいかにも果南らしいが、インドア派の善子と花丸は完全に顔を引きつらせている。大丈夫なのだろうか？

「行くよ、鞠莉シャイニングー」

技名を言いながら振りかぶる鞠莉を、なんか善子みたいだなって思いながら眺めていると花丸はどうすればいいかおろおろしていると善子が「任せて」と前にでる。

「力を吸収するのが闇―光を消し、無力化して深淵の後方へ引きずり

込む。それこそ――」

「トルネードッ！」

「黒地空焰――こくじくうえん――！」

そう叫び思いっきりボールを投げる鞠莉に対し、両腕を広げる善子だったが、当然何か出る訳でもなく。そのボールは善子の顔面に突き刺さり、跳ね上がったボールが花丸に当たり更に外野にいたルビイにもあたる。

「はい、3年生の勝ち――」

グラウンドに遙の気の抜けた声が響いた。

「やっぱりここが落ち着くずら」

「そうだよね」

再び場所は移り変わり図書室へ、当然ここを提案したのは花丸で、落ち着くという彼女にルビイも同意する。

「光で穢された心が、闇に浄化されていきます！」

なんて言う善子の顔を見たふたりが、「その顔」と思わず笑ってしまった。無理もない、ボールの縫い目がくつきり跡になってしまっただけのだから。

「何よ!? 聖痕よ、ステイグマよ!」

などと言っているが、やはり恥ずかしいのだろう。

「あゝ退屈――」

「そうだよ海行こうよ――」

鞠莉と果南から不満の声が聞こえる。まあこの2人は普段読書をしたりする暇があったら外で体を動かしたいタイプであろうことは想像できていたが…。

「読書というのは一人でももちろん楽しいすら。でも、皆と読めば本の感想も聞けて…」

「寝てるね」

花丸がしゃべっているとこ悪いが、果南と鞠莉は既に耐えられなく

なって寝ていた。これには流石に苦笑いを浮かべるしかない。

「すみません、ふたりは長い話が苦手ですの…」

そう言うダイヤの表情も何となく、呆れているようだった。

一方、博樹は千歌達と遭遇したのは想定外だったが自身の計画を進めていたのだった。

「行け、フェニックス…!」

フェニックスと呼んだのは、小型のステルス機だった。ただ、博樹が操縦している訳でなく機内に所狭しと設置されたコンピューターを操作することによって飛行していた。

そしてそのコンピューターには、それとは別に本来の用途が準備されている。

—対空間レーザーシステムに細工をしたのはあなたね？

「…ッ!」

急に機内に聞こえた女性の声に、博樹は驚愕する。そんなハズはない、ここにはコンピューターを操作する自分しか居ないはず。いや、間違いなくいる筈がないのだ。

そしてその声の主が、博樹の目の前に浮かび上がる。

「そんな…そんなハズがない!」

その女性を見て博樹がそう狼狽える。目の前に浮かび上がるようにして現れた女性は、落ち着いた雰囲気をまとった。腰までウェーブ状の黒髪を伸ばした女性だった。

「久しぶりね、博樹…」

「ありえない…母は10年前に死んだ。お前は誰だ!」

女性の身体は若干透けていて、すぐにホログラムだと気が付いたが、博樹はそう叫んだ。その女性は、博樹の母親だった。

「蘇ったのよ、大いなる力のお陰でね…」

「あなたは、破滅招来体に…何故です?なぜ地球は狙われる」

「博樹は掃き溜めに蠢く害虫の存在意義を、考えた事がある？考える必要なんてない、だから地球もいらない」

博樹の母親、湊麗華はそう何でもないこの様に答える。それが博樹にはシヨックだった。

「オレの母親は、そんな事を言う人間ではなかった…」

「でも私はあなたのお陰でそれを取り除く方法を知ったの、きつとクリシスの答えは間違っていないかったのよ」

そう言っつて、彼女は博樹の目の前にゆっくりと歩み寄る。

「そしてあなたは、その答えを信じる運命にあった。会いたかったわ…博樹、ずっと…ずっと…」

そう言っつて博樹の頬に手を添えて、顔を近づける。目をつむって、されるがままだった博樹は麗華の顔が目の前に来る直前に、手元にあるスイッチを押した。すると麗華の身体に電撃が走る。

「何…？」

「このコンピューターには協力はプロテクトが施してある。クリシスの様にはいかない！」

そう博樹は麗華を睨みつけながら告げる。すると彼女は手の先が溶けるようにして消え始める。

「だが、オレは一つだけ感謝しています…あなたが崇拜する力は、オレに大切な事を思い出させてくれた―」

そう言いながら一度は目を伏せる博樹だったが、再び彼女を睨むとこう告げる。

「オレは、アグルである前に…一人の人間だったんです…！」

博樹が見失っていたもの、それは自分がウルトラマンとして人間を滅ぼす事が自分の成すべきこと。自分をウルトラマンアグルと定義し続けた半面、湊博樹という一人の人間だということを…。

「博樹…あなた私を見捨てるの…？母親である私を…」

そう言っつて彼女は博樹に手を伸ばす、しかし溶け始めていた側はもう肩のあたりに達し、もうすぐ体の半分が消えてしまっただった。

「苦しい…博樹…タス…ケ…」

「黙れ…消えろオ!!」

苦しみ助けを求める声に耐えられなくなった博樹はそう叫び今度は叩くようにしてボタンを押す。そうすると彼女の姿は完全に消滅した。

そして一人黙ってコンピューターの画面を見つめる博樹だけが、その場に残るのだった。そして彼を乗せたフェニックスの向かう先は…。

「という訳で何となく解ったのですがこのメンバー…」

再び場所は移って今度はバスで移動していた。その中でそう呟いたダイヤが視線を移すと、「わあ、今日は絶好のダイビング日和だね！」「また一緒にトウギャザーしましょー」なんて窓から外を眺めて騒いでいる果南と鞠莉。

「アウトドア派な三年と…」

もう一方に視線を移せば、読書に夢中な花丸と、その隣で何やらぶつぶつ言っている善子にあからさまに難しい高校生が読むものか怪しい論文か参考書がよくわからないものと睨み合ってる遥。

「インドア派な一年に別れている…という訳ですわね…」

そうダイヤが呟くと、隣に座っているルビィに「どうすればいいの？」と聞かれる。ここまで好みが二分してしまうと意見がまとまらないのも仕方がない気はする。

ダイヤも元々そんなに活発な方ではなかったし、ルビィもダイヤと同様あの2人と関わる時間が後の三人より長いからある程度耐性があつたわけだが…。

「仕方無いですわね…こういう時はお互いの姿をさらけ出すしかありません」

その会話が耳に入った遥は、ちよつと嫌な予感がした。まあ概ね的中することになるのだが。

7人がバスから降りて向かった先は、温泉だった。

「即ち、裸の付き合いですわ」

なんて自信たっぷりに言うダイヤには悪いが、彼女は一つだけ見落としていた事があった。それはつまり…。

「あく…じゃあ僕どつか外で待つてるんでごゆっくり…」

「あつ…」

この中に一人だけ男性が紛れ込んでいる訳で、やはり彼女はどこか抜けている、そこでようやくはつとしたような声を上げる彼女に、周りは一瞬凍りついた。

「流石にこの流れで一人仲間外れも…」

「いや、ほんとに良いんで！その辺はまた今度で良いんで…」

交流を深めるのが目的だったのに一人抜けるのは、と果南が言うが遥はいいから6人でと言って「あーじゃあ僕も温泉入ってきまーす」なんてわざとらしく言いながら男湯に消えていく。

「ダイヤさん、遥君が男の子って忘れてたずら？」

「ほーんとダイヤってお・ば・さん」

「一文字少ないですわ！」

そう花丸と鞠莉に言われ、顔を赤くしながら言い返すダイヤの姿を暖簾の陰から見た遥は、やれやれといった様子だった。

結局、温泉でひとつ風呂浴びてきただけになった一行だったが花丸はご満悦だったようだ。

そんな時、不意にぽつぽつと水滴がアスファルトを叩く音が聞こえ始めると、それは一気に強まっていった。

「雨かあ…」

「どうしよう、傘持ってきてない」

雨が降り出したので、遥は凄く嫌そうな表情を浮かべ、ルビイも困った様子だった。

「どうすんのよ、さっきのトコ戻る？」

「それはちよつとなあ…」

善子がそう提案するが、果南が嫌そうな反応を示す。確かに一度出た施設に利用するわけでもないのにもう一回行くのは気が引ける。

「結局、何も進んでないのかも…」

そうルビイが呟く、それは全員が聞こえていたが何も言えない。結局本来の目的である予備予選のための曲作りは何も進んでいないのだから。

「近くに知り合いのお寺があるにはあるずらが…」

全員がどうしたものかと頭を悩ませていたところに、そう花丸が提案すると全員がそれに賛成した。外で雨宿りだと流石に湯冷めするし、反対する理由はない。

「入っていいはずら」

「ここ、ここですの？」

花丸に案内されてたどり着いた神社は、確かにすぐ近くにあった。ただ入るように促されても気が引けてしまう。

境内を見渡してもとても住職が住んでいるようには見えないし、何より寺へ続く石畳の両サイドにお墓があつて正直不気味だ。

「ホントにいいの？」

「さっき電話したら、自由に使っていいって」

鞠莉に聞かれて花丸はそう答える。

「お寺の方は、どこにいらつしやるんですの？」

「この持ち主に最初に挨拶をしておこうと思うのがなんともダイヤらしいが、それに対して花丸が、

「ここに住んでる訳じゃないから…」

そこまでいうと急に懐中電灯を持ち出して顔を下から照らし――

「いないはずらあ…」

「ビッ！」

そうやって驚かすとルビィと果南はビビッてダイヤと鞠莉の後ろに隠れてしまう。

「となると、ここで雨宿りしていくしかないですわね」

「雨もまだまだやみそうにないし」

そうダイヤと鞠莉が言うと、やはりルビィと果南は嫌そうだった。

「暗黒の力を、リトルデーモンの力を感じ…」

「仏教すら」

「知ってるわよ」

寺の不気味な雰囲気喜び始める善子の肩を掴んで花丸は驚かすような口調で告げると、善子もその口を尖らせて言い返す。

「ま、外にいるよりはいいんじゃないですか？」

そう言つて遥は真っ先に中に入るが…。

「何だよこれ？真っ暗?!」

本当に何も見えないレベルで真っ暗だし電気のスイッチらしきものも見当たらずにそう叫ぶ。「電機は？」そう善子が聞くが「そんなのないすら」と一蹴されてしまう。

とりあえずろうそくとマツチはあったのでそれを使って明かりを灯すと天井から龍がこちらを睨みつける。

「どどどどうする？わわわたしは平気だけど？」

そう強がってみせる果南だったが、何かが軋む音に驚いて柱にしがみつく。

「ほかにすることないし、曲作り？」

「でも、また喧嘩になっちゃわない？」

鞠莉がそう提案すると、ルビィがそう告げるが果南も「きよ、曲が必要なのは確かなんだし？やれるだけやってみようよ」そう言うが再び軋む音に驚いて今度は座っていたダイヤに抱き着く。

すると今度は不意に冷たいものが落ちてくる。それがたまたま首筋に当たったダイヤが「ピギヤア！」と思わず悲鳴を上げてしまう。

「雨漏りすら」

「まあ見るからに古いお寺だし仕方ないか…」

そう告げる花丸に対して遙はそう呟く、住んでいる訳でもないし頻繁に手入れをしているようにも見えないので無理もないのだろう。

「お皿あったよ」

果南がそう言つて雨漏りしている場所にそれを置く。寺の中から皿やら桶やら使えそうなものを皆でかき集めて雨漏りに対応する。

そしてようやくと対応を終えると、それらに水滴が落ちる音が木霊する。木製や陶器、プラスチックと色んなものに水滴が当たる音は全部バラバラで、それでいて調和された一つの旋律になつていく。

「テンポも音色も大きさも」

「全部違つてバラバラだけど」

「その一つ一つが重なつて」

「一つ一つが調和して」

「一つの音色になつていく」

「マルたちもずら」

そう言つて6人が笑い合う、みんな違つてバラバラだけどそれが重なつて一つの音色になる。自分達もそうなんだ。みんな違うからこそそれぞれの個性が光り、それが全体の良さになつていくのだ。

それを見ていた遙は、「ちよつとトイレ」と言つて外にでると、スマホの画面を見つめる。着信相手は非通知だった。

「もしもし?」

『遙だな?』

「博樹さん?無事だったんですね?」

相手は博樹だった、遙は安心したような声を上げるが

『対空間レーザーシステムに学校を狙うようにジャックした、防ぎたかつたらすぐにガイアになれ!』

「あなたはまだ僕たちと戦うつもりなんですか?」

『オレにはやるべきことがある』

それだけ告げると一方的に通話を切られてしまう。幸い、誰も今のやり取りは気が付いていない様子だったので、そのまま遙は外に出る。

「どうして…どうしてなんだ!!」

そう叫びながらエスプレンダーを掲げ、その光を開放すると赤い光がまっすぐ宇宙を目指して昇っていく。

宇宙まで登ると、そこでガイアの姿を取ると対空間レーザーシステムを積んだ人工衛星を見る。それは次の瞬間レーザーをガイア目掛けて照射した!

「デヤア!」

ガイアは右腕を上に掲げエネルギーを頭部に収束させるとフォトクラツシャーを放ち、相殺を狙う。

その様子を近くにフェニックスを飛翔させていた博樹は、スクリーン越しにそれを見ると、レーザーの出力を上げる。

ガイアはそれに反応すると、こちらも技の出力を上げる。

「まだまだ遙、再びあの扉を開けるんだ!」

そう言ってレーザーの出力を最大にする博樹の狙いは、以前アグルとガイアによって開かれたワームホールを再び開く事だった。そんな事は全く頭がないガイアもレーザーに押し切られないようにさらに出力を上げる。

その時だった、激突する二つの閃光は上に立ち上るとワームホールが開く。

「やらばだ、遙」

そう言って博樹はフェニックスをワームホールの中へと飛ばすが、境界のようなものに阻まれて中に入れない。そしてガイアもフェニックスに気が付いて後を追うように飛び立つ。

「何…?」

中のシステムが警告音を鳴らし、博樹もシステムを必死に弄るが状況は変わらない、そして博樹はワームホールの中に何かを見つける。それはこちらへ向かって飛んでくる一体の怪獣だった。

「(っ)までか…」

そう呟いて自爆スイッチに指を持っていくが、指は震えていた。

そして怪獣が右腕でフェニックスを握りつぶそうとした時、巨大な

爆発が起こった。最初から博樹は破滅招来体が潜んでいるであろうワームホールの向こうに、捨て身で突っ込むつもりだったのだ。そしてそのために搭載していた爆弾が、大爆発を起こした。

そしてワームホールは閉じるが、その直前に二つの光がその中から出てくると、地球を指す。

その一つはガイアだった、ガイアは博樹の身体を光に包んで爆発から守り街から外れた場所にそっと降ろす。するとガイアの後ろに先程の怪獣が着地する。怪獣もガイアを追ってワームホールから出てきたのだ。

そしてガイアは怪獣に向かって振り向くと構えるが、怪獣は先程の爆発によって右腕が浮き飛ばされていたが、すぐに再生してしまう。

二本の脚で立ち、巨大な翼を持ちドリルになった左腕に竜のような顔を持つ怪獣はガイアへ駆け寄り肉薄するが、ガイアもそれに飛び上がった回し蹴りで対応する。

だが怪獣の力は強く、あまりダメージを与えることができない。そして取っ組み合いになるが、力負けして振りほどかれてしまう。そこから尻尾で薙ぎ払うように攻撃をされるが、それはしやがみこんで回避する。

すると今度は右腕のドリルを回転させてガイアの身体を貫くべく攻撃を加えてくるが、これは距離を取って回避する。

そのままガイアスラッシュで相手を牽制しようとするが、怪獣は地面を蹴ると畳返しのように地面が立ち上がりそれにガイアスラッシュが直撃し、爆発が起こる。

爆炎が晴れると、そこに怪獣の姿はなくガイアは怪獣の姿を見つけないと刃りを見渡していると、地中から怪獣がドリルを突き出したまま飛び出してくる。

足元からの攻撃に反応できず、その一撃によってガイアの巨体が宙を舞い背中から地面に打ち付けられる。

何とか起き上がったガイアだったが、怪獣はさらに三体に分身するとガイアを囲い込み、正面の一体が右手のひらから、ヒルのような小さい怪獣をガイア目掛けて放つ。両腕両肩、更に顔面と5体の小怪獣

はガイアに組み付くとエネルギーを吸収し、爆発を起こす。

「ぐわあ…」

その爆発に膝をつくガイアに対して、今度は三方向から小怪獣を放ち今度はガイアの全身に組み付くと、再びエネルギーを吸い始める。

ピコンーピコンー

それによつてガイアは再び苦しみ始めると、ライフゲージがエネルギーの限界が近付いているのを明滅して知らせる。そして再び爆発を起こしガイアにダメージを与える。

それを見ていた博樹は、アグレイターをとり出すがもうそこにアグルの力は宿っていない…

「クソッ！」

思わず目の前の池にアグレイターを投げ込む博樹だったが、そこで三体に分身してガイアを包囲して苦しめている怪獣が、正面の怪獣以外が水に映っていないことに気が付く。

「アイツが本物か…うおおおおお！」

そう呟くと、自身の腰につけていた爆弾をとり出すと、分身にガイアを挟撃させそれを見ていた本体の怪獣目掛けて投げつける。

それは怪獣に届きこそしなかったが、恐ろしい威力の爆風が怪獣の背中を襲う。その想定外のダメージによつて怪獣は驚き、思わず分身を消してしまふ。

「うわあッ！」

だがその爆発は博樹の身体も襲い、彼の身体を吹き飛ばしてしまふ。

『博樹さん!?!』

ガイアは地に倒れこみ気を失った博樹を見つけると、彼の人生を狂わせ追い詰めた破滅招来体への怒りが爆発した。

『僕は…許さん!!』

わなわなと拳を握りしめたガイアは、その身をスプリーム・ヴァージョンへと変化させる。

「デヤッ！」

怪獣へ構えたガイアはまだ爆弾のダメージで咄嗟に動けない怪獣

へ駆け寄ると、飛び上がった怪獣の顔面を蹴り飛ばす。

更に起き上がった怪獣の頭を掴むと全体重をかけて地面へ押し付ける。

なんとかガイアより先に起き上がった怪獣は飛び立ち、右腕のドリルを突き出して突撃する。

しかし、ガイアは紙一重で躲すと、逆に尻尾を掴んでジャイアントスイングで投げ飛ばす。怪獣は地面に何度もたたきつけられ、ボロボロになり立ち上がるのも精一杯といった感じだった。

そしてガイアは空へ飛翔すると、右足に赤いエネルギーを収束させ渾身の蹴りースプリームキックを放つ。

そして怪獣の頭を貫くと、怪獣の身体は木っ端みじんに吹き飛ばされた。

「エネルギー分析では、完全に再現できていたはずだった…」

ガイアの変身を解いた遥の、池の反対側で博樹はそう告げる。

「じゃあそのためにわざと…」

「どうして…オレを助けた？」

そう肩で息をしたまま怒鳴るように遥に対して叫ぶ。

「ふざけるな！ どうしてあなたは、自分を心配してくれている人の事を…解ってあげないんですか…？」

そう言い返す遥に対して、悔し気な表情を浮かべるが何も言わずにボロボロの身体を引きずって博樹はその場を去る。

「もう僕たちに、戦う理由なんてないんです…」

そう絞り出すように遥は言うが、その言葉は博樹に届くことは無い…。

31話 二兎追う為に／悪夢の第四楽章

Xサバーガとの戦闘の後、先程の寺に戻った遥だったが。

「遥君どこ行ってたの？もうほとんどできちゃったよ」

「ごめんごめん、ちよつとうたた寝しちゃった…」

広間に遥が戻ってきたことに気が付いたルビィに、どうしていたのか聞かれたのでそう言って誤魔化した。

「遥くん結構自由人だよね」

「果南先輩すいません…」

笑って果南がそう言うのと、申し訳なさそうに答えると。鞠莉と果南は何か引っかけたような顔を浮かべる。

「遥くんってさ、なかなか先輩呼びが抜けないよね？」

「そうそう、いつまでも余所余所しくない？」

「いや、でも先輩は先輩だし…」

果南と鞠莉が口をそろえてそう言うのと、遥は口をまごつかせながらそう答える。

「でも折角わたし達先輩禁止でやってるんだから遥くんもそろそろ合わせようよ」

「とりあえずさん付で勘弁してください…」

「えく？マリーって呼んでよ」

「勘弁してください鞠莉さん…」

結局、遥が本気で嫌がるので鞠莉と果南も渋々それでいいというのだった。だがこの事は千歌も曜も同様に思っていることだったらしいが、苗字呼びをやめてくれたからと譲歩してくれていたらしい。

「よし、今日はここで合宿すらく」

花丸がそう言うのと、「ええく」と皆から不満の声が上がったが結局その日はお寺で夜通し曲作りを続けるのだった。

翌朝、曲を完成させたことを報告すべく十千万に全員で向かうと、千歌は屋根の上で遠くを見つめていた。

「千歌ー!」

「みんな!」

果南が声をかけると、千歌もこちらに気が付いたようだった。そして曜と梨子が千歌のいる屋根のすぐ下の窓から顔をのぞかせている。二年生もこちらに負けまいと張り切っていたので、どうやらこちらも泊まり込みで曲を作っていたようだった。

「曲はできた?」

曜がそう聞くと、果南が自信満々に先程完成させた曲が書かれたノートを広げて見せる。

「バッチリですわ!」

ダイヤがそう言い切る。長い一日となったが、自分たちの問題も解決し曲を作り上げることができた。

「じゃあ練習頑張らなくちゃね」

そう梨子が嬉しそうに言う、「二曲分あるからね」そう曜も嬉しそうに告げる。

そんな時だった、唐突に鞠莉のスマホが着信音を奏でる。こんな朝っぱらから誰だろう? そう思いながら電話にでる鞠莉だったが…。

「ええええええええええええええ!」

暫く電話越しで会話をしていた鞠莉が驚きの声を上げる。

「今度は何?」

「いい知らせではなさそうですわね」

果南がそう聞くと、鞠莉は深刻そうな表情でスマホを顔から遠ざけるとこう告げた。

「学校説明会が、一週間延期になるって…。雨の影響で道路の復旧に時間がかかるから一週間後の方がいい。って…」

「確かに、その考えは解るけど…」

そう告げられ、梨子も理屈は解るのだがそれでも納得できない様子だった。

「でもよりによって…」

曜も何か言いたげだったが、その続きを口にするか悩んでいる所に。

「どうしたのみんな？その分いいパフォーマンスができるように頑張ればいいじゃん」

いつの間にか屋根の瓦を歩いてこちらの目の前の端まで移動していた千歌が、そう能天気な声で言う。

「どうやら状況が理解できてないみたいですね…」

遥がそう呆れた様子で言うが、千歌は首をかしげていた。

「問題です、ラブライブ予備予選が行われるのは？」

曜が呆れた様子でそう千歌に問いかける。

「学校説明会の次の日曜でしょ？」

「ですが—」

そこまで解っていれば気が付いてもよきそうなのだが未だに気が付かない千歌を見かねて、梨子がそう口を挟む。

「そんな時、その説明会が一週間伸びると連絡が届きました。しかし、予備予選の日程は変わりません。さて二つが行われるのはいつでしょう？」

「そんなの簡単だよ」

そう答える千歌だったが、暫く腕を組んで唸った後…。

「ん！」

目を見開いた後、驚愕の声を上げるとその拍子に屋根から落ちてしまふ。

「うわあー！」

「危ないッ！」

咄嗟に駆け出した遥が、千歌を支えようとするがうまくいかずに下敷きになってしまう。下手をしたら大けがをする事故だったが、エスプレンダーから赤と青の光が放出され、千歌の身体を支え落下の衝

撃を和らげたお陰で下敷きになった遙も落ちた千歌も特に怪我をしなくて済んだ。

「大丈夫？」

「僕は大丈夫…光が、助けてくれたから」

「同じ日曜だ!!」

ようやくリーダーも事の重大さに気が付いたらしい。

博樹は淡島の母親の墓を訪れていた。以前来た時から日も経っていないし、他に誰かが訪れた形跡もなく綺麗なままだった。

「やはりあれは、破滅招来体の擬態のはず…」

本当に母親を生き返らせるなんてことができず、博樹はそう思った。あの時はそこまで頭が回らなかったが、自分を動揺させるための行為だった。そう自分に言い聞かせていた。

「地球の力を捨てた、哀れな人…」

「君は…？」

ふと後ろから少女の声が聞こえたので振り返ると、そこにはまだ幼さの残る金髪をツインテールにした少女が立っていた。

「私はシルビア、あなたは『地球の意思に逆らって力を捨てた』事を後悔している。違う？」

「それは…」

昨日の戦いで苦戦するガイアを、アグルとして助けられなかった事を悔やんでいた博樹は少女の言葉に何も答えられない。

「また、力が欲しいんでしょう？だったら——に行くといいわ」「何？」

「そこに行けば、あなたの答えは見つかるはず…でも、忘れないであなたの使命を」

「お前は一体何者なんだ…？」

「私はシルビア…それ以外の、何者でもない…」

博樹の問いにはそう答えにならない返事をする、少女はその場を立ち去るが博樹は後を追うことはしなかった。

「これは…」

少女がさつきまで立っていた場所にはアグレイターが落ちていた。まるで、主人の元に戻ってくるかのように…。

「オレの、使命…」

アグレイターを拾い上げた博樹はそう呟くと、シルビアに告げられた場所を目指す決心をした。その場所に何が待っている、今は自分が『人間』としてできることをするしかないのだから。

「ここが予備予選が行われる会場」

昼休み、体育館のステージ下で地図を広げて位置を確認する。

「山ん中じゃない」

そう善子が不満を漏らす、会場があるのは街から結構外れた位置にある。しかも、学校からかなり距離がある。

「今回はここで特設ステージを作って行われることになったのですわ」

「それで学校は？」

「こつちの方角だけど、バスも電車も通ってないから」

「じゃあこつちの方向にバスと電車を乗り継いで…」

「ああ〜ごちや〜ごちや〜ごちや〜ごちやしてきましたわ〜！」

地図を眺めながら学校との位置関係やその間を走っているバスや電車の経路を確認していると、ダイヤがそう言って頭を抱える。

「到底間に合いません」

そう鞠莉がステージに背中を預けてそう両手を上げてお手上げといった様子だった。

「空でも飛ばなきゃ無理ずら…」

「クッククク…ならばこの墮天使の翼で！」

そう花丸が呟いたところで善子がそんな事を口走る。

「そっかーその手があったかー」

「墮天使ヨハネの翼で空から会場入りずらー」

「わーいかっこいいー」

あからさまな棒読みで、ルビィ、花丸、遥が茶化す。すると善子は慌てて「嘘よ嘘！常識で考えなさい！」と撤回するのだった。

「そうだよ、空だよー」

ここで千歌が何かを閃いたように言う、確かに鞠莉の家はへりを所
有しているしそれなら両方に出られる。

「かっこいい…」

「スーパースターですわ…」

その提案に目を輝かせる善子とダイヤだった。「じゃあ、鞠莉ちゃん！」と千歌が鞠莉に振ると。

「流石チカっち、さっそくへりを手配して…なんて言えると思う？」

「ダメなの？」

「オフコース！パパには自力で入学希望者を集めるといったのよ？それを今更力貸してなんて言えませーん！オールオアナッシングだとお考え下さいー！」

そう言うて却下されてしまった。ならどうしようかと思つた所で…。

「じゃあガイアは？ねえ遙くん、ダメ？」

なんて聞いてくるが、遥は慌てた様子で

「千歌さん、他の生徒もいるんだからそんな事言わないで！」

と小声で制する、幸い体育館の反対側でバレーボールに興じているので幸い今の話は聞かれていなかったようではあった。

「とにかく、そんなことしたら騒ぎになりますよ？第一、ここにいる人以外ガイアの正体知らないんだから」

そう言う「ごめんごめん…」と千歌に謝られる。

「常識的に考えて」

そこでダイヤが冷静に思いつく中で実現させ得る唯一の提案をする。

「説明会とライブ予選、2つのステージを間に合わせる方法は一つだけ、予備予選出場番号一番で歌ってすぐであれば、バスがありませんわ。それなら、学校説明会にはギリギリ間に合いますわ」

「本当？」

「ただし、そのバスに乗れなければ次のバスは三時間後、つまり説明会に出るには、一番で無ければなりませんわ」

千歌にそう聞かれ、ダイヤはそう釘を刺す。

「それって…どうやって決めるの？」

「それ「それはッ！」

ダイヤが言いかけたところで遮るようにルビイがその方法を告げたのだった。

「抽選!？」

移動した先は市内のTV局近くにあるとあるホールだった。そこで参加グループの代表者が抽選によって、歌う順番を決める。それが今回の予備予選のやり方だった。

ホール内には、Aqoursのメンバー以外にも様々な学校の制服に身を包んだスクールアイドルたちが居た。彼女たちが今回の予備予選でのライバルとなる。そしてAqoursは、学校説明会に出る為既に彼女達の勝負は始まっていた。

「誰が行く？」

果南がそう聞くと、全員に緊張が走る。一番になれなければ学校説明会に間に合わない、そうなってくると代表として抽選に参加する人のプレッシャーは計り知れない。

「ここはやっぱりリーダーが…」

ルビイがそう言って千歌が行くのが良いのではと提案する。

「千歌ちゃん、本日の獅子座、最凶」

「自信無くなってきた…」

梨子がそう言って星座占いのサイトを見せてくると、千歌が肩を落とす。

「じゃあ鞠莉かな」

と果南が振るが、鞠莉は「ここはやはり、最初から参加していた…」と言って断ると。

「曜さん？」

とダイヤをはじめとして曜に視線が集中する。

「それが良いずら、運も良さげずら」

「いや…本当にいいの？」

と、曜が代表でと話がまとまりかけるが、それに待ったをかけるものがいた。

「Aqours最大のピンチは…墮天使界のレジエンドアイドル、このヨハネがツ行きまーす！」

「無いずら」

「ぶつぶーですわ」

「どうしてよお〜」

そう言って手を上げて立候補する善子だったが、花丸とダイヤから即却下されてしまう。

「だってジャンケン負けてるし」

そう千歌が言う、善子がジャンケンに勝ったところは悪いが見たことがない。そう思っていると、ルビィと花丸が肩に手を置くと。

「この前も何もない所で躓いて、海落ちちやうし」

「マルたちがいつもハッピーなのは善子ちゃんのお陰ずら」

なんて言って善子の不運体質をいびられる。

「善子言うな！普段は運を溜めてるのよ！見てなさい、いざという時の私の力を!!」

「あなたがそこまで言うのなら…」

そんな様子を見かねて、ダイヤがそう言って彼女の前に立つ。

「じゃんけんしましょ。これに勝てたら、よろしいですわよ」

などと言って拳を突き出す。それに善子も緊張した表情で拳を出す。

「じゃーん」

「けーん」

「ぼん！」

善子がパー、ダイヤがグーで善子の勝ちだった。善子も信じられなかったのか暫く自身が出した手を凝視していた。

「善子ちゃん凄い！」

「善子ちゃんがパーで勝ったすら」

「ずらまる、あんた今何かしたわよね？」

「知らないすら」

勝ったことに喜ぶルビイと花丸だったが、善子が花丸にそう聞くがしらばっくれる。遥からは花丸が善子の尻を叩いたのは見えていたが、あえて何も言わなかった。

「これはもしかしたらもしかするかも…！」

「解りましたわ、あなたの力信じましょう。さあ引いてやしっやい、栄光の一番をッ！」

曜がそう期待を込めて言うのと、ダイヤも潔く負けを認めてそう言うって抽選台を指さす。今日の善子ならやってくれと信じて。

そして善子が抽選の台を回すその時だった―その後ろにあった番号を表示するモニターが消え、室内が真っ暗になる。

「何!？」

「停電?」

「みんな落ち着いてー！」

突然の事態に騒然となるが、遥がそう声をかけてひとまずAquoursのメンバーだけでも落ち着かせると、今度はステージ上にいった善子が心配になる。

スマホのライトをつけて周囲を照らすと、善子も「何なのよ良い所で…」と不満げに漏らしながらこちらへ戻ってくる。

すると周囲の携帯電話や電話機が一齐に着信音を奏でる。

「だめだ、この電話に出てはいけないー！」

あの時学校の周囲で起こった事件を思い出した遥がそう叫ぶが、他校の生徒たちは不思議そうな顔をして出てしまう。

「これってあの時の…」

すると電話に出た人たちは皆虚ろな目になると、こちらへ着信音が鳴り続ける電話を向けて歩み寄ってくる。

「ごっちー」

咄嗟に近くにいた果南の手を引いて遥が走り出すと、皆それに気が付いてついてくる。

「ちよっと、どうしちゃったのさ」

「海開きの後、PV作ってた時に町の人たちを操った怪獣と同じ奴が現れたんだきつと」

何があったのか聞かれ遥はそう答える。すると果南も覚えがあるのかそれ以上は何も言わず表情を曇らせた。

そんな時、GUARDの制服を着た男性が目の前に現れた。「助けてください！」遥がそう声をかけると、男性はこちらに銃を突き付けた。

それに立ち止まる一行だったが、遥は果敢にとびかかって銃を彼女達から逸らす。

「ここは僕に任せて早くいくんだ！」

「でも…」

「いいから行けよ…このままじゃ全員助からない！」

今まで一度も見せなかった、怒りの混じったかなり強い口調で叫ぶ遥に誰も何も言えなくなるが、「わかった、でも絶対一緒に練習しようね」千歌がそう言ってみんなを引き連れて逃げる。

「解りました、必ず！」

そう遥は頷くと、男性隊員と取っ組み合いを続けるが、流石に敵わず放り投げられ壁に激突し立ち上がれなくなってしまった。

「大丈夫かな？」

「大丈夫よ、今までもそうだし今回もきつと…」

不安げにルビィが呟くと、梨子がそう告げる。何度も心配になるこ

とはあつたが、きつと大丈夫そう遥を信じて待つ。この先もずっと、そう梨子は心に誓ったのだ。

そんな時、出入り口に続く廊下によくやく出たというところでホルの従業員やら他校の生徒やらに囲まれてしまう。

「どうしよ…」

「このままでは…」

全員に緊張が走るが、抵抗もろくにできないまま捕まってしまうのだ。

その頃博樹はその抽選が行われている会場の目の前まで来ていた。

「お前たちに用はない、どけ！」

中に入ろうとする博樹を遮るように立つ、洗脳された大人たち。

「地球の意思に逆らった、裏切り者め」

そう言うが早いか博樹を取り囲むと、手に持った棒切れやらを振りかざして博樹に襲い掛かる。博樹はそれを掴んで殴りかえすなど善戦するが、数で押し切られてしまう。

そしてそれを上空に開いたワームホールから見下ろす不気味な顔が奏でる笑い声が辺りに響き渡っていた…。

捕まった博樹が連れていかれた先は、ラウンジだった。そしてそこにいたのは、湊麗華だった。

「いったい何度、その姿を利用すれば気が済む…！」

彼女の前に突き出された後、他の人間は出ていきその場に二人きりになると、博樹は彼女を睨むとそう凄む。

「私をホログラムとでも思っていて？生き返ったのよ、ほら…？」

そう言うとな彼女は博樹の頬に触れる。確かに手のひらで頬を撫でられている感覚に、博樹は驚愕の表情を浮かべ固まってしまう。

「折角地球が与えてくれた力、それを正しく使えずなくしてしまったかわいそうな博樹…それを取り戻すのよ、あなた自身の手で」

遥はその頃、男性に後ろから銃を突き付けられたまま、両腕を上げた状態で歩いていった。

「僕を一体どこへ？」

「たった数百年で、二百種以上…」

緊迫した表情で遥がそう聞くと、男性は淡々とそう語り始める。「え？」

「人類が絶滅させた動物たちの数だ！人類はそのエゴで沢山の動物たちを殺し続け、戦争のための殺戮兵器を作りやがて地球すら滅ぼすだろう」

遥はそれを聞きながらどこかで脱出のチャンスを伺っていた。確かに言っていることは事実だが、だからと言ってここでやられる訳にはいかない。

「地球上に絶滅していい生物がいるとすれば、それは人間だけだ！」
そう言い、銃を背に強く突き付けられる遥だったが、すぐ横に消火器があるのに気が付くと咄嗟に銃口を叩いてその先を自分から逸らす。

そして消火器を男性目掛けて噴射した後、消火器で殴り倒す。そしてAqoursのみんなを探すべく駆け出すのだった。

(みんな…無事でいてくれ…！)

彼女達の悲鳴が聞こえていた遥は、最悪の事態も考えてしまうがそれを思考の隅に追いやろうと頭を振るが、胸のもやもやが消えることは無かった…。

「オレがもう一度、アグルの力を…」

「そう、きつとできる筈よ…」

博樹が麗華の言葉を反芻すると、彼女はそうささやく。

「離してー！」

「私たちをどうする気ですか?!」

そんな時、果南とダイヤの声が聞こえてきた。捕らわれたAqoursの9人が室内に放り込まれる。

「まずは迷いを断ち切りなさい…そうじゃないとまた博樹は地球を救うという使命を忘れてしまう」

そう言つて麗華は博樹に拳銃を手渡す。博樹は暫く拳銃と麗華の顔を見つめると黙つてそれを受け取る。受け取った拳銃はずしりと重く、弾丸が入っていることが解つた。

「できるはずよ、邪魔なものは全て排除しなさい。まずはその女、松浦果南を…」

そう告げると、メンバーは一斉に果南を見つめる。

「ヒロ…まさか、その人は…」

果南はそう震える声で博樹に問いかけるが、続く言葉はでなかった。似ていたのだ、昔博樹が見せてくれた写真に写っていた、彼の母親に。

「嘘…そんなはずありませんわ…」

「そうよ、きっと何かが化けて…」

同じくそれを知っているダイヤと鞠莉も驚愕の声を上げる。二年生と一年生は事情が分からず、ただ女性が博樹に果南を殺せと言っていることだけしか理解できなかった。

そして博樹は銃口を突き付ける。

「お前は母さんじゃない…消えろオ！」

「あなたに私が撃てる?…ここで撃てば、もう二度と私には会えないのよ。それでもいいの?」

「オレは…」

博樹は震える声でそう呟くが、その目は少し潤んでいて腕も震えていた。

「博樹の悲しみも苦しみも、私しか理解できないのよ?」

「ヒロが苦しんだのは人間だからだよ! 私たちと変わらない一人の人間だから…」

「…その女を撃ちなさい、そしてもう一度戦うの…愚かな人間をこの

地球から消し去るのよ！」

果南が麗華の言葉に異を唱えると、麗華は少しだけ黙ると、冷たくそう告げた。

(間違いない、波動生命体の擬態…)

それをカーテンの裏から見ている人物がいた。遥だ、彼女たちがここに連れ込まれるのを見て、反対側からこっそり侵入したのだった。

遥は全員から死角になる位置にいるのだが、一瞬だけ麗華の姿が揺らぎ怪獣の姿が見えたのだ。

博樹は震える手で、銃口を果南に向けてと果南は目を閉じる。

「ダメ！博樹さん、撃つてはいけません」

「やめてヒロー！」

ダイヤと鞠莉がそう叫ぶが、ヒロは腕を降ろそうとはしなかった。

そして指を引き金にかけた…その時！

「やめろー！」

遥が飛び出したが無情にも室内に発砲音が響く。

32話 虹／もう誰も…

「やめろー!」

遙が飛び出したが無情にも室内に発砲音が響く、そして崩れ落ちたのは麗華の身体だった。彼女の方に銃口を向けた博樹は、麗華に向けて発砲したのだ。

「軟弱なやつ…いつも肝心な時に…」

そう毒づくくと、麗華は倒れるとその体は紫の光に包まれると消滅した。

「博樹さん…」

遙は博樹に声をかける、博樹は目を潤ませて震える声でこう告げる。

「オレには…何も救えはしなかった…何一つ…」

「ヒロ…」

果南は博樹にそつと近寄るが、かける言葉が見るからなかった。

—またお前を利用できたら面白かったのに。まあいい、私はこれから地球上に増殖し人間どもが憎み合い、滅ぶさまを見届けてやる…フフ…

そんな声が辺りにこだまする。すると博樹は果南の手を取って他のメンバーに駆け寄ると遙かの方を振り返る。

「ヤツを追え遙、そして必ず倒せ!」

それに遙は頷くと、先程の光が消えていった方へ駆け出す。

「お前たちはこつちだ、遙に任せて早く脱出するぞ」

そう言つて博樹を先頭にこの部屋から出ると、再び外を目指す。

遙は光の行き先を追いたどり着いた先には、電波塔を制御する制御室だった。ここから電波回線にもぐりこんで、人間を洗脳する範囲を拡大させるつもりなのだ。

「僕をヤツの居場所まで導いてくれ、地球の光よ」

遙はエスプレnderをとり出した、怪獣が待ち伏せている先はこの場所の上空にあるワームホールの中。負ければ二度と戻ってくることはできない…。

だが今の遙に『負けるかもしれない』そんな想像は無い、ここで必ず倒す。今の遙にあるのはその決意だけだった。

「ガイアー！」

光を開放すると、上空のワームホールの中へと赤い光が立ち昇るのだった。

その中で待ち受けていたのは、以前ルビイを操った怪獣によく似た怪獣だった。以前との違いは両腕のムチ、顔の複眼と、背中の襟巻上になっている部位にも石膏のような顔が複数付いており、そこから触手が生えている事。

そして背の触手から電撃を放ちガイアを牽制する。しかし体制をすぐさま立ち治すと怪獣に対して構える。

『身勝手な人間共によって殺された。地球怪獣たちの胸の叫びを、その怨念を受けて見ろ！』

ふたたび麗華の声で怪獣は吠えると、腕のムチを叩きつけるとその場所から炎が立ち昇る。そしてそこから現れたのは、ウルトラマンアグルだった。

(何ッ!?)

ガイアは幻影によって生み出されたアグルに驚くが、アグルはガイアへ襲い掛かる。ガイアもこのアグルが博樹とは関係ないという確信があつたからこれに応戦した。

「こつちだ、早くー！」

博樹は非常階段を見つけると、A q o u r s の9人を先に下を目指させ自分もその後ろを走る。

そして階段を抜け、外への出入り口前の廊下に出ることに成功したのだが、武装したGUARDの職員たちに包囲される。

「ダメ、逃げられないぞら」

「今は生き残る事だけを考えろー！」

弱気になる花丸にそう激を飛ばすと、博樹は皆を壁際に追いやると庇うように前が出る。

「オレはもう、誰も失いたくない……！」

そう呟いた博樹は、近寄ってきた隊員相手に殴りかかって行った。

一方ガイアは、アグルとの戦闘に入っていた。偽物とはいえ、博樹の戦闘センスを真似ているアグルと一進一退の攻防が続いた。

お互いの拳が、蹴りが交錯しお互いその身にダメージが蓄積していく。

だがガイアはヴァージョンアップを果たしたことによって身体能力も向上し、遙自身が経験を積んできたことによつて、次第にガイアが押し始める。

次第にガイアの拳の連打によつて押し始められるアグルだったが、冷静に所要所で反撃を加えてくるが一気に押し切る作戦に出たガイアはそれに耐える。

「アリアアアア!!」

そして反撃してきたアグルの腕をつかんだガイアが、アグルの身体を投げ飛ばすが、アグルはこれを空中で態勢を立て直して着地する。そしてそのタイミングで怪獣は再びガイアへ電撃を飛ばす。

「ウワアア……」

その攻撃に完全に不意を突かれたガイアは、思わず膝をつくとその隙に距離を詰めてきたアグルの両手に首を絞められその体を持ち上げられる。

—ピコン…ピコン…

ガイアのライフゲージが赤く明滅を始める。このタイミングでガイアのエネルギーが危険域に突入したのだ。

博樹は、数人を倒す事は出来たがついに壁に押し付けられ、複数の銃口が突き付けられる。そしてA q o u r sのみんなも再び捕まってしまう。

「ヒーロー……」

果南が無理やり拘束を解いて、博樹の元へ駆け寄ろうと足掻く。しかし銃口はそんな彼女にも突き付けられてしまう。

万事休す、この場にいる全員がそう思い諦めてしまったその時だった。逆転の一手が投じられたのは…。

『完成した特殊弾はその一発だけだ。電波攪乱を避けるため、照準はマニュアルで行え』

「了解」

ファイターSSのコックピットに堤からの指令が飛ぶ、あのワームホールを消滅させるために開発した特殊弾頭。

XIGは活動を開始したのは最近だが、以前から防衛軍としても怪物と戦った者たちで結成されており、ずっと準備を続けてきたのだ。

そしてこの一発にミサイルを任されたのは、最もファイターの操縦技術の高い梶尾が任命された。

「頼む…消えてくれ!」

ワームホールの中心をロックオンした瞬間、ミサイルを放った。そしてその一撃は吸い込まれるようにワームホールへ消えていき炸裂。上空のワームホールを消滅させるのだった。

一撃しかないミサイルを標的に当て、対象を消滅させたことを確認すると得意気に笑い、帰投するのだった。

そしてガイアが戦っている空間に光が降り注ぐとアグルは消滅し、この空間を作っていた怪物は空間が不安定になったことよって苦しみ始める。

『私の超空間が…なぜ?!』

どうして空間を乱されてしまったのか理解が追いつかない怪物は、腹部の顔から涎を垂らしながらもがき苦しむ。

「デヤッ! ハアアアア…」

ここを勝機と見たガイアは、両腕を額の前でクロスした後、両腕を降ろしエネルギーを胸の前で収束させると両腕の拳をそろえ、生み出した光球を前方に打ち出す。

「ダアッ!!」

アグルのものとは違い、赤い光の玉となったりキティターが怪獣の顔面に直撃すると怪獣の身体を粉々に吹き飛ばすのだった。

そして洗脳されていた人々は糸が切れたように倒れてしまう。

「た、助かったの…?」

自分たちを捕まえていた人たちが倒れ、自由になった梨子がそう呟く。

「なんとかね…」

そう千歌が答えて周りを見渡すが、幸い誰も怪我はしていないようだった。そして立ち上がった博樹が、果南に手を差し伸べて立ち上がらせている所だった。

「ヒロはわたしたちみんなを救ってくれた、何も救えなかった訳じゃないんだよ?」

立ち上がった果南が、そう博樹に訴えかける。博樹は何度も自分たちを救ってくれたじゃないかと。

「だがオレは、鞠莉に怪我を負わせて記憶も失わせた」

「そんなの気にしてない!私が今こうして皆とられるのはヒロのお陰なんだよ?」

「いつまで過去を気にしているつもりですの!?!」

自分のしたことを悔やんでいる博樹に、その想いは届かなかった。鞠莉とダイヤもそう言うものの、博樹の心は閉ざされたままなのだ。

博樹はそれ以上何も言わず、その場を去るのだが誰もそれ以上は何もできなかった。

そして、他の人々も目を覚まし何と抽選は再開された…。

「この状況でやるの!?!」

「仕方ないすら、誰も覚えてないんだよん」

「そうそう、じゃあ任せたまよ?ヨハネちゃん」

この状況で自分からスタートなんてと文句を言う善子だったが、花

丸と遙がそう言うて行くように促すと渋々といった様子でステージに上がって行った。

正直全員もうそんな気分ではなかったが、このまま帰っては棄権になってしまうのだから全て終わらせて帰るしかない。まあ、いざ抽選台の前まで行くと善子はノリノリだったわけだが…。

そして彼女が引き寄せた結果は…。

「24!?ど真ん中もど真ん中じゃん！」

帰り道クレープ屋で休憩していた一回だったが千歌がそう言うてはぶたれる。善子が引き寄せた数字はよりによって中盤だった。これでは説明会には間に合わない。

「仕方ない、堕天使の力がこの数字を呼び寄せたのだから…申し訳ない！」

普段の調子でそう言った善子だったが、すぐにいたたまれなくなりすぐ頭を下げる。

「別に善子ちゃん一人が悪い訳じゃないわ」

そう言うて梨子が慰めの言葉をかける。他の人なら一番を弾けるとは限らないし、そもそもかなり確率の低い賭けでしかない。

「でもこうなつた以上、本気で考えないとね…」

「説明会か、ラブライブか…」

果南とダイヤが神妙な表情で告げる。

「どっちか選べってこと?」

「そうするしかありません」

善子にそう聞かれるが、ダイヤは冷静にそう答える。

「だったら説明会ね」

「学校を見捨てるわけにはいかないもんね」

その言葉を受けて、鞠莉と果南は説明会を優先すべきではないかと告げる。

「でも生徒を集めるのに効果的なのは、ラブライブだと思います」

そう遙が異を唱えると、曜も「たくさんの人に見てもらえるもんね」と同意の意を告げる。「注目されるし」「それもそうずら」そうルビィ

と花丸も応じる。

「じゃあどうすんのよ?」

このままでは結論が出ない、そんな時善子がそう答えを求めてくる。

「学校説明会にでるべきだ、って人は?」

そこで果南が、そう多数決で決めようと挙手を求めるが誰も手を上げない。

「じゃあ、ラブライブに出るべきだ、って人は?」

やはり誰も手を上げようとはしなかった。

「はあ…どっちかだよ?」

「解ってるけど…」

「決められないすら…」

どちらか一つだと言う果南に、鞠莉と花丸は弱々しく言い返す。

「そうだよ…どっちも大切だもん…」

千歌がそう呟く。ラブライブを選べば、学校の名前を広めることができる。説明会を選べば、説明会に来た人に入学したいという気持ちを後押しすることができるかもしれない。両方大切なのだ。

「鞠莉さん、少しいいですか?」

「一体どうしたの?ハルカ?」

解散した後、遥は鞠莉を呼び止めていた。神妙な表情の遥に鞠莉は何かを察したのか、すぐに了承してくれた。

「博樹さんの事なんですけど…」

「そんな気はしてたわ、何が聞きたいの?」

遥はまず、この前寺を抜け出していた間の事を話した。

「…そう、そんな事があったのね」

「はい、でも僕は彼が心配なんです…それにどうしてあそこまでの物を用意できるのかも、それで彼の居場所が解つたりしませんかね？」

鞠莉は顎に手を当てて少し考える仕草を見せた後、こう答えた。

「ヒロは色んな工学特許を持つてるの、だからその資金を使ってるんだと思う。多分それで拠点も転々としてるんじゃないかしら…」

「じゃあやはり、彼の居場所は解らないですね…」

「ごめんね？折角頼ってくれたのに」

「いえ、ありがとうございます」

そう謝る鞠莉に、遥は礼を言うのと頭を下げた。そして「じゃあ僕も帰ります」と言つて帰路につこうとした遥を、今度は鞠莉が呼び止める。

「ねえ遥？」

「何です？」

「私じゃなくてもいいから、絶対悩みとかはすぐ誰かに相談するのよ？もうヒロみたいに苦しむ人、見たくないから」

そう真剣な眼差しで遥をまっすぐ見て鞠莉はそう告げる。遥はその言葉に頷くと。

「ありがとうございます、僕にはみんなが居ます。だから大丈夫です。」

そう答えると、今度こそ遥は帰路につくのだった。

「2つに分ける?」

「うん、5人と4人二手に分かれて予備予選と説明会に出る…これしかないんじゃないかな?」

次の日の放課後、千歌から二手に分かれて両方にでるといふ提案がされた。

「でも、それでA q o u r sと言えるの?」

「それに、5人で予選を通過できるか解らないデース」

そう善子と鞠莉が言う。確かに自分たちは一人じゃない、でも9人揃ってステージに立つからこそA q o u r sなのだ。第一として、人数を半分に割いた状態で予備予選を通過できるとも限らない。

「嫌なのは解るけど…じゃあ他に方法ある?」

そう梨子が言った。自分たちはできる範囲で、最善の策を取るしかないのだ、と。

「遙くんはどう思うぞら?」

放課後解散した後、図書室にいた遙は花丸にそう聞かれた。

「どうって言われても…」

そう言って遙は読んでいた本を閉じて暫く考える。

「本当はね、ガイアの力でみんなを両方に参加させたい…でも、ウルトラマンの力を使ってしまったら…きつとこれからこの力に頼りつきりになっちゃう。それが嫌なんだ」

「遙くん…」

「だから僕は今回の案には賛成だよ?それが僕らが自分の力でできる最善策だと思ってる」

そう前置きした後には遙はそう答えた。そもそもガイアが連れてきたなんて事態になればそれこそ大騒ぎになる。だから…と。

「遙くんはいね、真面目ぞら」

花丸はそう言ってほほ笑んだ。

「そうかもね…でもやっぱり、僕の手でやれることは全部やるよ」

そう遙は笑顔で答えるのだった。ウルトラマンに頼らずとも、でき

る事は全てやりきりたい。それが今の遥の望みだった。

『エントリー番号24番、A q o u r sの皆さんでーす!』

そして迎えた当日、予備予選に出るのは二年生三人と黒澤姉妹の計5人。残りのメンバーと遥が、学校説明会にあたることとなった。

「千歌ちゃん…」

5人で立つステージ、そして学校の生徒は説明会に行っているのに応援してくれているのは自分たちの保護者くらいというアウェーな状況に気圧されている様子の千歌にかける言葉は梨子にはなかった。全く予想できていなかった訳では無かった。でもいつもの約半分の人数で立つステージは心なしか広く感じた。やはりどちらか選んで全員で立つべきだったのでは?そんな事も一瞬でも脳裏をよぎってしまう。

そんな時、会場に聞きなれた声が響いた。

「勘違いしないよーに!」

「やっぱりわたしたちは1つじゃなきやね!」

その声の主は鞠莉と果南だった。振り返ると、自分たちと同じ曲の為に制作した衣装に身を包んだ残りの4人がいた。

「ほらほら、始めるわよ」

「ルビィちゃん、この衣装素敵ずら」

そう善子と花丸が持ち場についてそう声をかけてくる。客席の方を見ると説明会を放っぽりだしたであろう遥の姿も見えた。

「さあ行くよ」

「うん!」

皆揃うとは露程も思っていなかったもので、思わず固まってしまった千歌に果南がそう声をかけると千歌も笑顔で応じ、今回のステージが幕を開ける。

MY舞☆TONIGHT

3年生と1年生で作り上げたこの楽曲、全体的に和風な曲ではあるがところどころに6人それぞれを象徴する要素を散りばめた、それぞれの個性が調和して生まれた曲だ。

パフォーマンを終えた後、彼女達に贈られたのはステージに立った時のまばらな拍手ではなく、会場全体に響く大きなものだった。

今回の予選にも確かな手ごたえを感じていると。

「さあ行くよー！」

「ここからが勝負よー！」

そう千歌と梨子が駆け出す。もしかしなくても説明会に間に合わせるつもりなのだ。

「千歌さん、予定通り行けますー！」

遙が会場の外で待っていると、出てきた皆にそう声をかける。

「まさか遙くん、こうなるの知ってたずら？」

千歌の後に続いて走っていると、花丸にそう聞かれて遙は。

「どうだろ？でもこうなってほしいって思ってた」

そう悪戯っぽく笑って見せた。

千歌の考えはこうだ。会場から学校までを直線で引くとみかん山が間にある。その中を突っ切って最短で行こうというのだ。

「お嬢ちゃん達、乗ってくかい？」

みかん畑にたどり着くと、千歌の同級生の一人がそんなセリフをいしながら待っていた。

彼女の指しているのは、収穫したみかんを運ぶためのトロツコだ。これなら急な勾配も安全に抜けられる。本来安全性も考慮して大したスピードは出ない代物なのだが…

「みんな乗ったー？」

「全速全身！ヨーソロ〜！」

千歌が全員乗ったのを確認すると、テンションが上がってきたのか

そう叫ぶ曜や皆を乗せてトロツコが進む。

「冗談は善子さんずら」

「ヨハネ」

なんてやり取りが真顔で始まる。遅いのだ、歩いた方が速いのではないかというくらい。

「もつとスピード出ないの?」

なんて先頭に座っている果南も不満げだったが、それを見ていた遙が得意気に。

「みんなが怪我しないギリギリまで速く走るように改造しました、下りに入ればすぐです!」

なんて言い出すのを、皆冷めた目で見ていたのだが…

本当に下りに入ったとたんジェットコースターの如く急加速して下っていくトロツコに9人の悲鳴がみかん山に響き渡った。

「後で覚えてなさい!」なんて梨子の怒りの声も聞こえた気がするが遙は気にしない。

「もしかして乗らなかつたのって…これしたせい?」

「い、いや、僕絶叫系苦手なんで…後で元通りにするから許してください…」

本来の持ち主の家の子である先輩にジト目でそう言われた遙は、そう言つて土下座して皆が山を抜けた後急いで元通りにしたらしい…。

君の心は輝いてるかい?

説明会で披露した、二年生が作った楽曲だ。

学校で衣装やステージを学校みんなが用意して待っていてくれたおかげで今回作った二曲を両方9人で披露することができた。

「遙(くん)く?」

「あの…えつと…ごめんなさい!!」

説明会が終わって合流した遙に、全員からお叱りの言葉を受けたのはまた別のお話。

33話 空中要塞／生徒会長の憂鬱

「ふわああく」

朝目が覚めた遙はあくびを噛み殺しながらベランダにでる。今日はいつてもより早く目が覚めたなあなんて思っていると、もう制服姿の人影が外へ走っていくのが見える。

「先輩今日は早いなあ…」

その正体は千歌だった。もつとも千歌と梨子以外に他に浦の星の生徒はいない訳だし、当然と言えば当然なのだが。

そんな時、遥の携帯に一通のメールが届く。この前の説明会の延期といい、朝一で入る連絡にいい思い出がないので今度は何事かと思いつつながらメールを開く。

「そっか、できたんだ…」

そう呟いて携帯を置いたのだった。

「ふんふふくん♪」

「随分ご機嫌ですわね…」

放課後部室でそうダイヤが呟く、全員の視線の先には鼻歌交じりに部室の窓を拭いている千歌の姿があった。

「こんな時に…」

「もしかして忘れてるのかも」

「その可能性が高い気がする…」

そう善子と梨子、そして曜も口々に言う。

「千歌ちゃん、今日何の日か覚えてる？」

そう曜が確認するように声をかけると千歌は振り返ると。

「予備予選の結果発表の日でしょ？」

と不思議そうに答える。「おお」と声を上げる面々の隣で「覚えていたずら」なんて花丸の驚きの声を上げる。

「き、緊張しないの…？」

「ぜんぜん」

ルビイに聞かれると、そう千歌は即答した。

「だってあんなにうまくいって、あんな素敵な歌を歌えたんだもん。絶対突破してる。昨日聖良さんにも言われたんだよ『私が見る限りなら、恐らくトップ通過ね』って」

「いつの間にそんな仲良く」

思えば9人で東京に行った時に彼女達と会う約束を取り付けたのも千歌だった。恐らく東京のイベント以降連絡を取っていたのだろうと遥は納得する。

そんな時、パソコンからメールが届いたことを知らせる通知音が鳴る。「きたー」とパソコンの前に座っていたルビイが嬉しそうに声を上げるとそのメールを開く。

そのメールの中身は、予選結果を記載したサイトへのURLだった。

「い、行きますー！」

そう言つてルビイがサイトを開く、その後ろで全員が固唾を飲んでその結果に注目する。

エントリーNo.24 A q o u r s 予選通過

サイトを開いて最初にこの文字列が目飛び込んできた。

「おおー！」

「もしかしてトップってことっ？」

そう千歌と梨子から喜びの声上がる。

「やったずらー」

「うむ、よきにはからえ」

「鞠莉！」

「オーイエス！」

花丸が果南に抱き着き、善子と鞠莉はなんか墮天使ぽい？ポーズをとっている。

「ダイヤさんも！」

「は、はあ…」

千歌に声をかけられたダイヤは、ハイタッチに応じるがどこかぎこちない様子だった。

「前途多難だよ」

折角予備予選を突破したのに、千歌は机に突っ伏していた。

「今度は何？」

「ほら、予備予選と説明会とふたつもあったでしょ？だからお金が…
今度は一切何事かと梨子が聞くと、千歌はそう答える。

「この前千円ずつ入れたのに…」

「もうなくなっちゃったの？」

そう果南と花丸が聞く。確かにライブへ参加するために移動費や参加費だけでなく。衣装などの準備にもお金がかかるので、学校から割り振られる部費以外にも自分たちで出し合って何とかしてきたのだが、やはりそれでも追いつかなくなってきている。

「このままだと、予算が無くなって仮に決勝に出場したとしても…アヒルさんボートで移動…なんてことに」

「沈むわい！」

なんてやり取りを花丸と善子が始めるが、ただの笑い話では済まなくなりつつあるのも事実だ。

「いくら残ってるの？」

そう言って梨子が机の中央に置かれていた、うちっちーを模した貯金箱をひっくり返すと。「ちやりん」といった音を立てて五円玉が一

枚転がり出てくる。

「オウ！綺麗な五円玉デース」

「(ぎゅ) (ぎゅ) (ぎゅ) 五円!？」

何が珍しいのか喜ぶ鞠莉と反対に、残額がこれだけだという事実に驚くルビィ。

「ご縁がありますように」

「ソーハッピー!」

「言ってる場合か!!」

能天気な曜と鞠莉に善子がツツコミを入れる。正直ちよつと珍しい光景だなんて思っていると千歌が「どうしたんです?」とダイヤの顔を覗き込む。

「え?…いや、果南さんも鞠莉さんも随分皆さんと打ち解けたと思いますして…」

そう答えるダイヤだったが、心なしかあまり嬉しそうには見えなかった。

「果南ちゃんはどう思うずら?」

「そうだねえ…」

「果南…ちゃん?」

花丸の果南に対する呼び方が気になったのか、そう小声で反芻するダイヤの様子に何人かは気が付いていた。

「なにとぞ5円を10倍…いや100倍に…」

「100倍は500円だよ」

そう曜が指摘する。全員で淡島に移動したのはいいのだが、千歌にあてがあるのかと思えば神頼みだった。「いきなり神頼み?」と梨子も不満げだったが。

「それに神頼みするくらいだったら…」

そう言うのと全員の視線が鞠莉に集中する。

「鞠莉ちゃん!」

皆が口をそろえて彼女へそう訴えかける。

「小原家の力は借りられませーん！」

「ですよね…」

当然の如く突っぱねられてしまう。まあ借りられるのなら今現在資金難に陥ったりしていいない。

「鞠莉…ちゃん？」

再びそう反芻するダイヤの声は、談笑している他のメンバーの耳には今度は届いていなかった。

「バイト…ですか？」

翌日沼津で練習を行っていた際、練習場所の施設の屋上の庭園で休憩していた際曜にアルバイトを提案された遙が、そう聞き返す。

「しかたないわよ…」

そう返したのは梨子だったが、確かにそうなのだ。もう自分たちのお小遣いでは間に合わない、なら稼ぐしかない。

「あら、今度は何ですか？」

そんな時だった。体をくねらせながらダイヤがわざとらしく聞いてくる。

「お腹痛いんですか？」

「違いますわ！」

千歌にはそう見えていたらしい。ダイヤはすかさず否定の言葉を叫ぶが、すぐ咳払いをして取り繕うと。

「い、いえ…何か見てらしたような…」

「はい、内浦でバイト探してて。コンビニか新聞配達かなあつて」
そう言つて曜が、先程まで読んでいたタウン誌を見せる。

「なら、沼津の方が良いかもしれないわね」

そう笑顔でダイヤは告げる。機嫌がいいのか悪いのか判断しかねる彼女の様子に、遥は少し不気味に思っていたが二年生3人は感じていないようだった。

「沼津かあ…」

「沼津なら色々あるよ」

そう考え始める千歌に、曜はタウン誌をパラパラと捲ると沼津でのバイト求人を見せてくれる。

喫茶店や花屋、変わりどころでは写真のモデルなど内浦と比較すれば様々な選択肢がある。それを見て千歌は目を輝かせる。

「おお、何か楽しそう！バイト先は沼津に決定！」

「ぶつぶーですわ！」

千歌の安直な決定に思わず大声をだすダイヤに、4人はびつくりして視線を彼女へ向ける。

「安直すぎですわ！バイトはそんな簡単なものじゃありません。大抵週4日からのシフトですので、9人揃って練習というのも難しくなります。大体、何でも簡単に決め過ぎてはいけません、ちゃんとなさい！」

そう捲し立てるダイヤに気圧されるが、ダイヤは「しまった」といった表情を浮かべるが。

「確かに、ダイヤさんの言うとおりね」

「さすがダイヤさん」

そう梨子と千歌が反応すると、「でもじゃあどうするの？」と曜がアドバイスを求める。

「フリーマーケットというのはどうでしょう？それなら短時間でお金も集まりますわ」

「なるほど…確かにそうですね」

結局その日は何時フリーマーケットがあるから、その日に持ち寄つて出品するかという相談で休憩時間を使い切ってしまった。

その日の夜の出来事だった。遥は夕食後、母に「ちよつといい？」と呼び止められた。

「どうしたの？母さん」

「お母さんずっと心配してたの、本当に遥はこれでいいの？って」

そう神妙な表情で母親に告げられ、遥は疑問符を浮かべる。

「ここに引越したのも、今遥がやってることも……」

引越したのは梨子のスランプと、親の仕事の都合が重なったからだった。遥はリパルサーリフトの件から正式にアルケミースターズのメンバー公表された。その活動も、東京にいた方が都合がよかったのも間違いない。

それに今やっていることのもう一つは、A q o u r s のマネージャーの事だろう。

「僕は今幸せだよ？だってここにきて出会った人が、僕を変えてくれたから。だからここにきてよかった、本気でそう思ってる」

そう遥は静かに答えた。内浦に引越してきて、浦の星に入学して、ガイアの光を手にした。それだけじゃない、A q o u r s との出会い。そしてもう一人のウルトラマンであるアグル―博樹との出会いが、今の自分を創り上げてくれた。

だから今自分は幸せだって、そう今なら胸を張って言える。

「そう、なら良いの。」

そう言つて、それ以上何かを聞くことはしなかった。

「でも、ありがとう。僕のやりたいことやらせてくれて」

「遙がやりたいこと、お母さんは応援してるから」

「うん、ありがとう。ホントに」

そうほほ笑んだ。でも、自分がウルトラマンだとは言えなかった。

「やっぱり、お母さんには言えない?」

自分の部屋に入ろうとした時、梨子にそう声をかけられた。恐らく聞かれていたのだろう。

「うん…アルケミースターズの事は言ってるしこの事も言ったらきつと反対されるから…」

「そう…でもいつか自分で伝えるのよ?」

「うん、わかってる…」

そう答えると、梨子の返事を待たずに自室に入る。

その週末、フリーマーケットが沼津の公園で行われるのでみんなで出店することになったのだが、遙は堤に呼ばれジオベースに訪れていた。

「悪いな、折角の休日に」

やってきた遙に、開口一番そう告げた。

「大丈夫ですよ、話はダニエルから聞いてます。出来たんですね」

「そうだ、君はリパルサーリフトの件もあるし。一度君にも実物を見て欲しくてね」

そう言うと、ジオベース内ですでに発進態勢だった大型輸送機『ピースキャリー』に乗せられる。これから案内される場所を、遙は知っていた。

「これから行くのは―「エアリアル・ベースですよね？」

堤が行き先を教えようとすると、遙がそう食い気味に答える。よほど興奮しているらしい。そんな遙に苦笑いを浮かべるが、堤は話を近づけた。

「そうだ、この前のファイターへのアドバイスのお礼もかねてコマンドーが是非君にも一度見てもらいたいと言っていな」

「ありがとうございます、でも本当に完成するなんて…」

そう遙は感慨深げに呟くが、この大型輸送機もファイターを戦闘空域まで搭載して飛行することが出来る等、かなり高性能な期待となっている。

赤道軌道上の成層圏まで飛ぶと、全長600mの空中要塞『エアリアル・ベース』が浮いていた。

ここから、有事の際は世界中どこにでも素早く出撃できるようになっている。浮遊している仕組みはファイターと同様のリパルサーリフトによって浮力を得ているのだ。

「ご足労感謝する、XIGコマンドーの石室だ」

指令室に案内された遙を迎えたのは、コマンドーを名乗る遙の親より少し若いくらいの男性だった。ベージュの制服に身を包んだ彼は、そう名乗って手を差し伸べる。

「初めまして、桜内遥です」

遙も名乗ると、その手を握る。その後、艦内を一通り案内された後最後にファイターの格納庫に通される。

「ここが格納庫だ、といってもファイターはジオベースでも見たな」

そういつて格納庫を案内されるのだが、ファイターSS一機とファイターSG二機の三機編成で出撃する。そしてファイターはチーム

ライトニング、チームファルコン、そして女性のみのチームクロウの3チームある。

つまり全部で9機必要なわけだが、SSともSGとも違うシルエツトを持つ黒いファイターが一機存在していた。

「あの黒いファイターは？」

「あれはファイターEX。一応私の専用機なんだが、ここかピースキャリーで指揮を執る事が多いからな実践に出したことがないんだ」
遥に聞かれ、堤はそう答えるが遥は「でも拡張性は他の二種よりあるんですね」などと整備中の機体をじろじろ観察していた。

「流石アルケミースターズといったところだな、高校一年生とは思えない」

「よく言われます、歳不相応だつて」

そう言つて遥は笑つて見せると、「乗つてみるか？」と言われたので「いいんですか!？」と目を輝かせてEXのコックピットに座らせてもらったりしたのだが、終始ごく満悦だった。

そしてその後、前回できなかったファルコンとクロウの隊員とのファイターについての話などを行った。その時またシユミレーターのスコアを更新して「もう隊員になる？」などと冗談を言われた。

一方でAqoursの9人は撤収作業を行い、その日の売り上げを確認していた。

「アヒルボート決定ずら…」

そうそろばんを叩いていた花丸が呟く。最初に値段をきちんと設定していなかったせいで、女の子に根負けしてぬいぐるみを5円で売ってしまったり、今度はダイヤが今度は強気すぎて客に引かれてしまったりで芳しくなかった。

結局その日の売り上げは500円、確かに百倍にはできたわけだがこれでは全く解決にはなっていない。

「鞠莉はそんなの持つてくるし」

そう言つて果南が鞠莉の方へ視線を向けると、彼女は自身をモチーフにした像を軽トラの荷台に積みこんでいた。正直こんなところで売るような代物ではない。

「これ売る気だったの？」

そう車を出してくれた千歌の姉である美渡も呆れ気味だった。しかしそれが気に入らなかつたのか当の本人は。

「それを言ったら善子も売り上げナッシングです！」

なんて言つて善子の方を指さす。善子が持ってきたのは段ボールいっぱい詰められた黒い羽根だった。数は解らないが一つも売れなかつた。

そんな時突風が吹き、段ボール内の羽が巻き上げられる。

「ふふふ…まるで傷ついた私の心を癒してくれるかのように、美しい…」
「バカな事言つてないでさっさと拾いな！」

そう美渡の怒声が飛ぶと、慌てて拾い集めるのだった。

「果南ちゃん」

「ん？」

ふと千歌に声をかけられた果南は彼女に向き直る。

「ダイヤさん何かあつた？」

「どうして？」

「なんとなく」

そう思つたのは、最近の彼女の様子がどこかおかしいと感じていたからだ。でもどうおかしいのかうまく言い表せない。だからそう曖昧な答え方になつてしまう。

「千歌はそういうところ、不思議と鼻が利くよね」

「それほめてる？」

「褒めてるよ。心配しないで、わたしと鞠莉でちゃんとやっつくから」
三年生三人で解決させる、そう言うと千歌はそれ以上追及することは無かつた。

「話つてなんですか？今しなければならぬのですか？」

そうダイヤが果南と鞠莉に対して不満げに言う。果南と鞠莉が「三人は用事があるから」といつて下級生6人には先に帰ってもらったのだ。

「やっぱりダイヤ、何か隠してるでしょ？」

「下級生と仲良くしたいのなら、そう言えばいいのに」

そう果南と鞠莉がたたまかける。

「違いますわ、私は別に……」

そう言つて口元を人差し指でかきながら顔をそむける。

「どう？」

「ブランクデウス！」

「ダイヤはごまかす時、必ずほくろのどこをかくんだよ」

そう果南と鞠莉に言われその動作を止める。

「もう逃げられないよオ」

「さあ、話すがよい！」

「いえ、私はただ……」

「ただ？」

そう言つて中々話そうとしないダイヤに対して口をそろえて聞き返すと。

「ただ……、笑いませんか？」

「笑う？」

「そんな事するハズありません！」

「でも……」

中々言おうとしないダイヤに段々イライラしはじめる。

「あーもう」

「何年の付き合いだと思ってるの!？」

そう果南と鞠莉に強く言われ観念したのか、ダイヤはやっとその重い口を開いた。

「じゃあ、言いますけど……」

今はいないが方が一通行人に聞かれるのも嫌なのか、顔を近づけて小声で話すダイヤに鞠莉と果南は顔を近づけて続きを聞く。

「笑わない」そういう約束でダイヤは白状したわけだが、それは無理な

相談だった。その場には果南と鞠莉の笑い声と、ダイヤの怒りの声が響くのだった。

34話　ダイヤさんと呼ばないで／ガイアに会いたい！

「それにしてもダイヤが…」

「ダイヤ『ちゃん』って呼ばれたいなんてね」

そう果南と鞠莉が漏らす、笑うなどといったのにこの話題になると2人はわなわなと肩を震わせてその顔をにやけさせる。

「だから別に呼ばれたいわけではありませんと、あれほど言ったでしょう。ただ、私だけ違うというのは…」

「そんなのどうだっていいじゃん」

ダイヤはそう言いかけると果南に遮られてしまう。二人にしてみれば気にするべきことには感じられなかった。

「よくありませんわ。こんな形でメンバー間に距離があるのは、今後の為によくなくなかないというか…」

「羨ましん「違います！」」

鞠莉にそう茶化されると彼女の頬をつねって、それを遮る。

「それより、どうしてこんな所に呼び出したのです？」

そうダイヤは鞠莉から手を放すと、ふと気付いたかのように聞いてくる。こんな所—というのは十千万から近い場所にある水族館だ。

「そっか、ダイヤはまだ聞いてないんだった」

そう果南が思い出したかのように言うと、鞠莉が説明してくれる。

「曜からの連絡でイベントがあるから、今日一日バイトを手伝ってほしいって」

「どこでのですの？」

「(トトト)」

「(トトト)？」

ここでバイトと言われてダイヤは状況が呑み込めない様子だったが、辺りを見渡すと引率の先生に引き連れられ園児が入場していくのが見えた。

「今日一日、みんなでアルバイトだよ」

「距離を縮めて、ダイヤちゃんと呼ばれるチャンスだよ」

そう果南と鞠莉に言われ、ダイヤはみんなから『ダイヤちゃん』と呼ばれるところを想像して思わずにやけてしまう。

「べ、別にそんなの求めてるわけではありませんから」

そう言つて誤魔化そうとするが、口元のほくろをかいているもんだから説得力は皆無だった。

「曜さんは随分詳しいんですね」

「前、バイトしたことがあるんだってさ」

曜が主体となつて皆に指示を飛ばしているのを、ダイヤは感心したように呟くと果南がそう教えてくれる。

当の曜はマスコットの着ぐるみを着て、園児の相手をしていた。こういう時彼女のコミュニケーション能力の高さは感心させられる。

「さ、私たちについても何にもならないよ？」

そう言つて鞠莉がダイヤの背を押す。今日は鞠莉と果南以外と一緒にの班になるようにそれとなく2人が気を利かせて、ようやくそれぞれ振り分けられた仕事をこなす。

「うまくいかない？」

そうペンギンに水を浴びせていた鞠莉がそう意外そうに言うと、果南は「やっぱり」といった反応を示す。

千歌と花丸と最初は売店を任されていたダイヤだったが、最初は普段の感覚で真面目に仕事をこなしていたが。

このままでは堅いと思われると思い、鞠莉に言われた「話しやすい話題を振る」を実践しようと思ひ「今日はいいい天気ですわね」とか「花丸さんはうどんはお嫌い？」とか話を振ってみたはいいいが結果2人に

『怒っている』と誤解させてしまった。

さらにその後清掃に回ると、アシカに餌をやりに来たルビイと梨子がアシカを怖がって調教用の笛を落として逃げてしまう。それを拾って2人を追い回すアシカをプールに戻してみたり。

頼りにされるのは悪い気がしないが、だがこのままだといつまでも自分はダイヤ『さん』から逃れられない。それはできれば避けたい。

「大体ダイヤは、自分から近づこうとしないからね」

どうしてやはりと思ったのか、そうダイヤに尋ねられた果南はそう答えた。

「自分からいかなきゃ始まらないよ?」

そうダイヤに対して告げる、昔から鞠莉と果南にべったりで自分から他の人間に対して話しかけて距離を縮めることができなかつた彼女は、どうすればいいか解らないから苦労しているのだ。

「そう言われましても、どうすれば…」

「簡単でしょ?まず…」

そう鞠莉がダイヤに対して知恵を授ける。

アルバイトといつても今日だけなので、園児の相手や清掃。そういった簡単な作業が主となった。

「遥くんもこっちで園児の皆の相手をしてもらっていい?」

「いいですけど…」

曜にそう話を振られた遥は、善子や曜と同様園児たちの相手をしてきた。

「あのお魚はね—」

「???’

ただ、話し相手になつたりしていたのはいいのだがすぐ小難しい説明を始めようとする遙に、園児たちは疑問符を浮かべること多かつた。

「墮天使、降臨―」

善子は善子でそんな様子でかつ黒い羽根のようなものを背負つてポーズをとっているのを子供は目を輝かせてみているが、先生方はそれを微妙な心境で眺めているのが目を見ればわかる。

「ウルトラマンガイアだぞ〜!」

「アグルだぞ〜!」

なんて子供たちがガイアのクアンタムストリートの構えを取つたりしてはしゃいでいるのが視界に映つた。暫くその様子を眺めていると当人と目が合う。

「お兄ちゃんもウルトラマンガイア好きなの?」

「えつと…」

まさか本人ですなんていう訳にもいかず、何と答えるべきか迷っているとその子が続ける。

「僕たち、ウルトラマンガイアに会いたいんだ」

「どうして、ガイアに会いたいなの?」

そう少年に目線を合わせるために屈んで遙はそう聞き返す。

「ぼく、お礼が言いたいんだ」

そう少年は遙の目をまっすぐ見てそう告げる、まさか本人に言っているとは知らずに。遙はそれを聞いてほほ笑んだ。

「そっか、きつと君の思いはウルトラマンに届いてるよ。」

「本当?」

「本当さ、だってウルトラマンは僕たち人間の事を大切に思ってる。だからどうしようもなくなつた時に力を貸してくれるんだよ」

そう遙が言うと、少年の望む答えだったのかはわからなかったが「ありがとうお兄ちゃん」そう言つて友達の輪に戻つて行つた。

「嬉しそうね」

「そう?」

少年が去つたことで、しゃがむ必要もなくなつたので立ち上がった

遙に善子がそう声をかける。

「でもあの子らだけじゃなくて、私達もみんなガイアに感謝してるのよ」

「…ありがとう」

急にそう言われた遙は少し黙った後、一言そう礼をいったが、その顔は赤らんでいた。

「珍し、照れてんの？」

「そ、そんなんじゃない！ほらサボってないで仕事に戻るよ」

それをみた善子が面白そうにからかってくると遙は顔を背けてそう言うのと、子供たちが行った方に向かって行く。

『『ありがとう』なんて、こっちのセリフなのに』

そのつぶやきも、園児の騒ぎ声に掻き消されてしまう。

それから暫くすると、曜が風船をもつて戻ってきた。「遙くんも配る？」と聞かれたのでいくらか分けてもらって園児に対して配っている。」と聞かれたのでいくらか分けてもらって園児に対して配っている。」

「ちゃんとみんなの分あるから、ちゃんと並んで」

なんて少し前の自分ならできないだろうな。なんて内心苦笑しながら遙は園児達の相手をしていく。こうやって人前で話せるのも、みんなのお陰で変わったからだろうか？なんて少し考えてしまう。

そんな時だった。

「よ、曜…ち…」

「ん？ダイヤさん何か言いました？」

子供たちに風船を配っていると、ふと後ろから呼ぶ声が聞こえた気がして振り返るとそこにはダイヤが居た。

「いえ、その…」

そう言つて口ごもるダイヤに少し不思議そうにするが、多分子供たちを前に恥ずかしがっているのだらうくらいに思つて、「ダイヤさんも配りますか？」そう風船を差し出して聞いてみた。

「あ、ありがとう…曜ちゃん…」

そう消え入るような声でダイヤは風船に手を伸ばすが、思わず曜は

風船を手放してしまった。ダイヤが受け取る前に曜の手を離れた風船は天井目指して浮き上がっていく。

「善子ちゃんも、おアルバイト頑張りましょうね」

なんてスキップしながら善子の横をスキップしながら通り過ぎていく。善子も思わず表情が固まってしまう。

「遙くんも」

「え、頑張ります?」

そう言っただイヤはその場を去って行った。多分自分の持ち場に戻ったのだろう。だが曜と善子の周りには変な空気が漂っていた。

「ヨハネよ…」

「そこ?」

「違った?」

今の瞬間に強い違和感を感じた2人は近寄るとそんなやり取りが始まる。

「でも、今の背中に冷たいものが走る違和感…」

「わかる…」

同じものを感じていた善子に同意して曜は頷く。

「天界からの使者によってもう一つの世界が顕現したかのような…」

「それはわからない」

善子の言うことが解らない曜は今度は首を横に振る。

「遙くんは何か思わなかった?」

「何がです?」

曜はそう遙に聞くが、遙はキョトンとした様子だった。

「嘘でしょ…?」

「流石に気が付きなさいよ…」

そう言っただけ2人に呆れられるのだった…。

「お姉ちゃんが変?」

「何か凄く怒っていたような…」

「悩んでいるような…」

ダイヤの様子がおかしい。他の皆もそう感じたらしく、何か知らないかルビイに聞くと心当たりがないようだった。

花丸と梨子がそう口々に言うが、ルビイにはどちらも心当たりはなかった。

「やっぱり何かあったんだよ」

皆そう感じているなら間違いない。そう思った千歌がそう告げる。

「甘いわ、あれは闇に染まりし者のほほ笑み…」

「か、どうかは解らないけどね」

得意気に口を挟む善子に、そう曜が苦笑いを浮かべながら付け足す。

そんな一年生と二年生の様子を見ていた果南が「あちゃ〜」と頭を抱える。暫くダイヤの様子を見て、余計な口は挟むまいと思っていたのだが、どうやらかなり拗れてしまったらしい。

「どうする?..」

「はあ…これ以上混乱させても仕方ないんじゃない?..」

鞠莉に聞くと、そのため息をつきながらやれやれといった様子で返事が来た。

「ダイヤ…ちゃん?..」

事情を説明された千歌が、そう呟くと、果南は補足を入れてくれる。

「みんなともう少し距離を近づけたってことなんだと思うんだけど」

「それで…」

そうルビイも納得したように言う。様子がおかしいのは最近薄々気が付いてはいたのだが、理由を聞いて納得がいったらしい。

「じゃあ、あの笑顔は怒っていたわけじゃなかったら?..」

「でも、可愛い所あるんですね。ダイヤさん」

そう花丸と梨子も安心したように言う。

「言ってくればいいのに」

「でしょ?..」

そう曜が言うと、果南も同意する。

「真面目でちゃんとしてて、頭が良くてお嬢様で、頼り甲斐はあるけれどどこか雲の上の存在で」

幼いころから今の様に、常にみんなの代表として前に出て発言する。皆を引っ張っていく存在だった。大人びていて、同級生たちから見ればどこか遠い存在。

「皆そう思うから、ダイヤもそうしなきゃってどんどん距離を取っていった」

「本当は、凄く寂しがり屋なのにね…」

そう果南と鞠莉が教えてくれた。

「こら待ちなさいー！」

ふとそんな保育士の声が聞こえ、皆声のした屋外プールのエリアの方に向かうと、園児たちが先生のいうことを聞かずに好き勝手遊びまわっていた。

もうすぐショーの時間なのだが、他の客が居らず貸し切り状態なのが幸いだった。だが今の状態を放っておけない。

梨子も「こら危ないわよ」といつて走る子供を止めたり、皆それぞれ止めようと注意して回るのだが言うことを聞いてはくれない。

「みんなちゃんとしてよー！」

一人だけ、その声を上げる少女がいた。だが他の園児の耳にその言葉は届かず、何度も繰り返し返していた少女もだんだん声が小さくなり、目に涙を浮かべ始める。そんな少女の姿が、ダイヤには自身の幼少期が重なって見えた。

「皆、スタジアムに集まれー！」

その声を聞いた園児たちはそろそろとスタジアム前に集まる。その声の主はダイヤだった、いつの間にかスタジアムのステージに昇っていた彼女が園児たちの気を引く。

「園児の皆、走ったり大声を出すのは他の人の迷惑になるからぶつ

ぶーですわ。皆、ちゃんとしましようね」

「はいー！」

素直に園児たちが応じてくれてほっとしたが、このまま放っておいてもまた元に戻るだろう。そう思っただけは解らないが、ダイヤはそのままステージ上で舞踊を踊る。

扇子もなければ服装も水族館の従業員の制服だから華やかさに欠けるかもしれない。そう思ったダイヤだったが、杞憂だったようだ。園児たちは目を輝かせてダイヤの方を見ている。

すると先程の少女と目が合ったのでウインクした。『どうか今日一日楽しんで』と思いを込めて、伝わったかは解らないが少女の顔に笑顔が戻った。

そんな時だった。突然警報が鳴り響いたのは。

「この音――」

『緊急避難警報発令！市民の皆様は避難してください！繰り返します――』

「何だってこんな日に……」

そう遥は歯噛みするが、悔しがったところで状況は好転しない。今できることは園児の皆を引き連れて避難することが先決だ。

「みんな落ち着いて！先生やスタッフの人の言う事を聞いて！」

「みんなこっちよー！」

突然の警報に泣き出す園児もいたが、皆の活躍ですぐに水族館の外に全員で出ることが出来た。

そんな時、街の方へ空から何かが凄まじい速度で降ってくる。

「なんで大気の摩擦で燃えないんだ？」

ワームホールが開かれた様子は無く、宇宙から飛来してくるなら大

気の摩擦熱で燃え尽きる。もしくは減速する筈…。

「見て、何か輪つかみたいなのがたくさん」

園児がその物体が落ちてくるであろう場所を指さした。そこにはその物体の通り道を作るかのように光の輪のようなものが連なっていく。

「あの中を通ることで大気の摩擦を逃れてる、一種の起動エレベーターなんだ」

「分析してる場合じゃないぞら」

そう花丸に突っ込まれるが、遂にその物体が着地した。

首がなく体の中心にある巨大な口、尖った頭部に縦に並ぶ4つの順番に点滅する青い菱形のクリスタル。そして巨大なハサミ状の腕。それが宇宙から飛来したものの正体だった。

「大変！園児が一人いないんです!!」

そんな時、保育士の叫び声が木霊した。先程の皆を注意していた女の子が見当たらないらしい。

「私が行きます、みなさんは先に」

「僕も行きます!」

ダイヤがそう言いだすと、遙もそれに乗り。二人は頷くと制止する大人の声を無視して園内に戻る。残りのメンバーは2人を信じて園児たちを連れて少しでも遠くへと避難するべく走る。

「みんな…どこ…?」

「いた！ダイヤさんあそこ!」

泣きながら皆を探す少女を見つけた遙は、少し離れた場所と同じく探していたダイヤに声をかけると、少女に駆け寄る。

「大丈夫?もう大丈夫だからね、お兄ちゃんたちと一緒に逃げよう?」

「ウルトラマンガイア、来てくれるよね?」

「大丈夫ですわ、ガイアさんは必ず助けに来ますわ。だからあなたも勇気を出して」

ガイアは来てくれるか?そう問われた遙は返答に困ってしまうが、ダイヤはそう優しく告げると

遙に目配せする。

「ダイヤさん、その子を頼みます。僕は他に逃げ遅れた人がいないか見てきます」

「お願いしますわ」

勿論嘘だ、その少女以外は全員外に出ていることは確認済みだった。だがそんな事を少女は知らない。少女の手を引いて避難するダイヤとは反対方向に駆け出した遙は、大地の光を開放した。

怪獣は口から火球を吐き、街を破壊しながらこちらへ向かってくる。園児たちは迫りくる脅威に恐怖し、ガイアの名を叫ぶ。

その時だった、こちら目掛けて放たれた火球を赤い光がぶつかり爆発が起きる。その中から、ウルトラマンガイアが現れた。

「ガイア…」

「頑張れー！」

ガイアの出現に喜び、園児たちから次々と応援の声が木霊する。

「デヤツ！」

ガイアは怪獣に対して構えると、怪獣は口から火球を吐く。今度はそれを渦上のバリアで弾くと、地面に着弾し土煙で怪獣を見失ってしまう。

頭上の気配に気が付いたガイアはとつさに半歩下がると、目の前に怪獣が着地する。そしてすかさずガイアに蹴りを食らわせる。

(ツ…重い…！)

咄嗟に両腕をクロスしてそれを受けるが、その短い脚にどこにそんな威力が？そう思わずにはいられない。

そして体勢が崩れたところに、ハサミで突きを食らわせてくる。それに再び態勢を崩され後退すると、今度はその尖った頭部でガイアを貫かんと突撃してくる。

「グツ…ウオオ…！」

何とか両腕で搦んで止めるが、じりじりと追い込まれてしまう。そしてダメ押しとばかりに口を開いて火球を吐こうとすると、下あごを蹴りあげて口内でそれを暴発させて防いだ。

そして今度は逆に後退した怪獣に連続で二発回し蹴りを決めると、怪獣の身体は地を転がる。その隙にガイアはスプリーム・ヴァージョンへと変化を遂げる。

「デヤッー」

怪獣へ駆け寄ると飛び蹴りを食らわせ、両の拳で腹部を殴りつけ、回し蹴りを食らわせる。さらに追い打ちをかけようとしたところにカウンターで体を挟まれる。

しかし、スプリームのパワーに物を言わせ無理やり押し返すと膝蹴りを食らわせ脱出し、脚を蹴り飛ばして怪獣をなぎ倒した。

「ウオオオ……！」

地に伏した怪獣両足を掴むと、バタバタと手足を振って抵抗する怪獣を持ち上げ、顔面から地面に叩き付ける。更にもう一度叩き付けると、怪獣の抵抗は少なくなる。

今度は怪獣をジャイアントスイングで怪獣を投げ飛ばす。よろよろと起き上がった怪獣は、ガイアには敵わないと悟ったのか、空から連なった光の輪を再び呼び出すとそれに入り空へと昇っていく。

ガイアは飛び立つとその下に入り込み、両腕を胸の前で組むと、赤と青の光を纏ったブーメラン状の光の刃を発射した。

それは光の輪を次々と破壊すると怪獣に追いつき、怪獣の身体を引き裂き巨大な爆発とともに完全に消滅させた。

「あれは光の刃……シャイニングブレード！」

「そのまんまですら」

その技を見た善子が大げさなりアクションを取りながら、勝手に技名を付けるが花丸にそう突っ込まれる。もつとも「かつこいい！」と園児には好評だったが。

「よく頑張りましたわね」

少女を連れ添って逃げていたダイヤが、そう言って少女を撫でてあげる。だがまだみんなと合流するには距離がある。ここで待っているか悩んでいるとガイアが戻ってきて手に乗るように促した。

その後、皆の元へ2人を乗せて運んだガイアだったが、「いいなー」

という園児たちの声を聞いて子供たち全員を乗せて暫くの間空を飛んで回った。

空の景色に喜ぶ皆だったが、昼間遥と話をした少年はガイアの目を見て「ありがとう」とそう言った。ガイアはそれに静かに頷くと、少年も空の景色に胸躍らせるのだった。

「結局、私は私でしかないという訳ですね…」

アクションは多々あったが、何とか一日乗り切ったダイヤは水族館の外でそのため息交じりに呟く。

今更変わることはできないのか？そう思うと、どこか馬鹿馬鹿しくなる。

「それでいいと思います」

不意に後ろから聞こえてきた声に振り返ると、声の主は千歌だった。それに、Aqoursの皆が居た。

「わたし、ダイヤさんはダイヤさんでいて欲しいと思います。確かに果南ちゃんや鞠莉ちゃんみたいに冗談言ったりできないなって思う事もあるけど…でも、ダイヤさんはいざという時頼りになって…今日だって」

園児たちを大人しくさせたり、助けるために率先して園内に戻った。今日というのはそう言う事だろう。

「だからみんな安心できるし、そんなダイヤさんが大好きです！だからこれからもダイヤさんでいてください！」

そんな千歌の優しさに、思わず涙が出てしまい。なかなか振り向けなかった、だから涙が乾くのを待ってから振り向いた。

「わたくしはどっちでも良いんですわよ？別に…」

そう言って口元のほくろのあたりを人差し指でかくと、癖を理解している果南と鞠莉は思わず吹き出してしまう。それに他の皆は少し

キョトンとするが、皆笑うと。千歌の「せーの！」という声に合わせて

「「ダイヤちゃん！」」

みんなで呼ぶと、ダイヤも嬉しそうにそれでいて照れ臭そうに笑った。

35話 大地裂く牙／犬を拾う。

その日は、午後からどんどん雨が強くなっていった。季節の変わり目ということもあるのかもしれないが、やはり雨の日はどうも好きになれない。

「また、雨強くなってきたね…」

窓から外を眺めながらルビィがそう呟く。今日は曜の父の知り合いが借りている沼津の練習場所なので屋内だが、この感じでは帰る頃にはもっと雨が強くなっているだろう。

「今日は、無理して続けない方が良さそうですね」

ホワイトボードを使ってフォーメーションの相談を梨子としていたダイヤがそう告げる。帰りに雨に打たれて体調を崩しては元も子もない。

「もうすぐ地区予選なのに…」

「入学希望者も50人超えてきたんでしょ？」

残念そうに千歌が言うのと、曜もそう言ってまだまだ頑張ろうアピールをしてくる。

「まあ気持ちは解るけど安全第一、今日のところは終わりにしよう」

そう果南に言われてしまえば、それ以上は何も言わず。今日の練習は終わりとなった。

「果南ちゃんと梨子ちゃん遥君はうちの車ね、曜ちゃんも乗ってかない？」

「いいの？じゃあお言葉に甘えて」

千歌の家と、鞠莉の家が車で迎えに来てくれたのでお言葉に甘えて車に乗り込む。

「善子ちゃんは？」

「嵐が墮天使の魂を揺さぶる！秘めたる力がこの羽に宿る—」

「ふざけてる場合じゃないよ—」

いつも通りと言えばいつも通りな善子のセリフを受け流しながら千歌も自分の家の車に乗り込む。

「拠点は至近距離にあります。いざとなれば瞬間で移動できます」

「まあすぐ近くだしね」

小原家の車の後部座席に座るルビィがそう心配はしてなさげに告げる。まだこのくらいの雨なら問題ないだろう。

「ごきげんよう」と後部座席に座るルビィ、ダイヤ、花丸が言うのを手を振って見送ると。十千万の車に乗った面々がその後善子に手を振りながら走り出す。それを見送ると善子も帰路につくことにする。

「胸騒ぎがするこの空…最終決戦的な何かが始まろうと—」

そこまで言いかけて突風が吹く。想像以上に強い力に思わず傘が手から離れてしまう。

「あつこらー！待ちなさい！」

この傘結構高かったのに。なんて思いながら黒地にフリルの付いた傘を追いかける。傘は風が弱まれば止まるが、また少しでも風が吹けばそれに流されて転がっていく。

「何その動き？まさか運命的な何かが私を導いて…」

などと独り言を言いつつ傘の様子をうかがうと、電柱を囲うようにそびえるブロック塀に引っかけかかって傘が止まる。それをそーっと近づいて傘を手にとると、傘の陰になっていた場所に何かを見つけた。

善子は優しい気な笑みを浮かべてそれを見つめた。この出会いはきっと運命、そう感じた。

『静岡県沼津市の——町の地下に怪獣の生命反応をキャッチしたG・U・A・R・Dは来週、怪獣に対して地底貫通弾を使用することを明らかにしました。当日、近隣の住民はこの場所には近寄らないようお願いします。』

翌朝、ニユースをつければこんな話が舞い込んできた。

「どンドン物騒になってきたわね…」

「何もしてない地底怪獣を、いきなり攻撃するなんて…」

そう母と遥はそれぞれ感想を呟くが、母は「この日はとりあえず外出しないほうがいいかもしれないわね」と言ったのでそれに従うことにした。

「遥はやっぱりよく思わない?」

「うん、地底怪獣だって同じ地球の命なのにいきなり攻撃するなんておかしいよ」

朝バスを待っているときに、梨子にそう聞かれたので答える。

「でも、出てきてから騒ぎになって、怪我をする人が出たり遥が戦って何かあったらって思うと、私は間違っていないと思うわ」

「それは…そうなんだけど…」

そう歯切れの悪い返事しか、遥はできなかつた。でも遥の内心に合ったのは、このやり方を続ければ人類は巨大生物を地球上から抹殺しなければいけないくなるのでは?という疑念だつた。

「梨子ちゃん遥君、おはよう」

「おはよう」

「おはようございます」

その時、十千万から千歌が出てきてそこからは他愛もない話に変わり。普段通りの日常が始まっていくのだった。

「大丈夫、絶対動かないから」

曜がそう言っていたけを抑えている。すると梨子は恐る恐るしいたけに手を伸ばすが…。

「わんっ!」

「ひっ…やっぱり無理い!」

あと少しで触れられる、そう思ったがそこで吠えられると梨子は悲鳴を上げて離れてしまった。

「何騒いでんの?」

そう千歌の部屋から顔を出した遙に聞かれると、代わりに曜が答える。

「梨子ちゃんがしいたけと目が合って触れられるかもって」

「本当!?!」

それを聞いて千歌が部屋から飛び出してきて「どうぞどうぞ」としいたけを梨子に近づけるが、再び吠えられてしまい更に距離を取ってしまう。

「ダメー! やっぱ無理!!」

「しいたけ、梨子ちゃんの事好きだと思っけどなあ…」

「そんなことないでしょー!」

喚く梨子に千歌がそう言うが、あり得ないと梨子が噛み付く。こつちがこんな怖がっているのにと。

「そんなことあるよ。犬は見ただけで敵と味方を見分ける不思議な力があるって」

そう千歌は即答する。確かに吠えることはあれど、噛み付いたりしてきたのは見たこととは無いが。

「そろそろ始めるよ」

そうしていると果南が口を挟んできた。今日の目的は、梨子がいいたけを触れるようにすることじゃない。

「今日こそ決めないと、もう時間もないんだよ」

予備予選の次は地区予選だ。しかし、まだそこで披露する曲のテーマが決まらない。

「でもテーマって言われると…」

「かといって、暗黒というのはあり得ませんけどね」

そうルビィとダイヤが言うと、善子は「なんでよ!」と不服そうに言う。

「墮天使といえば漆黒。A q o u r sと共に歩んできた墮天使ヨハネ

の軌跡を――」

「やっぱり輝きだよー！」

「聞きなさいよー！」

善子を遮って千歌がそう言う。「まあ輝きって言うのは千歌がずっと追いかけてきてるものだもんね」そう果南も言うが「ですが」とそれをダイヤが遮る。

「Aqoursの可能性を広げるには、他にも模索が必要ですよ」

そう言ってダイヤが見せてきた、二つ折りのガラケーの画面には見覚えのあるスクールアイドルが映っていた。

「これってSaint Snowさんの？」

そう千歌が聞く、以前東京のイベントで聴いた曲とは違う曲調の曲だった。

「二つに留まらない多くの魅力を持っていなければ、全国大会には進めませんわ」

「そうだね、この前突破できなかった地区大会」

ダイヤの言葉に曜もそう同意するが、前回突破できなかった。その事実が重く押し掛かる、前よりもつと良いものを作らなければ突破できない。そう意識してしまうと中々思いつかない。

「新しい要素か…」

そう遥が呟くと、ふと近くから寝息が聞こえる。

「またこんなもので誤魔化して」

そう言って呆れながら梨子が、犯人である鞠莉の眼鏡を外すとその下に貼ってあった目のシールが剥がれる。

「待てば海路の日和ありだって」

そう苦笑しながらルビィが告げる。隣に座っていたし彼女には隠せずに口止めでもしたのだろうか？

「鞠莉ちゃん、長い話苦手だからね…ね、善子ちゃん」

そう言って千歌が隣にいる善子に話を振ったのだが、そちらを向くと善子の姿は無く代わりにしいたけがいた。

「善子ちゃんがしいたけちゃんに！」

「そんなわけないでしょー！」

驚くルビイに梨子もそう言うが、やはり犬が苦手なのでその表情は険しい。そうこう騒いでいると「騒がしいですネ」と鞠莉が伸びをする。流石に目が覚めたらしい。

「善子ちゃん？」

そんな時、ふと自身のスマホがメールの着信を振動で知らせてきたので花丸がそのメールの差出人の名を呟きながら、メールを開く。

「天界の勢力の波動を察知したため、現空間より離脱…？」

「どういうこと？」

メールを読み上げた花丸に千歌がそう問う、はたから聞いてても全く意味が解らない。

「要するに、帰る。つてことずら」

「普通にかけないのか…」

花丸に要約されて、ようやく理解する皆だったが同時に呆れてしまう。

「そう言えば花丸ちゃん、スマホ買ったんだ」

「無いといざという時に連絡が取れないからって持つように家族に言われたずら」

元々家に電化製品等があまりない花丸にとって、スマホも例外でなくあまり馴染みのない代物だったのだが。練習で帰るのが遅くなったり、このご時世だからと言われたらしい。恐らく後者が本音で、やはり娘が心配なのだろう。

「最初は使い方が解らなかつたけど、遙くんこういうのの扱いに慣れるから助かつたずら」

「あはは…まあ、こういう機会使うの好きだからさ？」

そう花丸に笑顔で言われるも、遙は若干引き攣った笑いを浮かべる。最初は善子が教えていたのだが、スクロールだのフリップだのと言った横文字を多用する善子に、花丸はただただ不思議な顔をするので「なんでわかんないのよ！」なんて言って匙を投げたので遙が教えたのだ。

その現場も、「年寄りにスマホの使い方を教える孫」といった光景に見えたのかなんとか…。これを当人たちに言うとな怒られるので、善子

ヤルビイを始めとしたクラスメイトの胸の内に秘められた。

その日の夜、遙は自室でダニエルと連絡を取っていた。遙としても聞きたいことが多々あったので、久しぶりに自分から約束を取り付けたのだ。

「地底貫通弾で、怪獣を倒せると思うかい？」

『あれは戦争で使用禁止になった大量破壊兵器だ。それをまともに受けて、ただで済む生物なんていない』

「でも、そんな兵器を簡単に使うなんて…」

『残念だけど、僕たちにその決定権は無い。G・U・A・R・Dは地底怪獣が、人間に危害を加える前に排除するつもりだ』

「そんな事…」

『もう怪獣が現れてからじゃ遅いんだよ。犠牲者を出さない為に、解ってくれ…』

そう言われてしまえば、もう遙は何も言えなかった。そして今、根源的破滅招来体が一体どこから来ているのかを判明させるために動いていることを聞かされ、その日の話は終了した。

「怪獣も、同じ地球の命なのに…」

そう呟く遙は、自分に何かできないか？そう考えるが、答えは出なかった。

そんな時だった、犬の吠える声が聞こえた気がした。

「しいたけがうちにいる？いや姉さんの悲鳴の方が先に聞こえるか」

なんて笑いながら、飲み物を取ろうと廊下に出ると梨子に遭遇する。

「は、遙？どうしたの…？」

「どう？って飲み物取りに行くだけだけど…ってどうしたの？」

遙が部屋から出てきたのに気が付いた梨子は目に見えて動揺していたが、気になるのはその手だ。ピンク色の紐を握りしめ、その紐は

梨子の自室へ伸びていく。

「いや、な…なんでもないわよ?」

「キャン!」

「は?」

そう言つて何やら誤魔化そうとする梨子を余所に、室内から何かの鳴き声が聞こえる。

「ちよつと見せて」

「ダメよ!だつて…」

「いいから!」

無理やり梨子の隣を通り抜け、室内で遙は信じられない物を目撃する。

「これは…」

そこにいたのは、ライトグリーンの小さいケージの開いた扉から出てきて動物用ビスケットを食べる白黒の体毛の小型犬だった。ピンクの紐はその扉を開けるのに使ったらしい。どうやって閉めるつもりだったのか…。

「どういふこと?」

「えつと…」

観念した梨子は、事の顛末を遙に説明する。

最近善子が拾ったらしいこの犬の面倒を暫く見て欲しいと言われたこと、善子のマンションは動物禁止で他に頼れる人が居なかった事。

「ねえ遙…?」

「嫌だからね」

「まだ何も言っていないじゃない…」

「大方、僕に面倒見ろつて言うんでしょ?僕の部屋。パソコンとか色々あるし、この子の毛とか入り込んで壊れたら嫌だもん。そもそも、嫌なら持つて帰つてこなきやいいのに…」

「そうなんだけど…」

「ともかく、僕の部屋には入れないでね」

そう言つて離れようとすると、その犬と目が合ってしまう。そして

遥は滅茶苦茶吠えられた。犬の方も遥はお断りつたらしい。

結局この後母親にもばれたが、梨子が面倒を見ることで落ち着いた。

それから数日が経過したある日の事、学校の屋上で練習を行っていた。沼津までの交通費を毎日払う訳にもいかなないのでの措置だった。

「ルビイちゃんもうちよつと右がいいかな？」

全体のフォーメーションを確認していた遥がそう告げる。

「前よりだいぶ良くなった」

果南もこちらに移動してみて、全体のバランスを確認してそう言う。

「ではもう一度…と言いたいところですが…」

そう言いかけてダイヤが空を見る。もう季節も秋になりどんどん日が短くなつてきている。そんなに練習時間はとれていないが、もうすぐ日が沈むのもう終わらざるをえない。

「続きは沼津で練習するときにしよ」

「じゃあもう終わり？」

鞠莉が仕方ないといった風に言うと、そう梨子が嬉しそうに聞いている。

「どうしたの？」

「えつと…私、今日も先帰るね」

千歌に聞かれると梨子は、少し困ったような反応を見せた後そくさと帰って行ってしまった。

「え？またあ？」

「何かあつたずら？」

「そういえばここの所、練習終わるとすぐ帰っちゃうよね」

そう千歌と花丸、ルビイが言う全員が頷いて同意する。

「遥くん何か知らない？」

「え？いや僕は特に…」

あれ以降、なんだかんだ犬の事を可愛く思い始めたのかまだ触れはしないものの、家に居る間ずっと犬に構っている印象を受けた。しかしこれを言えば後々面倒な気がしたので黙っておく。

そして善子も察しているのか、微妙な表情を浮かべていた。

「で、ついて来るわけね」

自宅の前で遥はそう言つて、普段降りないバス停でバスから降りた人物に声をかける。

その正体は善子なのだが「悪い？」と言われたので「別に」とそっけなく返してみる。

「あの犬を拾ったのは善子ちゃんだし、姉さんと話して自分が良いようにすればいいよ」

「だからヨハネよ」

そこじゃないだろ。とは口に出さなかったが、とりあえず善子を家に上げる。

「あら？善子ちゃん？」

「姉さんに用があるつてさ」

「お邪魔します、梨子ちゃん少しに用があつて」

家に帰ると、母親が出てくるがそう言うのと納得し梨子の部屋へ善子を案内する。流石に親の前では墮天使は顔を見せなかった。

「梨子、お友達よ」

そう言つて母親が梨子の部屋のドアを開ける。

「あら？まだそのワンちゃんいたの？」

「うん、もうちよつとだけつて言われちゃつて」

ケージの中にいる犬に気が付いてそう言う母親に対してそう答えると、ケージを持って立ち上がる。犬が先程梨子が買ってきたおもちゃで遊んでいて、ケージが多少揺れても気にしていない。

「でも、梨子ちゃん犬嫌い苦手だから」

そう言つて善子がケージを梨子から奪い取る。

「あら、善子ちゃん家はマンションだからダメだつて」

そう言つて取り返す。「少しなら大丈夫よ」と再び奪い取る。

「ダメっていうから預かったのよ? ご飯にしましうね、ノクターン」
そう言つて再びケージを取り返す梨子に「ノクターン?」と善子が訝し気な視線を向ける。

「まあどうぞ、ごゆっくり…」そう言つて母は呆れ気味に部屋から出ていく。

「ちよつと、何なのよノクターンて」

「この子の名前よ、いつまでもワンちゃんじゃ可哀想でしょ?」

「この子は私が出会ったのよ? 名前だつてライラプスって立派なのがあるんだから」

そう善子が梨子に噛み付く。

「大体何よ? 犬苦手だつたんじやないの?」

「苦手だけどうがないでしょ? 面倒見て欲しいって言ったのは善子ちゃんよ」

「ヨハネ!」

そう言つていると、再びドアがノックされ母親が入ってくる。

「二人ともちよつといい? 沼津の方で貰ってきたんだけど…」

そう言つて母親が見せてくれたのは一枚のチラシだった。

それは迷子犬を探しているという内容で、写真に写っていた犬はたった今2人が取り合っている犬と全く同じで、名前は「あんこ」というらしい。

そしてやってきた地底貫通弾発射予定日、遙は家を抜け出して発射基地の近くまで来ていた。

そこには、発射を阻止されなかったためか沢山の砲台や、管制基地が出来上がっていた。

「たまたま街の近くの地下で眠ってるだけの怪獣をいきなり攻撃する

なんて…そんなこと―」

「許されるハズがない」

「博樹さん…」

ふと後ろから声が聞こえたので振り返ると、そこには湊博樹がいた。

「地底に眠っていた怪獣たちを呼び覚まし、地底貫通弾を使わせたのはオレだ…」

「でもそれは…」

「そうしていなければ、沢山の人間が死んでいた…オレは救われたと思っていた。けどそれは違う、地球へ向けられた刃は、やがて人類に対して跳ね返る…！オレは腕づくでも、地底貫通弾の発射を止めて見せる」

それは、怪獣を呼び覚まして回った事への罪の意識からくるものなのだろう。博樹はそう言うと、基地の方へ歩み去って行った。

「怪獣は死なんよ」

「え？」

どうしたものかと悩みながら付近を歩いていると、以前東京で出会った巫女が話しかけてきた。どうしてここにいるのかも疑問だが、あの時と全く同じ格好だったしもう触れないでおく。

「ここに住む怪獣は、大地の力に守られているんや。だから、ミサイルがどの程度かは解らんけど、一撃で殺しきることは無理やと思う」

「じゃあこの攻撃は…」

「ミズノエノリュウは、人間の街を見てやり直すチャンスをくれた。でも、今そのチャンスを投げ出そうとしている。こんな事、ほんとはあつてはいけないんよ…」

そう語る彼女の表情は、寂しげだった。

「何だお前？…ここは関係者以外立ち入り禁止だ…ぐあッ…」

博樹は堂々と基地に侵入すると、警備員を不意打ちでスタンガンで

押し付け気絶させ中に入っていく。

「あなたがここの責任者か？」

「柊だ、君は確か……」

博樹がその声をかけた人物は、白い軍服を身に纏った。体格のいい男性だった。

「湊博樹、これ以上地球に傷を負わずな。こんなことを繰り返しているうちに、世界は滅ぶ」

「テロリストの言う事を聞く耳は持たん」

「自分達、だけ、が生き残る為に、他のものを滅ぼす事は人間の驕りだ！」

「私は沢山の人々が、怪獣によって虚しく死んでいくのを見た。怪獣は滅ぼさねばならない」

博樹の言い分ももつともだ。しかしこの柊という男は、以前アグルが呼び覚ましたゾンネルによって全滅させられた戦車部隊の指揮を行っていた。怪獣によって人が死ぬのを見てきた彼にとって、怪獣は滅ぼすべき敵でしかないのだ。

「その装置から手を離せ！」

そのまま装置を操作しようとするのを阻止すべく、肩を掴んで止めようとする博樹だったがすぐさま振り向かれ鳩尾に拳による重い一撃を受け、倒れこんでしまう。

「既に怪獣たちによって沢山の人の命が失われている。その人たちにお前はどうか責任を取る？ 私はもうこれ以上犠牲者を出すわけにはいかない……これは、全人類の為に……」

そう言って最後のスイッチを押す。それによって、地底貫通弾が発射される。

そして激しい地響きの後、地底から激しい爆発音が鳴り響く。しかし、それで終わらなかつた……。

地底から、四本足の犬型の怪獣が飛び出してきた。額から前方にまっすぐ伸びる二本の角は片方折れ、片目は潰れ、全身血だらけで口からもおびただしい量の地を吐きながら、基地を攻撃する。

「行ってあげて、あの怪獣はもうきつと長く生きられない……でも、関係

のない人を巻き込まない為に君にできることをやって?」

「でも…」

「大丈夫、君もその光も本当はどうすればいいか解ってるはずや」

そう言つて巫女は後ずさると、後ろの森に溶けるようにして消えていった。

「こうなつてしまつても僕に、やるべきことがあるつていうの…?」

そう呟く遥は右手に握りしめたエスプレンダーに視線を落とす。そこには地球の光が、遥に変身を促すように激しく光を点滅させていた。

「うわああああ!!」

叫びながら遥は光を開放し、怪獣の背後にウルトラマンガイアとして現れる。

ガイアは、怪獣を管制室に近づけさせない為に後ろから掴みかかり距離を取らせようとするが、長い尻尾に弾き飛ばされてしまう。

一体あのボロボロの身体のどこにそんな力が?そう思つてしまうような力で、脚を引きずりながら基地を破壊し、自分の敵を知っているかのように管制室へまっすぐ進んでいく。

「防衛システム、始動」

柎は、それに動揺することなく砲台を起動させ怪獣に攻撃する。しかし怪獣は苦しみながらも体当たりでそれを破壊しながら進んでいく。

ガイアはその様子を、ただ見ているしかできなかつた…砲台を破壊されても、第二、第三防衛システムを起動し応戦する。そして怪獣はそれを破壊する。まさに血を吐きながら続けるマラソンだった。

「お前には聴こえないのか?あの大地の叫びが!」

「ヤツは怪獣だ、滅ぼさなければならぬ…」

ふらふらと起き上がる博樹の訴えに、そう淡々と答えつつ柎は怪獣を攻撃する。

そして、重い身体を引きずりながら管制室の目の前までたどり着いた怪獣はその場で糸が切れたように倒れこみ、二度と動くことは無かつた…。

ガイアはただ、怪獣が目の前で力尽きるのを見ているだけしかできなかった。

「ガイア、怪獣を地底に戻してやれ…」

博樹は外に出ると、そうガイアに告げた。するとガイアは、怪獣の身体を持ち上げるとその亡骸を地底の、元々眠っていた場所に戻すのだった。

「僕には、何も護れなかった…」

ただ遥には、そう呟く事しかできなかった。

36話 呪いの眼／見えない力

燃える夜の沼津の街を逃げ惑う人々、そして街を破壊する巨大な目玉の化け物。

以前現れたガンQと呼ばれることとなった怪獣に酷似しているが、違いはグロテスクに全身がただれてボロボロなその姿だった。

「さあ私の元に来ていーそして我らが國を創るのだー！」

そう言っただけで追いかけてくる化け物、そしてその手が目前に迫ってくる…。

「嫌ッ！…ハア…ハア…夢？！」

夢で良かった。そう思いながら少女は布団から出た。

最近急に見るようになったこの夢が、一体何を示しているのか解らない。だが、これもきつと何か意味があると思うと言い表せない恐怖が心にのしかかる。

数日前、善子が拾った犬の飼い主に連絡を取り。引き取りに来てもらったのだが、飼い主は小学校に上がるか上がらないかくらいの少女と、その母親だった。

「あんこ、よかったね」

そう言っただけで善子が嬉しそうに抱える少女に、あんこも甘えるようにして顔を舐める。

梨子もこれでお別れなのは寂しいが、これで良かったとも思った。結局触れてあげることができず、ほぼ一日中ケージに閉じ込めていたのだから、悪いことをしたなとすら思う。

「よかったですね」

嬉しそうに犬と戯れる少女を見て、ふと少女の母親と目が合ったの

でそう言った。本心のはずだが、どこか寂しかった。善子はきつともっとつらいのだろう、渋い顔をしたまま一言も発さない。

「本当にありがとうございました。ほらあんこもお礼言いなさい」

そう母親が言うと、少女はあんこを抱えたまま梨子の前によって来る。せめて最後くらい触れておきたい、そう思っであんこへ手を伸ばすがあと少しが踏み出せない。

するとあんこが舌を伸ばして梨子の手をぺろ。と舐めた。

「それでは、失礼します」

「ばいばい」

そう言っ母親が頭を下げると、少女もこちらに手を振って一緒に車に乗り込む。そして車が走り去ると「ライラプスウ〜」と今迄一言も発さなかった善子が泣き出す。

梨子はその隣で、あんこが舐めた自分の手を凝視していた。

それから数日間、梨子も善子もずっとあんこが居なくなった事に寂しさを感じ続けていた。

その時の様子は、曜から見えて情緒不安定。グラウンドに犬の絵を描いて、それに使った棒切れを「取ってこい」と言っ投げる。もちろん絵が動くことはあり得ないのでその棒は地を転がる。面白いことに投げるまでの動作が完璧に梨子と善子でシンクロして、その棒の転がっっていく動きまで一緒だった。

「でも…どうして2人が？」

「まさか、悪霊に憑りつかれたずらっ？」

ルビイがもつともらしい疑問を口にする、花丸が目元にピースサインを持ってきてそんな事を口走る。

「今の、善子ちゃんぽい」

「ずらん」

なるほど善子の真似だったのか…。

「遙くんホントに知らない?」

などとぼーっと考えていると、ルビィにそう聞かれる。

「へ?いやわかんないけど…」

実際あの犬の事なんだろうなと思ってはいるのだがやはりここで言ってしまうのも気が引けるので、少し心苦しきはあるが誤魔化しておく。

「でも一緒に住んでるじゃん」

「いや、一緒に住んでるからって姉さんの事なんでも把握してるわけじゃないから…」

などと墓穴を掘らないかヒヤヒヤしながら会話をしていると、2人は落ち込んでいても仕方ない、練習で体を動かして気持ちを切り替えようと言う事で「練習しよ」といつてこちらに来てくれたので助かった。

だが練習中も2人はどこか上の空といった感じで、やはりみんな心配そうにしていた。

「今日は2人とも辞めといたら?それじゃ怪我するよ?」

少し言い方は厳しいかもしれないが、地区予選も控えている今怪我をしてしまえば元も子もないそう思っであえてこういう言い方は遥は選んだ。

「そうね…」

「そうするわ…」

てつきり言い返されるかと思ったが、そう言っつて2人は大人しく帰ってしまった。

「ホントにどうしたんだろ?」

流石にここまで重症だと事情を知っていても不安になってくる。

「やっぱりこんなの間違ってる!」

バス停まで二人で移動すると、善子が唐突にそう告げる。

「よく考えてみれば、あの人が飼い主だって証拠はないはずよ?本当に飼っていたとしても、その犬がライラプスとは違う犬という可能性

も…」

「そんな無茶苦茶な…」

そう梨子は苦言を呈す。それだとあの犬は誰にでもホイホイついていくと言う事になる…。

「取り戻しに行くわよ！」

「はい？」

「言っただでしょ？あの子と私は上級契約の関係…運命デステイニーで結ばれているの」

「無茶よ、それに迷惑でしょ」

「じゃあいい！私一人で行くから」

結局、今の善子だと本当に連れて戻ってきそうだったので放っておかず梨子も付いていくのだった。

気が付けば雨がアスファルトを叩く。結局二人で飼い主の家の前まで来たのだが、そのタイミングで買い物から帰ってきた母親に声をかけられ思わず逃げてしまった。

それからずっと家のすぐ近くにあるコインパーキングの前であるこが出てくるのを待っていたのだが雨が降り始めてしまった。

「どうして運命なの？」

「何が？」

「犬…」

「運命は運命よ」

「そうかもしれないけど…」

納得のいかない表情の梨子に、善子は観念したのか本心を語り始める。

「堕天使って…いると思う？」

「え？」

「私さ、小さい頃から運が悪かったの。外に出れば雨に撃たれるし転ぶし、何しても自分だけ上手くいかないし…」

そう真剣な表情で話す善子の言葉を、梨子は黙って聞き続けた。

「それで思ったの、きつと私が特別だから。見えない力が働いてるんだって」

「それで墮天使？」

「勿論、墮天使なんて居る訳ないって…それはもう何となく感じてる、クラスじや言わないようにしてるし…」

小さい時の自分は、そう思うことで自分の運の悪さを納得させていた。でも現実としてそんなものがある筈ない。それは理解できているつもりだ。でも最近は何獣だのウルトラマンという、未知の存在を多く見てきた。もしかしたら墮天使もいるのかもしれない。でもそれは自分ではない、それは理解しているつもりだ。

「でもさ、本当にそういうの無いのかなって…運命とか、見えない力とか。そんな時、出会ったの。何か見えない力に導かれたみたいに、吸い寄せられるみたいに…これは絶対偶然じゃない。何か不思議な力に導かれたんだってそう思った…」

それで出会ったのが、あの犬だった。だから、もしかしたら見えない力はあるとそう思ったのだ。

「雨、止んだね」

気が付けば雨雲は去り、あたりは夕日のオレンジ色に染まっていた。

「やんだねえ」

ふと、そんな少女の声が聞こえた。飼い主の女の子だ。犬をリードに繋いでこれから散歩に行くのだろう、玄関前の門を開け犬と少女が出てきた。

「もえちやーんちよつと」

すると家の中から母親の声が聞こえる。するとリードを門に括り付けると「あんこ、ちよつと待っててね」そう言って少女は家の中へと戻っていく。

善子はすつとコインパーキングの精算機の屋根の下から出てくると、あんこの方に手をかざし何やら念じ始める。

—気が付いて、リトルデーモンライラプス…。

暫くそうしていると、犬がこちらに振り向いた。

「気が付いた」

そう少し後ろで見守っていた梨子が驚くように眩く。

「私よ、わかる?」

そう語り掛けるように言うが、尻尾を振って嬉しそうにしているのは伝わったが首を傾げられてしまう。

「あんこ、ごめんね。雨あがったばっかだからお散歩はまだダメだつて」

そう言つて玄関から出てきた少女に抱えられ、家の中へと戻つて行つた。

「やっぱり偶然だったようね…この墮天使ヨハネに気が付かないなんて」

「でも、見てくれた。見えない力はあると思う。善子ちゃんだけじゃなくて、誰にでも」

帰りのバスを待っている時、そう善子が肩を落として眩くと、梨子がそう告げる。

「そうかな?」

「うん、だから信じている限り、その力は働いてると思う」

もしかしたら遥の持つガイアの光のような、未知のものを誰しも持っているのかもしれない。

「流石私のリトルデーモン、ヨハネの名において上級リトルデーモンに認定してあげる!」

「ふふっありがと、ヨハネちゃん」

「善子!…あれ?」

悪戯っぽく笑う梨子に、善子も笑みがこぼれた。

「ちよつとお嬢さん」

「え？私？」

梨子と別れてバスを降り、沼津駅から家の方へ歩いていると、道端で何やら露店のようなものをやっている。黒いドレスに黒いベールで顔を覆った、何やら怪しげな女性に声をかけられた。

「そうそうあなた、ちよつと見ていかない？」

そう言つて見せてくる商品は、一見するとガラクタの様にしか見えないようなものばかりだったのだが、その中に一つだけベルトのようなものに縛られた一冊の分厚い本に目が留まる。

「あの、それ…」

「ああこれ？俗に言う魔導書なのだけれど、魔力が無いと開けられないのよね」

なぜかその本にとても惹かれてしまう、するとその視線に気が付いた女性はこれは魔導書だと告げる。

「これ、幾らですか？」

他にもランプのようなものやら金属製のカップやら色々あったのだが、この本だけは気になって仕方がなかったので思わずそう聞いていた。これで高ければ諦めればいいし…。などと思いつながら。

「これね、タダでいいわ。私はこのベルト外せないし、これもあなたの所に行きたがつてるようだから」

「え？でも…」

流石にそれは気が引ける、そう思い断ろうとする善子だったが、「いいからいいから」と言つて差し出されたそれを手に取ってしまう。

「あ、ありがとうございます！」

そう言つて頭を下げると、足早に家に帰る善子だったが、やはりベルトは外せず、色々試す気も起きなかつたのでそのまま本棚の片隅に置きっぱなしになった。

その日からだった、善子が悪夢を見るのは…。

ある日の夜、沼津にガンQが出現し街を破壊した。X I Gも出動しすぐ攻撃に移ったのだが、ファイターの弾丸は、ガンQの身体をすり抜けダメージを与えることが出来なかった。

「あれ…夢で見た…」

『私の元に来い、そして我らの國を創るのだ…』

ガンQが消えた時、善子の脳裏にそんな声が聞こえた。

「嫌…嫌よ…」

善子は震える自分の身体を抱きしめる。だがその声は暫く善子の耳から離れることは無かった…。

「おはよ…大丈夫？ 凄いクマだよ？」

「お、おはよう…眠れなくて…」

次の日登校すると、遙がそう声をかけるが善子を見るからに顔色も悪く目元にもクマが出来ていた。

「もしかして…昨日の夜の？」

「ええ…ちよつとね…」

きつと夢の事を言っても信じてもらえない。そう思った善子は、そう答えていた。

「顔色悪いし、保健室行った方が…」

そうルビイも提案するが、善子は首を横に振る。

「いやいいわ、大丈夫だから」

「無理にとは言わないけど…今日の練習は休みなよ？」

「解ってる…」

そう言う善子は自分の席に向かう。すると花丸がそつと遙に耳打ちした。

「後でちよつと見て欲しいものがあるすら。きつと昨日の怪獣に関係あると思う…」

「ホントに？ 解った」

一体何を花丸は見つけたのか？ それと昨夜現れたガンQ。それに善子が心配でその日は授業どころではなかった。もつとも、遙にとつては聞かなくても解るような内容ばかりではあるのだが…。

そして放課後、昨日の騒ぎもあって、全生徒はすぐに下校するように言われたのでその日の練習は休みとなった。

「それで、見せたいものって?」

「家にあるから一緒に来てほしいすら」

そう言われ、遙も特に異論はなかったのでそれに応じる。そして花丸の実家のお寺の敷地内にある書庫に案内された。

「この前休みの日に偶々見つけたんだけど…」

そう言っつて花丸が一つの書物を取り出してくる。そしてそこに記されているものは、驚愕の内容だった。

「これは…ガンQ?」

「それにこれ…コツヴっていう最初に現れた破滅招来体にそっくりずら…」

花丸がとり出した書物、それは500年前に描かれたものなのだが、そこにはコツヴの出現を時間までぴったりと予言していた。

「これには、江戸時代の呪術師『魔頭鬼十郎』が根源的破滅招来体が現れるのを予知して、その力を利用して国を征服しようとしたって書いてあるすら」

「それでその魔頭は?」

「その力を恐れた徳川の軍によって、討たれたみたい…でもその前に呪術を施して自害したってあるすら」

「じゃあこのガンQは…」

「魔頭鬼十郎すら…」

何と言う事だろうか、破滅招来体の先兵だと思っていたガンQは昔の人間が呪いの力で産み出したものだったのだ。

「だから…生命反応もないし、あんな不可解な力を…」

「ねえ、これがあれば、最近の騒ぎは解決するかな?」

「解決の手掛かりにはなると思う」

そう答えると、花丸はこれをアルケミースターズに渡して欲しいと遙に書物を預ける。

「いいの? 持って帰って」

「これで解決して、善子ちゃんが元気になるなら」

「解った、ありがとう」

遥は託された書物を持って、ジオベースに向かったのだった。

(嫌な予感がする…頼む、間に合って…)

遥の直感が、よくないものを感じ取っていた。その予感は、望まぬ形で現実となる…。

37話 墮天使の望み／in this unsta-
ble world

「これは…?」

「友達の家のお寺の書庫で発見したものです」

「その職員に、そうやって事の顛末を説明しすぐに調査をすることとなった。」

「だが、まだ情報が足りず。打開策をすぐに見出す事はできなかった。」

「すみません、折角提供してさらに手伝っていたのに…」

「そう遥の話を信じてくれた職員の男性はそう告げるが遥も「これだけの情報しかないうちは仕方ないですよ」そう返すのだった。」

「気が付けば辺りは暗くなってきていた。気が付けば母親からもうつまで外をほつつき歩いているのか?という旨のメールが来ていた。本来ならすぐに下校しなければいけないのでこの指摘は当然ではあるのだが…。」

「いない…どこに行ったの?」

「あれ?善子ちゃん?」

沼津駅まで戻ってきたとき、私服の善子を見かける。

「遥…」

「体調は大丈夫なの?」

「それは…」

善子の顔色は学校で見た時からよくなったようには見えなかった。

「ガンQの対策を、今ジオベースでやってる。もうちよつとで解決できるから、今は家で休んで?」

「…できないわよ」

「どうして?」

「それは…」

善子は気が付いていたのだ。あの本を貰ってから見るようになった悪夢、そしてその悪夢に出てきたままの姿で街に現れたガンQこれは全部つながっていると。

だからこの本をくれた女性にもう一度会おうと探していたのだ。遥から書物の話を聞いた善子は、その事を遥に話した。

「そんな事が…その本はどこに？」

「私の部屋よ」

「見せてもらってもいい？」

「いいけど、ベルトが外れないから中身は解らないわよ？」

「それでもいいから」

そう言っつて善子の家に向かうが、遥がいくら力んでもその本が開くことは無かった。

「くっそ…どうなってんだこれ？」

「だから言ったじゃない、開かなかったって…」

そう言っつて善子が遥から本を取り上げると、ベルトがはじけ飛んだ。

「嘘…なんで…？」

貰った日も、今遥がやったようにどんなに頑張っても外れなかったのに、今少し善子が触っただけで弾け飛んでしまった。

「…開くよ？」

驚いて落としてしまった本を持って遥がそう言くと、善子は無言で頷く。そして恐る恐るページを開くのだが…。

「これは…呪術？」

「魔導書よ、そう言われたわ」

「違う！この本は…ガンQを生み出す呪術に違いない…」

その本に書かれていたのは、特殊な能力を持つ人間の力を借りてガンQとして完全に復活するための呪術だと記されていた。

「これを持ってたらいけない！すぐ燃やそう！」

「ちよつと…」

勝手に本を燃やそうとし始める遥に、善子は怪訝な顔を浮かべるが遥はそれに構ってられない。帰宅してきた善子の母親が飛び出して

きた遙に驚くが、それすら無視して近くのコンビニでライターを買
と河川敷ですぐに本を焼いた。

すると紫の炎に包まれ、本は完全に消滅した。

「何てことすんのよー！」

「善子ちゃん、今日はうちに泊まってっつて」

「はっ？」

「姉さんがいるし、何かあった時すぐ守れるから」

そう言くと、半ば強引に梨子や母親と話を付けた遙は善子と家に帰
る。もちろん色々文句は言われたが、親にまで本当の事をいう訳にも
いかず口裏を合わせて誤魔化しておいた。

「遙、女の子を家に連れ込むのはどうかと思うわよ？」

「へ？いやそんなんじゃないって」

「大人になるのは良いけど、ちよつと段階を飛ばし過ぎよ」

母親には勘違いされてしまったが…。

「遙はああいう子が好きなのね、気配りのできる礼儀正しい子だしお
母さんはいいと思うわよ？」

「だから違うってば！善子ちゃんはただのクラスメート!!」

一方梨子も、突然泊まりに来た梨子に困惑していた。

「もともと泊まる約束してたことにして」そう遙に言われたときは本
当に驚いたものだ。それに善子もあまり事情を話そうとしない。向
こうの親は納得しているそうなので問題はないのではないのだがあま
りピンと来ない。

「本当の事を教えて？」

「それは…」

「帰るときルビィちゃんに会ったけど心配してたわよ？それと関係あ
るんじゃないの？」

そう言われて善子は、事の経緯を梨子に話した。夢の事、魔導書の
事…そしてガンQと魔頭鬼十郎の書物の事を。

「…そんな事が」

「私に変なもの貰わなきゃ、こんな事にはならなかったの…」

「善子ちゃんのせいじゃないわ、善子ちゃんも被害者よ」

「…」

「だって、まさか貰った本のせいで怪獣がでるなんて思わないじゃない？それに善子ちゃんもこうなることを望んだわけじゃないし」

「ヨハネよ…でも、ありがとう」

すこし胸のつつかえが取れた気がした。梨子は善子の話を全て聞いたうえでそれを信じて、そう笑いかけてくれた。

「安心したら眠くなってきたわ、おやすみ」

「変な夢見たら起こしてくれていいからね？じゃあおおやすみ」

その日はそのまま梨子の部屋に泊まるのだった。

遙はただ、このまま何もなく夜が明ければいい。そう思っていた。

目の前にボロボロのガンQがいる。またあの夢かと直感でそう思った。今までと違うのは、南蛮風の衣類に身を包んだ初老の男性がその前で浮いていること、こいつが魔頭鬼十郎なのだろう。

「我が呪術に気が付いたようだな…だがもう遅い、あの本の封印と解けるだけの力をお前は開放した」

「どういうこと？」

「お前の中に眠る力を開放させ、その力を我が貰う事で完全に復活する。そうすれば破壊制圧により我らの國を創る！」

魔頭の言っていることが正しければ、善子は自覚していなかっただけで特別な力を持っている。それを魔頭が開放していった。全ては自分の目的を果たす為。こんな回りくどい事をしたのは、以前ガイアに妨害されて余計に力を失ったからということ。

「そうすればお前の願いは全て叶う！さあ共に我らが國を創ろうぞ！」

「嫌よ！私は國なんか欲しくない、今ここにある生活が大事なの！ア
ンタの言う事なんか聞かないわ」

「…桜内梨子」

「え？」

「大事な友人を預かる」

そこで目が覚めた、隣を見ると寝ていた筈の梨子が居ない…。

「遙！梨子が、梨子が…」

「何だって」

何かあつたら直ぐに対応できるようにと自室で寝ずに待っていた遙の部屋に飛び込む。遙も梨子が居なくなった事には気が付かず、ひとまず外へ飛び出した。

「姉さん！」

梨子は外にいた、いたのだが意識は無く。何かの力によって家の前の砂浜に浮いていた。

「よく来たな善子、さあ力を我に」

そして魔頭も浮遊した状態で現れ、遙を無視し善子の方を見る。

「嫌よ！絶対あんたの言う事なんか聞かない」

「それは残念だ…」

そうにやりと笑いながら呟くと、梨子の身体が紫の炎に包まれ苦しみ始める。

「梨子！」

「卑怯だぞー！」

歯噛みすることしかできない遙に対し、善子の身体から光弾が放たれた。それを食らった魔頭は吹き飛ぶが、不敵な笑みを浮かべる。

「何これ…」

「それだけの力があれば完璧だ。ふんッ！」

自身がしたことに驚く善子に対し、そう満足げに呟くと善子へ手を開けると光を放つ。そして無理やり善子から力を吸収するのだった。

「ついに…ついに復活の時だあー！」

そう叫ぶ魔頭の身体はガンQとなり、今までの身体が溶けたような不完全な姿から、以前戦った時の姿に血管のようなものが浮き出た異形の姿と変わる。

「善子ちゃん大丈夫？」

「ごめん遙…私のせいなのに…私のせいで梨子が…」

「悪いのは善子ちゃんじゃない、あいつだよ」

「ごめん…お願い遙、助けて…」

「助けるさ！いつだって、どんな時だって！」

倒れた善子に駆け寄り寄る遙だったが、消え入る声でそう訴えかける善子に遙は笑みを浮かべるとそう力強く答える。

「卑劣な…絶対に許さないッ！ガイアー!!」

遙は振り返ると一転し険しい表情でそう叫ぶと、突き出したエスプレンダーから光を解き放つ。

一筋の光が、夜の内浦を駆け抜けガンQへと向かって行く。それはガイアの姿をとると、目にもとまらぬ速さで肉薄しに連続の回し蹴りと赤い光を纏った渾身の拳で相手を吹き飛ばす。

「ダアッ！タアッ！ハアア…デユワッ！」

そしてガイアは梨子の方へ振り返ると、右手を突き出し光を放出し梨子を開放し彼女をそつと地面に降ろす。

「梨子？梨子!?!」

梨子にすぐさま善子は駆け寄っていき、彼女の肩を揺さぶる。目は覚めなかったが、息はしている。よかったと一息つくくと、視線は再びガイアへと注がれる。

「お願い遙、勝って…」

そしてその戦いを別の場所から眺める人影が一つ。シルビアだ。

「人間同士の醜い争い…結局昔から人類は、破壊と征服しか考えられない可哀想な生き物」

そう呟く彼女の声にも、表情にも感情は乗っておらず。彼女がどういう気持ちでそう言ったのか、この戦いを見ているのか。それは本人にしかわからない。

「このままなら人類は勝手に滅びる…でもあの男の、こっちの力を利用するって考えは気に食わない。私が潰しても良いけど、ここはあのお兄さんに任せるわ。まだ私は、力を使うべきではないから…」

そう言っただけ彼女は、この戦いをただ静観することにした。

起き上がったガンQに対して、ファイティングポーズをとるとガンQが光弾を発射してきたのでそれをウルトラバリアで弾くと、飛び散った光弾が地面へ着弾しガイアの姿が消える。

勝ち誇るような仕草を見せるガンQだったが、ガイアが健在なのを見ると悔しそうに体をよじらせ再び光弾を放つ。

しかしこんどはガイアの身体は光に包まれ消滅し、対象を失った光弾は後ろの山に直撃し爆発が起こる。

「アァアッ！」

一瞬で空中へと飛び上がったガイアは急降下してその勢いそのままに蹴りを放つ。その威力にガンQの身体は地に伏せるがガイアは脚を持って持ち上げると、そのままバックドロップを決める。

流石に堪えたのかガンQはそのまま動かなくなる、ガイアは梨子の様子が気になって一瞬視線を外すがその隙に立ち上がりガイアへ攻め立てる。

そして体勢の崩れたガイアへ身体にある目から、円盤のようなものを三つ飛ばしてガイアへ4方向から攻撃を繰り返す。

「グワァアア!？」

そして円盤はガイアを取り囲むと、紫色の怪しいオーラでガイアを攻撃するとガイアは頭を押さえて苦しみ始める。更にはライフゲージも明滅を始め、ガイアのエネルギーが残り少ない事を示し始める。

「遥ー！」

苦しむガイアを見て思わず善子は遥の名前を叫ぶ、自分を助ける為に戦っているガイアに自分は何もできない。そう自身の無力さを呪いかけるが、あることに気が付く。さっき自分は魔頭に何をしたら？それがガイアを助ける答えだった。

「大丈夫、多分できる……」

ガイアを取り囲む3つの円盤、あれを破壊するイメージを固める。すると再び身体が光ると光弾が三発、円盤目掛けて飛んで行った。

「お願い、壊れて！」

善子の思いが通じたのか、円盤は爆散しガイアの身は自由になる。

「何故ダ？何故邪魔ヲスル!?善子オ！」

「私は今の仲間たちと生きていくの！アンタの言いなりにはならないわ！」

善子が手を出したことに驚愕し、ガンQはそう善子に吠えるが、逆に言い返される。

「それに私は、ヨハネだつてばあああああ！」

そう叫ぶ善子から更に光が放たれ。ガンQの姿は、最初の不完全は半分溶けたような姿に戻る。

「今よーあいつに止めをー!」

そう善子が叫ぶとガイアは頷き立ち上がる。

「カ…身体ガイウコトヲキカヌ…」

ガンQは無理やり不完全な姿に戻された反動なのか、思うように動けない。折角善子を作ってくれたチャンスが無駄にはできない。ガイアはガンQへ駆け寄るとその巨体を頭上に持ち上げ、豪快に投げ飛ばした。

そのまま地面でもがいているガンQに止めを刺すべく、ガイアは両腕を広げエネルギーを頭部に集中させ蹲る。

「デヤッ!ハアア…デリヤアア!!」

そして放たれた必殺の一撃、フオトンエツジによつて今度こそガンQと魔頭鬼十郎の野望は潰えたのだった。

「あれ?善子ちゃん?」

「梨子良かった…」

「何で外に?それにガイアまで…」

梨子は善子の後ろに映るガイアにも気が付くが、今まで何があったか覚えていない様子だった。

「よかった…本当によかった…」

「善子ちゃん…」

泣きながら梨子に抱き着く善子に、梨子は困ったような表情を浮かべるがさえるがままになっていた。

次の日は反動からか、三人纏めて寝坊し母親に慌てて起こされるのだった。

「ガイアの捕獲を実行しましょう…これでやっと邪魔者はいなくなる」

暗闇の中で少女は呟く、ウルトラマンガイアを捕獲する。そうする

ことで根源的な破滅をより簡単にもたらすということだ。

「ガンQは想定外だったけど人間同士で潰し合ってくれてよかった。どうせならそのまま共倒れしてくれればよかったのに」

「嫌なのですか？自分の使命が」

独り言をずつと言っていた少女に、急に男性の声割って入る。

「そんな訳ない、私はその為に産まれた…貴方ごときに何かを言われる筋合いはない」

そう冷たい声で言い返す。感情を読み取りにくい彼女だが、この時だけは明確な殺意が読み取れた。

「これは失礼。ここであなたにやられてしまつては意味がない、私も私の出番の為に準備をさせて頂きます」

そう言つて男性の気配は消える。

「あなたみたいなの、私は嫌いな」

そう少女はため息交じりに呟く。自分の使命は理解している。でもその前に…

「あの赤毛のお姉さんの踊つてるところ、もう一回見たいな…」

そう憂いの混じつた表情で、少女は呟くのだった。

「じゃああれ以降、あの力は無くなっちゃつたの？」

「そうね、折角墮天使ぼくなつたのにもつたいなかつたかもね」

その週の休日、沼津の喫茶店で善子からあれ以降また似たような夢を見たりしなかつたかななどを聞いていたのだが無事に元通りの生活に戻れたらしい。

「やめてよ…僕もうあの目玉の化け物と戦いたくないよ？」

「フツツ冗談よ、冗談。…ありがとね、助けてくれて」

「やめてよ、結局僕の方が助けてもらったんだから」

そう言つて顔を背ける遙に、善子はふつと笑つて立ち上がると耳打ちする。

「かっこよかつたわよ、ウルトラマン」

「なっ…」

「じゃあまた学校でね」

「う、うん…」

そう言つて善子は帰つて行くが、遙は暫く顔のほてりが取れなかつた。

「何話してたずら？」

「あれ？どうしたのこんなどこで」

善子と入れ替わるように花丸が店内に入つてきた。

「本を買いにきたら、遙くんが居るのが見えたから。それより善子ちゃんは何話してたずら？」

「いや、ちよつとね？」

結局あの日の事は当事者三人の中に収めておくことにしたのだが、ガンQは夜中にガイアと戦つて敗北したことだけ世間に公表された。だから善子に何があつたのか花丸は知らない。

「ふーん？そう言えばあの書物はどうしたずら？」

「あつ…ジオベースに預けっぱなしだ…ごめん埋め合わせは今度するから！」

そう言つて手を合わせて謝る遙かに、花丸は笑いかける。

「じゃあ今してもらつていい？」

「え？」

「すいませーんイチゴパフェとココアお願いします。」

そう注文する花丸から逃げるように立ち上がろうとする遙だったが、肩を掴まれる。

「ぐちそうさまずら」

「ああ…これも呪いだ〜！」

遙の悲鳴が、沼津の街に木霊した。

38話 アグル復活／護るべきもの

部室で二年と一年の7人はパソコンの画面に注目していた。

「来ました」

そうルビイが言うと、全員が息を呑んで画面の変化に注目する。

「見たことあるすら」

「ここは前回ラグナロクが行われた…：約束の場所！」

「私達が突破できなかった、地区予選…！」

「リベンジだね、千歌ちゃん」

今日発表されたのは、ラブライブ地区予選の会場だった。前回と同じ会場で、前回突破できなかった壁を今回は絶対に越えねばならない。

「うん」

今回は、絶対に負けられない。超えて見せる…：必ず。

「今日現在、入学希望者は57人」

一方三年生は、生徒会室で入学希望者の数を確認していた。

「そんな…この一か月で10人も増えていないのですか？」

鞠莉に告げられた人数は、学校存続のための人数の半分をやっと超えた程度だった。その事にダイヤは驚きのあまり座っていたパイプ椅子を立ち上がった表紙に倒してしまう。

「鞠莉のお父さんの言ってた期限まで、あと一ヶ月もないんだよね？」

ダイヤの反対側に座っている果南はそう鞠莉に確認するように聞く。

「ラブライブ地区予選の日の夜。それまでに100人に到達できなければ、今度こそナツシングです」

そう鞠莉が告げる。文字通り学校を存続させるには地区予選が最後のチャンスなのだ。

「そこに賭けるしか、無いのですね…」

そうダイヤが嘸みしめるように言う。地区予選が、最後のアピール

のチャンスなのだ。後輩たちの為にも。なんとしても学校を存続させたい。今口にせずとも、三人の想いは一つだ。

「オウ！グッド!!」

沼津での練習で、鞠莉の手拍子に合わせてダンスの確認をする。

「じゃあインターバルの後で各自個人練習ね」

その号令で、各々休憩に入る。

「疲れた〜」

「はい、スポーツドリンク。お疲れさま」

メンバーにそう言って遥は飲み物を手渡す。ダンスに関してはかたつきしだし、曲作りとストレッチのアドバイスとこれくらいしかできなからと。遥なりの気づかいだった。

「あ、全国大会進出が有力視されてるグループだって」

曜がスマホの画面を見ながらそう呟くと、「そんなのあるの?」と千歌達も画面を見ようと近寄ってくる。

「ラブライブ人気あるから、こういうの予想する人多いみたい」

「どんなグループが居るの?」

「えっと、前年度の決勝進出グループはもちろんで…」

そこでページを切り替えると、見知ったグループが出てくる。

「前回地区大会をトップで通過し、全国大会で8位入賞を果たしたSaint Snow。姉聖良は3年生、ラストチャンスで優勝を目指す…」

「ふたりとも気合入ってるだろうなあ…」

そう千歌が呟く。あの姉妹も、一緒にラブライブに出られるのは最後だ。絶対に最高のパフォーマンスをするための努力を続けているだろう。

「後は…Aqours!」

思わず曜の声が上ずる。

「本当?なんて書いてあるの?」

離れた場所で水を飲んでいた鞠莉も気になったのかそう聞いてく

る。

「前は地区大会で涙を呑んだAqoursだが、今大会予備予選の内容は全国大会出場者に引けを取らないものだった。今後の活躍に期待したい。」

「こういう風に書かれてると、何かうれしいですね」

そう遥が笑顔で言うと、皆笑みを浮かべる。正直上から目線なのが鼻につくが、自分たちが沢山の人に評価されていると思うとやはりうれしいものがある。

「フフ…この堕天使ヨハネの闇能力をもつてすればこの程度、造作もないことです！」

「そう、造作もないことです！」

普段なら善子が一人でポーズを決めて皆がスルーするのが半ばお約束となりつつあったやり取りだったが、今回は同調した人物がいた。

「ほえ？」

「はっ!？」

千歌が気の抜けた表情で梨子の方を見ると、無意識だったのだろう。梨子は自分のしたことに気が付いて顔を赤らめる。

「流石！我と契約を結んだだけの事はあるぞ、リトルデーモンリリーよ！」

「無礼な！我はそのような契約、交わしておらぬわ！」

「どうしたの？」

「リリー？」

「これが堕天ずら」

「うゆ」

「うわあ…」

残りの二年と一年に…特に遥には完全にドン引かれてしまう。

「違うの！これは違って…」

「ウェルカムトゥーヘルゾーン！」

「まてえい！」

なんて漫才じみたやり取りが始まり、皆笑いながらそのやり取りを

見ていた。

「今回の地区予選は、会場とネットの投票で決勝進出者を決めるって」
そうスマホで、今回の大会の情報を見ていたルビィがそう切り出す。

「良かったじゃん、何日も結果出るの待つより」

そう千歌が返す。確かにそうではあるのだが、そうなると出てくる問題がある。

「そんな簡単な事ではありませんわ」

「会場には出場するグループの学校の生徒が応援に来るのよ」

そうダイヤと鞠莉に厳しく指摘されてしまう。

「つまり、生徒数が多い学校程有利…ネットもあるけど、会場にこれない学校関係者も投票できる…」

そう遥が顎に手を当てて呟く。そういうことなのだ、これは簡単な事ではない。

「そう、生徒数で言うと浦の星が不利ですわ」

そう厳しい現実をダイヤが告げる。しかしそれを言い訳に諦める者はここにはいない。

練習の後、淡島の家に戻る為に船着き場で船を待っていた果南だったが、ここで思わぬ人物に遭遇した。鞠莉は、少し用事があると言っていたので今この場には果南しかいない。

「ヒロ？」

船着き場から少し離れた砂浜に湊博樹がいた。以前あった時とは違い、ボロボロになってる服に身を包んだ彼はおぼつかない足取りで、海へと進んでいく。

「嘘、もう秋だよ？」

そして腰まで海水に漬かる深さまで進んだところで、脚を取られたのか倒れこむ。

「ヒロ？ちよつと大丈夫！」

「か、果南…」

博樹は虚ろな目で果南の顔を見て、ようやく彼女に気が付く。しかし博樹の顔を見た時、果南も息をのんだ。彼の黒髪は所々白くなっており、どう見てもやつれていたので。

「海が、呼んでいる…」

そう言うと、博樹は気を失ってしまう。海というのはアグルを示していたのだろうか？ふとそう思う果南だったが、自分では答えが出ない。それに博樹をこのままにしては置けないので、一先ず救急車を呼んで病院へ行く。

病院へ着くと、気を失ったままの博樹は検査を受け点滴を受けて病室のベットで眠っていた。果南は、彼の身の上を簡単に説明した後、診断結果を医師から聞いていた。

「体に異常はありません。精神的な問題だと思われます」

「精神的な、問題…」

一体何がここまで博樹を追い詰めたのか？その答えを出すことはできなかつた。だが体に異常はないというし、病院にいる間は健康に異常をきたすことはない。そう判断した果南は、家に帰った。

そしてその夜、海を眺めながら一冊のノートを胸に抱えていた。

地区予選が学校存続を賭けた最後のチャンス。でもこれに頼ることは果南はしたくなかつた。ダンスパフォーマンスのアイデアノートには、二年前に記したものがまだ日の目を浴びずに残っている。でもこれは…。

「やつぱり、それしかないのかもね。懐かしい、まだ持ってたんだ」

辺りは夜の静けさに包まれているというのに、鞠莉だけでなくダイヤまでこちらに歩み寄ってきた。

「まさか、やるなんて言わないよね？」

「まさか、やらないなんて言うんじゃないわよね？」

そう強めの口調で鞠莉に対して告げる果南だったが、逆にそう言い返されてしまう。

「状況は解ってるでしょ？それに賭けるしかない」

「でも…」

「私、あの頃の気持ちと変わってないよ」

「鞠莉…」

果南をまっすぐ見つめて、鞠莉はそう告げる。対して果南は、なんと言えればいいか解らない。そんな様子だった。

「今回ばかりは私も鞠莉さんに賛成ですわ。学校存続の為、やれることは全てやる…それが生徒会長としての責務だと思っておりますので」

「でも、これはできる事じゃない。これはできないこと…」

「そんなことない！」

二年前のあの時と違い、今回ダイヤは鞠莉の意見に同意らしい。しかし頑なに譲ろうとしない果南に、鞠莉はすかさずそう否定する。

「あの時だつてそうだった、あと少しで…」

「でもできなかった。それどころか鞠莉の足まで…」

そう、これに記されたフォーメーションを実現させようとした結果が二年間も自分たちをすれ違わせたのだ。

「あの怪我は私がいけなかったの、果南に追いつきたいって頑張りすぎて…」

「それに今は9人。私たちだけではありませんわ」

そうダイヤも鞠莉の肩を持つ。いつもなら真つ先に止める筈の彼女がだ。ダイヤも本気で思っているのだ、もうこれに全てを賭けるしかない。

「ダメだよ…届かないものに手を伸ばそうとして、そのせいで誰かを傷つけて、それを千歌たちに押し付けるなんて…」

千歌達には、自分たちが2年前に味わったものと同じものを背負わせたくない。だからこれは開けちゃいけない危険な扉なんだ。

「こんなもの！」

ノートを海に放り投げようとした。でもその振りかぶった手は、誰かによって阻まれた。

「待てー！」

「ヒロ…」

「世話になったみたいだな、果南」

その正体は、もう病院を抜け出した博樹だった。連絡船を使わずとも淡島と内浦を行き来する手段など当然のように所有している彼であるが、もうこちらに戻ってきていた。

「それはお前たちにとって大切なものなんだろう？手放したら、2度と戻ってこないぞ」

そう真剣な眼差しで博樹は告げる。

「否定しないで、あの頃の事も私にとってはとても大切な思い出。だからこそやり遂げたい、私たちの夢見たA q o u r sを完成させた」

鞠莉もそう果南にそう言って笑いかける。

「博樹さん、あなた今迄…？」

「オレはずっと後悔していた。オレのやった事で、多くの人を傷つけ地底貫通弾が使用され地底怪獣も多くその命を落とした」

ダイヤが、変わり果ててしまった博樹にそう聞くと、博樹はそう今迄を語るかの様にしゃべり始めた。

「オレのやった事は、アグルの脅威で世界を混乱に陥れただけなんだ。今は償いもできない…オレはアグルの力を取り戻そうとした、だが光はもう戻ってこなかった。それはオレの中に、今でもクリシスの予測と同じものが眠っているからだ！」

「違う、それは違うわ！」

「鞠莉…」

「ヒロはその予測を疑問に思っていた筈だよ？だから私や鞠莉にダイヤ…多くの人を助けたんでしょ？」

鞠莉と果南は、博樹の言葉を強く否定した。本気でそう思っているなら、以前病院をギールが襲撃した時なぜアグルとして私達を助けたのかと。

「事情は聞きましたから、知っているつもりです。あなたは、クリシスの予測が仕組まれていると知って戦う誇りを傷つけられたのです。それを取り戻せばきつと…」

「戦う、誇り…」

ダイヤの言葉を反芻する博樹だったが、ふっと笑う。

「お前たちは学校を守りたいんだろ？だったら、猶更オレに構ってる場合じゃないだろ？」

それは拒絶ともとれてしまう言葉だった。

「そのノートが何なのか知らない、それをどうするかもお前たちの自由だ。でもな果南、手放したものは後悔しても取り戻せない」

「さつきはありがとう」と付け足して博樹はその場を去る。果南は両腕でノートを抱きしめたまま何も言わなかった。

「A q o u r s らしさ…ですか？」

「うん、わたし達の輝きって何だろう？それを見つけてあげることが大切なんだって、ラブライブに出て解ったのにそれが何なのかまだ言葉にできない…まだ形になってない…だから、形にしたい。形に…」

次の日の放課後、部室で千歌はA q o u r sらしいとは何か？と話を切り出す。

「このタイミングでこんな話が千歌さんから出るなんて、運命ですわ。あれ、話しますわね」

「え？でもあれは…」

ダイヤが千歌の話を聞いてそう言うと、果南はやはりこの件には否定的なのか迷うような仕草を見せる。

「何？何の話？」

「二年前、私達三人がラブライブ決勝に進むために作ったフォーメーションがありますの」

「凄い、教えて！」

ダイヤからこの話を聞いて、千歌はそう身を乗り出して食いついてきた。

「でも、それをやろうとして鞠莉は足を痛めた。それに、皆の負担も大きい。今そこまですてやる意味があるの？」

そう厳しい口調で果南が千歌を止めようとする。また二年前の繰

り返しになってしまうのが、怖かったから。

「何で？果南ちゃん、今しなくていつするの？最初に約束したよね？
精一杯あがこうって。ラブライブはすぐそこなんだよ？今こそ足掻
いて、やれることは全部やろうよ！」

そう千歌は果南の手を取って訴えかける。今やらないと、もうチャ
ンスは回ってこない。

「でも、これはセンターの負担が大きい。あの時は私だったけど、千
歌にそれができる？」

「大丈夫！やるよ、私」

「決まりですわね。あのノートを渡しましょう、果南さん」

そう千歌が折れずに果南に力ずよく答えると、ダイヤがそう取り仕
切る。すると果南は渋々といった様子で千歌にノートを渡す。

「今のAqoursをブレイクスルーするには、必ず超えなきゃいけ
ないウォールがあります」

「今がその時かもしれないですね」

殻を破って前に進む。今がそのターニングポイントなのだ。

「言つとくけど、危ないと判断したら。ラブライブを棄権してでも、千
歌を止めるからね」

最後に、果南はそう千歌に宣言した。これの為に千歌や皆に怪我を
負わせたくない、二年前の繰り返しにはしないための果南の優しさ
だった。

その日の帰り道、学校下のバス停から少し離れた位置で博樹は一人
海を眺めていた。

「初めてかも、ヒロが学校の近くにいるなんて」

気が付いた果南が、その声をかけると博樹もこちらを振り向く。

「二年前ここを去ってから、初めて来たからな」

そう切り出した博樹は、他のAqoursのメンバーもいることに
気が付いていつつも続ける。

「半年も通ってなかったが、ここ景色が好きだったんだって…母さ
んも通っていたこの学校が、この町が…今初めて思った」

「ヒロ…」

「人類も地球の一部だ。前に遙がオレにそう言った、皮肉にもオレはアグルの力を失って初めてそれに気が付いた。これがオレと遙の差だと思った。だから遙は、クリシスの予測を二年前に知っていたとしても、オレと同じことはできない。そうオレは思う…」

「博樹さん…」

本心では博樹も本当は捨てられなかったのだ。結果として、何度もこの町の人々をアグルは救ってきた。人類を排除しなければという予測を信じていた筈なのに。

「好きなら…また一緒に行きませんか？学校、お姉ちゃんたちと！」

「ルビィ…ありがとう、でもそれはできない。今更戻るつもりはないんだ、悪いな」

そこで今まで何も言わなかったルビィが初めて、博樹に言葉をかける。しかし博樹は嬉しそうに笑うが、その申し出を断った。

「オレは今のオレにやれる事を見つかる。そう思ったんだ」

そう言われると無理強いはできないと、諦めるが口にこそ出さなかったが三年生もまた博樹と個々の生徒として生活したいという気持ちも間違いなくあった。

そこで、博樹に何か言いたげだった果南が口を開こうとしたその時だった。

突如空に巨大なワームホールが開かれ、金属の粒子が降り注ぐ。

「大きい、まさかゾーリムみたいなのが…」

そう思い空に目を凝らす遙だったが、その予想は外れた。金属の粒子は一か所に降り積もり、銀色の装甲を持つずんぐりとしたロボットの形をとる。

「ロボット…」

その巨体の頭部と思わしき部分にある赤い一つ目がこちらを見据える。

「みんなは逃げて！」

遙がそう言うと、皆無言で頷き反対方向へ駆ける。そしてガイアと

なるべくエスプレンダーをとり出すが

「遙くん、危ない！」

ロボットの胸部が開き、何かがちらへ向けて放たれる。いち早くそれに気が付いた果南が遙を突き飛ばすが、発射されたぶつたは果南の目前で展開し十字架のような箱に果南を閉じ込める。

「果南さん！」

「果南！」

遙と博樹が咄嗟に駆け寄るが、果南を閉じ込めた十字架はロボット胸部に吸収され人質と言わんばかりに果南の顔だけが、その十字架から見える。

「クソッ！」

遙は今度こそガイアになろうとするが、突き飛ばされた衝撃でエスプレンダーを落としてしまい。果南と共にロボットの胸部に吸い込まれてしまっていた。

「しまった、エスプレンダーが……」

「博樹さん！」

「危険よ、あんなのに生身で勝てる訳ないじゃない！」

「離せ！果南が危ない！」

博樹はロボット目掛けて駆け出そうとするが、ダイヤと鞠莉が止めようとするが力で博樹には敵わない。振り切って走っていく博樹だったがロボットから放たれた砲弾の衝撃で吹き飛ばされてしまう。

「何もできないなんて……」

そう歯噛みする遙だったが、それは皆同じだった。悔しい思いを押し殺してA q o u r sの皆と逃げることにできない。

そしてロボットは、果南を連れ去るべく。出てきたワームホール目指して飛び立つ。このまま大切な人が連れ去られるのを見ていることしか出来ないなんて、全員が無力感に苛まれた。

—ヒロ：ヒロはいつも私達を助けてくれた。私たちが今生きてるのは、ヒロの……アグルのお陰なんだよ。

博樹の脳裏に、果南の声が聞こえた。気のせいなのかもしれない。だが、博樹に大切なものを思い出させるには十分だった。

「オレには、まだ護りたいものが…ある！」

砂を握りしめ、そう呟いた博樹は立ち上がり。自身を育てた町の海を見つめる。

「地球よ…もう一度、もう一度…オレに力をくれ！」

海に向かってそう叫ぶ、するとその時。時が止まった、波打ち際に押し寄せる波が、空を飛ぶ鳥が、全てが止まった。

そして轟音と共に、高さ10m程ありそうな津波が押し寄せる。そしてその波の中に、とても懐かしく感じる青い光を見つける。博樹はその光に手を伸ばす。

「アグル！俺はもう一度…戦いたい!!」

その叫びに呼応するかのように波は博樹の身体を海へと攫う。そしてここで時間が再び進み始める。

「博樹さんは？」

「嘘、消えた…？」

他の人間には、博樹が突然蒸発したようにしか見えぬ困惑するが。海面が青く輝き、海が割れた。

「何が起こったの!？」

皆が驚く中、奇跡の光は止まらない。海が割けるといふあり得ない状況、そしてその中で青く輝く何かがあった。

それは青い巨人だった。その巨人が蹲っていたがゆつくりと前を向くと立ち上がり、空へと飛翔する。

以前より明るい青色の体に走る銀色のライン、そして胸部の金に縁取られたプロテクターにライフゲージ。額に青く輝くブライトスポットに切れ長の目。

ウルトラマンアグルが今新たな姿V2（ヴァージョンツー）として蘇ったのだ。

「アグル…」

飛び立ったアグルは、ロボットに追いつくとその巨体にしがみ付き。無理やり地上に引きずり下ろす。

「タアッ！」

そして地上に降り立ったアグルは、ロボットに対して構えるが相手

は何もしてこない。先手必勝とばかりに駆け出して拳を打ち出したアグルだったが、果南を盾にされその攻撃は目の前で止まってしまう。

するとロボットは、再び飛び去ろうとする。今の状況なら、アグルが手出し出来ないのを理解しているから……

しかしアグルは再び駆け寄ると、飛び上がった浮き上がったロボットの肩部のアーマーを蹴り飛ばす。すると、そこが浮力を生み出すパーツだったのかバランスを崩して落下してくる。

それを確認するとアグルは右拳を左の手のひらに押し当てる。そしてそのまま腕を広げると右腕には以前よりも細く鋭い光剣―アグルセイバーを展開する。

すると果南はゆっくりと目を瞑る。

―信じてるよ、ヒロ……

アグルはそのままロボットの胸部に突きを一撃。捕らわれていた果南の入っている十字架だけをくり貫いて見せた。

そしてその切っ先を地面に突き刺し、果南を地上に戻す。

果南は目を開くとアグルと目が合う。するとアグルはゆっくりと頷き、アグルセイバーを解除する。

「果南さんー」

それを見た皆が、果南も元に駆け寄り助け出そうとするが9人の力ではビクともしない。

ロボットは目的を邪魔されたことに対して、アグルを排除すべき敵として認識する。肩部パーツの下から指先が銃口となつている両腕を展開する。そしてアグルに対してその銃口が火を噴いた。

何発もの銃弾が、アグルを襲い周囲は爆炎に包まれる。全員が息を呑んで見守る中、煙が晴れるとアグルの姿が露になる。

なんと無傷で耐えきつたアグルは、右腕を突き出しクイクイと手を動かして挑発する。攻撃が効かないという想定外の事態に陥ったロボットは混乱したのか、身を振じらせるばかりで何もしない。

「ハアッーウオオ……」

ならば今度はこちらの番だと、アグルは両腕をライフゲージの前に

添えゆつくりと両腕を広げエネルギーを集中させていく。

そして右腕の上に付き上げ、両腕で胸の前に円を描くように腕を回し球形のエネルギーの塊を創り上げる。そして両腕を一度体の左後ろに持っていき、両掌で球状のエネルギーの塊を放った。

「ハアッ…：デリヤアア!!」

—フォトンスクリュー—新たな力を得たアグルの新たな技、その一撃は咄嗟に反撃したロボットの砲弾を全て掻き消してその巨体に風穴を空ける。

撃ち出した後、アグルはその結果を見届けることなく構えを解き後ろを、皆が見守っている方へ振り返るとゆつくりとこちらへ歩み寄る。その背後でロボットは全身をスパークさせた後、粉々に砕け散るのだった。

ロボットが消滅すると、果南を閉じ込めていた十字架は消滅する。

「果南大丈夫?」

「大丈夫、私は平気」

鞠莉がすぐ心配そうに声をかけるが果南は本当に何ともない様子だった。

「ごめんなさい、僕のせいで…」

「みんな無事だったんだから言いっこなしだって。それよりはいい、これ」

謝る遥かに、気にしないでといい。エスプレンダーを差し出す。

「ありがとうございます」

そう言つて遥が受け取ると、果南はアグルを見上げる。

「ありがとう、ヒロ」

そう笑顔で告げる彼女に、アグルは頷くとそのまま飛び去って行った。

アグルの復活、それはきつと博樹の過去の呪縛から解放され。前を向くことが出来たことを意味するのだろうか。

39話 Aqours WAVE／再会父よ

「え？父さん帰ってくるの？」

「ええ、今度の地区予選は観に来れるみたいよ？」

こちらに引越してきてからすぐに、仕事の都合ですぐ家を離れていた父が帰ってくる。夕食時に母にそう言われた遥はそう聞き返す。

この引越しも生物学者として働く、父の仕事の都合の側面が大きかったのだが、結局半年ほど父だけ東京に残る事となってしまうていたのだ。

「本当!？」

地区予選を観に来る、その言葉で梨子の表情が明るくなる。ピアノの発表会も中学の頃に一度来てくれたきりで、高校に上がってから家にいることもほとんどなかった父も、最初は梨子のスクールアイドルとして活動を始めたことを驚いていたが応援してくれている。

「梨子は美人だから絶対人気が出る！」なんて親バカ全開な話をこの夏、電話でしたのも記憶に新しい。

「そっか、お父さん観に来てくれるんだ…」

「行きまーす!」

それから5日ほど経過した日の放課後、体育館のステージに怪我をしないようにマットを敷いて千歌は体育館で練習していた他の部活の生徒や皆が見守る中ノートに記されたパフォーマンスに挑戦する。

「頑張ってー!」

その声援を受けて、いざ挑戦するのだが今現在一度も成功しておらず。今回も千歌はマットにしたたかに背中を打ち付ける。

「大丈夫!？」

「だ、大丈夫…も、もう一回」

自身を心配する声がすぐ飛んでくるが、千歌はそう答えると再び挑

戦すべく最初の位置に戻る。

「少し休もう?」

そう梨子が心配して声をかける。

「5日もこんな調子じゃホントにけがしちゃうよ…」

「ううん、大丈夫。もうちよつと…もうちよつとで」

「地区大会まで二週間しかないんだよ?ここで無茶してけがしたら…」

「うん、解ってる、でもやってみたいんだ」

そう曜が心配する声を飛ばすが、千歌は譲らない。しかし、今までの練習での転倒のせいで彼女の身体は擦り傷だからで、頬や肘に貼られた絆創膏が技の難易度を物語っている。

「ラブライブ地区予選の時も、この前の予備予選も、皆が一緒だったから頑張れた。学校の皆にも、町の人たちにも助けてもらって…だから、一つくらい恩返ししたい…怪我しないように気を付けるから、もうちよつとやらせて」

結局、一回も成功することは無かった。しかし下校後も、家の前の砂浜で一人練習を続ける彼女を梨子と曜、そして果南が見守る。

「気持ちは解るけど、やっぱり心配…」

「なら止めたら?私が言うよりふたりが言った方が千歌はいうこと聞くと思うよ」

そう呟く梨子に、果南がそう告げる。でも二人は座ったまま千歌を見守るだけで動こうとはしない。

「嫌なの?」

「言っただじゃない、気持ちは解るって」

「うん」

そう返す梨子に、曜も同意する。やれることは全部やりたい。学校を守る為に、その気持ちはみんな同じだから。

「千歌ちゃん、普通怪獣だったんです」

「怪獣?」

突然梨子にそう話を振られ、果南は困惑気味に聞き返すと梨子は話を続ける。

「普通怪獣ちかちー。何でも普通で、いつもキラキラ輝いている姿を遠くから眺めてて、本当は凄い力があるのに…」

「自分は普通だって、いつも一歩引いてて」

そう曜も付け足す。

「だから自分で何とかしたいって思ってる。ただ見てるんじゃないんで、自分の意思で」

そう梨子が告げると、果南も思い当たる節があったのか何か考えるような素振りを見せた後立ち上がると、千歌の方へ歩み寄る。

「千歌ー」

一方で遥は、東京の湾岸地区出現した怪獣とガイアとして対峙していた。

黒い身体に一本角を持つ、全体的に刺々しい印象を持つ怪獣はワームホールから現れると街を攻撃し始める。すぐにXIGのファイターとガイアが現れたことで、被害はほぼ出なかったが今から始まる戦闘による被害は免れない。

「シュワッー」

ファイティングポーズをとったガイアは、じりじりと怪獣と見合うが怪獣は角から光線を放つ。ガイアはそれを咄嗟に躲すが、光線は海の中へと入っていく。

ガイアはその隙に怪獣へ近寄ると、腹部を連続で殴打する。

しかし怪獣にはあまり効果がなく、その巨体はビクともしない。今度は怪獣は口から霧状の物を発射し、ガイアを退ける。

攻めあぐねていると、今度はガイアの真後ろ。海中から緑色の触腕がガイアの胴と足をを絡めとる！

すると海中からその正体、緑のタコのような怪獣が出現する。後ろから体の自由を奪われたガイアに、正面の怪獣は口から触手状の舌を出す、ガイアの腕、首に巻き付ける。

「グワアアア…」

するとそこからガイアのエネルギーを吸収すると、ガイアのライフ

ゲージはたちまち明滅し苦しみ始める。

ファイターもガイアを援護すべく攻撃を始めるが、怪獣は意に介さずガイアを攻める。

「ドウワアアア！」

そんなガイアの窮地を救うべく、アグルが現れタコのような怪獣を蹴り飛ばす。そしてアグルセイバーでガイアのエネルギーを奪っていた怪獣の舌を切断する。

悲鳴を上げ仰け反る怪獣に反して、タコの怪獣は立ち上がるとアグルを威嚇するように触腕を振り回す。エネルギーの急激な消耗によってガイアは思わず膝を付くが、アグルが庇うようにタコ怪獣へと駆け出す。

「ダアツ！トワア！」

触腕を躲し、怪獣への確に蹴りや拳を入れるアグルは優位に戦いを進めるが舌を切断されたことに怒った怪獣は背後からアグルを攻撃しようとする。

「デュワツ！」

ガイアは立ち上がると、それを阻止すべく怪獣と戦闘に入る。エネルギーを消耗していることでスプリーム・ヴァージョンにヴァージョンアップするだけのエネルギーを残していないガイアだったが、それでも怪獣に食らいついていく。

「ウォアアアア！デエイツ！」

するとアグルがタコの怪獣の触腕を掴み、その巨体をもう一体の怪獣目掛けて放り投げる。気が付いたガイアはすぐにその場を飛び退き、アグルの隣へ着地する。

そして二体の怪獣へ止めを刺すべく、ガイアはフォトンエッジ。アグルはフォトンクラッシュャーを怪獣目掛けて放つ。

しかし怪獣は吠ええると、タコ怪獣は盾になるように動きもう一体の怪獣を庇う。タコ怪獣は2人のウルトラマンの攻撃に耐えられず爆散するが、もう一体の怪獣はその爆炎に逃れるようにワームホールへと消え去る。

「これは…タコ？」

変身を解除した遙が、タコ怪獣を倒した場所で力尽きているタコを見つめる。海から離れた場所にタコが居ることに違和感を覚えるが、博樹がある推論を立てる。

「取り逃がした怪獣は、生物を怪獣化する能力があるのかもしれない」
「じゃああの光線は…」

「ああ、当たった生物を怪獣に変化させるものだろう」

ガイアが避けた光線は、生物を怪獣化させる効果がある。そして恐らく、死ぬまであの怪獣の傀儡として操られる。というのが2人の結論だった。

「遙、お前は帰れ。オレはもう少し調べてみる。今のお前に、戦うエネルギーは無い」

そう言われた遙は、悔しそうにするが大人しく従うのだった。

その日の夜、千歌の部屋に電気が付いていないことに梨子はベランダに出た際に気付いた。

「あら？どうしたの？梨子ちゃん」

そんな時、廊下を通りかかった志満が梨子に気が付き窓を開けて声をかけてきた。

「あつ志満さん、千歌ちゃんは…？」

「何か、少し練習するって」

「練習って…こんな時間に」

そう呟く梨子に対して困ったような表情を浮かべるが、姉である彼女でも今の千歌を止めることが出来なかったのだろう。

視線を砂浜に移せば、人影が練習しているが見える。

「よっ…うあついってえ…」

心配になった梨子は心配になり、毛布を持って外に出る。そこには千歌の様子を見守っている曜がいたので、もうこの時間は冷えるので毛布をかけてあげる。

「梨子ちゃん…ごめんね。千歌ちゃんが梨子ちゃんに言ったら止められそうだからって」

「でも、こんな夜中まで…」

「あんな事言われちゃったらね…」

曜がそう一言謝るが、千歌が言われた事とは

『千歌、約束して。明日の朝までにできなかつたら諦めるって、よくやったよ千歌。もう、限界でしょ?』

夕方、果南にそう言われた。だから今夜中に成功しなければ諦めねばならなくなる。それが嫌だったのだ。

「二年前、自分が挑戦してたからなおさら解っちゃうのかな? 難しさが」

そう呟く用の視線の先で、千歌は何度も挑戦を続ける。しかし、何度挑戦してもあと少しで…と言った所でうまくいかず、彼女の身体は地を転がる。

「あと少しなんだけどな…」

「うん、あと少し…」

そう見守る2人の前で、千歌は力なく倒れこむ。

「どこがダメなんだろ…わたし」

確かに、果南程の身体能力は持ち合わせていない。それは認めるが、練習量でカバーできるはずだ。なら何が自分には足りないのか? そう今悩んでも、答えは出ない。

「千歌ちゃん、焦らないで練習通りに」

「梨子ちゃん…」

「できるよ、絶対できる」

「曜ちゃん…」

気が付けば左右の手を、梨子と曜が握ってくれていた。二人は千歌を立ち上がらせる。

「頑張つて」

「見てるから」

「うん！」

三人は顔を見合わせると、千歌はそう力強く頷く。

「千歌ちやーん、ファイトー！」

海岸から道路へ向かう石階段から、そんな声が聞こえ振り向くと。

そこには一年生4人が立っていた。

「頑張るずらー！」

そんな応援する声に千歌は頷くと、前をまっすぐ見て駆け出す。そして砂に手をつけようとしますが、バランスを崩して背中から地面に落ちる。

「あーっ！できるパターンだろこれえ！」

そう言つて悔しがるが、思わず口調も荒くなつてしまう。しかしそう言つた所で現状は変わらない。

「何でだろ…何で出来ないんだろ…？梨子ちゃんも曜ちゃんも、皆が応援してくれてるのに…」

どうして自分には出来ないのか？自分には何もないのか？そう思うと目頭が熱くなる。右腕で両目を隠すと、心の底に閉じ込めていた感情が立ち昇ってくる。

「イヤだ…イヤだよ！わたし、まだ何もしてないのに…何もできてないのに…」

自分には何もない、曜みたいな器用さや運動センス、梨子のようなピアノの才能。みんなと違って何もない普通な自分には何もできない。そう思つてしまう。

「ぴー…どっかーん！」

「ズビビビビー！」

「普通怪獣ヨーソローだぞー」

「おっと好きにはさせぬー！りこっぴーもいるぞー」

などと突然梨子と曜が怪獣遊びに興じ始めると、千歌は怪訝な顔をしながら立ち上がると2人は千歌に笑いかける。

「まだ、自分は普通だつて思つてる？」

「え……？」

そう曜に聞かれ、千歌はすぐに答えることが出来なかった。悩むように視線を逸らす彼女に今度は梨子が。

「普通怪獣ちかちかで、リーダーなのに皆に助けられてここまでできたのに、自分は何もできていないって。違う？」

「だってそうでしょ？」

そう聞かれて、今にも消えてしまいそうな声で千歌はそう答えた。

「千歌ちゃん、今こうしてられるのは誰のお陰？」

それを聞いて、曜は優しい気な笑みを浮かべると今度はこう聞いてきた。

「千歌ちゃん、今こうしてられるのは、誰のお陰？」

「それは、学校のみんなでしょ？町の人たちに、曜ちゃんや梨子ちゃん。それに……」

「一番大事な人を忘れてませんか？」

「え……？」

皆が居たからわたしは今こうしてられる。そう答えようとした千歌だったがそれは曜に遮られる。しかしこの問いは本気で答えが解らなかった。答えあぐねていると、梨子が助け船を出してくれる。

「今のAqoursができたのは誰のお陰？最初にやろうって言い出したのは？」

「それは——」

「千歌ちゃんがいたから、わたしはスクールアイドルを始めた」

わたしじゃないと言おうとした千歌を遮って、曜がそう告げる。すると梨子も。

「私もそう、皆だってそう」

そして再び曜が、

「他の誰でも今のAqoursを創れなかった……千歌ちゃんがいたから、今があるんだよ？その事は、忘れないで」

「自分の事を普通だって思ってる人が、諦めずに挑み続ける。それができるってすごいことよ？凄い勇気が必要だと思う」

「そんな千歌ちゃんだから、みんな頑張ろうって思える。Aqour

sをやってみようって思えたんだよ」

「恩返しなんて思わないで。皆ワクワクしてるんだよ？千歌ちゃんと一緒に、自分たちの輝きを見つけられるのを」

そう2人に言われる。これが皆の総意だった。千歌がスクールアイドルを始めなければ、ここにいる誰一人として、スクールアイドルを目指すことは無かっただろう。それに、自分の殻を破って出てくることもできなかった。

そしてみんなが向かい合って立ち、千歌の前に道を創る。千歌がこの先にあるものを見つけてくれるのを楽しみにしているように。

「新たなA q o u r sのW A V Eだね」

そう鞠莉の声が聞こえる。ダイヤと果南と一緒に、その先に立つ。

「千歌、時間だよ？準備はいい？」

そう果南が聞くと、千歌は力強く頷くと、まっすぐ駆け出す。大丈夫、絶対にできる。今ならそう確信できた。皆の前を駆け抜け、そしてその先にある輝きを、皆と見るために。

「ありがとう、千歌」

そして迎えた地区大会当日、遥は駅前で父親を待っていた。

「遥！」

「父さん、来てくれたんだ？」

「当たり前だろう？久しぶりだな、たくましくなった」

「そうかな？」

現れたのは、遥よりも頭二つほど背の高く眼鏡をかけた優しそうな、40代の男性だった。

「ところで梨子は？」

「姉さんは会場、母さんも他のメンバーの親とか町の人と一緒に向かってるからそろそろ来ると思うよ？」

梨子の姿を探す父に、参加メンバーだからもう会場入りしている旨

を伝えると少し残念そうな顔をされる。

「そう思うならもつと早く来てくれればよかったのに、でも暫く家に居るんでしょ？話す機会なんていっぱいあるさ」

「そうは言ってもな？やっぱり大会前に顔を見ておきたかったんだよ」

なんて親バカ全開で話すので遥は少し困る。

「今から行けば余裕で間に合うからステージを楽しみにしててよ」

「そう言えば遥。お前正式にアルケミースターズに入ったんだってな？」

駅のホームへ移動していると、ふとそう聞かれる。

「うん、今までずっと悩んでたけど…やっぱり、みんなの為に自分の能力を使いたいって思ってたさ」

「そうか…でも安心したよ。ずっと悩んでたもんな、父さんは何もしてやれなかった」

「いいんだって、感謝してる。僕は今僕にできることをやってる、それを受け入れてくれる人がいる…だから浦の星に来て良かったって思ってるんだから」

子供というものは残酷で、周りと比較して明らかに頭脳で優れている遥は周りから疎外されていた。父はそれを気にしていた。アルケミースターズを知って、遥にネットを教えて彼らと関わるように仕向けたのは父だった。でも遥は、それ以外の場所では孤独だった。姉に憧れて始めたピアノもやめ、勉強も学校ではできないフリを始めてしまった。ずっとその事をきにしていたのだ。

「そうか…なら良いんだ。お前が良い仲間に出会えたのなら」

「うん、僕は今、幸せだよ？それより父さんは今何の研究してるの？」

「今か？今は絶滅生物をクローン化して復活させる実験だ」

「絶滅生物を？」

そう聞き返す遥に、父は続ける。

「そうだ、かつて人類が絶滅させた生物を蘇らせる研究だ。今はその第一号として、アルテスタイガーをな…」

「てことは…最後のアルテスタイガーのイザクを？」

その質問に「そうだ」と応じる父は、実験は上手くいつている筈なのにあまり嬉しそうではなかった。

「嬉しくなさそうだね？上手くいつてないの？」

「そうじゃないんだ、でも人類の都合で滅ぼした生き物を、人類の都合で蘇らせていいものなのか？って考えるときがあるんだ」

「それは…」

それには、遥は答えられなかった。皆の為と言って、沢山の怪獣を葬ってきた遥には。

「お父さん！」

会場に付くと、まだ出番まで時間があるからと梨子が楽屋を抜け出して会いに来た。

「梨子、久しぶりだな」

「うん、本当に来てくれたのね？」

「可愛い娘のステージだからな、それにやっと仕事が落ち着いたから」
父の顔を見て、嬉しそうに駆け寄る梨子と父の会話を遥も笑顔で聞いている。久しぶりの顔を合わせて行う家族の会話だ。嬉しくないはずがない。

「決勝も絶対観に行くからな！頑張れよ」

「うんっ！じゃあそろそろ行くね、頑張るから」

そう言つて梨子は会場に戻つていく。

「僕らも行くかうか？お父さん、絶対びっくりするよ」

今日のステージは絶対過去最高のものになる、そう確信している遥が父にそう告げ一緒に客席へと向かうのだった。

ステージ上でチアガール風の衣装に身を包んだアイドルが舞う。
これが今回の衣装だった、今回取り入れたフォーメーションを行う
為に普段よりも動きやすい衣装で。

だがこの曲の最大の見せ場はサビの前。観客が見守る中、千歌を除
くメンバーのドルフィンウェーブから千歌はロングダートからのバ
ク転を決める。

— M I R A C L E W A V E

挑戦とWAVEをテーマとしたこの曲は、この先学校を救う為、前
大会で越えられなかった壁への挑戦。そして今までのA q o u r s
の殻を破る新しい波。

「今日ここで、この9人で歌えたことが本当にうれしいよ」

沢山の歓声の中で、千歌がそう告げる。

「わたし達だけの輝き…それが何なのか？どんな形をしてるのか？わ
たし達9人が見た事、心を動かされた事、目指したいこと。その素直
な気持ちに、輝きはきつとある！みんな、信じてくれてありがとう！」
「イエーイー！」

ステージの上で、9人がハイタッチを行う。きつとみんなとならど
んな奇跡も起こせる。この時は皆、そう確信していた。

40話 残された時間／嘆きの大地

「それでは皆さんーラブライブファイナリストの発表です!!」

全てのグループのステージが終わった後、全グループのメンバーがステージに集合する。

そしてモニターにグループの名前が表示される。決勝大会に進むことが出来るのは3グループのみ、この場にいる全員に緊張が走る。

「お願い…」

そう両手を握った曜が呟く。今回の予選の順位はその場とネットでの人気投票で決まる。

全てのグループ名が並ぶと、そこから折れ線のグラフが伸びる。そして上位3チームに絞られる。

「上位3グループはこれだ!」

そう司会の女性が叫ぶと、千歌達と他にグループにスポットライトが当たる。

そして三つのグループ名がモニターに表示されると、それぞれのグループ名から棒グラフのようなものが伸び最もそれが長かったチームの名前の上に金の王冠が乗る。そしてそのグループの名は—

Aqours

「千歌ちゃん!」

そう曜が千歌に駆け寄って抱き着くと、千歌もそこで現状を認識した。

「やった……やったの……?夢じゃないよね?…はっ!ってならないよね?」

「ならないわ」

まるで夢を見ているような感覚だった千歌に、梨子がそう即答する。

「本当?だって決勝だよ?東京だよ?ドームだよ?」

「奇跡よ。奇跡を起こしたの、わたし達」

まだ信じられない千歌だったが、梨子がそう目に涙を溜めて告げる。

「やった…皆、やったんだ」

それを客席から観ていた遙も、気づけば目が潤んでいた。これで決勝に行ける、この先にある輝きを観に行けると。

夕暮れの会場近くの公園で、半ば夢見心地のままだった面々だった。

「緊張で何も喉を通らなかったすら」

「あんたはずっと食べてたでしょ！」

そう言っつてパンを頬張る花丸に善子がツツコミをいれる。もはやお馴染みな光景だ。

「それにしても、アキバドームかあ」

「どんな場所なんだろう？」

果南がそう感慨深げにつぶやくと、そう千歌が応じる。先駆者たちが頂点を目指して輝いた舞台。そこからの景色は、今までのどのステージとも比べ物にならないだろう。

「いい曲を作りたい」

「ダンスも、もっともって元気にしよう！」

そう梨子と曜も意気込む。遂に掴んだ決勝への切符、絶対に優勝したい。今まで積み上げてきたものを、最高の形で残したい。その気持ち、みんな同じだ。

「見て！凄いい再生数」

そう言っつてルビィが近くの大型モニターを指さす。そこには、先程の地区予選でのAqoursのステージが映っていた。その再生数は、つい先ほどアップロードされたはずなのに凄まじいものとなっていた。

「本当…こんな沢山の人…」

「生徒数の不利を考えたら当然ですわ。これだけの人が観て、私達を応援してくれた」

「じゃあ、入学希望者も？」

そう期待を込めて鞠莉の方を向くと、鞠莉はすでに自身のスマホで入学希望者数を確認しようとしていたらしく。すぐさま入学希望者数を確認するが、その人数は増えていなかった。画面を見つめたまま一言も発さない鞠莉を見て察してしまう。

「どうしたのよ？」

「嘘……」

「まさか……」

そんなセリフが次々と飛ぶ中、苦笑いを受けべた鞠莉は弱々しく答える。

「ケータイ、フリーズしてるだけだよ？昨日だって何人か増えたし全く変わってないなんて……」

「鞠莉ちゃんのお父さんが言ってた期限って今夜だよ？」

そうルビイが確認するように聞く。

「大丈夫、まだ時間はありますわ」

そうダイヤが優しく告げる。だがもう夕暮れ、そんなに時間は多くない。

「学校に行けば、正確な数が解りますわよね？」

「うん……」

そう確認するダイヤに鞠莉は弱々しく答える。折角一位通過だったのに、一気に空気が重くなる。

「よし！帰ろう」

そう千歌の号令で、みんなで学校を目指す事になった。

「一位通過おめでとう！」

駅に向かう途中、そう声をかけられ声の方を向くと。男性がこちらへ手を振っていた。

「誰……？」

「お父さん……」

そう首をかしげる千歌に、梨子はそう呆れ気味に呟く。

「初めまして、梨子と遙の父です。決勝進出おめでとう！」

そう言つて頭を下げる父に、みんなも「はじめまして」と頭を下げる。

「で、遙は誰が好きなんだ？」

「んなっ!?そういう感情でここに居る訳じゃないから！純粋にマネージャーとして居る訳だからね？」

唐突にそう話を振られた遙が慌てて否定する。

「そうか？ならそう言うことにしとくか」

そう言つて笑う父に頭を抱える遙だったが、それには誰も触れなかったので助かった。

「父さん仕事で向こうに戻っちゃうけど、決勝も観に行くからな！」

「もう戻るの？」

そう遙が聞くと、父は頷いて続ける。

「ごめんな、でももう少しで仕事も落ち着くから。そうしたら一緒に内浦で暮らそうな」

それだけ言つてさっさと自分達とは別の電車に乗り込んでいった父に、少し恥ずかしくなる。

「元気な人だね」

「遙くんとは全然違うぞら」

「それは…そうだねえ…」

親バカで自由人で、でも仕事なら割り切つて家族の為に頑張っている父は確かに自分とは似ても似つかない。本心でそう思っている遙は視線を逸らす。

「電車来たわよ」

「変わってない…」

理事長でもある鞠莉は学校の鍵を持っているので、それを使って誰もいない学校の理事長室に行き。パソコンで入学希望者数を確認するも、人数は先程から変わっていない。

現時点で80人、あと最低でも20人は必要なのだ。

「そんな…」

「まさか、天界の邪魔が…」

肩を落とす曜とは対照的に普段通りな善子だったが、正直反応している余裕はない。

「再生数は？」

「ずっと増え続けてる」

そう聞く鞠莉に、すぐに動画サイトを確認したルビイがそう答える。

「パパに電話してくる」

そう言って鞠莉が外へ出る。ダイヤも一緒になって出ていくが、自分達には待つことしかできない。

「鞠莉ちゃん遅いね…」

曜がそう呟いたのは、鞠莉が出て行ってから小一時間程経過した時だった。気が付けば時刻は21時を回っていた。

「向こうは早朝だから、なかなか繋がらないのかも…」

遙がそう呟く。早朝なので、まだ寝ている可能性もあるわけ—

「ウェイティングだったね」

そう言って鞠莉とダイヤが理事長室に戻ってくる。

「お父さんとは？」

「うん、話した。決勝に進んで、PVの再生数が凄いことになってるって」

「それで？」

千歌に電話が繋がったか聞かれて、こう答えた鞠莉にじれったくなったのか、梨子が結果を聞く。だが、視線を逸らした鞠莉の代わりにダイヤが答える。

「何とか明日の朝まで伸ばしてもらいましたわ。ただし、日本時間で朝の5時…それまでに100人に達さなければ、募集ページを停止すると」

「最終勧告って訳だね…」

そう果南が呟くが、あまり手放して喜べる訳もない。果たして夜中に増えるのか？と遙は思ったが、ここで水を差すような発言は避けるべきだと思い何も言わなかった。

「でも、残り三時間だったのが八時間に増えた」

それだけでも十分だと、千歌は言った。するとずっと画面とにらめっこをしていたルビィが立ち上がる。

「今、一人増えた！」

それに皆画面に注目すると、希望人数は現在86人と表示されていた。

「やっぱり、私たちが観た人が興味をもってくれたのよ」

そう梨子が言う。希望は繋がれたのだ、「このまま増えてくれれば…」そう曜も呟くと、千歌は理事長室を飛び出そうとする。

「ちよっどこ行くのよ!?!」

「駅前」

善子が驚いてそう聞くと、千歌はそう短く答える。

「浦の星お願いしますってみんなにお願いして…それから…それから…」

「今からじゃ無理よ」

「じゃあ今からライブをやろう！それをネットで…」

梨子にそう言われるが、千歌はそれならと続けるが後ろから抱き着いた曜に優しく諭される。

「落ち着いて、大丈夫だよ」

「でも…」

千歌は納得できないようだったが、曜は離さない。

「何もしないなんて…」

「信じるしかないよ、今日のわたし達を」

そう果南が告げる。もうやるべき事は全てやった。それを聞いて、

千歌も落ち着いたのか大人しくなる。

「そうだよね…あれだけたくさんの人に観てもらえたんだもん、大丈夫だよね」

千歌の気持ちが悪く落ち着いたのを察した曜はここでようやく離れる。

「さあ、そうとなったら皆さん帰宅してください」

「帰るずらか？」

ダイヤにそう言われ、花丸が聞き返す。すると善子も

「何か一人でいるとイライラしそう」

「落ち着かないよね、気になって」

そう曜も同意すると果南が「だってよ」と笑いかける。

「仕方ないですわね」

そう珍しくダイヤが折れた。きっと彼女も気持ちは一緒なのだろう。

「じゃあ、いいいの？」

「皆さんの家の許可と、理事長の許可があれば…」

千歌にそう期待の目を向けられたダイヤがそう言っ、視線を鞠莉に逸らす。

「勿論！みんなで見守ろう！」

そう即答した事と、家族からの許可が下りたので全員今夜は学校で入学希望者数の増加を見守る事となった。

「また一人増えた！」

ルビイの嬉しそうな声が聞こえる。きっと大丈夫、きっと1000人に達する。そう思った遙に一通の電話がかかる。

「ちよつと外しますね」

「何？ひよつとして彼女く？」

「そんなんじゃないですよ、それ引きずってたんですね？」

鞠莉にそう茶化されるが、遙はそう返すと屋上に向かう。

「もしもし、博樹さん？」

『遙、調べた結果だが…やはり想定通りだ』

「そんな…」

先日現れた角の怪獣の持つ能力、それは生物を怪獣化させ死ぬまで

傀儡として操る事。それでほぼ間違いないという知らせだった。

『それとな、絶滅生物をクローン再生させていた研究施設が今さつき落雷事故で崩壊した。更にその時、ワームホームと似たような反応が同じ場所で観測された』

「まさか…父さんの…」

そこで遙は頭が真っ白になった。もしかすると父親は…そう嫌な発想ばかり浮かぶ。

『まだ事故現場は調査中だが、今度現れる怪獣はその絶滅生物を怪獣化させたものかもしれない。だが、オレ達は必ずそれを倒さないといけない、何故か解るか?』

「え…?」

博樹にそう問われた遙は、思考をこちらに引き戻すが答えはすぐに浮かばない。

『倒すことを戸惑えば、奴らは他の生物も同様に怪獣にして送り込んでくる。やつらはそうすることで、人類の愚かさを見せつけてくるんだ』

博樹は冷静に告げる。恐らくそれは事実、躊躇う訳にはいかないのだ。

「解ってます。必ず…必ず倒します」

『ああ、オレ達は負けられない』

そして電話を切ると、その時遙の表情はかつてないほど険しいものだったが、まだ父が巻き込まれたとは限らない。だから梨子や皆に余計な心配をさせたくなかった。

それでも暫く胸のモヤモヤが晴れなかったので30分ほど時間を置いてから理事長室に戻るのだった。

「遅い！」

「ごめんごめんちよつと新しい研究の話とかしててさ」

「アルケミースターズのこと？」

「そうそう、一応正式にメンバーになったし。色々手伝ったりしてるんだ、僕の勉強にもなるから」

入って一番、善子に遅いと言われてしまったが誤魔化そうと咄嗟に

付いた嘘だったが向こうからそう思ってくれたのでそのままにした。

「ルビイ達三人で晩御飯買いに行くんだけど遥くんなにがいい？」

「じゃあ僕も行くよ、マナージャーだし。流石に全員分は持てないから一人でなんてかつこつけれないけど…」

気が付けばもう日付も変わろうとしていた。この時間に高校生が出歩いているのはいささかどうかと思うが、昼食以降何も食べていないのも問題だし、そもそもこんな田舎でそんなにうるさく言われないだろなんて笑いながら、最寄りのコンビニへ向かった。

「まったく、世話が焼けるったらありやしない！私はリトルデーモンの事で手一杯なのに」

とりあえず全員分の食べ物と、いつでも時間も時間だったのでおでんの残りやおにぎりやパン類なのだが。を購入した帰り、最寄りと言っても往復すれば小一時間くらいかかる道中でそう善子がぼやく。

「しかたないなら、今のAqoursを作ったのは千歌ちゃん達2年生3人」

「その前のAqoursを作ったのはお姉ちゃん達3年生3人」

これはルビイが

「責任、感じてるすらよ」

そう花丸とルビイに告げられる。自分たちは、踏み出す一步を貰ってそのままついてきただけ。

「そんなもん、感じなくていいのに…少なくとも私は、感謝しか…」

そう善子が言いかけた後、咄嗟に後ろを振り返る。ルビイも花丸も茶化したりせず優しい笑みを浮かべたままこちらを見つめている。

「リトルデーモンを増やしに、Aqoursに入っただけなんだし！」

恥ずかしくなったのか、そう言っただけ視線を逸らす前を歩いていた遥はそんな様子を笑ってみていた。

「だからマルたちが面倒みるすら。それが仲間すら」

「だね、なんかいいなあそういうの。支え合ってる気がする」

「そうだね」

花丸とルビイの言葉にそう遥が同意する。

「いいこと言ったご褒美に、もち巾着あげる！」

「マルは黒はんぺんがいいずら」

「それはダメ！」

「ルビイはたまご」

「それもダメ！」

「じゃあ牛すじ」

「それもダメ！ってか遥何も言っていないでしょ！」

「そうだっけ？」

夜食を済ませた後は、全員静かにパソコンで人数の変動を見守るだけだった。朝日が昇り始めていた。そんな中で外の空気を吸いに出たりするものもいる中、遥は相変わらずずっと理事長室の片隅に座り込んで自身のパソコンを触っていた。

「遥、何見てんの？」

「ああこれ？ちよつとワームホールについて解析するのを手伝ってるだけだよ。大丈夫だって今は信じてるから、その間にも色々しようかなって」

「その内容でだけって…高1のやることじゃないわよ」

アルケミースターズでの捜査や研究の手伝いをしているだけのつもりでも、善子や皆が見ればその内容は到底理解できない。

「そうかもね？でもできる事は、なんでもやろうってこの学校に来て思えたから…」

そうこう話していると、気が付けば残り時間は10分程度となっていた。ずっと画面を見つめていたルビイが窓を開けて千歌達、外に出ていたメンバーを慌てて呼ぶ。

「あと3人！お願い！！」

そう画面に願うしかできない。

「981」

「時間は？」

「大丈夫！」

きつと届く、決勝に進めたようにきつと奇跡は起こる。そう固唾を飲んで見守る

—あと2人

—あと2人

—募集終了—

無情にもサイトは切り替わり、この4文字だけが画面に表示される。

「時間切れですわ」

「そんな…大丈夫だよ、あと1日あれば…ううん、あと一時間でもいい。それで絶対…」

「それが約束ですから」

悔しい気持ちを抑えて、気持ちを抑えられない千歌にそう告げる。しかし、ダイヤの様に割り切れる者の方が少ない。

「でも、それだけだったら…」

「そうだよ、ずっとじゃなくていいんだよ？あと1日くらい…」

そう梨子と曜も言うが、ダイヤは今度は折れてくれない。

「掛け合いましたわ。一晩中何度も何度も…ですが、2度も期限を延ばしてもらっているのです」

「いくらパパでも、全て自分の権限で決められない。もう限界だって…」

そう鞠莉も弱々しく告げる。届かなかったという現実が、ここにいる全員の胸を締め付ける。

「じゃあ、本当にダメってこと？」

「ダメだよ…だってわたし達、まだ足掻いてない。精一杯足掻こうって約束したじゃん！やれること全部やろうって…」

そう聞き返すような梨子の隣で、千歌がそう言う。まだ何かやれる。まだ終わりがたくない。

「やったよ。そして決勝に進んだ」

そう果南が慰めるように優しい声音で告げる。

「じゃあ何で学校が無くなっちゃうの…？そんなの…」

「やっぱり、もう一度パパと話してみる」

千歌の姿に感化された鞠莉がそう言って室外へ行こうとするが「おやめなさい」とダイヤに止められる。

「これ以上言ったら、鞠莉が理事長をやめるように言われる。受け入れるしかない…学校は、無くなる」

そんな時だった、学校近くの山中にワームホールから飛来した怪獣が着地したのは。

「こんな時に…皆逃げて！」

「遥くんは？」

「僕は戦う！こんなことになったけど…この場所を失いたくないから！」

ここからはまだ距離がある。遥は花丸に聞かれてそう答えた。本音を言えばまだ現実を受け入れられない。でもこの場所を今守らなくていい理由にはならない。

何より、自分を受け入れてくれた場所だから――

「ガイアアアッ!!」

エスプレンダーを掲げた遥は赤い光となって飛び立ち、怪獣の目の前にガイアとして土煙を派手に上げながら着地する。

以前取り逃がした怪獣が相手であることに気が付く。今度こそここで倒すべく駆け寄ると、拳の連打や連続の回し蹴りを見舞うが怪獣の耐久力は凄まじく、反撃を受けてしまう。

そしてワームホールからもう一体、赤毛のトラのような怪獣が降り立つと、ガイアを睨みつけて唸り。目にも止まらぬ速さでガイアの身体を吹き飛ばす。

「グルルルル…」

「ジユワッ！」

唸るトラ怪獣を前に、ガイアは腰を低く落として構える。暫くならみ合う形となってしまうが、その間にもう一体が皆を狙おうと学校へ向かう。

(させないッ！)

そうガイアが咄嗟にそちらにとびかかろうとするが、逆にトラ怪獣に襲われてしまう。そちらの対応で精一杯なガイアを、そして廃校を阻止できなかったAqoursをあざ笑うように、怪獣は光線を角から9人の少女へと放つ。

しかしその攻撃は目前で地面から立ち昇る青い光に防がれる。

「青いウルトラマン…」

「ヒロ…」

曜と果南がいち早くその正体がアグルであることに気が付く。怪獣は以前舌を切断されたことを恨んでいるのか、アグルを目視すると怒り狂って駆け出す。

しかし一瞬で怪獣の背後に回り込んだアグルによつて背中へ激しい連撃を受けてしまい、態勢を崩される。

アグルへの怒りのこもった攻撃を繰り出す怪獣とは対照的に、アグルは冷静に攻撃を見切つて反撃を加えていく。このままでは敵わないと悟つたのか、今度はトラ怪獣を操り速度でガイアを振り切り背後からアグルを爪で引き裂く。

これで2対2で仕切り直しと言わんばかりに向かつてくる怪獣だが、ガイアとアグルもそれぞれ怪獣をトラ怪獣を相手取る。しかし操つて自身に合わせさせる怪獣とは違い、こちらは息の合った動きで次第に翻弄していく。

隙を突いたアグルが、怪獣を蹴り倒した後トラ怪獣につかみかかり両者は地を転がる。

その間にガイアはスプリーム・ヴァージョンへと変化を遂げる。そしてAqoursを狙おうと舌を飛ばす怪獣を持ち上げ頭から叩き付ける。

『その怪獣は、僕がやります』

トラ怪獣と一対一では俊敏さもパワーも僅かに圧され始め、先程の爪によるダメージで動きの鈍いアグルに、ガイアはそう言つて相手を交代する。この怪獣はきつと父達の実験でクローン再生されるはずだったアルテスタイガーだ、ならせめて自分が。そう思ったのだ。

こちらの怪獣もパワーは凄まじいが、アグルには聊か冷静さを欠いた攻撃を繰り出すのと俊敏さはアグルが優るのでトラ怪獣よりは相性がいい。

ひたすら冷静に攻撃にカウンターを合わせ、これでは勝てないと察したのか *A g o u r s* を再び狙おうと光線を放とうとするので、咄嗟に間に入ろうとするとそのままアグルに放つという不意打ちを受けアグルの身体が地に倒れる。

ライフゲージが明滅を始めるが、エネルギーを吸いつくそうと伸ばしてきた舌をアグルスラッシュで撃ち落としアグルは両腕を胸の前でクロスさせゆっくりと開く。

「ハアツ！ウオオオオ…」

そして右腕を上に掲げ、左腕を腰に持つてきたまま右腕を曲げたまま下げ、横から見てL字になるようにして光線を放つ。

「デュワアツ！」

—アグルストリーム—

アグル最強の一撃が怪獣を貫き、完全にその身を消滅させる。

ガイアとトラ怪獣は、ほぼ直角の肉弾戦を繰り広げていた。やられではやり返す、そんな状態が暫く続いたが、お互いの飛び上がったの拳が交錯し、お互い地面に叩きつけられる。しかしガイアが先に立ち上がると、ここを好機と見たのかフォトンストリームの発射態勢に入る。

—オレハ生キル！ガイア、オレハ生キル！子供ノタメニ！—

その怪獣の叫びを聞いてしまい、思わず構えを解いてしまったガイア。エネルギーは僅くも周囲に霧散してしまう。

この怪獣は、かつての様に生きていたただけなのだ。怪獣となる原因を作った怪獣に操られ戦闘になってしまったが、ただ生きていたのだ。

しかし、このまま見過ごせば人類だけでなく。地球怪獣をも襲うかもしれない、それに本来なら滅んでいる存在だ。それを怪獣として弄んで、結果より多くの命を危険には晒せない。でも倒すことが正しいことなのか？その迷いが、ガイアに光線技を使わずに戦うことを選ばせた。

「…デヤッ！」

駆け出したガイアと先程よりさらに激化した戦闘となる。

アグルはその戦闘に手は出さなかった。自身が消耗しているのもあるが、一番はガイアの気持ち尊重したからだ。

「スプリームでも、苦戦するなんて…」

「でも、どっちも悲しそう…」

そう鞠莉と千歌が呟く先で、お互いが苦し気な声を上げながら戦っていた。

投げや蹴り、拳の応酬の果て。ガイアのライフゲージも激しく明滅し、本当に必殺の一撃を放つだけのエネルギーはもう無かった。

飛び上がった怪獣を見て、ガイアも飛び上がると赤いエネルギーを纏って渾身の力で蹴りを放つ。

「デリアアアア！」

渾身のスプリームキックが怪獣と激突すると、辺り一面眩い光に包まれる。

その光が晴れた時、立っていたのはガイアだった。辺りにはまるで昇天するかのように光の粒子が舞っていた。そのまま姿を維持できなくなったガイアは変身を解き、遥の姿に戻るとその場で膝を折る。

「ごめん…こうするしか、できなかった…」

人間の都合で滅ぼした生物を、人間の都合で蘇らせようとした拳、再び人間の都合で倒してしまった事への懺悔のようだった。

そしてまだ舞っていた粒子の一部が、遥の視線の先で一つの存在へ変わる。

それを目で見た遥の表情が一瞬で青ざめる。

「嘘だ…嘘…なんで…？どうして…」

認めたくなかった。いや、認めてはいけなかった。そうしたら、遥

の今迄が壊れてしまうから。
「嘘だああああああああああああああああ!!」

41話 君を守りたい／戦う選択

「そんな…僕は…」

呆然と遙が見つめる先。そこには父親が倒れていた。

怪獣の正体は父親だったのだ。アルテスタイガーのクローニングはまだ未完全でそれだけでは怪獣を生み出せなかった敵は、施設にいた父親を核に使ったのだ。

それを知らずに倒してしまった遙は、父親を手にかけてしまったのだ。

「遙、何があったの?」

梨子たちが、遙を探してこちらへ駆け寄ってくる。そして皆も、信じられない現実を目撃してしまう。

「この人…」

「お父さん…遙…何で…どうして?」

はたから見ても、遙が父親を手にかけてたように見えてしまう。遙はふらふらと立ち上がるが、何も言わない。

「遙、何か言っつてよ!」

「梨子ちゃん落ち着いて!」

遙に詰め寄る梨子を、曜がそう言っつて止めようとする。すると遙はゆっくりとこちらを向くと、震える声で告げる。

「あの怪獣は父さんだったんだ…僕はそれを倒した…でも仕方ないじゃないか! こうしなきゃ、もつと沢山の人が傷ついたんだ!」

そう次第に強めな口調になりながら告げる遙を、梨子は引つ叩いた。

「え…?」

「どうして…そんな風に言えるのよ!…お父さんなのよ?…なのに…どうしてなの…」

「梨子ちゃん…」

「返してよ…お父さんを…」

そう遙の肩を掴んだまま泣き出してしまった梨子に、誰も何も言えなくなる。博樹も合流してきたが、この光景を見て息を呑む。

そして意を決すると、梨子を遥から離す。

「やめろ、そんな事をしても変わらない」

「博樹さん…」

「ウルトラの力は神じゃない。失ったものは、もう戻らない」

そう告げる博樹の表情も、苦しげだった。自分が戦うべきだったと責任を感じているのだ。

「このままだとG・U・A・R・D. が来る、今はここを離れるべきだ」

そう博樹が提案する前に、遥は一人先に帰ってしまう。

「待って、遥くん」

その時に花丸とぶつかってしまったが、遥は何も言わず。そんな花丸の呼び止める声に立ち止まる事もなかった。

「これって…」

花丸の足元には、エスプレンダーが転がっていた。

「遥は、迷いながらあの怪獣を倒したんだ。同じ地球の生き物を怪獣化されていたのは解っていた。でもああしなければ、もつと多くの生き物が怪獣にされていたんだ…それに君が、君の父親に殺されていたかもしれないんだぞ」

博樹はそう真剣な目で梨子を見据えて告げる。それはまるで、だから遥を責めないで欲しいと言っているようにも聞こえた。

「そうですね…私、遥に酷い事言った…遥の方が…辛いのに…」

色んなことが重なって皆動揺している。少し、気持ちを落ち着ける時間が必要だった。

次の月曜日、全校集会が開かれた。理事長である鞠莉の口から、正式に学校が統廃合となり、現在の1、2年生は来年から沼津の高校へ通うことになることが彼女自身の口から語られた。

だからと言って今迄の学校生活が変わってしまうことは無く。今まで通りに授業は行われるし、クラスの皆も変わらない。

ラブライブだって無くなったりしない。決勝への切符は握ったま

まだ。でも、皆悩んでいた。

学校を存続させることを目的としてきたのに、それを果たすことができなかつた今、決勝に出場することに意味はあるのか？そういう気持ちで全員抱えていた。

ルビイは、姉であるダイヤ達三年にとつては最後のラブライブ。だから必ず優勝したい。そう告げる。もちろん皆その気持ちもある。

しかしそう簡単に割り切れるものではないのだ。

更に昨日の怪獣騒ぎで、梨子も父を喪った。誰も気持ちを簡単に切り替えることなどできないのだ。

結局その日は練習は中止となつてしまい。翌日は葬儀の為に梨子も学校を休んだ。

あの後、自分がどうやって帰つたのか。遙は覚えていなかった。

あの後家に、G・U・A・R・Dの関係者が来て、父が亡くなつたことを知らされ、母はその場で泣き崩れてしまったらしい。

らしいというのは、遙はあの後部屋から出ることは無かつたからだ。

あの時、父のいる研究所は破滅招来体によって破壊され。怪獣として差し向けてきた。そしてそれをウルトラマンが倒したことで、人間に戻ることが出来たと。

こつちに来て、初めて学校を休んだ遙だったが母も何も言わなかつた。シヨックでふさぎ込んでいるのだろうか。

「遙、昨日はごめんなさい…私…」

部屋の前で、梨子がそう遙に呼びかけるが遙は何も言わない。正確には聞こえていないといった方が正しいのかもしれない。

ヘッドホンをして、カーテンを閉め切つた部屋で電気もつけずに外からの情報を遮断してしまつていたから。そんな事は知らない梨子

は、諦めて自室に戻ってしまおう。

流星に翌日は流星に外に出て、葬儀にも出席したのだが。親戚や家族に何を言われても上の空で何も入ってこなかった。

でも、葬儀が終わった後自然と遙は認めてしまった。もう父は居ないんだと。自分のせいだと、そのせいで姉を傷つけてしまった。

そして姉から拒絶されてしまったと。

—あの子なんでも知ってる風で気味が悪いわ

—あの子もあれよ、地球の自己防衛本能が生み出した忌み子とか言われてるアレ。不気味よね

—何考えてるか解んないし

—男のくせにナヨナヨしてそのくせ何でも解ってる顔してむかつくんだよ

昔言われた事が、脳裏から離れなくなってしまった言葉の数々が今まで記憶の底に沈めていたものがこみ上げてくる。

科学者でもあった父だけは遙の才能を認めてくれていた。だからアルケミースターズを知るキツカケをくれた。でもその父はもう居ない。

—オレハ生キル！ガイア、オレハ生キル！子供ノ為ニ！

あの時の怪獣の叫びは、自分が最後の一頭だと知らなかったアルテスタイガーのこの星で生きていたい。そういう心の叫びだと思って戦った。でもそれだけではなく、父の梨子と遙の為に生きていたいという思いも混じっていた。

そしてそれを皮肉にも息子である遙が握りつぶした。

「…なさい…ごめんなさい…」

父の墓前でそううわごとのように繰り返す遙。二日ぶりに出した声は掠れていたが、次第に聞き取れるようになっていく。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

「遙？遙どうしたの？」

近くにいた梨子と母が気が付いて駆け寄ってくる。

「遙すっかりして！遙は悪くない！悪くないの…大丈夫よ遙、もう大丈夫だから…」

そう梨子が遙に寄り添って言いかけるが、遙は振りほどいて走り出してしまふ。

「遙―」

呼び止める声も届かないまま―

遙は家からも離れた場所で海を眺めていた。

エスプレンダーは気が付けばどこかで落としてしまったらしく、ずっと手元がない。でもこれでいいと思った。もう自分に、何かを護る資格なんてない。

「僕は一体…どうすればいいんだろう？」

そう呟いたところで、答えなど返ってこない。

「遙くん？」

「花丸…ちゃん？」

「遙くんはノート届けようと思って…そしたらここにいるのが見えたらからバス降りてきたすら」

遙に声をかけたのは花丸だった。その後ろには、善子とルビイもいた。

「このヨハネがノート取ってあげたんだから、感謝しなさい！」

「ルビイも、前にしてもらったから…」

科目ごとに分担して三人で遙の為に。

「ありがと…」

そう言つて受け取ろうと手を伸ばそうとするが、震える手が伸びることは無かった。

「遙くん…」

「あれ…変だな…」

心配そうに見つめるルビイの前で、遙は自分の手を見つめる。その声もはやり震えていた。

「ごめん、明日でいい？明日は…ちゃんと行くから…」

「ダメ、待って！」

心配してくれている皆から逃げるように去ろうとする遙の手を、三

人は掴む。

「…離して」

「今の状態で放っておける訳ないでしょ！」

「ルビイ達、いつも遙くんを守ってもらった。だから…だから遙くんの支えになりたい！」

「もう無理しなくていいよ…遙くんには、もっと自分を大事にしてほしいすら…」

「みんな…」

三人の本気で遙を心配する声に、振りほどこうとしていた腕の力を緩める。

「僕は…僕は、皆を守りたかった…怪獣から、破滅招来体から。なのに、父さんを…母さんと姉さんから奪った…解らないんだ、学校も守れなかった僕はこれからどうしたらいいか…」

今の遥には、悔しさ、悲しさ、怒り―様々な感情が渦巻いていた。それだけ今回の出来事は、遥の心に大きな影を落としたのだ。

「僕はもう…戦いたくない…」

そう言って泣き出す遥に、ルビイと善子は何も言えなくなる。しかし花丸は遥に抱き着くと優しい口調でこう告げる。

「今までありがとう。マルたちを守ってくれて…でも遙くんが無理に戦う必要なんてないんだよ？もう戦わなくてもいいんだよ？」

「花丸…ちゃん？」

「前にマルは言ったずら。もっと自分を大切に…でも遙くんは優しいから…」

違う。最初は梨子が守ればよかった。でもA q o u r sの皆と出会って、自分を受け入れてくれるこの場所が心地よかったから…それを失うことが怖かったただけだと。

そう否定したかった遥だったが、言い出せなかった。今は花丸の、彼女達の優しさに甘えてしまった。

「ありがとう…ありがとう…受け入れてくれて」

そう涙を流しながら言う遥だった。自分を受け入れてくれている人がいることが、嬉しいから。

「本当にそう思っているのかい？」

「誰!？」

唐突に割って入った男の声に、遙は花丸から離れ三人を庇うように立つ。その視線の先には黒いコートに身を包んだ男が立っていた。そしてその男が近付いてきたことで月明かりによつてその顔が明らかになる。

「僕は…キミさ！桜内遙」

「何…?」

その男は、遙と同じ顔、同じ声をしていて背恰好まで同じだった。

「嘘…遙くんが2人…?」

「まさかドツペルゲンガー?」

「そんなんじゃないぞら…貴方は一体…?」

ルビィ、善子、花丸がそれぞれの反応を示すが、黒い遙はそれを気にせず遙へ語り掛ける。

「僕は君だ。頭脳と直感に優れ、アルケミースターズに入って世界を救う?格闘技まで習得して拳句ガイアの力を―」

「やめろ!」

まるで責めるかのような口ぶりで話す相手を、遙はそう叫んで遮る。

「アルケミースターズがどうして存在すると思う?どうして僕たちはネットワークを介して集まらなければいけなかった?」

「それは…」

「他の大人や子供達が気味悪がったからじゃないか?他と少し違うだけで、すぐに人間は異端を排除する。人間なんてその程度の生き物だ、僕らこそ生き残るにふさわしい存在」

「違う!」

そう否定するが、黒い自分は全て見透かしたような不気味な笑みを浮かべたまま続ける。

「本当にそう思っているのかい?遙、その3人だって昔のお友達と一緒に。僕らから見ればただの凡人、本心では僕らを気味悪がっている…!」

「そんな訳…」

そう言うが、強く否定することが出来なかった。遥は本当はそう思われているのではないかと恐れている。昔の同級生の様に…だから強く断言することが出来ない。

「そんなことないぞら！」

「そうよ！遥の顔してそんな適当な事言うなんて許せない」

「遥くんは、ルビィ達の大事な友達だもん」

「みんな…」

黒い遥へそう反論する三人に、遥は思わず振り返ると3人の真剣な目を見て思わず微笑む。少なくともこの3人は自分にそんな感情は持っていない。そう確信できたから。

「美しい友情だね、でも本当に信じるのかい？遥」

「何…？」

「僕は君さ、君の心だ」

それでもなお、黒い遥は不気味な笑みを浮かべ自身をそう称した。

「ふざけるなあ！」

珍しくそう声を荒げて殴りかかる遥かだったが、相手の身体をすり抜けてそのまま前に倒れてしまう。

「フッフ…フハハハハ…」

黒い遥はそのまま輪郭だけ白くぼんやりとした半透明の存在になると、不気味な声で笑い始めると。そのまま巨大化する。

そしてそれは、全身が黒く首のない胴体に縦に真っ直ぐ走る黄色い目のような器官をもち、左腕からは鋭く鋭利な爪を伸ばした異形へと姿を変える。

「ピギツ…」

「悪魔…？」

「とにかく逃げるぞら！遥くんも」

突然の怪獣の出現に、パニックになりかけけるが、花丸は冷静にそう告げると遥の手を引いて逃げようとする。

「あれが…僕の心の姿だっていうの…？…そんな事…」

しかし遥は、そう呆然と呟いて動こうとしない。

「ダメだよ、遙くん逃げよう?」

「できないよ…だって、逃げたら僕はアイツを認めることになる…そんなの…」

そう言っただけで逃げようとする遥は拒む。するとふっと花丸は笑うと、あつるものをとり出した。

「じゃあ、戦って勝つて?これ、あの後拾ったんだけど…渡すタイミング逃しちゃうたら。だから今、渡すね」

「これ…エスプレンダー?やっぱりあそこで落とすんだ…」

「マル、本当は遙くんにもう傷ついてほしくなかった。戦ってほしくなかったから…でも、それで遙くんが辛い気持ちになるなら戦う選択は、ありだと思う。だから、返すね」

そう涙目になりながら告げる花丸が差し出したエスプレンダーを、遥は受け取った。

「ありがとう、花丸ちゃんでも…」

だが、遥は光を開放することを渋ってしまう。

「いつだってどんな時だって助けてくれるんでしょ?ならまず、自分の為に戦いなさいよ」

「遙くん、がんばルビィー!」

そう言っただけで善子とルビィがほほ笑む。そこでようやく決心がついたのか、遥の表情は明るくなる。

「ありがとう、僕…負けないから!」

そう言っただけで遥はこちらを見下ろし嘲笑う怪獣の方を睨む。そしてエスプレンダーを掲げ、遂にその光を解き放つ。

「ガイアーツ!」

夜の内浦に、赤い光が立ち昇るとウルトラマンガイアが現れた。

「フツハハハハ」

ガイアの姿を見て尚も不気味な笑い声を上げる怪獣に対して駆け出す、目のような器官から破壊光弾を乱射される。

咄嗟にバリアーを展開し、背後にいる花丸たちに流れ弾が行かないように全て防ぎきるとガイアスラッシュを放ち怪獣の態勢を崩す。

それを確認すると、一気に距離を詰めるべくガイアは駆け出す。

しかし、怪獣も肉迫してくるガイアに対して左腕の爪を横に薙ぐ。ガイアはこれを飛び宙返りをして躲すと怪獣の後ろに着地してそのまま両腕を広げ蹲るようにしてエネルギーを頭部に収束させる。

「デヤッ！アアアアアッ…デヤアアアア！」

渾身の力で放たれた光子の刃―フォトンエッジ―は怪獣の身体を切り裂く。すると怪獣の身体は量子となって霧散する。

「フハハハハ…」

しかし、その不気味な笑い声だけは暫く辺りに響いていた。

―結局君は、自分に不都合なものを誤魔化す事しかできないんだ。今までそうだったように―

そんな自分の声が、聞こえた気がした。

変身を解いた遙は、その場に座り込んでしまった。

「僕は、なんでみんなと違うんだろ…」

思わず口を突いて出てしまった言葉、元々もって産まれた頭脳もだが。一番はガイアの力を手にしたこと。

「遥くん大丈夫！」

そう言っただけの花丸たちが駆け寄ってくるが、幸い今の独り言は聞かれていなかったようだった。

「うん、大丈夫だよ…」

「嘘ね、明らかに無理してるわ」

そう善子にあっさりと言破られてしまうと、遙は観念した様子で話し始める。

「僕さ、あいつの言っただけと同じこと…全く考えた事ない訳じゃないんだ…」

「え？」

「実際、周りの人らに気味悪がられたりしたのも事実だし…だから怖かったんだ、皆に怖がられるのが」

そう告げる遙の表情は寂しげだった。

「そんなこと絶対ない！遥くんは大事な仲間ずら、だからそんな事…」

「言わないで…」

「花丸ちゃん…でも、でも僕は父さんを…」

「遥は悪くないわ、遥は招来体に怪獣にされたお父さんを人間に戻したのよ…」

自分の父親すら手にかけて自分に、そう思われる資格なんてない。そう言おうとするが、それは善子に遮られた。

「遥くんがみんなの為に戦ってたの、ルビィ知ってるよ？だから…」

「うん、ありがとう…でもさ、本当かどうかは僕が一番よく知ってる。どうして僕は周りと違うのかってずっと悩んでた、なんで僕は普通じゃなかったのか？なんで気味悪がられるのか？なんで皆が僕のレベルについてこれないのか？そんなことを僕は、思ってたんだよ…」
そう言つて遥は疲れた顔で笑う。そして立ち上がると三人に背中を向けてしまう。

「もう遅いし帰ろうか。次が終バスでしょ？明日は学校いくからさ、今日はありがとね」

それだけ言おうと遥は歩いて帰ってしまう。自分で考えても答ええない悩みを抱えたまま。

42話 残せるもの／赤い瞳

―僕は君だ、君の心の姿だ。

遥を昨夜の異形が追ってくる。遥はそれから必死に逃げるが、向こうは60mを超える巨体。逃げられるはずもなく、その手を遥を掴もうと迫ってくる。

「うわあああああー！」

その自分の叫び声で目が覚める遥、夢で良かったと安堵する反面。あの異形は本当に自分の内面だと認めたくない自分と、認めている自分がせめぎ合っていた。

「夢か…なんでこんな…倒したはずなのに」

そう少し考えてしまう。

「遥大丈夫？何があったの？」

そう母が部屋に入ってくる。気が付けばもう学校には間に合う時間ではなく、母も気を使って休んだ方がいいという判断してあえて起こさなかったのだ。

「母さん…ごめん、うなされたみたい。大丈夫、夢だし」

「本当に？あんなことがあった後だし、遠慮しないで頼ってよ？お母さんも、遥の事心配してるんだから」

「うん、ごめん。明日は学校行くよ、そしたら気も紛れるかもだし」

そう言って遥は結局母に頼ることが上手くできないまま母は仕事に行ってしまった。言えれば楽になるのかもしれない。でもそれを口にして、母親との今迄が壊れることが怖いのだ。

「そうだ、今日は行くって嘘ついちゃった。謝つとこ」

そう言って最近怖くて触れなかったスマホのメッセージアプリを開く。そこにはみんなからの心配するメッセージが入っていた。

「みんな…」

―どうせうわべだけだ、こんなもの信用できるのか？

「…ッ！お前は僕じゃない、お前は…誰だ!?!」

みんなからのメッセージに表情を緩めると、突然現れる黒い自分に對して遥はそう凄む。すると相手は不快な笑みを浮かべたまま、揺ら

ぐようにして消える。

「何者なんだ…？あいつは…」

今悩んでも仕方がない。そう思った遥は、一度思考の外に追いやる
と『大丈夫、心配させてごめん』と返事を送るのだった。

時間は少し遡って朝の始業チャイム前の学校では、A q o u r s の
9人は示し合わせたわけでもなく偶然学校の屋上に集まっていた。

「やっぱり、みんなここに来たね」

そう梨子が最後にここへやってきた千歌へ声をかける。

「やっぱり、みんな気持ちは同じってことでしょ？」

そう奥で鞠莉がそう言って笑っていた。でも、今その皆に足りない
人物がいることに千歌は気が付く。

「遥くんは？」

「体調が良くなさそうだったから今日も休ませるって、お母さんが」

千歌に遥の事を聞かれたので、そう正直に返す。

「昨日も戦ってたみたいだし、心配だよね」

そう千歌も返すが、ニュースで夜ガイアが怪獣と戦っていたことが
放送されていたのを朝見かけたのだ。あんなことになってしまっ
たばかりだから、悪いけど遥の居ない状況ではあるが結論を出すこと
にした。

「出た方が良いつていうのは解る…」

そう梨子が切り出した。遥同様、彼女も辛いはずなのに、いやだか
らこそだろう。一番決勝のステージを観て欲しかった人はもう居な
いのだから…。

「でも、学校は救えなかった…」

「なのに、決勝に出て歌って…」

「たとえそれで優勝したって…」

そうルビィ、花丸、善子の三人が苦しげにつぶやくと「そうですわ
ね…」とダイヤが同意の意を示す。

「でも、千歌達は学校を救う為にスクールアイドルになったわけじゃ

ない」

そう果南が切り出す。途中から学校を救うことを目標に掲げてやってきた訳だが。最初はμsのようにラブライブに出て輝きたい。それが始まりだったことを。

「輝きを、探すため…」

そう曜がはつきりと口にした。これが、自分たちの始まりだったから。

「みんなそれぞれ、自分達だけの輝きを見つけるため。でも…」

「みつからない」

鞠莉が、そう言いかけると千歌がまるで遮るようにそう冷たく言い放った。

「だってこれで優勝できて、学校は無くなるんだよ？奇跡を起こして学校を救って…だから輝けたんだ。輝きを見つけられたんだ…学校が無くなるのに、輝きが見つかるなんて思えない！」

もう仮に優勝できたとしても、私が求めているものは見つからない。それが千歌の心の叫びだった。

「わたしね…今はラブライブなんかどうでもよくなってる、わたしたちの輝きなんてどうでもいい…学校を救いたい！みんなと一緒に頑張ってきたことを…」

学校を存続させるという形で残したかった。そう言いかけた時だった。

「じゃあ救ってよー！」

学校の中庭から聞こえた声に、千歌達は屋上から下を見る。そこには、全校生徒の姿があった。

「だったら救ってー！ラブライブに出て、優勝してー！」

先頭に立ってそう叫ぶのは、千歌達の幼馴染三人。彼女らだけでなく、みんなAqoursの為に何かしたいといつも協力してくれた。夏の予選も、命の危機に瀕したというのに全員で応援に来てくれた。「できるならそうしたいーみんなもつとつと足掻いて、そして…」

「そして？」

でもそれはもう叶わぬことだと。そう思う千歌の声はだんだん消

え入るように小さくなっていく。

「学校を存続させられたら…」

「それだけが学校を救うってこと？」

そう聞き返されてしまった。

「わたし達、みんなに聞いたよ？千歌たちにどうしてほしいか、どうなったらうれしいか」

「みんな一緒だった。ラブライブで優勝してほしい。千歌たちの為だけじゃない！わたし達の為に、学校の為に！」

「学校の名前を、残してきてほしい!!」

それが、学校の全生徒のAqoursへの願いだった。

「浦の星学院スクールアイドル『Aqours』その名前をラブライブの歴史に、永遠に残してほしい！」

その叫びが、9人の心に響く。学校そのものは残せなくても、ラブライブで残せるものがある。だからそのためにステージに立ってほしいと。

「だから…輝いて！」

全校生徒の願いが、叫びが木霊する。

「優勝して、学校の名前を…」

「ラブライブに…」

そう鞠莉が言いかけた言葉を果南が引き継ぐ。

「千歌ちゃん」

曜が隣にいる千歌に声をかける。そして梨子と二人で

「や・め・る？」

そう意地の悪い笑みを浮かべて聞く。そして千歌から求めていた答えが返ってくる。

「やめる訳ない…決まってるじゃん決まってるじゃん！」

そう顔を手すりに伏せたまま足をバタバタさせ始めた千歌は、顔を上げると声高く宣言する。

「優勝する、ぶっちぎりで優勝する！相手なんて関係ない！アキバドームもラブライブも関係ない！優勝する…優勝して、この学校の名前を、一生消えない思い出を作ろう！」

そう言い放った。このまま終わったりなんかしない、優勝してこの学校の名前をラブライブという。大きな大会の歴史に永遠に刻み込む。それが、自分たちにできる最後の足掻きだと。

「遙、ちょっといい？」

「うん、大丈夫」

その日の夜、帰ってきた梨子は真っ先に遙の部屋に向かった。今日の事を伝えるために。

「この前はごめんなさい、遙の方が辛いのにあんな事言っ……」

昨日まで遙はまともに会話をできる精神状態ではなかったから、まず最初はもう一度この言葉を伝えるところからと。

「いいんだ……僕がやった事には、間違いないんだから……」

「そうじゃないの、遙は自分を責めないで。皆あなたが居てくれたから生きてこれたんだから」

「それは……」

涙を浮かべながらそう告げる梨子に、何かを言いかける遙だったが梨子は話を続ける。

「今日ね、学校の皆に言われたの。『学校の名前をラブライブの歴史に残してほしい』って、A q o u r s の皆はもう決勝に出る意味なんてないって思ってたけど。そう言われて、学校の皆の……うんわたし達の輝きの為に前に進もうって」

「そっか……皆はそんな風に」

「でも、その学校の皆を救ったのは遙……あなたよ？」

そう笑いかける梨子は、座り込んでいた遙の手を取る。

「お父さんの事は私も、お母さんだって辛い……でも遙が戦ってきたから、わたし達はこうやって生きてる。学校の皆だってそう、だから遙も一緒に前を向いて。お願い……」

「姉さん……ごめん、ありがとう。絶対優勝しよう！」

そう言っつて遙も涙ながらにそう決意した。きつと父もそれを望ん

でくれる。そう信じて。

一方で博樹は、母の墓参りに来ていた。アグルとして、果南や鞠莉、そしてダイヤをはじめとした人々を守ることを決意した彼は元々住んでいた淡島に腰を落ち着けているのだ。

「ヒロー！」

「…果南か」

帰りに、自主練だろうか？ランニング帰りと思われる果南と遭遇する。

「学校、無くなるんだってな」

「うん、残念だけどね…」

廃校が決定したあの日、博樹も彼女達と会いはしたが、その話をする場合では無かった。だがこういう話は広まるのも早い。当然博樹の耳にも入っていたのだ。

「お前たちはどうするんだ？」

「ラブライブで優勝する。そして、学校の名前を刻んでくるよ」

そう果南は力強く答えた。その言葉に博樹もほほ笑むが、彼は何も言わない。

「そうだ、決勝は観に来てよ。ヒロ、結局一回も観に来てくれてないし」

「解った、楽しみにしてる。年が明けたら、東京だったな？」

「そう、アキバドーム。一生消えない思い出にするから」

「ああ、必ず行く」

「絶対だからね？」

そう念を押す果南に、博樹は「わかったわかった」と若干めんどくさげに答える。

「ねえヒロ、ありがとね。戻ってきてくれて」

「何の事だ？」

「こうやってまたここで暮らしてくれて、またこんな風に話せて…嬉

しいんだ」

「礼を言うのはオレの方だ。果南や鞠莉、それにダイヤがこうやって接してくれたからオレハ戻ってこれたんだ。今度は誰に仕組まれたものじゃない、オレの意思で戦う。そう決意させてくれたのはお前のお陰だ」

そう言っつて博樹もふつと笑う。

「どういたしまして、そう言うの鞠莉とダイヤにも言っただげてよ。絶対喜ぶから」

「考えとく」

そう言っつて博樹は視線を逸らす。昔からそうだ、鞠莉はともかくとしてダイヤとは妙にそりが合わない。生真面目なダイヤと基本生意気で協調性を欠く博樹だから無理もないが。

「でもさ、本当に嬉しかったんだ。アグルが復活したのが」

そう言っつて果南の視線はどこか空に向く。

「昔の、優しかったヒロが本当の意味で帰ってきたみたいで」

「果南…」

「だから今度こそ、ダイビングやろう？」

クリシスを開発していた時に博樹が言った。これが落ち着いたらダイビングに連れて行って欲しい。その約束も2年以上果たされぬままになっていた。だから今度こそ、その約束を果たそうと。

「そうだな、春までにはいきたいな」

果南達が高校生のうちにと、そう博樹は素直に答えるのだった。しかしその博樹の表情は次の瞬間冷たいものになる。

「君は確か…シルビアとか言ったな」

そう博樹が問いかける視線の先に、いつの間にか金髪をツインテールにした赤目の少女が立っていた。

「そうよ。お兄さん、力を取り戻したのね」

そう少女―シルビアは感情のない声で告げる。

「ヒロ、知り合い？」

「まあな、だがお前はなんでそんな事をしている？どうしてあの時アグレイターをオレに戻した？」

「あなたが力を取り戻したとして、人類を滅ぼす事をまた選ぶか、それとも守ることを選ぶか興味があつただけ…」

果南の質問に手短かに答えつつ、博樹はそうシルビアに問いかける。なんでもないことのように彼女は答える。

「なるほど…お前やはり破滅招来体の手先だな？悪いがオレはもう同じ手は食わない、人類を滅ぼすことが地球を救うこととは限らない」
そう博樹は強く言い返すと、右腕に装着したアグレイターを構える。

「ヒロ何言ってるの？こんな小さい女の子がそんな…」

博樹が敵意を剥き出しにしたのを、果南は抑えようとするが博樹はそれをあえて無視する。

「手先…それは違う、少なくとも私は私の意思で動いてる」

「どういう意味だ…？」

「私はあなた達が根源的破滅招来体と呼んでいるものの手先じゃないって言ってるの…」

そう淡々と語るシルビアに、博樹は少し底知れぬものを感じ始めるが果南から見れば幼い子を睨んでいるようにも見えただろう。

「来た」

シルビアがそう呟くと、空に魔法陣のようなものが展開され中から白い竜人のようなロボットが飛来する。以前戦ったギヤラクトロンと似たような特徴を持ち合わせた。赤い目に竜のような顔、白い装甲のロボット怪獣だ。差は以前と違い、人型の両手に右手には斧を持ち指先はマシンガンになっており、金の装飾が追加されている。

「あの時の強化型か…」

「ギヤラクトロンMK2（マークツー）…貴方に倒せる？」

そうシルビアは博樹に問いかける。以前はガイアと二人がかりでやっと倒した怪獣、それも強化型だ。だがアグルもヴァージョンアップを果たしている。博樹の答えは決まっていた。

「果南、その子を連れて離れる。オレはヤツを倒す」

「わかった！ほら、行こう？」

博樹にそう言われた果南は、シルビアの手を引いてこの場を離れ

る。そして博樹はアグレイターを胸の前に掲げ、その翼から海の青い光を解き放つ。

その直後、ギャラクトロンMK2の前に盛大な土煙を上げながらアグルが着地する。

すぐさま威力が以前より倍増したアグルスラッシュを脚の関節部目掛けて放つが、前回同様バリアによって防がれてしまう。

アグルは果敢に殴り掛かるが、右腕に持った斧で防がれ逆にその斧を振り上げ攻撃を仕掛けてくる。咄嗟に飛び退いてその攻撃を避けるが、素手での接近戦は分が悪い。

しかし距離を取れば左腕の甲から破壊光線を放つ。アグルは渦状のバリアーでこれを受け切るが体勢を大きく崩されてしまう。

すぐさま二射目を放とうとするギャラクトロンに気が付くと、アグルは空中に飛び上がって回避すると右脚に青いエネルギーを纏って急降下キックを繰り出す。

やはり思った通り斧で防がれるが、完全に威力を殺すことはできずに今度はギャラクトロンの巨体が後退する。そしてここでアグルが攻勢に出る。

「ハアアッー」

右手からアグルセイバーを展開すると、そのまま斬りかかる。これも斧で防がれるが、これもアグルの想定通り。しかしこちらの方が斧よりリーチは長い、今度は突きに重点を置いて斧の攻撃範囲の外から攻め立てる。

アグルの優勢だと思われたが、左手のマシンガンが火を噴きアグルの胴を焼く。そのダメージに後方に吹き飛ぶアグルの巨体が地に伏せる。

「ぐああ…」

そして、アグルのライフゲージが明滅を始め、アグルセイバーも先のダメージによって解除してしまった。元々エネルギーを消耗し続ける技なので一度のダメージが致命傷になりかねない。

「ヒロッー」

その様子を離れた場所で見守っていた果南の悲痛な声が飛ぶ。そ

してギヤラクトロンはトドメと言わんばかりにアグル目掛けて斧を投げつける。

だがそれをアグルスラッシュで迎撃する。それでは防げない。そう果南は思ったが、その予想は外れ斧の刃面は碎け散り、バランスを失った斧はアグルに届くことは無かった。

アグルセイバーで斧の一点のみに攻撃を加え、一か所だけ耐久力が著しく下がっていたのだ。それを見切っていたアグルは最小限の攻撃で投擲攻撃を防いだのだ。

そしてアグルは高速移動を使い一瞬で距離を詰めるとアツパークットでギヤラクトロンの巨体を吹き飛ばす。そしてそのまま飛び蹴り、膝蹴りの連続攻撃で攻めたてる。的確に装甲の少ない面を狙った攻撃でダメージを蓄積させていく。

しかしギヤラクトロンもただやられる訳では無く、アグルの大振りの攻撃が来た瞬間マシンガンで反撃し距離を取る。

そして手の甲からの破壊光線を放とうとする。

アグルも受けて立つかのように額の前で両腕をクロスし、腕を上下に広げエネルギーを収束させる。

「ハアッ！ハアアアアアッ……ゼヤツ!!」

そして上に掲げた右腕を振り下ろして額のブライトスポットから必殺の一撃、フォトンクラッシュを放つ！

ギヤラクトロンの破壊光線とぶつかり合い拮抗するが、そこからさらに出力を上げ押し切った。そして回避することもできずその攻撃を受けたギヤラクトロンは粉々に碎け散るのだった。

「勝った！ウルトラマンが勝ったんだよ？」

そう果南は隣にいるシルビアに声をかけるが、彼女は冷たい目で果南を見据える。

「どうしたの？シルビアちゃん……」

「……めんなさいね、お姉さん」

「え？どういう……」

そう聞き返そうとしたところで、果南の意識は闇に沈む。その時のシルビアの目は赤く光っていた。

そして気を失った果南の頭に手をかざす。

「…そういうことね。あのお兄さんはもう揺さぶっても無駄ね…もう一人は、彼にやらせろって話だし…」

そう呟くとシルビアはその場を離れる。その場に果南を放置したまま。

「果南!?大丈夫か?」

戦闘の後、果南が気を失っているのに気が付くと慌てて駆け寄ると彼女の肩を揺さぶる。

「ん…ヒロ?あれ、私どうしたんだっけ…?」

目が覚めた果南はそう呟くが、気を失う直前の事は覚えていない様子だった。ひとまず怪我などはしていないように博樹は安堵する。

「あの女の子はどうした?」

「あれ?一緒にいたはずなんだけどな…」

果南はそう言っただけで周囲を見渡すが、もうシルビアの姿はどこにもなかった。

「とりあえずもう家に帰ろう、送ってく」

そう言っただけで博樹は果南を立てせると、彼女を家に送るのだった。

そして博樹は、シルビアに対して底知れぬものを感じ始めていた。

43話 遙VS遙／HAKODATE

「うう…寒っ」

そう言つて遙は身震いする。防寒着を着てはいるのだが辺り一面雪景色、内浦や東京でもここまで雪が積もった記憶はない。

なぜならここは北海道函館市、ラブライブの大会運営側からの招待でAqoursの9人と共にやってきたのだ。

大会会場に到着すると、中にあるディスプレイに参加グループが次々表示される。

「あつSaint Snowさんだ」

そう千歌が告げると、画面には今日ここで歌う予備予選では最有力候補とされているだけあつて書かれているコメントも他と比べてもかなり高評価であることが伺える。

「ふん！ならこの目で、この地の覇者となるか見極めてやろうじゃない」

などと言いはめる善子に「いや何目線なの…？」と困惑気味な表情を浮かべる遙だったが「あの…」と背後から声をかけられたので全員が振り向く。

そこにいたのは、恐らくこの大会に出る学校の制服だろう。それに身を包んだ三人の少女だった。

「Aqoursのみなさんですよね？」

「え？」

突然そう声をかけられて千歌がそんな気の抜けた声で返すと、相手も「えつと…その…」としどろもどろになるが意を決したのか要件を告げる。

「一緒に、写真撮ってもらえませんか？」

「ちよ…ちよつとみんな落ち着こう!」

「梨子ちゃんも落ち着こう」

写真撮影を頼まれてそう取り乱す梨子に千歌が声をかけてようやく収まる。

「じゃあ僕が撮りますよ」

そう言つて遙がカメラを受けると、合計12人を写真に収める。

「ありがとうございます！応援してます、頑張ってください！」

「ありがとう、がんばるよ」

そうお礼を言つて少女たちはその場を去る。

「控室に行くんですけどつけ？僕は先に客席で待ってますね」

「わかった、あとでね」

そう言つて遙は皆と別れると一人先に客席に向かう。流石に男の自分が入るのは最悪警察沙汰になりうるので当然の行動ではあるが。

「失礼しまーす」

そう言つて控室の扉をゆっくり開けて千歌は中に入る。そして「S
aint Snowの二人は…」と周囲を見渡すと「はい」とすぐ
返事が返ってきて既に準備を済ませた聖良が歩み寄ってくる。

「お久しぶりです」

そう声をかけてくれる聖良の表情は本番前とは思えないほど穏やかだった。

「ごめんなさい本番前に」

「いえ、今日は楽しんでみてくださいね。皆さんと決勝で闘うのは
まだ先ですから」

そう梨子が申し訳なきように言つたとそう笑顔で返す。

「はい、そうさせてもらいます」

それを知つてか知らずか千歌もそのように応じる。

「何？もう決勝に進んだ気でのっ」

「ものすごい自身すら…そして、ものすごい差し入れすら…」

そう善子が皮肉っぽく告げると、花丸もそのように続くが彼女の場
合本当に気になるのは後者だったようだ。

「お二人とも、前日も地区予選は圧倒的な差で勝ちあがってこられた
し」

そうルビイも言うが、今のAqoursは決勝出場グループだ。負
けてはいないはずだ。

「もしかして、また見せつけようとしてるんじゃないの?」

そう果南が挑発するように言うが、聖良は動じない。

「いえ、他意はありません。それにもう、皆さんは何をしても動じたりしない」

「どういう意味ですの?」

感化されたのかダイヤも口調が強気になる。

「Aqoursは格段にレベルアップしました。今は紛れもない、優勝候補ですから」

「優勝候補…」

そう繰り返すように呟く千歌は未だ実感がわかない様子だった。

「次会う決勝は、一緒にラブライブの歴史に残る大会にしましょう」

そう聖良が手を差し出すと、向こうで先程写真を撮ったグループと談笑していた曜と鞠莉が千歌にささやく。

「千歌ちゃん」

「ここは受けて立つところデース!」

「そうそう」

それを聞いて千歌も手を伸ばし、握手を交わす。

「理亞、理亞も挨拶なさい」

そう聖良がずっとイヤホンをして椅子に座ったまま目を閉じている理亞に声をかけるが、彼女は微動だにしない。

「ああいいんです、本番前ですから」

そう千歌が聖良に言うのと、これ以上は邪魔だろうからと言って客席へ移動する。

その時ルビィだけが気づいていた。膝の上で重ねられていた理亞の手が、震えていることに。

「びっくりしたね」

「まさかあんなことになるなんて…」

そう曜と梨子が驚いたように告げる。

今日の地区予選は終了し、モニターには決勝大会へ進む3グループの名前が記されていた。そしてその中に、Saint Snowの名前は無かった。

「一度ミスをすれば、持ち直すのは難しい」

そう真剣な表情で告げる鞠莉に善子も。

「いっぽ間違えればってわたし達もってこと?」

「そうすら」

そう聞いてくるのを、花丸が答える。

「でももう、決勝には進めないんだよね…」

そう千歌が言うと、場の空気が更に重くなった気がする。だが勝負は生き物、その時にならないと解らないこともあるのだ。

優勝候補とされているグループが敗退し、無名のグループが優勝することだつてある。

楽屋に顔を出そうと思いい向かったのだが、Saint Snowの2人は既に帰っており。彼女らの座っていた机の周りも全て綺麗に片付けられていた。まるでいなかったかのように。

その時、別のグループの少女たちに事情を聞くが

「今日の2人はいつもの感じではなかったから…理亞ちゃんもしやべらなかつたし」

「あんな2人、今まで見たことない」

その言葉を聞いてルビイの脳裏をよぎったのは、ステージ前の理亞の手が震えていた事だった。姉の最後の大会という重責が、彼女をそうさせたのだらう。そしてそれは、ルビイにも起こりうる可能性だ。

接触してしまい倒れる2人、それでも流れ続ける音楽。その光景は、見ているこちらにもショックだった。

「あれじゃ動揺して、歌えるわけないよ…」

「それに、ちょっと喧嘩してみたみたい…」

そう告げる彼女らによれば、この後決勝出場グループの壮行会もあるらしいのだがSaint Snowの2人も帰ってしまい。誘われはしたが気まずかったので断り、ホテルへ向かうことにした。

その夜遙は持ってきていたタブレットPCを開くと、ダニエルと連絡を取った。

『前回のワームホールの入り口に、コツヴと同じ生命反応をキャッチした。そのポイントまでワームホールを開いてミサイル攻撃を行う。キミにも正確な位置の特定を手伝ってほしい』

「つまり、その星が…破滅招来体の本拠地だってこと？」

『現時点では、そう判断してる。それがG・A・R・Dと僕たちは、共同で破滅招来体に攻勢に出る為に』

『ハルカ、早く君の手伝い欲しいヨー』

そうダニエルの後ろで作業していた、今回その地点を特定したパキスタンメンバーだ。世界中にメンバーが居て、その中でも一部は同じ場所で作業をしているメンバーもいるのだ。

「わかった。またデータを回してくれば、僕の協力するよ」

そう答えて通話を終了すると、送られてきたデータを開きその中身を確認すると作業に取り掛かる。

しかし、果たしてそれが本当に正しいことなのか遙には解らなかった。

—アルケミースターズが危ない事を始めたね

その話の後に、黒い自分がまた語り掛けてきた。優勝に向けて活動を再開した皆を支えると決めてから聞こえなかった声がかまた聞こえる。

あの日アグルが戦ったギャラクトロンMK2以来、怪獣は現れていない。しかしこの人類側からの攻撃が、何か良くないものを引き寄せたのでは？そう思わずにはいられなかったのだ。

そしてその攻撃の為の施設が、ここ函館に建設されつつあるとデータには記されていた。

「疲れてるのかな…ちよつと外いこ」

きつと気のせいだと、皆と前を向くと決めたことでもう聞こえなく

なると思ったのに。きっと自分の心が見せた幻影だと思っていた。
なのに…

—アルケミースターズがどうして存在すると思う？

ホテルの部屋の扉を開けた時、目の前に広がっていたのは夜の内浦
そしてそこに佇むもう一人の自分。

「何だこれ…一緒じゃないか、あの時と」

そう遥が呆然と呟くと、気づけばホテルの廊下という正常な風景に
戻っていた。そしてその時無意識に手を触れていたエスプレンダー
に違和感を感じた。

そして脳裏を駆け巡る風景、星形に囲まれた施設。そしてあの時の
黒い怪獣の姿。

「これだ…これに何か仕込まれたんだ」

「あれ？遥くん？」

部屋の扉を開けて立ちすくむ遥に、廊下を歩いていた他の三年生3
人が気づき声をかけるがそのまま部屋に駆け込むのを不審に思い思
わずついて部屋について行って行ってしまう。

「遥くん何があったの？」

「まさかっと思ってたんだけど…」

そう遥は独り言を言いながらエスプレンダーを分解する。すると
中からガイアの光が浮遊するが、遥はその下を見ると自身が組み込ん
でいない発信ダイオードを見つける。

「これだ…あの時仕込まれたんだ」

そう呟く遥が思い返すのはアグルが復活した時の戦闘、果南が捕ら
われた時に仕組まれたものだ

直感で判断した。

「でもやつらはパルス符号とかじゃなくて、人間の言葉で話しかけて
きた…」

「何言ってるの？これ人間が作ったもんじゃないの？」

暫くそれを眺めていた遥に、善子がそう不思議そうに告げる。

「クリシスの予測は仕組まれていた…そして黒い僕、人間によって作
られた…」

「もしもーし？何言ってるぞら？」

いきなり逆立ちして考え始める遙に、今度は花丸がそう問いかけるが。遙は何かに気が付くと、パソコンに駆け出し何やら操作を始める。

「そんな事、絶対にありえないって思ってた…でもそうとしか…」

「遙くん？」

「裏切り者が居るんだ、アルケミースターズに！」

3人は全く話の読めないといった感じだったが、遙のその一言に息を呑む。

「僕たち今まで、地球のみんなの為にって集まったんじゃないのか？」

元々自分たちはその能力を地球の人類の為にと集まった。そう聞かされていたし、そのためにみんなで行動していた筈だった。そして遙は、メンバーリストから一人の人物を割り出す。

「クラウス・エツカルト…」

「ドイツメンバー…」

「クリシスセットアップ直後に脱退…」

その画面を皆食い入るように見る。そして最後の分には、函館に留学中だったの文字が。

「この辺で周囲を星形に囲まれてる施設ってあったっけ？」

「五稜郭が確かそんな感じだったと思うぞら」

「わかったありがと」

そう花丸が答えると、遙はさつき見えたイメージはきつとそこだと思ひ、エスプレッダーを組み直すと外へ出ていく。

「ちよつと遙くん？」

そんな皆の呼びとめる声は聞こえぬまま、遙はそこを目指す。

「遙くんどうしちゃったんだろ…？」

「まさかそこにさつき言ってた裏切者が？」

「でも人が住む所じゃないぞらよ？」

取り残された3人は推測するも、その答えは遙しか知らない。

(急がないと！取り返しのがつかないことになる前に…！)

そう遥は内心焦りながら慣れない夜の街を、スマホの地図アプリを頼りに走る。

「あれ？あなたは確か…」

そこで遥は思わぬ人物に声をかけられる。

「あなたはSaint Snowの…」

「鹿角聖良です、お話しするのは東京以来ですね。すみません今日はお恥ずかしいものを見せてしまって…」

「桜内遥です。いえあの…残念でしたね…」

目的地の近くまで来ると、そこで出会ったのは聖良だった。

「それより、どうしてこんな時間に？」

そう聞くと、「いえ、買い物に…」と告げられる。そう言えば彼女らはここが地元なのでいても不思議ではないのだ。

「それより遥さんの方こそどうされたのです？」

「いや…僕はその…」

そう言い淀むが、このまま完全に誤魔化すのは無理だと判断して遥は事実を少しぼかして彼女に問いかける。

「この辺に、アルケミースターズの元メンバーのクラウドって人が住んでませんか？」

「えっと彼は…」

意を決してそう彼女に聞いてみる遥だったが、聖良も何か言いにくそうなそぶりを見せた後思わぬことを口にする。

「彼は近所に住んでいたのですが今年の春、その五稜郭の中で家族の目の前で消えたそうです」

「消えた？細かい場所は解りますか？」

「えっと、彼とはどういう関係で？」

突然そんなことを聞かれた聖良はそう聞いてくるが、当然の対応と言えるだろう。遥は「僕もアルケミースターズなので」というと、納得してもらえたのか「近いし案内しますよ」と言ってくれた。

「聖良さんはアルケミースターズをどう思います？」

「どう…というのは？」

「いえ…やつぱり、忌み子とか言われることもあるので…」

その道中、遥はふとそんなことを聖良に質問する。

「どうですね、私のクラスにメンバーの方はいませんか…でも、人間ってみんなそれぞれ違うと思うんです。だから人と違うことができるのは誇っていいことだと思いますよ」

「そう…そうですね」

聖良の言葉は、きつと今の遥が一番欲しかったものだった。あの日からずっと燻っていた黒い感情が晴れた気がした。

「付きましたよ、ここです」

そう言う彼女に案内されたのは、敷地のほぼ真ん中だった。

「ありがとうございます」

だが二人がたどり着くと、夜という事もあるのかもしれないが異様な空気が場を支配していた。

「なんかおかしいですここ…」

それは遥の気のせいではなく、聖良も同じものを感じていた。

「これ…」

その時、周囲を真っ白な人影が無数に浮遊し始める。

「クラウドスは、ここで自身の肉体と情報をやつらに捧げたんだ…」

それを気づいた遥は、聖良を庇うように立つと冷や汗を浮かべながらそう呟く。

「やつら…？」

「破滅招来体の、精神寄生体！」

聖良にそう答えると、飛んでいた一体が目の前に降り立つと黒い遥の姿となる。

「やつぱりここへ来たね」

「もう僕の真似はやめろ！あなたはクラウドスなんだろう？」

遥は、黒い自分をにらむとそう強い口調で告げる。

「そうだ、僕はクラウドス。そして…」

そう黒い遥はさつきまでと違う声でそう告げる。おそろくこれが、クラウドス本来の声なのだろう。

「桜内遥でもある」

「まだそんな事言うのか」

再び遥の声で話す彼に、遥は苛立ちを隠せない。

「僕は君の隠された本当の心さ。才能を得て生まれ、そして強大な力を授かった」

「やめろ！」

「あなた本当にクラウドさんなんですか？」

そう告げる黒い遥の言葉を遥は遮ると、聖良はそう口を開いた。

「鹿角聖良：僕の言った事覚えてるかい？」

そこで聖良の方を向くと、彼本来の顔に変わる。金髪に青目に高い鼻、整った顔をしていた。

「破滅をもたらす者に力で対抗するなって話ですか？それが一体：？」

「それは君の解釈違いだ。僕がメンバーを抜けたのはね、僕は解ったからだ！僕に力を与えてくれたのは破滅ではなく、人類をもっと高く進化させる存在なんだ！」

そうクラウドが告げると、漂っていた他の精神寄生体が彼の身体へと集まっていく。

「ウオオオオオオ!!」

そして彼の身体はどんどん巨大化していく。まるで遥がガイアに変わるときのように。

「聖良さん、彼はもう話の通じる相手じゃない。早く逃げて下さい！」

「何言ってるんですか、遥さんを置いていけるわけ：」

「僕にはまだやるべきことがある！早く行つてください!!」

そう強くない聖良を突き放すと、渋々と言った様子で聖良は敷地外を指して駆け出す。

「早く光を開放しろ、遥！地球の力など、遥かなる星の叡智には敵うはずない！」

そう言い放つと、クラウドの姿は怪物へと変貌する。縦長く黄色く発光する目の様な器官。以前戦った怪物を、完全に人型にしたその姿はまさしく。ウルトラマンを模した怪物だった。

遥は意を決すると、エスプレンダーを持った手を左肩に当てる。

『待て！』

「博樹さん…」

ここにいるはずのない博樹の幻影が、遥を制止する。

『あれはお前…そしてオレのもう一人の姿だ。それでも戦うのか？』

「確かに…あれは僕のもう一つの姿…僕の心の中に居る怪物です。でも、だから僕が倒さなければいけないんだ！」

クラウスは確かに、遥や博樹のもう一つの姿。進んでいたかもしれない可能性の一つなのだ。それを理解したからこそ、遥はここで戦わなければいけない。遥はこの時、ようやく決心がついたのだ。

父の時のような思いはもうしたくない。だからこそ戦い抜くと！

「ガイアアアアアッ!!」

突き出されたエスプレンダーから迸る光が、遥の身体を再び大地の巨人へと変化させる。

「フハハハ…」

「ジュワッ！」

両腕を広げて不気味な笑い声を上げる異形に対してガイアは構える。

「ウルトラマン…ガイア…」

黒い異形の巨人に立ちはだかるように現れたガイアの姿は、後ろを振り返った聖良の目にも入った。

「タアッ！」

駆け出したガイアは飛び蹴りを繰り返すが、横に移動し躲かされてしまう。しかしそれを見切っており、反撃の拳を左腕で受け流すと異形の胸に右拳を叩き込む。

そして体勢が崩れたところの回し蹴りをかまし、さらにその顔面に拳を放つが逆に防がれてしまい今度は反撃の拳をくらってしまふ。

そして蹴りで思わず屈んでしまったところを背中に蹴りを入れられ前につんのめる。するとそのまま背中に張り付かれて首を絞められる。

だが遥自身が、今まで格闘技を齧る程度とはいえ同級生に習うなど

して確実に戦闘センスを高めてきたことでクラウドとはその面でも有利に立っている。

ガイアは異形の腹にひじ打ちを入れ、仰け反ったところを豪快に投げとばす。

しかしそのまま空中を回転し、静かに着地を決めた異形は立ち上がると黄色い光剣を展開する。それを見たガイアは、同様に青い光剣、アグルブレードを展開する。

そして繰り広げられる青と黄色の斬撃の応酬。ぶつかり合うたびに光の粒子を散らす光剣同士のぶつかり合いだった。

そしてそれを制したのはガイアだった。ガイアは相手の光剣を薙ぎ払うと、異形の身体はバランスを崩す。そこに3回身体を切り付けた後、ダメ押しに頭から縦に一閃。異形の身体を切り刻んで見せた。「やった！」

聖良もガイアも、異形に勝利したと思った。しかし異形は切り刻まれた彼らそれぞれが10mに満たないほどのサイズで先ほどと同じ人型を取ると横に広がりガイアへにじり寄る。

ガイアは切っ先を向けて牽制するが、8体もいてはあまり効果はない。それぞれが光球をガイア目がけて放つ。

ガイアはとっさに屈みこんでアグルブレードで受けようとしたが、その威力とガイア自身へ当たったことによつて吹き飛ばされてしまう。

そして、地に伏せたガイアはそのまま微動だにしない。勝ち誇ったように囓う異形達はガイアへ近寄っていく。

―遙、お前に倒せるのか？自分の心に巢食っている怪物にそんな博樹の声が遥の脳裏に走るが、遥の意識は消えつつあった。

「立ってー！立ってください遥さん！遥さんなんでしょう!!？」

そう声を上げたのは聖良だった。さっきの会話と、今の状況からガイアの正体が遥なのではないかと察した聖良はそう叫ぶ。

するとその声はガイアに届いたのか、土を握りしめ起き上がると膝をついたままヴァージョンアップポーズをとり、スプリーム・ヴァー

ジョンへと変わる。

「ハアアアッ！デヤッ！」

そのままの勢いでエネルギーを収束させると、フォトンストリームで薙ぎ払う。

すると異形達は爆炎を上げ吹き飛ばすが、白い人魂のようなものとなり再びそれらが集合することでガイアと同じ大きさに戻る。

「フッフッフ…」

不気味にあざ笑う異形に対してガイアも立ち上がる。

「フオオオオオ！」

「デヤッ！」

一転両腕を広げ威嚇するように唸り声を上げる異形に対してガイアも構える。

そしてお互い同時に駆け出した。そして異形は左拳を、ガイアは右拳を突き出す。

「ハアアアアアア！」

「デヤアアアアア！」

そして異形は黄色い光を、ガイアは赤い光を拳に纏わせ思い切り振りかぶるとお互いの顔面目がけて拳が交錯する。

「ハアッ！」

「デヤッ！」

「遙さん！」

そのまま静寂が場を支配する。そして間を置いた後、異形の身体は粉々に爆散する。異形の拳は、ガイアの顔面を捉える事はなくガイアの腕に阻まれガイアの拳は異形の顔面に突き刺さっていた。

ガイアは振り抜いた拳を下げると、ライフゲージが明滅を始める。緊張が解け思わずよろけるが、姿勢を戻してしっかりと立つと、一度聖良の方を見る。

そしてそのままガイアは上を向くと、光に包まれ縮むようにして消えてしまった。そしてその消えた場所に遙が居るのではと思った聖良は、再び敷地内に戻る。

「…遙さん」

遥はこちらに背を向けたまま立ち尽くしていた。彼の胸中にあるものは、聖良には予測もできない。

「アイツは、本当に僕の心の奥の怪物だった…僕の心の奥底に、アイツと同じような事隠してるなんて考えてもみなかった…いや、思いたくもなかったんです…」

聖良から遥の表情は見えなかったが、その声は震えていた。それが先の聖良への質問に繋がっていたのだろう。

「でも、あつたんです…だから僕は、アイツと戦った…」

「クラウドさんは…」

遥と同じではない。そう言おうとした聖良の言葉は遥によって遮られた。

「僕、勝ったぜ？戦って勝つたんだ…僕は…」

そう震える声で、強がるように話す遥は聖良の方を振り返るとさらに続ける。

「人と戦いたくなんてなかった…僕はそんなに強くないんです…」

そう涙目になりながら続ける遥はそこまで言うのを耐えられなくなったのか、表情が崩れ始める。

「でも今は…戦うしかないんです！」

そう荒い口調で言い放つと、遥はそのまま泣きながら走り去ってしまった。

聖良はそれを見ているしかできなかった。

44話 姉と私と／それまでは

「わああ〜」

翌日、函館観光としてまず五稜郭を訪れている面々だったが。タワーからの光景に興奮する彼女達を横目に、遥は昨日の戦闘の形跡はないか見ていた。

「すごい」

「なんかおいしそうな形ずらね」

「今食べてるじゃん…」

千歌が興奮している隣で、パンをもしやもしやしながらそう呟く花丸に思わずツツコミを入れてしまう。

「ところで昨日、あの後どこ行つてたずら？」

「え？まああの…後で話すよ…」

気に入らなかつたのか、そう意地悪な表情を浮かべて耳打ちした花丸に大人しく降参してそう答える。

「何という光景！これぞ、夢にまで見た魔法陣！これで超巨大リトルデーモンを…」

「それは大きいのか？小さいの？」

同じく大興奮な善子にそう梨子が呆れ気味に問いかける。正直相手にしない方がなんて思ったりもする。

どういうわけか、昨日の戦闘の影響は残っていないようだった。まるで最初から戦闘などなかったかのように…。

それが精神寄生体作り上げた空間のようなものに知らず知らず飛ばされていたのかもしれない。

「全然平気平気！」

後ろを向くと、果南がガラス張りの上に立ってそう強がっていたが。顔は引き攣っており、下を向くと「はぐう…」と鞠莉とダイヤにもたれかかってしまう。

「何か落ち着くね、こっ」

S a i n t S n o w の 2 人 が 通 っ て い る 学 校、 函 館 聖 泉 女 子 高 等 学 院 の 前 か ら の 景 色 を 眺 め て い た。

「内浦と同じ空気を感じる」

そう果南が言うと、遥はなるほどと思った。学校の前に坂があつて、そこを下れば海に繋がる。それは自分たちが通う浦の星学院の学校前の景色に似ている。

「海が目の前にあつて、潮の香りがする街で。坂の上にある学校で」

そう千歌も同じことを思ったのかそう告げる。

「繋がっていないようで、どこかでみんな繋がっているものね」

そう梨子も感慨深そうにつぶやく。意外なところで、意外な共通点もあるものだと思つていた。

その後も、函館の街中をぶらぶらと彷徨つていたのだが、雪がちらちら舞い始めて体感気温も下がってきた。

「うう…寒い…」

「ティータイムにでもしますか」

予想以上に冷え込んだので思わずそう呟く千歌に、そう鞠莉が提案すると「賛成！」と満場一致で決まったので、とりあえず軽食のとれるお店を探す。

「くじら汁？」

「渋い…」

すぐさま見つけたお店の前には、そう書かれたメニューが店の前に置かれた古風な雰囲気漂うお店が目に残る。

「もうだめずら…限界ずら…」

そう背後で花丸も震えていることだし、ここにしようということになったのだが「すいませーん」と千歌が入り口から声をかけるが返事がない。

「商い中つてありまーす」

そう店の入り口横の看板を確認した鞠莉がそう告げる、すると花丸が「とりあえず中に入れて欲しずら…」と今にも凍え死にそうな声で言うので「仕方ないね」と千歌が再び店内に顔を覗かせる。

「じゃあ失礼しまーす」

「やつと助かるずら…」

そう言うのと、みんなで店内へ入っていく。

最後にルビイが店内に入ると、みんなの話し声とは別の声が奥から聞こえた気がした。そしてその声の方へと、店の奥へと進んでいくのに誰も気づかなかつた。

そしてルビイが少しだけドアが開いていた部屋の中を覗くと、そこにはベッドに顔を伏せて泣く鹿角理亜が居た。

全員の目の前には、綺麗に盛り付けられたぜんざいが置かれていた。まさかの鹿角姉妹の実家だったのだ。

「綺麗〜」

「おいしそ〜」

そう梨子と千歌が各々の感想を述べる。

「とても温まりますよ、ぜひ召し上がってください」

そう笑顔で聖良が告げる。彼女の人当たりのよさは、こうして身に着けたものなのかもしれない。

「雰囲気のある、いいお店ですね」

「制服も可愛いし」

そう梨子と曜が告げる、古風な作りで趣があり制服も大正浪漫のようなかわいらしい作りになっている。

「このおいしさ…天界からの貢ぎ物!」

「おかわりずら」

「はっや…」

善子のキャラに聖良が困惑しないか心配だったが、その隣でもう食べきっている花丸に思わず聖良の方を気にしてしまうが彼女は優しい気な笑みを浮かべていた。

「学校に寄られるかもとは聞いていたのですが、でもびっくりしまし

た」

「ああはい…あちこち見て回ってたら偶然というか…」

聖良にそう言われ、千歌は申し訳なきようにそう正直に答える。まさかここが2人の家だったとは誰も思いもしなかった。

「そういうえば遙さん…」

そう聖良が遙の方に視線を向ける。あの後逃げるようにホテルに戻ってしまったので遙としては正直気まずい。

「あ、えーと…僕もおかわりください」

そう誤魔化すように器を差し出す。

「解りました」

そうにこやかに笑って器を受け取ってくれるので、余計に罪悪感が募るので小声で「すいませんでした、あとあの事は内緒にしてもらえると…」そうお願いすると「大丈夫です、解ってますよ」と返してくれた。

こういう優しさが、逆に罪悪感を募らせてしまうので受け取ると「ありがとうございます」と言ってかき込む。

「遙も食べるわね…」

その光景を隣に座っている善子が言ってくる。

「最近色々考えてたじゃん？だから体が求めるんだよ、甘いものをさ」
そう言っつて誤魔化しておく。帰る前にもう一回ちゃんと謝っておこうと心に誓うのだった。

「街並みも綺麗ですね、落ち着いてて」

「ありがとうございます。私も理亞もここが好きで、大人になったら二人でこの店を継ぎたいねって」

そう窓から街並みを眺めていた梨子にそう言われ、聖良はそう嬉しそうに笑って答える。彼女も、自分たちの生まれ育った街が大好きなんだなと遙は感じた。

「残念でしたわね、昨日は」

ここでダイヤが、誰も触れようとしなかった事をはっきりと告げる。

「いえ、でも—」

「食べたらすっさと出てって」

聖良が何かを言いかけたのを、理亞がそう遮る。

「理亞、なんて言い方を！」

そう聖良が諫めるが、理亞は両腕を組んだまま聞く耳持たないといった様子だった。

そしてルビイに何か耳打ちすると、厨房の中に消えていった。

昨日の事は、恐らく一番彼女が悔しいだろうし責任も感じているだろう。だからこの事に触れると虫の居所が悪くなるのも無理はない。

「会場でもちよつと喧嘩してたらしいじゃ…むぐつ」

「善子ちゃん！」

余計な事を言いかけた善子に、花丸はスプーンを口に突っ込んで遥は言葉で遮って止める。

「いいんですよ、ラブライブですからね。ああいうこともあります、私は後悔してません。だから理亞も、きつと次は——」

「嫌！」

最後の大会でこういった終わり方になって彼女も悔しいはずだ。だがそんな様子を全く見せない、それどころか妹を気遣うような素振りを見せるが、それは厨房から出てきた妹によって遮られた。

「何度言っても同じ！私は続けない！スクールアイドルは、Saint Snowはもう終わり！」

「本当にいいの？あなたはまだ1年生、来年だってチャンスは——」

「いい！もう関係ない、ラブライブもスクールアイドルも！」

本当にそれでいいのか？そんな視線を聖良は投げかけるがそれ以上は何も言わず、理亞も再び厨房へと戻ってしまふ。

「お恥ずかしい所をお見せしてしまいましたね…ごゆっくり」

そう申し訳なさそうに、聖良は千歌達に言うのだった。

結局ぜんざいを食べ終わったら、すぐにお店を後にした。だがまだ

すぐ観光といった気分にもなれず、ご当地のバーガーショップに入っ
た。

「未来ずらあ…」

みんなドリンクとフライドポテトを分け合う程度の中、花丸だけは
顔くらいの大きさはあるのではないかという巨大なハンバーガーを
頼んでいた。

「あんた、コレひとりで食べる気？」

「ずらあ〜」

善子にそう怪訝そうな顔で聞かれるが、意に介さずそのままかぶり
つく。あまりに幸せそうに食べるので「一口、一口だけ」なんて言い
出すが「ダメずら」と一蹴される。

「何も辞めちゃうことないのに…」

ふと、千歌がそう呟く。

「でも理亞ちゃん、来年から一人になっちゃうんでしょ？」

「新メンバーを集めてリスタート！」

「って簡単に割り切れないでしょ」

曜がそう言うのと、鞠莉がいつものテンションでそう告げるが果南に
ばっさり切り捨てられる。

「私達もそうでしたものね…」

ダイヤもそう呟く。思い返すのは二年前の東京での事だろう。

「結局ステージのミスって、ステージで取り戻すしかないんだよね」

「でもあの2人にその機会は…」

あつけらかなとした様子で告げる果南に対し、遥はそう呟く。最後
の最後でミスをしてしまったのだから…

「そう簡単に切り替えられる程、人の心は簡単ではないってことです
わ…」

「自信…無くしちゃったのかな？」

そう曜がストローで中身をかき混ぜながらそう呟くと、一人を除い
て何も言えなくなる。

「違うと思う…」

口を開いたのはルビィだった。同じ三年生を姉に持つ者として、理

亜の気持ちに共感できるものがあつたのかもしれない。

「聖良さんが居なくなっちゃうから…お姉ちゃんが続けられないのが嫌なんだと思う。お姉ちゃんがいないなら、続けたくないって」

「あんた…」

「凄いですら…」

ルビイはそこまで言ってしまったといったようなリアクションを取るが、向かいに座っていた花丸と善子にそう感心される。

「そうだよね、寂しいよね…」

そう梨子も呟くが、なぜかルビイは誤魔化しにかかった。

「ううん違うの！ルビイはただ理亞ちゃんが泣いて…」

そこでルビイの顔が青くなる。「泣いて？」と千歌が首をかしげると「ぴぎい」と悲鳴を上げて外へと飛び出してしまふ。

「多分…そうなんだよな、悔しいし寂しいんだよ…」

その遥の呟きは、隣にいた鞠莉にも気づかないほど小さいものだった。

あの時、鹿角姉妹の実家の店でルビイが目にしたのは泣いている理亞だった。そしてその事を「言ったらタダじゃおかない」と言われていたのに、うっかり漏らしてしまった。

まだ雪の残るベンチに腰掛けて、上着も羽織らずに海を眺めながらその事を後悔していた。

「理亞さんに何か言われたんですの？」

背後からダイヤの声がすると、自身の肩に店に置いてきた上着がかけられる。自分が大好きな姉は、店を飛び出したことを咎めずその声をかけてくれた。

「ううん、ただ…きつとそうなんじゃないかって…ルビイもそうだから」

これが姉と一緒に出られる最後のラブライブ。それが理亞とルビイの共通点。次のラブライブに、姉は居ない、この大会が最後なのだ。

「お姉ちゃんも、決勝が終わったら…」

姉の顔を見れないまま、ルビイはそう言いかけるが、続く言葉を口にする勇氣は無かった。

「それは仕方ありませんわ」

「でも…あんなにスクールアイドルに憧れていたのに、あんなに目指していたのに、もう…もう終わっちゃうなんて…」

「私は十分、満足していますわ。果南さんと鞠莉さん、2年生や1年生の皆さん。そして何より、ルビイと一緒にスクールアイドルをやることが出来た。」

それはダイヤの本心だった。だが、ルビイにはまだその事実は受け入れられなかった。無意識に頬を伝う涙を誤魔化すように、ダイヤの背へ抱き着く。

「それでラブライブ決勝です、アキバドームです。夢のようですよ」

「でもルビイは、もっとお姉ちゃんと歌いたい…お姉ちゃんの背中を見て、お姉ちゃんの息を感じて…お姉ちゃんと一緒に汗をかいて…」

ダイヤは立ち上がると、涙ながらにそう話すルビイを抱き寄せる。

「ルビイを、置いて行かないで…」

二歳年上の姉、だがその二年という決して埋まらない差が2人を引き離そうとしている。姉がどういった進路を取っても、もう一緒にスクールアイドルはできない。ルビイにそれは、とても辛いことなのだ。

「大きくなりましたわね」

そんなルビイの頭を撫で、ふとそう口にするダイヤに、ルビイは顔を上げる。

「それに、一段と美人になりましたわ」

「そんなこと…」

「終わったら、どうするつもりですか？」

そうダイヤはそっと体を話してからそう聞く。ルビイは迷ったが、

まず口にすることにした。

「わかんない…でも学校無くなっちゃやし、お姉ちゃんたちも居なくなっちゃやし…」

「そうですわね…」

「お姉ちゃんは？」

「そうね…解んないですわ、その時になってみないと…ただ、今はラブライブの決勝しか考えないようにしていますし」

「うん…」

逆にダイヤに聞いてみたが、彼女も今のところは考えていないらしい。だからルビイも決勝が終わるまでは、この気持ちは閉まっておこうと思った。

「ただ、あなたが私にスクールアイドルになりたい。そう言ってきた時、凄く嬉しかったのです。私の知らないところで、ルビイはこんなにも一生懸命考えて、自分の足で答えに辿り着いたんだって」

今まで一度も言わなかった、本当の気持ちをこの時、ダイヤは最愛の妹に告げた。

「お姉ちゃんってどんな感じなの？」

「うーんどうだろう…？」

その日の夜、お土産を整理しながらふと曜がそう千歌に聞いてみると千歌は少し考えてから答える。

「うちはあんな感じだから、あんま気にすることないけど…でも、やっぱり気になるかな」

「ふーん」

「ほら、最初に学校でライブやったとき、美渡姉雨の中来てくれたでしょ？なんかその瞬間、泣きそうになったもん。ああ美渡姉だっていつも喧嘩しているイメージがあったが、お互いを思い合っている。だから何かあった時は駆けつけてくれる。」

「いいなあ〜わたしそういうのよくわかんないけど」

そう曜は返すのだが、一人っ子としてやはりそういうものに憧れた時期もあったものだ。

「わたしもよくわからないよ。だってあまりにも自然なんだもん、産まれた時からずっといるんだよ？お姉ちゃんって」

そう千歌は告げる。姉という存在は、産まれてからいてずっと一緒に生活してきた。だからいざどういものかと聞かれると、しっかりと説明はできなかった。

「それなら、弟がいるってどんな感じ？」

それを横でずっと聞いていた梨子に、千歌がそう話を振ると「そうね…。」とやはり少し考える素振りを見せる。

「遥は一つ下だし、物心ついたころからずっと一緒にいたから千歌ちゃんとおんまり変わらないかも？」

「そんな感じなんだ」

「じゃあさ、遥くんってどんな感じだったの？」

やはり居るのが普通なので、あまり千歌と変わらない。そう答えると、今度は曜がそう聞いてきた。

「今と違って泣き虫でいっつも私の後ろにくっついてたわ。幼稚園くらいまで髪も長くて、私と似たような服ばかり着てたし、妹と間違えられて喜んでたっけ」

「なんか意外」

「でも遥くん、梨子ちゃんが昔から大好きなんだね」

そう意外そうな顔をしている曜の隣でそう告げる千歌に、何となく照れ臭くなってしまう。「そう…かも？」なんて答え方をしてしまう。

「なんかいいなあ兄弟が居るって」

「とりあえず頼まれていたものは終わらせたよ」

遥はダニエルに昨夜渡されていたデータを元に、破滅招来体の母性

と思わしき惑星の特定に協力していた。

『ありがとう遙、すまないね。折角の旅行を邪魔して』

『いいんだ、どうせホテルだとやることないし』

申し訳なきげな表情を浮かべるダニエルに、遙は笑ってそう答える。

『でもこれで、破滅招来体への攻撃の足掛かりができた。これは大きい』

『そうなのかな？』

『遙…？』

『いや、何でもないよ。ゴメン、でも僕が担当した範囲には破滅招来体の手掛かりもなかったぞ』

『いや、でも遙が早く仕上げてくれたおかげで予定より早く絞り込めそうだな。ありがとう』

『どういたしまして、また解ったら教えてよ』

そう言って通話を切ると「ふう…」とため息をついてふと考えてしまふ。

「やっぱり、攻撃は最大の防御…ってことなんだろうか」

遙の胸の中で、それが正しいと思う気持ちと。そうだという気持ちが競り合っていた。

45話 曲を作ろう！／伝説との闘い

「ライブ?」

「どこで?」

「理亞ちゃんと一緒にライブをやつて、見せたいの。聖良さんとお姉ちゃんに…」

翌日の朝、ルビィが花丸と善子の2人に理亞と一緒にライブをやつてお互いの姉に見てもらおう。そう昨夜理亞に提案してきたことを告げる。

「できるの?」

「わからないけど…でも、もしできたら理亞ちゃん元気になってくれるかなって…」

「準備とかは?」

「それは…」

昨日やろうと提案するところまでで、具体的にいつどこでどうやつてというのは決まっていない。善子に現状を問われる。だが正直に言えば無理だと一蹴されてしまうかも、そう思うと口ごもってしまう。

「面白そうずら」

「そうそ…え?」

そこで焼き鳥を食べていた花丸がそう口を開くと、同意しかけていた善子は思わず固まってしまう。

「マルも協力するずら」

「本当?じゃあこの後理亞ちゃんと会うことになってるんだけど一緒に来てくれる?」

「もちろん。善子ちゃんも行くずらね?」

そう頷いてから善子へ振ると、いつもの墮天使モードに入る。

「クッククック…そんな時間あるわけなからう。リトルデーモンを探すという崇高な目的があるのに…ただ、どうしても—」

「じゃあ遙くんも誘ってみよう?」

そう善子の話を無視してルビィと部屋を出ていこうとする。

「待つてよーてかヨハネー！」

善子が追いついてくるころには、エレベーター前で出くわした遙を誘っている所だった。

「つてことなんだけど…」

「わかった、僕もルビイちゃんの気持ちわかるから」

事情をルビイから聞いた遙は、そう快諾するのだった。

待ち合わせ場所のハンバーガーショップに来た理亜は、明らかに不機嫌そうだった。

「3人も来るなんて聞いてない」

「あつても花丸ちゃんもよし：ヨハネちゃんも遙くんも、とても頼りになるから…」

善子と言いかけた時に、本人から視線を感じたので慌ててそう言いかえる。

「関係ない。わたし元々、みんなでワイワイとか好きじゃないし」

そもそも遙に至ってはまともに会話した記憶すらない。いきなりよく知らない人間に囲まれれば確かに嫌かもしれない。なんて思いながら遙は苦笑した。

「それを言ったら、マルもそうずら。善子ちゃんに至ってはもっと孤独ずら」

「ヨハネー！何さらつとひどい事言ってるのよ…」

そう善子がすぐさま文句を飛ばすが、理亜にとっては他の事の方が気になったようで。

「ずらっ？」

そこではつとした花丸は手で口を覆って誤魔化する。

「これは、オラの口癖というか…」

「オラ…？」

「違うずら…マル…」

「ずら丸はこれが口癖なの、だからルビイといっつも図書室に籠って

「ただだから」

口癖を意識して喋れなくなった花丸に、仕返しとばかりに暴露する。

「そうなの？」

「そう意外そうな顔で聞き返す理亞に、「ずら…」と恥ずかし気に頷く。

「春まではみんなそんな感じだったよ、僕も引越してきたばかりで知り合いなんて居ないから一人で図書室にいたし」

「なんて遙もそう告げる。」

「わたしも…学校では結構そんな感じだから…」

「そう理亞も恥ずかし気に告げる。お互い学校も違うし、内浦と函館とかなり住んでいる場所が離れているのもあって、スクールアイドルとしての姿しか知らない。」

意外なところで似ているのかもしれない、などと思っていると花丸は善子に反撃と言わんばかりに暴露する。

「善子ちゃんに至っては、図書室どころが学校にも—」

「いちいち言わんでええわい！てかヨハネ！」

「ごめんね善子ちゃん」

「だからヨハネよ—」

などと最早お約束になりつつある漫才染みたやり取りをしていると。ふっと理亞にも笑みが零れる。

うまく打ち解けたかは解らないが、当初の目的であった曲作りの話に入る。理亞が昨晚考えたという歌詞を4人は読むと微妙な表情になる。いつも姉が作っていたという前置きはあったが。

「私は負けない、何があっても。愛する人とあの頂に立って必ず勝利の雄たけびを上げようぞ…」

「だから言ったでしょ、曲も詩も殆ど姉さまが作ってるって」

何も言わない4人にそう理亞が言う。まあ予想通りといえば予想通りだったが…。

「まだ何も言っていないけど…」

「しっかしなんの捻りも無いわね。直接的すぎるっていうか」

苦笑いするルビイとは対照的に、善子はそうはつきり言うど理亞に睨まれる。

「何？文句あるの？」

そう言われて善子も黙ってしまふ。以前三年生と曲を作った時に彼女はまず誰も読めないような歌詞を書いていたのでそもそも人の事言える立場じゃない。

「でも、歌いたいイメージはこれでわかったずら」

「そうそう、ここから膨らませていつてみんなで作ればいいんだから」
そう花丸と遥がフォローを入れる。この2人なら言葉の引き出しも多いし、何より遥は一応作曲もできる。やっぱりこの2人にも相談して良かったとこの時ルビイは思った。

「ルビイも手伝うから、一緒に作ってみよう？」

「あなた達、ラブライブの決勝もあるのに歌作ってる暇なんてあるの？」

「それは…」

痛い所を付かれたといった感じでルビイが言い澱むが、再び花丸が助け船をだしてくれる。

「ルビイちゃんは、理亞ちゃんの手伝いがしたいずら」

「理亞ちゃんや、お姉ちゃんと話してみて思ったの。ルビイ達だけでもできるつて所を見せなくちゃいけないんじゃないかな？つて、安心して卒業できないんじゃないかって」

ルビイもそう今思っているままを口にする。

「げっリリーだ！」

そうこうしていると、善子がスマホをみて思わず立ち上がる。

「どこにいるの？もう帰る準備しなくちゃダメよつて…」

「もうそんな時間？」

「どうするの？」

そう理亞も心配そうに聞いてくると、花丸はすまし顔で告げる。

「今は冬休みずら」

「でもどこに泊まる？ホテル今朝までだったじゃん」

そう遥が聞く。流石に今から自分達だけで泊まる場所を確保する

のは厳しいものがある。

「ウチに泊まっていよいよ、女4人くらい」

そう理亜が申し出てくれたのだが、4人は首をかしげる。

「僕…男なんです…」

「ええええ!?!」

理亜の驚いた声が響き渡った。

ここに残る旨をA q o u r sの残りのメンバーに告げると、最初こそ反対されたが、千歌の「一年生同士で色々話したいこともあるだろうし」の一言のお陰で了承を取れた。

「ここが理亜ちゃんの部屋?」

招待された彼女の部屋は、綺麗にまとまっていた。それに作曲できるからという事で、無理をいって遙も泊まれるように客間を使わせてもらえるように親に頼んでくれたらしい。

「好きに使っていいけど勝手にあちこち—」

「綺麗すら」

「勝手に触らないで!」

勝手に触るなど言いかけたとたんに、花丸が本棚に置いてあったスノードームを持ち上げるものだから慌てて取り返す。

「雪の結晶?」

「そう、昔姉さまと一緒に探したの。ふたりでスクールアイドルになるって決めたあの瞬間から、雪の結晶をS a i n t s n o wのシンボルにしようって。」

そう言っつてスノードームを戻すと、その隣には衣装に身を包んだ2人の写真が飾られてあった。

「それなのに…最後のラブライブだったのに…」

やはり彼女の中には先日の事が色濃く残っていた。そう呟く理亜に、ルビイは「綺麗だね」と一言だけ告げる。

「当たり前でしょ、姉さまが見つつけてきたんだから。ほら、あんたの姉

「より上でしょ」

「そんなことないもん！お姉ちゃんはルビイに似合う服すぐ見つけてくれるもんー！」

「そんなの姉さまだったらもつと可愛いの見つけてくれる」

「そんなの…」

そう顔をお互い近づけてヒートアップしていくのを、3人は意外なものを見る目で見つめているのに気が付きルビイは出かけた言葉を引っ込める。

「こんな強気なルビイちゃん…」

「初めて見た！」

「そ、それは…」

花丸と善子にそう言われ、思わず顔を背けるが続く言葉が出ない。

「ホント、姉の事になるとすぐムキになるんだから」

「それはお互いさまだよ…」

「そうかも」

呆れ気味に告げる理亞に、ルビイはそうかえすと。理亞はそう笑った。似た者同士なのだ、三年生の姉を想って何か贈り物をしたいと。

「皆さん、本当に戻らなくて平気なんですか？」

そこで、ドアをノックして少し間をあけた後聖良が顔を覗かせるとそう聞いてくる。

「他のメンバーに頼まれて、どうしてもこっちでやっておかなくちゃいけない事があるぞら」

「そうですか…」

そう用意していた言葉を花丸が告げると、聖良は府に落ちないといった様子だったがそれ以上追及することは無かった。

「こちらこそ、急に押しかけてしまってますいません」

「いえいえ、うちは全然平気なんですけど…ご飯が出来たら呼びますね」

「お構いなく」

そう言う聖良は部屋から出ていく、そしてこのやり取りをしたのは遥ではなく善子だった。

「何とか誤魔化せたわね…」

「善子ちゃんが、ちゃんと喋ってる…」

そう安心したように呟く善子の後ろで、思わず遙はそう口にする
と、花丸とルビイもコクコクと頷いていた。

「ヨハネー・アンタたちに任せておけないから仕方なくよ、仕方なく！
墮天使は世に溶け込む術を知っているのだ！」

なんていつものポーズをとりながら告げる。まあ確かにクラスで
も墮天使が出てこないようにはしているのだが…

「皆意外な一面があるすら」

「隠し持っている魔動力と言ってもらいたい」

「相変わらずすら」

遙はピアノ、花丸は読書家だから身に付いた引き出しの多さ、ル
ビイも裁縫など、そして意外としつかりしていて常識人な善子。皆普
段見せないだけで意外な側面を持っている。

「でも、そうかも」

「え？」

そう呟くルビイに、理亜がそう不思議そうに聞き返す。

「ルビイ、最近思うの。お姉ちゃんや上級生から見れば頼りないよう
に見えるかもしれないけど、隠された力があるんじゃないかって」

そう、普段上級生に引つ張ってもらってきた自分達にも、気づいて
いないだけで特別な力があるのかもしれない。そう言うと、花丸が
嬉しそうにそう告げる。

「じゃあ決まりすら」

「何が？」

「歌のテーマすら」

その日は、5人でアイデアを出し合いながら歌詞を作っていたの
だがやはり聖良に勘付かれる訳にはいかないなので、そこにはかなり神
経を使った記憶がある。

翌日も、日中はお店もあるので流石にずっと居続ける訳にもいかず

理亞を覗いたメンバーで図書館で良い単語はないかなど調べていた。「遙くんも残ってくれてありがとう」

そう不意にルビィに告げられる。確かに一人男子で肩身の狭さは正直感じるがそれは今に始まったことでもないので、気にしないといった様子で答える。

「いいのいいの。それにほら…ふたりの気持ちは僕もわかるし」

歳の差こそ違えど、遙も梨子という姉がいる。だからこそ、2人の気持ちは理解できたし協力したいと思ったのだ。

「だからさ、ちゃんといい曲作らないとね」

そう言つて、呼んでいた音楽関係の本へを視線を戻す。

自分の悩みに自分なりに答えを見つけた事によって、遙には周りに目を向ける余裕ができていた。

その日だった。遙は、例の破滅招来体攻撃の為の施設は奥の山を切り崩して建設されていることを知ったのは。

たまたま目に留まった新聞がきっかけだった。森の中から不気味な声がする。地元の人々にはそれが、遙か昔からこの地に住んでいるといわれる魔物。シャザツクのものだと言われていること。

山を壊したから、魔物が怒っているのだと。

「なんか、この前のミスノエノリユウみたいじゃないか…」

「そうだね、また同じことを繰り返そうとしているのかも…」

それを覗き込んだ花丸に、遙もそう同意する。

「でもまた街に怪獣が出たら、遙くんは戦うぞら？」

「多分、そう思うと思う…あの施設が破壊されたら、街にもかなり被害がでると思うし…」

そう答える遙は、難しそうな表情を浮かべていた。怪獣を倒す事が、必ずしも正義とは限らない。遙はそう思うようになっていた。でも、人々を守るためには戦わねばならないこともある。

夕方、理亞から買い物を手伝ってほしいと言われ。泊めてもらっているからとみんなであついていた帰りだった。そのシャザツクが、街に

現れたのは。

突然街中に浮かび上がるように現れた怪獣に、場は騒然となる。

「怪獣!？」

「とにかくみんな逃げよう!」

騒然となる街の人々に対し、冷静に遥はそう告げる。

「でもなんでいきなり…」

「きつと、普段は不可視の電子ベクトルの中に居るんだ。だから基本、姿は見えない…」

「だからそんな事観察してる場合じゃないでしょ」

そう怪獣について考察しだす遥に、善子がそう告げる。すぐに変身したかったが、街の人々…それに理亞の目の前でガイアになるわけにはいかない。

そんな時、X I Gのファイターが飛来し攻撃を開始した。

「あの怪獣も、ミズノエノリユウと同じなんだ…人間が自然を壊さなきゃ出てこなかったはず…攻撃しちゃいけない!」

「でも、けが人が出ていい訳じゃない」

そう憤る遥かに、理亞はそう告げる。あの施設の目的はニユースで明らかにされており、さらに人々もそれを望んでいる。

人間を守る。その為に怪獣は排除しなければならないのか? すぐに変身しに身を隠しに行くこともできず、理亞にも言い返せず唇を噛む遥を余所にファイターは怪獣を攻撃する。

その時だった。怪獣を守るように青い光が立ち昇り、その中からアグルが両腕を広げ怪獣を庇うように立ちはだかった。

「アグル…」

アグルは振り返ると、怪獣に向かって駆け出し街の外へと追いやろうとするがそれ以上に積極的に攻撃をすることは無かった。

しかし、なんとか森まで押し戻す事に成功したが背中中の棘を活かしてアグルの攻撃を防御し、逆にダメージを与え始める。

そしてそれが有効だと察したのか、まるまると転がりはじめ不規則にアグルの周りを移動しながら体当たりをし始める。

だがアグルもやられるままではなく、3度目程攻撃を受けはしたも

ののその次で逆に棘を掴み投げ飛ばす。

そして岸壁に激突した怪獣は、体勢を解き痛みにもがき始める。

そこに怪獣を戦闘不能にさせようと思ったのか、リキテイターの発射体勢に入る。その時だった――

怪獣の鳴き声よりも甲高い鳴き声が響き渡る。そして、今まで戦っていた怪獣の半分ほどの大きさの怪獣が現れる。

「あの怪獣の……子供？」

それを見届けていた人々がそう呟く中、アグルも発射できる状態にあつたりキテイターの構えを解き、エネルギーを霧散させてしまふ。

そしてアグルを威嚇するように体をゆるする子供怪獣を庇うように、親怪獣は前に立つと同様にアグルを威嚇する。

しかし、アグルはそのまま棒立ちで何もしなかった。いや、できなかったのだ。親を失って生きていく辛さを、博樹は知っているから。

すると子供の怪獣も、アグルに戦う意志がないのを察したのか親の手を引いて森の奥に帰ろうとする。そして親怪獣もそれに応じ、手を繋いだまま森の中へと――不可視の世界へと消えていった。

「あの怪獣、親子だったのかな」

「そうなんじゃない？でも良かったじゃん、被害も無かったみたいだし」

その帰り、そう呟くルビィに遥はそう笑顔で応じた。

「おんなじ地球に住む命なんだし、争わずに済むことに越したことはないんだよ。それにあの怪獣は、子供を守りたかっただけみたいだし」

その言葉は、どこか自分に言い聞かせるようだった。

46話 宇宙怪獣大進撃／Awaken the power

「これでこう…どう?」

「だったら…」

ルビィと理亜はそう言い合って思いついたフレーズをかき込んでいく。花丸が言葉をその場に適した言い回しを教えてくれて、遙が曲のバランスで歌詞の配置、善子も色々案を出してくれたが墮天使前回だったのでマイルドな言葉に直してもらったが…。

「じゃあ…」

「最後は…」

そう言つて最後の歌詞をかき込むと、詩が完成した。

「できた…」

「うん、すごくいい!」

理亜もそう言つて絶賛する。そして高まった2人は手を上げて

「いえーい!」

そうハイタッチを交わすのだった。

「うっさい!」

なんて声が聞こえてビクつとなるが、どうやら善子の寝言だったようでその隣で花丸も何やら寝言を言っている。

それが何となくおかしくて、2人は顔を見合わせて笑うのだった。

『地球から44光年離れたM91という恒星系に破滅招来体の母星があることが解った。』

「どうして、そこが母星だと?」

『コツヴやパズズの生命反応が、そこで確認された』

作曲を手伝う傍らで、遙はダニエルと連絡を取っていた。そして、遂に破滅招来体の母星を突き止めたというのだ。

「遙くん歌詞は完成し…何話してるの?」

「あついや、ええつと…」

『別に聞かれても構わないよ』

そのタイミングで丁度ルビィ達が入ってきたので困ったような素振りを見せるが、ダニエルがそう言うのでヘッドセットを取り、ノートパソコンのスピーカーとマイクを使い始める。

『空間に特殊な電荷を与えて、恒星系M91まで届くワームホールを作るシステムが完成している。さらに恒星間ロケットを改造して、ワームジャンプミサイルを完成させた』

「えつと…」

『どういうこと…?』

聞かれてもいいと言われはしたが、やはりルビィや理亜は何の話をしているか途中からというのもあって伝わらない。

「光の速さで44年かかる星に、破滅招来体の母星があるから。ワームホールでそこまで繋いでミサイルを撃ち込むってこと」

そう遥が解説すると、話が見えてきたのかふたりも納得する。

「でも、ワームホールの研究は無限の宇宙に飛び出して、新しい友人に会う為の夢じゃなかったの?」

『だが、宇宙にいるのは友人だけではないことが解ったんだ』

「クラウスも言ってたそうだが、破滅をもたらすものが現れれば、人類は攻撃しようとするだろうがそれは意味のないことだって。僕もそう思う」

「でも、いつ襲ってくるか解らない相手に攻撃することの何がおかしいの?」

「それは…」

『決行は明後日、G.U.A.R.D.との共同で行う。理解してくれ、これも地球の平和を護るために必要なんだ』

理亜にそう聞かれ、答えられない遥にダニエルもそう告げる。これは地球を守る為に必要だと、割り切ることができなかった。

「ルビィ知らない人と話すの苦手…」

「わたしだって…」

翌日、歌を披露する舞台として選んだクリスマススイベントの選考会会場まで来ていたのだが思わずルビィを理亜は弱音が出てしまう。

「姉さまが居ないのがこんなに不安なんて…」

「大丈夫、ふたりならできるって」

そう遥が笑って励ますと、善子と花丸も口を開く。

「自分達で全部やらなきゃ」

「全て意味がなくなるすら」

そう言つて2人を笑みで送り出す。そして三人はそれを外で見守る。

「何泣いてるすら」

「あんたの方が泣いてるわよ…」

「すらあく」

窓の外から見ていて泣き出す2人の隣で遥は、そこから少し離れた位置で同様に理亜達を見守る2人組を見つけた。

「2人とも、選考会は頑張ったぞらね」

「貴様にリトルデーモン10号の称号を与えよう」

そう2人なりに労っているのだが、善子のキャラクターに慣れたのか「ありがと」と応じるが、あまり相手にしていないのだった。

「でも大丈夫かな…あんな事言っちゃって」

「絶対満員になるって言わないと通りそうになかったし」

不安げに呟くルビィに、仕方ないと理亜が告げる。

「こういうのは強気にいかなきゃ、大丈夫だって。絶対上手くいく！2人の気持ちは、きつとと届くよ」

そう遥も励ます。

「しよがないわね、いざとなったらリトルデーモンを召喚…」
「どこにいるすら」

普段通りのお世辞にも上手くはない励ましを送る善子に、花丸が肉まんの包みを開けながらそう言い放つ。

「てかずら丸また?」

「おいしいずら」

そう呆れ気味に問いかける善子に、花丸は幸せそうに答える。確かに花丸はこっちに來てから特に食べてばかりな気がする。

「フラグは完全に立ってるわね…」

「善子ちゃん」

立ち上がって何やらはぶつぶつと言い始める善子に花丸の声は届かない。

「言っとくけど、スクールアイドルは体調管理が大切なんだから。後から泣き言言っても—」

「善子ちゃん」

「うっさい!てかヨハネ!」

そこで遙もやつと気が付いた。花丸は確かにこの中では一番食べてるのは間違いないが、あまり変化が起きないタイプらしい。対して善子は—

「既に、フラグは立っていたはずだよ」

「むしろ、見てて気づいたんだけど…」

そう言つて理亞が善子の頬をつつくと、いい感じにお肉がぽよよんと揺れた。

そもそもシーソーの片側に善子一人で、反対側の花丸とルビイが下がってこない時点で気が付くべきなのだが…。

「なんでええええええええええ!?!」

気が付くとシーソーを飛び降りて後ろの滑り台を反対側から駆け上ると絶叫する。そのせいで花丸とルビイは座ったまま勢いよくシーソーが地面に落ちる。

「痛いずらあ…」

「ダイエツトしてもらわないとなあ…」

「そういえば、鞠莉ちゃん達に連絡したずら?」

「うん、さつきメールしたよ。『そういうことなら、ぜひ協力させて』っ

て」

「じゃあ後は、当日だけだね」

そう言って笑うのだった。まあ、本番までにやらなきゃいけない事があり頭を抱える人物もいるのだが…。

「さあ今日は、クリスマスフェスティバル出場者の…えつと…」

「Saint Aqours Snowです」

先行は無事通過した次は、ラジオ局にイベントの告知にと呼ばれていた。

「北の大地、結界と共に亡者が蘇りし鐘が鳴り響く。我がリトルデーモン達よー」

「ちゃんと告知するぞら」

普段道理の善子に困惑気味なDJを余所に、花丸がそうルビィに声をかける。

「クリスマスにライブを行います」

「よろしくず…じゃなくて…よろしくおねがいするず…じゃなくて、よろしくお願いしますぞら！…あつ…」

元々打ち合わせしていたセリフをルビィは問題なく言えたが、花丸は緊張すると口癖がどうしてもでてしまうようだった。

「失敗したぞら…」

そうスタジオを出た時につくりと肩を落とす花丸を、「大丈夫だよ」とルビィは励ましていた。

そうこうしていると、局のロビーで2人組がこちらをじつと見ていた。恐らくこちらに用があることは2人の様子から想像できる。

「あのふたり、確か…」

理亜と同じ制服に身を包んでいた2人の少女に、遥は見覚えがあった。すると理亜はさつとルビィの後ろに隠れる。

「あの2人は？」

「クラスメイト」

「どうして隠れるの？」

「だって…ほとんど話したことないし…」

ルビィに聞かれてそう答えるが、ルビィと遙にはそんな様子が姉に隠れる自分みたいに感じられた。

「Saint Snowのライブです、理亞ちゃん出ます！」

「なっ…」

後ろで理亞が驚くのが解ったが、ルビィはしつかり前を見据える。だがそのかいあってか、クラスメイトの表情がほころぶ。

「理亞ちゃん、私達も行つていいの…？」

「え…うん」

そう聞かれた理亞が、驚きながらもそう短く答え。ルビィの後ろから出てくる。

「それと今更だけど…ライブの予選は、ごめんなさい…」

そう視線を下げ泣きそうになる理亞に、2人は笑いかける。

「いいんだよ」

「わたし達の方こそ、嫌われてるのかなつて。会場にも行けずに、ごめん…」

「理亞ちゃんや聖良先輩が、みんなの為に頑張ってたのは知ってるよ」

「Saint Snowは学校の…私たちの誇りだよ」

「クリスマスフェスティバルには出るんでしょ？皆も来たいって、いい？」

「うん」

クラスメイトに口々に言われ、そう短く答える理亞だったがそこで気持ちが抑えられなくなり、涙があふれる。

ずっとクラスでは一人だったのだろう。それでも、聖良と二人で学校を背負ってこれまで頑張ってきた。それを、クラスメイトに学校の誇りだと言われたことが嬉しかったのだ。

それを見て、ルビィも涙を流したがその理由は解らなかつた。でも、自分の成長した姿を見てもらいから。早くダイヤに会いたい、そう思った。

翌日、イベント当日となった。鞠莉の話によると、ダイヤが迎えに来るという名目でこちらにイベント前に辿り着く手はずになっている。

曲も振り付けもルビィと理亞の手によって完成し、衣装の準備もできた。あとは本番で披露するだけ。だが遙には別の問題で心配があった。

「なに黄昏てるずら」

一人海を眺めていた遙に、花丸がそう声をかける。

「いや、宇宙怪獣って何で暴れるのかなって…地球を征服しようとか思ってるのかなって」

今回のワームジャンプミサイルの事はニュースにも取り上げられており、もうすでに皆知っている。そして遙もそれに協力したことも。

「知らない場所にいきなり放り込まれたら、どんな生き物だって暴れるずら。本当の怪獣の気持ちはマルは解らないけど」

「怪獣はただ破滅招来体に無理やり連れてこられただけって事もあるよね」

そう呟いた遙は山の方を見る。その視線の先には、ワームホールを発生させるための巨大なパラボラアンテナのような装置が二つそびえ立っている。

「それがどうかしたずらか？」

「もしそうなら、コツヴやパズズの母星を滅ぼしても、また別の巨大生物と地球をワームホールで繋ぐ」

「まさか…」

そこで、花丸は遙の気にしていることを察したのか、驚愕の表情を

浮かべる。

「地球を平和にするには、全ての巨大生物の住む惑星を：片っ端から滅ぼさないとイケなくなるんだ」

そう言っつて遥は立ち上がる。

「やっぱり、この作戦を成功させてはイケない：止めなくちや！」

「どうやって？」

「それは…」

花丸にそう諭され、答えられない遥だった。無理もない、アルケミースターズとはいえ今回の作戦を実行するG・U・A・R・Dから見れば遥はただの一般人。話など聞き入れてくれるはずもない。

「我々人類は、破滅招来体のシナリオ通りに歩み始めたのかもしれない」

「博樹さん：やっぱりこつちに来てたんですな…」

そこに現れたのは博樹だった。やはり彼も、この作戦に思うことがあるのかもしれない。シャザックが現れた時に、すぐアグルが現れたのは彼もこちらへと来ていたからだろう。

「地球生物を絶滅させようとしている人類は、今まさに宇宙生物までも滅ぼそうとしている」

「どうしたらいい：博樹さん教えてください」

「過ちを止められるのは：お前だけだ、遥」

「どういう意味ずらっ？」

どうすればいいのか？ 答えを遥は博樹に求めるが、博樹はそう言い放ち答えを示しはしなかったし、そばにいた花丸にもそう問われるが、あえて答えず続ける。

「愚かにも人類は、この作戦を唯一の希望としている…」

そう博樹は、遥の目をまっすぐ見つめて言う。そして、博樹自身の過ちによつて生み出した現状を自分に止める資格はない。遥だけが、それを正せるのだと。

「人類の希望を打ち砕く勇氣はあるか？ ウルトラマン…」

「そんな言い方…」

一見すると遥を脅すような言い方をする博樹に、花丸が口を挟む。

「たとえ止めることが正しい事だとしても、それを実行するのはそういう事になる。その覚悟がないなら、止めるべきじゃないんだ」

そう博樹は花丸に向き直ると告げる。

「そしてオレに、これを止める資格はない。オレにできるのはその後も、地球の為に戦う事だけだ」

そう言い放つ博樹を余所に、施設は稼働を始める。

「宇宙に夢の道を作るはずが、抹殺兵器を送り込むための道具になるとはな」

「人類は今、テリトリーの壁を壊そうとしている：超えてはいけな領域に、足を踏み入れようとしているんだ…」

博樹の言葉に、遙もそう呟く。そしてついに、空中に二基のパラボラから放出されたエネルギーによって、ワームホールが発生する。

「賽は投げられた。どうする、遙？」

そう博樹は再び遙に問う。そして遙は逡巡すると、意を決して駆け出した。

「ガイアーツ!!」

そして突き出したエスプレンダーから解き放たれた光が、遙の身体をウルトラマンガイアへと変える。

基地内に出現したガイアは、迷わずワームホール発生装置へと駆け出す。しかし、万一破滅招来体に妨害された時と想定して出撃していたファイターの攻撃を受けてしまう。

だが、ずっと同じ目的で戦ってきたはずのガイアへの攻撃に抵抗があったのか、威嚇射撃のみで直接当たる目的での攻撃を行うことは無かった。

しかしその時だった。破滅招来体のワームホールが、先程発生させたワームホールと接触してきた。

人類が発生させたワームホールを利用して、怪獣を送り込もうとしてきたのだ。

すぐにワームホールを閉じようと基地では騒ぎになるが、逆に今閉じれば行き場を失ったエネルギーによる二次災害が起こる可能性がある。その為、装置はワームホールへエネルギーを送り続ける。

だがガイアもそれを悟ったのか、上空に飛び立つとその身を盾にして、ワームホールへのエネルギーの供給を絶つ。

「グワアアアアアア！」
「遙くん！」

その威力に耐えられず、ガイアの体は地面に叩きつけられる。そしてワームホール同士の接触の結果空間が歪み、コツヴとパズズが現れる。

ワームホールのエネルギーを吸収し、パワーアップを果たした二頭の怪獣は初めに、ワームホールを発生させたパラボラを、電撃と光球で破壊する。

そして、ワームジャンプミサイルへ向かって一直線に駆け出す。惑星を容易に破壊するだけの威力を秘めたミサイルをここで炸裂させれば、間違いなく地球は跡形もなく消滅してしまう。

起き上がったガイアは駆け出し、真正面から二頭の怪獣をその身一つで必死に押しとどめようとするが簡単にあしらわれてしまい。コツヴに尻尾を掴むが、振りほどかれさらにパズズの尻尾の殴打を受ける。

だが起き上がると飛び上がり、再び正面に回り込むと怪獣を押しと止めようとする。そしてファイターもガイアを援護すべく攻撃を開始する。

しかしパズズの電撃攻撃により、コントロール系にダメージを負ってしまい飛行不能に陥ってしまう。そしてガイアも何度目かの抵抗をするが、もうあと少しでミサイルに到達するというギリギリの状態に陥る。

「たとえ奴らに、地球破壊の目的意識がないとしても、生物の本能で暴れているとしても、だからこそ厄介なんじゃないか…遙」

博樹はそう呟く。ガイアが積極的に怪獣を倒そうとしないのも、そういう理由からくる躊躇によるものだった。だがだからと言って、地球が無くなつては元も子もない。地球を守るために、ただ生きようとする怪獣から見た悪になる事も必要なのだ。

その決心を、遙がするのを博樹は待っていた。

だがしかし、ガイアもじわじわと押され、もう少しでミサイルに触れてしまう。

「このままじゃ……」

花丸がそう不安げに呟く隣で、博樹は右腕を突き出すとアグレイターの翼が開く。そしてそれを顔の横に掲げると半回転して青い海の光が空へ立ち昇っていく。

あまりの眩しさに顔を背けた花丸が、再び前ガイアの方を向くと。上空に現れたアグルが、急降下し二頭の怪獣の顔面を両足で蹴り飛ばす。

「ドワアアアア！」

それを察したガイアは咄嗟に横に飛んで巻き込まれるのを防ぐ。そして二頭の怪獣が地を転がっている間、アグルが派手に土煙を上げながら着地する。

そしてガイアはアグルに駆け寄ると、アイコンタクトで二体の巨人は頷き合くと、怪獣に対して構える。

「デエヤツ！」

「デュワツ！」

駆け出した2人の巨人はそれぞれガイアはコツヴ、アグルはパズズと戦闘に入る。

的確にカウンターを入れていくアグルとは対照的に積極的に拳や蹴りを繰り出すガイア。そしてアグルがパズズを投げ飛ばしたのと同じ方向へコツヴを投げ飛ばすと、それに引っかかってパズズが再び転倒する。

そこにガイアはクアンタムストリームを撃ち込もうとした。

—宇宙怪獣たちも、ただ無我夢中で生きようとしているだけなんだからそこらを威嚇する怪獣たち。

『ガイアー！』

悩むガイアをアグルが駆け寄ってそう声をかける。そこでようやく決心がついたのかガイアは再び怪獣を見据える。

『ガイア、行くぞ！』

再び駆け出すと、怪獣との肉弾戦に突入する。それぞれ取っ組み合いになるのだが、今度は同じタイミングで跳ね除けられてしまう。

だがその勢いを利用して、連続のバク転で距離を取る。

『ガイア、変身だ！』

「デヤッ！ハアアアアアッ」

そのアグルの一言で、ガイアはスプリーム・ヴァージョンへと変わる。

そして駆け出したガイアは、前転でコツヴの鎌の攻撃を回避するとパズズに殴り掛かる。その隙についてアグルはコツヴへと肉迫する。

コツヴの鎌を回避し、腕をつかむと懐へ蹴りを見舞うアグル。そしてパズズを持ち上げ豪快に投げ飛ばすガイア。

頭を掴んでコツヴをなぎ倒すと、その向こうでパズズはバックドロップを食らう。そしてそれぞれ怪獣の頭を掴んだままウルトラマンは向き合う。

『アグル、行くぞ！』

『おう！』

「デヤアアア」

「ハアアアア」

お互いに向かつて真つすぐ駆け出すと、怪獣は2人の拘束から脱出する。そのままウルトラマン同士が激突するかに思われたが、それも2人には織り込み済みだった。

そのまま巴投げの要領でアグルを後ろのパズズ目掛けて放り投げると、アグルはパズズに組み付き地面を転がる。その間に跳ね起きたガイアはコツヴをリアットでなぎ倒し、さらに持ち上げ頭から落とす。

そしてそれぞれ怪獣の尻尾を掴むと、ジャイアントスイングの要領で怪獣を振り回す。先にアグルが投げ飛ばした方へガイアも投げ飛ばす。

「デュワ！オアアアアア…」

「デヤッ！ハアアアアア…」

そしてトドメを刺すべく、横に並ぶとそれぞれ、アグルストリームとフォトンストリームの発射態勢に入る。

「デヤア！」

「デユワー！」

同時に放たれ、一つになった大地と海の光の奔流ダブルストリームクラッシュヤーによって、二頭の怪獣は粉々に粉碎されてしまうのだった。

そして2人の巨人は、天空へと飛び去って行った。

その日の夜、鞠莉に指定された場所に疑問を持ちながらも一年生組を迎えに来ていた。そしてその場所―山頂を目指してロープウェイに乗り込むと、そこには聖良も同乗していた。

「聖良さん？」

「どうしてここに？」

お互いどうしてこんな所にいるのか不思議そうな顔をするが、お互いここに来るように呼び出されていたのだ。

冬場と言う事もあって日が暮れるのは早く。山頂に辿り着くころには夜の闇がその場を支配していた。

そしてそこで待ち受けていたルビイと理亜は、それぞれ自分の姉に一枚のクリスマスカードを渡す。

「これは…？」

「クリスマス」

「プレゼントです！」

ダイヤに聞かれて、ルビイと理亜は交互に答える。

「クリスマスイブに、ルビイと理亜ちゃんてライブをやるの」

「姉さまに教わったことを全部使って、私達だけのステージで」

「自分たちの力でどこまでできるか」

「見て欲しい！」

そう口々に告げられ、それぞれは自分の妹の顔を覗き込む。たった数日合わなかっただけなのに、大人になったような印象を受ける。

「あー」

そこで、遥の声が割って入る。その方向を見ると、いつの間に来ていたのかAqoursの残りのメンバーがそこにいた。

「私のリトルデーモン達も観たいって」

そう善子が言うと、「誰がリトルデーモンよ！」と梨子が食いつくがダイヤはそこで納得がいく。だから飛行機やらの手配が早かったのかと。

「千歌ちゃん、みんな！」

「来てたの？」

ルビイも理亜も予想外の観客に、嬉しそうな表情を浮かべる。こっそり善子と花丸、そして遥が残りのメンバーに根回しした結果のサプライズだ。喜んでくれてよかったと、そう笑みを浮かべる。

「鞠莉ちゃんが飛行機代出すからみんなでトウギャザーだつて」

そう曜が敬礼しながらそう伝える。

「あつたりまえデース！こんなイベント、見過ごすわけないよ」

「さすが太っ腹」

そう言つてはしゃいだ様子の鞠莉を果南が茶化すが、「太いのは善子ちゃんずら」と花丸が善子に飛び火させるので「うにやー！」とよくわからない叫び声をあげるのだが、それで周りの笑いを誘った。

「姉さま」

「お姉ちゃん」

「わたし達の作るステージ、見てくれますか？」

そう2人は姉に問いかけると、答えるより先に姉は自分達を抱きしめてくれた。

「もちろん」

「喜んで」

そう妹に告げる。

「緊張してる?」

「ううん」

「ルビイも、不思議と落ち着いてる。お姉ちゃんが近くにいるからかな?」

本番直前、背中合わせで衣装に身を包んだルビイと理亞は言葉を交わす。

「それもあるけど、それだけじゃない…」

そう言つて理亞はそつとルビイの手を握る。

「あなたが居たから、ここまでこれた」

「理亞ちゃん…」

それは、不器用かもしれないが理亞なりの感謝の言葉だった。

—届けよう、大切な人に

A w a k e n t h e p o w e r

2人が作った、大切な姉に送る歌。

その輝きは、聖夜を彩るイルミネーションより輝いていた。

「姉さま、私はやっぱりSaint Snowは続けない」

「えっ?」

イベントは無事大成功で終わることが出来たその帰り、理亞は聖良にそう告げる。

「これは姉さまとの思い出だから…世界にたった一つしかない、雪の結晶だから」

だがそれは先日と違い、スクールアイドルをやめると言う事ではな

い。

「だから新しいグループで、違う雪の結晶を見つける。姉さまにも皆にも喜んでもらえるようなグループを作る」

それは理亜の新しい目標だった。

「見てて」

そう言っ駆け出した理亜の背を、聖良は見つめるのだった。

「理亜は、昔から恥ずかしがり屋で、誰とも中々話せなかつたんですよ」

そう切り出した聖良に、ダイヤはほほ笑む。ルビイも一緒だったから。でも二人は自分たちで手を取り合っ、いつの間にか目まぐるしい成長を遂げていた。

「2人とも、すっかり大人ですわね」

「はい」

そう答える聖良は、どこか寂しげだった。その気持ちもダイヤは痛いほどわかる。全然違うところに住んでいて、性格も全然違う姉妹。でも意外なところでそっくりだったのだ。

「祝福しましょう、ふたりのこれからの羽ばたきに」

47話 幼き日の記憶／魔人襲来

—どうするんですの？大事になっていきますわよ

—見つかったらすぐ連れ戻されるな

—あきらめる？

—イヤ！流れ星にお祈りできなかつたら、きっとダメになっちゃう
これはまだ幼かつた日の果南にダイヤ、そして博樹との思い出。鞠
莉の家の使用人たちが鞠莉達を探す中、展望台へのロープウェイに
乗っていた。

流れ星にお祈りする。その為に家を飛び出してここまで来た。だ
がそれはあいにくの雨によってその望みは絶たれてしまった。

—来たのに：せつかく来たのに：

—泣かないで

そんな鞠莉に果南は優しく声をかけると、持っていた星座早見表を
借りてあるものをかき込む。

—ほら

そう言つて果南が返してくれと、そこには大きく流れ星の絵が描
かれていた。

—これで大丈夫！

そう言つて果南は笑っていた。

—子供だましだろ

—ヒロ！ダメだよそんなこと言つたら

博樹は呆れ顔でそう言うと、果南に怒られすぐ顔を逸らした。

結局あの後、本物の星を見ることは叶わなかったがあの星に願つ
た。

『ずっと一緒に居られますように』とそして今、再び四人揃う日が来た
事を—そしてその時の星座早見表を

手に部屋のベランダから星空を眺める鞠莉の頬に、一筋の涙が伝つ
た。

「ふわあ…」

「大きなあくびすら」

元日の昼前、校門前に集合したA q o u r sのメンバーだったがあくびをする善子をそう花丸が茶化す。

「うるさいわね、昨日はリトルデーモンの集い。正月生放送があったの」

年越しで配信していたらしい。そう言えば生配信をやってたしアルケミースターズで誰か見てるって言ってた気がする。なんて思いながらそんな会話を聞き流す。

「オレは何で呼び出されたんだ？」

「まあまあいいじゃん、折角だからヒロもさ？」

果南と鞠莉に呼び出されてここまで連行されてきて、明らかに不機嫌そうな博樹に果南がそう言って笑いかける。

「博樹さん、これ…頼まれていたものです」

そう言っつて遥が、折角今日会えたからと一つのUSBメモリを手渡す。

「アルケミースターズの一部メンバーが作った、パーセルの最終改良版の設計図」

以前博樹が怪獣を操るのに使用したパーセル。そのデータを有効活用できないかと一部のメンバーが提示した改良プラン。そのデータを渡したのだ。

「博樹さん、もう一度パーセルで怪獣たちとコミュニケーションをとることは出来ませんか？」

「無理だな、パーセルは通訳じゃない。怪獣をコントロールするための装置だ」

怪獣たちは、自分の生存圏を守るために本能的に暴れているにすぎない。もしも怪獣たちと意思疎通がとれれば、争わずに済むのではないかと遥は希望をもって問いかけるが、博樹はパーセルは一方的に怪獣を操る装置だ。怪獣の意思を汲み取ることができないと一蹴する。

「せめて、地球に住んでいる怪獣たちと戦う以外の道を見つけられれば…」

それでも、同じ地球に住む命をいたずらに奪わないための方法が、遥には欲しかった。

「にしても寒いねえ…」

そう千歌が身震いすると、曜も「ダイヤさん達まだかな？」と両腕をさすりながら呟く。

そうこうしていると、一台の真っ黒な乗用車が目の前に停まる。

「お待ちせー！」

そう後部座席の窓が開くと、顔を覗かせたルビィが声をかけてくる。そしてダイヤともう二人、車から降りてくる。

「あけましておめでとーございます」

「うわ、ホントに来た」

そう新年のあいさつを受けて善子が驚く。

もう二人の訪問者、聖良と理亜も車から降りてくると「悪い？」と理亜が善子を睨む。

「ていうかその恰好…」

千歌たちの服装を見て、そう呟く理亜の隣で聖良も困惑気味だった。折角のお正月だからと、彼女達は振袖で集合していたのだ。ちなみに遥も博樹も普段通りの私服だ。

「それでは皆さんー！」

「あけましておめでとーございますー！」

新年のあいさつくらいに留めておいて、全員動きやすい恰好に着替えてグラウンドに集合する。

「寒い…」

と寒がる面々に向かって、呆れた様子の理亜が

「あんたたち、やる気あんの?」

「一応、お正月っていうことで…」

「だからって晴れ着で練習できるかい!」

千歌の苦し紛れの一言が、理亜を怒らせたようで彼女の怒号が木霊した。

「帰っていいか？」

「いいじゃん今日くらい、付き合ってよ」

一人露骨に嫌がる博樹を、果南がそう言ってなだめる。

「いい学校ですね。私達と同じ、丘の上で」

そう聖良がグラウンドからの景色を見て、そう呟く。

「うん、海も見えるし」

函館ほど都会ではないが、それでもこの学校からの景色が好きなのだ。

「でも、無くなっちゃうんだけどね」

そうサラツと曜が告げると、「え？」と鹿角姉妹は揃って目を丸くする。

「今年の春、統廃合になるの。だからここは三月でジ・エンド」

そう鞠莉がざつと経緯を説明する。

「そうなの？」

「でも、ラブライブで頑張って生徒が集まれば…」

そう千歌に詰め寄って告げる。

「ですよ、わたしたちもそう思ってきたんですけど…」

でも届かなかった。だからこの結末はもう二度と覆らない。

「そうだったんですか…」

「でもね」

聖良は悪いことを言ったと思い、そう視線を落とすが千歌は続ける。

「学校みんなが言ってくれたんだ。ラブライブで優勝して、この学校の名前を残して欲しいって」

「浦の星学院のスクールアイドルが、ラブライブで優勝した。そんな学校があったんだって」

そう果南が付け足すと、聖良も笑みを浮かべる。

「最高の仲間じゃないですか、素敵です」

そう聖良は千歌の話を聞いて本心からそう思ってくれた。

「じゃあ遠慮しないよ。ラブライブで優勝するために、妥協しないで徹底的に特訓してあげる」

そう話を黙って聞いていた理亜が、一年生の前に立って宣言する。

「マジ?」

「マジ」

「マジすら?」

「マジすら」

「マジですか?」

「だからマジだって」

そんなやり取りがおかしくって遙は笑ってしまう。そんなやり取りを離れて見ていた博樹に、鞠莉が近付く。

「どうした?鞠莉」

「いや、ただ…こうやって時って進んでいくんだなって」

「そうだな…」

それを聞いて、博樹は空を見ながらそう返すと鞠莉はそのまま通り過ぎる。永遠に続くものなんてない、そう解っていても寂しいものがある。

S a i n t S n o w 主導の練習は、年末年始で鈍っていた A q o u r s のメンバーにはきつかった。と言ってもウオーミングアップ プラスアルファといった程度なのだが、果南以外はへばってしまった。

「お正月ですからね、皆さん」

「どういうことですか?」

そんな様子を見て、聖良がそう言うのとダイヤが聞き返す。

「随分体がなまってるってことよ」

そう理亜が遠慮なく言い放つ。

「一度体を起こさないとダメですね…校門まで坂道ダッシュして、グラウンドを三週してきてください」

「ええ!」

その聖良からの厳しい注文に、果南以外は抗議の声を上げる。

「さつき言ったよ、遠慮しないって」

そう理亜が意地悪く笑うと、「さあ行ってください」という聖良の声に渋々といった様子で走り出す。

「これやりがいあるよね」

ただ一人、果南だけは楽しそうだったが。

「こんな調子で決勝なんて…大丈夫かな…」

何とか走り終えたが、もう立てないといった様子でへたり込む面々の中で梨子がそう不安げに呟く。

「行けると思いますよ、ステージって不思議とメンバーの気持ちがお客さんに伝わるものだと思うんです。今の皆さんの気持ちが自然に伝われば、きつと素晴らしいステージになります。」

「はい！」

その聖良の言葉に、千歌は力強く答える。

「鞠莉ちゃんは？」

「ご両親からのお電話だったみたいですが…」

鞠莉の姿が見えない事に気が付いたルビィがそう聞くと、ダイヤがそう答える。

「もしかして、統廃合中止ずらか？」

そうキラキラした目で花丸が身を乗り出すと、その後ろで善子が指でひげを作り。

「ほっほっほ、この学校を続けることにしたぞよ」

「何勝手にキャラ作ってるぞら」

「新年のあいさつでしょ」

そんな勝手な事を言い出すので、花丸と遙はそうあしらう。

「みんな」

そこで話題の鞠莉が戻ってくる。「お話は済みましたの？」と聞いてくるダイヤに「イエス」と一言で応じると、屋内に入ろうと言って体育館に移動する。

「理事？」

「オフコース」

鞠莉から聞かされた予想外の電話の内容に、全員は聞き返すと鞠莉はそう頷く。

「統合先の学校の、理事に就任してほしいって。ほら？浦の星の生徒も沢山行くことになるし、わたしが居た方が安心できるだろうからって」

「鞠莉ちゃん、浦の星の理事長さんでもあるの」

その説明に、付いていけないといった様子で理亜にルビィがそう説明すると。彼女は「えええ!?!」と予想通り驚いてくれた。

「じゃあ春から鞠莉ちゃんも一緒の学校に？A q o u r sも続けられる?。」

そう千歌が期待を込めた視線を鞠莉に送る。

「いや、それ留年したみたいだし…」

「そうになったら留年ですねえ」

そう曜と遙に口を挟まれて、千歌は口を閉ざす。

「大丈夫、断ったから」

そうあつさり告げる鞠莉に「え?。」と全員が口をそろえて聞き返す。

「理事にはならないよ。わたしね、春からパパの勧めるイタリアの大学に通うの」

また海外に行くのか、なんて思っていたが。それが同時に何を示しているのか気づく。

「だから、あと三ヶ月。ここに居られるのも」

ラブライブの決勝が終われば、三年生は卒業し在校生も春から新しい学校の生徒になる。あと三ヶ月しかないのだ。今の9人で歌えるのは。

「ほら、差し入れだ」

気が付けば居なくなっていた博樹が、スポーツドリンクを持って入ってきた。わざわざ気を利かせて買ってきてくれたらしい。

「ほら、君らも」

「ありがとうございます」

そう聖良と理亜にも渡しているのを見て、遙は自分と比べて彼は周

りを見ているんだなと思ってしまう。これまでの彼はそれどころじゃなかっただけで、元々こういう人間なのだ。今まで一緒に戦ってきたが、博樹にも知らない一面があるのかと思ってしまう。

「そういえば、今日初対面でしたよね？あなたもマネージャーなんですか？」

「いや、オレは生徒ですらないよ」

聖良に聞かれ、嘘をついても仕方ないからと、生徒ではないことを教える。

「じゃあどうして？」

「理事長様に呼び出されたんだよ」

学校とは関係ない部外者がどうしてわざわざ？と疑問に思われたので、そうわざと鞠莉達の方に冷めた視線を送りながら答える。

「でも来るあたり、ホントこういう時は優しいよね」

するとそんなやり取りを見て、そう果南が茶化す。

「いらぬなら持って帰るぞ」

「相変わらずヒロは素直じゃないね」

鞠莉まで茶化すものだから博樹は視線を逸らして黙り込んでしまふ。

「照れちゃって」

「めんどくさくなっただけだ」

「相変わらずですわね、博樹さんも」

「ダイヤには言われたくないな」

「どういう意味ですの!？」

なんて4人にとっては、昔からの絡みだが周りから見ていると博樹がこうやって話しているのは新鮮に感じられる。

「博樹さんって、本当はあんな感じの人なんだ」

「やはりリトルデーモン…」

「それはないぞら」

そんな様子を見ながら千歌が不意にそう呟くと、お決まりなやりとりが善子と花丸で交わされるのを笑っていた。

こんな風に、みんなが笑っていられる時間がずっと続けばいいのに

と思わずにいらなかった。

「もつとゆっくりしていけばいいのに」

一日の練習を終え、Saint Snowの2人を見送りに沼津駅まで来たところで、千歌がそう告げる。

練習を見てもらっただけで折角きてくれたのに…と。残念そうだった。

「ちよつと、他にも寄る予定があるので」

「予定？」

「ルビィ知ってるよ、ふたりに遊園地行くんだった」

そうルビィが挙手して言い放つと、「言わなくていい！」と理亜が顔を赤らめながら言うのだった。

「これ、姉さまとふたりで考えた練習メニュー」

そう言って表情を真剣なものに戻した理亜が、千歌に一枚のメモ紙を手渡す。

「ありがとう」

そう言って受け取る千歌の周りに、全員がその内容が気になって覗き込む。

「うへ…こんなに？」

「ラブライブで優勝するんでしょう？そのくらいやらなきゃ」

そう嫌そうな顔をする善子に、理亜はそう告げる。

「ただの思い出作りじゃないはずですよ」

続いて聖良も、ただ一度でも一緒にステージに立った仲だ。だからこそこの2人は、Aqoursを本気で応援してくれている。自分たちの成しえなかった、優勝を果たしてほしいと。そう思ってくれているのだ。

「必ず優勝して！信じてる」

そう理亜からまっすぐ言われ「うん！」と千歌も力強く返す。

「がんばルビィ！」

ルビィもそうやって意気込んで見せるが、初めて見た理亜は「何そ

れ？」と反応に困っていた。

「ルビィちゃんの必殺技ずら」

「技だったの？」

そう花丸が補足すると、何故か善子が驚いた。技だったのか……。そう思ったのは遥も同様だったが。

その時だった、空にワームホールが開かれ、中からシャチのような顔、赤い眼状紋。左右非対称な白黒の体色のカラス天狗を彷彿とさせる人型の異形が飛来したのは。

「何あれ……？」

「墮天使……？」

黒い翼がそう見えたのだろう、だがそれに構っている場合ではない。

「遥、全員を連れて逃げろ！」

博樹は遥にそう告げると、遥も領いて「僕も後で行きます」と返事をする、全員を引き連れて異形の向かっているG・U・A・R・D. の国際フォーラムのある方向とは逆の方へ避難する。

その施設は、表向きは会議場だが、その地下では新兵器の開発が行われており。誘爆すれば街にも被害が及ぶ危険性があった。

ワームホールの発生をキャッチしたXIGからもファイターを出撃させ、応戦するが異形はファイターより飛行速度が上だった。

「正月から現れなくなつていいじゃない！」

「んなこと言っても現れちゃったもんはどうしようもないじゃん」

思わず文句の出る善子に、遥はそう言い返す。理亜はウルトラマンの正体を知らない。それにできれば知らないままいて欲しかった。

だから遥は博樹の言う通りにしたのだ。そしてここなら安心だからと言って、適当に誤魔化して皆と別れようとする。

その間に、アグルに変身した博樹は異形に対し飛行しながらアグルスラッシュを放つが避けられる。

そして、夕日を背にしてアグルの目を眩ませ、逆に腕から光球を放って攻撃を仕掛けてくるが何とかこれを躲す。

その隙に異形は国際フォーラム前に着地するが、その正面にアグルも土煙を巻き上げながら着地する。

「青いウルトラマン…」

アグルの正体は知らない聖良が、アグルを見てそう呟く。初めて生で見たもうひとりの巨人。以前は怪獣を目覚めさせたりと悪い話の多かったアグルに、何とも言えない感情を持つ人々は多い。

「ハアッ！オオオオオ…」

アグルはすぐさま顔の前で両腕を組み、フォトンクラッシュの発射態勢に入る。

「いきなり撃つの…？」

そんな周りの心配をよそに、アグルは頭部へエネルギーを収束させる。

いつもなら追い詰めてから放つのだが、今回は破壊されては困る施設の近くということもありアグルは短期決戦を狙った。

「ツツアアツ」

フルパワーで放たれたフォトンクラッシュだった、異形の胸部が開き中から赤い結晶体が現れる。

赤い結晶体にフォトンクラッシュを収束させた異形は、そのままエネルギーを増幅させてアグルに撃ち返す。

「ウワアアアア」

想定外の反撃に、アグルの身体は宙を舞い地面へと叩きつけられる。

「なっ…い…」

その光景に、遥も思わず歩みを止め息を呑む。これまでと違い、主要施設をピンポイントで狙い。ウルトラマンの弱点を突く戦い方をする敵に、背筋に冷たいものが走る。

ライフゲージが点滅を始めたアグルが、肩で息をしながらフラフラと立ち上がるようになっているのに、異形はゆっくりと歩み寄る。

そして右の拳を握りしめ、アグルに殴り掛かった。

アグルも左の拳を放って、相手の防御を釣って右拳での反撃を狙うがその一撃を屈んで躲されると、ライフゲージに爪をたてられる。

そこからエネルギーを奪い取ると、異形は嘲笑うようにしてゆつくりと立ち上がるとその腕を振りぬきアグルの胸を抉る。

そして異形の手の中には、アグルから奪い取ったエネルギーが青い球体として握られていた。続けざまに受けた大ダメージに、思わずよろけるアグルだったが異形は勝ち誇るようにエネルギーの球体を握り潰す。

まるで敵の胸から心臓を抉り取り、握り潰すかのように――

「ウアアア……」

ウルトラマンにとって心臓に等しい器官であるライフゲージを抉られたアグルは、その姿を維持できなくなり白いもやに包まれると、青い光を撒き散らして消滅する。

すると異形はすぐさま手の甲から破壊光弾を放って、国際フォーラムを破壊すると目にもとまらぬ速さでその場から飛び去ってしまう。

加勢に行けなかった遥は、人気のないビル裏で一人唇を噛みしめる事しかできなかった。

「嘘……ウルトラマンが……」

「ヒロ!?!」

驚く理亜と聖良が、アグルの正体を知らないことも忘れて果南は駆け出した。

48話 命棲む星／シャイニーを探して

「ヒーローどこにいるの?」

あの後アグルが戦闘を行っていた辺りを果南は目に涙を浮かべて必死に走り回った。無理もない、目の前でアグルがライフゲージを挟られるところを見てしまったのだから。

そして、アグルが消滅した場所のすぐ近くに、ふらつく身体を引きずりながらこちらに歩いてくる人影を見つけた。

「ヒーロー!」

「果南…?」

「大丈夫? ケガしてない?」

そう言っ駆け寄ると、博樹の肩を持って支える。

「すまない…大丈夫だ…」

「救急車呼ばないと…」

そう言って反対の手でスマホをとり出そうとするのを「いや、いい」と言っ腕を掴んで止める。

「でも…」

「疲れただけだ…それに、なんて言っ呼ぶつもりだ?」

「それは…」

怪獣と戦っ負傷したなんて言える筈もない。それにダメージそ負ったが博樹本人に外傷はない。アグルのエネルギーさえ回復すれば大丈夫だといっ果南を安心させようとする。

「博樹さん、大丈夫ですか?」

「ヒロ大丈夫!」

そこにダイヤと鞠莉も合流してくる。

「ああ、何とかな…」

そう言っ笑っ見えるが、顔は赤く汗が浮かんでいて、時々咳き込んでいる博樹を見るとやはり大丈夫には見えない。

「待って、今迎え呼ぶから。ウチで手当するわ!」

そう言っ鞠莉がスマホを使い、家と連絡を取る。

その時、目の前に一台のジープが停まり、中から体格のいいG・U・

A. R. D. の中でも上位の階級の証である白い軍服をきた男が降りてくる。

「久しぶりだな、湊博樹」

「柊…」

かつてティグリスを地底貫通弾で葬った男、柊を博樹は睨む。

「ヒロ、知り合いなの？」

「まあな…」

果南に聞かれて、博樹はそう返事する。

「G. U. A. R. D. の士官の方とお見受けしますが、何の用ですの？」

そうダイヤが博樹と柊の間に立ってそう問いかける。その体格差は明らかで、ダイヤからすれば見上げるような大男であるはずの柊に、彼女は引かなかった。

「お嬢さん、私は別に彼を取って食おうという訳では無い」

「ではこんな時に何を？」

「お前の力を、オレに貸せ」

ダイヤの肩を持って彼女を引き下がらせると、そう博樹に手を差し伸べた。

「…何？」

だが、博樹はそんな柊の言動を警戒するのだった。

「何言ってるんですか？ヒロはさっきの騒ぎに巻き込まれてケガしてるんです！良いから帰ろ？」

「そいつがウルトラマンだとしても？」

果南も柊に何か嫌なものを感じたのか、そう言ってダイヤとふたりで博樹を連れていこうとすると、そう言われる。

「ウルトラマンはさっき消えちゃったじゃないですか…」

「いや、変な事を言って申し訳ない。お嬢さん忘れて頂きたい」

そう果南がしらを切ると、柊はそう言って立ち去って行く。

「良かった、行ってくれて…」

そこで緊張の糸が切れたのか、果南がそう呟く。

「…ごめんな、怖い思いさせた」

「いいんだよ、好きで庇ったんだから」

そう珍しく『ごめん』という言葉を使って謝る博樹に、果南はそう笑う。

「最後のは流石に冷や冷やしましたわ…」

ダイヤも同様にそう言って胸をなでおろした。

流石に地底貫通弾を阻止しようとして殴り込んだ事は言えなかったが、博樹は力を使い果たしており、いつ戦闘を行えるだけのエネルギーが回復するかも正直解らなかった。

そこに鞠莉が家の人間を引き連れ戻ってきたので、ひとまずは鞠莉の家で簡単に治療を受けるのだった。

— 遙さん、無理はしないでくださいね

— え？

別れ際に、そう聖良に言われた遙はその意図を瞬時に悟ることが出来なかった。

— みなさん、あなたの事も大切に思っています。だから…

— 解りました、約束します

聖良には正体を知られてしまったから、だからこそ彼女は遙の身を案じてそう伝えたのだ。それをやっと察した遙は、そう笑顔で返した。

『G. U. A. R. D. スポークスマンから「ブリッツブロッツ」と発表された怪獣により、G. U. A. R. D. フォーラムは完全に破壊されました。現在、怪我人等の正確な情報を—』

翌朝、ニュースでは昨日の出来事でもちきりだった。

「今年もこんな状況が続くのかしら…」

「そうかもね…」

そのニュースに母がそう漏らすのを聞いて、遙もそう呟く。

「でもあの怪獣は、今までと違った…主要施設を狙って現れて、ウルトラマンの弱点を突く戦い方。破滅招来体も、本腰を入れてきたのかも…」

「姉さん…」

そう梨子が呟く。確かに今まで送り込んできた怪獣たちと違って、高い理性を持っていることは明白だった。

「ガイアも負けてしまったら、地球はどうなるのかしら…」

母親は遙がガイアだという事を知らない。伝えるべきだと思ったが、父の一件以降。絶対に知られる訳にはいなくなってしまった。

あれ以降、母はガイアにも複雑な感情を抱いていることを遙は察していたから。

「大丈夫だよ、絶対に滅んだりしない。滅びるために産まれてくるなんて間違ってる」

そう言っただけは笑って見せた。少し前まで外に出れないほどふさぎ込んでいた遙が、そう言っただけで母も安心してくれるから。僕はもう大丈夫だと。

「そうよね、遙もアルケミースターズと頑張ってるもの」

そう言っただけで母も少し元気になってくれた気がした。

「博樹さん、大丈夫でしたか？」

「うん、特に大きなけがもなかったし」

その日の練習で、遙は果南にそれを確認する。あの時自分も一緒に戦っていたら、思わずにはいられなかった。

「でも、暫くは戦えないと思う…」

「そうですか…」

「あの怪獣、また出てきたら。遙くんは戦うの？」

昨日の今日では、アグルのエネルギーも回復はしないだろう。それ

に敵も一人戦えるウルトラマンが減っている現状を狙わないとは考えにくい。そこで果南はそう確認するように遥へ問いかける。

「そうですね。戦わないで傷つく人が出れば、絶対後悔しますから…」
「そっか…でも無理しないでね？私は昨日、アグルが負けた時怖かった。ヒロが死んじゃうんじゃないかって…」

「果南さん…」

そう果南の泣きそうな表情を見て、遥は息を呑む。

「もし遥くんがそうになったら、きつとみんな同じことを思うよ？だからさ、逃げてでも無理だけはしないで」

「わかりました、僕もみんなに心配かけさせerような真似はもうしません」

「約束だからね？」

「はい」

そう返事をする、果南も満足げに頷いたのでこの話はここまでにして練習に戻っていく。

「何話してたの？」

「博樹さんが気になってね、でも大丈夫みたい」

その時ルビィに果南と何の会話をしていたのか聞かれたのでそう返しておく。

その日の練習は、昨日貰ったSaint Snowのメニューをこなすべく年末休みで鈍った体を元に戻すことを目標に行われた。この感覚なら、明日から貰ったメニューに入っていけるだろうという実感を得られたところで終了となった。

その日の帰り、全員で談笑していると。ブリッツプロッツが、今度は高エネルギー弾頭弾の分解を行っているジオサテライトNo.3を狙って、再び沼津の空に現れた。

「また出た…」

今度は事前に施設を襲撃することは想定できていたので、既に警戒態勢だったXIGからチームライトニングのファイター三機、そして

ステインガーという大型陸戦兵器を使用するチームは―キュリーズが出撃する。

高速飛行で、怪獣を翻弄するライトニングだったが梶尾のSSが怪獣の飛び上がりからのチョップで無理やり叩き落され、残るSGも両腕からの光弾で撃墜される。

これまでファイターチームで最も実戦経験のあるだけでなく、撃墜されたことのなかった梶尾すら撃墜された事、そしてタバアグルを退けたことがブリッツブロッツの実力を物語っている。

「嘘…戦闘機があつという間に」

「僕行くよーこのままじゃ…」

善子がそう漏らすのを横目に、遙がそう告げる。ステインガーの砲撃も、手刀で叩き落し攻撃するブリッツブロッツを見て、少し焦っていた。

そんな時だった。突然地震が起きる。

「何!？」

「地震?」

「いや、違う…来る!」

そう言い切る遙かの視線の先で、大地を引き裂きティグリスが地底から出現する。

「あの怪獣…確か地底貫通弾で死んだはずでは…」

突然のティグリスの登場に、ブリッツブロッツだけで手一杯なのにと場は騒然となる。しかし、ティグリスはブリッツブロッツへと攻撃を開始する。

「あの怪獣…どうして?」

「守りたいものがあるんです、アイツにも」

そう呟く千歌の隣で遙は、単純にそれだけだ。そう直感的に思った、地球は怪獣たちにとっても故郷なのだ。それを守るただそれだけの為に、ティグリスは現れたのだと。

ティグリスは、ブリッツブロッツへ突撃した。だがブリッツブロッツも、顔面に回し蹴りを放ちそれを防ぐ。しかしティグリスはそれに怯むことなく攻め続ける。

そしてティグリスの喉元を狙って放たれた手刀を、噛み付いて防いだ。その反撃にブリッツブロッツは慌てて脱出すべく、ティグリスの身体を殴り続けるが怯まない。そこで噛み付かれていない手で、ティグリスの角を掴むと力任せに引っ張り角を引きちぎった。

そのダメージに、思わず悲鳴を上げながら後退するティグリスは、ブリッツブロッツの手を離してしまう。

「あの怪獣…」

「姉さん、行ってくる」

その様子を見て、悲し気に呟く梨子に遥はそう告げる。

「気を付けてね？」

そして返ってきた、自分を心配する声に笑顔で頷くと。怪獣たちが戦っている方を向く。

「ガイアーツー！」

遥は駆け出すと、地球の光を開放した。ティグリスを追撃しようとしていたブリッツブロッツは、いきなり現れた光に思わず顔を逸らす。

そしてその光の中から、ガイアが現れたのだった。

ガイアを倒すべき敵だと認識したブリッツブロッツは、ガイアの方を向いて構えるとガイアは逆に駆け出して肉薄する。

そのままの勢いで繰り出した蹴りは躲かれ、直後にお互いが繰り出した回し蹴りげ激突する。そしてガイアの拳は防がれ、そのままその腕で顔面を叩かれる。

そして今度は逆に駆け寄ってきたブリッツブロッツに回し蹴りを見舞うも、体勢を落としてくぐられるとそのまま顔面に拳を貫い、ガイアの体が地を転がる。

そして追撃にと放たれた蹴りを、ガイアはその足を両腕で抱え込みそのまま捻るようにして倒れ込み、ブリッツブロッツを地面に叩き付ける。

そしてお互い起き上がると、ガイアは自身に向かってきた拳を腕で逸らし逆に胸元を殴りつけてから投げ飛ばした。

「お願い遥、勝って…」

「遥くん…」

一進一退の攻防を、梨子たちはただ見守る事しかできない。

「ジユワ！ウアアアア…」

お互いの攻撃が交錯し、地を転がったガイアは前転して距離を取ると振り向きながらフォトンエッジの発射態勢をとる。

「遥くん、ダメー！」

それを見た花丸が、反射的にそう叫ぶ。その瞬間、ブリッツブロッツの胸が開き赤い結晶が顔を覗かせる。

「デュワツッ！」

しかしその声はガイアに届かず、そのまま放たれた光の刃は胸の結晶体に吸収され。威力を増幅させ打ち返される。

ガイアはその打ち返される一瞬の間にバリアを展開し、防御に入ることがその威力に段々押されていき最後はバリアを突き破られてしまった。

「遥…」

ガイアの体が宙を舞うのを見て、梨子がそう叫んだ。そして地に叩き付けられたガイアは、胸のライフゲージが点滅し始める。

「怪獣はライフゲージを狙ってるよ！」

そう果南が咄嗟にガイアに向けて叫ぶ、昨日博樹が教えていたのだ。相手は必ずウルトラマンの弱点であるライフゲージを狙って攻撃すると。

だがガイアは今のダメージで、膝を付いたまま立ち上がれない。そんなガイアへブリッツブロッツは勝負あつたと言わんばかりに悠然と歩み寄ると、ガイアの胸へ手を伸ばす―

その時だった、戦いの様子を見守っていたティグリスがブリッツブロッツへ体当たりしたのだ。自身も負ったダメージで辛いはずの身体に鞭を撃って、ガイアを護る為に。

そしてガイアを庇うように立ちはだかり、再び突撃するとブリッツ

ブロッツも同様にティグリスへ駆け寄る。

そしてすれ違いざまに、ティグリスの前脚での攻撃を回避しつつその首に手刀を叩き込む。そしてティグリスの首元から盛大に血が噴き出す。

「お前の努力は無駄にはしない！撃てエー！」

その掛け声とともに、ステインガーがガイアを守る為に砲撃を開始すると、似たような形の青い巨大装甲車バイソンも現れる。

かつてティグリスを死なせた柸も、地球の為に立ち上がった怪獣を見て怪獣は殲滅させねばならないと考えていた心境に、変化が起きたのだ。

集中砲火によってブリッツブロッツは態勢を崩され、反撃に出ることが出来ない。

「立って…立ち上がって…」

Aqoursのメンバーたちが祈るようにして見守る中、ガイアはふらつく身体をゆっくりと立ち上がらせる。地球に住むみんなの想いを、無駄にしない為に。

「デヤアッ！」

立ち上がると、ガイアはそのまま腕をL字に組んでクアンタムストリームを放つ。それは見ていた全員の予想通り、怪獣の胸の結晶体に吸収される。しかしガイアは技の照射をやめない。

「ガイアのエネルギーを溜めてる…？」

ただ跳ね返すのではなく、一度エネルギーを体内にため込み増幅させていることを見抜いたガイアは、わざと長時間照射する事で、吸収できる限界を超えさせようとしているのだ。

だが、相手もそれに気づくと苦し気に腕を動かし手の甲から光弾を放ってガイアを攻撃し、技を中断させる。

だがすでに遅く、ブリッツブロッツは溜めすぎたエネルギーによって動きが鈍ってしまった。体をスパークさせながら苦しむ怪獣に、ステインガーとバイソンはその胸部の結晶体へ残弾を全て叩き込む。

そしてブリッツブロッツの胸部が、その攻撃に耐えられずに破壊さ

れてしまった。

「遙くん、今だよ！撃つて！」

その皆の声を受け、ガイアは頷きスプリーム・ヴァージョンへと姿を変える。

「ウオオオオオオ！ダアツ!!」

そして残った力全てを込めて放ったフォトンストリームによって、ブリッツブロッツはその体を爆散させたのだった。

そしてガイアの勝利を見届けたティグリスは、立ったまま静かに息を引き取った。

「勇敢なる戦友に、敬礼！」

ティグリスの亡骸に、そう言つて柩は敬礼をするのだった。

「で、何の用？まさかイタリア行くななんて言うんじゃないよね？」

その日の夜、鞠莉と博樹は果南とダイヤに呼び出されていた。と言つても住んでいる淡島なので、大した距離でも何でもないのだが。

「一年前だったら、そう言つてたかもね」

鞠莉に聞かれて、果南はそう笑いながら答える。

「じゃあ相談せずに勝手に決めた事？」

「それも違いますわ」

今度はダイヤにそう否定される。

「話とこうと思つて」

「実は私も、東京の大学に推薦が決まりましたの」

果南がそう切り出すと、ダイヤが先にそう告げる。

「わたしは海外でダイビングのインストラクターの資格、ちゃんと取りたいんだ」

「じゃあ…」

続いて果南がそう告げると、鞠莉はそう言いかけると果南は頷いて続ける。

「卒業したら、3人バラバラ…」

「簡単には会えなくなりますがね…」

そう果南は寂しげに告げるとダイヤも同様に告げる。

「ヒロは？」

「そうだな…戦いが終わるまでは、考えないようにしてる」

「そっか…」

博樹はそう答えると、寂しげにそう一言だけ果南は返した。

「でもまさか、あれだけ喧嘩しといてそれぞれ勝手に決めてるなんてな」

そう博樹が意地悪く笑って見せる。

「お互い、相変わらずですわね」

そうダイヤも皮肉っぽく言うが、全員に笑みが零れる。

「そう言えば鞠莉、よく抜け出してたっけ？」

ホテルの中庭まで戻ってきたところで、果南がそう思う出したように呟く。

「それなら全員同罪デース」

「鞠莉さんが黙って出てくるからでしょ」

そう言い返す鞠莉に、ダイヤが苦笑しながら言い返す。

「だって言ったら絶対ノーって言われるからね」

鞠莉の親は、3人と遊ぶことを快く思っていなかった。箱入り娘だった鞠莉をどこでもここでも連れまわす事で変な影響を受けないか心配だったのだ。

もつとも今となつてはとんだお転婆娘になってしまったので、心配は的中してしまったのかもしれないが。その結果鞠莉の部屋はどんな上の階へと変わっていったのだが。

「今考えると、親御さんの苦労が解りますわ」

「だって3人と遊んじやダメなんていうんだもん」

「しまいには勘当だったか？」

そんな言葉どこで覚えてきたんだとオロオロする親の姿は今でも
思い出すと笑える。

「小学生が親に勘当を言い渡すなんて聞いた事ありませんわ」

「それを教えてくれたのダイヤだよ」

「そうでしたっけ？」

そう言い返されてダイヤはバツの悪そうな顔でほくろのあたりを
かく。

「子供だったよね」

「今も子供だろ」

「そうかも」

果南がそう言って笑うも、博樹にそう言われるがそう返すと博樹も
笑う。

「でも楽しかった、果南とダイヤとヒロ、3人と出会って色んなことを
教わった。世界が広い事、友達といると時間が経つのも忘れるほど楽
しい事、喧嘩の仕方に仲直りの仕方。皆が外に連れ出してくれなかつ
たら、私はまだ何一つ知らないままだった、あの部屋から出てこられ
なかった」

籠の中の鳥のようだった鞠莉に外の世界を教えたのはこの3人
だった。活発な果南に真面目だけどなんだかんだ付き合ってくれる
ダイヤ、文句は言っても色々知恵を貸してくれた博樹。この3人がい
たから、今の鞠莉が居るのだと。

「あの日から、4人いれば何でもできる。今の気持ちがあれば大丈夫
だって、そう思えた。Thank you」

離れ離れになる前に、鞠莉が伝えたかった言葉だった。あの日の天
体早見表を夜空にかざして、鞠莉がそれを告げると、ぽつぽつも雨が
降り始める。

「雨…ですわ」

「また？まったくダイヤは」

「まったく私？雨女は鞠莉さんでしょ？」

「why？果南だよ」

「訴えるよ、ヒロも雨男なんだから」

「はいはい」

誰のせいという醜い押し付け合いが始まりかけるが、博樹は面倒くさそうに受け流す。だが全員の表情は笑っていた。

「もしかしたら、神様が願いを叶えさせたくないのかもしれないかもしれませんわね」

「ずっと一緒に居られますように？」

「そんな心の狭い神様は勘当アース！」

その言葉に思わず笑い声が漏れる。

「これで終わりでいいの？あの時と同じで、流れ星にお祈りできなくていいの？」

「果南……」

「私は嫌だな、それに今は4人だけじゃない。探しに行こうよ、わたし達だけの星を」

その後、鞠莉の運転するワーゲンバスでAqoursの皆も誘ってドライブがてら星を観に行こうと提案し千歌の家の前に全員を集合させた。

もちろん皆には運転手が鞠莉だったことを驚かれたが。免許は取得しているし初心者マークも貼っているし法的には問題ない。

「最初は4人だけの予定だったけど、ヒロが『オレはまだ本調子じゃないし連れてくなら皆にしろ』ってさ」

そもそも9人乗りなので、折角ならAqoursで行け。バイクは持つてるが雨の中外に出たくない。と博樹が頑なに譲らなかつたのだが。

暫く車を走らせてたどり着いたのはとある峠の駐車場だった。標高は800mあり、天気が良いければ満点の星空が見渡せるのだが、天気はあいにくの雨。

「何をお祈りするつもりだった？」

「決まってるよ」

「ずっと一緒に居られますように？」

果南に聞かれた鞠莉はそう告げると、ばっちりそれを当てられる。

「これから離れ離れになるの？」

「だからだよ、だからお祈りしておくの」

ダイヤに意地悪く聞かれても、笑ってそう答える。

「いつか必ず、また一緒にになれるように…でも、無理なのかな？」

「なれるよ！」

そう思わず泣きそうな声になる鞠莉に、千歌はそう即答すると「それ貸して」と言って早見表を手に車を降りる。

「絶対一緒になれるって信じてる。この雨だって全部流れ落ちたら、必ず星が見えるよ。だから晴れるまで、もっと…もっと遊ぼう」

そう雨に撃たれながら早見表を天に掲げる千歌。思えばメンバーみんなで予定もなく集まって遊ぶ事なんて今まで無かった。だから、だからこそと。

すると皆車を降りて千歌の周りに、早見表を囲うように立って手を伸ばす。

「晴れなかったら、神様だって勘当デース！」

鞠莉がそんな事を言って、みんなを笑わせる。

すると雨空に、赤と青二筋の光が浮かび上がるとガイアとアグルが現れる。

「2人とも…」

そう呟く鞠莉の視線の先で、2人のウルトラマンは頷き合う。

「ハアアアア…：ダアツ！」

お互いまだダメージが残っているのか、ライフゲージが明滅したままだった。胸の前で腕を組みエネルギーを収束させると、腕を開くと同時に開放して雨雲を吹き飛ばすのだった。

「凄い…」

そう呟くメンバーたちの視線の先に、流れ星が夜空を駆ける。

三年生3人は、手を合わせてそれに祈る。

『ずっと一緒に居られますように』

それを見て、ウルトラマン二人は満足げに頷くと光となって消えていった。その光はさながら。赤と青の流れ星だった。

——見つかりますように。輝きが、私達だけの輝きが、見つかりますように

49話 未来の選択／忍び寄る影

「とても間に合わないじゃない！ルビィと遙はどうしたの？」

なんて黒いローブを身に纏って教室の床になにやら模様を描いている善子がそう喚く。

「ルビィちゃんも遙くんも人気があるから引つ張りだこずら。ここは人気のないものが頑張るぞらよ」

そう返したのは、その後ろで同様の作業を行っていた花丸だった。「どういう意味よー」と返されるが適当にはぐらかして答えなかった。

ルビィはお店で使う衣装を縫っていて、遙は遙で出し物に使う道具の設計だったりを頼まれて善子には手が貸せない状況だったのだ。

なぜこんな事態になったのかと言うと、二年生が閉校祭を行うことを提案したことが始まりだったらしい。

もちろん、三学期が始まり三年生も進路へ向けて大変な時期なのは承知の上だったが、このまま文化祭も統廃合の件でドタバタして行われなかったと言う事での提案だった。

そして理事長である鞠莉が快諾したことで、明日浦の星学院の閉校祭が行われることとなった。

「だからこのところももうちょつと長くとってさ？そうすればバランスよく見えるよ」

「そっか、さすが遙くん」

「どういたしまして」

そう言つてクラスメートに笑いかけると、すぐに視線を逸らして自分の作業に戻る。

アルケミースターズのメンバーをリパルサーリフトを制作し、正式メンバーに登録されて以来。クラスに隠してきた才能を知られてしまったわけだが、それ以来色々頼られることが増えた。

だが以前クラウドが化けた遙が指摘してきたような事態は起こら

なかった。なので特に三学期になってからはクラスの誰とでも関わるようになっていった。

「流石天才は違うな」

「茶化すなよ大和」

そう言つて遥は数少ない男子のクラスメイトである大和を睨む。

「悪いって、でも実際モテるだろ？ 顔良いし頭良いしでさ、どう？ 告白されちやったり」

「そ、そんなことないし、そんな相手もない！ 大体、そんな話ばつか振るからお前モテないんだろ？」

そう言われて、遥は顔を赤くしながら言い返す。「バカ声が大きい」と近くにいた橋本に止められて気が付くが、思わず声を荒げたせいでクスクスといった笑い声が聞こえる。

「お前のせいだからね」

そう言つて怒つて見せながら作業を再開しようとする、更に話しかけられる。

「で、実際どうなの？ A q o u r s の誰が好きなの？ 国木田さん？ それとも黒澤さん？」

「あ、あのね〜…」

「じゃあ津島さん？ それとも先輩？」

「だからそんなんじゃないの！」

そう言つて誤魔化そうとするが、返つてそれをネタに暫く弄られる羽目になった。

「桜内君、ちよつといい？」

「はい」

担任の先生に呼び出されたことで、その話はそこで打ち切りとなった。担任に連れられ、職員室に入る。

正直、呼び出されるようなことをした記憶は無い。しかしそれでも職員室は、他の教室とは違う空気が漂っていて苦手だ。

「そんな身構えないで、別に悪い事したから呼んだわけじゃないから。ちよつと伝えたいことがあつてね…」

そう告げる先生の顔が真剣なものになると、遥は無意識に息を吞

む。

「実は君に東京の学校に転校してこない？つて提案が来てるの」

「転校…ですか？」

そう聞き返すと、先生は表情を崩さないで頷く。

「かなり偏差値の高い学校だけど、桜内君ならそれでもトップクラスの成績を収められるだろうし。他にも飛び級で大学に来ないか？つて話もあるの」

「先生でも僕は…」

「解ってる、でも春には統廃合になるし。そのまま沼津の高校に行くかどうかするか、一度考えてみて」

「わかりました…」

そう渋々といった様子で、遥はそう返す。

「期限は今年度が終わるまででいいって言ってたから、一回考えてみて？それで桜内君が納得する答えを出してくれればいいから」

そう告げる担任の言葉を背に、遥は職員室を後にする。

「あつ遥くんずら」

「花丸ちゃんに善子ちゃんも、どうしたの？」

廊下に出たところで、善子と花丸を見かけると向こうが先に気が付いてこちらへ歩み寄ってくる。

「何やって怒られてたの？」

「そんなんじゃないよ、ただ…」

「ただ？」

そこで遥は今あったことを伝えるべきか悩んでしまった。言えば2人は優しいから行くべきだと言ってくれるだろう。でも遥には同じくらい引き留めて欲しいという気持ちもあった。

「うーん…秘密」

「教えなさいよー」

そう言つて善子が食いついてくるのを受け流す遥だったが、花丸は何も言わなかった。それが逆にばれたんじゃないかと思つて怖かったが、彼女はその話題には触れなかった。

その後、学校に紛れ込んだしいたけが折角二年生が立てたアーチを

倒してしまつて騒ぎになつてしまい。今度はそつちの復旧を手伝つたりで結局有耶無耶になつたが。

その作業のせいで予定と比べて大きく準備の進行が遅れてしまい、家の許可が下りた生徒は小原家を送るから残つていていいという許可が出たのもあつて気が付けば夜になつていた。

美渡からは、しいたけを迷い込ませたお詫びとして高海家名物らしいみかん鍋が差し入れとしていただいたので、みんなで囲んでいた。

遙は一方で先程先生に言われたことを考えたくて、一人だけ作業に戻つていた。

(決勝前に、こんなこと言える訳ないよ…)

「遙くん」

「んー？」

そう悩んでいると、花丸が遙を呼ぶために戻つてきた。

「先生に何言われたずらう？」

「今言わないとダメ？」

「だめずら、遙くん絶対大変なものは誰にも言わずに抱え込むから、パシクする前に教えるずら」

今なら他に誰も居ないからと付け足され、遙は「敵わないなあ…」と頬をかきながら誤魔化し方を考えるが、残念ながらこういう時に限つて頭が働かない。

「実はさ、東京から転校の誘いとかが来てるんだよね…」

「…そうなんだ」

「もちろん春に二年生になってからの話だよ？ 統廃合になるし、沼津の学校か誘いが来てる学校か考えてみてつて」

そう補足すると、花丸もこれは予想できなかったのか口を閉ざしてしまふ。

「花丸ちゃんがもし僕だったら、この誘いを受ける？」

「マルがもし遙くんの立場でも、すぐには答えを出せないずら。それに決勝が終わるまでは、考えないと思う」

「そうだよね、ありがとう。ごめんね、こんなこと言つて。決勝終わるまでは隠したかつたんだけどね」

そう言つて遙は表情を曇らせる。こんなことで彼女に余計な心配をかけたくなかった。

「ううん、聞いたのはこつちだから」

「でもありがとう、なんかすつきりした。決勝終わるまでは絶対考えない、その後の事はその後でいいよね。それにさ、今は明日の閉校祭を楽しもう」

「そうずらね」

そう笑い合う。こんな時間がずっと続けばいい―遙はこの時そう思っていた。それが叶わぬものと理解していても。

「もうこんな時間。もう準備も終わったしみんなの所に行こうか」

「そうずらね、早く戻らないと遙くん分無くなっちゃうよ」

そう言つてスマホの時間を見ると、時刻は20時30分を指していた。流石に余り遅くなれば皆も心配するだろう。そう言つて遙は花丸に教室を出るように促す。

「早かったわね」

みんなが鍋を食べている空き教室に戻ると善子にそう言われる。

「もう八時半過ぎてんだよ？早くなんて…」

そう言つて遙が時計に目を向けると、まだ19時ちようどを示していた。アーチの復旧が終わつてからまだ30分程度しか経つていない。

「何言つてんの？まだ七時だよ」

「でもさっきスマホの時計だと…」

そう言つてスマホの画面を確認すると、まだ19時丁度と表示されていた。

「なんで…？おかしいすら、確かにマルも…」

「2人とも疲れてるんだよ、2人の分ちやんと残してるから食べて食べて」

そう言つて千歌に勧められるままみかん鍋を頂いた訳だが、2人も納得のいかないといった様子だった。

翌日の閉校祭は生徒の保護者や卒業生等も訪れ、出店等の出し物はどこも盛況だった。

ただ遙は昨日の事が頭から離れなかった。間違いなく90分ほど時間が遡っていたのだ。きっと何か原因がある、そう思うと自然と肩に力が入る。

「遙くん、やっぱり昨日の事気にしてるはずら？」

他の生徒や来賓達が一人も居ない。人気のない裏庭で一人ぼーつと考えていると、花丸が声をかけてきた。

「へ？まあ…そうだね、あの時学校上空に変な積乱雲が出てたらしくてその中に時間を狂わせる何かがあったんじゃないかって思ってる」

「たまたまじゃないはずら？」

「不自然なエネルギー反応も検知されてる、一応警戒した方が良かったなって」

ただ、みんなの不安を煽るだけなのでこの事は言いふらさないでほしいと補足する。

「あれは地球に元々住んでいる怪獣、『エアロヴァイパー』よ」

「君は…確か夏に」

「シルビア。それが私の名前」

そんな時、夏に遙に異変を教えた少女。シルビアが現れる。彼女は相変わらず感情のない顔で語り掛ける。

「あの怪獣は時間を行き来できるの。そして自分の死を免れるために、邪魔物を排除するつもり。そしてここは、そのための戦場になるわ」

「どうしてそんな事を知っているんだい？」

「私はあなたより多くの物を知っている…そして、あなたより優れた力を」

遙の問いかけに、そう答えになっていない答えを語る。

「何を言ってるはずら…？」

「赤いお兄さん、お姉さんたちを本気で守りたいなら…破滅の運命を

跳ね除ける意志が必要。私はお姉さんたちが踊つてるところをもう一回見たいの、だからまだ負けないでね…」

そう言うのと踵を返してシルビアは去っていく。遙はそれを追おうとしたが、角を曲がった瞬間もうその姿を見ることは出来なかった。

そんな時。学校上空に、不自然な積乱雲が発生したのはそしてそれは時代に大きくなっていき、辺りを呑み込もうとした。

「花丸ちゃん！」

咄嗟に遙は花丸に駆け寄ると、庇うように覆いかぶさる。すると制服の内ポケットに忍ばせていたエスプレンダーから光が迸り2人を守る。

「一体何が…？花丸ちゃん大丈夫？」

「マルは大丈夫ずら。でもこれって…」

2人を守っていた光の膜が解けた時、辺りを見渡した2人は息を呑む。

「なっ…」

2人の周りは砂漠化しており、辺りにはファイターやエアリアルベースの残骸が。そして学校の校舎は崩れ去り、ワイバーンのような怪獣の亡骸が散乱していた。

「今の間に一体何が…」

そう呟く花丸の隣で、遙は今日は付けてきていた腕時計で時間を確認する。

「三時間経ってる…」

時計の時間は14時を指していた。さっき会話をしていた時の時間帯が概ね11時頃だったので、この一瞬の間に3時間経過したことになる。

「おかしいずら！今の一瞬でこんなの一瞬…」

「落ち着いて？…ここは多分あのエネルギー体の中なんだ…エアロヴァイパーを倒せば出られるはず…」

「もし、ダメだったら…?」

「元の世界で14時、XIGと怪獣の戦闘に巻き込まれて…内浦の人は全滅する」

そう告げると、花丸の顔が青ざめる。

「そうならない為に、やれる事をやろう」

そう言っつて遥は不安にさせまいと笑顔を作ると、周囲を2人で散策に行く。

すると急に周りの景色が変化する。すると遥は迷わず時間を確認する。

「今度は13時…」

すると周囲には生徒たちが居ることに気が付いた。

「これは攻撃される前の未来ずら…?」

「多分…」

そう聞いてくる花丸に、遥はそう答えるが2人は元々いた筈の時間からワープしてここに来ているからなのか、誰も2人に気が付かない。

すると今度は空中に歪ができ、その中から怪獣が現れて学校を攻撃する。

「キャッ！」

「危ない！」

咄嗟に花丸を庇おうとするが間に合わない。だがそこで再び空間が歪み違う場所に飛ばされる。

そしてそこで見えたものは――

――浦の星学院の生徒は、戦闘に巻き込まれて全員…死亡しました…。

涙ながらに告げるXIG関係者と思われる女性の後ろには、沢山の遺体を収納する袋があった。

そして遥はそのうちの一つに歩み寄ると、そつとジッパーを降ろす。その中から現れたのは、眠るように安らかな顔で目を瞑る花丸の顔があった。

「ッ！」

「いや…」

不覚にも背後に花丸が付いてきていた事に気が付かなかった結果、花丸までその中を見てしまった。

「花丸ちゃんッ！」

顔を真っ青にして走り去る彼女を、遥はすぐ追いかける。すぐに追いついて彼女の手を掴むが、パニックを起こしている彼女は掴まれた腕を乱雑に振り回す。

「嫌っ！離して！離すずらー！」

「嫌だ！絶対離さない！」

「こんなにあんまりずらー！こんな…皆死んじゃうなんて！」

泣きながら喚く彼女を、遥は抱き込むと訴えかけ続ける。

「死なない！誰も死なないから！」

あんなものを見て、まともな精神状態でいられる人なんている筈がない。それも理解している上で、遥は落ち着かせようと必死に叫ぶ。

「花丸ちゃんは絶対に…絶対に僕が守るから!!」

「でも…これが未来なら、遥くんだつて…」

「未来は今諦めなきや絶対変えられる！」

そう少し落ち着いてきた花丸に、そう言つて遥は肩を掴むと体を離し笑つて見せる。

「だから僕を信じて…ね？」

「…うん」

やっと落ち着いた花丸がそう短く答える。すると再びそこで景色が変わると、最初と同じ荒地と化した殺風景な景色が広がる。そして怪獣が今度はこちらへ向かつて飛び掛かってきた。

「これ持つてて」

そう言つて遥は腕時計を手渡してから花丸の前に立ち、光を開放する。その光で怪獣の巨体を吹き飛ばすと空中にガイアが飛翔する。

そしてガイアはすぐさま空中の相手に目掛けてクアンタムストリームを放つが、ワイバーンのような姿をした怪獣―エアロヴァイパー―は頭部の触角を光らせるとその場から消える。

周囲を警戒するガイアの真上に現れると、一直線にガイア目掛けて

口から火球を吐きだした。

「グアアツ…」

肩にそれを食らってしまったガイアはバランスを崩し、そのまま地面に落下してしまう。そしてよろよろと立ち上がったガイアの真後ろに、怪獣は静かに着地する。

「後ろずらー！」

花丸のその声に気が付いたガイアは、そのまま前に飛んで怪獣の蹴りを回避する。そして起き上がりざまにガイアスラッシュを放つが、一瞬のため動作を見て怪獣は再び触角を赤く光らせその場から消える。

消えた怪獣をガイアは周囲を見渡して探す、真横に現れ飛来する怪獣の体当たりを躲せずその巨体が宙を舞う。

「やっぱり…未来は変えられないずら…？」

時間移動でガイアの攻撃を躲しながら攻撃する怪獣に圧倒されるガイアを見て、思わずそう呟いてしまう。

—諦めなきや絶対に変えられる！

そうだ、まだ遥は諦めていない。守ると約束してくれた彼の為にも、今自分が諦めてはいけない。そう思った花丸は、何か手は無いかと怪獣の様子を観察する。

その視線の先では、ガイアの攻撃を見てから時間移動で回避して一方的に攻撃を当て続ける怪獣の姿があった。更にガイアは受けたダメージによってライフゲージの明滅が始まっていた。

「あの触覚が時間を操ってるずら…？」

怪獣が時間移動を起こす時、必ず頭の触覚が赤く発光していた。ならそこを破壊できれば。そう思った花丸は駆け出した。

(このままじゃ…どうする…?)

ガイアは…いや遥はこの状況を脱出する方法を考えていた。こちらの攻撃は時間移動で回避されてしまう。何とかしてそれを封じられないかと。

『頭の触角が弱点ずら！それを狙って!!』

崩れ落ちた校舎から、閉校祭の催しの為に用意されていたマイクと

スピーカーが奇跡的に生きていたので、花丸はそれを使って声を響かせる。

そして花丸に気が付いた怪獣は、羽交い絞めにしていて抵抗の弱まったガイアを放り捨てると背中を向けて花丸へと向かって行く。

そして花丸目掛けて火球を吐きだそうとする。

(させないッ！)

ガイアは咄嗟に怪獣の頭部目掛けてガイアスラッシュを連射する。

死角からの攻撃に反応できなかった怪獣は、触角を破壊されて苦しみ始める。

「ハアッ！ウオアアア……ダアッ！」

その隙に立ち上がると、ガイアはスプリーム・ヴァージョンへとヴァージョンアップする。

こちらを振り向いた怪獣へかけよると、ヤクザキックを腹に叩き込み仰け反った相手の足を蹴り飛ばす。そして頭の下がった所を掴み、地面目掛けて投げ飛ばす。

そして立ち上がった相手を抱え上げると頭から地面に叩き付ける。そして頭を掴んで無理やり立たせると喉元に膝蹴りを。

そして一度距離が離れたところで反撃とばかりに翼で殴りつけてくる怪獣の攻撃は前転で回避し、起き上がりざまに回し蹴りをお見舞いする。

その威力によって後方に倒れ込んだ怪獣の尻尾を掴むと、学校とは反対の方向に投げ飛ばす。すると荒地地となったこの場所に乱立していた巨大な岩を破壊しながら怪獣の身体が飛んでいく。

そして飛び上がったガイアは、両腕を腹の前でクロスすると大きく腕を回して胸の前で重ねる。

「デュワー！ハアアア……デヤアッ！」

そして放たれた赤と青の光のブーメランーシャイニングブレードーによって怪獣の身体を引き裂いたのだった。

「やったー！」

それを見て花丸も無意識にガッツポーズをするが、ガイアは急いで彼女の前に降り立つと手を差し伸べる。

『早く掴まって！この空間が消滅する前に脱出する!!』

この空間はエアロヴァイパーの巣だったのだ。そして主を失ったことで崩壊が始まる。花丸を手に乗せると、ガイアは猛スピードで出口目指して飛び立った。

花丸を守る為に金色の光のバリアで彼女を覆うと、どんどん速度を上げていくガイアだった。

しかしその背後を、漆黒を纏った何かが迫っていた――

50話 浦の星／死神の囁き

「グオアツ…」

異空間脱出を急ぐガイアの背に、漆黒を纏った鞭が打ち付けられガイアは苦痛の声を上げ、更にその攻撃が当たる度にそこから光の粒子が血のように吹き出す。

「遥くんっ！」

そんな様子をガイアが展開しているバリアの中で見ているしかできない花丸は思わず彼の名を呼ぶ。

ガイアの背が火花を上げるたびに苦痛に呻く。その原因の正体を見ようと花丸は後方を見ると、後方からガイアを追い越す勢いで真っ黒い光の塊がこちらへ攻撃を仕掛けてくる。

「遥くん、何かが追いかけてきてるぞら！」

後ろを確認する余裕のないであろうガイアへそう花丸は叫ぶと、ガイアは一瞬だけ花丸に視線を落とすと頷き。最後の力を振り絞る。

だが軌道を不規則にしても攻撃を回避し続けることが出来ない。明滅していたライフゲージはどんどんその速度を速めていく。

「遥くん、もういいぞら！マルを見捨てて反撃して！」

花丸はそう遥に訴える。今花丸を抱えて飛んでいるから反撃できないのだと、それなら自分を放り捨てて欲しいと告げる。

「嫌だ！約束したよね？僕が絶対花丸ちゃんを守るって、だから絶対そんなことしない。一緒に帰るんだ！」

そう遥は逆に言い返した。しかし攻撃は止まらない、ガイアはその攻撃を耐え続けるがいつ限界がきて姿を維持できなくなってもおかしくなかった。

その時、やっと行き先に光が見えた。恐らくそこが出口なのだろう。するとラストスパートと言わんばかりにガイアはその姿を光の球体に変え、更に加速した。

そこでようやく異空間から脱出することに成功するが、学校裏に光のまま真っ直ぐ着地するとその光が解け遥が花丸を抱えて膝を付いている姿を確認できる。

「はあ…はあ…花丸ちゃん大丈夫？」

「マ、マルは大丈夫ずら…」

「そっか、良かった…そうだ、怪獣を倒した時間を教えて…？」

そう言われて、花丸はガイアがエアロヴァイパーを撃破した時刻を確認してもらおう意図があつて腕時計を渡されていた事を察して、確認しておいたことを思い出す。

「えっと…確か12時だったずら」

「ありがとう、今が11時だから一時間あるね」

「じゃあまださっきの怪獣は生きてるずら？」

「かもね…でも12時になれば死ぬはずだよ」

あの異空間に飛ばされてから、全く時間が経過していなかった。周りも閉校祭で賑わう人々の声が聞こえるので、あの空間で見たものは、一つも現実にはならなかったらしい。しかしその予想はあくまで推測でしかない、でも遥には必ずそうなるという確信があつた。

「でもさっきの黒い塊はいつたい…」

「多分、破滅招来体だと思う。あの空間に閉じ込めてしまおうっていう意図があつたんだと思う」

さっきの攻撃は脱出することを妨害するために行われたもので、エアロヴァイパーは関係ないと推測した。

「ごめん花丸ちゃん、12時になったら起こして。なんか…疲れちゃ…た…」

そこまで言って遥は花丸によりかかるようにして崩れ落ちると、すうすうと寝息を立てはじめた。

「ありがとう」

先程までと逆転して、花丸が遥を膝枕している状態になってしまったが。花丸はそう小さく呟くと遥の頭を軽くなでる。

「あつ…こんなところにいた。手伝ってくれるって言ってたじゃないのずらま…る？」

そこで、自身の出し物を手伝う約束をしてくれていた花丸を探して善子がやってきたのだが。今の花丸と遥の状態に気が付くと言葉を失ってしまう。

「あつ善子ちゃん。ごめん一時間待つてほしいずら。遙くん疲れて寝ちゃったから…」

「だっただだからって何で膝枕なの!? アンタたちそんな仲だったの!?!」

落ち着いた様子で告げる花丸とは対照的に、善子は顔を真っ赤にしてそう捲し立てる。

「遙くん…マルを庇って攻撃されちゃって…それで…だからマルがちゃんと見てあげようって」

そう花丸は少し表情を曇らせてそう告げる。それを見て善子も遙がガイアの力を使ったことを察して、なんとか落ち着きを取り戻す。

「何があつたの…?」

「内緒ずら」

「何でよ?」

「だって…」

そこで今度は花丸の顔が少し赤くなる。今思い返すと取り乱して恥ずかしい所を遙に見られてしまったし、あの時遙に言われた言葉も人に教えるのは恥ずかしい。

—花丸ちゃんは絶対に…絶対に僕が守るから!!

あの時の遙の真剣な表情が思い浮かんでしまい、花丸は視線を逸らす。

「ここに居たら異空間に飛ばされちゃって…そこで怪獣と戦って、その時に遙くんがマルを庇ってくれて…」

「そう…そんな事があつたのね…」

何とか要点だけ話してみると、善子は装納得してそれ以上は聞こうとしなかった。

「わかったわ、クラスの方には私が誤魔化しとくから。絶対後で来なさいよね」

そう言つて善子はその場を離れる。彼女なりに気を使ってくれたのだろう。茶化す気にもなれなかったので、そのまま彼女に「ありがとう」と言つて見送つたのだがいつもの墮天使は出てこなかった。

そしてまた眠っている遙に視線を落とす。こうして寝ている顔を

見ると、姉に似て整った顔をしていて女の子みたいだなあと思ってしまふ。言うとな人は嫌がるだろうが。

でもそんな彼はガイアとして破滅招来体と戦って自分達もいつも守ってくれていた。

そんな彼にあんなセリフを言われたばかりなのだ。どうしても気になってしまふ。

(何で何で?あの2人いつからそんな関係に...?)

教室に戻る途中、善子の脳裏には先程の光景がこびりついて離れなかった。そして何でそれが気になって仕方がないのがどうしても解らない。

「あつ善子ちゃん、花丸ちゃん見なかった?」

そんな事を考えていると、廊下でルビィと遭遇する。善子はさっきの事を話すか一瞬迷うが、すぐ誤魔化すことにした。

「なんかちよつと遙が調子悪いみたいだから保健室に連れてくつてさ」

「そうなんだ…遙くん準備の間皆に引つ張りだこだったし疲れが溜まっていたのかな…?」

そう言つて遙を心配してか表情を曇らせるルビィに、少し罪悪感を感じながら善子は続ける。

「だから私達でクラスの仕事、代わりにやっただけでしょ?」

「うん、そうだね」

そう言つて2人は教室へと向かつて行く。

それから暫くして、もうすぐ12時というタイミングで遙は勝手に目が覚める。

「ん…花丸ちゃん、今なん…じ…え?」

「あつ目が覚めたぞら?」

段々意識がはつきりしてくると、今自分が何を枕にして眠っていた

か気が付く。

「わわっ……ごっごめん！すぐどこから！」

そう言つて顔を赤くして飛び起きた遙は、顔を真っ赤にして慌てて花丸から離れる。

「嫌じゃなかつてけど……」

「へ？」

「だから……マルが好きでそうしてたから……」

花丸のその言動に一回気の抜けた声の出す遙だったが、そこで段々冷静になつてくると自分の花丸への行動の数々が恥ずかしくなる。

「そ、そっか……ところで今何時？」

「えっと……もうあと十秒くらいで12時ずら」

そう言つて花丸が遙の腕時計を差し出す。そしてその時計が12時を指す瞬間を息を呑んで見守る。そして12時を示す直前、空にエアロヴァイパーが現れた。

「そんな……」

「いや、大丈夫！」

怯える花丸に、遙はそう宣言する。そして12時丁度になつた瞬間。エアロヴァイパーの姿は完全に消滅した。

「これで一件落着……かな？」

「そうずらね。ねえ遙くん」

「何？」

これで安心といった様子の遙に、花丸が何かを言いかけたので続きを聞くべく遙は花丸をまつすぐ見る。

「ありがとね」

「うん、どういたしまして。こちらこそありがとう、花丸ちゃんが活路を見出してくれたから僕も勝てたわけだし」

「そんなことない、遙くんが未来は変えられるつて言つてくれたから」

「あー……あの時もごめんね？いきなり抱き着いたりして……」

「それもお礼を言うのはこっちずら、あの時はどうしたらいいか解んなくなつて……でも遙くんのお陰で安心できたずら」

「ならよかつたよ」

完全に緊張の解けた2人はそうやって暫く談笑していた。

「そうだ、善子ちゃんの手伝ってあげるとて約束してんだった…」

「そろそろ行かないと多分寂しくて泣いてるすら」

「ははっそれは無いでしょ?」

「まあまあ、急ぐすらよ」

そう言っつて遥の背を思わず軽く叩く。

「いつ…急ごっか」

それに一瞬顔をしかめる遥だったが、その顔は花丸からは見えなかった。

さつき背中に受けた攻撃は、普段と違って光の力で完全に消してしまふことが出来ず。遥の背に火傷跡のような痣となって残っていた。

結局善子は花丸の言う通り泣きそうだった。もつとも、理由は占いをしていたのだが、全く人が来なかったからなのだが…。

「お兄さん、ちゃんと守ってみせてくれたわね…でもこれで邪魔だった怪獣は消えた」

「そうですね、あなたが焚き付けてくれたおかげでモキアンも楽に用意することが出来ました。欲を言えばそのままガイアを倒してくれば尚良かったですが」

暗闇の中で、少女は落ち着いた声で話す男性と言葉を交わしていた。

「それは私のやることじゃないわ。ただあなたの望み通り青いお兄さんとの間に邪魔しに来れないようにしただけ…あとはあなたの仕事よ」

嫌味っぽく語る男性に、少女は冷たい視線を送り付けそう告げる。「そうでしたね…では私は私の役割に取り掛かりましょう…『彼女』の為にね」

「精々頑張って」

そう冷たく返すと、男性の気配は遠ざかっていく。そしてシルビア

はため息をつくと一人呟く。

「一体いつまで、『輝いて』いられるか：楽しみね」

そう告げると少女の身体は闇に包まれて消える。

果南は曜と海をモチーフにしたアクアリウム風の展示で、園児等に人気を集めていた。

「みんなー浦の星アクアリウムにようこそー」

「ここは広くて深いー内浦の海」

この前アルバイトをした水族館のマスコットの着ぐるみを曜のツテで借りたのだが、皆夢中になってくれたようで良かったと果南は思った。

そして観に来ていた人たちの奥に、博樹が居るのに気が付く。誘った時は「気が向いたらな」なんてそっけなく返されたが、やっぱり来てくれたんだ。と少し嬉しくなる。

「やっぱり来てくれたんだ？」

「無くなる前の最後の学祭だもんな」

「学祭じゃなくて、閉校祭！」

一旦休憩になった時に、果南は博樹に声をかけるが、すぐに訂正を入れる。

「あのグレーの髪の子と2人でやってるのか？」

「そうだよ、曜と2人でね。どうだった？」

「まあまあだな」

「まあヒロから見ればそうだよね…」

そう言って苦笑いを浮かべる果南だったが、正直褒めてくれてもいいのには思わずにはいられなかった。

「本当になくなるんだな…」

「うん、三月で本当に終わり」

そう感慨深そうに告げる博樹に、果南もそう同調する。これが本当に最後のこの学校でのイベントなのだ。だから近隣の住民も例年の学園祭と比べてもかなり多くの人で賑わっていた。

そんな学校の様子を果南と学内を歩きながら眺めていると、やはり生徒だった時の同級生に出くわす事もあるのだが、ほとんど口を聞いたことが無かったので、向こうも何か言いたげでも話しかけてくる人はいなかった。

「懐かしいな、何も変わってない」

「そうかな？私はずっと通ってるから解らないや」

「ああ、変わらない」

そう言って言葉を交わしていると、ダイヤがルビイと2人でラブライブに関するクイズの出し物をしていたり、鞠莉は中庭でシャイ煮を売っているのを見かけた。博樹は初めてそれを見たわけだが、店には近寄らないと心に決めるのだった。

「じゃあ私そろそろ時間だから戻るね」

「わかった、オレはもう暫く見て回ってる」

そう言って果南と別れた博樹は、校内を見学して回ろうとした。

「湊さん。松浦果南さんの事が、気になるみたいですね」

「誰だ？」

廊下の角で、唐突にスーツに身を包んだ男性に声をかけられ思わず博樹は身構える。

「そんなに構えないでください、私はあなたに用がある」

「オレに用……？この学校の職員じゃないな……一体何の用なんだ？」

「私は主の使い。主があなたに人類を滅ぼして、この星を誕生したての希望の星に戻してほしいと」

「断る！お前が何者かは知らないが、オレはもうまやかされたりしない」

「そう博樹は睨みつけるようにして告げる。

「そうですか……残念です。また明日お伺いさせていただきますので、いいお返事が貰える事を期待していますよ」

「何度聞こうとオレの答えは変わらない」

「そうですね、本当にそうだといいですね。フッフ：フハハハハ」

そう笑いながら男性は紫に光ると、その場から消滅した。

「一体…何が起きようとしているんだ…」

博樹はその後、嫌な予感がして学内を走り回るが、もう先の男性を見つけることは出来なかった。

遙や博樹、そして花丸以外の人々は迫っていた脅威に気づくことなく。閉校祭は盛況のまま、夕日に包まれたグラウンドでキャンプファイヤーと全員で囲い、終了となった。

「これで浦の星学院、閉校祭を終わります。今日集まった人を見て、私は思いました。この学校がどれだけ愛されていたか。この町にとって、皆にとつて、大切なものだったか」

終了のあいさつを、理事長でもある鞠莉が執り行うが、その声は段々と小さく、震えていった。

「だからこの閉校祭は、わたしにとって何より幸せで…わたしにとって…何よりも暖かくて……」

「鞠莉さん…」

その様子を、すぐ後ろに立っていたダイヤはすぐに気が付いた。でもかける言葉がすぐに思いつかなかった。

「ごめんなさい…ごめんなさい…もう少し頑張れば…もう少し……」

「鞠莉…」

学校を存続させることが出来なかったことに責任を感じて、その頭を下げる鞠莉を見るのは辛かった。でもそれは自分達も同じ。

この学校の名前を残すためにラブライブで優勝する。そう決意を新たに進んできたが、それでも閉校という結果を覆せなかった事に責任を感じずにはいられなかった。皆そうだったから、何と声をかけれ

ばいいかわからなかったのだ。

「アークーアー・アークーアー！」

一人の生徒から始まったAqoursコールは、やがて全生徒。そして一般の参加者にも伝わっていく。

誰も鞠莉の事も、Aqoursの事も責めたりしない。この学校の為に立ち上がって、精一杯輝こうとしてくれている彼女達の事を感じ謝しているのだ。

それを受けて、ダイヤはそっと鞠莉の背を押す。

「みんな、ありがとう！」

それを受けて鞠莉は笑顔でそう告げる。きっと皆が見たかったのは笑顔だった。

「じゃあラストに、みんなで一緒に歌おう！最高に明るく！最高に楽しく！最っ高に声を出して!!」

――勇気はどこに？君の胸に！

51話 天空の遙／空中要塞墮つ

翌日、遙は背中への傷の痛みで目が覚める。

「いてて…やっぱ結構派手にやられたな…」

変身後にも目に見えてダメージが残ったのはいつ以来だろうか？アグルと戦った時だろうか？

それに昨日の背後から攻撃してきた黒い物体は一体何者だったのだろうか？花丸からも黒い何かとしか聞けず、ハッキリとした形の特徴は視認できなかったようだし遙は遙で振り返る余裕は無かった。

「あれはきつと…破滅招来体の仕業。僕が花丸ちゃんを守るのを邪魔するため？いや、まだ何かあるはず…」

そう考えてもすぐに答えを得ることなどできない。しかし、それでも今の遙には結論がほしかった。

あの時、本当は脱出した時にはもうガイアの力を保つことができないくらいには消耗しきっていた。でも空間を出てすぐ光が消えてしまえばふたりとも地面に叩き付けられて結局助からなかっただろう。

あの時は必死だったし、疲れすぎて寝てしまったからそこまで気が回らなかったがよく持ったものだと思う。

スプレnderに目を落とすと、まだその中の光は弱々しくとてもじゃないがまだ戦闘は行えないだろう。

時計に目を落とすと、それでももう時刻は8時を回っていた。今日は決勝が近いので練習は行いが、昨日の事もあって開始時間には遅めに設定してあるのでまだ余裕があり、問題は無いのだが。あまり疲れが取れた気はしない。

「昨日も一回寝ちゃったし、かなり疲れてるのかな…？」

そう口に出すと、脳裏に昨日の事がよぎって顔が赤らんでしまう。本人は好きで膝枕してたからいいなんて言っていたが、誰かに見られてたんじやないか？とかい色々考えてしまう。

「いや、もう気にするな…忘れよう…うん、それがいい」

そう言つてその記憶を奥に押しやると部屋から出る。

「あつ遙、おはよう」

「おはよう姉さん」

「大丈夫？顔赤いけど風邪ひいた？」

そう言つて梨子は遥のおでこに触れると「熱は無いみたいね」と言つてすぐ離れる。

「うん、風邪はひいてないと思う…なんか疲れちやつたみたいでさ？」

「そういうえば遥、クラスでの催しだったりいろいろんなどに手伝いに行つてたんだっけ？」

「まあ…ね？」

「みんなと打ち解けてるみたいで安心したわ、ご飯できてるから食べて来たら？」

「そんな心配されなきゃいけないこと？まあいいや、ご飯食べてくるよ」

「私は先に学校に行つてるわね」

そう言つて洗面台前で遭遇した梨子と別れると「おはよう」と母親に告げてからリビングに入っていくのだった。

平和などこにでもある家庭の光景がそこにはあった。

「遅くなりました」

時間的にはまだ余裕があったが、自分が最後だろうと思つて部室にそう言いながら入つていく。

「おはようございます」

「ダイヤさんおはようございます」

「果南さんを見ませんでしたか？いつもは早いのに今日はまだ来てないの…」

「いえ、見てないですね…」

部室に入るとダイヤから、果南だけがまだ来ていないことを告げられる。

「ヒロを連れてくるって言つてたし、ヒロがごねてるんじゃないの？」

そう鞠莉が口を挟むが、そこで湊博樹が入ってくる。

「だから何で部外者のオレを呼び出すんだ」

そう言っに入ってくる博樹に「果南知らない？」と鞠莉が問いかける。

「アイツまだきてないのか？」

「ええ…いつもなら一番早いのですが…」

そうダイヤに告げられて、博樹は深刻そうな顔を見せる。

—松浦果南さんのことが、気になるみたいですね

「まさか…」

そう呟くと博樹はすぐに外へと駆け出していく。

「博樹さん!？」

その様子にただならぬものを感じた遙が後を追いかけると、博樹は校門前に停めていた自身のバイクに飛び乗るとヘルメットをかぶる。

「遙！お前はここでみんなと居ろ！オレが果南を探しに行く、いいか？絶対離れるな」

そういうとエンジンをかけ、スロットルを全開にして去っていく。

(果南、無事でいてくれ…)

今さつき来た道を駆け戻り、水上バイクに乗り換えると淡島へと戻っていく。

「果南、居るのか!？」

果南の家に駆けこんでいく博樹だったが、家族は今ダイビング客と海に出ているのか誰もいなかった。

—フフフフフ…

昨日話しかけてきた男性の不気味な笑い声が響く。

そしてその声は幼い時に来て以来だったが、間取りが変わっていないければ果南の部屋から聞こえてきた。

ドアノブに触れようとする手を一瞬躊躇ったが、すぐに開け放ち彼女が部屋に入っていく。

「これは…」

開け放った扉の向こうには、一目で彼女の部屋ではないと解る異様な空間が広がっていた。頭上には星空とその中で大きく輝く惑星があり、開け放った扉はひとりでに閉まると消滅してしまう。

そして視線の先の岩肌には、果南が力なく横たわっていた。

「果南！」

博樹はすぐさま彼女に駆け寄り、何度も名を呼びながら体を揺さぶるが反応がない。

「……心配なく、ただ気を失っているだけです」

「お前は……？」

突如頭上に右腕の先が手ではなく鋭利に尖っており、左手も異様に指が太く長い上に指先が尖っている。どこか菩薩を連想させる格好をした異形の生命体があった。

左右非対称で血管が全身浮き出ているかのような姿には、嫌悪感を感じずにはいられない。

「私は主の遣い……」

「主の遣いだとか……昨日の奴か」

「そう、そしてここは……モキアンの体内！」

そう言っつて両腕を広げる異形だったが、まさかワームホールのようなもので怪獣の体内に呼び寄せられて閉まったことに博樹は驚愕する。

「そしてその石は、主から貴方へのプレゼントです」

「何？」

プレゼントだと言っつて異形が指さしたのは、今現在博樹が立っている岩肌だった。これは怪獣の体内に存在している特殊な物体だったのだ。

「博樹さん…どうしたのでしょうか？」

「ヒロは果南が大好きだからね、大げさなんじゃない？」

部室に戻ると、ダイヤと鞠莉がそのような会話をしていた。無駄な心配であってほしいが、遥も胸騒ぎがして仕方がない。

「とりあえず皆を部室に…嫌な予感がします」

そう遥が告げると、残りの全員が部室に入ってくる。

「みんな空見て！なんかでつかいのが居る」

そう言って部室に飛び込んできた千歌に言われるままに外に出ると、巨大な物体がゆっくりと降下していくのが見える。そして目にギリギリ見える程度の黒い影がその周りを飛んでいる。恐らくファイターだろう。

「なんだあれ？…」

「大きい…」

思い思いの感想が口から出るが、全てが繋がっている気がして遥は背筋に冷たいものが走った。

ひとまず部室まで戻って、アルケミースターズのネットからXIGとコンタクトを取ろうと試みる。

「あれが何なのか、XIGは掴んでいる筈…そのデータが見れば…」

そう言って遥はキーボードを操作していく。だがやはり嚴重にプロテクトがかかっているが、遥は多少無茶をすれば抜けれる自信があった。

「未来ずら…」

見たこともない記号が羅列する画面を、遥はキーボードを操作していく。そして空に浮かんでいる物体の物と思われるデータを閲覧することに成功した。そこには全長300mは超えると想定される巨大な魚のような怪獣が映っていた。

「モノポール？」

「何それ？」

中身をスキヤンした結果であろう画面をみて首を傾げる遥に、そう

千歌が聞いてくる。

「磁気単極子…磁石でいうS極かN極どっちか片っぱの極しか持たない、理論上の物質です」

「理論上ってでも…」

現にあるではないかと善子が指摘してくるが、遥はそれにも答える。

「地球上で発見されてないだけで、宇宙の始まり。ビックバンの時に生成されたって言われてる」

「そ、それが落ちてきたらどうなっちゃうの…?」

「強力なN極が発生することで、地球内部のマントルが大移動して…世界は滅びる…!」

そう静かに告げる遥によって、場の空気が重くなる。

「接触までどのくらい猶予があるの?」

「あと30分もしたら地表に影響が出ます、防ぐためには強力なS極で引き上げるしかない…」

「そんな方法あるの?」

そう鞠莉に聞かれた遥は、少しだけ考えるとXIGを連絡を取ろうとする。

「エリアルベースのリパルサーリフトなら、一時的に磁気単極子Sに限りなく近づけることができます」

「何故だ?何故こんなものを使う必要がある?」

「人類を滅亡させ、地球を産まれたばかりの希望の星に戻すため…浄化する!」

「浄化だと…?」

博樹は異形へとそう叫ぶが、異形は地球を浄化するためだと告げ

る。

「何故人間を嫌う？人間がお前たちに何をした!？」

「我々は…滅ぼされたくない…」

「人間が、お前たちを滅ぼすというのか…」

恐らく人類が皆思っていた筈、なぜ地球がここまで狙われるのか？その疑問を口にした博樹に異形は怯えるような仕草を見せてそう告げる。

「このままでは、全宇宙が滅んでしまう」

そう告げる異形は視線を逸らす。そして同じ方を見ると、そこにはモキアンに対して9機のファイターとエリアルベースが攻撃態勢をとっているのが見える。

そして全火力をもって、モキアンへと攻撃を開始するが目に見えるダメージを与えられているようには見えない。

「主はいつも、貴方達を見ています。お見せしましょう…宇宙の真実の、ほんの一部を！」

そう言つて異形が手をかざすと、周囲の星々が一点へ集まっていき光の中から横たわる女性の姿が現れる。

「ここは一体…？」

そこで果南はようやく目を覚めますが、どうして自分がこんな場所にいるのか解らないといった様子だった。だが博樹はそんな果南の様子に気づく余裕は無かった。

「彼女は、悪性のウイルスに侵されています…主は、彼女の痛みを取り除こうと様々な薬を投与した」

そうわざとらしい演技で異形は語つて行く。

「あなた方が、『破滅招来体』と呼んでいるのがそれです」

「人間が…宇宙を蝕むウイルスだというのか…？」

そう言い返す博樹を余所に、異形は外の様子を見ている。

「随分しぶといウイルスだと思いませんか？どんなに薬を投与しても…死に物狂いで向かってくる」

そう独り言のように告げる異形の目が光ると、モキアンは反撃に出る。あつという間にエリアルベースは半壊し、大ダメージを受ける。

「そんな…」

「その様子を黙って見ていた果南が思わずそう声を上げるが、異形は無視して博樹へと更に言葉を投げかける。

「主は、貴方を必要としています」

「破滅招来体が…オレを？」

「はい、もし貴方が彼女の痛みを取り除いてくれるのなら。貴方に、このモキアンを差し上げましょう。地球の運命は、貴方の思うままに…」

かつてクリシスの仕組まれた予測に踊らされ、人類を滅ぼさんとした博樹に異形はそう告げる。博樹が人類を滅ぼすなら、地球を好きにしたいと。

「人類は今までの戦いで十分苦しんだ…これ以上の戦いは無意味だ！」

「彼女の痛みはそれ以上だ！お前たちの苦しみよりも！ずっとずっと長く、苦しい…」

博樹の答えは、否定だった。だがしかし、異形はそう言い返してくる。これ以上の対話は不可能だろう。

『意見をありがとう、エアリアルベースで怪獣を安全圏内まで引き上げて艦諸共破壊することにした』

「いえ…僕にできるのは、これくらいしかない…」

通話で、石室コマンダー自ら遙の意見を聞いて対応をしてくれた。だが遙も悔しそうに唇を噛むことしかできなかつた。

『万一の為に、街にも避難勧告を出すよう通達した。キミ達も避難するんだ』

「わかりました…どうかご無事で」

そう告げると、通話を切る。その時に見えたエアリアルベースの中は以前訪れた時と違ってボロボロになってしまっていた。

「遙くん…私達も避難しようっ…」

「いや…僕は戦うよ」

そう言つてエスプレンダーをとり出す、しかし光はまだ回復しきつてはいない。

「無理すら…遙くん、昨日の戦いでケガしてるよね？まだ治ってないんじゃないの？」

「それは…」

「さっきの方法で怪獣は倒せるんでしょ？なら遙くんが無理しなくて…」

そう花丸に諭すように告げられ、遙は視線を泳がせる。

「それにヒロと果南も心配だし、合流するまでは一旦は逃げるべきよ」
そう連絡のつかないスマホを下して鞠莉もそう告げる。

「わかり…ました…」

遙はそう渋々といった様子ではあったが同意し、一同は指定の避難場所へ向かうことにした。

「宇宙に命が芽生えたその時から、強いものが弱いものを取り込み糧とする…その戦いのシステムが、彼女の痛みを生み出したんだ！」

博樹も負けずとそう反論する。弱肉強食、その自然の摂理がこの事態を招いたのだと。

「人類は進化しすぎた、その事自体が宇宙を破滅に導くのだ！」

「勝手すぎる…」

異形が声を荒げると、果南がそう漏らす。

「人類を滅ぼしたいだけじゃない、人類が進化しすぎたから滅ぼすなんて…宇宙の視線で見たらみんなおんなじ命なんじゃないの？」

そう果南は告げると、博樹へと振り返る。

「ヒロだって、人類を憎んで…苦しんで…それでも沢山の命を救ってきた。そんな優しさを持てる人が、本当に何かを救える人なんじゃないかって…私は思うんだ」

「果南…」

そう博樹が果南に視線を落とすと、果南は博樹の胸に抱きつく。

「わたしね、ヒロの事が好き……悩んで苦しんで、それでも誰かの為
について頑張ってるそんなヒロが……」

「とんだ茶番ですね……人間に、ウイルス如きに何ができる？」

そう異形は嘲笑うように高笑いを響かせながら粒子になってその
場から消失する。すると空間そのものが溶け出すようにして景色が
消えていく。

そしてマグマのような物体に周囲が囲まれ、どんどん温度が上がっ
ていく。

博樹は果南の体を左腕で抱き寄せると、右腕のアグレイターから光
を解き放ち青い光となってこの場を脱出した。

空中の様子を見守っていた遙は、エアリアルベースの様子がおかしい
事に気が付いた。安全高度まで引き上げることが出来たのだろうか、
リパルサーリフトが先の攻撃で損傷していたのだ。

「このままじゃ……」

このままでは怪獣は落ちてきてしまう。そう思った遙は、突如皆と
は違う方へと駆け出して、光を解き放つ。

「待つて遙！ダメー！」

「うおおお!!」

制止する姉の声に耳を貸すことなく、遙の体は赤い光となって天へ
と昇っていく。

「遙くん……死なないで……」

もう無事を祈ること以外、できることなどなかった。

「ジュワー！」

モキアンの目前に出現したガイアは、怪獣の左側面へとクアンタム

ストリームを放ち側面を粉碎して見せた。

しかし怪獣を倒すには至らず、頭部の口が開き中から眼がこちらを睨みつける。致命傷を与えることが出来なかった事を察したガイアは、次はフォトンクラッシュの態勢に入る。

しかし、怪獣の目から放たれた光弾によって吹き飛ばされ右側面から放たれた4本の触腕によって四肢を捉えられる。

「ぐおあああ…」

そこから放たれた電撃によって、ガイアは苦しみ始めすぐにライフゲージが明滅を始める。

するとエリアルベースは退艦が終了しており、プログラム通りに怪獣への突撃を敢行する。

怪獣もそれを阻もうと必死に攻撃するが、無人の空中要塞はそのまま怪獣の顔面に激突。大爆発を起こす。

その爆風でガイアは吹き飛ばされるが、怪獣はまだ息があり地上へと降下を始める。

(やらせる…もんかあ!!)

ガイアも爆風によって吹き飛ばされるが、怪獣へと止めを刺すべく最後の力を振り絞りクアンタムストリームを再び発射する！

「ウオオオオオオオ！」

残ったエネルギーを全て込めて放った渾身の一撃によって、遂に怪獣を完全に消滅させることが出来たが、同時にガイアも限界が訪れる。

力なく腕を下したガイアは、そのまま地上へ真つ逆さまに落ちていく。

「どうなったの…」

空中で大爆発が起こり、その爆発の光が見えた事で善子がそう呟く。

「わかりません…でも…」

ダイヤもそれに何かを言いかけるが、言い淀んでしまう。すると視線の先で、赤い光が落ちてくるのが見える。

「遙くん！」

それを遥だと直感した花丸は、光が落ちていく方に駆け出す。そして残りの皆もそれに続いていく。

昨日と違い完全にガイアの体を維持することが出来なくなっていたが、光によつて地面と激突する事だけは防げたが、遥は倒れ込んだまま立ち上がる事ができなかった。

52話 アグル激情／右手に光を左手に君を

「遙くん！遙くん！しっかりして!？」

そう花丸が必死に呼びかける声が周囲に響き渡る。

あその後、学校裏で倒れたまま動かない遙を最初に見つけたのは花丸だった。

地面に生身のまま叩き付けられるという最悪の事態は避けることが出来たが、度重なる戦闘のダメージで遙の体は限界が近付いていた。

元々体力にも自信のなかった彼がこうして戦ってこれたのは、自身の努力だが地球の光の恩恵によって変身を解いてから体に怪我としてダメージが現れないように回復させていた事も大きい。

そして前回の回復の間に合わない程の怪我に今回のエネルギー不足での戦闘、全てが重なって今回の事態を招いてしまった。

確かに外傷もないし呼吸もちゃんとしている。それでもどこか衰弱しているような様子で眠る少年の瞼が開かれることはない。

一方で花丸の後を追う残りのメンバーは、彼女と連絡が取れず困ったがとにかく探そうということになった。

「遙くん…ずっと私達を守る為に戦ってくれてたんだよね、命がけで…」

遙を探して走り去った花丸を探しながら、千歌が不意にそう呟く。

「そうだよね…いつも助けてもらってた」

「なのに…いつも遙が辛い時は気付いて上げられなくなって無理させて…」

そう曜と梨子が辛そうに呟くが、梨子は耐えられなくなり泣き出ししてしまう。千歌と曜が「大丈夫だよ」と声をかけながら背中をさすっている。

そこで鞠莉の携帯が振動する。ずっと音信不通だった果南から折り返しの電話がかかってきたのだ。

「ちよっと今までどこ行ってたのよ?」

『えつとごめん…色々あってさ、ヒロが助けてくれたの。そっちは大丈夫だった?』

果南が聞いているのはさっきの怪獣の事だろう。そう思った鞠莉は、事実を伝えることにした。

「イエス…とは言えないわ、遙は怪獣と戦って今どこにいるか…」

『そんな…』

「今みんなを探してるとこなの…」

『解った…今どこにいるの?そっちに合流するよ』

そう言つて果南との電話を切ると、鞠莉は上を向いて「ふう…」と息を吐く。

「こんな戦い、いつまで続くの…?」

そう一人呟く彼女に、答える声など返ってくるはずもなかった。

「遙が…?」

「うん、さっき怪獣と戦つて…今みんなを探してらつて」

先の鞠莉との電話の事を博樹に説明すると、博樹も顔を歪ませる。

「そうか…ひとまず学校の方へ行くんだろ?送つていく」

「うん、お願い…」

あの時、モキアンの体内から脱出した博樹と果南は彼女の家の近くではバレてしまうからとあえて沼津の方に降りてきた。

結果移動が面倒になる事にはなったが、ひとまず皆に合流するべく移動を開始する。

「ねえヒロ」

「ん?」

「あのさ…さっきの事なんだけど…」

そこまで言つと、果南は顔を伏せる。さっきのというのは、きつとあの告白まがいの発言の事なのだろう。

「あ、あのさ?本気なんだけど…そうじゃないっていうか…ええつと

…」

そう顔を赤くして誤魔化す彼女は下を向いたままで、対して博樹は前を向いてその少し前で歩を進めるのでお互い相手の表情は窺えない。

「オレはさぎ…」

「え…？」

そこでようやく口を開いた博樹の方を果南は見上げる。しかしその表情は逆光で見えないままだ。

「果南や鞠莉、それにダイヤが居たから…こうして今ここにいる。道を踏み外してしまう前に戻ってこれた…感謝してる」

それは、博樹の本心だった。この三人が居なければ、博樹は間違いなくクリシスの偽の予測の通りに動いて人類を滅ぼしていただろう。

「それにオレも、昔からお前が好きだった…孤独だったオレに最初に触れてくれたお前がさ」

「ヒロ…」

「そうやって誰にでも簡単に優しくできるお前が眩しかった、羨ましかったんだ」

それがずっと博樹が果南に対して抱いていた感情だった。だからこそ、人類を滅ぼそうとしても何度も果南を巻き込まないように動いてしまっていた。自分でも矛盾していると解っていたのに。

「だからお前の気持ちは凄く嬉しかった」

不意に立ち止まると、そう振り返って博樹は果南に告げた。

「だが…」

博樹がそう続く言葉を紡ごうとしたその時だった。

突然ビルが次々と倒壊、爆散していく。それによって町はパニックになり人々が逃げ惑う。

「何が…？」

そう果南が怯えた表情で告げるのを、博樹は彼女を庇うように立つ。

そして空が紫に光ると、先程モキアンの体内に自身らを誘い込んだ

異形が現れる。

「ウルトラマンを差し出せ」

突如現れた異形は、開口一番そう告げる。

「人類が助かる道はただ一つ……ウルトラマンを生贄に差し出すのだ！」

そう高らかに宣言して見せる異形に人々は逃げ、博樹はその流れに逆らって異形へと歩んでいく。

そしてその映像を、残りのメンバーはスマホから見ている。

「人類の前に……ウルトラマンから排除しようというのですか……」

「絶対そんな事させない！」

そう苦々しく告げるダイヤに、善子はそう食ってかかる。

「当然です、それにウルトラマンの正体を知っているのは私達だけ。

私達がこの事を漏らさなければ、誰もそんな事できませんわ」

そうダイヤは続けると、頭が冷めたのか善子も「そうよね……ごめん」とこの時は素直に謝った。

「ガイアと遥くんの事……これからも秘密にしなければ大丈夫だよね」

「でもわたし達は……見ていることしかできないなんて……」

千歌と曜も、そう自身の無力さを呪う事しかできなかった。

「フッフ……フハハハハハハ！」

高笑いを続ける異形は、博樹の姿を見つけ睨みつける。

「アグル……」

異形にそう冷たい声音で呼ばれた博樹は、アグレイターに視線を落とす。自分に勝てるだろうか？一瞬そんな不安が脳裏をよぎる。

今まで一度もそんな事感じなかったのに不思議なものだ、今までは負けても自分には失うものもないと思っていたのに。

そんなことまで考えてしまった博樹は、ふと果南の方を振り向くと目が合う。すると彼女は微笑んでこちらへ頷く。

「行ってきて、わたしはここで待ってるから」

ただそれだけだった。でもその言葉が、博樹にとっては大きな意味となり得る。

「ああ、行ってくる」

そう果南へ笑い返すと、博樹は真剣な表情で異形を睨み返す。博樹の中には、果南を危険に晒した異形への怒りがあった。

そして無言のまま突き出した右腕のアグレイターから、海の青き光を解き放つ。

「ヒロお願い、勝って…」

青い光と共に現れたアグルに、鞠莉はそう祈る。

空中に現れたアグルは、そのまま異形へ向かって飛び立つとアグルスラッシュを異形目掛けて放つ。

「ぐっ…」

その一撃が肩を掠め、異形は一瞬だけ苦しむような仕草をみせる。

「フッフ…アーツハツハツハ！」

だが、アグルからの徹底抗戦の意思を理解した異形は突然笑いだすとその身を戦う為の姿へと変化させる。

蠅のような顔と背中 of 翅、そして日本刀を思わせる鋭利な刃になっている右腕、反りあがったつま先。まさに悪魔といった出で立ちだった。

だがアグルは着地した異形へとそのまま飛んでいき、その勢いのまま突き出した両の拳で殴り飛ばすと、吹き飛んでいく相手の後方へと着地する。

「デヤア！オラアツ！」

よろよろと立ち上がった相手に駆け寄ると、アグルは連続でその顔面へと飛び蹴りを食らわせる。

再び地に伏す異形へ、アグルは更に追い打ちをかけるべく駆け出した。

しかし、そんなアグルを待ち構えていた異形は振り向くと右腕の刃

をアグルへと突きつける。すんでの所でこれを回避するアグルだったが、右膝を掠め切り傷が入る。

「ぐわあああ…」

思わず後退し、足を抑えるアグルだったがそこから青い光の粒子が血のようにあふれ出る。

「ヒロ…!」

思わず身を乗り出して叫ぶ果南だったが、異形はそんなアグルの体をお返しと言わんばかりに蹴り飛ばす。

そしてトドメと体制の崩れて膝を付くアグルに刃を振り下ろすが、アグルはアグルセイバーを展開しこれを防ぐ。

そして相手の刃を払いのけるとアグルは立ち上がり、敵に切先を向けてお互いにじり寄る。

先に仕掛けたのはアグルだった。突き出した切先を異形も右腕の剣で払いのけ、アグルへとその刃を振り下ろすとアグルも素早い身のこなしでこれを避ける。

だが先程の膝の傷が想像より深いのか、アグルはバランスを崩してしまう。それを異形は見逃さず、アグルの背を目掛けて刃を振り下ろした。

だがアグルは前転でそれを回避すると、そのまま相手の足を蹴り転倒させると自身は立ち上がると鋭い突きを繰り出す。

それが頭部の左右にある触角の右側を貫き、異形は痛みを仰げ反る。だがそのまま土を掴むとアグルへと投げつける。

「うおおっ!」

アグルが思わず顔を覆い注意がそれた隙に、異形は飛び蹴りを放ちアグルの体を後方へ吹き飛ばす。その衝撃で思わずアグルセイバーを解除してしまったアグルは、両手をついてなんとか立ち上がる。

そしてそのアグル目掛けて今度は逆に突きを放つが、アグルの回し蹴りによって右腕の刃を粉碎されてしまう。その衝撃で再び仰け反る異形目掛け、アグルはフォトンクラッシュャーを放つ。

「ウオオオオオオ…:テヤア!」

その一撃は、異形目掛けて真っ直ぐ飛んでいき辺りは爆風に包まれ

た。

「フハハハハ」

だが爆風の中から笑い声が聞こえる、異形の姿は健在だった。

「嘘…効いてない…?」

そう驚愕する果南と対照的に、アグルは冷静だった。以前のブリッツブロットとの戦闘で、光線技を防がれることも想定していた。

アグルは駆け出すと、異形へ拳を打ち込むが今度は防御の構えを取らない。そのまま真っ直ぐ異形の腹へ吸い込まれるように拳が決まると思えたが、電磁波のようなものでその拳は阻まれる。

そして異形は左腕に紫の光を集めると、それをアグル目掛けて放つ。それをもろに食らったアグルの体は大きく吹き飛ばされ派手な地響きをたてて地面に叩き付けられる。

「ぐっ…ぐおお…」

「ヒーロー」

果南が身を案じる中、ライフゲージがついに音を立てて明滅を始める。膝を付いてなんとか上体を起こしたアグルをあざ笑うようにして眺める異形へ、アグルスラッシュを連発する。

だが異形の身体を覆う電磁波によってそれは弾かれ、付近に散乱していく。だが、アグルが放ったある一撃だけは、異形は腕で弾き落とすのだった。

それを見たアグルは異形目掛けて真っ直ぐ駆け出した。そして右腕に再びアグルセイバーを展開すると、異形の顔面へ突き立てるようにして突っ込んでいく。

異形もアグルの狙いに気が付いたのか、電撃を放ってアグルを近づけまいとするがアグルは捨て身の覚悟でその攻撃を受けつつもそのまま突っ込む。

「デエヤアアア！」

「ギヤアアア！」

アグルセイバーが異形の左目を貫く。だがアグルも最後の瞬間、異形の右腕の僅かに残っていた刃がわき腹に食い込んだ。だが目を潰された痛みに異形は左腕を振り回しアグルを突き飛ばすともがき始

める。

アグルも右膝と左わき腹から光の粒子が漏れ出しているが、痛みに耐え勝負を決めるべく必殺の構えを取る。

「デヤッ！ハアアアアア」

両腕を広げ、胸元にエネルギーを収束させる。そしてそれを右腕に移し腕を掲げた後、左腕を腰に固定したまま右腕をまっすぐ下し力を開放する。

「デリヤアッ!!」

アグルストリーム
海神の奔出アグル最強の一撃によって、異形の身体は今度こそ完全に消滅してしまった。

自身の勝利を確認したアグルは、膝つき肩で息をしていたが青い光に包まれてその場から消えるのだった。

博樹は果南の目の前で青い光を解いてその姿を見せる。

「勝ったぜ、果南」

「うん：信じてた」

「そういう割には泣きそうだな？」

今にも泣きそうな果南にそう言っ博樹は意地悪く笑う。

「だって本気で心配したんだよ？あんな無茶して」

「でもオレは勝った、それで全部だ」

そう博樹は優しく告げる。そこにはもう、かつて自身の来たことに苦しんでいた彼の面影は感じられない。

「なあ果南…」

「なに？ヒロ」

そこで博樹は真剣な表情を作って果南を見据えると、果南も自然と表情から笑みが消えていく。

「さつき言いかけた事、言っておこうと思っ…」

「うん」

「お前の気持ちは嬉しいし、オレもお前が好きだった。でもオレはこの先、もつと危険な戦いにも身を投じる事になる」

それは果南にも解っていた。死んでしまうかもしれない恐怖、博樹が二度と手の届かない場所に行ってしまうかもしれない事への不安。様々な感情が入り乱れた結果口をつけて出てしまった果南の言葉へ、博樹は答えを出してくれた。

「だから…オレは戦い終わるまで、アグルの力を使わなくて済む日があるまで…お前の気持ちには答えられない」

「ヒロ…」

「すまない…でもその時まで、オレはお前を守る」

「うん…わかったよ……」

それは拒絶ともとれる返事だった。果南は視線を落として泣くまじと暫く耐えた後無理やり笑顔を作って告げる。

「でも、早くしないとわたしがヒロの手が届かないところに行くかもよ。」

「オレは必ず追いつくよ」

「ヒロならほんとにできそう…でも、そうなる前にちゃんともう一回答えを教えてね？」

「ああ、約束する」

そうやって、2人は笑い合っていた。これが今、自分に出せる最善の答えだから後悔はない。博樹は本心でそう思っていた。

—助けて！

—お願いやめて！

悲痛に叫ぶ女の子の声がする。だがそれを遥はみていることしかできない、空には暗雲が立ち込め街を破壊し蹂躪する巨大な影が見える。

「お前は一体…」

そう呟く遥の視線の先で、その巨大な影と目が合う。

『私ハ□□□□——オマエガ最モ恐レル存在、ソシテ最モ恐レテイル姿ダ…』

そう地獄の底から響く声で闇に包まれた存在は、遥へ手を伸ばす。

「うわあああああ—」

そこで遥はその闇に吞まれそうになる、そして思わず目を伏せるが一筋の光が差し込んでくる。そして、遥は思わずその光に手を伸ばした。

「お願い遥くん、目を開けて…」

花丸は泣きそうな声で遥の手を握る。その頬は涙が伝っていた。こんな時にスマホも忘れて飛び出してしまったせいで誰にも連絡が取れない。

でも今遥の傍を離れたら、何故か二度と会えない気がして傍にいる事しかできなかった。

「マルね…本当はずっと遥くんと一緒にいたい、転校もして欲しくない…」

そう未だ気を失ったままの遥へ、花丸は続ける。

「でもそう言ったら、遥くんは例え行きたくても…マルのわがままを聞いてくれちゃうから…」

だからと今なら聞こえていないからこそ、胸の内を明かすのだった。

「そんなこと言わないから…お願いだから起きて欲しいすら…お願いだから…」

そう遥の手を握る花丸の目から零れ落ちた涙のしずくが、遥の手に触れるとその手が少しだけ動いた。

「え…？」

「う…あれ…確か宇宙で怪獣を倒して、それで…そっかエネルギーが尽きちゃったのか…」

「遙くん！」

「わっ!?!ととと…」

起き上がった遙に、花丸は思わず抱き着き遙は驚いてバランスを崩しかける。

「ほんとに…ほんとに心配したずら…」

「ごめんね…」

そう謝ると遙はそのまま花丸を抱きとめる。

「でもみんな無事でよかった…」

「良くないよ…遙くんもその中の一人じゃないと…お願いだからもう無理しないで……」

「ごめん…それは約束できない」

遙が告げたのは、はつきりとした拒否の言葉だった。その言葉に、目を見開いた花丸は遙から離れると目を真つ直ぐ見て語り掛ける。

「それは遙くんが、ウルトラマンだから?」

「そうなのかもね…僕も本当は戦いたいわけじゃない、あの時と一緒に本当はもう戦いたくない…」

「じゃあ—」

「でも、たとえただの暴力だったとしても、そのせいで苦しむことになっても、戦う事をやめたらもっと大事なものを…大切な人を失うかもしれない…」

花丸の言葉を遮って遙はそう続けた。父を手にかけてしまった苦しみのあまり漏らした本音。それは今も変わっていない、それでも戦う事でしか守ることが出来ないから戦うのだと。

「それはきつと何よりも辛い事なんだ。僕はみんなと一緒に生きていきたい…何より、大事な人を守りたい。これだけは初めてガイアの光を手にしたときから変わらないんだ」

最初から一つだけ変わっていない遙の願い。最初は姉である梨子を守れば良かった、でもそれは変わって行って今は沢山いる大事な人皆を守りたいのだと。

「ずるいよ……」

「え?」

「そう言われたら、もうオラには遙くんを止められないぞら…」

遙の中には一種の覚悟が出来上がっていた。皆を守るためなら、命がけて戦うという覚悟が…もう失わない為にと強い意志が。

「じゃあ…一っだけ約束して？」

「なに？」

「絶対居なくなったりしないで…一緒にいて…？」

「…解った、約束する」

そう遙は静かに告げると、そっと立ち上がって花丸へ手を差し伸べる。

「行くこう？みんなにも心配かけちゃったから…」

「そうずらね」

その手を花丸が取ると遙は、にっと笑みを浮かべる。

「ねえ遙くん」

「どうしたの？」

「ううん、何でもないぞら」

いつも通りの笑顔を浮かべる遙に、何かを言いかける花丸だったがその言葉を引っ返してしまった。

「きつと今言うと、遙くんを困らせちゃうから…だからまだ、言うべきじゃない」

53話 彼の地へ再び／泪のムコウ

ゼブブをアグルが倒してから、一度も怪獣が現れることは無かった。だがエリアルベースの陥落によって、XIGは攻撃性能を持った全てのファイターを失った。

その事は、確かに人々の不安を煽ったが東京のジオベースにその拠点を移し、新型のファイターの実戦投入の為に準備を続けてきた。またいつ、破滅招来体の攻撃が来るか解らないから。

元々従来の機体よりも遥かに高い運動性能をもつ機体の開発は行われていた。アルケミースターズによって開発された従来の戦闘機の常識を覆す運動性を与えるリパルサーリフト。それをより活かすためのファイターを。

閉校祭から約一週間が経過し、明日にライブ決勝を控えたAqoursのメンバーたちは休日の誰もいない学校に集まっていた。「忘れ物ない?」

誰もいない教室で、初めて東京で歌った時のイベントのランキングが記された用紙を一人見つめていた千歌に、そう曜が声をかける。

「大丈夫」

「素敵な閉校祭だったね」

そう答える千歌に対して、何を見ているのかと用紙を覗き込んだ曜だったがその事には触れなかった。

「うん、だからやれる事は全部やって挑まなきゃね」

「そうだね。この時の為にすっごく練習したもん」

そう梨子の声が聞こえてくる。

「確かに毎日朝早くから夜遅く、暗くなっても」

「がんばルビィしたから!」

そう告げるのは黒澤姉妹。

「でも、みんな一度もサボらなかつた」

今度は果南がそう言つて入つてくる。基本彼女が考案することが多かつた練習メニューはハードなものが多かつたが、それでも誰もサボることなくこなしてきた。

「弱音は言つたけどね」

そう茶化したのは鞠莉だつた。もつとも、果南以外からすれば嫌がらせかと思うくらいにきつい事の方が多かつたので無理もない。

「とにかく朝は毎日眠かつたずら。ね？善子ちゃん」

「ヨハネ！流石は我がリトルデーモン達、褒めて遣わす！」

そう言つて特に朝が大変そうだつた花丸と善子が入つてくる。

「ついに来ましたね」

最後に入つてきたのは遥だつた。彼も今日までの活動を支えてきた。

全員で校門の前まで出ていくと、学校の方を振り返る。

「行つてきます！」

全員で学校へ向けてそう告げると、それからは一度も振り向くことなく歩いて行く。

決戦の日は明日だ。

東京駅へは、特に何のトラブルもなく到着することが出来た。

「お姉ちゃん？」

「もう大丈夫ですわ」

ルビイにそう聞かれて、優しく返すダイヤだつた。恐らくトラウマの事を心配したのだろう、もつともダイヤは春からほぼ毎日見ることになるだろうし未だに取り乱されると寧ろ心配になるが。

「これからどうする？」

「本番は明日だしね」

全員にそう聞く曜に、果南が答える。時間を確認するとまだ旅館にチェックインする時間まで余裕がある。

「リリーはブクロに行きたいのよね？」

そう善子が意地悪な笑みを浮かべながら梨子の方を見る。

「ど、どこそれ？」

と引き攣った顔でそう告げる梨子を余所に、「ブクロ？」と聞き覚えのない名前に鞠莉が不思議そうな顔で聞いてくる。

「ブクロっていうのは…」

そう得意気に説明しようとする善子だったが、それに邪魔が入る。

「サイレントチェリーブロッサムナイトメア…！」

とよくわからない技名を言いながら梨子が善子へ関節技をかけたからだった。

「どんだん善子ちゃん化していつてるぞら…！」

「あはは…頭が痛い……！」

そう呆れた表情で告げる花丸の隣で、遙がそう引き攣った笑みを浮かべる。

「でも遙くんも…！」

「フォトンエッジとかクアンタムストリームとか…！」

そうルビイが言いかけた言葉を花丸が代弁する。

「え？いやでも一部は僕が付けた名前じゃないし…！」

ガイアの技名の事を指摘されて遙はそう言って視線を逸らす。

「じゃあとりあえず、あいさつに行こうか！」

他に特にやりたい事、行きたい場所の案が上がってこなかったので元々そういう場所があった千歌がそう告げる。

向かった先は、以前東京に来た時と同じ神社だった。

なんでもスクールアイドルの聖地と呼ばれる場所になっているらしいここは、AqoursやSaint Snowだけでなく、沢山のスクールアイドルが訪れているのだという。

「急な階段だったぞら」

「でも、前来た時に比べたら楽じゃなかった？」

「そういえば」

前の階段を駆け上った時に、そう花丸とルビイが言葉を交わす。

「成長って、気が付かない間にしてるもんだよ」

そう告げる果南に「なるほど」と遥は思った。あの時と比べたら、みんな成長しているのだ。

「よし、じゃあお祈りしようか」

千歌のその言葉で、全員で並びお賽銭を入れて思い思いの決意を手を合わせて頭に思い浮かべる。

―会場の全員に、想いが届きますように

―全力を出し切れますように

―緊張しませんように

―ずらって言いませんように

―全てのリトルデーモンに喜びを

―浦の星の皆の想いを

―届けられるような歌が歌えますように

―明日のステージが、最高のものになりますように

―ラブライブで、優勝できますように

―みんなが笑顔で、輝けますように

それは神頼みというより、一種の宣誓だった。そんな9人が、全力を出し切れる事が遥の望みだった。

「ずらあ」

花丸が、絵馬をかけられている場所を見て、感嘆の声を漏らすと全員がその方を見る。

『Aqoursが優勝しますように　　浦の星学院有志一同』

絵馬にはそう書かれていた。

「これって……」

「見て、こっちにも」

今度は別の場所の絵馬を見て、曜がそう声を上げる。そこにも浦の星有志一同と記された絵馬がかかっていた。

去年の秋から、他の生徒たちによって何度もこの場所に絵馬はかけられていったのだ。Aqoursが優勝することを願って。

「みんな来てくれたのね」

「こんなに、何回も…」

「私達には一言も言わないで…」

そう梨子と千歌が嬉しそうに呟く。遥もこの場所を訪れたという話を生徒たちから聞いたことは一度もなかった。

「やっぱり、この学校の生徒はみんなクールデース」

鞠莉がそう嬉しそうに言う。学校みんなが、A q o u r sの事を応援してくれているんだと改めてそう感じた。

「千歌ちゃん、これって…」

そう曜に言われて、その視線の先にあるものを見る。それは同じくラブライブの優勝祈願の絵馬だったが、グループ名が違う。

「こつちにもあるよ」

そう何を見ているのか気づいた果南が教えてくれる。

「こんなにも沢山のスクールアイドルが、ここで祈願していったんだ……」

そうルビイが呟く。優勝したいのは自分達だけじゃない。どのグループも、学校を背負って決勝に出ているのだ。

「お久しぶりです」

不意にそう馴染みのある声が聞こえてきた。声の主の方を振り帰ると、そこには聖良と理亜が居た。

「聖良さん」

「ついにここまで来ましたね」

そう言いながら2人はこちらへ歩み寄ってくる。

「ビビってたら負けちゃうわよ」

「わかってるわよー!」

そう意地悪く告げる理亜に、善子がそう噛み付く。だが強気な彼女とは対照的に花丸は不安げな表情で。

「アキバドームは、今までの会場とは違うぞら」

「どんなところか想像できない…」

そうルビイも告げる。確かにこれまで立ってきたどのステージよりも大きく、どのステージよりも多くの人の視線を浴びることになる

だろう。

「私も、あのステージで歌えたことが今でも信じられない」

そう告げるのは聖良だった、前回大会では決勝に出場している2人はステージからの景色を知っている。

「自分の視界で全てキラキラ光る…まるで、雲の上を漂っているようだった……」

「雲の上……」

そうどこか遠くを見るように告げる聖良に、千歌もそう反芻するがそれでもやはりイメージしきれるものではない。

「だから、下手なパフォーマンしたら、許さないからね」

そう理亜がずい、とルビイに顔を近づけると告げる。

「当たり前だよ、がんばルビイするよ!」

この時のルビイは、そう強気に答えるのだった。初めて会った頃の、いつも怯えていた彼女はもういないんだなと感じた。

「また一緒に歌おうね」

「うゆ」

また一緒にステージに立とうと、そう言葉を交わす。

「ちよっ…ルビイはヨハネのリトルデーモン第四号なんだからね!」

「わたしは10号だったっけ?そういう恥ずかしいのイヤだから」

「なんでそう言う事言う!?!」

そんな様子に、メンバーを取られると思ったのか善子が割り込んでいくがそんなやり取りを聞いているとなんだか冬休みの事を思い出して微笑ましくなる。

「遥もなんか言いなさいよ!」

「ん?じゃあその時もまた5人で一緒に曲、作ろっか」

「賛成」

「遥もそっち側なの!?!…まあそう言うなら、一緒でも悪くないか…」

笑顔で返してくれる理亜と違って、渋々といった様子で承諾する善子。「今度はもっとヨハネの案取り入れなさいよ?」なんて前回の事を根に持っていたようなので「はいはい」と他の四人で受け流しておく。

あの時は遙自身にも余裕が無かった時の事だったから、その時はあまり思わなかったが楽しかったんだと感じられる反面、理亞にだけはガイアの事を教えていない事に後ろめたさも感じる。

「素敵な笑顔ですね」

「はい」

そんなやり取りを見て、聖良はそう千歌に話しかける。

「初めて出会った時、なんて弱々しいんだろうって思っていました」

それは6人だったころ、初めて東京のイベントで歌う前日に初めてAqoursと出会った時の聖良の本心だった。

「でも、今の皆さんを見て思います。なんて頼もしいんだろうって」

それはきつと、Aqoursがこの一年でどれだけ成長してきたかを物語っているものなのかもしれない。そして聖良は真剣な眼差しで、いつか千歌から受けた質問と同じ言葉を送る。

「勝ちたいですか?」

「え…?」

「千歌さんがいつか、私達に聞きましたよね? ラブライブ、勝ちたいですか?」

勝ちたくなければ、どうしてラブライブに出るのか? そう聞き返された質問を、今度は千歌が答える側に立っている。

「そして、誰のためのラブライブですか?」

その質問に、千歌は即答することは出来なかった。

宿泊する宿は、以前東京で歌った時と同じ宿にしたらしい。もつともあの時は遙は来ることが出来なかったし、三年生もメンバーになっていなかった。

明日で9人でステージに立てる最後のラブライブは終わる。泣いても笑ってもだ。遙は一人その事実にも寂しさを覚えていた。

湿っぽいのも良くないと思い、折角の旅館だし温泉に入ろうと思いでる。

『あーなーたーたーちいいいいいい!!』

そんな怒声が隣の部屋から聞こえてきた遥は思わずその部屋へと飛び込む。

「何があった…ぐはあ!」

Aqoursの皆がいる部屋に飛び込んだ遥は、いきなり顔面に枕の直撃を受け、後ろへ倒れこむ。

「いつ…てえ…何なんだよ一体…?」

よろよろと上体を起こした遥が、何をしているんだと周囲を確認すると枕投げに興じるみんなが視線に映る。

「本番前に何してるんですか!?!」

その声は届くことなく室内を枕が飛び交う中、更にもう2、3発それを食らった遥も頭に血が上ったのかその合戦の中へと飛び込んでいった。

結局全員が落ち着きを取り戻したのは、かなりの時間が経過してからとなってしまう。

「まったくひどい目にあった…」

「女の子の部屋に入ってくるからずら」

旅館一階の客間にあるソファーに腰掛けてそうぼやく遥を、そう言っ隣にいる花丸が冷やかす。

「だってあんな声聞こえたら喧嘩か何かしてるのかと思って焦るじゃん…」

そう言っ顔を逸らすと、パックジュースの中身を音を立てて吸いあげる。結論から言うと、元々非力なのと全力で投げるのに気が引けた結果ボッコボコにやられてしまっって恥ずかしいのだ。

「ボッコボコだったしね」

「うるさいよ…」

今度は対面にいる善子にそれを指摘されて今度は完全に誰も居ない方を向いてしまった。

「でも楽しかったよね」

そう言っルビィが笑う。それも事実ではあっった、全員が決勝への

緊張や不安を忘れて遊びに興ずることが出来たのだから。

「そうだね…」

「まあみんならしくはあったよね」

そう言って談笑していた。学年が同じと言う事もあって、この三人と一緒に居る時間は他のメンバーと比較すれば圧倒的に長い。もし転校を選べばもうこんな時間を過ごすことは無くなる。

決勝が終わるまでは考えないようにしていた遥だったが、不意にそんな事を考えてしまう。

「みんなで温泉行こーよ」

そう言って外に言っていた二年生が戻ってくる。

「行ってきなよ、僕もそろそろ入りたいし」

そう言って遥は立ち上がってその場を去ろうとする。

「ちよつとまって、話があるの」

それを呼び止めたのは善子だった。

「どうしたの？」

「いいからちよつと」

いつになく真剣な表情でそう告げる彼女には、今済ませておくべき重要な話があるのだろうと察した遥は頷くと、一緒に外へと出る。

「本当は決勝が終わるまで言わないつもりだったんだけど…」

「どうしたの？」

時間も時間と言う事もあって、周囲に人の気配はない。旅館の外にある街灯に照らされているが、そう告げる彼女は背中を向けていて表情を見ることは出来ない。

「遥はさ…遥は、ずら丸の事好きなの？」

「え…？」

「だって最近よく一緒にいるし…距離も、近いし…」

突然そう言われて、遥は困惑したような表情を浮かべるが、暫し逡巡した後その口を開く。

「きつと、好き…何だと思う。多分善子ちゃんが聞いている通りの意味で」

恋愛感情があるという意味で、そう答える遥の言葉を聞いて善子の背が一瞬だけ動く。

「そう…やっぱりそうなのね……」

遥は、どうしてそんな話を今しなければいけないのか？ そう思ったが、直後に善子の真意に気が付いてその言葉を口にするには無かった。

いや、怖かったのだ。その答えを聞くことが…。

「わたしね、遥の事が…好きなの」

「善子ちゃん…」

「でも気づいてた、きつとずら丸も遥の事…好きはずよ」

いつもならヨハネだと訂正する彼女は、この時ばかりはそれをせず続く言葉もか細いものだった。

「でももういいの、スッキリしたわ。これで後は明日のステージに墮天するだけ!」

そう言っつて振り返ると笑って見せる彼女だったが、頬には涙が伝っていた。

「…ごめん……」

「何で謝るのよ? こっちこそごめん、こんな事言われて迷惑だったわよね」

「そんなことない、こんな事言われたことなかったから、嬉しかった…」

でもと遥は首を横に振って更に言葉が続ける。

「でもごめん、その気持ちには答えられない…いや答えちゃいけないんだ…」

「なんで…?」

「もちろん、善子ちゃんの事が嫌いな訳じゃないよ? でも僕自身そういう好意を向けられてどうしたらいいか解らないし、花丸ちゃんの事が気になってるのも事実なんだ。だからそんな中で善子ちゃんの気持ちを受け取れないよ」

そう告げる遥の言葉に、善子は一瞬顔を伏せるが無理に笑顔を作ると顔を上げる。

「いいの、私はちゃんと自分の気持ちに向き合えたから。遥もちゃんと踏ん切りつけなさいよ？・じゃないとずら丸取られちゃうかもよ？」
「え？いやでも…僕もホントにそんな感情を持つてるって自信もまだないし…」

「このへタレ！そんなんじや何もできないわよ？でも最後に…」
そう笑ってから善子は遥に歩み寄る。そして…。

遥の頬にキスをした。

「え…？なっなあ…」

遥は思わずすごい勢いで顔を真っ赤にして後ずさると、言葉が出てこないのか口をパクパクさせる。

「これでヨハネの恋は終わり！ごめんね？決勝前に…」

「善子ちゃん…」

「だからヨハネよ！じゃあおやすみ」

そう言って善子は旅館へ走って戻っていく。遥にはその背中を追う事は出来なかった。

「ねえ遥くん」

「千歌さんどうしました？」

温泉を上がって暫くすると、廊下でたまたま千歌と出くわしたのだが彼女は何か話があるのか声をかけてきた。

「遥くんは、私達に優勝してほしい？勝ってほしい？」

「僕はもちろん、優勝してほしいって思ってます。姉さんも僕も、千歌さんと出会えたから変わった…そして皆で輝きを目指してきた」

遙は自分がそんな問いをぶつけられるとは夢にも思っていなかったが、千歌のその真剣な眼差しをみると。今まで言えなかったセリフがスラスラ出てきた。

「だから優勝してほしい、みんなが目指す輝きの…その向こうにあるものを僕も観たいんです」

そう答えると、千歌は「そっか…」と呟く。おそらく聖良に聞かれた時に答えることが出来なかったことも鑑みると悩んでいるのだろう。

「最初は嫌がってたけど、本当に僕はA q o u r s に関われて幸せでした。本当にありがとうございます」

「遙くんこそ、今まで一緒にやってきてくれてありがとう」

そう千歌も笑って答える。

「はい！明日、頑張ってください！！みんなと応援してます」

そう遙も笑って告げるのだった。

この時はまだ誰も、明日人類が滅亡の危機に瀕する事になるとは夢にも思わなかった。

54話 戦士発つ／天使降臨

翌日、千歌から大会までは各自自由行動でという風に提案され、各々が思い思いの場所で過ごしていた。

(善子ちゃんには悪い事したよね…)

あてもなく久しぶりの東京の街をさまよっていた遥が思い浮かべていたのは善子との昨晚の会話だった。

初めて異性から口にされた『好き』という言葉は、とても嬉しかったが。反面どう答えればいいのか解らなかった。

善子は勿論大事な友達で、何があっても助けるなんてカッコつけたセリフを言った事もある。でも遥は自分が花丸に好意を向けている事を、善子の質問で自覚してしまった。

だから彼女の気持ちに応えることが出来なかった。果たしてそれで良かったのか？そう思う気持ちが離れなかった。

仮に彼女の気持ちを受け取ったとして、嘘で彼女を喜ばせてもそれはきつと意味がない。あの時の遥はそう思っていた。

気がづく、自身や姉が行っていたピアノ教室の近くまで来ていた。もうやめて5年以上経っており講師意外に知る人物などいる筈もない。

それでも遥は外からその光景を少し眺めていた。

(懐かしいなあ…)

ただ姉の背中を追って、同じことが出来るようになりたかった。それだけで始めたピアノだった、だが様々な要因が重なって遥はそれを投げ出してあるうことかできないフリまで始めてしまった。

でもその事さえ、今ではいい思い出になっている気がする。Aqoursとの出会いが、姉と理由も経過も違えど再び向き合うきっかけになった。

それに周りなど気にせず頑張れば良かったという後悔すら生まれ

函館で理亞やルビイ達と曲を作った事、三年生と一年生全員で曲を作った事。それも遥はピアノをやってなかったらその輪に入ることが頑なに拒んだだろう。

「あれ？遥くん？」

そう感慨に耽っていると、当時の講師の女性が遥に気が付いて出てくる。

「お久しぶりです、先生」

「やっぱり遥くんだったのね、大きくなったわね。梨子ちゃんは元気？」

そう聞いてくる女性に、遥は「はい」と答えると相手も満足そうに笑う。

「それ制服？この辺じや見ないわね…高校はどこに？」

「ええっと…今静岡の沼津ってところに引越してて、浦の星学院って学校に通ってます」

「ああ！えつとAqoursの？」

「そうです、よく知ってますね？」

「いやたまたま映像見て梨子ちゃんに似てる子がいるなって思ってたの、まさか本人？」

「です、僕はマネージャーやってて」

まさか知ってくれているとは思わなかったものでこれには嬉しくなっつてついにやけそうになる。

「じゃあピアノは？」

「続けてますよ、それに僕も最近またやろうかなって」

「そっか…でも良かったわ、またいつか聴かせてね？」

「はい！」

ここへ来た理由は何となくだったが、数年ぶりの恩師との再会を経て幼い自分は間違っつてなかったと実感できた。

これ以上いて邪魔をしてもいけないと思い別れた遥は、まだ時間に余裕があったのだが他に行くあても無く先に集合場所を指さそうと思ひ移動を開始する。

今から向かえば、メンバーより早くたどり着けるし応援に来る母親

に顔を見せるくらいはしておこうと思い、その一步を踏み出した。

「やっぱり、来てくれたんだ?」

「:最後までいいな、わざわざこっちに来てても海を見てるのは、何ともお前らしいな」

東京に来てくれた博樹に、本番前に会えないかと連絡すると。二つ返事です承してくれた。

靴を脱いで足を海水に付けて立っている果南の少し後ろまで歩み寄った博樹に気が付いた果南にそう言われるも、博樹は素っ気ない。

「こうやってふたりで海を見るのって、いつぶりだろうね?」

「さあな? 基本鞠莉とダイヤもいたし」

そう相変わらず素っ気ない言葉を返す博樹の視線も、果南の視線も海を見ていた。

「ねえヒロ」

「ん?」

「ありがとう、ほんとに来てくれて」

「約束は約束だからな」

そうこちらに視線を向ける果南に、博樹は視線を合わせずに答える。

「二年間ずっと約束ほったらかしてどっか行ってたくせに?」

「それは…」

そう意地悪い笑みを浮かべて告げる果南に対して、博樹はバツの悪そうな表情で頬をかく。

「今度こそダイビングするんだからね? 約束だからね?」

「解ってるよ、卒業までにな」

「絶対だよ?」

「ああ」

しつこいくらいにそう釘を刺す果南に、博樹はそう短く答える。その表情は少しだけ笑っていた。

「時間はいいのか？送っていくぞ？」

「いやいいよ、鞠莉とダイヤと合流してから行くし」

「そっか、じゃあまた終わったらな」

そう言つて果南と別れると、博樹はバイクに乗って走り去る。

もう少しでアキバドーム前にたどり着く、そう思った時だった。

空にかつてない大きさのワームホールが開き、そこから無数の体長60cm少々の大きさの昆虫のような生命体が飛来する。

「なんだ…これ…？」

一瞬のうちに空を覆い尽くしたそれは、あつという間に周囲を暗闇に包み込む。

「遙くん！」

「みんな！」

その直後に、A q o u r sの全員と合流することが出来た。

「これは一体…？」

「わかりません…でも最初にワームホールが見えました。きつとあの虫みたいなのは、そこから出現し続けている」

ひとまずドーム内に入り、そこで情報を整理するべく遙はアルケミースターズのネットを使い状況を確認する。

ドーム内にある巨大モニターでは、緊急ニュースの様子が流れており市民に外出禁止を呼びかけていた。

「これは…」

ネットを使つて遙は手に入れた情報を見て絶句した。

世界中で同様の現象が見られており、海外では既にG・U・A・R・Dの攻撃部隊による攻撃が開始されるも昆虫もどきの物量。そして戦闘機の装甲を破る程堅い甲殻による体当たりによって、オーストラリアの部隊はすでに全滅したことが明かされていた。

そして、東京上空に開いたワームホールから更に世界各地へとワームホールが繋がっていることも明らかになり。X I Gの新型ファイター率いる部隊が、そのワームホールを攻撃すべく。出撃準備に入つ

ていた。

従来のファイターより運動性、攻撃性能を大幅に向上させた機体。ファイターSSの発展型であるSTが一機、SGの発展型であるGTが二機という今までと似たような構成だが今までと比較にならない性能を持つファイターに期待するしかないといった状況だった。

「遙くん、何かわかった？」

「あの生物は、これまでの破滅招来体が送り込んできた怪獣の特徴を併せ持つってことと…従来の戦闘機じゃ、あの物量は突破できないってことくらいです…」

千歌にそう聞かれた遙は、そう苦虫を噛み潰したような顔で告げる。

「そんな…」

折角ここまで来たのに、ライブどころでは無くなってしまった事。そして現状がかつてないほど厳しい事を突き付けられて、全員の表情が暗くなる。

「そうだ、理亞ちゃん達は？」

そこでルビィが鹿角姉妹の姿が見えないことに気が付く。両親たちは先程連絡が付いて、ドーム内に避難していることは解っていたがふたりとは連絡を取っていなかった。

「ダメ、繋がらない…」

千歌がすぐさま聖良へと電話をかけるが、電波状況が悪くなり電話どころか遙の端末もインターネットから切り離される。

『緊急情報が入りました、たった今XIGによって東京上空のワームホールへ攻撃を行いました。失敗に終わったとのことです…』
そうニュースではアナウンサーの女性が暗い表情で告げる。

「なんでテレビ回線だけは生きてるんだ…？」

そう遙は訝しむが、誰もその理由が解るわけもない。

—もう終わりだよ！

—なんでウルトラマンは来てくれないの!?

—G・U・A・R・Dは何やってるんだよ！

そんな声が辺りに響き渡る。人類史上最大の危機ともいえるこの

状況で、誰しもが恐怖や不安に打ちのめされていたのだ。

「ウルトラマンの事なんて知らないくせに…」

そんな人々の勝手な叫び声に、思わず善子がそう呟く。

「きつと口にすることで、恐怖を誤魔化しているのですわ…」

それにダイヤがそう答える。すると曜が周囲を見渡すてあることに気が付く。

「遥くんがいないー！」

遥は人気の無くなった通路を、ドーム外を目指して歩く。その目は真っ直ぐと前を見ており、もう誰にも止めることは出来ないだろう。

そんな時、急に視線の隅から何かが投げつけられ、思わずそれを両手でなんとかキャッチする。

「食えよ、いざという時に腹が減ってたんじゃな」

そう声をかけてきたのは博樹だった。遥は今投げ渡された物に視線を落とすとそれはハンバーガーだった。そして珍しく笑みを向ける博樹の手にも同じものがあつた。

「そんな気分にはなれませんよ…」

そう言つて遥が顔を逸らすと、博樹は先程と打つて変わつて真剣な表情になる。

「行くんだろ？空のイナゴもどきを一扫しに」

その問いかけに遥は頷くと、言葉を繋ぐ。

「その奥のワームホールを閉じる事さえできれば、この状況は抜けられる…現在の兵器で対処できないなら、もうウルトラマンの力に頼るしかない」

そう告げる遥の話を無言で聞いていた博樹は、ある提案をする。

「遥、お前がああのイナゴを一扫しろ。その隙にオレがワームホールに突っ込む」

「博樹さん…」

それは即ち、博樹は単独で破滅招来体の拠点に突入すると言う事に他ならない。無謀な策だった。

「オレはアグルの力が戻ってから、ずっと考えてきた。なんでオレ達はふたりなんだ？いや、幸いにも二人いるというべきか？」

「え……？」

その問いかけは、遥は一度も考えた事が無い内容で答えることが出来なかった。

「どちらかが居なくなっても、もう一人いる」

博樹が出した答えは、一人が犠牲になっても。その後はもう一人が守ることが出来る。そう言う意味だった。

その言葉で、博樹の真意を理解した遥はごくりと唾をのむ。博樹はこの戦いで死ぬ気なんだ。命と引き換えに地球を救う。だから後は頼むと、そういう意味なのだろうと。

その時、後ろから近づいてくる足音が聞こえた。第三者に今の会話を聞かれてしまったのか？そう思い振り返ると、そこにいたのは花丸だった。

「出口で待ってる」

そう言つて博樹は踵を返すと、ドームの出口へ先に向かって行く。

「花丸ちゃん……」

「なんで……なんで黙って行こうとするずら？」

そう言いながら花丸は遥へ歩み寄っていく。まるで責めるような口調で告げる花丸に、遥はうまく答えられない。

「どうしてみんなに黙って行くの？約束してくれたよね？『居なくなったりしない』って……」

そう泣きそうな表情で訴えてくる花丸に、遥は何と言つて良いのか解らなかった。

「ごめん……」

ただ一言、それしか言う事が遥には出来なかった。言えば必ずみんなは遥の身を案じて、引き留めるのと思ったから。遥は皆の視線が外れている隙に、その場を抜け出したのだから。

「行つてきますくらい、言つてくれてもいいのに……マルには頑張れつて言う事しか、できないけど……」

泣きながら、段々小さくなる声でそう告げる花丸に対して。遥は意

を決して言葉を紡いだ。

「花丸ちゃん：行つてきます」

そう優しく告げると、花丸は泣きながら頷くと無理に笑みを作る。
「行つてらっしゃい…」

そう震える声で返す花丸に、遙は無言で頷くと振り返つて博樹の後を追う。

「最後かもしれない…よく味わえよ」

「最後になんかしません！絶対にふたりでみんなの前に帰るんです」

真剣な表情でそう告げる博樹に、遙はそう返すと貰ったハンバーガーに噛り付く。そう強気で言い返しても、今の遙には不安で味など感じることは出来なかったが。

「どうなってるのよ一体!?!」

「とにかく早くドームへ行きましょう、皆さんが心配です」

鹿角姉妹は、ホテルからドームへ向かう道中。この騒動に巻き込まれてしまい、すぐ近くの避難場所も人であふれかえっていたため無人の街をドームへと走る。

「姉さま…あれ…」

理亜が怯えた表情で指さす先を見ると、うめき声をあげる魚と人を足したような半透明の不気味な幽霊のような影がいた。

だがその半透明は存在は、ただうめき声を上げるだけでこちらへ何かしてくるといった様子は無かった。

「うわああああああ！」

その時、誰かの叫び声が聞こえともかくそちらへと進路を変える。

「君！大丈夫ですか？」

そこでは物陰で怯える幼い少年の姿があった。聖良はその子へ駆けると優しく声をかける。

「姉さまー！」

そしてその後を理亜も追いかけるのだが、顔を上げた少年は彼女達とは別方向に再び魚人を見つけてしまい再び悲鳴を上げて顔を伏せ

る。

「どうしたんです!？」

聖良は少年を庇うように立ち上がると、別方向から覚えのある声が聞こえてきた。

「遙さん」

「聖良さんに理亞ちゃん、無事だったんですね？」

そう遙は2人の姿を確認すると、そう言って安堵する。と、その隣にいた少年の前に屈みこむ。

「外に出ちゃだめじゃないか」

「ねえどうしてウルトラマンは来てくれないの？」

その言葉に、遙と聖良は一瞬困ったような顔をするが博樹が少年の前に膝まづくと優しく声をかける。

「安心しろ。ウルトラマンは、必ず来るよ」

「本当?」

そう聞き返す少年に、「ああ」と頷くと2人は立ち上がる。

「ドームにみんな避難してます、この子と一緒に避難してください」

「遙はどうするの?」

聖良と違い、遙の正体を知らない理亞がそう遙に問いかける。

「僕たちは、自分にできることをし行く。ドームへ早く、ルビィちゃんが心配してたよ」

そう言って笑いかけると、背を向けて博樹と共に歩み去る。

「信じましょう、遙さんを」

「姉さま…」

呼び止めようとした理亞を、そう言って聖良が制すと。少年を引き連れてドームを指す。

人気の全くない広場に、遙と博樹は並び立つ。その視線の先には、暗雲立ち込める空がある。

遙は、手にしたエスプレンダーに視線を落とすと光は弱々しく輝いていた。

「光が…地球が弱ってる…」

そう呟く遥を見て、博樹も閉ざしていた口を開く。

「お前が居なければ、オレはここにいることは無かった」

「え？」

「悪い意味じゃない。オレは今、お前とここにいることを、誇りに思っている。感謝している、遥」

そう言つて隣の遥の方を見る博樹の表情は、晴れやかなものだった。きつと遥が居なければ、博樹は―アグルは人類を護る為に行動することはなかった。だから今、こうして戦えることが博樹には誇らしかった。

「僕だつてそうです…行きましよう!!」

そう返すと、2人は再び前を向く。すると2人の周囲にはどこからともなく光が漂い始める、まるでふたりがともに立ち向かうのを応援するように…

そして二人で右腕を掲げ、それぞれが身に宿した光の巨人の名を叫ぶ。

「ガイアーツ!!」

「アグルーツ!!」

そして空に赤と青。二つの光が舞い上がると、その中からガイアとアグルが現れた。

2人の戦士は頷き合うと、そのまま遥か天高く目指して飛翔する。

ドーム前まで来ると、少年の両親が必死に少年を探しにいこうとしている場面に遭遇するが、少年の姿を確認すると安心したように駆け寄る。

「ありがとうございます」

「いえ、たまたま出会っただけですから」

そう何度も頭を下げる両親に、聖良がそう返す。

「おねーちゃんたちありがとう!」

少年もそう礼を言くと、その時ガイアとアグルがその頭上を飛んでいく。

「ガイア、アグルがんばれー!」

そう言つて少年はふたりの巨人へ手を振る。

雲のように密集しているイナゴ擬きは、ガイアとアグルが向かつてくるのを確認すると群れでこちらへと突っ込んでくる。

「ジユワッ！」

ガイアは両腕からガイアスラッシュを乱射すると、その大軍を殲滅しようとする。だが無限と言つて良い相手物量を前に、完全に撃ち落とす事は出来なかつた。

ガイアが作つた道を、アグルは突っ切つて行こうとするが全身にイナゴが組み付いてくる。

全身を虫に這われるような不快感、そして噛み付かれる痛みを耐えられず。アグルは墜落し、地面の上をもがき苦しむ。

そしてガイアの体にも、アグル程ではないが少しづつ虫が付着していく。

地を転がるアグルは、全く振り落とせない虫を吹き飛ばすべく。よろよろと立ち上がると両腕を組み全身にエネルギーを集中させ、それを一気に解き放つ。

そしてその時背後に墜落してきたガイアが同様に苦しむのを見て、『遙！』と声をかけジェスチャーで解決法を伝える。

「ハアアア……デヤッ！」

同様にして全身に付着した虫を吹き飛ばすと、ガイアとアグルは並び立つ。するとふたりの目の前に、先程の虫が降り注ぎ、一体の怪獣となる。

頭頂部は魚の口のような器官があり、周囲には四つの目。そして顔面にも怪しく光る一つ目。更に背には翼のようなものが付いている不気味な怪獣へと変化する。

「ジユワッ！」

「ハアッ！」

ふたりはその怪獣へと駆け寄ると、二対一なのを活かした連携攻撃で攻めたてる。

「ぐわあ…」

首を絞めつけられ苦しむガイアに気が付いたアグルは、目の前の敵を蹴り倒すと駆け寄って再びその触手部分を切り落とそうとするが、その隙に起き上がったもう一体に背後から同様に絡め取られてしまう。

今度は全身を絡め取られ身動きの取れないふたりに、怪獣は鎌をちらつかせながら歩み寄ってくる。

『遙、行くぞー！』

『ああ！』

その掛け声によって、同じ向きへと同時にふたりが駆け出したことで2体の怪獣は引つ張られて激突する。

「ジュワァー！」

「デヤツ！」

その隙に拘束から脱出した二人は、それぞれアグルストリームとクアンタムストリームを放ちそれぞれ怪獣を撃破する。

すると今度は目の前に再び虫が降り注ぐと、三体の怪獣となって2人の前に立ちはだかる。

「これではキリがありませんわ…」

その映像を見ていたダイヤが、悔しそうにそう漏らす。

威嚇するように腕を振る怪獣の、膝の関節部が怪しく光るとそこにも目があることが確認できる。そして何かが来ることをさっしたふたりはすぐに構えを取る。

すると怪獣の胴の目、両膝の目の3か所からビームが放たれた。合計9本のビームは、ふたりのウルトラマンを爆炎に包み込む。

2人の戦士は、その攻撃に耐えきれず地に伏すとうめき声をあげ、すぐには立ち上がれない。

さらにこれまでの戦闘で消費したエネルギーとたった今のダメーシによって赤くライフゲージが点滅を始める。

「遙…」

「立って…立ち上がるのよ…」

梨子と善子が、その様子を見て涙ながらにそう繰り返す。

「もういい…逃げろすら…逃げてよ遙くん…もういいから！」

肩で息をして、後ずさるガイアとアグル。この物量攻撃に、さすがのウルトラマンも打つ手なしか。

誰しもがもうだめだと思ったその時――！

天が白く輝くと、天から光が三本降り注ぎ。三体の怪獣を跡形もなく吹き飛ばすのだった。

そしてその光が降りてきた場所から、白銀の光を身に纏った巨大な天使が舞い降りる。

そしてその天使が手を差し伸べると、2人のライフゲージは青い光を取り戻す。

「あれは…？」

「天使…？」

天使はその微笑みを崩さぬまま、白目の存在しない真っ黒な瞳で2人のウルトラマンを見つめていた。

55話 暗黒の中で／遥の決意

突如怪獣を蹴散らし、ウルトラマン2人のエネルギーを回復させた天使は更に魚人を街から消滅させてみせた。

「奇跡だよ！奇跡が起きたんだよ」

その映像を見て、そう千歌が喜ぶ。

「そうね…良かった本当に…」

そう梨子も安堵する。天使が現れた事によって脅威は去った。これでひとまずは安心だと。

「神々しいですね…」

「ビューティフォー…」

ダイヤと鞠莉も、そう各々の感想を漏らす。

すると天使が手をそつとウルトラマンの方へ向けると、アグルの体が一瞬だけ光ると引き寄せられるようにアグルが天使へと近づいている。

ガイアはそんなアグルへ一瞬手を伸ばすが、止めるべきか判断しかねているといった様子だった。

「…ツッ…危ない!!」

これまでその映像を他と違ってずっと無言を貫いていた果南が、咄嗟にそう叫ぶ。

『ハアッ!』

すると天使は突然胸の前に両腕を持つてくると、念動弾を形成すると。アグル目掛けてそれを放った。

その一撃は、その間に建っていたビルの中層を破りアグルの胴に突き刺さる。

「ぐあああああああ!?!」

完全に不意を突かれたその一撃は、アグルの体を遥か後方へ吹き飛ばした。

アグルは両手で、道路の両サイドにあるビルを掴んで停まろうとするがその手も外壁を破壊し、道路や歩道橋、果て高速道路の陸橋すら粉碎しながらアグルの体を吹き飛ばす。

そして天使がアグルを指さすと、今度は念力でアグルの体を宙へ浮かせるとアグルの全身に雷撃が走りアグルは苦痛に苦しむ声を上げる。

「うわあああああ…」

そして天使が腕を振り下ろすと、アグルの体は地面へと叩き付けられアグルはそのまま地に伏す。

「ヒロ!!」

果南は思わずそう彼の名を叫ぶが、映像には今の衝撃ですぐには立ち上がれないアグルが写っているだけだった。

『フッフ……』

「ウオオオオオオ！」

それを見る事しかできなかったガイアは、怒りに両の拳を握りしめると駆け出し自身の倍は大きい天使目掛けて飛び掛かって行った。

「デエヤアア!!」

『ハッ!』

だが天使が再び放った念動弾は、今度は周囲のビルや車を吹き飛ばしその爆風でガイアを吹き飛ばした。

「ウワアアア…」

そしてガイアの体は地面に叩き付けられ、その地下にガスの配管でもあったのか大爆発が起こる。

—ガイアが…

—あの天使は何なんだ!?

先程と一転して、ウルトラマンを一方的に痛めつける天使にある人は絶望し、またある人は声を荒げる。

「何なのよアレほんとに天使なの!？」

そう思わず喚く善子に花丸は「違うぞら」と即答する。

「あれはきつと…ウルトラマンを抹殺するために送り込まれたぞら」

そう告げる花丸の表情は、今にも泣きそうなほど苦しげだった。

『アハハハハ』

そう肩を震わせて笑う天使に対して、ガイアは何とか起き上がる。しかし天使は今度は右腕にエネルギーを集めると、それを光線として

ガイア目掛けて放った。

「グアアアッ!？」

その一撃を胸に食らったガイアは、先程アグルに食らわせたのと同様の念力によって更に体を電撃が走りダメージを受けつつも持ち上げられ、再び地面へと叩き付けられる。

今度は先の爆発で地盤が緩んでいたのか、ガイアの体は地面に埋まってしまう。

「う…ぐわ…」

―ピコン…ピコン…ピコ…ピコン…―

なんとか地面に手を付いて上体を起こしたガイアだったが、今のダメージでライフゲージが不規則に明滅を始める。

「光が…光が消えちゃうぞ…」

満身創痍で脱出し、それでもなお立ち上がるガイアを見て花丸がそう漏らす。本心ではもう逃げて欲しい。でも遥がそれを絶対にしないのも解っていた、それがとても辛かった。

天使はそんなガイアを見て口元を綻ばせると、再び指先からビームを放ち今度はガイアの胸にそれを当て続ける。

「ぐあああああー!」

そのダメージによってガイアはついに膝を付いてしまう、だがそれでも攻撃は止むことなくガイアを攻め続ける。

「デヤアアアアー!」

その時だった、飛び上がったアグルが天使とガイアの間飛び込みガイアの代わりにその攻撃を受け始める。

そしてそのままアグルは、天使の方にその攻撃を受けたまま飛び掛かる。

『博樹、やめろ!』

ガイアは肩で息をしながらそう叫ぶが、アグルは止まらなかった。そのまま拳を突き出して天使へと真っ直ぐ向かって行く。

そしてあと少しでその手が届く。そう思った時だった。

―ピ…コン…

アグルのライフゲージの明滅が停まり、完全に光が失われた。

『ハアツ！』

そしてビームを放つのをやめた天使は、念動弾でアグルの体を吹き飛ばした。そして今度は苦しむ声も、抵抗することもなくアグルの体は真つ直ぐダメージが抜けきらず動けないガイア目掛けて飛んでいく。

「うおっ!?…ぐっ…」

ガイアはそれを受け止めようとするが、威力を殺すことが出来ずにアグルを抱えたまま後方のビルを何棟も破壊しながら吹き飛ばされる。

10棟ほど破壊して、ようやく止まることが出来たがガイアのライフゲージの明滅もそれと時を同じくして停止してしまふ。

そして2人のウルトラマンは、その目からも光を失い地に伏してしまふ。

『アツハハハハ』

それを見て天使は愉快そうに笑うと、両手をガイアとアグルへとかがず。

「2人のウルトラマンが、負けた…?」

理亞もドームのモニターに映し出された映像に、思わず両手で口を押えながらそう呟く。

「遙さん…立って、立ち上がった…」

その隣で聖良もそう小さく呟くが、ウルトラマンの体はピクリとも動かず。体からそれぞれ赤と青の光がもやのように立ち昇ると、天使の体へと吸い込まれていく。

「やめて…もう写さないで…」

梨子がそう思わず呟く。だがそんな言葉が中継している人間に届くことがあるはずもなく、力なく横たわるウルトラマンの姿が大きく映し出された映像が流れるだけだった。

だがそんな映像にも変化が訪れる。ふたりの巨人の体から光が出し尽くされると、その巨体はみるみるうちに小さくなり、やがて本来の姿―遙と博樹の姿が映し出された。

―ウルトラマンが人間…?

—まだ子供じゃない…

—神様じゃなかった…

—ただの人間に、地球が救えるはずないよ…

そんな人々の落胆する声が響き渡る。9人は、ただ現実を受け入れられないといった様子でその映像を見ていることしかできなかった。

「嘘…？遥が…？」

ガイアの正体は遥だった。その事実をしった理亜は、その場を飛び出した。聖良も彼女を追ってその場を飛び出す。

「遥が、ウルトラマンガイア…あの子私達にも黙ってずっと…」

母親には、ウルトラマンの敗北以上にガイアの正体が遥だったことがショックだった。

怪獣に変えられて梨子達を襲わさせられた父親を、人間として眠らせたのは他でもない遥自身だったことを示していた。そんな重荷を、息子がずっと背負っていたなんて知らなかった。

「ゾグ…『対ウルトラマン』用の兵器。これでやっと地球も終わりね…」

ビルの上からジルビアは天使がウルトラマンを圧倒する光景をただ眺めていた。

「ウルトラマンが敗北した今、人類がどれだけみつともない行いに走るのか…見ものね」

「君、そんなところで何してるんだ？危ないから避難しなさい」

視線を声のした方に向けると、一人の成人男性が地上からシルビアにそう叫んでいた。

「どうせ滅ぶ星の、どこに逃げろというの？」

「何を…？」

そう告げると、シルビアは腕を振るう。すると男性の体から力が抜け倒れてしまう。

「そのまま寝ていなさい、そうすれば苦しまずに終わる…」

そう言って再びシルビアは天使を見つめる。その目には、寂しさや嫌悪の感情が宿っているようにも見えた。

気が付けば遙は、半年前見た夢と同じ場所に立っていた。砂漠化した地球で砂に埋もれるガイアとアグルの姿が見える、この場所に。

「あの天使みたいなやつは、オレ達を倒すためだけに現れた。最終兵器が天使とは、ヤツら神を気取っているらしい」

気が付けば、隣には博樹が立っていた。暗い表情で、博樹は続ける。「だが、オレ達は勝てなかった…!」

実際問題、不意打ちだったとはいえガイアもアグルも、あの天使に手も足も出なかった。

「負けてない！僕はまだ―」

強気にそう言い返す、もう一度挑んでそのうえで勝利すればいいと。そう告げ、エスプレンダーをとり出すが、遙の表情は一変する。

「ツ……光が……」

そこにはもう光は灯っておらず、真っ黒になっていた。そして次の瞬間、エスプレンダーが粉々に砕け散る。

「うわあああああー!」

そう叫んで遙は飛び起きた。先程の光景は夢だった、そう安堵するのもつかの間。握りしめていたエスプレンダーをとり出すと、発光部分の一部が割れ中の基盤が見えていた。

「はあ……はあ……んんはっ!」

そこで遙はようやく自分が見慣れる空間に居ることに気が付いた。どこかのホテルの一室だろうか？気が付けば綺麗なベッドの上で寝かされていたのだ。

「遥大丈夫!」

「気が付きましたか？」

先の叫び声を聞いてか、鹿角姉妹が遥の方に駆け寄ってくる。

「理亞ちゃん、聖良さんまで…僕は、どうしてここに？」

「理亞と一緒に、私達が泊まっているホテルまで運んだんです」

「そうですか、ありがとうございます」

そう聖良に教えられ、遥はそう礼を言う。

「そうだ、みんなは？A q o u r sのみんなは？」

「大丈夫、みんな無事です。ただ…」

「ただ？」

一瞬言うのを躊躇う聖良だったが、意を決して遥に真実を伝える。

「ウルトラマンの関係者だからと、マスコミに囲まれてしまっ…」

「魔女狩りのつもりみたい、最低よね」

そう言いにくそうに告げる聖良の隣で、理亞も憤りを感じているようだった。その後、天使は消えてしまったがドームにいた浦の星の関係者はマスコミに色々追及されてしまっていること、博樹の姿は見えなかったことが明かされる。

「ごめん…僕は、手も足も出なかった…」

そう呟いて、遥は下を向く。ウルトラマンの戦いは、負けてはいけないものだと思っていたのに。それでも、勝つことが出来なかったと。

「そんなことない、遥はずっとみんなの為に戦ってたんでしょ？」

「理亞ちゃん…」

「それに、まだきつとチャンスはある！」

そう理亞は真剣な眼差しで遥に告げる。まだ終わりじゃないと。

「この建物に、ウルトラマンだったと思われる人物が潜伏しているようです！」

そんな声が廊下の方から聞こえてきた。

「嘘、もう見つかったの？」

「いえ、まだ私たちが遥さんを匿つてるとまでは解っていないはず…」

そう言っつて、聖良は荷物を漁ると遥にあるものを渡す。

「遥さん、これに着替えてください」

「え？でも…」

「そのボロボロの制服じゃ、あなたがガイアだって言いふらしてるよ
うなものです。見つからないうちに早く」

それに遥は渋々従った。

「梨子ちゃん、大丈夫？」

「千歌ちゃん…うん、もう大丈夫」

千歌は、廊下隅のベンチに腰掛ける梨子にそう心配する声をかける。梨子は大丈夫だというが、その顔には疲れが伺えた。

ウルトラマンガイアの姉だからという理由で、あれこれマスコミに聞かれたことで精神的に疲弊しきっていた。

「全く勝手よね？今まで守ってもらったって凶々しいったらありやしない」

そう言つて善子が隣にやれやれといった様子で座り込む。梨子だけでなく、A q o u r sも浦の星の生徒もあれこれ絡まれて正直うんざりしていた。

「遥…無事よね？」

「聖良さんと理亜ちゃんが探してくれてるし、今は信じるしかないよ」
「そうね…」

全員で口裏を合わせて、知らず存じずを貫いたがそれでもウルトラマンが敗北してすぐマスコミが来て、それから数時間質問攻めにあっていた。

以前ゼブブが現れた時に言った言葉『人類が助かる道は唯一つ、ウルトラマンを差し出せ』このセリフを真に受けている人間が一定数居るのだろうか。

だから遥と博樹の行方を捜している。そんな本音が見え隠れするような質問ばかり投げかけられては、梨子だけでなくみんな精神的にはかなり参っている筈だ。

「やっぱりわたし、探しに行く!」

「おやめなさい、入れ違いになつて事態を悪化させかねませんわ」

じっとしてるのは性に合わない、果南がそう飛び出そうとするがダイヤはそれを制した。

「でも…」

「果南、今は無事を信じて待ちましょ?」

鞠莉にもそう言われ、渋々果南は座り込む。

「花丸ちゃん…」

ルビイは花丸の隣に座つて、彼女を心配するがやはりガイアの敗北を見せつけられたことがかなり精神的に來たらしく。彼女も塞ぎ込んでしまつていた。

曜もそんなみんなの様子を見て、なんとか元気づけたいと思つたが自身にもその余裕は無く何も言う事が出来なかつた。

「遙さん、準備はいいですね?」

「いや…でもこれ…」

「大丈夫、似合つてますから」

「それはそれで嬉しくありませんが…」

ホテルの一室で、聖良に渡された格好へと着替えた遙へそう声をかけるが遙は凄く嫌そうだった。

それもそのはず、今遙が聖良と理亞が着ている制服と同じものを着ていた。

「しよがないでしょ?これしかないんだからほらこれ被る」

そう言つて理亞は帽子を遙にかぶせる。流石にメイクだったりウィッグだったりまでは準備できなかつたが、流石に浦の星の男子生徒である遙が函館の学校の女子制服を着て出てくるとは思うまい。幸い聖良と背恰好が同じと言う事で予備の制服を着させられたのだ。

「じゃあ行きますよ」

そう言つて聖良が扉を開けて外へ出る。聖良の後ろについて遙は下を向いて歩くが、その後ろには理亞が付いてきてくれている。

「ひとまずドームに向かいましょう、皆さんを安心させないと」

そう告げる聖良に、遥は無言で頷く。

「すいません、ここにウルトラマンだったと思われる人物が潜伏しているのですが何か知りませんか？」

エレベーターで一回に降り、もう少しで外というタイミングでマスコミの一人に話しかけられてしまう。内心舌打ちする遥と理亞だったが、聖良は全く動揺しなかった。

「いえ、知りませんね。友達が体調悪くて病院へ連れて行きたいので失礼します」

そう言って聖良は遥の手を引いて外へ出る。こういう時でも動じることなく対処できる彼女を、改めて凄いところの時遥は思った。

「どうしました？」

そんな遥の視線に気が付いたのか、聖良がそう振り返って尋ねてくる。

「いや、あの状況で全く取り乱さないのが流石というか……」

「あそこで変に狼狽えると気づかれてしまうかもしれないからね、私も内心冷や冷やでした」

そう言って聖良は笑う。

街に出ると、相変わらずイナゴ擬きによって空は覆い尽くされ時間の感覚が狂いそうになる。そして外出禁止令は解かれていないのに関わらず、外に出ている人の姿も見受けられる。

—もう終わりだよ！

—何やったって人類は助からないんだ！

ウルトラマンの敗北によって、人々は生きることが諦めようとしていた。そんな声ばかりが遥の耳に入ってきて、彼の心を締め付ける。

「遥……」

「ううん、大丈夫。まだ手はあるはずさ、それに僕はまだ諦めたくない」

その街の声に、理亞が心配して遥に声をかけるが遥はそう言って無理に笑う。

「みんなの輝きを……この決勝にかける気持ちを……こんな所で終わらせ

たかないんだ」

そう告げる遙に、理亞と聖良も同意の意を持って頷く。

「でもどうするの?」

「ひとまず博樹さんと合流できればいいんだけど…」

そう言つて遙はおもむろに周囲を見渡すと、先程の戦闘によって倒壊したビル群も見える。それでも遙はまだ諦めたくなかった。まだ何かあるはずだ、ネットワークさえ復活すればアルケミースターズの仲間たちと知恵を合わせて打開策を模索することもできるのにと歯がゆさすら感じる。

「そこのお嬢さん方」

急に声をかけられてそちらを向くと、そこにもマスクミの人間が立っていた。幸い距離があつたのと遙の声が高めなのもあつてまだバレてはいないようだった。

「どうされました?」

そう聖良は相変わらず平静を保つてそう聞き返す。

「この辺にウルトラマンが居るらしくて知らないかなつて思いました」

「知りません、急いでいるのでこれで」

そう言つて聖良は遙の手を引いてその場を去ろうとすると、相手は遙に視線を移す。

「君は知らない? 教えてくれると嬉しいんだけどな」

だが正体がばれる訳にはいかない遙は、相手と目を合わせず下を向いたまま首を横に振る。

「しゃべれない訳じゃないだろ? ちゃんと顔見せてしゃべってくれな
きや」

だがそれが気に入らなかつたのか、遙が目深にかぶっている帽子に手を伸ばす。

「何するんですか?」

思わず聖良も大声で抗議しようとするが、相手の手が帽子に当たつてしまい遙の顔が晒される。

「しまっ…」

「いたぞー！ウルトラマンだ！」

遙かの顔を確認した男性がそう叫ぶと、奥からぞろぞろと人が群がる。

「ごっちー！」

人気のない方を理亜が指さしたので、一目散にそちらに駆け出す。今捕まるわけにはいかなかった。人気のない路地だったりを不規則に曲がりながら撒こうとするが、向こうも諦めない。

「狙いは僕だ、2人は違う方へ逃げて！」

「何言ってるの？そんな事できない！」

「そうです、ともかく今は走るべきです」

自分を犠牲にしようとする遙を、理亜と聖良はそう叱責する。今更見捨てる筈ないと。

その時だった、遙には見慣れた車が目の前に停まる。

「乗って！」

それは十千万の車で助手席から千歌の母親がそう声をかける。一家総出で応援に来てくれていた千歌の家族が、自分達を探しに来てくれたのだ。

「最高のタイミングですね」

「遥行って！」

「なら2人も」

「わたしと姉さまは大丈夫、ウルトラマンの友達よ？」

「遥さん、地球を頼みますー！」

そう言うと、姉妹は囿となって走り出す。そしてその反対方向へ、遙を乗せた車は走り出すのだった。

地球を頼む。その言葉を受けて、遙の決意は一層強まるのだった。

56話 地球の叫び／Mission GAI A

一度遙たちは東京を離れ、内浦を目指していた。

「博樹さんは？」

「私達も探したんだけど…多分あの騒ぎの後、自力で移動したんだと思う。バイク無くなってたし」

そう美渡に教えられ、遙はひとまず安堵する。博樹も無事なのだと。

「でもどこへ行ったか解らないのよね…」

「僕に心当たりがあります」

そう、遙には心当たりがあった。光を失った博樹が、向かうであろう場所に。

そんな時、車の通りが無い山中の道を突き進んでいると突如地響きが起こる。

「何!？」

一度車を停止させ、外を見ると地底からティグリスが現れる。

「ティグリス…」

「こんな時に地球の怪獣まで出なくなっちゃっていいのに…」

「これが破滅なの…?」

「違います!」

そう怪獣の出現を不安がる姉たちに、遙は違うと即答する。

そしてそれと時を同じくして、世界中で怪獣たちが一斉に目覚めた。アメリカでは以前ガイアと戦ったのと同じ個体のゾンネルが、函館にはシャザックが。

他にも今までガイアやアグルと戦った、ギールやゴメノスをはじめとした怪獣達が一斉に目覚めたのだった。

そしてその怪獣たちは一斉に、地球の力をーマグマを空のイナゴへと放ち青空を取り戻そうとしていた。

「これは…地球の叫びなんだ」

全身を赤熱化させ、空へ攻撃を行おうとするティグリスの前にカイ

ザードビシが飛来し戦闘になる。

世界中でも同様に、怪獣たちを倒そうとカイザードビシが現れ戦闘に入っていく。

だがカイザードビシの力は強く、ティグリスは苦戦を強いられる。

「こんな時に何もできないなんて…僕はウルトラマンになれなきや何もできない人間だったのか…?」

「そんなことないわ」

同じ地球に生きる命が精一杯頑張っているのに、何もしてやれない無力さに打ちひしがれる遙に、違うと千歌の母は言う。

「あなたはウルトラマンだったから、みんなを守ってきたの?それは違うでしよう?」

「それは…」

「ウルトラマンとしての力は与えられたものかもしれないけど、それをどう使うかを決めたのは遥くんでしょう?」

そう問いかけられ、遙は答えを言い澀んでしまう。

「ありがとうございます、今まで皆を守ってくれて」

「いえ、僕は自分にできることをしただけです」

「ほら、遥くんはちゃんと自分で答えを持つてるのよ」

そう言っつて千歌の母は笑う。

「ありがとうございます」

それに遙はそう言っつて笑うが、だが状況は好転しない。

「そうだ、僕を博樹さんの所に連れて行ってください」

そう言っつて車へ乗り込むと「どこに行けばいいの?」と聞かれるので、遙ははつきりと目指す先を告げる。

「淡島へ」

そうはつきりと告げる遙に対して頷くと、一同は淡島へ向かう。

そして博樹は遙の予想通り淡島に戻っていた。そして彼は一人海

を見つめていた。

「オレはここで、アグルの光を手にした。だがもうオレの中に、光は無い……」

天使にアグルの力を奪われ、もう自身にアグルに変身する力も残されていない。だがここに来ればまた光を得られるかもしれない。

そう思つてここへ戻つてきたが、やはり海が光を授けてくれることは無かった。

「オレは……どうすればいい……？」

「まだできることは残っているはずよ」

いきなり後ろから声が聞こえ、博樹は咄嗟に振り返る。

「母さん……」

「どんなに空がイナゴに覆われていても、宇宙からニュートリノは降り注いでいる」

いる筈のない母親に、博樹は驚きの色を隠せないが相手はそれを無視して話を続ける。

「地球は独りぼっちじゃない、広大な宇宙と地球は……繋がっている……」

「待つてくれ、母さん！」

そう後ずさりながら続ける母、麗華はそう告げるとそのまま周囲の闇に溶けるように消える。博樹の咄嗟に伸ばした手も、届くことは無かった。

それでも博樹には、今自分のやるべきことをしっかりと見据えることが出来た。

淡島へたどり着いた遥は、以前鞠莉に教えてもらった事を思い出していた。

『実はホテル近くの地下に〈プロノン・カラモス〉っていう施設があつてね。そこにはヒロのお母さんの研究も残されてて、ヒロは何かあつたらそこか海辺によくいるわ』

その会話を鞠莉がしたのは、ゾーリムと戦つた後博樹と再会した時のことだった。彼女も博樹が心配で、同じウルトラマンの遥なら彼を

変えてくれると思つての事だつたのだろうが結局遥は一度も音連れ
たことは無かつた。

だが初めて来たこの場所は、未稼働だと聞いていたものの現在稼働
状態になつていているようで間違いなくいると思ひ遥は中へ入つていく。
「どうなつてるんだこれ…」

施設内では蒸気が噴き出し、何かの装置をフル稼働させていること
が見て取れる。

「オレ達にはまだやるべきことがあつたぜ、遥」

奥の方から博樹のそう告げる声が聞こえた。声のする方へ駆け寄
ると、博樹は装置のコンソールをせわしなく操作していた。だがその
手には迷いはなく、次々と操作していく。

そして複数あるコンソールの画面を見て、遥が博樹が何を操作して
いるのか理解した。

「ニュートリノの発生システム…？こんなものをどうして…」

だが、何の目的でそれを行っているのかすぐに理解できなかつた遥
だつたが、答えを貰わずともそれを察することが出来た。

「そうか、ニュートリノなら地中を貫く。地球自身をネットワークに
した、通信システムを」

ニュートリノは他の物質とほとんど反応せず、宇宙から無数に降り
注いでいてかつ宇宙で最も豊富な素粒子なのだ。

これを元にするこゝで、空を電波に干渉できるドビシに囲まれたと
してもニュートリノを元にできれば通信を回復させることができる
はず。

「母さんが教えてくれた」

「え…？」

博樹の母は既に亡くなつてゐる筈、そう思つて思はずそう漏らす遥
だつたが。そこで遥をここまで送つてくれた美渡が遥に追いつく。

「通信が回復するの？」

「はいー」

「わかつた、じゃあ千歌たちにも2人の事伝えとく」

「お願いします」

短くそう言葉を交わすと、家族にもその事を伝えに彼女は戻っている。そこで遥も博樹の作業を手伝いに入るのだが、そこでようやく博樹は遥の方を見たのだが真剣だった表情が一瞬で怪訝そうな顔に変わる。

「お前…その恰好どうした？」

「え…？あついやこれは色々あつて…」

「そか…」

色々と誤解を受けてそうだったが、博樹は遥へ指示を飛ばして装置を動かしていく。

「クリシスにログインできた、光子ネットワークを復活させる」

そう言つて博樹が一度息を吐く。これで通信回線は生き返るはずだと、遥はこのゴタゴタでスマホを忘れてきていたのでまだ志満か美渡がいる筈だと外に出る。

「これで通信が復活したはずですよ」

そう告げると、スマホを確認すると「本当だ」と声を上げる。千歌の家族にみんなへの連絡は任せて博樹の元へと戻る。

すると、ダニエルから博樹の元へ通信が来ていた。

『君たちにもう一度、地球の力を戻す』

「どうやって？」

丁度戻つてきた時に聞こえたその言葉に、遥は思わずそう身を乗り出す。

『すごく無茶な方法だが、これに賭けるしかない。世界中で、アルケミースターズのみならずXIGの皆がスタンバイしている。後は任せよう』

そう告げるダニエルの口から説明された作戦『ミッションガイア』の全容がこうだ。

推進システムとして搭載されているリパルサーリフトを応用し、リパルサーフィールドという特殊なバリアー状のものをファイター下部に展開。

そこに怪獣たちの持つ地球の力をぶつけさせ、エネルギーとして照射し一点に集め、その力を以てウルトラマンを復活させるという大変

無茶なものだった。

現に、アルケミースターズのメンバーも「怪獣は生きている、どんなスーパーコンピュータでも計算が追いつかない」と苦言を呈した。それでもダニエルの「僕たちのできる事、僕たちの力を信じるんだ」と鼓舞し、計算が間に合わないなら自分達はマニュアルで計算し、照射角を選定するという手法をとる事となった。

だがこの作戦には他にも問題があった。怪獣達ももう限界が近いのだ、現に数体の怪獣は既にドビシに全身に組み付かれ倒されてしまっていた。

更に酸素濃度は太陽光を遮られたことで 徐々に減少し、気温も下がる一方。

もうこの決死の作戦しか、人類には残されていなかった。

「本当!?!」

『うん、2人とも無事!今できることを頑張ってるよ』

千歌は遥と博樹の無事を教えられ、表情が明るくなる。アルケミースターズによつて、通信状況が回復したことをニュースでも取り上げられていたがまさか2人の手によるものだったとは思わなかった。

「みんな、2人とも無事だつて!」

「良かった…」

その知らせに、全員がそう安堵し胸を撫で下ろす。二人の行方が解らなくなつて気が付けば丸一日立つており、かなり肉体的にも疲労が溜まつてきていたが一同に笑顔が戻る。

「遥くん良かった…本当に…」

そう安堵していると、今度は姉から一枚の写真が送られてくる。遥と博樹が通信回線を復活させている様子が写っていた。

「遥くんの恰好つて…」

「ワーオ!これは似合ってるね!」

当然今の遥の服装が気になるのだろう。鞠莉はそう言つて似合うと絶賛していたが。

「でもこれ多分聖良さんのだよな?」

そうリボンの色で判断した曜が、疑問に思っていると「私が貸しました」と声が聞こえる。

「聖良さん！」

「変装だったんだけど、結局バレて追い回されて大変だったけどね」
「千歌さんのご家族のお陰で助かりました」

そこにはマスクミを撒いたのであろう鹿角姉妹が戻ってきていた。

「遥のこと、ありがとうございます」

「いえ、今まで遥さんに…ウルトラマンに守ってもらってたのは私達です」

そう頭を下げる梨子に、聖良はそう言って応じる。

「なんでまた東京に？」

「地球で一緒に生きる者の力が、そこに集結するんです」

ミッシヨンガイアによって、世界中の怪獣たちのエネルギーが収束する場所は東京に決まった。これはドビシを殲滅するために、一番巨大な東京上空のワームホールを潰すためだ。遥はそう説明する。

淡島から戻ってきた時に、一度家に戻る時間を貰った遥は自分の制服に着替えると父の写真の前で一度手を合わせる。

(行つてきます)

そして博樹と共に、遥は東京へと戻る。

その一方でXIGは昨日のドビシとの戦闘で損傷した新型ファイターだけでなく従来の戦闘機にリパルサーリフトを搭載したファイターの合計10機が世界中へと飛び立っていった。

ウルトラマンが敗北したとしても、人類はまだ絶望しきつてはいなかった。遥と博樹だけでなく、XIGやアルケミースターズといった。地球の為にこれまで戦ってきた者たちは、まだ抗えると。

最後まで足掻く、万策尽きるその時まで。そう口にはせずとも、誰もがそう思っていた。

東京へと遙たちが戻ってきた時、東京ではミズノエノリユウが単身ドビシの群れと戦闘を行っていた。

だがこの地の守り神ともいえるミズノエノリユウでさえも、キリのないドビシの数に力を浪費させられさらに現れたカイザードビシによつて接近戦を挑まれており、苦戦を強いられていた。

「ミズノエノリユウが」

「もう力があまり残ってないんだ…」

だがその時、XIGのステインガーが援護に現れた。ミズノエノリユウと共に、遙と博樹が力を取り戻すまでここを守り抜いてくれると。そう宣言して。

「光が届くまで、オレ達が守ってやるよ」

その頼もしい援護によつてカイザードビシの撃退に成功し、当初の予定ではもうすぐ光が届く。遙と博樹は工事建設予定の更地に立っていた。光の余波で、他の人を巻き込まない為に。

「遙くんー!」

2人ただ無言で、光が来るはずの空を睨んでいると不意に背後の方から自身を呼ぶ声がしたのでその声の主の方へ視線を移す。

「花丸ちゃん、みんなも!」

そこにはAqoursとSaint Snowの11人の少女たちの姿があつた。

「ヒーロー!絶対!絶対!絶対に勝つて!!」

「じゃないと…マリーが、ウルトラウーマンになっちゃうからね〜!」

そう叫ぶ果南の隣で、鞠莉もそう悪戯っぽく叫ぶと博樹も表情を綻ばせると笑顔で右手を上げる。

「どうしてここに?」

そう遙は皆の方へ駆け寄るとそう問いかける。

「XIGの人がここでふたりを勇気づけて欲しいって」

そう答えるのは曜だった。恐らくアルケミースターズの中で遙の

学生生活を知るものはそう根回しをしてくれたのだろう。

遥と博樹だけでなく、誰よりも2人の身を案じていたであろう少女たちを安心させるために。

「遥……」

「姉さん」

その背後から、泣きそうな顔をして梨子が歩み寄ってくると遥も少しだけその表情を曇らせる。

「心配してたのよ……？」

「ごめん……でも今度は絶対……絶対勝つから、見てて？」

「うん……信じてる」

いつも梨子は自分の事を心配していた。ガイアだと知る前から、戦う為に毎回誤魔化して行方をくらます遥の事を。そんな姉に、遥はそう優しく笑って見せる。

「ずら丸だって心配してんたんだからね」

そう言って善子が花丸の手を引いて割り込んでくる。あの時彼女は遥を引き留めようとしたし、あの光景を見ているのだから当然だ。

「マル……怖かったすら、遥くんが死んじゃうんじゃないかって……」

「ごめんね、でも大丈夫だから……もう何処にも行かないから」

気が付けば気を使ったのか、周りは気を利かせて聞こえないように距離を取っていた。

「今度はちゃんと、ただいまって言うから」

「うん、みんなと待つてる」

「じゃあまた後で」

そう告げると、遥は再び戻っていく。地球の光が届くまでもう数分しか残されていない。

「ありがとね」

その時、善子の前を通って短くそう告げる。善子も何か言いたげだったが、遥はそれを聞くことは無かった。

「オレ達がウルトラマンになったら、またあの天使ヅラしたやつが来るぞ」

「もう負けません、だって待つてくれる人が居るから」

博樹が、遙にそう告げると、遙はそう即答した。それを聞いて博樹は一瞬、果南や鞠莉、ダイヤの方を見ると視線を戻す。

「そうだな…」

そう呟く博樹の顔は、一瞬だけだったが笑って見えた。

一方で、世界中で怪獣たちが自身の頭上で滞空するファイターへ火球を放った。そしてファイターはリパルサーフィールドを展開し、それを受け止める。

本来想定されていなかった使用法、さらにはどの角度で怪獣の攻撃が当たるかもわからない。だが受け止めたファイターの姿勢から、各機に一人ずつ担当でついたアルケミースターズのメンバーがそれぞれ角度の計算を行い、遙と博樹の待つ東京へその光を放たせる。

ファイターのパイロットも、かなりの衝撃に耐え小数点以下の細かさで機体の仰角を調整する技術が求められる。

そして寸分の狂いもなく、エネルギーへと変換された光は、東京という一点を目指して世界中から集まってくる。

「遙くん、もうすぐ来るよー!」

「みんなおふたりの事、信じてますからね!」

そうルビィとダイヤが、X I Gの関係者が操作していた計器を見て光がここへ近づいていることを教える。

それに遙が手を振っていると博樹は別の場所で違うものを見つけたのか「遙」と声をかけると首を振ってそちらを向くように仕向ける。

「母さん…」

車から降りて遙の方を見つめる母親に、遙はそう小さく呟くだけでお互いの声は聞こえない。母には知られなくなかった、自分がガイアだと言う事。それを母は知っているから、遙を見つめる表情は色んな感情が入り混じっていることが見て取れた。

だがそれもつかの間、母はこちらへ笑うとサムズアップをしれくれた。遙もそれを受けて、同様に笑うとサムズアップを送る。

―絶対に関勝つから、見てほしい

言葉にはしなかったが、そんな遥の気持ちは母へと届いた。少なくとも遥はそう思っていた。

そしてついに2人の頭上に光が集まる。

「来たぞ遥……」

「うん…行くこう!」

そう2人は声をかけあうが、その目は空をしつかりと見据えていた。そして二人は天から降り注ぐ光へ手を伸ばす。

辺り一面に天から降り注いだ光によって周囲は真っ白に塗りつぶされる。

その光の中心で、ふたりはそれぞれが身に宿していた巨人の名を再び呼ぶ。

「ガイアアアアア!!」

「アグルウウウウ!!」

そしてその光が止んだ後、一瞬の静寂が訪れる。そしてその一瞬の静寂を破って、2人の巨人が大地へと盛大に土煙を上げて降り立つ。

ウルトラマンガイアスプリーム・ヴァージョン

ウルトラマンアグルV2

地球に生きる命の力を借りて、今ここにふたりのウルトラマンがよみがえった!

57話 地球はウルトラマンの星／光の海

「ガイアアアアアアッ!!」

「アグルウウウウッ!!」

地球に住むみんなの力を借りて蘇ったガイアとアグルは盛大に土煙を上げて着地する。

「ガイア!」

復活したガイアを見て、花丸は嬉しそうに名を呼ぶ。

そして2人のウルトラマンは立ち上がるとお互いを見ると頷き合う。

「タアッ!」

「ジユワッ!」

そして同時に暗黒に囚われた空を睨むと、今度こそ空を取り戻すために天高く飛び立つ。

2人はそれぞれ東と西、別の方向へと飛び立っていく。するとドビシの群れが前回同様にウルトラマンの体に張り付かんと大軍で押し寄せてくる。

「ハアッ…デリャア!!」

「デュワッ!」

それはアグルはりキテイターで、ガイアはクアンタムストリームでそれぞれ薙ぎ払うと、連鎖した爆風によって青空が顔を覗かせていく。

「空が…空が晴れてくよ!」

ガイアとアグルが飛び立った東京を起点に広がっていく青空をみて、曜がそう顔を輝かせる。

その間にもガイアとアグルは世界中を飛び回り、光線を放ち続けドビシの群れを焼き払って行く。

世界中の空に、光を取り戻すとガイアとアグルは再び東京の地へと舞い戻ってくる。

するとガイアの後方に、突如天使が現れガイアへと念動弾を放ちガイアを撃ち落とす。

『ハアッ!』

「ウオアアアア!?!」

完全に不意を突いた一撃に、ガイアは防御もできずまともに食らってしまいそのまま地面へ叩き付けられる。

それを見て天使は悠然と地上へと降り立つ。

「ハアッ!」

「デヤッ!」

再び派手に砂埃を上げながらガイアの近くへと降り立ったアグルが拳を握り、ファイティングポーズをとると。ガイアは跳ね起きて同様に構える。

「ふたりとも、頑張つて…!」

昨日手も足も出なかった天使と再び戦闘に突入する2人へ果南はそう祈る。そして天使は、前回ウルトラマンを完封して見せた念動弾を放つ!

「ハアッデヤッ!」

2人は同時にバリアーを展開し、それを重ねることで念動弾を押し返した。

「凄い、今度のガイアとアグル…!」

「うん…うん!」

前回大ダメージを受けた攻撃を、今度は完全に押し返して見せた2人の姿に、そう聖良と理亜は驚きの声を上げる。

「よーし、いっけえ!!」

「遙くん!」

「遙!」

そう千歌が勢いよく叫ぶ隣で、花丸と梨子が遙の名を呼ぶ。

「勝てる…勝てますわよ!」

「ヒロ〜ファイト!」

ダイヤと鞠莉もそう嬉しそうに声を飛ばしていた。そしてガイアとアグルの反撃が始まる。

「デュワッ!」

「ハアッ…デヤ!」

フォトンエッジとリキデイターが天使に直撃し、天使は思わず仰け反る。

「デリャアアア！」

「ダアツ！」

更にクアンタムストリームとフォトンクラッシュャーによる追撃で、相手に反撃の隙を与えない。そこに加えて、ガイアスラッシュとアグルスラッシュを二発ずつ交互に放ち天使の体を更に仰け反らせ大きな隙を作り出す。

「デュワー！ハアアア……デヤツ!!」

「ハアツ！オラアア!!」

トドメと言わんばかりの勢いで胴目掛けて放ったシャイニングブレードとフォトンスクリューが天使の腹を貫く。

『ウツ………ヌウウウウウ……』

この波状攻撃でかなりのダメージを負った筈の天使だったが、腹を抑えて苦しむが次第にその声が地の底から響いてくるような不気味なものに変わる。

『ハアツ……ハアツ……ウワアアアアアアアアアア!!』

怒りの雄たけびを上げる天使は、腹を抑えていた手を広げるとその体を一気に膨れ上がらせる。

ただでさえ100mを優に超える巨体を持っていた天使だったが、その姿をスカイツリーよりも巨大なものへと変貌する。

グリフオンのような四本のビルのような太い脚に、龍のような鱗に覆われた身体に余計にその体を大きく見せる翼、女性的な綺麗な手は鋭利な爪の生えたものへと変貌した。

「何……？あれ……？」

「黙示録の怪物……」

最早天使とは呼べなくなった化け物に、ルビイと善子がそう呟く。ガイアとアグルもその変化に驚いていた。

『ウワアアアアアア!!』

化け物はおぞましい叫び声を上げながら二本の後ろ脚だけで立つと、前脚がそれぞれビルを粉々に踏みつぶす。そして口からは今まで

よりも強化された念動弾を打ち出す。

「ハアッ！セヤッ！」

咄嗟に反応したアグルが同様にバリアーを打ち出すが、円形に渦を巻いているバリアーは少しずつ押され、形も歪になってしまう。

「フッ！デヤッ！」

反応の遅れたガイアも同じくバリアーを打ち出したことで、なんとかその念動弾を押し返す。

そしてガイアは助走をつけると、目の前の化け物へと飛び掛かるが手で簡単に叩き落とされてしまう。

「ドワアアア!？」

更に目の前に落下したガイアを、化け物は踏みつぶそうと右脚を踏み出す。ガイアは立ち上がり両腕でそれを防ごうとするが圧倒的な体格差によつてあえなく地中へと踏みつぶされる。

だがすかさずアグルが飛び出しその足をどかしたことで、ガイアはその隙に化け物の頭上へと飛び上がる。

そしてガイアは右足に、アグルは左足にそれぞれ赤と青の光を纏わせ急降下する。

「デヤアアアッ！」

「デアアアアッ！」

2人の蹴りが、化け物の側頭部から王冠のように生えていたトサカを左右それぞれを粉碎し、化け物は苦痛によつて悲鳴を上げる。

そしてふたりは更に正面から突っ込んでいくが、揃って両腕で弾き飛ばされ地面を転がる。さらにそこへ追撃として放たれた念動弾が直撃し、ふたりは火花を散らして後方へと吹き飛ばされる。

だがそこでガイアとアグルを守るように、ミズノエノリュウが化け物へと立ちはだかる。

『ミズノエノリュウ！よせ、下がるんだ！』

そうまだ膝を付いた体勢で、ガイアがそう叫ぶがミズノエノリュウは化け物を威嚇するように吠えると尻尾に付いている頭から光弾を次々に発射して攻撃を行う。

だが先程の戦闘で消耗していることもあつてか、化け物からすれば

かゆい程度にしか感じていないのか簡単に手で払い落とされると、逆に念動弾による反撃を受けてしまい。ミスノエノリユウはその攻撃に苦しむ。

「ウワアア………ハアツ!!」

その光景にガイアとアグルは怒り、両手を握りしめながら起き上がると同時に飛び立ち怪獣の喉へ突撃するとそのまま喉を貫く。

化け物は喉を抑えて苦しんだ後、翼を広げて飛び去って行くガイアとアグルを走って追いかけてくる。その一步一步がビルを潰し、街を破壊していく。まさに動く大災害だった。

ガイアとアグルは、ある程度距離を離すと滞空して化け物の方へと向き直る。そして二人はアイコンタクトを取ると、ガイアはゆっくりと地上に降り立つ。

「行くぞー!」

そのガイアの掛け声で、地上のガイアと空中のアグル。それぞれウルトラマンが最強の一撃を放つべくエネルギーを充填させる。

「デヤツ! デヤアアアアアアアツ……」

「ハアツ! ラアアアアアアアツ……」

ガイアは右腕を掲げた後、両腕を回して頭上でエネルギーを溜めた後両手を合わせたまま胸の前へ。アグルが胸の前で両腕を組むんだ後腕を回して、斜めに一直線に腕を広げ、右腕が上になるように腕胸の前で重ねエネルギーを集中させる。

「デヤアツ!!」

「ゼヤアツ!!」

そしてガイアは左手を下へスライドさせ、アグルは肘に拳を当てたまま右腕を立ててL字を組みそれぞれ最大まで集中させたエネルギーを解き放つ!

ガイアのフォトンストリームとアグルのアグルストリームは一つになると地球ストリーム・エクスプロージョンに生きる者の光となって化け物の胴体を貫いた。

地球に生きる者達の力を借りた一撃によって化け物の体は粉微塵に爆散する。こうして、この星に生きる命の輝きにより地球に光が戻ったのだった。

決着が付き、夕日を背に立つガイアの周りに人々が集まってくる。口々に「ありがとう」などの感謝の言葉を投げかけながら。

そしてガイアの隣へ、アグルが青い光を纏いながら降り立ってくる。2人の巨人は向かい合うと、ハイタッチするとそのままその手を握る。

地球を救うという同じものを目指していた筈なのにすれ違い、時に激突したふたりの手によって人類は滅亡の危機を脱した。

「遙くん！」

足元を見ると、花丸を先頭に11人の少女たちが集まってきた。果南は目に涙を浮かべてアグルを見つめるとゆっくりと頷き、アグルもまた同様に頷く。

足元に集まってくる少女たちに、ガイアとアグルは一度正面を向くとそのまま光に包まれて縮んでいく。そして光が晴れると、遙と博樹が少女たちの目の前に並んで立っていた。

「花丸ちゃん、『ただいま』」

遙は目の前の少女にそう笑顔で告げる。この言葉を言えたことで、遙はやっと戻ってこれた。そう感じる事が出来た。

「うん…『おかえり』」

花丸もそう涙を浮かべながらそう返すと、遙の目は涙が光っていた。

「ヒロ」

果南がそう博樹に声をかけると、遙たちのやりとりを見ていた博樹がこちらへ視線を移す。

「約束、また破ろうとしてたでしょ？」

昨日ドビシの大軍を何とかしようとワームホールへ突っ込もうとしたことが、どうやらバレていたらしい。

「いや、そういうつもりじゃ…」

「ヒロはいつもそう、一人だけ危ない事すればいいと思ってる……待ってる方の気持ちも考えないで…」

そう果南は責めるように告げるが、その声は徐々に震えていった。

「悪い…オレはこんな生き方しかできないらしい」

「知ってる、だって何年の付き合いだと思ってるの？」

「…そうだったな」

そう申し訳なきように告げる博樹に、果南はそう笑って答える。博樹にとつても、果南が今までの人生で一番付き合いの長い相手だ。そんな相手だからこそ、心を開いて本音を言い合える。

「次は、お前らの番だぞ」

「そうだね」

博樹も、純粹に果南達が――A q o u r s がステージの上で輝くのを見たかった。だからこそ、決死の覚悟で戦ったのだ。

戦いの余波で東京の街は大打撃を受けてしまった。ガイアとアグルも、人々が避難し終わった無人地帯を戦闘の場を選んではいたが、だからと言ってその場所をどんなに破壊しても良い訳では無い。

それでも人々は、また新たな希望を見つけて生きていく。今日は今よりも日が沈んでも、明日にはまた日が昇るように。

ラブライブ決勝は、結局一週間延期になった。中止にならなかったのは、是非開催したいという人々の熱い声援があったから。そして会場のアキバドームは避難場所になっていた事もあって、ウルトラマンが死守してくれたからだ。

それまでの一週間、遙は気が気でなかった。一番は、一度天使に敗北した時に中継で自分がガイアだとバレてしまったからだ。

あの後クラスメイトには色々と質問攻めにあっただし、外に出れば名前より『ウルトラマンガイア』と指さされるが多かった。何より母親に知られたことがかなり堪えた。事の経緯を説明し、そして父の事をちゃんと話したが恐らく人生で一番心臓に悪い時間だったと記憶している。

それでも母は、遙を責めることはせずただ「ありがとう」と告げ、遙を抱きしめた。

きつと父も、遥の姿をどこかで見てくれていた。あの戦いの後、確かに遥はそう感じた。

そして迎えた、ラブライブ決勝の日。

— WATER BLUE NEW WORLD —

スモークがたかれ、本当に雲の上のようなステージで少女たちは歌い、踊った。

この1年間、本当に沢山の事があった。スクールアイドルとの出会い、そして学校の廃校。彼女達の輝きを追い求めた物語は、決して順風満帆ではなかった。沢山の困難に激突し、乗り越えられなかったものだってあった。

そしてこのステージを最後に、このメンバーでラブライブのステージに立つ日はもう2度と来ない。

それでもこの瞬間を精一杯輝き、楽しんだ。

この曲は、そんなこの瞬間を楽しむ気持ちと新しい世界へと羽ばたく覚悟の歌だ。そう遥は感じた。

そして、観客のもつサイリウムが青く輝き作り出される光の海の中で彼女達は輝いていた。

全てのグループがパフォーマンスを終え、今大会の優勝グループの名前がステージ後方の巨大モニターに表示される。

そしてそのグループの名は—

『Aqours』

彼女達はやり遂げたのだ。学校の名前を大会の歴史に残すという、学校みんなの願い。そして彼女達が探し求めていた『輝き』もそこにあった。

そして優勝したAqoursへのアンコールを催促する声が会場へ響き渡る。そしてそれに応えて、彼女達はもう一つの曲をその場で披露したのだった。

—青空Jumping Heart—

「みんな、おめでとう」

その日の帰り、遥は笑顔でそう9人を迎える。

「ありがとう！」

そんな遥に、代表して千歌がそう答える。沢山の困難にぶつかつたが、少女たちはこの一年間追い求めてきたものを掴むことが出来た。

「帰りましょう、浦の星へ」

ダイヤのその言葉で、優勝旗を一旦保管すべく学校を目指して帰路につく。帰りの電車の中では、みんな疲れ果てて眠ってしまい会話は無かった。

そして学校へと帰ってきた彼女達だったが、眠りから覚めても優勝旗がそして2曲披露した事での疲労感が現実だったことを教えてくれる。

「わたしたち…やったんだね？」

「うん、優勝して…学校の名前を残したの」

まだ信じられないといった様子で呟く千歌に、梨子がそう告げる。自分達はやり遂げたのだと。

「学校の皆の想いも、先輩達自身の願いも全部叶えたんです！」

遥もそう言葉を紡ぐと、千歌は嬉しそうに笑う。

やり切ったんだという、その実感を胸にその日は解散となった。

「ねえ遥」

「どうしたの？」

その日の帰り、姉に不意に呼び止められた。

「閉校祭の時から思ってたんだけど…何か隠してない？」

そうまっすぐ遥の目を見て、姉である梨子はそう問いかける。やはりずっと一緒に生活してきた姉を誤魔化すのは無理か。そう思って遥は転校の話が来ていることを話した。

「そうなのね…」

母親には話したが、先生にも母にもA q o u r sのみんなが決勝を終えるまでは話さないでほしいと頼んでいたので、そのこと自体は隠せていたが。何かを隠しているという事実までは誤魔化せていなかったと言う事だ。

「遥はどうするの？東京に戻る？」

「まだ決めてない…でも、もうすぐ期日なんだよね」

遥は表情を少し暗くしてそう答える。ラブライブの決勝が伸びてしまった事で、考えることが出来る期間は縮まってしまった。それでも遥は、決勝が終わるまでその事を考えることを拒んでいた。

それに、ゾグとの決戦以降。結果的に人類最後の希望であった『ミッシヨンガイア』を提案したアルケミースターズのメンバーであるだけでなく、ウルトラマンガイアとして戦った遥を評価してくれる人は多く。来てほしいという声は強まったと担任には告げられていた。

それでも遥には、今の仲間の元を去る事が自分にとって本当にプラスなのか答えを出せずにいた。

「遥の人生だから、遥が本気で行きたいのなら…行くべきだと思う」
どうすればいいか解らない。そう悩む遥に、梨子はそう優しく告げる。

「私たちの為にとって残ってくれるのは嬉しい。でもね？みんなも、遥の本当にやりたいことを頑張ってほしいって本気でそう思ってくれるはずよ？」

そう告げる梨子が思い出しているのは、きつと夏休みの事。ラブライブの地区予選より、ピアノのコンテストに出て自分の気持ちに答えを出してほしいと千歌に告げられた時の事だろう。

「うん、わかってる…とにかく今日は、優勝おめでとう！姉さん」

「うん、ありがとう」

そう姉弟は笑い合っていると、家に帰る。もうあとは三年生の卒業をもって、この学校での生活は終わる。そんな寂しさも、この日だけはもう考えないようにした。

そして少しだけ時は戻り、決勝の直後。東京の街を見渡す一人の少女が居た。

「ゾグを倒すなんて…流石は地球に選ばれた人ね…でもお陰で、もう一回お姉さんたちの舞台が見られた訳だけど」

そう呟く少女の視線の先には、1週間がたつてもまだ色濃く残る戦闘での破壊の跡。普段感情の見えない彼女の表情も、今回ばかりは憂いを帯びていた。

「でも都合のいい生き物よね、人間も…わざわざウルトラマンが負ける光景を見せつけられれば絶望して、ゼブブの言葉を思い出したかのように魔女狩りを始めたくせに。勝てば今度は英雄扱い…」

どこか昔を思い出すような目で、今度はそう呟く。声音に怒りの感情を覗かせて。

「ゾグがやられた以上、もう私以外に手出しできる存在はいない。私の望み通り、私の手で終わらせてあげる…」

そう誰にでもなく告げると、少女はその場を去る。そして彼女は遂に、『人類と地球を抹消する』為に行動を開始する。

58話 いつかの約束／怪獣の身代金

ラブライブの決勝から数日後、もう卒業式を残すのみとなった三年生は休みの期間に突入していた。

それぞれ、進学先や就職先の近くに引越すための準備など思い思いの時間を過ごしていた。

「やっと来た」

「オレから言い出した約束だからな」

淡島で、果南の実家の営むダイビングショップに博樹は客として訪れていた。高校に入学してすぐに交わした約束を、卒業を目前にしてようやく叶えることが出来た。

「それで、何が見たいの?」

「ただ海の中が見ればそれで」

相変わらず素っ気ないなと感じながらも、そんな博樹の態度に果南は笑みをこぼす。ずっと待っていた日常が、やっと帰ってきたんだと。

道具を一式準備していると、博樹も「手伝う」といってボンベ等を運ぶのを手伝ってくれる。

そして道具の説明等を受けて、博樹と果南は海に出る。

「やっと来れたね」

「そうだな…」

「もつと嬉しそうにしてよ、相変わらず素直じゃないなあ…」

一言だけ素っ気なく返す博樹に、果南は苦笑いしながらそう漏らす。

「本当は優しいのにな、遙くんに聞いたよ?お正月に星を見に行った時、雨雲を払ったのはヒロの提案だったって」

「アイツ余計な事を…」

そう博樹は少々イラつき気味にぼやく。事実、ブリッツプロツツとの戦闘でお互い消耗した身体で無理をして雨雲を二人がかりで吹き飛ばしたのは、博樹が遙に手伝えと言って連れ出したのだが。

「みんなありがとうって喜んでたよ」

「そうか…」

そう告げられて、博樹は恥ずかしそうに顔を逸らしてしまう。

「へー？珍しく照れてるんだ？」

「うるさい…もう一人で潜る」

「初めてなのにホントに大丈夫なの？」

「……………」

そうやって茶化すと、博樹はそっぽを向いて暫く一言も発さなくなってしまう。さすがに果南もおちよくりすぎたと思つて「ごめんつて」と謝つたが、それでも博樹の機嫌はすぐには戻らなかった。

目的の地点で船を停めると、上着を脱いでウエットスーツ姿になった2人は酸素ボンベを背負つて海へ入る。

まだ三月なので、ダイビングにはまだ幾分寒いだがそれが功を成して他に客はいない。果南の先導で、2人は海へと潜っていく。

その先で見たものは、綺麗に透き通つた水中を自由に泳ぐ魚たち。そしてその中を、まるで魚になったかのように泳ぐ2人。

博樹はふと、頭上の海面を見上げるとその向こうに見える太陽の輝きに手をかざす。この美しい景色が、自分が求めてきたもの。これが、自分の守りたかつたものなのだと実感した瞬間だった。

「どうだった？」

海から上がると、果南はそう博樹へと問いかけるが。返ってくる声は大体想像ついていた。

「綺麗だった…本当に、ありがとうな。連れてきてくれて」

「どういたしましたして、でもわたしもこの三年間ずっと楽しみにしてたんだよ？」

「そうだったな」

博樹から礼を言われて、そう笑顔で返すと博樹もそう言葉は素っ気なくとも笑顔で応じてくれる。

「お前がこつちにいるうちにこれて、ホントに良かった」

そう博樹は続ける。卒業したら果南は海外に行くので、ここでダイビングと一緒にすることは出来なくなる。

だから卒業までにとここ最近はひたすら念を押しただが…。

「ま、でももう帰ってこない訳じゃないから。またその時行こうよ」
「そうだな」

そうだ、自分達の夢の為にこの場所を離れてもまたきつとここに戻ってくる。だってみんな、この町が大好きだから。

「それにさ、鞠莉とダイヤが言ってたんだ」

そう切り出して果南は空を見上げる。

『『この空は繋がってる、どんなに離れてても』って』

「そう…そうだな、オレ達はずつとこの空で繋がってる」

そう言つて博樹も空を見上げる。どんなに離れていても、姿が見えなくてもみんな同じ空の下でこれからも生きていくのだ。

「何見てるの?」

帰りの船の上で神妙な面持ちでタブレットを睨む博樹に、果南がそう問いかける。

「ん? ああなんでも南極の氷の下から、古代怪獣『アルゴナ』の卵が見つかったんだと」

「怪獣の? なんか怖いなあ…」

そう告げられて、果南は難色を見せるが。博樹は何でもないといった表情で目を合わせる。

「どうせ生きてないだろ、何千年昔の卵だと思ってる?」

「いや、だって怪獣でしょ? 嫌な予感するけどなあ…」

「心配性だな、いざとなれば倒すさ」

そう不安げに呟く果南に、博樹は笑ってそう返す。

だがその不安は、的中することになるのだがこの時はそんなことはまだ誰も知らない。

その卵は、南極から日本のジオベースまで調査の為に輸送されていたのだが、なんとその輸送機は突如機体下部に穴が開いて墜落。卵も行方知れずとなってしまうた。

「ヒロいるー?」

翌日鞠莉は、博樹が今現在腰を落ち着けている『プロノーン・カラモス』を訪ねてきた。

元々母親が働いていた研究施設で、居住空間もあるので母を喪つて身寄りの無い博樹はここに住んでいた。

「何の用だいきなり…?」

「ちよつと見て欲しいものがあるんだけど…」

普段と違つて真剣な表情でそう告げる鞠莉に、博樹も何かあると察して彼女を中に入れる。

「これなんだけど…」

そう言つて鞠莉は一枚の紙を手渡すと、博樹は真剣な表情でそれを読むと。一転してかなり渋い表情をして鞠莉に返しながら告げる。

「なんだこの汚い字は…」

「だから脅迫状だつて」

「いやそれは解るが何だつてこんな…」

『脅迫状』そう告げる鞠莉が持つてきた用紙には、手書きで内容が記さ
れていた。

—地球人へ告ぐ

怪獣の玉子はわれわれ

フルータ星人が貯かつ

た。われわれには、

みのしろきんと引

きかえに王子を返す

用意がある。すみやかに

にGURDにしらせない

フルータ星人―

そうあり得ない程汚い字で誤字脱字だらけの文章が、それともう一つ。恐らくアルゴナの卵であろう写真とカセットテープが付随していた。

「小学生みたいな字と文章だが…まあ写真は本物みたいだな…」

「じゃあこのテープも…」

「今時カセットテープなんて使わんだろ…」

そう言つてカセットテープをしげしげと見つめる鞠莉とは対照的に呆れたような顔で博樹は立ち上がると、しばらく他の部屋を漁つてから戻ってくる。

「それは？」

「これでそのテープを流すんだよ、母さんの私物も残してたのが役に立った」

そう言つてテープをセットして、そこに録音された音声を再生したのだが…

「…っ!？」

「こっこれは…」

思わず耳を塞いで博樹は慌ててテープを止める。恐らく何かの鼓動だと思ふのだが、それ以外にも不快な音が混じっておりとてもではないが聞けたものではなかった。

「なんだこれ…?」

「すっごい不快な音だったわ…」

「ともかくこのテープは保留だな…」

そう言つてテープの事は一旦忘れることにしたのだが、他の資料は概ね本物の様だった。

「それに金の延べ棒を寄越せつて続いてたのよ…ヒロはどうすればいいと思う?」

そう鞠莉は不安げに聞いてくる。無理もない、いきなりこんなものを送り付けられれば不安にもなるだろう。

「こういうのはG・U・A・R・Dの仕事だろ? 通報したらどうだ?」

「でも知らせないって書いてるし…」

「だからって、お前が身代金払ってどうする？ 怪獣の卵渡されても困るだろ？」

「それはそうだけど…」

そう諭すように告げると、鞠莉はそう言って視線を落とす。するともう一人来客が飛び込んでくる。

「ヒロ、本当に大変な事になってるよ」

そう言って訪れて来たのは果南だった。「どいつもこいつも…」とあからさまに嫌そうな顔をした博樹だったが、それでも果南も中に入れる。

「鞠莉、どうしたの？」

「それが…」

鞠莉もいることは想定外だったのか、そう果南が聞くので事情を追って説明するのだった。

「そんな事になってるんだ…やっぱり通報するべきじゃない？」

「果南もそう思うだろ？」

そう提案する果南に、博樹はそう同調する傍ら。何やらパソコンで調べ物をしていた。

「何見てるの？」

「アルゴナがどんなもんかと思ってな？ 肉食で卵ごと巨大化して生まれてすぐ50m程度になるらしい」

そう告げると、果南と鞠莉の顔は青くなる。

「まあ何千年も南極の氷の下に卵のまま眠ってたんだ、もう生きちゃいないだろ」

「全く…ヒロは相変わらずジョークが面白くないんだから」

「そーだよ、脅かさないでよ。」

そう言って和ませるつもりだったのだが、2人にそう強く反発される。

「やっぱりヒロに相談するんじゃないわ」

「いきなり来ておいてそれは無いだろ…」

などと言い始める鞠莉に、博樹もさすがに困惑した様子だったのだ

が。鞠莉はそんな彼を余所にスマホをとり出すと、ある人物に電話をかけ始める。

そしてそれから小一時間程経過した後、ダイヤもこの場所を訪れる。

「で、なんで私が呼ばれたのですか…?」

いくら休みの期間中だとしても、いきなり淡島まで呼び出された彼女には正直同情する。そんな彼女に事情を話すことから始まる。

果南もダイヤも、まず字が汚すぎることに顔をしかめることから始まる。そして『宇宙人が頑張って手書きしたから』という結論に落ち着く。

「じゃあ金の延べ棒は?」

「金なら足が付くからか…:それか純粋に金属として利用するのに一番理想的だからかのどちらかだな」

そう博樹が思いつく推論を述べるが、もうすでに宇宙人であることは確定で話が決進んでしまっていた。

「それにしても…:なんで鞠莉さんの家にこんなものが届いたのでしよう?」

「さあな…:大方金のために、金持ってそうな奴の家ってことで目星をつけられたのかもな」

「ただ、私も通報するべきだと思いますわ。こういうのはやはり私達の手に残りますし…:」

「ダイヤまで…」

四人中三人が、通報すべきと言い切った事で鞠莉も渋々といった様子だったがそれに従う。するとG・U・A・R・Dもすぐに対応してくれて、調査が開始された。

そして翌日、事態は急速に動き始めた。

アルゴナの卵内の音を録音したテープは本物らしく、やはり卵は生きているということの間違いないというものだった。そして、日本の

気候によって早くも卵が孵ってしまうかもしれない。

「ほら、本物じゃん…生きてるってよ?」

「悪かったよ…」

果南にそう言われて博樹はめんどくさそうにそう返す。

「だが、卵から電磁波が出てることが解った。これをたどればフルータ星人の居場所が分かる」

そう言っただけで博樹は一つのUSBメモリをとり出す。なんだかんだ言っただけで博樹も鞠莉達があまりにも不安がるのを不憫に思っただけで一人動いてくれていたのだ。

「じゃあマリー達で、そのフルータ星人を懲らしめに行きましょう」

「そうだね」

「ちよつとお待ちなさい。危険すぎます」

そう告げる鞠莉と果南をダイヤがそう言っただけで止めようとする。

「そうだ、いくらなんでも危険すぎる。大体、こんなもん送ってくる宇宙人と出くわしてたら命がいくつあっても足りん」

そう呆れた様子の博樹は、G・U・A・R・Dに自身が解明した電磁波の情報を送る。ここはプロに任せるべきだといった様子だった。

「ちよつとヒロ」

「ただの一般人、それも女の子がそんな危ない目にあいに行く事ないだろ」

脅迫状なんて送り付けられて当初は怯えた様子だった2人は、相手の尻尾を掴んだ途端に強気になっていく。

そんな二人にやれやれといった様子だったが、博樹はそう言っただけで引き留めようとするもすぐに態度を改める。

「ま、言っても聞かんだらう。条件がある」

「条件?」

「オレも行く、それが条件だ」

その言葉によって、4人はその電磁波を追う事にする。博樹がノートパソコンを鞠莉の車の車内で操作し。そのナビに従って運転するといった手法を用いて。

だがその時、想定外の事が起きる。卵が動き始めたのだ。

「移動し始めた…？まさか感付かれたのか？」

「どこに向かっているの？」

「そのまま北へ真っ直ぐ、山の方へ向かっている」

「やっぱりやめませんか？」

博樹がそう告げると、鞠莉は周りに車が居ないのいいことにアクセルを踏み込む。その助手席でタイヤがそう青ざめながら告げるが、聞く耳をもたない。もつともタイヤが怖がっているのは鞠莉の運転かもしれないが…。

結局G・U・A・R・Dの車両が後ろをついて来るといった事態に発展したまま、とある無人の山岳地帯にまでたどり着いた。

行き止まりまで車を走らせると、目の前に町工場の人間と町医者 of 四人の男性が丘の方を必死に上ってきた。

「ここのはずなんだが…」

そうやって博樹は周囲を見渡すが卵らしきものは見当たらない。そこで目の前の人間に気が付いた果南が「どうしたんですか？」と声をかける。

「待て果南、こんな所にこんな格好した人が普通居る訳ない。アンタらがフルータ星人だな？」

「いや私ら、古田鉄工所のもので…」

そうやって誤魔化そうとする初老の男性の言葉で、博樹は納得した顔をする。

「なるほどな…鞠莉、こっからは警察の仕事だ。通報」

今のやり取りで全てを悟った博樹は、馬鹿馬鹿しいといった様子で車へ戻っていく。

そう、フルータ星人というのは古田鉄工所の人間の自称だったのだ。たまたま卵が輸送機から落ちてきたので、悪知恵を働かせたとの事だった。

「そこまでだーフルータ星人!!」

そこでやっとな追いついてきた隊員がガトリングを鉄工所の人間に向ける。

「大人しく卵を返せ！」

その言葉で、全員が卵の存在を忘れていた事に気が付く。そして真後ろの崖から、怪獣アルゴナが顔を覗かせる。そして怪獣に気が付いて腰を抜かしたダイヤを真っ直ぐ涎を垂らしながら見つめると手を伸ばしてくる。

「ピギャアアアアア!!」

そう悲鳴を上げるダイヤだったが、誰も咄嗟に助けに入れない。そのまま食べられてしまうのかと思ったその時だった――

「オラアア!!」

だがそこで博樹が変身したアグルがアルゴナを蹴り飛ばす。そしてゆっくりと着地するアグルに、アルゴナは腕を振って威嚇した後真っ直ぐアグルへ突進する。

だがそんな相手をアグルは回し蹴りで後退させ、振り下ろす怪獣の腕を回避してその腹に的確に拳を打ち込んでいく。完全にアグルに手玉に取られていた。

そんな状況に、アルゴナは頭に血が上ったのか強引にアグルを押し返すと、尻尾で薙ぎ払おうとする。しかしそれも飛び上がったアグルにそのまま両足を使ってに連続の蹴りを側頭部に叩き込まれて怪獣は昏倒する。

そして怪獣は何か起き上がるが、そのまま細かい鳴き声を上げて再び倒れ込むと動かなくなってしまう。

「やった勝った！」

「さすがヒロね」

「た、助かりましたわ…」

そう言つて三人はほっとするが、それはアルゴナの死んだふりで警戒を解いたアグル目掛けて口から光線を放つ。

アグルは棒立ちのままそれをモ口に食らい、辺りは爆炎に包まれる。

「ヒロー！」

果南が博樹のみを案じるが、アルゴナは勝ち誇るかのようになり立ち上がると両腕を振って喜ぶが、煙が晴れると無傷のアグルが現れる。

アグルは両拳を握りしめるとアルゴナへ駆け出し、連続で顔面を殴りつけるとそのまま頭を掴んで投げ飛ばす。

普段のカウンター重視の戦闘スタイルから一転、相手に攻撃の際を一切与えず苛烈な攻撃を与え続ける。

アルゴナもなんとか反撃しようと再び光線を放つが、アグルは一瞬で空中へ飛び上がるとそのまま急降下キックを繰り返す。

「フンッ！ウオオオオオオ…」

その蹴りによって派手に転倒したアルゴナに止めを刺すべく、アグルはエネルギーを胸の前に球状に集中させる。

「ハアッ！デリヤア!!」

そしてそのエネルギーの塊を両腕で押し出す必殺の一撃、フォトンスクリューでアルゴナを貫き粉微塵に爆殺するのだった。

そしてそんな様子を確認するまでもないといった様子でアグルは果南達の方に振り返ると、車に戻れとジェスチャーで伝える。そして車に戻った三人を手に乗せてそのまま飛び去ってしまった。

そして現場には、古田鉄工所関係者とG・U・A・R・Dの隊員だけがその場に残された。

古田鉄工所関係者の人間を未だに、アルゴナを暴れさせようとした凶悪な宇宙人『フルータ星人』だと思いついでいる隊員によってあの四人がどうなったのか。博樹たち四人は知ることは無かった…。

59話 遥の答え／破滅の人形

ゾグとの決戦、そしてラブライブの決勝から数日が経過した。人々は平和な日々を過ごしていた。それでも、破滅招来体との戦いの日々は終わりを迎えた。そう信じて――

そして卒業式と閉校式を明日に控えた今日、遥は転校か統合先の学校へそのまま進級するのか答えを迫られていた。

母親には、先生からその話を告げられて直ぐに相談していたが「好きなようにすればいい。遥の人生だから、遥が行きたい道へと進んでくれればいい」そう告げられた。

そして決勝の後も梨子を除くAqoursの皆には、相談することができないまま期日を迎えてしまったのだ。

「結局、どうするの?」

「まだ決めてない」

その日の朝、梨子にそう聞かれた遥は正直にそう答えると。梨子は驚いた表情を浮かべた。

「今日までじゃないの?」

「そうなんだけどさ…」

遥はそう気の抜けた返事を返す。無理もない、ゾグとの戦いで世界中に自分がガイアだと中継されてしまい。さらには通信回線の復活やそのゾグを、破滅招来体と戦ってきたこともあり来てほしいという声が増えてしまったのだ。

それがどうにも、「ウルトラマンが居る」というネームバリューの為である気がして遥はあまりいい感情を持たず、学校へ行く事自体に抵抗を感じ始めていた。

あの時、地球に生きる皆の力を借りて取り戻したガイアの光は今も遥の中にある。あの時のガイアとアグルは、ゾグすら圧倒できる強大な力を持っていた。人類だけでは絶対手に入れられないであろう、圧倒的な力を今も遥は持っているのだ。

だから、その手綱を握っておきたいという考えの人間も一定数いる

のだ。大っぴらにはしなくても、遙や博樹を目の届く場所に置いておきたい人間が。

でも実際遙も量子力学を本気で学んでいきたいと思っているので、そのためにより高度な授業を受けられる学校に行きたい気持ちがない訳では無い。

今度はリパルサーリフトのように手伝いではなく、遙の発明として世間に出したいのだ。

「アン…」

その時、不意に足元から鳴き声が聞こえる。視線を落とすとそこには一匹の子犬が居た。

「おはよう、『プレリユード』」

そう言つて梨子がその子犬を抱え上げる。梨子が決勝が終わつた後犬を飼いたいと言い出した時は驚いたが、以前のあることの出会いが彼女の犬嫌いを克服させるきっかけになつたのだ。

そんな姉と子犬のじゃれ合いを遙は笑つて見守る。決勝が終わつてからは本当に色々あつた。千歌の家のしいたけにも二匹の子犬が産まれ、メスだったのかと驚いたのも記憶に新しい。

「でもちゃんと決めないと先生にまた呼び出されるわよ?」

「わかつてるよ…ギリギリまで伸ばしてもらつてるわけだし…留学は流石にすぐ断つたけど」

あの後、海外からも有名な大学に飛び級で来ないか?などの声も増えた。さすがにこっちは本心も見え透いていたので即答で断つたが。

そんな会話も、家を出ればピタリと止まる。千歌達他のメンバーの前でしたくなかつたから。相談すればみんなの意見に流されて答えを出してしまうと思つたから。

「私は…行つてほしくないかな…」

「え?」

「ううん、なんでもないわ」

ぼそつと梨子の口から出た言葉は、遙の耳には入らず。聞き返されても梨子が答えることは無かつた。

放課後までに答えを出さなければならぬ遥だったが、やはり決めきれず。昼休み一人図書室で悩んでいた。

気が付けばほとんどの本が図書館に寄贈される等して、残されているのは少しの机と本棚、それに段ボール数個分程度の本しかないので利用している生徒は居ないに等しい。

「やっぱり僕は…」

渡された転校先のパンフレットを見ながら遥は一人呟く。悩んだけど、やっぱり自分の気持ちは元々こつちよりだった。ならもう迷う必要はない。

「何唸ってるぞら?」

「花丸ちゃん…」

不意に聞き馴染んだ声だし、視線を上げるとそこには花丸が立っていた。

「それが行く学校の資料ずらか?」

「いや、行かないよ」

遥が睨みつけていたパンフレットを見てそう問いかけるが、遥はそうあっけらかんと答えると。持っていたパンフレットを机に放る。

「転校はしない、今から先生にそう言ってくる」

「…いいの?」

遥がそう何の事でもないように答えると、花丸はそう神妙な表情で問いかける。

「いいんだ。それに転校しても、多分僕のしたいことは出来ないし」

遥はそう笑って答える、これでいいんだと。

そう言って遥は図書室を去る。自分の答えを告げに。

「本当にいいの?向こうの学校の方が、桜内君のレベルに合っていると
思うけど…」

「いいんです。だって僕は、この町が好きですし。…それに、自分の進路もちゃんと考えてますから」

「ならいいけれど…」

担任としても、勿体無いという感想もあるのだろう。だがしかし、遥には自分の進む道は少しずつつ見えてきているつもりだった。だから、これで正解なのだと。

「じゃあ先方にはそう伝えておくから、桜内君もみんなと一緒に統合先へ進級するって」

「はい、お願いします」

そう告げた後、遥は職員室を後にする。その表情に、迷いは無かった。

「本当に良かったの？」

「…知ってたの？」

廊下に出ると、いきなりそう声をかけられたので遥は声の主にそう返す。

「いや、他の先生に呼ばれてて今さっき偶々…でもいいの？遥頭良いし…」

「善子ちゃん」

そう言いかける相手の言葉を、遥は遮る。

「そんなの大学行けばどうとでもなるし、行っただって仕方ないよ…」

そう言っただけで遥は顔をしかめると、善子は深刻そうな表情を浮かべる。

「やっぱり、ガイアだって知られちゃった事…？」

そう告げられて、凶星を付かれた遥は少し苦笑いを浮かべると無言で頷く。無論それだけではないのだが、最近はそのが一番大きい理由で断ったのだ。

「そんなじゃないよ、みんなとまだ一緒に居たいだけ」

そう言っただけで遥は無理に笑って見せる。すると善子はまだ何か言いたげだったが「それでいいなら」と言っただけでそれ以上は追及することは無かった。

「でも、辛い事があったら相談しなさいよ？リリースが無理ならわたしもずら丸もルビイだって…」

「うん、ありがとう」

そう言って遙は先に教室に戻る。その背を、善子は何とも言えない様子で見つめていた。

その日の放課後、今のところ練習は現在行っていないのでそのまま下校するのだが遙は一人で先に帰っていた。

「赤いお兄さん」

「君は…」

「あなたを待っていた…」

学校前のバス停で、シルビアが待ち受けていた。

「シルビアちゃん、一体どうしたの？」

彼女は何を考えているのかも、いったい何者なのかも解らないがここは見かけ通りの少女を相手にするように尋ねる。

「まずはゾグを倒したこと、凄かったわ。まさかあれだけの輝きを手にできるなんて思わなかった…」

シルビアの表情は相変わらず感情を読み取ることが出来なかった。

「君はエアロヴァイパーの事も、ゾーリムの事も知っていた…：一体君は何者なんだい？」

「そうね…：私はシルビア。そして…：…」

そこでシルビアはまっすぐ遙の目を見つめる。その目はまるで吸い込まれるようで遙の背中に冷たいものが走る。

「ウルトラマンの『敵』よ」

「…ッ！」

その一言が、遙は思わず後ずさるとポケットのエスプレンダーに手を伸ばす。

それは今まで想像したことがない訳では無かった。恐らくそうなのだと思っていたが、それでもこの少女と戦う事はしたくなかった。

「君はじゃあ…『破滅招来体』の一部なのかい？」

「あなたたちから見れば、そう言う事になるのかもね」

そう告げると彼女は楽しそうに語り始める。

「おかしいと思っていたでしょ？どうしてエアロヴァイパーの空間から脱出するときには攻撃を受けたのか、青いお兄さんがクインメザードに予備予選の抽選会場で出くわしたのか」

「それは……」

確かにその事について遥も悩んだが答えは見つからず、破滅招来体による何らかの干渉があったという結論しか出せないでいたのだ。

「私がそう仕向けたし、あの時あなたの背中に傷を負わせたのは私」

「…理由を聞いてもいいかい？」

「青いお兄さんをこちらにもう一度引き込むためよ、まああのお兄さんはもう無理だって私は解ってたけど」

そうあつげらかんと告げる彼女に、遥は理解が追いつかないといった様子だった。

「貴方はなぜ戦うの？」

「え？」

「貴方はウルトラマンだと言う事を皆に知られてしまった。その結果、人間共に追い回されて…それでも戦って勝った。そしたらどう？今度は英雄扱い、負ければ人間につかまって生贄にされていたかもしれない…」

そう言って彼女は哀れむように告げる。その問いかけは、遥の心にできた影を刺激するには十分だった。

「でも僕は戦うよ？そうしないと、大切なものも守れないから」

「そう…私には解らない感情ね。どうして人間ってそんな自分の都合よく動けるのかしら」

「君は本当に人間じゃないのか…？それにA q o u r sのステージが見たいて言ってたのに…」

「人間…ね、私がクラウスと一緒にだとも？お姉さんたちの踊りは綺麗だったわ。忌々しい過去を忘れられる程に」

「過去…？」

どこか遠い目をする彼女に、遥はそう問いかける。過去に出会った時は全く感情を見せなかったこの少女が、こんなに感情豊かだったのかと思ってしまうほどに。

「そんな話をしに来たわけじゃないの、私は貴方を『殺しに来た』ウルトラマンガイア」

そう言って彼女は真っ暗い光に包まれ、それはすぐに巨人の形を創り上げる。そして遥の目の前には、前に夢で見た真っ黒いオーラに包まれた巨人がこちらを見下ろしていた。

「そんな…あの子が…」

『さあ、早く変身して。ゾグを倒したその力で、人類を救って見せて。身勝手な人間たちを』

身勝手な人間たち―それはゾグに敗北したウルトラマンを、破滅招来体に差し出そうとした者達を指しているのだろう。それでも遥は、戦わないという選択肢は選べなかった。

「ガイア！」

光を解き放った遥は、ガイアとしてシルビアの前に立ちほだかる。

そのまま駆け出すと、まだ実態のはつきり見えない相手に拳を突き出す。だがそれは簡単にあしらわれてしまう。

「あれは…?」

図書室に寄った後、下校しようとして外に出は花丸は、ガイアと戦闘を行う真っ黒い巨人を目撃する。気が付けば校庭には人だかりができており、ガイアの戦闘を見守っていた。

「何なのアレは…?」

「何か、怖い感じがする…」

異変を察して外に出てきた善子とルビィも、その光景に不安を感じていたのだった。

「ハアッ！デリヤア!!」

ガイアは果敢に拳を、蹴りを放って攻めるが以前軽くないなされるまで有効打を与えることが出来ていない。

大振りの攻撃をたやすく躲すと、逆に回し蹴りでガイアの巨体を吹き飛ばしてしまう。

『そんなものなの?それでどうやってお姉さん達を守ってきたの?』

『くっ…舐めるな!!』

そのシルビアの遥を煽るような発言が、遥の逆鱗に触れる。ガイア

は両腕を天に掲げ、大地と海のエネルギーを全身へ行き渡らせヴァー
ジョンアップを遂げる。

見る者にマツシヴな印象を与えるスプリーム・ヴァージョンとなっ
たガイアは、持てる力全てを使って倒す決意の証明だった。

「デヤツ!!」

『そう、それでいいの』

そう呟くシルビアへガイアは駆け出すと今度はガイアの拳が顔面
を捉える。思わず仰け反る相手に、ガイアは更に攻め立てる。蹴りも
拳も、先程と打って変わって変わって防御するのに必死といった様子でガイア
が押し始めているのは誰が見ても明らかだった。

『…ッ…』

だが相手もやられたままではない。黒いオーラに覆われた腕がガ
イアの顔面を捉える。向こうも本気になったという事だ。

だが、その一撃に仰け反ったガイアをこんどは近づかせぬように
オーラを鞭状に伸ばし間合いの外からガイアへ攻撃する。

ガイアはそれを右腕で防ぐが、当たった場所から光の粒子があふれ
出しガイアへダメージを与える。そしてその攻撃が、以前自身の背に
傷をつけた攻撃と言う事を理解させる。

今度は回避一辺倒となってしまうガイアだったが、以前と違い正面
からの攻撃だ。落ち着いて攻撃を見切ると、反撃のチャンスを伺って
いた。

そして鞭の鋭い一撃をバク転で回避すると、そのまま両腕を掲げて
エネルギーを頭部へ収束させてフォトンエッジを放つ。

その一撃は黒い鞭を吹き飛ばし、巨人の纏っているオーラすら掃
う。

『な…その姿は…?』

「黒い…」

「ウルトラマン…?」

黒いオーラの中に隠されていた姿はまるでウルトラマンの様だっ
た。

シルエットそのものは、ウルトラマンを女性化したようなスマート

なものだが。その体は漆黒に染まり、血のように赤いラインが全身に走り胸の中央のライフゲージのような器官は煌めいていた。そして胸には金色のプロテクターがあり、その目も深紅の光が灯っていた。模様そのものはガイアに似ていてかつ赤くとも、その姿は見る者へ恐怖と不安を振りまくものだった。

『私はフェイト、貴方達が最も恐れる者の姿…そして最後の破滅招来体』

そう告げると巨人はこちらへ新たに光の鞭を発生させ振り下ろす。

「ハアッ！」

だがその攻撃はガイアとファイトの間に立ち上った青い光によって遮られた。そしてその光からアグルが現れる。

アグルはアグルセイバーを展開すると、そのまま再び鞭を振りかぶる相手に駆け出すとその一撃を防ぎつつ突きを繰り出す。

だがそれを紙一重で躲すと、アグルセイバーを鞭で絡めとる。

「アリアアアアア!!」

それによつて体勢が崩れてしまうアグルだったが、その背後からガイアがスプリームキックで飛び込んでくる。

咄嗟にフェイトはバリアーで防ぐが勢いは殺しきれずそのまま地面を削りながら後方へ押しやる。

だがバリアに亀裂が入った時に身をかがめてガイアへ回し蹴りを食らわせて直撃を防ぐが、お互い痛み分けのような結果に終わる。

そしてファイトもすつと立ち上がるが、今度はフォトンスクリーンが飛んでくる。だが今度は受け止めようとせず、バリアを斜めに展開する事で軌道を逸らして回避すると逆にアグルへ漆黒の光線を放つ。アグルもウルトラバリアーで防ごうとするが、バリアは割られアグルは後方へ吹き飛ばされる。

今度は自分の番とガイアはクアンタムストリームを放つが、今度は鞭をリボンのように高速回転させて全て掻き消されてしまう。

すぐさまアグルも起き上がってアグルスラッシュを放つが、やはり弾かれてしまう。

ガイアとアグルの連携によつて、相手に思うように攻撃させないよ

うにすることは出来ているが逆にこちらにも有効打を与えられていない。

幾らガイアとアグルも地球からのエネルギーで強化されているとはいえいつかは限界が来る。反面相手の能力は底が知れない。分の悪い戦いだ。

だがここは学校の近く、みんなを巻き込まないようにと押し飛ばしたのは良かったが。以前余裕そうな相手に遥は焦りを感じ始めていた。

『遥、行くぞー!』

『おう!』

その掛け声で2人は駆け出す。左右から挟撃することで、何とか一撃クリーンヒットさせたい。そう考えたのだ。

『無駄よ』

シルビアは両手をそれぞれ左右から突っ込んでくるガイアとアグルへ向けると、そのままゾグと同じ念動弾を放つ。

「…ッ!」

「グワアアアア」

アグルは咄嗟に横に飛んで回避するが、ガイアはそれをモロに食らって吹き飛んでしまう。

ガイアは地面を転がったのちなんとか起き上がる。

『…やめましょう、お兄さん集中できてないでしょ?』

『なに…?』

そう言っつて構えを解くと、ガイアの方へ視線を向ける。

『守るっつて言うなら、ちゃんと戦わなきゃ』

その言葉にガイアははっとしたような仕草を取る。確かに自分の在り方を悩んでいた。このまま戦い続けることが、本当に正しいのか? ?

『そんなんじゃないや相手にならないわ。私はウルトラマンを叩きのめして、人類を絶望させてから滅ぼしたいの。ちゃんと戦っつて』

『舐められたもんだな』

そう言っつてアグルが再び立ち向かおうとするが、フェイトの体は闇

に包まれて消えてしまった。

そのままガイアとアグルも、光に包まれると変身を解く。

「遥、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です…」

肩で息をする遥に、博樹はそう声をかける。博樹自身も、遥の戦いに少し思うところはあったがあえてそれを追求することはしなかった。

「あの巨人、何者なんだ？」

「シルビアって名乗ってた女の子です。彼女は破滅招来体の一員だった…」

「なるほど、天使ズラしたやつが最終兵器では無かったってことか…」
「でも僕は、彼女が本当に人間じゃないとは思えない…何か秘密があると思うんです。」

そう遥は告げる。以前から彼女と会った時に見せる仕草、それに今日初めて彼女から感じ取れた感情。それは人間となんら変わらないものなんだと。

「心当たりがある」

「…え？それってどういう…?」

そう告げる博樹に、遥はそう問いかける。

「シルビアって名前がずっと引っかかっていた。だから調べた、ヤツは確かに人間『だった』」

「それって…」

「いいか？これを聞いたらお前は余計に倒すことを躊躇うかもしれない。それでも知りたいか？」

そう博樹は遥の目を真っ直ぐ見て問いかける。

「はい。僕は自分の戦う相手も、ちゃんと理解しておきたいんです。状況に流されるまま戦う訳には、もういかないんです」

そう返す遥に満足するように頷くと、博樹は言葉を紡ぐ。そしてその言葉に、遥は目を見開いて驚く事しかできなかった。

60話 卒業ですね／これが最後なら

かつて、一人の少女がいた。

少女は天才で、幼くして大人顔負けの知識を身に着けたただけでなく。学者レベルの学問さえも己の力として吸収していった。

天才である娘を誇らしく思う両親の愛情をその身に受けて育った彼女は、とても幸せだった。

だが、そんな幸せは長くは無かった――

人々は恐れたのだ、周囲と比較にならないレベルで突出した能力をもつ少女を。彼女は小学校に上がった時点でもう彼女の才能はもう本業の学者に引けを取らないレベルだったのだ。

その結果彼女は「悪魔の子」と呼ばれ迫害され、やがて両親からも拒絶された。

それにより絶望した少女は、10歳を迎えることなく自らその人生に幕を閉じた。

この悲しい出来事を繰り返さない為に、天才たちはネットワークを介して集まり『アルケミースターズ』が生まれた。

これが、創設メンバーしか知らない本当の理由。

クラウスの言っていた事は、遥のトラウマを刺激するためのでっ上げではなく事実だったのだ。

そして少女は呪った。自身のその悲しき運命を、そしてその気持ち破滅招来体が利用して産み出したのがシルビアという少女だったのだ。

「そんな……じゃあ彼女が戦う理由って……」

「ああ、許せないんだろう。人間が」

遥は、博樹がアルケミースターズのネットをハッキングして得た情報に言葉を失う。

「お前は手を出すな、俺が決着を付ける。知ったらもうお前は、戦えな

い。そうだろ？」

そう博樹は遥を試すように告げる。だが遥は譲らなかつた。

「いえ、僕がやります。彼女の気持ちは解る、それに彼女に言われたんです『身勝手な人間を守る意味があるのか？』って…僕もゾグの一件からそう考えることがあります…」

そう言つて遥は一度目を伏せる。結局社会は、遥をありのままに受け入れてはくれない。そう感じてしまったから。だがそれでも遥は前を見る。

「でも、それでも僕は…大切なものの為に戦う。それが彼女を倒すことになつても…！」

「…いいんだな？」

その博樹の言葉に、遥は無言で頷く。何があつても大切なものを守る為に戦う、きつとそれが自分が光を授かつた意味だから。

「それにしても、天使の次はウルトラマンだなんてな。ヤツらかなりいいセンスしてるよ」

そう博樹が皮肉っぽく笑う。

「でも、破滅招来体もそれだけ必死なんですよ。どうしてそこまでするのかわかりませんが…」

「前にヤツらの一人と話をした。『滅ぼされたくない』んだと」

そう死神との会話を思い出した博樹が、そう遥へ告げる。すると遥は表情を更に曇らせてしまう。

「このままいけばいずれ人類は宇宙の破壊者になる…でも、そう組んだのも破滅招来体じゃないですか…」

遥が思い出しているのは、ワームジャンプミサイルの事だろう。確かに結局は中止に終わったが、あの作戦が遂行されていれば、人類はもつと沢山の巨大生物の住む星をワームホールで繋がれた端から滅ぼしてしまつていただろう。

「そうだな、確かに奴らも身勝手だ。でもな遥、人間は過去の過ちを自分たちの痛みとして受け入れなければ、変わることは出来ないんじゃないか？」

博樹はそう諭すように遥に告げる。結局人類が今のままでは、地球

の環境そのものも破壊してしまう可能性を持っていることに気づけなければ。

そしてそれを自覚していくことが、人類全体に求められるのではないか？博樹はそう考えているのだ。

博樹は表情を和らげると「ふっ」と笑い遙に笑みを向ける。

「明日は卒業式だろう？もう帰れ、お前の大事な場所を最後までちゃんと守るんだ。ちゃんと終わるまで、外はオレが守る」

「…わかりました、お願いします」

そう告げる博樹の目には、強い決意が宿っていた。だから遙は、その提案を受け入れた。

—学校の最後を、ちゃんと見届けて欲しい

そう口にはしなかったが、それこそが博樹の本心だったのだと遙は思った。

そして翌日、卒業式と閉校式は予定通り行われた。

桜が咲き誇る校庭に、学校の生徒や保護者が居る光景は嫌でも今日が最後なんだと思い知らせて来る。

「おはよう遙くん」

「おはよう」

「花丸ちゃんにルビィちゃん、おはよ」

登校して姉たちと別れて教室に向かおうとすると、そこで花丸やルビィと出会う。

「善子ちゃんは？」

まだ来ていないのだろうか？そう思って聞くと、クラスメイトが木の上に向かって「降りておいで〜」と声をかけてるのに気が付く。

「何があったの?」

「それが…」

話を聞くと、クラスメイトは気まずそうな表情を浮かべる。最初猫か何かが降りてこれなくなったのかと思ったがどうやらそういう訳ではないらしい。

「もうヨハネの事はほっといてく」

どうやらその正体は善子だったらしい。何があったのかはよくわからなかったが、意地でも降りないといった様子にみんな困惑気味だった。

だがしかし、乗っていた枝が折れて善子が落ちてくる。

「見るなあ〜!」

だが綺麗に着地すると頭を押さえたまま走り去ってしまう。

「どうしたんだろ?」

「…さあ?」

そう呟くルビイの隣で、遙もそう漏らす。ともかくここは女子陣に任せた方がいいと思えばそれ以上追及することはしなかった。

そのまま式の開始まで手持無沙汰だったが、何となく今日で最後だしと部室へ向かうのだった。

「あれ?千歌先輩?」

部室ももう片付けてしまっていて、中は広々としていたのだが。その部屋の真ん中で千歌は一人パイプ椅子に座って天井を見上げていた。

「遙くん、いやここってこんなに広がったんだなって」

「そうですね、初めて来た時にはもう色々置かれてましたし。」

そう言っただけで遥も笑いながら返すと、千歌も「そうだったね」とこちらに視線を向ける。

「みんな、いろんなもの持ち込んでたから」

「ちゃんと整理すれば、ここでも練習できたかもね」

不意に背後からそう梨子と曜の声が聞こえる。最初に部室として使い始めた時に粗方掃除したが、その後もライブで使う為の小物だったり、練習ノートだったり教本だったり。色んなものをみんな部室

に置いていた。

「流石に9人で練習するほどの広さはないと思うが、それでも多少はここでもできたかもしれない。でももう、そんな機会は巡ってくることは無い。」

他に唯一残っているホワイトボードも、記されていたものは全てきれいさっぱり消えて新品同様と言っても差し支えない程まつさらになっただい。

「そうかも」

そう言つて体育館側から果南が入ってくる。物憂げな表情でそんなホワイトボードに触れる。彼女達が一年生の時から、歌詞だったりフォーメーションだったりを書き記していたこのボードには、もうそんな形跡も残ってない。

「全部、無くなっちゃったね…」

「そんなことないよ」

そう寂しげに告げる曜に対して、果南はそう告げる。その顔は晴れやかなものだった。

「これからもずっと、残っていく」

「そうですね。ずっと、ここに…」

そう続ける果南に、遙もそう同意する。

たとえ学校が無くなっても、校舎はまだ取り壊されて無くなるなどという話は無い。それにここでの思い出は、みんなの心の中から未来永劫消えてなくなることは無いのだ。

「校舎に、寄せ書き？」

「うん！中庭を開放して、みんなで学校に寄せ書きしようって」

千歌達と別れた遙の目の前を、ペンキを持ったルビィが横切つて行ったので思わず何事かと尋ねたところ。そう返事が返ってきたので遙は首を傾げる。

「いいの？そんなことして」

「鞠莉ちゃんがみんなであって。遙くんも」

「そう言う事なら、まあ…」

本当に怒られたりしないだろうか？そんな不安も少し抱えながら、遙もペンキを受け取る。

やがて全校生徒で、中庭にペンキでそれぞれ思い思いの事を校舎に描いていく。

やがてA q o u r s の9人も揃い、みんなで一つの物を校舎に描いた。それはそれぞれのメンバーカラーでできた、9色の虹。

他にも「ありがとう」だったり、制服の絵だったり、「頑張ルビィー！」なんてものも。気が付けばみんな顔やら制服やらにペンキを付けてすっかり汚れてしまっていた。

「これから式だというのに、こんなに汚れてしまつてどうするんですの？」

なんてダイヤが呆れたかのように口にするが、その表情は笑っていた。

「でも昔からこんな感じじゃん？わたし達もこの学校も」

「なんかこうしていると、色んな事があつたなつて思い出すよね」

そんなダイヤの言葉に果南がそう告げると、その横で曜もそう言つて笑う。

「練習したり、みんなでふざけたり」

梨子もそう漏らすと、ぽとり。と刷毛が足元の芝に落ちる音がする。それからすぐ、ルビィが顔を覆つて肩を震わせていた。

「ダメだよ、ルビィちゃん。最後まで泣かないつて、みんなで約束したんだから」

そう花丸がルビィの肩をもつてそう優しく告げる。「うん…」と弱々しく答える、すると千歌が。

「だね、明るく一番の笑顔で」

そう告げた。最後まで笑つて、この学校とお別れしよう。それがメンバー間での約束だったから。でも、本当に心から笑うことは、遙は出来ているか不安だった。

昨日の戦闘だつて学校の近くだったのだから、誰も知らないと言う事は無理がある。またいつここが戦場になるか解らない不安を抱え

ている生徒だつて必ずいるのだ。

誰も口にごそしないが、それを解っているからこそ。遙は今、自分が…いやここにいる何人が心から笑えているのか、それが解らなかつた。

卒業式は全校生徒、そして教職員に来賓。体育館を埋め尽くすほどとはいかないが、普段と比べて多くの人がいる中執り行われた。

だが、生徒はペンキまみれ。そして理事長としてみんなの前に立つ鞠莉もという、どこかしまらない雰囲気の中で式は進んでいく。

鞠莉が理事長として、卒業生代表の果南に卒業証書を手渡し。最後にダイヤが生徒会長として生徒を代表して挨拶を行う。

「今日この日、浦の星学院はその長い歴史に幕を下ろす事になりました。でも私達の心に、この学校の景色はずっと残っていきます。その事を胸に、新たな道に進めることを、浦の星学院の生徒であった事を、誇りに思います。みなさんもどうか、そのことを忘れないでください」

ここにいる全員、きつとこの学校での日々は一生忘れられない思い出になるだろう。それくらいここでの日々は、去年の春ここに来た遙にとつてもかけがえのないものだったのだ。

「ただいまをもって、浦の星学院を閉校します」

そう告げてダイヤは一礼する。するとダイヤの少し後ろで、その挨拶の様子を見守っていた鞠莉が奥に立てかけてあった優勝旗を手に声高に宣言する。

「わたしたちはやったんだ！」

「ラブライブで！」

これは立ち上がったルビイが、そして千歌も。

「優勝したんだ！」

そう、A q o u r s はラブライブで優勝して、学校の名前をラブライブの大会の歴史に刻んだのだ。

これが、輝きを追いかけてきた少女たちが手にした。一つの『輝き』なのだ。

「これで終わりずら」

図書室にあった本全てを最後の段ボールに詰めると、花丸はそう告げて段ボールを閉じる。

「全部、無くなっちゃったね…」

花丸の作業を手伝っていたルビイが、そう寂しげに告げる。本棚も殆ど無くなったこの空間は、あまりにも広がった。

「捨てられたわけじゃないずら、鳥みたいに羽ばたいていったずら」
「ばたばたって？」

「新しい場所で、また沢山の人に読んでもらって。とてもいいことだって、思えるずら」

ここにいた本たちも、自分達と同じようにまた新しい場所へ向かう。他の施設で、また違う人たちに読んでもらえる。このまま処分されてしまうわけではない。

「ルビイたちも、新しい学校に行くんだよね」

「ちよつと怖いずら…」

「ルビイだって。でも、花丸ちゃんたちとスクールアイドルやってこれたんだもん。大丈夫かな」

新しい場所へ行く事への不安ももちろんある。でも、この一年みんなですクールアイドルとして活動したことがルビイの自信になった。「そうだよ。ここでの経験が…思い出が、これからの僕たちの力になる。新しい所に行ったからって、それは無くならないよ」

今まで黙って作業をしていた遥がそう優しく告げる。新しい学校に行っても、きつとやっていける。そんな確信が、遥の中にもあった。

「墮天!!」

ベランダで外を見ていた善子が、不意にそう叫びながら入ってくる。折角良い事言おうとしたのになあ。などと思いましたがそれは口にせず、そんな彼女の様子を見守る。

「ほら行くわよ、リトルデーモン達!」

そのキャラクターは何時まで続くのだろうか?なんてことも思いつつ、4人は図書室の外へ出る。そして花丸とルビイがドアへと手をかける。

「一緒に閉めよ?」

「嫌よ」

そう花丸は善子に告げるが、彼女は頑なにそれを拒んだ。

「一緒に閉めるすら」

「嫌だってば」

「一緒に閉めるすら!」

思わず声を荒げる花丸に、隣にいたルビイもびくりと肩を震わせる。

「お願いだから…」

「…わかったわよ」

そうか細い声で付け足す彼女に、善子は一瞬間の間を置いてそう答え。鹿野署の隣に立ち手を添える。

「遥くんも」

「うん…」

ドアの方を向いたままの彼女の表情は見えないが、遥はそう頷くと同じようにドアへと手を添わせる。

「ごめんね…」

「いいわよ別に」

花丸がそう謝ると、善子はそう言ったものの顔を逸らす。

「今まで、マルたちを守ってくれて…ありがとう」

そう呟いてドアを閉める。

「ありがとうね」

「バイバイ」

そう善子とルビイも呟く。もう二度と、自分達がこのドアを開ける日は来ない。だからこそ、言っておきたかった。

「最後はここ」

みんなやはり、最後には自然と部室に集まっていた。

—ここがあつたから

—みんなで頑張つてこられた

—ここがあつたから前を向けた

—毎日の練習も

—楽しい衣装作りも

—腰が痛くても

—守りたい場所だった

—難しいダンスも

—不安や緊張も、全部受け止めてくれた

—帰つてこられる場所が、ここにあつたから

—そう思い思いの言葉を残して、ひとりひとり部室を後にする。

「じゃあ、待ってるね」

最後に残った千歌に、曜がそう声をかけてからここを後にする。最後の一人となった千歌も、暫く目を瞑つて感慨に浸っていたが、部室を後にする。

そして部室の入口へと振り返ると、頭上にかかっている。『スクールアイドル部』のプレートへ目を向ける。おおごとへんがこごとへんになっていたのをバツ印をいれて書き換えたまんまのプレートがかかっている、部室の前で。

「ありがとう」

そう一言告げると頭を下げ、「よっ」と窓枠を駆け上つて枠からプレートを外す。これでここはもう、私達の部室じゃなくなつたんだ。

そう感じた。

校門へと向かうと、みんな一足先に外に出て待っていた。

そしてみんなで、この学校の校門を閉じて浦の星学院は、本当の意味でその歴史に幕を閉じた。

夕日が赤く照らすこの場所で、だがそんな余韻も轟音によつてかき消されてしまう。

少し時間は遡って、まだ卒業式の最中だったころ。学校の前にシルビアが立っていた。

「さようなら、輝きの人…せめて最後は、思い出の中で終わらせてあげる」

そう告げると、校舎に腕を翳しエネルギーを収束させる。遥たちを、このまま消し飛ばしてしまうつもりなのだ。

「待て」

「…来たのね、もう一人のウルトラマン」

「生憎だが、お前の好きにさせる訳にはいかないんだ」

それを遮ったのは博樹だった。シルビアはその手を下すと、博樹の方を睨みつける。すると博樹は、右腕に嵌めたアグレイターを構える。

「お前はオレが止める。お前の人間だった時の事はしっている。それでもオレは、お前に同情して見逃すわけにはいかん」

「そう…なら、まず貴方から倒しましょう。きっと人類は余計に絶望するでしょうけどね」

「オレは負けられない。オレはお前とは違う、人類に絶望しても守るべきものは守る…これで、最後だ！」

そう告げると、博樹は光を。シルビアは闇を開放する。そして学校から離れた無人地帯で、アグルとフェイトの戦いが始まった。

61話 大地と海と／最後の輝き

アグルとフェイトはお互い見合うと、両者の間に緊張が走る。先に動けば負ける。そんな雰囲気は漂っていた。

しかし先に仕掛けたのはアグルだった。アグルは駆け出すと、様子見は無しだと言わんばかりの勢いで拳の連打を浴びせる。

だがフェイトはそれに動じることなく防いでいく。だが、それでもアグルへの反撃にはなかなか出られず。暫く防戦一方となる。

だがアグルの大振りの一撃を屈んで回避すると、そのまま足を払いにいく。だが、アグルも飛び上がるとそれを回避して距離を取る。

だが距離を取ってしまったえばフェイトの得意な間合いとなる。右腕から漆黒に染まった鞭を発生させるとアグルへ振り下ろす。

「ぐっ…」

アグルはそれを素早い身のこなしで回避していく。だがそれにも限界は来る、段々と振るう速度を上げてくる相手に、内心毒つきながらアグルセイバーを展開し鞭を弾き飛ばす。

「リアアアツ…ゼアツ!!」

そしてセイバーを解除すると右腕を大きく一回転させると、オレンジ色の光輪が生まれる。そしてその輪の中に腕を突っ込み指先に収束させて光線を放つ。

—プロミネンスキャノン—アグルとしては珍しい、ガイアのような高い熱量を持つ技をアグルは使用した。威力は他の技と比較して高いものではないが、発射速度と弾速に優れた技となっていて、ここで牽制として放ったのだ。

だが、やはりたやすくあしらわれてしまうがそれでも良かった。アグルセイバーを長時間維持して相手の攻撃を防いでエネルギーを消耗するより、ここで隙を作って再び距離を詰めようという算段だったのだ。

「デヤアアアア！」

その隙にアグルは飛び上がって二弾蹴りを食らわせる。

「くっ…」

ダメージによってフォイトの身体がよろめく。ようやく与えられたクリーンヒット、この隙をアグルは見逃さなかった。

体勢を立て直すより早く、アグルはフォトンクラッシュャーを放つ。

「アリアツッ！」

今回は防御が間に合わずフォイトへと渾身の一撃が炸裂する。すると爆発が起こり、周囲は煙に包まれる。

そのことでアグルは一瞬気の緩みができる。そしてその隙を一閃、漆黒の光線がアグルの胸に直撃しその巨体は宙を舞う。

そして周囲が晴れると、フォイトがこちらへ右腕を突き出したまま立っているのが明らかになる。

『流石にゾグを倒したことはあるわね、でもそれじゃ私には届かないわ…』

そう静かに告げるフォイトには、先程のダメージの影響をまるで感じられなかった。アグルもすぐさま立ち上がるが、先のダメージが多少は堪えたようで少し肩を上下させていた。

そんなアグルに対して、フォイトは突き出したままの右手を逆さにするとクイクイっと手を動かしてアグルが普段やるような挑発を行う。

『かかってきなさい…まず貴方から、絶望の底に落としてあげろ』

普段と打って変わって自分から攻めねばならず、相手の防御能力の高さにアグルは苦戦を強いられることになってしまった。

再び駆け出して先に仕掛けるアグルだったが、拳も蹴りも捌かれてしまい逆に腹部に蹴りを受けて後退してしまう。

だが、果南達の学校で過ごす最後の日を邪魔させるわけにはいかない。その一心ですぐさまアグルは、アグルスラッシュで牽制しつつ距離を詰めるとフォイトもそれに合わせて回し蹴りを見舞う。

「アリアアツ…オリアアツ！」

だがアグルはそれを飛び上がって躲すとそのまま相手の肩を踏みつけて更に高く飛ぶ。そしてそのまま逆さになった体勢で背中目掛けてリキディターを放つ。

「ぐっ…あ…」

背中にリキデイターを直撃させたことで、遂にフェイトが膝を付く。この決定的な隙を、アグルは見逃さなかった。技を放った勢いのまま前転をしつつ着地すると、すぐさまフォトンスクリューの発射体勢に入る。

「ウオオオオオ……デヤッ!!」

今度こそフェイトの身体を貫くべく放った一撃は、彼女の胸に直撃しその身を削る。

『私は……負けられない……!』

そう言つてフェイトはアグルから受けた攻撃を跳ね飛ばす。そして胸の前に真っ黒な塊を創り上げるとそれを両腕で押し、圧殺波動を放つ。

アグルはバリアーで防ぐも、徐々に押され最後は態勢が崩れたことよつてバリアーを維持できずまともにそれを受けて吹き飛ばされる。

そして学校のすぐ近くまで飛ばされ、ようやく学校がその歴史に幕を降ろした余韻に浸っていた人々を現実に呼び戻す。

「う……ぐおつ……」

アグルは今のダメーヅからすぐには起き上がれず、遂にライフゲージの明滅が始まる。

「ヒーロー……」

果南はアグルいや、博樹に向かつてそう叫ぶ。ずっと気づかない場所で、自分たちの大切な場所を護る為に奮闘していた彼が苦しんでいる姿に、胸を締め付けられる思いで。

「真っ黒い……ウルトラマン……」

「なんて禍々しい……」

初めて目撃したフェイトの姿に、鞠莉とダイヤも思わぞそう感じたままの言葉を述べる。

『もう式は終わったのね……思ったより頑張ったわ』

「どうしてそこまで人を憎むんだ!?!君の事は聞いた。でも、彼女達は

関係ないはずだ！」

アグルを見下ろしてそう述べるフェイトに、遥は思わずそう叫ぶ。『関係ない？人類全てが、私にとっては憎む対象なの。貴方には解らない…大切なものすべてが、敵になった私の気持ちだ！』

「それは…」

『人間なんて自分がよければそれでいい下等な存在…貴方だって認識したでしょう？どうしてゾグに負けた後、守る対象だった人間から逃げ回ったのか…』

そう言い返す彼女に、遥はそう答えあぐねていると、さらにそうたたみかけてくる。

「遥はそれでも、みんながそうじゃないから…だから戦ってきたの！滅ぼすんじゃないくて…みんなで生きていきたいって！」

そうはつきりと言いつ返したのは梨子だった。ずっと遥の身を案じて、そして戦う遥を見守る事しかできない事にもどかしさも感じていた彼女が。

「姉さん…」

『そう…その為なら、父親だって手にかける。素敵な正義感ね…やっぱり私達は平行線…言葉じゃ分かり合えないのね』

そんな遥たちの様子に、フェイトは呆れたようにそう言い放つ。遥の父もクラウスも人間でなくなったから倒した。彼女にはそうとしか受け取られなかったのだ。だが遥はそれをわかったうえで、あえてその事へは反論しなかった。

「それでも…それでも僕は、自分の大切なこの場所を護る為に戦う…」
『私に勝てるだけでも？私は貴方が恐れる存在…人間であり、ウルトラマンであり…根源的な破滅をもたらす者』

「絶対に僕は負けない…ここは、僕が初めて自分の意志で…ウルトラマンになつた場所だから!!」

ガイアの光を授かった遥が、初めて自分の意志でその光を解き放つたのはここ―浦の星学院だった。そしてここで全ての決着を付けて、大事なものを全部守り切る。

その覚悟で、遥はエスプレンダーをとり出す。その中の光は、遥の

意志を尊重するように輝きを増していた。

「遙くん、気を付けてね…」

「大丈夫、この世界は…滅んだりしない!」

そう優しく声をかける花丸に、遙は笑顔でそう宣言する。

この場所には、学校の皆がいる。遙はみんなが自分の背中を見つめる中、真つ直ぐフェイトを見つめたまま真つ直ぐ駆け出し光を解き放つ。

「ガイアーツ!!」

その場にいた全員が、エスプレnderから放たれた光に思わず目を覆う。そしてその光が晴れた時、アグルとフェイトの間に夕日を背にしてガイアが立ちはだかる。

そしてガイアは駆け出すと銀色の光に包まれると超加速し、一瞬のうちにフェイトの目の前に飛び込むと飛び上がって回し蹴りを放ち相手を吹き飛ばす。

フェイトも地を転がりながらもすぐに立ち上がると、ガイアへ鞭を展開すると振りかざす。するとガイアもガイアスラッシュを放ちそれを牽制する。

「アリアツツ・ハアアアアアア……」

その間にすぐさまヴァージョンアップポーズをとり、ガイアはその身を切り札でもあるスプリーム・ヴァージョンへと進化させる。

「ハアツツ!」

ファイティングポーズをとるガイアに対して、フェイトはゆったりと構える。するとガイアは駆け出して顔面目掛けて拳を振るう。フェイトは腕でそれを防ぐが、想像より重い一撃に体勢を崩される。以前と違い、ガイアの攻撃には殺意が宿っていた。

今度こそ必ず彼女を倒す。その一心で、ガイアは拳を振るう。ガイアの背後には学校が、そして守りたい人達がいる。フェイトを、シルビアの過去を知った事で彼女へ同情する気持ちも捨てることは出来なかった。

それでも、ガイアは攻撃を辞めなかった。彼女はもう死んでいるんだ。破滅招来体を利用して、最期の刺客として利用されただけなん

だと自分へ言い聞かせて。

フェイトは、そんなガイアの様子を察したのか。以前と違って攻撃を捌くのではなく、回避する選択をとる。そして距離を取ると、再び鞭を振るって格闘の間合いの外からガイアへ攻撃する。

ガイアは不規則に襲い掛かる鞭を側転や前転を駆使して回避するも、右手首に巻き付かれてしまう。

そのまま振り回され、ガイアの身体は宙を舞い地面へと叩き付けられる。

「ぐ……うお……」

そのままじわじわと絞め殺すように、抵抗の弱まったガイアを鞭を巧みに操ってダメージを与えていく。

「遥くん……」

そんなガイアの様子を、花丸は泣きそうな顔で見つめるしかできなかった。

「信じよう、ガイアは負けないって」

「そうだよ。遥くんは…ガイアは負けない」

そんな彼女を、ルビィはそう言って励ます。そして、そんな彼女達の気持ちに応じるかのようにガイアは左手で右腕に巻き付いた鞭を掴む。

そして自分の手や腕から光の粒子が漏れ出すが、その痛みを耐えフェイトを投げ飛ばす。だがフェイトもすぐさま技を解除して静かに着地してやりすごす。

そしてアグルに放ったものと同様の圧殺波動を放とうとする。

「ハアアッ！」

「テリヤアアッ!!」

だがそれを見てガイアも咄嗟にクアンタムストリームで迎撃する。なんとか相殺する事には成功するも、若干威力負けしておりガイアは態勢を大きく仰け反らせる。そしてこのタイミングでガイアのライフゲージが明滅を始める。

無理もない、幾ら地球怪獣たちの力を得て膨大なエネルギーを得ていたとしても。切り札であるスプリーム・ヴァージョンの維持には、

膨大なエネルギーを消費する。

ウルトラマンの力は有限なのだ。このままではいくら善戦しても、やがてこちらのエネルギーが先に尽きる。

『私の勝ちね』

そう言つてフェイトは今度は腕を広げてエネルギーを胸の前に収束させていく。そしてそのエネルギーを両腕に纏わせてから腕を十字に組む。

そしてそこから放たれる先程までとは比較にならない力の奔流がガイアへと殺到する。

「ドワアアア！」

だがその一撃は青き光の奔流に阻まれる。横から放たれた、アグルのアグルストリームによってその一撃は逸らされ無人地帯に着弾すると大爆発が起こる。

アグル最強の一撃をもつても、フェイトの一撃を打ち消すまでは出ず。逸らす事でガイアへ当たるのを防ぐので精いっぱいだった。

アグルはその隙にガイアの隣に駆け寄ると、ガイアへと手を差し伸べ。ガイアがその手を取った事で彼を立たせる。

『行くぞ、オレたち二人なら勝てる』

『うん！』

2人ともライフゲージが明滅を始めているが、まだ負けたわけではない。

同時に駆け出してフェイトへと肉迫すると、まずアグルが相手の腹部に拳を放つ。そして相手の反撃の一撃を屈んで避けると、その背中にガイアが手を付いてフェイトに蹴りを入れる。

前回の対戦とも打って変わり、アグルが攻撃を見切つてその隙をパワーで優るガイアが攻める。

だがそんな戦法も、やがて限界が来る。既に長時間戦闘を行つていたアグルのエネルギーが尽きかけているのだ。

フェイトが鞭を剣に切り替えて斬りかかるも、それをアグルセイバーで防ぐ。暫く互角の切り合いが続くが、エネルギーが限界寸前まで消耗した事でアグルセイバーは折れてしまう。

そしてそのままアグルの胸を三度切り付け、そのままアグルの胸へ漆黒の剣を突き立てるべく切先を向けて鋭い突きを放つ。

だがガイアがすかさず割って入り、その腕を掴むと背負い投げの要領で投げ飛ばす。フェイトは咄嗟に受け身を取れず、背中を勢いよく打ち付けうめき声をあげる。

そして膝を付いて肩を大きく上下させているアグルへ、ガイアは駆け寄る。するとアグルは、右腕をガイアのライフゲージへ翳すとエネルギーを譲渡する。

『どうして…?』

以前ゾーリムと戦った時のように、自身へ力を渡すアグルにそう問いかける。

『もうオレに力は残ってない…だから、後は頼む…ウルトラマンガイア…!』

『…ッ!』

そう告げると、アグルの身体は輪郭を失い。最初からいなかったかのように消滅する。

「ヒロ…」

消えていくアグルを見て、果南はただただ幼馴染の身を案じる。

『青いお兄さんは限界だったみたいね、貴方はあとどれだけ持つかしら?』

そんな様子を、立ち上がった彼女は嘲笑うように告げる。そしてガイアは、アグルが消えたことに動揺を隠せないでいた。

「遙さん、どうか…どうか博樹さんの想いを、受け取って!」

その声に、暫し呆然としていたガイアはハツとしたように声の方を向く。ダイヤはガイアの方を向き、はつきりとそう告げるのだった。(ダイヤさん…そうだ、まだ終わってない…アグルの想いを継いだんだ…ここで、負けるか!!)

ガイアはいいや、遙はそう自分を鼓舞すると握りしめた右拳を眼前にもってくると力強くそれを振り下ろすと同時に駆け出す。

フェイトは剣を横薙ぎにして、ガイアを切り裂こうとするがそれを屈んで回避するとそのまま足を蹴って転ばせようとする。

だが相手もそれを飛び上がって回避すると、再び両腕で漆黒の光球を創り上げ圧殺波動を放つ。

それをガイアはフォトンクラッシュャーで相殺すると、今度はシャイニングブレードを放つ。

だがそれはフェイトに回避されると、急降下キックをガイア目掛けて繰り出してくる。今度はガイアが側転でこれを回避すると、すかさず回し蹴りで反撃に出る。

その一撃が彼女の腹部に炸裂し、思わず後退する。二人がかりでなんとか互角へもっていつていた先程までと違い、今度はガイアが押し始めていた。

だがフェイトもガイアの攻撃を見切ると、腹部に蹴りを入れてガイアを退ける。フェイトもアグルとの連戦で、ようやくエネルギーの底が見え始めたのか肩で息をしていた。

再びエネルギーを収束し始めた彼女を見て、ガイアも右腕を天に掲げ両腕を大きく回して地球のエネルギーを身に纏う。

「ハアアアアアアア！」

「デヤアアアアアア！」

真っ黒な光と、白銀の光がそれぞれ、フェイトとガイアの周囲に集まっていく。

「これでフィニッシュね……」

鞠莉は静かにそう呟く、これですべてに決着が付く。それは誰が見ても明らかだった。そして学校の皆から少し離れた場所で、博樹もその光景を見守っていた。

「遙……無事でいて……」

梨子は両手を握りしめて、そう祈っていた。そんな梨子の肩を、千歌と曜は優しく持つ。

「大丈夫だよ」

「うん、みんな信じてるもん。遙くんの事」

そう告げると、みんなが見つめる先で光は一転に収束する。そしてお互いにその力を解き放つ。

「ヤアアアアッ！」

フェイトが腕を十字に組んで解き放った最強の一撃、破滅の一撃が
ガイアへと炸裂する。

そしてガイアも、アグルの力。そして皆の想いを受け取った一撃。
輝きの奔流を放つ。見た目こそ銀色のフォトンストリームだが、み
んなの想いがガイアに限界を超えた力を与えた。

両者の全身全霊の一撃が激突し、そのエネルギーが拮抗する。

「遙くん、頑張るぞらーッ！」

その花丸の叫びが、ガイアに聞こえたかは定かではない。だが、確
実にガイアの一撃の出力は上昇し次第にフェイトを押し始める。

だが、フェイトも負けじと出力を上げる。そうして両者が放った光
線は次第に威力を高めていき、辺りは眩い光に包まれ、辺りを真っ白
に塗りつぶす。

—そして……

62話 また、会おうよいつか／Beat on D
ream on

激突する必殺の一撃その光によって周囲は真っ白に塗りつぶされる。

「ど…どうなったの？」

「わからない…」

その余波と光で誰も二体の巨人がどうなったか確認できずにいた。ただA q o u r sの面々は遥の身を心配する事しかできなかつた。

気が付けば遥は真っ白な光に覆われた空間に立っていた。しかもガイアの姿ではなく人間の、桜内遥としての姿で。

「ここは…？」

周囲を見渡すと、もう1人この場にいることに気が付く。そしてその相手と目が合う。

「シルビア…」

「お兄さん、強くなったのね…本当に」

そう告げる彼女は真っ直ぐ遥の目を見ていた。そしてその声には憂いが乗っていた。

「…キミは本当は、こんな事したくなかったんじゃないのか？」

そんなシルビアの様子を見て、遥はそう問いかける。今までの彼女の行動は、遥から見ても破滅招来体の思惑通りに遥や博樹を動かそうとしてのものだとしても、それでも遥にはヒントを与えているような気がした。

「そんなことない、私は…人類が憎い」

「嘘だ、本当にそうなら何で僕たちと戦う以外で、人間に危害を加えなかつたの？どうしてライブを見て楽しみにしてくれてたの？」

「それは…」

遥のその問いに、シルビアは即答することが出来なかつた。

「君は本当は優しい人間だったはずだよ？だからもう、苦しまないで？」

「…随分優しいのね？」

「そんなんじゃない…：本当に優しいなら、君と本気で戦ったりはできないよ…」

そう遥は自虐的に笑う。

「そんなことない、貴方はいつも戦った相手も気にかけてた。貴方みたいなのは、誰も苦しまずに済んだのかもしれないわ…」

「シルビア…」

そう言うって顔を伏せるシルビアに、遥も悲し気な表情を浮かべる。彼女がこうなってしまうたのは、間違いない人間が原因なのだから。「でも、最期に貴方と話せてよかった。今ならそう思える…ありがとう、私もこれでやっと眠ることが出来る」

「ごめん、僕はこうする事しかできなかった…」

「謝る必要はない…貴方は正しい事をした。私ももう少し人間として生きていたら、貴方達みたいに輝けたのかしら…」

『ありがとう』とそう言うって初めてほほ笑んだシルビアを見て、遥は余計に心を締め付けられた。でも彼女のその後続いた言葉には、笑って答えた。

「君がそう望めば、今からでもきつと輝けるさ」

「そうね…ありがとう、輝きの人たち。そして、さようなら…」

シルビアがそう告げると、遥の視界は再び真っ白になる。そしてその光が収まると、周囲は突如爆炎に包まれる。

その時、遥の体は再びガイアのものへと変わっており、気が付けばフェイトの姿は無く。一人佇んでいた。

「遥くん！」

不意に聞こえた声に、ガイアはその方を見下ろす。視線の先では花丸が、そしてみんながこちらへ手を振っていた。

自分は最後の戦いに勝利したんだという実感が、この時初めて得られた気がした。

そしてガイアの身体は輝くと、赤と青の入り混じった光の球体となり目の前へと降りてくる。そしてその光が消えると遥の姿が見えた。「やったね!」

そう言ってみんな遥を口々に労うと、遥も笑ってそれに応じる。大切な場所を最後まで守り抜いたのだ。公開などあるはずもない。

「遥、やったな」

不意にその輪の外からそう告げられ、遥は声の主を見る。するとそこには、博樹が立っていた。

「博樹さん!」

「心配したんだからね?」

博樹に駆け寄り寄る遥と果南だったが、博樹は笑みを浮かべるも遥に「それでよかったのか?」と言いたげな視線を送るが、遥もそれに無言で頷く。

「アグルの光、お返しします」

そう言っってエスプレンダーを突き出すと、先程受け取った光を博樹に返還しようとする。

だが、エスプレンダーに宿った光は全て外へと出るとそのまま天高く舞い上がる。

「どうして...?」

何が起きているのか解らぬまま、それを見上げる遥たちの視線の先でその光は赤と青。それぞれ二つの球体へと別れる。

「ガイア...」

「アグル...」

遥と博樹の視線の先で、それぞれがその身に宿していた巨人の姿へと変わる。そしてガイアは遥に、アグルは博樹にを真っ直ぐ見つめる。

そして2人の巨人はゆつくりと頷くと、光の粒子のなっって消えてしまった。

(ありがとう。そして...さようなら)

その光景を見て、遥はそう口にはしなかったが心の中で一年間一緒に戦った仲間に、そう笑って告げるのだった。

「帰ろう、みんな」

遙は振り返ってみんなにそう告げると、全員帰路につく。それぞれの、帰るべき場所へ。

それから早くも一週間が経過した。三年生たちはそれぞれ新天地へと旅経っていき、博樹もまた世界の海が見たいと言って海外へと旅立った。

遙は、梨子にピアノを貸してくれと言って一人ピアノと向き合っていた。

「ここはこのリズムで…」

夏にまたピアノと―過去と向き合おうと思ってからずっと一人で考えていた曲があった。その曲が、もう少して完成しそうだったのだ。

夏の時点で、ほぼメロディーラインはできていたのだが。リパルサーリフトだったり色んなことがあって止まっていた作業を、この一週間で再開し歌詞も考えてそれと照らし合わせた上で完成に向かっていた。

「できそう？」

「うん…もう少しで、完成できそうなんだけどなあ……」

そう問いかけてきた梨子に、遙はそう答えるも視線は気が付けば虚空を見ており行き詰っている雰囲気が出ていた。

「みんな、行っちゃったね」

「うん…でも、これっきりじゃないよ。僕たちは、きつとまた会える」
不意にぼーっと天井を見上げる遙に、梨子はそう話題を変えようと告げると遙は振り返ってそう言って笑う。

―博樹さんも、ここを離れるんですね

―ああ、オレもやつと…オレの目指す道が見えた気がする

―また、会えますかね？

— 鞠莉が言ってたそうだ。オレ達は『この空で繋がってる』って、また会えるさ。生きてれば何処かで

そう博樹とのやり取りを不意に思い出す。

「ねえ、学校にいかない?」

「沼津の?」

不意に姉にそう提案されて、遥はそう聞き返す。すると梨子は悪戯っぽく笑うと首を横に振る。

「ううん、浦の星に」

「浦の星に…? どうしてまた…」

「いいから、ほら」

そう言って梨子は遥を急かして、浦の星の制服に身を包むと浦の星学院へと向かう。そしてそこには、千歌を除く、全校生徒がいた。

「姉さん、みんな…なんで?」

「みんなで最後にもう一回歌いたって、この場所で」

そう梨子が告げる。三年生でさえ、このために再び制服に身を包みこの場所に戻ってきている。

そして千歌を驚かす意図もあつたらしく、あとは家族にそれとなくここへ誘導されて少しだけ空いている校門をくぐってここへとたどり着くはずだ。

そして暫くすると、何も知らされていない千歌が学校へとやって来た。

「みんな…どうして?」

千歌はステージ上で自信を見つめる A q o u r s のみんなに驚く。そしてみんなで千歌へと手を差し伸べる。

「千歌ちゃん!」

「歌おう!」

「一緒に!!」

その差し伸べられた手に、千歌は駆け寄る。

決勝で歌う為に作ったが、披露する事の無かった曲。思い出にと、ダンスまで完成させてそのままみんなの記憶に残しておこうと。その曲を、最期にみんなで学校のみんなにだけに披露した。

今まで彼女達が進んできた道こそが、『輝き』だったんだ。そしてきつと自分は、この景色を見たくて戦ってきた。そう遥は実感した。『ウルトラマンガイア』として、そして『桜内遥』という一人の人間として、迷って苦しんで。それでも進んできたこの道は、決して間違いなんかじゃなかった。そう感じた。

この瞬間瞬間が、輝きだったんだと。

そしてそんな彼女達の様子を体育館の入り口から静かに見つめていた人影は、ふっと笑うとそのまま踵を返して歩み去って行ったのは果南以外誰も気が付くことは無かった。

白い上着を羽織った彼は、何も告げずにその場を後にした。でも気持ちはきつと、繋がっている。

2人のウルトラマンは、最初こそ考え方の違いからぶつかり合ってそして全力で相手を倒す為に争った。

でもそんな彼らにも、解りあう日が来た。

それもきつと、彼女達の『輝き』があつたからこそだった。

その輝きに魅せられて、その輝きを守りたくて。命をかけて戦い抜いたウルトラマンは、もうみんなの前には現れないのかもしれない。そして、どうして2人の少年にそれぞれ自身の光の力を授けたのか？それは今の僕たちには解らない。地球の声を直接訊く術を、人類はまだ持っていないから。

でもきつといつか、その声を聞く日が来る。遥はそんな気がした。

それから更に数日後、遥は東京にいた。

量子力学の実験の手伝いで、春休み期間中だけそこにいるアルケミースターズの手伝いという名目でその実験を見学させてもらいに来ていたのだ。

駅前の緑豊かな公園で、木の陰に座り込み一人ノートパソコンのキーボードを叩く遥。

天才と言われ、その事にも苦悩してきた遥にもまだまだ知らないことが沢山あるのだと実感させられる日々に、充実感を覚えていた。

「遥くん、ご飯食べに行こう」

「はい、是非」

この実験に招待してくれた大学生のメンバーに、遥はそう笑顔で応じると後に続く。

その時、足元のコンクリートの間から一つの花の芽が伸びていることに気が付く。駆け寄ってその葉っぱに触れると、水分が足りないのかしおれていることに気が付く。

咄嗟に持っていたミネラルウォーターの入ったペットボトルを開けると、少し水をかけてやる。

『□□ーッー』

不意に聞こえた龍の咆哮。その方へ向くと、ビル群の間にミズノエノリュウが見えたような気がした。

街往く人、鳥のさえずり、風によってなびく木漏れ日。全てがこの地球を形どっているものなんだと。遥は実感した。

もうシルビアのように苦しむ人を出さない為に、人類が同じ過ちを繰り返して地球を破滅させることが無いように、そんな世界を目指して遥たちは生きていく。

「そうなんだ…これが…これが地球なんだ…！」

周囲を見渡しそう呟く遙は、今度は空を見上げる。

「おーーーーーい!!」

きつと空から自分達を見てくれている存在に向かって叫んだ。『自分達はここで生きている、地球に生きる命が手を取り合って生きていける。そんな世界にいくために』と。

その頃梨子は、自室のピアノの前に腰掛けていた。

そして遙が書き上げたまま梨子の部屋に放置していった楽譜を、おもむろに弾き始める。

その曲の名は『Beat on Dream on』

夏休みに、コンクールから帰ると遙に「もう一度ピアノを弾いてみたい」そう言われた時は驚きよりも、嬉しさの方が大きかった。

一度もちゃんと聴かせてくれなかったが、自分で弾いてみて素晴らしい曲だと。そう素直に思った。

今まで天才であったがゆえに、そしてウルトラマンに選ばれたことで沢山悩んで苦しんで。それでも真っ直ぐ成長していった弟が、誇らしく感じる。

東京へ行くと言い出した時も驚いたが、もう遙は梨子と離れてもちゃんとやっていける。浦の星に入学した時の遙からは考えられなかった事だ。

この一年間はきつとみんなにとって、忘れられない一生の宝物。

同じ空を見上げて、9人の少女と2人の少年はそう思っているのだろう。

地球には怪獣がいて、ウルトラマンがいる。
この美しい星を、私たちはもっと愛していきたい。

ver. Final Over the Rain
bowくガイアよ再びく

I 新たな始まり

またこの9人で歌えた。この時間はとてもかけがえのないもので、もう訪れることのないと思っていた時間。

そんな時間も終わりを告げる。

その時、3年生たちから、Aqoursの『これから』の話をした。そして今度こそ、3人はそれぞれ新しい場所へと旅立っていった。

「行っちゃったね」

「うん、わたし達ももどって練習しよっか」

駅の中へと消えていく3年生の背中を見送った後、背後からそう囁に告げられて千歌は振り返りながらそう答える。

「そうね。6人で新しい学校へ行っても、Aqoursを続けていく」
そう曜の隣にいる梨子が続く。3年生3人が卒業しても、残ったメンバーは新しい学校でそのままAqoursを続けていく。それが、みんなで話し合って決めた事だった。

「そうだね。それがみんなの答えなんかもん！」

「やる気が出てきたぞら」

そう話していると、木の陰からそう言つてルビィと花丸が出てくる。そしてその後ろから「ギラン！」と普段通りのキャラクターで善子が出てくる。

「相つ変わらず空気読めないぞらね」

「やかましいわ！」

なんて顔をしかめる2人と普段通りのやり取りを行う。そんな光景になんだか微笑ましい気持ちになる。

「あー」

そんなやり取りの横で、ルビィが何かに気がついて声を上げる。

「どうしたの？」

「練習、どこでやるの？」

「どこで？っていつもの―」

そうルビィに指摘されて、千歌はそう言いかけるがそこで重要な事に気が付く。

「そっか、学校はもう使えないんだ……」

「駅前の練習スペースは？」

「あれはラブライブが終わるまでって約束で」

そう、学校はもう練習で使うことは出来ない。ならばと梨子が提案するが、それも駅前のスペースを貸してもらえようように交渉した曜に却下される。

「え？じゃあどうするずら？」

「鞠莉にでも聞いてみる？」

そう善子が提案する、確かに鞠莉なら内浦で練習できそうな場所に心当たりがあるかもしれない。

「ううん、自分達で探そう」

だが千歌は首を横に振ってそう答えるのだった。これからはこの6人でA q o u r sとして活動していくのに、いつまでも卒業生に頼るわけにもいかない。

「なんかね、頼ってたらダメな気がする。この6人でスタートなんだもん、この6人で何とかしなきゃ」

それが千歌の気持ちだった。「でしょ？」と言ってほほ笑むと、そうだねといって全員ほほ笑む。反対する意見など出る訳もなかった。

「閃いた！」

「はい曜ちゃん！」

そういつて挙手した曜を千歌がそう言って指さし、その案を聞く。

「新しい学校行ってみない？わたし達が春から通う」

その提案を受けて、6人は曜が学校来ていたメールと地図アプリを見て全員をその学校までナビゲートする。

「結構遠いね〜」

「生徒数考えると、かなり大きな学校っぽいけど……」

普段あまり行く事のない方向へ向かって走るバスの中で、そんなやり取りが千歌と梨子の間で行われる。

「あれ？こつちに学校なんてあったかなあ…？」

その後ろで曜が、そういつて頭を悩ませる。少しの不安を残したまま、学校から指定された住所に一行はたどり着く。

「へ？」

まず千歌の第一声はそんな気の抜けた声だった。無理もない、どうみても現在使っている雰囲気は無く。外壁にまで草が伸びているわ、窓はひび割れテープで補強しているわの廃墟と言っても差し支えない木造の建物が目の前にあったのだから。

「か…過去ずら…」

「曜、間違ったんじゃないの!？」

余りにボロボロな建物に、花丸はそう言つて驚き善子は曜に突つかかる。

「ええ…でも、学校から送られてきた場所だよ。浦の星の生徒は入学式の日ここに集合する事」

そう言つてもう一度スマホを確認してメールを読み上げる。するとルビイが何かを見つけたのか「あああああつ！」と大声を上げる。

「見て！」

そう彼女が指さしたのは、校門横にくっついている木製の板だった。そこには『静真高等学校』と擦り切れではいてもはっきり読みとれる文字が並んでいた。

そしてその下に白い文字で最近書かれたのか、真新しい文字が並んでいた。それこそが――

『浦の星学院 分校』

「二分校く!？」

全員の声が、辺りに木霊するのだった。

一方で遙は、東京での日々を過ごしていた。

アルケミースターズのメンバーと、量子力学の実験を見学させても

らっていたのだ。

もちろん、手伝いという名目ではあるので春休みで人の少ない大学内で遥もできることは全力でこなしていたし、たった数日だが充実感を得ていた。

だが、ゾグを倒してから1か月近くが経過しずっと地球にいた。シルビアとの激突こそあれど、地球の人々は怪獣やら破滅招来体の脅威を認識することなく。平和な時が流れていた。

でも、一つだけ遥にとって不安なニュースが飛び込んできた。

作業の傍ら、パソコンをニュースのサイトに切り替える。そこで見たものこそ――

『ゾンネル、ウエスト・コーストに出現』

そんな見出しのニュースが、画像付きでサイトに投稿されていた。そしてその記事の中には、場合によっては『排除』するという旨が記されていたのだった。

「地球に生きる、仲間なのに……」

ふとエスプレンダーに視線を落とす。だがもうガイアと別れた遥の手に、もう光は宿っていない。

エスプレンダーも、もう役目を終えたものだと言も認識しているのだが。それでもお守りとして、常に持ち歩いていたのだ。

「ねえ、あの人が知ってる？」

「えー誰？」

不意にそんな声がするので、声の方を見ると女子大生数人がこちらを指さしているのが目に入る。

「ウルトラマンガイア」

「えーうそ!？」

やっぱり変身が解ける瞬間を中継されてしまったので、遥もはや自分の顔が知られていることにも少しづつ慣れてしまっていた。

「かわいい顔してるけど、あたしはアグルの湊くんの方がタイプかな」
「そんなやりとりをしながら過ぎ去っていく女性に『なんだと?』みたいな少し悔しいような感情が湧き上がる。

そうだ、ちよっぴり変装してみよう。そんな事を考えていると、沼

津にいるはずの A q o u r s のみんなから1通のメールが届くのだった。

「嘘でしょ…?」

「どうしたの?」

「へ? いや何でもないんです」

不意に現れたアルケミースターズのメンバーにそう聞かれ、咄嗟に誤魔化した遥だったがここである事を頼みこむ。

「一つ、お願いがあるんですが—」

「何それ!」

沼津の喫茶店でそんな千歌の怒声が響く。分校に通えと言われたのだから無理もないだろう。

「なんでも、浦の星のみんなと一緒にするのが嫌だって声が一部であるみたいで」

「しばらく、分校で様子を見ましよう。ってことになったんで」

「それで、浦の星の生徒用に今は使っていない小学校を借りたらしくて。教室も今のところひとつだけ…」

そんな千歌に、幼馴染である三人が説明するが、やはり彼女達も納得している訳では無く。表情からは不満が見て取れる。

「統廃合になって、廃校になった学校に行くんじゃない意味ないすら」

そう言う花丸の意見はもつともだった。それなら尚更、浦の星を廃校にした意味がない。元々の校舎の方がきれいだし、教室だってちゃんとおある。

「それに、三年生が卒業したからってルビィ達全員が同じ教室に入ったら…」

ほぼ間違いない、狭すぎて授業どころでは無くなるだろう。

「なにそれ? 授業できないじゃーん」

そう千歌は愉快そうに言うが、梨子に「スクールアイドル活動もね」と言われてその顔が凍り付く。授業が無くなるのは嬉しいがそれは困る。いや、学生なのだから受けるべきだが…。

「でも、どうして一緒にしたくないなんて声が…」

「そう言えば、曜ちゃんはどうしたずら？」

そう梨子が疑問を浮かべたところで、ホットドックを食べようとした花丸がその手を止めてそう切り出す。

そう言えばと全員周囲を見渡す。全員一緒に座るのは無理だからと、散らばって座っていたのだが店内に他に客の姿は無く。曜の姿も見えない。

「確か、電話がかかってきて……」

そんなやり取りを聞き流しつつ、店の外へと視線を向けた善子は信じられないものを目撃するのだった。

「…嘘!？」

そう思わず声を出して窓ガラスに顔を近づける善子。そしてその横には店内中央付近のカウンター席にいたはずの花丸とルビイが立っていて、食いつくように善子と同じ方を見つめていた。

「なに?」

千歌がそう言って同じく窓の外へと視線を移そうとするが、すかさず一年三人組は立ち上がって腕を伸ばし外が見えないように妨害する。

「な、なんでもないずら!」

「リトルデーモン達が、少しざわついてるだけよ」

「ピ、ピギイ!」

そう言って咄嗟に誤魔化そうとするが、誰が聞いても何かあったのはバレバレだった。ルビイ、花丸、善子の順で口調がごちゃごちゃになつてしまっていたからだ。

「…何を見たの?」

そう梨子が詰め寄る。

「何でもない!何でもないの!」

「見ない方が良い!」

「その通りずらー！」

だが頑なに譲らない一年生を見て、逆に俄然何を見たのかきになった千歌と梨子は店外へとでていく。

「あつもしかして、どこかでかわいい制服みつけちゃったとか？」

そう言つてアーケード街へと出て行つた千歌はそのままその場で固まつてしまう。そしてその視線の先を、千歌の後を追つて出て行つた梨子も同様に言葉を失う。

その視線の先に間違いなく、渡辺曜はいた。だが問題は彼女と向かい合つている人物だった。黒いジャケットを羽織つて帽子を被つた曜より頭一つ程背の高い人物と会話していたのだ。

帽子を被つていても、そこから覗かせる顔は中性的で整つた顔立ちをしているように思える。すらつとした印象を与える人物を見る曜の顔は親しい間柄でなければ決して見せないような、それでいて普段 A q o u r s の皆に向けるものとも少し違う笑顔に感じられた。

「ゆめ？」

そう言いかけると千歌が唐突に梨子の頬を引っ張るので、呂律の回らない声でつぶやきつつ梨子もやり返す。

「ゆめだよね、ゆめゆめ」

「そっかーゆめかー」

なんてやりとりをお互いの頬を引っ張り合い呂律の回らない声で呟くと、お互いに顔を見合わせる。

「リアルこそ正義」

「…はい」

いつの間にか後ろに来ていた善子にそう言われて、再び曜たちの方へと顔を向けさせられる。

「もしかして、曜ちゃんの弟ずら？」

「確か居ないはずなんだけどなあ…」

花丸に小声でささやかかれて、千歌はそう腕を組んで首を傾げながら答える。

「じゃあやつぱり…」

「曜の…ビッグデーモン!?!」

そう梨子が小声で続けと、善子が思わず声を張り上げてしまった。
「ああこっち向く」

そう言つて千歌が善子の口を塞いで咄嗟に全員物陰に隠れる。暫くすると、ルビイが「あつ居ない！」と声を上げたので千歌が「追えー！」と号令を出し、五人はふたりの後をつける。

時々曜はこちらを振り返るが、なんとか彼女の視線に写り込む前に物陰に隠れる。「にやくお」と善子がそのたびに猫の鳴きまねをして誤魔化していた。

だがそんな事も、そんなに長く続くはずは無かった。

いつの間にか、どこかのお店の前に鎮座していたマスコットキャラクタ―を持ち出してその背後に隠れた善子が、また猫の鳴きまねをした時だった。

「なあんだ、猫ちゃんか」

そう言つて曜たちがまた進んでいくと、安心した善子が立ち上がる。

「危ない危ない、危うく見つかるどころだ……」

そう言つて振り返つてマスコットを拾つた時だった。目の前に曜の顔があった。

「善子ちゃん」

「おかけになつた電話は、お客様の都合によりお繋ぎできません！」
につこりと笑顔で善子と顔を合わせる曜だったが、善子はマスコットを持ち上げて顔を隠すとそう言つて誤魔化そうとする。

「いや、そうじゃなくて……」

「どうしたの？曜ちゃん」

そんな彼女の様子に、曜は困つたような声を上げると曜と一緒にいた人物がその声をかける。その声は、少年にしてもやけに高いなと思つた。中性的な少年は身近に遥がいるが、彼よりもっと高い。

「ああ、ごめんね。月ちゃん」

「月……『ちゃん』？」

そう告げる曜に、千歌がそう反芻する。

「ええ!?千歌ちゃん？」

そんな千歌の様子に、曜は目を丸くして驚くがすぐに納得がいったように。

「そっか紹介して無かったっけ？わたしの従姉妹の月ちゃん」

曜にそう紹介されて、その人物は帽子を取る。すると綺麗な黒髪が肩のあたりまではらりと落ちてくる。

「月です。よろしく」

そう言っただけで敬礼をして見せる。

「もしかして」

「女の子？」

「なあんだ…」

そう言っただけで勝手にした誤解が解けたところで、全員膝の力が抜けてしまった。そんな様子を不思議そうに曜と月は見つめていた。

「じゃあ、あの学校の生徒なの？」

「うん。入学前、曜ちゃんと一緒に通わない？って誘ったんだけど、曜ちゃんは千歌ちゃんと同じ学校がいいって」

統合先の学校である、静真高校の生徒であることを曜の口から紹介された千歌は、月にそう反芻すると月は笑いながらそう返すと、その横で曜が顔を赤らめる。

「そ…そうだったっけ？」

「照れる事ないじゃない」

そんな曜に、梨子はそう告げると月は梨子の方へと視線を移す。

「君が梨子ちゃんだね？」

「は、はい」

同い年なのだが、梨子はとっさに声をかけられてそう緊張気味にそう返事をする。

「いつも曜ちゃんが言ってたよ。尊敬してるって」

「そ、そんな…」

「照れることないのに」

そう月に言われ、梨子は返答に困ったような反応を示すと今度は曜

に笑いながらそう言い返される。

「千歌ちゃん、ルビィちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん。曜ちゃん本当にAqoursのみんなが好きみたいで、会うたびにいつもみんなの事話してたんだよ」

そう言われてまた恥ずかしくなったのか毛先をいじりながら顔を逸らす曜に、月は顔を近づけて続ける。

「いつも思うんだ。もうAqoursは曜ちゃんの一部なんだなあつて」

そう言つて彼女は眩しいほどの笑顔を見せる。

「さすが曜ちゃんの従姉妹ずら、裏表がないっていうか」

「なんでわたしの方見るのよ?」

そう告げる花丸に、視線を向けられた善子が噛み付く。

「それと、分校の事…」

花丸と善子のやり取りを面白そうに眺めていた月に、ルビィがそうおずおずと尋ねると。彼女は逡巡すると、しっかりと説明してくれた。

静真高等学校は、元々部活動が盛んで全国大会でも結果を残すような強豪の部活動が多く存在している。そんな部活が、逆に大した結果を残せなかった浦の星の生徒と同じ部活となった時に、部の雰囲気はだらけたものにかつてしまわないか?そんな声の一部の父兄から上がったらしい。

どうしてそんなことになるのか?そんな憤りを善子たちは見せるが、そんな様子も月は「だよね」と学校側が下した措置を不満に思っているようだった。そして暗い表情のまま説明を続ける。

「僕達生徒も先生たちも心配ないって説得したんだけど、部がダメになつたらどうするんだ?とか責任とれるのか?とか」

「それでどうしたらいいか相談してたんだ」

そこで曜もそう口を開く。

「全面戦争?」

「そんな訳ないでしょ」

物騒な事を呟く善子に、梨子が素早くツツコミをいれる。

「その人たちが気にしてるのは、浦の星の生徒が部活でちゃんとまじ

めにやって行けるか何だと思う」

そう曜が告げると、今度は月がその続きを告げる。

「だから実績のある部活もあるよって証明できればいいんだよ」

「部活…」

「証明するって言っても…」

ルビィと花丸がそう視線を落とす。そんな誇れるような凄い部が存在したか、千歌も視線を落として悩み始める。

「あるでしょ」

そんな様子に気がついた梨子が優しく告げる。

「全国大会で優勝した部活が一つだけ」

今度は曜がそうヒントを与える。そこでようやく千歌ははっとしたように視線を上げる。

「わたし達、スクールアイドル部が新しい学校の部活にも負けなくらい真面目に本気で活動していて、人を感動させられるんだってわかってもらえばいいんじゃない?」

「それ……それいい!」

「でしょ?」

そこでようやく表情を明るくさせた千歌に、曜もそう告げる。

「ライブでもやるつもり?」

「それもいいけど。実は来週、丁度いいイベントがあるんだ」

そう善子に聞かれ、月は丁度いい機会があると切り出すのだった。

Ⅱこれから

静真高等学校で、学校に所属しているすべての部活動による。来年でへ向けての活動報告。

その機会に、浦の星の生徒代表としてスクールアイドル部『Aqours』のライブを月の助力によって行えることとなった。

「み、未来ずらあ…」

校舎を見た花丸の第一声がそれだった。無理もない、浦の星とは比較にならない生徒数に恥じぬ立派な校舎がそびえ立っていた。

「い…行くの？本当に…」

そう言つて尻込みするルビィに、善子に至っては校門の陰に身を隠してしまう。

「あ…あれは、能力者…：我が前世を知るもの！」

「前世？」

「中学時代の同級生ずら」

そんな事を一人呟く善子に、梨子が不思議そうにそう反芻すると花丸が翻訳してくれる。そうこうしているといたたまれなくなったのか、善子は踵を返して帰ろうとするがすかさず梨子が襟をつかんで止める。

「学校とみんなの為よ」

「うぐ…」

痛い所を付かれたというような表情を善子が浮かべていると、気がつけば静真高校の生徒たちの視線がこちらに注がれる。

無理もない、6人だけ違う制服なのだから嫌でも目立ってしまう。だが意を決して、6人は学校の敷地内へと足を踏み入れた。

部活動報告会は講堂で行われた。講堂の広さは、浦の星の体育館と比較にならない広さを誇っていた。

「うう…緊張する…」

「こんなに大きなところだったずらね」

「何言ってるの、ラブライブ決勝の会場の方がよっぽど…」

思わず不安げにそう漏らすルビィと花丸に、善子はそう言いかけるが結局言い澱んでしまう。今までのステージは、『スクールアイドル』を観に来ている人の前でのパフォーマンスだったが今回は違う。

今回この、静真高等学校の講堂に居る人々は『スクールアイドル』が見たいのではなく、『部活動の今期の活動』を見たいのだ。

「あの時はみんないたし…」

「いるよ。今も」

そう震える声で呟く花丸に、千歌はそう告げる。

「これで全員？」

「思ったより6人って…」

「少ないのかも…」

これからはこの6人でステージに立つ、これで全員。そう解つていても、1年3人は思わずそう漏らさずにはいられなかった。

「次、曜ちゃん達の番だよ。特別に少しだけ時間貰えたから、頑張つて」

そうこちらへやってきた月が告げる。

「うん。浦の星のみんなの為に」

「そうね」

「大丈夫、できるよ」

そう返す千歌に梨子が応じ、そして曜もそう告げると一年生へと手を差し伸べる。そして6人で円陣を組む。

「ゼロから1へ、1からその先へ」

「Aqoursサンシャイン」

普段と違ってライブのイベントではないから小声で、でもはつきりとそうみんなで声を出す。

『それではこれより、今年度から本校と統合になる。浦の星学院スクールアイドル部。Aqoursによるライブを行いたいと思います』

そのアナウンスの後に控えめな拍手が起こる。いつもと勝手の違

うライブ、そして6人での新体制。それでも少女たちは、このステージを乗り越えねばならなかった。

―始まりだ

―これが私達の

―新しいA q o u r sの第一歩

―この6人で踏み出す

―6人で

―6人：

6人でのパフォーマンスを行う為にフォーメーションも9人に合わせていたものから変更した。だがいざ本番となると不意に背後をチラリとみてしまう。

だがそこにはもう、3年生はいない―

その日の夕方、商店街の和菓子屋前にたむろしていたのだがその表情は暗いものだった。

「失敗しちゃったね…」

「まさかあんな初歩的なミスするなんて…」

そう呟くルビィの隣で梨子も頭を抱える。練習場所の問題は未だ解決しておらず、満足のいく練習は出来ていなかったとはいえそれを言い訳にすることなどできなかつた。

「気が緩んでたって訳じゃないと思うけど…」

「なんか、落ち着かないすら。6人だと…」

そう曜や花丸も呟く。

「お姉ちゃん…」

思わずルビィの口から洩れたその言葉に、千歌は口を噤む。

「あついた！おーい」

「むっちゃん達…」

そうしていると、いつもの千歌達の同級生の3人がこちらへと駆け

寄ってくる。

「どうだった？」

「やっぱり、今のまま暫く分校の形にしたいって…」

そう千歌が聞くと、表情を曇らせてそう結果を教えてくれた。ステージで失敗してしまつた以上、良い評価が貰えないことは解つていたがやはりつらいものがある。

「だよね…」

「ごめんなさい、私達がちゃんとしていれば…」

そう梨子が謝る。学校の代表として行つたのに、こんな結果になつてしまつて責任を感じているのだ。

「ううん、悪いのはわたしたち。廃校の時も今回も、ずっと千歌達に頼りっぱなしで…」

「実際、千歌たち以上に誇れる部活なんてないし…」

そんな様子を見て、彼女達もそうフォローしてくれるがそこで曜も口を開く。

「それは、人数が少なくてみんな兼部してたからだよ。水泳部だつてそうだし…」

そう、生徒数が少ないので大会に出るためにと兼部していた生徒が多かつたのもまた事実だ。男子にいたつては、団体競技で大会に出れた部活すらほとんどない。曜だつて水泳部と兼部でスクールアイドル活動を行つていた。

「だからこそ、わたしたちがちゃんとしなくちゃいけなかつたんだよね…」

そう呟く千歌に、むつは笑つて店内へと駆け込んでいくと人数分の今川焼を買つて戻つてくると満面の笑みで千歌にそれを渡す。

「あ、ありがと…」

「浦の星のみんな、解つてるから」

「古い校舎も悪くないって」

「むしろ、わたしたちっぽくてちよつといいかな。なんて」

そう言つて笑つて励ましてくれたのだが、その気遣いがかえつて彼女達の心に重く押し掛かつた。

「久しぶりだな、みんなに会うの」

遙は実験室を抜けて、内浦に戻るべく電車に乗っていた。先週分校の件の連絡を受けて、みんなが心配になったのだ。

折角誘ってもらったのにと頭を下げたが、他のアルケミースターズのメンバーも快く遙を送り出してくれた。

「あれ？遙？！」

「理亞ちゃん…？それに聖良さんまで、どうしたんですか？」

ぼうつと窓から景色を眺めていると、不意に聞きなれた声が入る。視線を声の主へと向けると、鹿角姉妹が立っていた。

「お久しぶりです、実は——」

聖良からこの後状況を聞いて、奇しくも行き先が同じであることが判明した。

「それにしてもまだ少し信じられない」

「何が？」

急にそう切り出した理亞に、遙はそう問いかける。

「遙がウルトラマンだったってこと」

「ああ…ぶ…めんね？秘密にしてさ」

聖良にはビゾームとの戦闘の時にバレてしまったが、理亞には秘密にしたままにしていたのだ。ゾグに敗北した時に初めてガイアが遙だと知った時、彼女が何を思ったんか遙には想像できないがボロボロになって倒れた遙を助けてくれたことが記憶に新しい。

「まったく、私だけ知らなかったんだもん。びっくりしたわ」

「あはは…」

はつきりそう言われて遙は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「私は嬉しかったですよ？ウルトラマンも、この地球に産まれた命なんだって」

聖良にはそう告げられ、遙は無言のままエスプレnderをとり出す。相変わらずもうそこには光は無く、クリスタル状のパーツも暗いままだが一瞬だけ光が灯った気がした。

「本当にここであってるんですか？」

「連絡通りならここにいるはずです。懐かしいなあ、まだ正式に部として認められる前はこの辺で練習してたんですよ」

辿り着いたのは内浦にあるとある海岸。聖良と理亜も、Aqoursに用があつてこの地を訪れるとのことなので遙が今みんなが練習している場所へと案内していたのだ。

そして遙は、目的地が近付くと理亜の表情に陰りが出てきたような気がした。

「お久しぶりでーすー！」

Aqoursのみんなが砂浜で柔軟を行っているのが見えて、聖良がその声をかける。

「理亜ちゃん」

「Saint Snowさんずら」

ルビィと花丸がいち早くそれに気がつく。

「どうしてふたりが…？」

「昨日メールしたら、東京に来てるって言うから。ちよつと練習見てももらえないかなって」

函館に住んでいるふたりがここに突然現れたことに曜は不思議そうな顔をするが、千歌がそう説明する。

「全く…折角姉さまの卒業旅行中だったのに、いつもいつも呼び出さないで」

そう言つて理亜は段差をジャンプして砂浜に着地すると、不機嫌そうな顔をするので呼び出した張本人である千歌が「ごめんね」とバツの悪そうな笑みを浮かべて謝る。

「平気ですよ、理亜も会いたがってましたから」
「ちよ…姉さま！」

だがしかし、そうやってすぐさま聖良に暴露されてしまつて「へ〜」とみんなからにやにやした視線を送りつけられ、咄嗟にそちらを睨むが顔を逸らされてしまう。

「ごめんね遙くんも折角東京に行つてたのに」

「いいんですよ、僕の方こそマネージャーの仕事放り出してわがまま聞いてもらつたんですし」

千歌がそう言つて遙に視線を移すが、遙はそう笑つて応じる。本来の役目を放り出したのだからと。

「それにしても遙それ…」

「え？何かおかしい？」

梨子が訝しむような視線を遙かに送るので、遙は自分の顔に何かついているのかと不安になる。

「そのメガネ、似合つてないすら…」

「うん、それは私も思つてた…」

花丸に指摘され、理亜にもそう同調されてしまう。今遙は黒いフレームのオードソックスな作りのメガネをかけていたのだが、絶妙に似合つていないのだ。

「ええ!? いいんだよ別に、変装なんだから。お陰でここに来るまで『ウルトラマンだ〜』って言われなくて済んだし」

そう言つて拗ねたような表情をとる遙に一同はそれでいいのか？と言いたげな視線を送る。

「そんなに変装したいならまた女装でもすれば？」

「なツ…あつあれはもう嫌だ…やりたくない…」

理亜に素っ気なくそう告げられて遙は取り乱した。やはりできればもう二度としたくないらしい。

「早速見てもらえますか？今の私達のパフォーマンスを」

梨子にそう告げられ、今回の一番の目的にとりかかるといふべく。この場でAquoursの6人は、Saint Snowの2人が見守る中現状のパフォーマンスを見せる。

「なるほど…」

一通り見せてもらった後、聖良はそう呟いて一度目を閉じる。ほんの少しだったが、それでも欠点をおおよそ把握してしまえるところはさすがとしか言いようがない。

「どうですか？」

「ハッキリ言いますよ？そのために呼んだんでしようし」

横に真つ直ぐ並んだ中央で、千歌がそう険しめの表情で尋ねると、聖良は立ち上がってそう前置きすると言葉通りはつきりと全てを告げる。

「そうですね、ラブライブ決勝でのパフォーマンスを100とすると今の皆さんは30ーいや20くらいと言って良いでしょう」

「そんなに!？」

「半分の…半分ってこと？」

その厳しい評価に、善子やルビイは驚くが。遙も薄々そう感じていた。

「それだけ三年生三人の存在が大きかった。松浦果南のダンスとリズム感、小原鞠莉の歌唱力、黒澤ダイヤの華やかさと存在感。それは、Aoursの持つ明るさや元気さそのものでしたから。今はそれが無くなって、不安で心が定まってないような感じがします」

「なんか、ふわふわして定まってないって感じ」

そう聖良と理亞にはつきり言われて、一同は表情を曇らせる。

「見事に言い当てられてしまったみたいね…」

「でも…どうしたら……」

そう梨子が告げると、ルビイも思わずそう告げる。だがそれが理亞にとってその言葉は一番気に食わなかったらしい。

「そんなの人に聞いたって解るわけないじゃない!全部、自分でやらなきゃ!…姉さまたちはもう…いないの!!」

そうかなり強い口調で言い放つと、そのまま理亞は走り去ってしまった。

「すいません…」

そんな妹の様子に、聖良はそう謝罪する。だが理亞の気持ちも解る。

「理亞ちゃん、新しいスクールアイドル始めたんですか？」

そうルビイが尋ねると、聖良は首を横に振る。

「そのつもりはあるみたいですけど、なかなか…。新しく、一緒に始めようって何人が集まったみたいなんですが、中々上手くいってないよ
うで」

そう告げる聖良に「あの性格だもんね」なんて告げる善子に、「人の事いえるずらか？」と花丸が突っ込む。

するとルビイは理亞の後を追ってすぐさま駆け出した。

「ごめんね…。理亞ちゃんは、一人で頑張ってるのに…」

そう彼女に追いついたルビイは、そう謝罪するが理亞はこちらに背を向けていてその表情は見えない。

「ラブライブは、遊びじゃない」

ただ短くそう返す理亞の表情はいまだ見えないが、彼女は真剣にラブライブで優勝するためにスクールアイドルとして活動してきた。そしてその意志は今も揺るがないものなのだろう。

だからこそ、三年生が卒業したからといってふわふわしたままの6人のAqoursの様子が腹立たしかったのかもしれない。彼女は
まだ、グループとしての活動すら始められていないのだから、余計に。

そして残りのメンバーも追いついてきて、月も練習の様子が気になったのかこの場へと足を運んでくれたのだが。すぐに他の事態が発生してしまう。

突然ローターの音を轟かせ、一台のへりがこちらへと迫ってくる。

「みんな伏せて！」

すぐに遙がそう声を張り上げる。すると彼らの頭上をへりが通り過ぎると旋回し、ホバリング体勢で目の前に降りてくる。

「なんか、前にもこんなことがあったような…」

ピンク色のへり、しかもこんな登場の仕方をする人物は知る限り一

人しかいない。だがそれは、ヘリのドアが開くとすぐに裏切られる。

「小原鞠莉の母デース！」

そう告げる女性は、真っ赤なコートに身を包み、鞠莉とよく似た金髪を真っ直ぐ伸ばしていた。

場所をホテルオハラに移し、鞠莉の母がいったいどういった用見で千歌たちを招いたのかの説明を受ける。

結局あの場にいた全員がここへと移動してきたのだが、そんなやり取りの様子を鹿角姉妹や月と一緒に遥も後方で眺めていた。

「連絡がとれない!？」

そうピアノを演奏しながら告げる鞠莉の母に、思わず全員その声が重なる。

「そうなのデース!…と、その前に皆さんのことは鞠莉からよく聞いてました。学校の事、本当にありがとうございマース」

立ち上がって大げさな身振りでそう告げる彼女をみて、やっぱり鞠莉の母親なんだなと納得してしまう。

「ルビイちゃんも？」

「ううん、折角の卒業旅行だから連絡取らないようにしてたから」

そう花丸に聞かれて、ルビイはそう首を振る。

「あのハグウとデスワの3人…一切連絡がつかなくなってしまったのデス」

「ハグウとデスワ…？」

「間違いなく果南ちゃんとダイヤちゃんね…」

そう反芻する曜の隣で、梨子がそう呟く。どうやら鞠莉の母は、あの2人を快く思っていないらしいことが口調からうかがえた。

「でもみなさんならきつと3人を見つつけられるハズ！」

そう言つて両腕を天井へと掲げると、大量の金貨が6人の少女たちに降り注ぐ。

「んなっ…!？」

そんな様子に、普段取り乱さない聖良ですらも驚いており。遥も開いた口が塞がらなかつた。

「ま、まさか…3人を見つけたら、このお金を？」

そう梨子が問いかけると、花丸はなんとその硬貨を剥いているところだった。

「これチョコずら」

そう言つて幸せそうに金貨状の包み紙を開けてチョコレートを食べる。

「渡航費用は出すという意味のパフォーマンスデース！」

そう自慢げに告げる鞠莉の母に、思わずすっこけそうになる。

「これだから金持ちは…」

思わずそう遥は小声で呟くが幸い誰にも聞こえなかったようだ。

「でも、本当に見つけてくれたらそれ相応のお礼はいたしますので是非」

そう告げられると、善子は突然立ち上がる。

「任せて…この墮天使ヨハネのヨハネアイにかかれば、3人を見つける事など造作もない事です！」

「お金に目がくらんだずらか？」

そう言つて茶化してくる花丸は花丸でチョコレートを抱えて食べているようだった。

「何言つてんの、次のライブの費用にするのよ！」

「そうだよ、ルビイ達ライブがあるんだよ！」

その言葉で、ライブの失敗はライブで取り返すべく。ライブの準備を行っていることを思い出したルビイがその声を張り上げる。

「でも、行方不明なんだよね？心配は心配かも…」

「どうする？」

そう曜と梨子に言われ、千歌も腕を組んで頭を悩ませる。

「行つてきた方が良いと思います」

そこにその助言を入れたのは聖良だった。

「今日皆さんのパフォーマンスを見て思いました。理由はどうかあれ、一度卒業生3人と話した方が良いと思います」

「でも…」

「自分達で、新しい一步を踏み出すために。これまでの事を振り返る

のは悪い事ではないと思いますよ」

そう聖良に言われても、まだ決めかねている様子の千歌だったが。そんな彼女の前に、曜と梨子は立ち上がる。

「聖良さんの言う通りだと思います」

「ライブの練習はどこでもできるし、これまでだってやって来たじゃん。大丈夫、できるよ」

その二人の言葉で、千歌も決心がつき立ち上がる。

「わかった。行こっか！」

その言葉で、3人を探しに彼女達が卒業旅行で向かった地へと赴くことになった。

そしてその地とは？―

Ⅲ A q o u r s イタリアへ

「ヨハネ彼の地に―墮天!!」

3年生3人が卒業旅行で訪れているのは、イタリアだった。そして A q o u r s の6人、それと遥と月の8人でもヴェネツィアを訪れたのだがまだ3人がどこにいるのか見当もつかない。

道中で初対面だった遥とも曜の従姉妹である事を伝え、互いに短く挨拶を交わすが彼女の人柄も相まって人見知りする遥も、あまり緊張せずにすんだ。

天使やら墮天使やらの本場であるヨーロッパでテンションの高い善子を余所に周囲は「やっとなつた」と慣れない飛行機での長旅で凝り固まった体を伸ばしていた。

「ピスタチオボーノずら〜」

花丸はさつそくピスタチオというアイスクリームに似たスイーツを幸せそうに食べていた。

「はやっ!」

「ホントだ、おいし」

さつそく何か食べてる花丸に思わずそう言わずにはいられない善子だったが、遥も一緒になつて食べていた。

「チョコもあるずらよ」

「善子ちゃんも食べる?」

そう言つて花丸とルビイがあらかじめ買つておいた分を善子に進めるが、善子は表情を歪ませる。

「なんか前にこのパターンで痛い目にあつた気が…でも食べる!」

そう言つてチョコレート味を受け取つて善子も食べ始める。そんなやり取りを月も笑つてみていた。

「それで連絡は?」

「お姉ちゃんからは何も…」

「果南ちゃん鞠莉ちゃんからも最初にそつちに行くよつて送つた時に届いたこれだけ」

梨子にそう問われ、ルビイは連絡が取れなかったことを、千歌は出

発時に一枚だけ写真が送られてきただけの事を明かす。

恐らく橋の上から水路を撮影したであろうその写真は、この地を訪れるのが初めてである遙たちにはどこにあるか見当もつかない。

「この写真の場所に行ってみるしかないよね」

「そうですね…通訳は任せてください！アルケミースターズのイタリメンバーからちゃんと教わってきたんで」

千歌に見せてもらって写真を見てそう提案する曜に、遙はそう自信たっぷりに宣言する。こういう時にアルケミースターズという天才集団の一員だと言う事をアピールしたかったようだ。

「ここ、すぐ近くだよ！」

だがその写真を見てすぐに月はその場所に覚えがあるらしくそう告げる。

「そうなの？」

「うん、月ちゃん小さい時イタリアに住んでたから、詳しいんだよ」

「ガイド役だね、解らないことがあったら何でも聞いてよ。さあレッツツヨースロー!!」

そう曜に言われ、月は自信ありげに胸を叩くとそう言って先導を切って歩き始める。

「あれ…？えつと…」

「ドンマイずら」

そんな様子に遙が残念そうな顔をしていたのは、言うまでもない。

街中に水路が張り巡らされているこの街の景色は、絶対に日本では見られないであろう光景で思わず本来の目的を忘れて見入りそうになる。

そうこうしていると「ここだよー」という月の声で、先程の写真の場所に辿り着いたことに気がつく。

「確かにここね」

写真と実際の景色を見比べて梨子がそう呟く。写真との違いは船着き場にゴンドラが停まっているかどうかの差しかなく。寸分違わず先の写真はここで撮影したものであることが解る。するとそこから橋を渡り切ったところにある公衆電話が突然なり始める。

「電話が鳴ってる…」

その音にいち早く気がついた曜がそう呟くと、何か閃いたのか月がその公衆電話に駆け寄っていき電話に出る。

「月ちゃん…?」

「ボヴォロ…」

「え…?」

電話を切った月に、一体何の会話があったのか聞こうとするが受話器を戻した月は短くそう呟く。

「コンタリーニ・デル・ボヴォロだつて！」

どうやらそこに行けば、三人が居るのだろう。そう場所の名前を告げると月にはっこりと笑う。

「まったく、どう考えたつておかしいじゃない!…もしかして元老院に？」

「いいから歩くすら」

なんて先の電話を怪しむ善子に、花丸はそう冷たく告げる。

「こつちでいいの?」

「多分…」

道を確認する千歌に、月も少し自信がないのかそう答える。だが裏路地のような道を抜けると目の前には立派なレンガ造りの建造物がそびえ立っていた。そしてその最上階では見覚えのある三人組がこちらへ向かって手を振っている。

すると8人は一斉に駆け出すと、当然古い建造物なのでエレベーターなどあるはずもなく。一気に会談を駆け上っていく。

「お姉ちゃん!」

いち早く駆け出したルビィは最上階に辿り着くとダイヤに抱きつく。

「良く来ましたわね。こんな遠くまで」

「だって…だって…」

そう言ってルビイは目に涙を浮かべる。

「良かった、3人一緒だったんだね」

「オフコース！ずっと一緒だよ？」

安心したようにそう告げる千歌に、鞠莉はそう答える。

「どうして行方不明に？」

そうルビイに聞かれて三人は首を傾げる。どうやら当人たちにそんなつもりは一切なかったらしい。

「やっぱり、そういう事になってるのね」

だがすぐにここへと来た理由を聞いて、鞠莉は忌々し気にそう呟く。

「鞠莉のお母さんは、千歌たちになんて言ってたの？」

「とくには何も…」

「ただ、行方不明になって心配だからって」

果南にそう問いかけて、梨子と千歌は先程説明した事以外には何も聞いていないことを伝える。

「ところで、そちらの方は？」

ダイヤはそう言って月に視線を向ける。

「初めまして、渡辺月といいます。曜ちゃんの従姉妹です、よろしくー」

そう言って敬礼して挨拶する彼女は、すぐに三年生とも打ち解けたようだった。

「さすが」

「曜ちゃんの従姉妹」

そう千歌と梨子に言われて、曜はイマイチピンと来てなさそうだったが。

「ああこの階段、目が回るずらく…」

そこでようやくやく花丸も最上階へとたどり着くと、そのまま倒れこんでしまう。

「ぐ苦勞！」

「花丸ちゃん大丈夫？」

確かにここまで急ならせん階段を昇ってきた訳だし、彼女の反応が一番普通な気もしなくはないが。そこは今までの練習の成果なのだろう。

「それにしても、千歌たちが何も知らないってことは…」

「ダシに使われたってことですわね…」

状況を整理して、そう切り出した果南にダイヤがそう告げる。

「チカつちたちが来るってわかれば、わたし達は必ずコンタクトを取る」

「それでおびき出して—」

「捕まえようって魂胆ですわ！」

そう言つてダイヤが一枚のチラシを見せつける。たずね人と書かれたそれには、鞠莉と果南にダイヤの似顔絵が描いてあった。特に果南とダイヤのそれは悪意も見え隠れしていたが今はその事はいいだろう。

そうこうしていると、気がつけば背後から現地の人々の話し声が聞こえてきた。そちらを振り返ると、ダイヤの持っているものと同じチラシをもっている。なんでも街中に張り出されてしまっているらしい。

「ここにあまりロングステイは無理ですね…」

このままここに人が増えるのは良くない。何か策は無いかと鞠莉は頭を働かせる。

「曜、ごめーん！」

そう言つて鞠莉は懐からあるものをとり出して、外へと放り投げる。それは一枚のボーダーシャツだった。

「制服う！」

だがそれに飛びつく人影が『2人』いた。

「二「だめえ!!」」

曜と月がそのシャツに、ここが最上階であることも忘れて飛びついていくのを残ったメンバーが抱き着いて必死に落下しないように引き上げる。

「さすが…」

「曜ちゃんの従姉妹…」

なんてやっているのと、その隙に鞠莉達3人は階段を駆け下り外へと走り去ってしまった。ちなみに後から聞いた話によるとこのシャツは、ゴンドリエーレというゴンドラを漕ぐ人の制服らしい。

「もしかして、鞠莉ちゃん達お母さんからにげてるはず？」

まだバテて倒れたまんまの花丸がそう推測する。後を追おうにもどこへ逃げたか解らない。一体どうしたものかと考えていると、シャツの中に1枚の紙が入っていることに用が気がつく。

「これは…？」

恐らくイタリア語で書かれたものであろうそれに、曜は顔をしかめると「見せてください」と今度こそと遥が意気込む。

「えつと…」

「ヨハネが守護する地を見下ろす時、妖精の導きが行く先を示すであろう」

少し翻訳に頭を悩ませると、月は一見ただで一瞬で日本語に翻訳して読み上げてしまう。

「ヨハネ…？」

その単語に反応して善子は自分を指さす傍ら「またか…」と遥は肩を落とす。

「違うよ、ヨハネが守護聖人の地つてことだと思う」

そう笑って月が補足で説明するが、イマイチ善子には伝わらなかったのか「そんな場所が…」とご満悦な表情を浮かべている。

一方、鞠莉達は車を使って離れたフィレンツェという地域の別荘までたどり着いていた。流石に距離もあったのもう日が傾いていた。

「到着う〜」

流石に疲れ果てた鞠莉はそう言ってソファにもたれかかる。

「凄い所ですね、こちら小原家の別荘なのですか？」

「全く、これだから金持ちは」

そう問いかけるダイヤの横で、果南がそう皮肉っぽく告げる。イタリアは小原家の先祖が暮らしていたらしく、小原家の別荘などが今も存在するのだ。

「オフコース…:とりたいところだけどここは、ある人に借りて使わせてもらってるの。だから今頃ママは別の小原家所有の別荘に行ってるかもね」

「千歌さん達にあえて会って、居場所を教えてから撒いたわけですね」「イエース!そうすれば向こうは逃げられたと思って、別の街の小原家の別荘を探し始める」

「時間が稼げるって訳ね」

ダイヤがそう推察すると、鞠莉はそう自慢げにそう告げると果南も納得が言った様子だった。

「千歌さん達はどうするんですの?」

「メッセージの意味を理解してくれば、多分気づくと思うけど…」
まさかみんなこつちに探しに来るとは思ってもみなかつたし、結局撒いてしまったままなのも心苦しいのでダイヤはそう問いかけると、鞠莉はそう答える。

「でも、鞠莉のお母さんに言われたからって本当に来ちゃうなんてね」「私たちの事はいいから、新しいA q o u r sを始めなさいって言ったのに」

もう卒業した私達の事は気にせず。残ったメンバーで新しいスタートを切ってほしい。そう伝えたのにと鞠莉は呟く。

「恐らく、言われたからではないと思いますわ。きっと何か、伝えたいことがあるのでしょうか」

そうダイヤが自分の予想を述べる。全て話してきたつもりだったが、残された側としてはまだ何か伝えたいことがあるのかもしれないと。

「そういえば、ある人って?」

「驚くわよ?」

ある人という含みのあるワードが気になってそう果南が問いかけ

ると、鞠莉はそう意地悪く笑う。そうこうしていると、扉が開いて別室から綺麗な黒髪を短く切りそろえた青年が入ってくる。

「よお、久しぶり…でもないか」

「ヒロ!?なんで?」

湊博樹が出てきたものだから、果南は驚いて思わずそう声を張り上げる。一方で博樹は一部白くなっていった髪も染め直したのか、前あつた時よりも明るそうな印象を受ける。

「オレがこつちで借りてる家なんだよ、日本より施設が整ってるからこつちにいることが多かったし」

「なるほど…」

「そうだヒロもその辺の金銭感覚おかしいんだった…」

そう説明されて、やや呆然としながらも納得するダイヤの隣で、果南はやれやれといった様子でそう漏らす。

博樹の場合、自身が取得した工学特許が膨大でかつ全て自分の自由に扱えるお金として手元にくるので鞠莉より実は自由が利くのだ。

「事情は粗方把握してるしその事に口を挟むつもりはないが、結局こども鞠莉の親戚が管理してた家だし長くは誤魔化せないぞ?」

「大丈夫、チカっち達と合流できれば。見つかる前にまた移動するか」

そう博樹が心配して見せると、鞠莉はそう答える。もちろんその事も織り込み済みだといわんばかりだった。

「それより一緒にくる?」

「いやいいよ、オレは…」

「果南と2人の方が良い?」

「お前っ…!」

鞠莉に悪戯っぽくそう告げられて博樹は思わず顔を赤らめる。「鞠莉!何でそんなこと…」と思わず果南も声を荒げるが、鞠莉は悪戯に成功したと言わんばかりに舌を出して笑う。

「イツツジョーク」

「ったく、悪いがオレも暇じゃないんだ。空いてる部屋は沢山あるから勝手に使え、じゃあな」

そう言つて博樹はさつさと部屋から出て行つてしまふ。その時一瞬だけ博樹の表情が何か思い詰めているようだったが、この時の3人は気付くことが出来なかつた。

一方在校生メンバーもその頃ようやく鉄道を乗り継いでようやくフイレンツェに到着していた。

「ふう〜到着う…」

飛行機でイタリアに来てすぐ今度は二時間鉄道に揺られ、流石に疲れてしまったしお昼を食べ損ねてしまつていたので軽食を摂ろうと月の案内でフードコートに来ていた。

「メッセージをみてここまで来てみたものの…」

「鞠莉ちゃん達どこにいるのかな?」

「待つてれば、また向こうから接触…してくるのかしら?」

やつと座つてゆつくりご飯を食べることが出来たわけだが、やはり鞠莉達を探すのが本来の目的なのでそう言葉を交わしながら周囲に視線を配るがそれらしき人影はいない。

「ケータイは?」

「何も…きつとケータイだと、鞠莉ちゃんのお母さんに解るようになってるんだとおもう…」

なにか連絡はないかと聞いてみるが、ルビイはそう首を横に振る。あり得ない話ではないので一同はどうしたものかと顔を俯かせる。

「はいおまたせ〜」

そんな一同の様子を見て、意識的に笑顔を作つてテーブルに戻つてきた月は大きなステーキがのつた皿をテーブルに置く。

「うわーなにこれ!」

「でつか…」

みんなで分けて食べれるように切り分けてあつたそれは、とても一人で食べれるサイズではなくそう口々に驚く。

「ビステツカ・アツラ・フィオレンティーナ。ここの名物だよ」

そう答えると月は、ルビイへウインクする「きつと大丈夫だよ」と。

その意図が伝わったのかルビイも暗かった表情を少し明るくなる。

「あれ？善子ちゃん？」

そこで一緒に食べようとしたところで善子の姿が無い事に花丸がまず気がついた。

「相変わらず自由だな善子ちゃんは…」

遙もそう思わず呟くも立ち上がって周囲を見渡す。だが見慣れた髪の毛を右側頭部でシニヨンを作っている女の子の姿はどこにも見えない。

「消えた？」

「あの墮天使…自分が行方不明になってどうするの」

千歌や梨子も呆れ気味にそう告げると「心当たりは？」と月が尋ねてくる。だが初めてきた土地で彼女が行きそうな場所を模索するもなかなか思いつかない。

「善子ちゃん、ヨハネってずっと呟いてた」

だがここへたどり着くまでの道中、善子がずっとそう呟いていたのをルビイが聞いていたらしく。月の案内で恐らくそこであろうという場所へと急ぐ。

一同が向かったのはサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂というフィレンツェで一番有名なドーム状の天蓋のある巨大な建造物だった。

結論から言うと、そこでひとまず善子とは合流できた。それはよかったのだがなぜか白い羽根を背負って、シニヨンにも白い羽根を刺して『天使ヨハネ』を自称し始めるわ。天蓋への入場券を人数分買っておいて『天使ヨハネの導き』と称してひとり15ユーロ要求してきたりした。

そんな様子を「A q o u r s っているんな子が居るんだねえ」と月は笑っていたが、こうも振り回されてはこちらとしてはため息が出る。

だがそのお陰で、街中を見渡せる展望台から見えた光の明滅が、鞠莉達からの合図であることに気がつくことが出来たわけではあったのだが…。

先の光の見えた場所へ、今度はタクシーで向かう。するとその場所は住宅街ではなかったのだ、どの建物か一発でわかった。だがたどり着いたところには、あたりは夜の暗闇が包んでいた。

「ごめんくださいーい！」

豪邸の前に立つと千歌がそう声を張り上げる。ここにいるのなら、日本語でそう告げれば反応してくれるだろうと。

するとギイと音を立てて門が開くと、一人の人物が口に指をあてて『静かに』とジェスチャーをしながら中へと招き入れる。

「よく鞠莉の雑なヒントでここまでこれたな」

「博樹さんも一緒に来てたんですか？」

そう言つて笑つていたのは博樹だった。その事に遥やみんな驚くが、一緒に行動していた訳では無い事を説明され中へと通されると、3年生組3人が待つていた。

「ママから何か言われなかった？」

そう鞠莉に聞かれるが「特には」と千歌が答えると、「何があったの？」と梨子が反対に説明を求める。

「うん…ちよつとね？」

そう言つてはぐらかすように答える鞠莉に「折角ここまで来たんだよ？」と千歌は当然納得いかない様子だった。

「確かに千歌さんが可哀想ですわ、このまま隠しておくのは」

そう言つてダイヤも鞠莉の口から説明するように論すが、口を割ろうとしないので果南が代わりに答える。

「実は鞠莉、結婚するの」

余りに想定外の内容に、暫し場を静寂が包み込む。

「誰かと戦うの？」

「それ決闘」

千歌がそう口を開くとすぐさま果南がそうツツコミを入れる。

「綺麗好き？」

「潔癖ですわ」

IV 自分を作ってくれたもの

「鞠莉、結婚するの」

対した事でもないように告げる果南の言葉に、驚愕する一同は鞠莉に詰め寄る。

「け…結婚?!」

「いつの間に?」

「誰と誰と誰と誰と!」

そう鞠莉に詰め寄る曜と花丸に梨子だったが、鞠莉はそれを手で制する。

「しないよ。果南、ふざけないで」

そう言つて鞠莉は抗議するように果南の方を振り返るが、彼女はソファに座つたまま落ち着いた様子だった。

「でも、実際このままだったらそうなるんでしょ?」

「だから、そうならないようにしてるんじゃない」

そう言い放つ果南に鞠莉はそう言い返すが、話が見えてこない。

「つまり…どういう事なんです?」

そう言つて遥はダイヤの方を見る。この場合、一番適切に説明してくれそうなのは彼女だったから。

「つまり縁談の話がある。ということですよ」

「それも相手は一度もあつた事が無いような人」

そう答えるダイヤに、鞠莉は不機嫌そうに補足する。確かにそれは嫌だな、と全員が納得する反面なぜそうなるのかという疑問がわく。すると果南がティーカップを皿に音を立てて下すと、不機嫌そうにこう言い放つた。

「鞠莉の自由を奪いたいから」

その一言に「え?」と一同は固まるが、その事についてダイヤも口を開いた。

「鞠莉さんのお母様は、昔から私達の事をあまりよく思っていないのですわ」

「それまでは言う事を聞いていた鞠莉が、わたし達と知り合つてから

はどんどん勝手に行動するようになって」

「しまいには勝手に浦の星に戻って、理事長に就任して。：スクールアイドルに対しても、あまりいい印象は持っていないのかも」

そうふたりから説明されるが、それでもあまり聞いていて納得できるものではなかった。そしてこの卒業旅行も、自由に行動することを認めるまで戻らないという家出のような状況らしい。

「まさかここまで必死に追いかけてくるとは思わなかったけど」

そう言って果南は頭の後ろで手を組んでやれやれといった様子だった。

「ヒロが結婚してくれれば、こんなことしなくてよかったのにな」

「勘弁してくれ：：そもそもオレじゃ納得しないだろお前の親は」

かつて博樹のやったことのせいで鞠莉が怪我を負った事は両親も知っている。そんな相手と結婚すると言っても絶対に認めないだろう。

そう言って博樹はやれやれといった様子で立ち上がると、自室へ戻ろうとする。

「じゃあ遙?」

「えっ? 僕ですか?」

「お願い、ママが納得するまでふりで良いから：：!」

ならばと鞠莉は矛先を遙かに変えるが、遙はそう言って動揺する。

「争い事はやめましょう。みな、心穏やかに」

なんてやっていると、そんな声がバルコニーから聞こえてくるので外へ出ると、手すりの上に善子が立っていた。

「何やってるぞら?」

「危ないよ」

そう花丸と遙が注意するが、彼女には届いていないようだった。

「それがこの、天使ヨハネのねが：：いいいいい!」

やはりというかなんというか、善子は足を滑らせて転落してしまふ。そんな彼女の悲鳴を聞いて全員バルコニーへと出てくる。

「大丈夫!」

下を見ると、善子は幸い木に引つかかって枝で軽く擦った程度で済

んでいる様子だった。こういうところだけ運がいいのかなんなのやら…

「ほんと堕天使ね」

「何上手い事言ってるのよ、助けなさいよ〜!」

そう言ってからかう梨子に、善子はそう叫ぶ。自分から危険なことをしておいてと思いきするが、そのままにしておくのは可哀想だ。

「まったく世話が焼ける…」

そう言いながらも、博樹が渋々善子を木から降ろす。

「やつと元に戻ったぞら」

すっかり普段の様子にもどる善子に、花丸がそうからかうと笑いが起こる。

「堕天使降臨!」

幸い服が破れたりは無かったが、色んな所に枝やら葉っぱやらをくっつけたまんまの善子はそう言っただけで普段通りのポーズを取る。

「ていうか、元がこれっていうのがそもそも問題だけど…」

「お黙りなさい!リトルデーモンリリーよ!」

「リリー禁止!」

呆れた様子の梨子とそんなやりとりをする善子に、博樹が近寄って一言だけ告げる。

「次やったら助けないからな」

「はい…」

そうあまり接した事のない博樹にすぐまれて善子はそう短く答える。

「ときかく、これからどうするか。千歌たちも巻き込んだから、ちゃんと考えないと」

「そうですね」

そんな様子をしり目に、果南とダイヤがそう話していると。「バタン!」と大きな音と共に扉を開け放して何者かが入ってくる。

「マ…ママ!」

その人物とは鞠莉の母親だった。ここまで早く居場所を特定されるとは思ってもいなかったので場に緊張が走る。

「こんな所で隠れてるなんて、またハグウの入れ知恵デスカ？」

「違うわ！私が考えたの。ママがしつこいから…」

他の人間には目もくれず、鞠莉へと歩み寄ってくる母へと鞠莉はそう言い放つ。

「しつこくしてこなかったから、こうなったのです。小学校の頃、家から飛び出した時も。学校を救う為に浦の星へ戻った事も、パパに言われてぐっと堪えてきました。しかし、その結果がこれデス！」

「これって…」

「わからないのですか？何一ついいことは無かったではありませんか。学校は廃校になり、鞠莉は海外での卒業資格を貰えなかったのですよ。それにその小僧のせいで大げがまで…」

そう言い放つ鞠莉の母に、一同は目を逸らす。そして鞠莉の母は一瞬だけ博樹を睨みつける。特に博樹はその事に対してかなり責任を感じているので、その視線すらもぐっと耐える。

「まって！でもスクールアイドルは全うした。みんなと一緒にラブライブは優勝したわ！」

「それが？」

そう冷たく返すと、A q o u r s のみんなの視線が冷たいものへと変わり鞠莉の母へと向けられるが彼女はお構いなく続ける。

「一体、スクールアイドルというのをやって一体何の得があつたのです？くだらない」

「くだらない…？」

その一言に、千歌が食って掛かろうとするがすぐさまダイヤがそれを引き留める。

「だから、わたし達が鞠莉を外の世界に連れ出したの」

「シヤラップ！とにかく、鞠莉の行動は私が——」

そう果南が告げる、ダイヤと共に鞠莉の両隣に立つが、母はそう遮ると鞠莉の手を引いて連れ戻そうとする。

「くだらなくなんかない！もしスクールアイドルが素晴らしいものだって証明することができたら、わたしの好きにさせてくれる？」

それを鞠莉はさらに遮ると、ダイヤと果南が鞠莉の腕を引く。そん

な様子に、すこしだけ母も驚いた様子を見せるがすぐにその表情を引き締める。

「ママの前でスクールアイドルが人を感動させることが出来るって証明することができたら…私の自由にさせてくれる?」

「縁談なんてやめて」

「私達と自由に会う事を認めて頂けますか?」

そう鞠莉に果南、ダイヤが訴えかけると、残りの6人も彼女達の後ろに立ち、真剣な眼差しを鞠莉の母親へと向ける。

「いいでしょう。ただし、ダメだったら私の言う事をきいてもらいます!」

そう言って鞠莉の母は鞠莉の手を離すと、そのままリビングを出て帰って行った。

「さて、ひとまずやり過ぎましたがどうする気だ?」

「当然、ライブをやるわ」

あえて試すようにそう問いかける博樹に、鞠莉はそう宣言する。

「まずは場所を決めるところからになりますけどね」

そうダイヤが補足する。やるとしても、なるべく人目に付くところでやる必要がある。だからまずはその場所を選定するところから入らなければならない。

「ヒロもこない?」

「…いや、オレはやることあるからやめておく」

「そっか…」

果南がそう言って誘うが博樹はそれを断る。

「博樹さん…」

「遙、後で話がある」

そんな博樹に何か言いたげだった遙に、博樹はそう告げると遙はそれに無言で頷いた。

「ボンジョルノ！」

「こんばんは。はボナ・セーラだよ」

ビデオカメラに向かってそう敬礼する曜に、カメラを構えていた月がそう指摘する。

翌日、一日かけてローマを回りライブを行う場所の選定を行っていたAqoursの面々はレストランで夕食を摂っていた。

「オツティモズラ」

そう言って目の前のステーキをおいしそうに頬張る花丸と向かい合って座っていた善子は、彼女のそんな食べている料理の隣で積み重ねられた空になった皿を見て眉を顰める。

「一体どうなってるの？こんなに食べてるのに全く変化ない…人なのか？」

「このラザニアもおいしいぞらよ〜」

そんな善子に対して花丸はラザニアをスプーンで掬って善子に差し出す。

「うまつー！」

一瞬迷う素振りを見せたが、結局誘惑には勝てずそれを口にした善子はそう言っただけを抑える。

「遙くんも食べるぞら〜？」

「え？いやいいよ。なんかこうしてるの久しぶりだなんて…ほら、東京行つてたし昨日も結局ドタバタしてたじゃん？」

そんなやりとりを笑ってみていた遙に、花丸がそう聞いてきたので遙は首を振ってそう答える。こんな時間がずっと続けばいい。今までずっとそう思っただけで戦ってきた。その戦いが終わってまたこうしていられることが嬉しいのだ。

「なんか…懐かしいぞらね」

そんなやりとりをして少ししみじみとした表情になるが、すぐにダイアが思わず大声を出したことで遮られる。

「何言ってるんですの、貴方が言い出したんですよ？ライブをしてスクールアイドルの素晴らしさをお母様に見せると」

「わーかってるわかってる」

そう言っただけで、鞠莉がその隣でうっとおしそうに手を振って見せる。どうやらどこかでライブをするか今決めたいようだった。

「でも、どこもきれいだし。人も集まってるし、ステージとして歌えれば結構盛り上がりそうだし、階段も素敵だし」

「そうね。泉もきれいだっただし、梨子もそう同意する。」

そう告げる果南に、梨子もそう同意する。

「ならコロッセオとかは？」

「ビデオカメラならボクに任せてよ！」

「それいい！」

そう提案する曜と月に、千歌がそう返す。これで反対意見が出なければそれで決定、といった空気が場に流れた時に花丸が持っていたナイフとフォークを置いて待ったをかける。

「ちよつと、聞いてほしい事があるから」

「私達一年生でも話し合ってみたいんだけど」

そう善子も続く。遥はそんな2人の様子を見守っていると、今度はルビイが立ち上がって上級生に本心を告げる。

「今回のライブの場所を、ルビイ達に決めさせてほしい！今までは千歌ちゃんやお姉ちゃん達に頼ってばかりだったから…だから、このライブは任せて欲しいの」

上級生たちは、そんな一年生の気持ちを尊重してくれた。イタリヤで行うライブの場所は一年生が決める。それでこの場はお開きとなった。

「それで?どこにしようか?」

翌日、一年生で集まってそう遙が切り出すと「ふっふっふ…」と善子がいつも通り目元でピースサインを作る。

「このヨハネアイでッ!」

「実はもう、場所決めてるんだ!」

そんな善子を遮って、ルビイがそう告げるとある場所を提案する。

「おお〜」

そんなルビイの提案した場所に、一同は感嘆の声を上げる。

そしてその場所でライブを行う事となった。

その場所とはスペイン広場。最終的にそこで決定になった理由は、なんとなく沼津の海岸にある石階段に似ていたからだだった。

そのスペイン広場の石階段をステージとして再び9人揃った少女たちは歌った。歌詞は当然ほとんど日本語で、現地の人々に歌詞の意図が伝わったかは定かではない。だがそれでも笑顔で踊る少女たちに心惹かれるものがあつたのか、その場にいた人々はそんな少女たちの姿に見入っていた。

—Hop? Stop? Nonstop!—

軽快なリズムに合わせて踊る、見ている方も楽しくなれるような曲だ。歌詞が伝わらなくても、そんな雰囲気は伝わっているのだろう。

音楽は世界共通とはまさにこのような事を指しているのだろう。ほぼゲリラライブとなったが、通りがかった人や近くで休憩していた人、様々な人がパフォーマンスを終えた彼女達に拍手を送る。

「鞠莉」

そんな彼女達の前に、鞠莉の母が歩み寄ってくる。

「私がここまでみんなと歩んできたことは、全て私の一部なの。私自身なの」

鞠莉は自身の母の眼を見てはつきりと告げる。

「パパやママが私を育ててくれたように、Aqoursやみんなが私を育てたの。何一つ手放す事なんてできない、それが今の私なの」

今までの出来事全てが、今の鞠莉を創り上げた大事なものだから。それは何か一つでも欠けてしまつては自分はきつとここまで成長す

ることはできなかつたから。だから、みんな大事なんだと。そう鞠莉は母へと伝えた。

すると鞠莉の母はふつと笑うと、そのまま鞠莉達の横を通り過ぎそのまま歩み去ってしまう。

「どうなったの？」

「さあ？」

そう問いかけてくる曜に、鞠莉はそう短く答える。するとふと目の前に一枚の花弁が舞い降り、鞠莉はそれを両手を添えて受け止める。

「でも、わかってくれたんだと思う」

だから何も言わなかつたのはきつと、鞠莉がこの先も果南やダイヤと居る事にも結婚を断る事も認めてくれる。そう言う意味での沈黙だったのだろう。

「博樹さん……」

時間は数日戻り、フィレンツェの博樹の家で遥は博樹とある話をしていた。

「ゾンネルが現れた事だろ？」

博樹をまつすぐみつめる遥に、博樹は言わなくても何の話がしたいかは言わずとも解るといった様子だった。遥はそう言い当てられた事に、苦笑いしつつも真っ直ぐ頷く。

「やっぱり博樹さんも知ってたんですね……。僕はやっぱり戦う以外の方法で解決させたいんです」

「遥、解つてると思うが言うぞ？オレ達はもうウルトラマンじゃない、ただの一般人だ。自分でどうこうできるなんて思うな」

博樹は無情にも、遥にそう言い放つ。だが、博樹の言っていることは間違っていないのだ。今の遥にも博樹にも、単身で怪獣を同行でき

る術は持っていないのだから。

「…わかってます。僕たちはもうウルトラマンにはなれない、得に僕はただの学生です。でもやっぱり、一緒に地球に生きる命なんだからって思うと、やるせないですよ…」

解っている、頭では理解できているのだ。だが心の中で何かが違うと叫んでいる。そんな感覚を覚える遥は、俯きながらそう答える。

「だがやつらがまた現れたのには何か意味があるはずだ。オレはそれを調べてみる」

「博樹さん…」

「オレだって排除すればいいなんて思っていない。だが、オレ達にできる事なんてほんの少しだ。それだけは忘れるな」

そう再三念を押しして博樹は部屋を出ていく。

「オレは一緒には行けないが、果南達の事は頼むぞ」

最後にそう付け足して。

「もちろん、僕はAqoursのマネージャーですから」

そう返す遥に一度だけ振り返ると、その表情には笑みが浮かんでいた。

一方その頃、G・U・A・R・Dは海底から奇妙な通信をキャッチしていた。

海溝8000mから送られてくるそれは、知的生命体の言語であると言う事がG・U・A・R・Dの科学顧問によって結論付けられるのだが、この時の遥と博樹がそれを知ることには無かった。

そしてその通信が、地球へ迫る新たな危機が迫っていることへの警告であることをまだ人類は知る由もなかった。

V 叶えられなかった夢

その後、本来の目的は一応達成した事で三年生より一足先に8人は沼津へと帰ってきた。そしてそのままの足で分校となる予定の学校を訪れていた。

「だれもいないすら」

「むっちゃんたち、ここだって言ってたんだけど…」

そう言つて周囲を見渡すが、狭いグラウンドに他のは人影は見えない。すると校舎の窓が開き、そこから顔を覗かせてきた。

「ごめんね急にライブの手伝いお願いしちゃって」

そう千歌がまず謝るが、彼女達は「全然大丈夫だから」と笑つて応じてくれた。

先日の部の活動報告会での失敗を取り返すべく、今度は自分達で一からステージを作ることにしたのだ。

だが流石に遥含めた7人では手が足りないのです、そこで千歌はむつ達同級生に協力を頼んだのだ。

「メールもらった時点でみんなに連絡したら協力してくれるって」

「実はもうステージのイメージもできてるんだ」

そう言つて黒板にかけていた布をとると、そこにはきれいな虹のかけたステージが描かれていた。

「でも、流石に時間が足りないんじゃない？？」

「それも言ったんだけど、浦の星も生徒もちゃんとしてるんだって証明したくつて」

そう曜が指摘すると、どうやらその話も既に上がっていたらしいのだがそれでもやりたいという浦の星の生徒全員の希望もあつたらしい。

「でも音響スタッフとかどうしても手が足りなくて…」

そう告げると、「はじめまして」と静真高校の生徒が三人入ってくる。

「ボクのところに相談しに来てくれたんだ。まだ一部の保護者の反対もあるけど協力したいって。まだ少人数ではあるけど…」

そう月が告げる。これで人手不足の問題はなんとか解決できそう
だ。

「ありがとう」

「さすが生徒会長！」

この前の発表会も、生徒会長である月が頑張つて特別に用意してく
れた機会だった。そして今回も、彼女には頭が上がらない。

「あーっ！」

そうしていると、今来た渋間高校の生徒が善子の顔をみるとそう声
を上げる。

「もしかしてヨハネちゃん？」

「わたし、中学で一緒だった——」

「ちつちがいます!!」

今でも中二病キャラを続けている彼女だが、それでも中学時代は黒
歴史のままらしく。そう少女たちに口々に言われると顔を赤らめて
そう誤魔化する。

「いっつも配信見てるよ〜」

そう言つて少女たちは善子が良くやる目元でピースサインをする
ポーズをとる。

「ヨハネ、降臨！」

遂に耐えられなくなつた善子は、顔を真っ赤にすると教室の外へと
飛び出すとそのまま廊下を全力疾走で逃げようとする。

「ダメじゃない、せつかく応援してくれてるのに」

だがそれは、反対側から廊下に出た梨子によつて妨害される。悪そ
うな笑みを浮かべる彼女に、善子は余計に顔を引きつらせる。

「一緒に写真撮りませんか？ヨハネちゃんと」

「えっ本当？」

いつの間にか真後ろに立っていた花丸にそう言われると、少女たち
は「撮る撮る」といつて廊下に出てくる。

「ひっヒドイ……リトルデーモンの反逆……！」

今にも泣き出しそうな表情でそう呟く彼女に、内心同情せずにはい
られなかった。

「ありがとう、大切にするね」

「な、なんくるないさ…」

なんで沖繩弁？と疑問に思ったが、一緒に写真を撮っただけとは思えない程疲弊していた彼女にそれを言うのは何となく酷な気がした。

「写真送るから、連絡先教えて」

だが、そのまま彼女達と連絡先を交換している善子はどこか嬉しうだった。

「よーし、やるぞー！」

「でも、向こうで歌った時とは違って鞠莉ちゃん達はいないぞら…」

そう意気込む千歌とは対照的に、花丸はそう不安げに呟く。失敗した時と同じ、6人でのステージとなる訳だから。

「できる…できるよー！」

だがそうはつきりと言い切って見せたのはルビイだった。もう一度姉であるダイヤと共に歌えたことでルビイは何かを見つけたのかもしれない。

「ボクたちも頑張らなきゃね」

6人で顔を見合わせて笑い合うAqoursを見て、月はそう呟いた。

「そういうえば、遙くん本当にウルトラマンですか？とか言われなかったね」

「でしょ？メガネ効果てきめん！」

その日の帰り、不意にそう曜に言われて遙はなぜか自信ありげに告げる。

だが実はイタリアにいた時、すれ違った人が遙の方を振り返って何かを言い合っていた時『ウルトラマン』とか『ガイア』といったワードが曜の耳には時々入っていたが、遙は全く気付いていなかったようだった。

一方でその日、アラスカの山岳地帯にゾンネルが出現した。そして G・U・A・R・D・アメリカは戦車部隊を出撃させ、これを攻撃。撃退した。

だがその時、それを妨害しようとした人物がいた。その人物は、最新型のパーセルをゾンネルの頭部に射出しその効力で地底に帰そうとしたのだ。

「ゾンネル、地底へ戻れ！それ以上進んだら…」

そう叫ぶも、ゾンネルは何かを伝えたいのか唸り声を上げて首を動かすだけだった。

「クソツ…一体何を伝えたいんだ…?」

だがパーセルは怪獣へ命令するための道具でしかない、そうしていると戦車部隊が現れ、砲撃を開始する。

「戻れ！戻ってくれえ!!」

その悲痛な叫びも虚しく、ゾンネルは砲火に晒されてしまう。その戦闘によって傷を負ったゾンネルは地底へと戻りはした。

だがしかし、G・U・A・R・Dはゾンネルを操り攻撃しようとしたとしてその人物を指名手配することを発表した。

夜家に帰った後、千歌と梨子は千歌の家でさっそく新曲の作成に取り掛かっていた。一方で遥は、自室でアルケミースターズとコンタクトを取っていた。

「ごめんなさい、折角誘ってくださったのに…」

『いいんだよ、それよりそっちはどう？分校の話、解決しそう？』

「そうですね…今度ライブをして、この前その話を覆せなかった失敗を取り戻そうってみんな頑張ってます」

そう答えると、相手は笑って『なら大丈夫、きつとうまくいくよ』と笑っていた。だがその笑みが消えると、話は本題に入る。

『最近、海底から知的生命体のものと思われる通信が送られてきていることは知っているかい？』

「奇妙な…?」

『その通信は、僕達の知る限り未知の言語なんだけど、その周波数は人間が使うものに合わせてあるらしいんだ』

「人類に何かを呼びかけている?」

そう教えられた情報に、遥は自分なりの推論を立てると相手もそれに頷く。

『まあその辺は今、G・U・A・R・Dの科学技術部が解析してるし。ダニエル達が協力して解析してるところだから僕も詳しい事は知らないんだけどさ』

そう言って未知の情報を楽しみにしているような素振りを見せるが『でも今やってる研究の方が僕には重要だし。翻訳とかはあんまりね…?』と言ってすぐに表情を綻ばせる。

『とにかくライブ、成功することを祈ってるよ』

「ありがとうございます」

そう言って通話を切ると、遥は「ふう」と息を吐く。

「海底からの通信…怪獣の出現…もしこれが繋がっているとしたら…」

その時、遥の脳裏にはある一つの考えがよぎった。だがそんな筈はないと、この時遥はそう信じていた。

翌日、三年生も含めて近所の和菓子屋のイトインスペースで集まっていたAqoursの皆は、三年生から告げられた言葉に驚愕の声を上げた。

「理亞ちゃんがAqoursに入るう!？」

「転校してくるってこと?」

「イエス」

開口一番、三年生からそう告げられ、在校生組はそれぞれ困惑の声を上げる。無理もないいきなり函館から転校してくるなんて言われたのだから。

「今から手続きすれば、みんなと一緒に新しい学校に行けるし。馴染みやすいだろうからって」

そう果南が補足する。昨日の夜、日本へ戻ってきた三人のところへ聖良からそう連絡を受けたらしい。

「理亞ちゃんがそうしたいって言ってるの?」

「いいえ、まだ話してないみたい」

「ただ、聖良はそれが一番いいんじゃないかって」

そう問いかけるルビィに、鞠莉と果南がそう答える。どうやら、今のところその話に理亞の意見は取り入れられていないようだった。

「私たちが聖良さんでお話しても良かったのですが、やはり千歌さん達の気持ちも大事だろうと思ひまして」

そうダイヤが告げる。聖良としては、このまま新しいグループですタートが切れないことが心配なのだろう。

「どう思う?」

「そりゃ全然嫌じゃないよ? Aqoursは何人って決まってる訳じゃないし」

「それに、理亞ちゃんも同じラブライブで頑張った仲間だし」

曜にそう問われた千歌と梨子がそう答える。確かに、理亞をメンバーに加える事自体に異論はない。しかし、そこに今現在彼女の気持ちが入っていないことは問題であった。

「うん、ただ」

「ダメだよ」

ただ不安げな顔で千歌がそう切り出そうとしたのをルビイが遮る。「理亞ちゃん、そんな事絶対望んでないと思う。A q o u r s に入っても、今の悩みは解決しないと思う」

「どうして、そう思うの？」

そう鞠莉に問われ、ルビイは話を続ける。

「だって理亞ちゃんは、S a i n t S n o w を終わりにして新しいグループを始めるんだよ？お姉ちゃんと続けたS a i n t S n o w を大事にしたいから、新しいグループ始めるんだよ。それは、A q o u r s に入るってことじゃないと思う」

そう真っ直ぐな瞳でルビイは続けた。理亞は以前語った、S a i n t S n o w は姉との大事な雪の結晶で、それを大事にしたいからこそ新しい雪の結晶を探すんだと。それはやはり、A q o u r s に入ることが答えではないはずなのだ。

「ルビイ、向こうでお姉ちゃんと一緒に歌ってわかったんだ。お姉ちゃん達は居なくなるんじゃないって、同じステージに立っていても、一緒にいるんだって。多分理亞ちゃんはその事に気づいていないんだと思う」

そう続けるルビイに「一緒に？」と反芻すると、ルビイはそう話す。きつとそれは、離れ離れでも同じ空で繋がっているというのと同じことなのだろう。同じ場所に居なくても、気持ちは無くならない。一緒にあり続けるのだと。

「居なくなってしまった聖良さんの分を、何とかしなきゃって。S a i n t S n o w と同じものを作らなきゃって、お姉ちゃんと一緒に果たせなかったラブライブ優勝を実現しなきゃ、聖良さんに申し訳ないって…」

そう言つて視線を下におろしてしまふルビイの手に、ダイヤが優しく手を重ねる。

「多分、理亞さんの気持ちは、ルビイが一番よくわかつてると思いますわ。同じ三年生の姉を持つ者として」

そう優しく告げると、花丸と善子もその上に手を重ねる。

「ルビィちゃんの言う通りずら」

「同意！」

理亜の一番大きな夢を一つ叶えて、『離れ離れじゃない、ずっと一緒に居る』それを彼女に伝えるために。再びこの9人の少女は動き出した。

一方でその日の朝。

― 姉様の大切な夢、私が壊してしまった―

最後のラブライブ地区予選での失敗は、今でも理亜の心に大きな影を落としていた。早朝まだ朝日も昇る前、日課であるランニングの最中、彼女は自責の念に苛まれていた。

新しいグループを作る。そう宣言したのに未だにその目処は立っていない。その事が彼女を焦らせていた。

そんな現実から逃げるように彼女は駆け出した。どこをどう走ったのか解らなくなるほど走った後、気がつけば港まで来ていた。

「あの人、どこかで…？」

その時、誰かが海を見ていた。だがその人物が誰だったか考えていると、その人物は手から何かを滑らせて海に落としてしまうとそのまま倒れ込む。

「ちよっ…！」

先程までの悩みも忘れて、その人物へと思わず理亜は駆け寄る。

海を眺めながら博樹は、アグレイターを手に持っていた。もう光を宿していないそれを、悔し気に睨みつける。

だが博樹は胸元に強い痛みを感じて、思わず手に力が抜けアグレイターを海に落としてしまう。

『アグルの光、そこにはもうない』

不意に背後から聞こえたその声に、博樹は振り返るとそこには白いワンピースを着た。銀髪をまっすぐ腰まで伸ばした少女が立っていた。

「…誰だ？」

そう問いかけるも、その答えが返ってくる前に、博樹の意識は闇に沈んでいった。

「……」

気がつけば博樹は見慣れぬ部屋で目が覚めた。毛布を掛けられており、傷の手当てをしてくれたようだった。

どうやら倒れた際に、何者かがここまで博樹を運んだらしい。幸い、スマホは羽織っていた上着のポケットから動かされていないらしく、痛む身体をこらえて何とか取り出す。

『怪獣攻撃を妨害した容疑で、G・U・A・R・D当局はヒロキミナトを指名手配しました。怪獣は地球の生き物です。しかし怪獣が人類の邪魔になるならば、排除されるべきなのです』

海外のニュースキャスターがそう読み上げるのを、博樹は睨みつけるようにして見つめていた。

そんな彼の胸元には包帯が巻かれ、右胸のあたりは血が滲んでおり。ゾンネルへの攻撃に巻き込まれた時の傷の深さを物語っており、その額には汗が浮かんでおり息も荒かった。

（何故だ…何故また出てくる…）

そう疑問に思う博樹だったが、やはり怪獣の声を聞く手段は未だ人類は持っていないのだ。

その時、突然空が暗くなった。博樹は窓の外へと視線を向けると、空は海中から見た水面の様に波が見えその手前をトビウオのような

生命体が大量に飛行しているのが見える。

思わず息を呑むと、傷の痛みをこらえながら窓の方へと立ち上がり歩み寄るとその光景は消え、先程と同じ青空模様が広がっていた。

「まさか…」

またな何か良くないことが起きる。そんな予感を、博樹は感じていた。

「気がつきました?」

「アンタがオレをここまで運んだのか?」

不意に室内に入ってきた人の声に反応すると、咄嗟に画面を暗転させてそう問いかける。元々追われることも想定内だったが、相手がそれを知っているかどうかが最優先だ。

かなり失礼な物言いになってしまったが相手はどうやら歳のそう変わらない少女だが嫌な顔一つしないので首を横に振る。

「いえ、見つけたのは私の妹です」

「そうか…すまない、世話になったな」

どうやら日本では報道されていないらしい、ならば好都合だこのまま立ち去ろうとするが無理に日本まで移動した事で傷が悪化したのと思うように立てない。

「まだ寝ててください、必要なら病院へも…」

「いや、それはまずい…」

さすがにそうなればG・U・A・R・Dに感ずかれる。そう思つて博樹はすかさず断る。

「私、鹿角聖良といいます、貴方は?」

「湊…博樹」

そう名乗った相手に、博樹は逡巡するが流石に無礼が過ぎるだろうと思つて名を明かす。すると彼女は少し驚いた顔を見ると、そのまま話を続ける。

「アグルだった方…ですよね?どうしてあんなところで倒れてたか、教えてもらえませんか?」

「…シャザックは街に出てきてないか?」

「いえ、あのゾグとの鬪い以降は特に…」

答えず逆にそう問いかける博樹に、首を傾げつつもそう返す。その問いかけで、彼女も怪物が再び現れていることを知っているのかすぐに納得したように頷く。

「姉さま、さっきの人は？」

そう言つて理亞も何処かへ行つていたのか、そう言つて部屋へと入ってくる。

「ありがとう、助かった」

「たまたま目の前で倒れたから…」

博樹は何となく、初対面の理亞という少女がどことなくルビイに似てくると感じそう素直に告げると、理亞はそう答えて視線を逸らす。「怪我が治るまで、休んでいってください」

聖良は事情をこれ以上聞こうとはせず。ただそう告げると部屋を後にする。

そしてその時、聖良の元へ理亞の件で鞠莉に相談した事への答えが返ってきた。

その提案を聞いて、彼女の表情には明るい笑みが浮かんでいた。

「君たちの顔、どこかで見たことあると思った。正月に内浦に来てたスクールアイドルだろ？」

「そうだけど…」

お互い暫く気がつかなかったが、先に思い出した博樹がそう告げる。

「あの時も思ったが、何か悩んでるだろ？」

「…ッ！」

その言葉に、理亞は息を呑み表情に影が生じる。

「オレは君の悩みは解らないし、きつと解決してやることもできない」
そうはつきり言い切った博樹に、何か言いたげな表情を浮かべる理亞だったが博樹は「だがな」と遮って進める。

「同じ場所にいらなくても、同じ空の下で繋がってる。生きてるうちには…」

「あなたにはそういう相手はいないの？」

「今はいる。絶対に守りたい人が、だからオレはアグルとして戦えた」
そう言っつて博樹はどこか遠くを眺める。やはり痛むのかまだ息が荒いが、それでも理亜は博樹の言葉に耳を傾ける。

「今のAoursだつてそうだ。もうあの9人でメンバーで大会のステージには立てない。でも、気持ちは繋がってるんだ。君達の今までも、絶対に無くならない」

そう言っつて博樹は理亜に視線を戻す。すると理亜は立ち上がると、部屋を去ろうとする。

「ありがとう、なんか励まされた気がする」

「そうか」

「傷が痛むのに長々しゃべらせてごめんなさい、じゃあまた」

そう言っつて理亜が出ていくのを見て、優し気な表情を浮かべていた博樹はすぐに表情を険しくする。

「ぐ…偉そうなこと言うようになったな…オレも…」

傷を抑えながら痛みに顔を歪ませそう眩くのだった、きつと博樹にとって放っておけないものを彼女に感じたのだろう。

VI キセキは再び

翌朝、遥と月は前日までの打ち合わせ通りライブの準備の打ち合わせを行っていた通りに準備に取り掛かっていく

「本当にいいんですか？ 反対されてるって…」

作業の傍ら、遥は月にそう問いかける。

「いいんだよ。だって、こんな機会めったにないよ？」

そう言つて月は楽しそうに笑う。そのとき遥は思った、こういう人だから浦の星の生徒、特に A q o u r s に協力してくれているんだと。

「ありがとうございます」

「お礼を言うのはボクの方だよ」

「え？」

不意にそう告げられ思わず遥はキョトンとした表情をする。

「今までずっとボク達を守ってくれたのは遥くんなんだよ。遥くんがいなかったら、きっと今こうしていられなかったと思うし」

月のありがとうとは、遥がガイアとして戦ってきたことへのものだった。

「そんな…僕は、自分にできることをしてきただけです」

「それはボクも一緒だよ。これが今ボクにできる事だよ」

そう言つて遠慮するように視線を逸らす遥に、月はそう言つてほほ笑む。

「今できること…か」

そう呟いて、胸ポケットにしまっているエスプレンダーをポケットの上からなぞる。自分に今できることは、戦う事じゃない。

力を失った時は、その事実が嬉しかったはずなのに今の社会情勢を考えると悔しさを感じずにいられなかった。

再び現れた地球怪獣が攻撃されるのを見ていることしかできない。今の遥に出来ることは、怪獣を救う事ではないのだから。

—よかつたら、見て行ってくれませんか？

聖良にそう告げられた博樹は、彼女に指定された場所へと向かう。傷はまだ痛むが、理亜が買ってきてくれた痛み止めのお陰で歩くだけなら支障をきたさない程度には回復できた。

姉である聖良の大切なものを、自分が壊してしまった。自分の失敗のせいで敗退した地区予選の後、姉が見せた涙が脳裏に焼き付いて離れない。

博樹に言われた言葉が、少しだけ焦る気持ちを軽くしてくれはしても、やはり後悔とまだ新しいスタートを切れていないことへの焦りはなくならない。

いつもランニングのゴール地点にしている公会堂前で、上がった息を整えているとそこには高校の制服に身を包んだ聖良がこちらにスマホのカメラを向けて立っていた。

「姉さま、その恰好…？」

だが笑みを浮かべたままこちらにカメラを向ける姉は何も答ええない。するとスマホから聞きなれない声が響く。

『これよりラブライブ決勝、延長戦を行います！』
「えっ？」

今何と言った？突然の事態に思わず固まってしまいがそんな彼女の様子もお構いなく、ビデオ通話の相手は言葉が続ける。

『それでは、決勝に残った二組を紹介しましょう。まずは浦の星から現れた超新星！初の決勝進出ながら、実力はトップクラス！スクールアイドルAqours！』

『おー!!』

なんともノリノリな進行の後、名を呼ばれた少女たちはそう小さいカメラに顔を近づけて声を上げる。間違いなく、Aqoursの9人だった。

『そしてもう一組は北の大地が生んだスーパーサァィンツ！』

Snow!!』

一体何が起きているのか理解が追いつかない理亞に、聖良は告げる。

「今から私達だけの、ラブライブの決勝を行います」

そう言つて聖良は理亞へ、一着の衣装を手渡す。

「もし、決勝の舞台に立つことが出来たら。この衣装とダンスと曲だつて、決めてましたね」

その衣装を受け取ると、「姉さま…」と震える声で続く言葉を探す理亞に、聖良は語り掛ける。

「もしAqoursと競う事になったら、決勝のステージに立つことが出来たら。あなたに、伝えようと思つていた」

その言葉で、理亞は目頭が熱くなる。でも、そのもしは来なかった。自分が壊してしまつたから。

「姉さま…」

「泣いてる場合じゃないですよ」

思わず姉の胸に飛び込んで涙ぐむ妹に、姉はそう優しく声をかける。

『一緒に進もう。理亞ちゃん』

すると不意に姉のスマホから聞こえてくる友の声にはつとする。

『甘えてちゃだめだよ、理亞ちゃんに花丸ちゃん、善子ちゃんに遥くんと出会えたから。ルビイも頑張つてこれたんだよ』

そう告げる声はとても芯が通つていて、初めて会つた頃のような気弱な印象は感じられない。

『ラブライブは、遊びじゃない!』

初めて会つた時に、最下位だったのにヘラヘラしているように見えてそれが気に食わなくて思わず言つてしまつた言葉。それを今度は彼女に告げられ思わずはつとする。そして姉と向き合つて思わず笑つてしまつた。

だがすぐに表情を真剣なものに姉妹は変える。

「歌いましょう」

「うん!」

「2人でこのステージで、Aqoursと全力で！」
もうその表情に、迷いも悲しみの無かった。

— Believe again —

決勝で披露されるはずだった曲。そしてこの曲には、姉から妹へのメッセージが込められていたのだ。

あの日以来、一度も姉と練習することは無かったがダンスも歌も身体が覚えている。それに、姉がどう動くかも手に取るように解る。

姉と果たせなかったラブライブ優勝に固執していた余り忘れていた。スクールアイドルの楽しさを、この時の理亜は感じ取っていた。

「今のこの瞬間は、決して消えません」

パフォーマンスを終え、聖良は理亜へと向き直るとそう告げる。

「Saint Snowは、私と理亜のこの想いはずっと残っていく。ずっと理亜の心に残っている。どんなに変わっても、それは変わらさず残っていく。だから追いかける必要なんてない、それが伝えたかった事」

「姉さま…」

抱き合う姉妹の頬には、涙が伝っていた。

「やっぱり楽しいなくスクールアイドル！」

「ですが、今度こそこれで最後ですわよ」

「だから全力で伝えよう、わたし達の想いを！」

鞠莉、ダイヤそして果南の3人を含めた9人のAqoursも今度こそ最後のライブが、今始まる。函館から沼津へバトンはいま受け渡された。

— Brightest Melody —

沼津駅付近のとある施設の屋上庭園を特別に貸してもらって、朝日をバックに少女たちは歌い踊る。

少女たちが見つけた。新しい輝きへの一步となる曲。

「凄い…」

イタリアや、発表会の時とは違うステージに月はそう一言だけ漏らす。

「スクールアイドルって本当にすごい！このラブライブを観てるのがボクたちだけなんて、そんなの勿体無いよ！」

そう言つて彼女はスマホを何やら操作しだす。

「千歌ちゃん？」

朝焼けを見つめる千歌に、梨子がそう声をかける。すると彼女は、晴れやかな表情で告げた。

「わかった。わたし達の新しいAqoursが…」

このステージを経て、千歌にはこれから自分達が進んでいく道が見えた。そう確信した。

だがそんな時、警報が朝の沼津に鳴り響く。

「この音まさか…」

遥はこの警報を聞いて、すぐに背中に冷たいものが走った。

「みんな逃げて！」

考えるより先にそう叫んでいた。空はたちまち暗雲に包まれていく。

「もしかして…:怪獣!？」

そう声にしてから、顔を青ざめる皆を見て咄嗟にエスプレンダーをとり出すがそこに光は無い。

「くそッ！」

そう毒づいてから、遥は急いで建物から全員を逃がそうとするのだった。

一方その少し前、博樹はSaint Snowのライブを唯一その場で見ていた。そのはずだった。

「綺麗…これは貴方が守りたかったもの？」

「さあ…どうだろうか？」

気がつけば、先日港で見た少女が博樹の隣に立っていた。

「そんなに簡単に、人が変われるはずがない。たとえば、地球から光を授かったあなたでも」

「そうかもな…だが、一つだけ大きな違いがある。人が努力することを辞めない限り、この地球は滅びない」

突如入ってきてそう告げる少女に、博樹はそう答える。彼女に対して、常人とは違う何かを感じた彼は、少女に詮索する事よりも受け答えすることを選んだのだ。

「人間に未来の事なんか解らない、だからそれは今ここに生きているオレ達人間の決意だ」

「同じ星に生きる命に武器を向けることが、決意？」

地球を滅ぼさないために努力するという決意の結果、地球怪獣に武器を向けるのか？そう問い返す少女の目を博樹は真っ直ぐ見つめる。

「人の命が奪われそうなとき、その命を護る為に武器を向ける。だがオレは違う方法があると――」

「信じて、いる？」

「信じられれば、もっと楽になれるのにな…」

そう視線を逸らして答える博樹に、少女はさらに近寄ってくる。

「お知合いですか…？」

博樹が観ているのは解っていた聖良はこちらに歩み寄ると、見知らぬ少女と共にいたのでおずおずとそう問いかける。しかし博樹は首を横に振ると再び少女へと視線を向ける。

「アンタは人間じゃない、どこから来た？」

だがその問いに答えることなく、博樹の胸に手を翳す。

「な、なにを…」

一瞬恐怖を感じ、咄嗟にそう言いかけるが少女の行動の方が速かった。

すると少女の手から緑色の優しい光が放たれ、博樹は傷の痛みを一切感じなくなった。

「治したのか…？」

そう言って包帯を外すと、傷の跡は完全に消滅していた。それを見て、先程包帯を交換してくれた聖良が息を呑む。

「すごい…」

「あなたは一体…」

そう問いかける聖良に、やはり少女はほほ笑むだけで何も答ええない。

「どこから来た？名前は何？」

「名前？そういう個体を示すものを、わたし達は持たない」

何処から来たのか？何者なのか？その問いには全く答えようとならない少女は、自分達の種族は名前を持たないとだけ答える。

だが急に何かを感じ取ったのか立ち上がると、恐怖に顔を歪める。

「どうした？」

「…来る！」

そう告げると少女は駆け出す。「ちよつと…」と理亜と聖良も博樹と共に後を追うと、彼女は博樹が倒れていた港で立ち止まっていた。

「どうしたんだ？」

そう問いかけると、少女は泣きそうな顔でこちらへと振り返る。

「リナールの力を、アレが全て奪っていく。遥か昔に来て、ずっと眠っていた…」

「何が蘇るといふんだ？」

「根源的な悪意…！」

リナールというのは、この少女がいた場所の事なのだろう。そしてそこで蘇ろうとしているものを、少女が震える声で告げると博樹は眉を顰める。

「やめて！リナールの皆が滅んで…」

そうすると、朝日が照らしていた空が突然暗くなり以前見たような海面のようなものが映し出され、その空をトビウオのような生命体が飛び交う。

「これは…?」

「何が起きてるの…?」

聖良と理亜は、その光景に驚くが、一度見ている博樹は落ち着いた様子で少女に近寄る。そして彼女の方に手を添え優しく語り掛ける。

「安心しろ、ここは安全だ。ここはリナールの世界じゃない」

そう告げると、少女は博樹の胸に身体を預けると体の震えが止まる。そうすると、空は再び朝焼けに包まれる。

だがその時、背後からけたたましいサイレンの音と共にG・U・A・R・Dの車両が入り込んで来ると、銃で武装した隊員たちが出てくると博樹へとその銃口を向ける。

「G・U・A・R・Dアメリカだ。ヒロキミナト、そうだね?」

アメリカから、博樹を追ってきた。そうスーツのリーダー格と思わしき男性がそう告げる。「一体なぜ…」博樹に銃を向けていることに、聖良がそう言いかけるがそれを博樹は手で制す。

「キミがしてきたこと、個人的には拍手したい気分だ。青いウルトラマンが復活した時の事は、忘れられない」

そう告げるが、背後の部下たちの銃口は博樹に向けられたままだった。

「キミが地球の怪獣を救おうとしているのも、私は間違ってるとは思わない。だが私はG・U・A・R・Dの隊員だ。その子らを人質にするつもりはないんだろ?まず彼女らをこっちに渡してくれないか?」

そう言っつて博樹の背後にいる少女や聖良、理亜を指さす。

だがその時だった。突然空が暗雲に包まれ、ゴゴゴ…と周囲に地響きのような音が響き渡る。

「下がってろ」

そう言っつて博樹は聖良と理亜の前に立ち、海から彼女らを遠ざけるが少女は逆にその前に行こうとする。そしてその音の正体が、海の底

から飛び出してきた！

怪獣から飛び出してくる20m近いトビウオのような生物は、真つ直ぐ空へと飛び去って行き暗雲の中へと消えていくが、その数は計り知れない。

そんな脅威を、博樹は険しい表情で睨みつける。すると少女は振り返ると、博樹が倒れていた場所を見つめる。そして博樹もそちらへと視線を向けると思わず息を呑んだ。

そこにはアグレイターが浮かんでいた。そして少女の身体が輝くと、緑色の光の粒子を放ちアグレイターへと注がれていく。

少女から放たれた光の粒子が、全てアグレイターへと注ぎこまれると。アグレイターは以前のような青き光を宿す。

『わたし達には力がない。でも、貴方達にはそれがある。自分に出ることを、して…』

光を放ちながらそう告げると、少女は光の粒子となって海へと帰って行く。そしてアグレイターは、主に寄り添うように博樹の手に収まる。

「アグレイターに、光が…」

そしてそれと時を同じくして、太平洋からワームホールが開かれる。宇宙からではなく、海の底から新たな脅威が迫ってきたのだ。

そしてすぐさまG・U・A・R・Dの戦闘機部隊が飛び立ち、空の怪物へと攻撃を仕掛けていく。背後では銃を向けていた隊員たちは英語で言葉を交わすと車へと乗りこんでいく。

「私も、自分出来ることを探すよ」

そういつて男性も部下の方へと歩み去っていく。

「君達は避難しろ。ライブ、良かったよ」

そう言っ博樹は聖良と理亞にほほ笑む。

「解りました、どうか気を付けて、理亞行きましょう」

そう頷いて聖良は妹の手を引くが、理亞は何か言いたげな表情を浮かべていた。

「あの…」

「どうした？」

「また…またライブ見に来て」

そう告げる理亞に、博樹は一瞬驚いたような顔を浮かべるがすぐにまた笑みを浮かべる。

「わかった」

そう短く告げると、鹿角姉妹は街の方へと駆けていく。それを見送ると博樹はまた海へと向き直る。

「地球の怪獣は、これを恐れていたのか…」

ゾネルをはじめとした地球怪獣たちは、海底から迫りくる脅威に怯えていたのだ。だから地球の異常を伝えるために、再び姿を現したのに人類はそれを攻撃した。

「クソツ！つくづく人間はおろかだぜ…それでも地球は、オレに光を預けるといふのかッ!?!」

環境も破壊し、自ら地球を滅ぼす危険性を孕んだ生き物である人類を、それでも地球は受け入れるのか。その問いに答えるかのようにアグレイターの翼が開く。

それを見た博樹は、意を決してその輝きを前に突き出し。再び宿した巨人の名を叫ぶ。

「アグルーツ!!」

青い光を身に纏い、ウルトラマンアグルV2は暗雲立ち込める空へと飛翔した。

VII 僕を信じて

海底から飛び出した無数のトビウオに世界は騒然となる。

ドビシの一件以降、通常のG・U・A・R・Dの戦闘機もかなり火力の強化が施されたのだがそれでも巨大なトビウオを撃ち落とすまではたどり着かない。

XIGからもファイターチームが出撃するが、それでも三機のファイターの火力を集中してようやく一匹落とせる程度で苦戦を強いられていた。

ドビシ程の物量はないとしても、それでもかなりの数だ。このままではじり貧になってしまう。

だが復活したアグルが、そのトビウオを次々に撃ち落とすしていく。アグルスラッシュで次々と撃破していくアグルは、函館の空のトビウオを一掃し沼津を目掛けて同様に次々に撃破しながら飛び去って行く。

一方沼津でも、ライブの余韻に浸る間もなくすぐに全員で避難することになってしまった。

「もしかして、また新しい破滅招来体の…」

「地球すら、この事は予測していなかった…」

そう呟く花丸と遙だったが、その答えを知る術はない。今できることはただこの場から避難する事だけだった。だが敵はトビウオだけでは無かった。

時を同じくして、海底でリナルルから力を奪い続けていた存在がワームホールを使って沼津の街に降り立った。

金色の角、そして二足歩行のトカゲのような姿。それでいて腕や背には金色のヒレのような器官が備わっている赤い目の怪獣――

トビウオのような怪獣、根源破滅飛行魚バイアクヘーを従える存在、根源破滅海神ガクゾムが現れた。

「怪獣…」

ガクゾムを見て、思わず千歌はそう呟く。

その巨体は歩くだけで街を破壊していく。そしてガクゾムはこちらへと向かってきていた。

「みんな早くー！」

そう言っただけで外へと出るように遥が促す。だがそこに、ガクゾムが両腕を振りぬくと手から破壊光弾が放たれ、先程まで屋上にいたビルの中腹に直撃し瓦礫が降り注ぐ。

「ッ！危ない!!」

花丸の頭上に落下していく瓦礫に気がつき、遥は咄嗟に彼女を突き飛ばすが遥は瓦礫に閉じ込められてしまう。

「遥くん！」

「僕は大丈夫、他の所から脱出するからみんな先に行つて！」

瓦礫越しに遥の身を案じる花丸に、遥はそう返す。

「遥、大丈夫なの!?!」

「姉さん、僕は大丈夫。後で合流するから、みんな急いで」

姉の声に、遥はそう花丸に告げたのと同じように答える。だがその返事を聞いて、梨子は一瞬顔を伏せるがすぐにまた瓦礫の山の方を向く。

「…約束よ?」

「うん…」

そう一言、姉弟は言葉を交わす。

「みんな行きましょう」

そう言っただけで梨子は振り返る。

「でも、遥くんが…遥くんが…」

そう花丸が目には涙を浮かべながら訴えかけるのを、他のみんなは目を伏せてなにも言わない。

「花丸ちゃん、僕を信じて?約束、絶対守るから…」

「今は、遥を信じましょう?」

そう花丸に告げる梨子の目には、涙が浮かんでいた。心配していない訳が無かった、父を喪い今度は弟まで…そんな嫌な考えが彼女に付きまとう。

だがそれでも梨子は、遥を信じようと決心したのだ。

「遙くん、また後でね？」

「遙…信じてるから」

そうルビィと善子がそう告げると、「みんなをお願い」と遙から告げられる。そして少女たちは少しでもガクゾムから離れるべく駆け出した。誰一人、その間言葉を発することは無かった。

「信じて…か、ごめん花丸ちゃん。約束、守れないよ…」

みんなが去ったのを察して、遙は自虐的にそう笑う。今の遙は、先程切ってしまったのか額から血を流し。瓦礫に片足を挟まれ身動きが取れないのだ。目の前には、花丸を突き飛ばした際に落としたのが光の灯らないエスプレンダーが転がっていた。

遙の表情には、諦めの感情が現れていた。

そして遙の意識は、闇へと沈んでいったー

そんな時、ガクゾムの背後に盛大に土砂を巻き上げて巨人が着地した。

その巨人は、立ち上がりゆつくりとガクゾムへと振り返る。すると土煙が晴れ、その全貌が明らかになる。

青い身体に銀のライン、胸元の金に縁どられた黒いプロテクター。額に煌めくブライトスポットに切れ長の目、その巨人に見覚えのないものなど居ない。

「アグル…ヒーロー！」

現れたアグルを見て果南がそう声を上げる。あのアグルは間違いなく博樹だという確信が彼女にはあった。再び彼が光を手にしたのだと。

「グオオオオオオオオ！」

現れたアグルに、ガクゾムは吠えたと駆け出す。そしてそれに対抗してアグルも向かって行く、するとガクゾムが腕を振り上げる前に腹部に拳を叩き込み後退させる。

「デヤッ！」

だが負けじと反撃すべくガクゾムが腕を振り上げると、アグルはそれを左腕で受け止めすぎさま腹部に右拳を叩き込む。さらに左腕で相手の腕を振り落とすと、左拳の連打をガクゾムの腹に撃ち込む。

ガクゾムは腕を振り回しアグルを振り切ろうとするが、全て紙一重で躲。され腹部にさらに拳の連打を食らい、思わず大きく仰け反ったところに飛び上がって回し蹴りを食らう。

だがその事でアグルとガクゾムの間合いが開いた。そのことによつてガクゾムは尻尾を振りぬきアグルを吹き飛ばそうとするが、今度は飛び上がると回転して尻尾の僅か上を回転しつつその勢いのまま側頭部に蹴りを二発叩き込む。

さらに着地すると再び飛び上がって空中で二弾蹴りを放つ。アグルに一方的にやられていたガクゾムは、たまらず地に伏す。

「強い…」

「きつと大丈夫だよね」

そんなアグルの戦闘の様子を見つつ、どこか不安げにそう囁と千歌が呟く。彼女らの心配は、遥の事だった。アグルが勝利しても、遥の安全は確実ではないのだから。

「アグルは戻ってきたんだよ？ ガイアだつてきつと…」

そんな声を聞いて、ルビイがそう呟く。そんなルビイの声に、花丸は無言で頷く。

「そうね、遥は絶対生きてる。大丈夫よ」

そう梨子も呟くが、やはりその表情は少し不安げだった。

立ち上がったガクゾムは、両腕から光弾をアグル目掛けて放った。だがアグルは一瞬で空高く飛翔するとそのまま急降下してガクゾムを踏みつける。

勢いの乗った一撃をまともに受けたガクゾムは、土煙を巻き上げ地響きを起こしながら崩れ落ちる。そんなガクゾムに背を向けて着地したアグルは、すぐさま立ち上がるとフォトンスクリーユの発射態勢に入る。

「フンッ！ ウオオオオオオオ……」

だがそこで、空からバイアクヘーが4匹アグル目掛けて急降下して

きた！アグルの首や右腕腹部、右脚に翼を全身をさす又状に変化させ、尻尾を巻き付けてアグルの身の自由を奪う。

「グアアアア！」

さらに全身から電撃を放ち、アグルに追い打ちをかけるとその隙にガクゾムが腕から光弾を放ちアグルを吹き飛ばす。

「ヒーロー！」

「このままじゃ……」

先程までの優勢が嘘のように圧され始めるアグルを見て、鞠莉とダイヤは悔しそうに呟く。

なんとか立ち上がったアグルも、絡みついたバイアクへのせいで思うように動けず自由な左腕で殴りかかるも逆に腹を蹴られ地を転がる。

ガクゾムがアグルをいたぶるのを、人々は見ていることしかできなかった。

ウルトラマンと云えど、絶対的な地球の救世主ではないことは解っていた。それでも、現状ほぼ唯一ガクゾムやバイアクへに対抗できる存在であるはずのアグルが苦戦していることが、希望を持ち始めていた人々を再び絶望へと落とそうとしていた。

「ヒロ……頑張つて」

果南はそう祈る事しかできなかった。しかしその視線の先では、膝を付いたアグルに無数の光弾が襲い掛かり、遂にライフゲージが明滅を始めていた。

— 遥くん

「……ん……」

花丸の声が、遥の脳裏に響く。そこで遥は意識を取り戻した。すると目の前には、優しい緑色の光が見える。

『起きて。貴方は、ここで死ぬべきじゃない……』

「君は……？」

光の中から、少女の声が聞こえた。そしてその少女の姿が見えた時、遙は思わず息を呑んだ。

「シルビア…？生きていたのか？」

目の前にいた少女は、かつてガイアやアグルと戦い、その結果消滅したと思っていた少女の姿だったのだ。だが、シルビアは優しくほほ笑むも首を横に振る。

『少し違う、今の私は思念だけの存在。貴方にもう一度光を与えるために、リナールに力を借りた』

「リナール…？」

聞きなれない言葉を反芻する遙に、目の前の少女は頷く。

『海底からずっと貴方達人間に、コンタクトを取ろうとしていた生命体の事』

「じゃあ最近ずっと送られ続けていた知的生命体からだって言われてた通信の正体って…」

『そう、貴方達に助けを求めていたの。あの怪獣、ガクゾムによって力を奪われ続けていたの』

遙に、そう真実を告げる。地球の怪獣たちが活発化したのも、ガクゾムの脅威を知らせるためだったのだと。

『今この星を救うには、ウルトラマンの力が必要な。だから貴方に、もう一度力を…』

そう言ってシルビアがエスプレンダーへと手を翳す。すると緑色の光の粒子がエスプレンダーへと注がれていく。更によく見ると、シルビアの手からだけでなく小さい生物も一緒になって光を注いでいるのが見える。

「君達が…そっか、君達もこの星に生きる命なんだね」

そう遙は本来の姿のリナールの命へとそう告げると、代わりにシルビアが答える。

『そう、この子たちも人間と同様に文明を持った生命…でも戦う力は持っていないの。でも、光をもう一度力を与える事は出来る。後は、貴方達に任せるわ』

エスプレンダーに光が戻るのを確認すると、シルビアは光の粒子と

なって消えていく。恐らく、リナールを海底へと送り届けて、彼女は今度こそ役目を終えるのだろう。

「ありがとう」

そう告げる遙に、シルビアは頷くとその場には遥だけになる。遙はエスプレンダーへと手を伸ばすと、そのグリップを掴む。

「僕は守りたいんだ。みんなを…この星を！」

その決意と共に、エスプレンダーを突き出すと、その中に再び宿った地球の光を解き放つ！

「ガイアーツー！」

ガクゾムとアグルの間に、深紅の光が立ち昇った。

「あの光…」

「良かった…」

その光を見て、善子と梨子は安堵の声を上げる。もうその光が何なのか解り切っていたのだ。

「デァー！」

その光の中から巨人が現れると、そのまま突き上げていた腕で裏拳を放ちガクゾムをなぎ倒した。

銀の身体に赤いライン、アグル同様金色に縁どられた黒いプロテクター。ウルトラマンガイアV2だった。

「ガイアも復活した！」

「遙くん！」

ガイアの出現によって、ずっと暗かった花丸の表情にも笑顔が戻ってきた。ガイアはアグルへとガイアスラッシュを放つと、アグルに当たる前にスパークし、バイアクヘーを吹き飛ばした。

「ジュワツー！」

ガイアとアグルは互いに頷き合うと、まだダメージによってすぐ立ち上がれないアグルに変わってガイアは振り返るとガクゾムへとファイティングポーズをとる。

ガイアは、ガクゾムへと駆け出すと顔面に回し蹴りを食らわせる。更にガクゾムが反撃に腕を振り下ろすと、それも回避しながら空きになった腹部へ膝蹴りを食らわせる。

ガクゾムが腹部を抑えて一瞬蹲った隙に、背後に回り込むと尻尾を掴んで投げ飛ばし、さらに起き上がったところを頭を掴んでもう一度投げる。

そしてなぎ倒したガクゾムへと駆け出すガイアの背後から、バイアクヘーが取り付かんと飛来する。

「ハアッ！」

だがそれはアグルの放ったアグルスラッシュによって撃ち落とされる。その際の爆発音に思わずガイアは振り返るが、何とか状態を起こして技を放って援護してくれたアグルと目が合う。

2人は頷き合うと、ガイアは再びガクゾムへと構えた。

「ギャオオオオオオ！」

このままでは不利なのを悟ったのか、ガクゾムは立ち上がると空に向かって吠える。すると空から無数のバイアクヘーがガクゾム目掛けて飛び込んで来る。

ガクゾムは両腕を広げて降ってくるバイアクヘーを全て体内へと吸収すると、その姿をより戦闘に特化したものへと変化させる。

両腕は黄金の鎌へと変化し、胸にも金色の突起のようなものが生まれ背中の子が展開しより禍々しい姿へと変わった。

「グオオオオオ！」

「デュワッ！」

コツヴのものより大型な両腕の鎌を振って威嚇するガクゾムに、ガイアも構えるが鎌で引き裂かれてしまっただけはいくらガイアでも致命傷となりうる。

鎌の攻撃を警戒しつつ、ガイアはガクゾムへと肉迫するも、左右の鎌を躲すのに精いっぱい中々攻撃に転じることが出来ない。さらにここは街中、まだ逃げている人もいるであろう現在であまり派手に光線技を多用するわけにもいかずガイアは攻めあぐねていた。

だが、大振りの一閃をバク転で回避するとそのままガクゾムの腹にドロップキックを叩き込む。だが先程までより防御力も向上しているのか、数歩後退させるのが精一杯といった様子だった。

そして遂に、ガクゾムの両腕の鎌がガイアの身体を捉える。だがガイアの身体も頑丈にできているのですぐに切断されるといった事態は避けられた。

だがガイアはその攻撃によって体勢を崩されると腹部へと蹴りを受けてその身体は地を転がる。

だが追撃の鎌の振り下ろしは腕で受け止めると腹部を殴りつけ、今度はガクゾムをのけぞらせる。

だがガクゾムは両腕の鎌を振りぬくと、破壊光弾をガイア目掛けて放つ。ガイアにとっては初めて見る攻撃だったが、横に転がってこれを回避する。

「ハアアアッー」

そして起き上がりざまにエネルギーを溜め、クアンタムストリームを放つ。そしてその一撃は、ガクゾムの腹部に吸い込まれるようにして直撃する。

しかしそれは、腹部に新たにできていた金色の突起のような器官に吸収されてしまう事を意味していた。暫く、クアンタムストリームとおなじオレンジがかかった色で光っていたそれは紫色の光に変わる。

そしてガクゾムの腹部から紫色の光線として、ガイア目掛けて撃ち返される。そして想定外の反撃に反応できなかったガイアの胸にその光線が直撃し、ガイアの身体は大きく宙を舞う。

そして背中から勢いよくビルへと落下したガイアに、ガクゾムは勝ち誇るように腕を振り吠えたとガイアへと歩み寄っていく。

だがガイアも何とか起き上がると、ふらつきながらも立ち向かっていく。

そんなガイアへと、ガクゾムは両腕の鎌を振り下ろす。その一撃は、ガイアの両肩へと直撃し肩のプロテクターが火花を散らしながらもなんとか受け止める。

すると鎌を寝せて、ガイアの首を両の鎌で切り落とそうとする。ガ

イアも負けじと腕を掴んで耐えるが、バイアクヘーを吸収した事で強化されたガクゾムの筋力によってじりじりと追い詰められていく。

「このままじゃ…」

そう梨子が呟く視線の先で、ガイアは窮地に立たされていた。

「デエイッー」

だがそこでアグルがガイアを救うべく、ガクゾムへと飛び掛かると顔面にひじ打ちを食らわせる。するとガクゾムはガイアを放り投げると、アグルを鎌の腹で殴り飛ばす。

その一撃に、疲弊していたアグルがよろけるとアグルへと向かって行き鎌でアグルを切りつけようとするもアグルも何とか防ぎ腹へと拳を打ち込む。

しかしもうガクゾムはその程度ではビクともせず、2人にウルトラマンを鎌で切り付けていく。

ガイアがアグルをフォローしようと飛び掛かれば、ガイアのわき腹を薙ぐように切り付け。今度はアグルが立ち向かえばアグルの胸を切りつける。

そのダメージによって2人のウルトラマンの身体からは光の粒子が漏れでていて、なぎ倒された勢いでそのまま地面に倒れこんでしまう。

そして肩で息をする2人のウルトラマン目掛けて、ガクゾムは両腕から破壊光弾を連射していく。その爆風に包まれダメージを負うウルトラマン達だったが、ガイアのライフゲージも遂に明滅を始める。

「立つのです…立つてくださいい…」

「ヒロ、遥…頑張つて」

ガクゾムの攻撃によってうめき声をあげる2人を見て、ダイヤと鞠莉はそう呟く事しかできなかった。しかし他の皆も同じ思いだった。出来る事なら、2人の為に何かしてやりたい。しかし自分達には、今現在2人を救う方法など持っていない。

その事実が、余計に心に影を落とす。自分達はただ、2人の勝利を祈る事しかできないのだ。

そして連射された光弾のダメージで、もはや立ち上がる事も出来ない

いウルトラマンへとトドメを刺すべく。ガクゾムは勝ち誇るように腕の鎌を振って2人へと近寄っていく。

だがそんな2人のウルトラマンを救うべく。空からファイターチームが現れた。ファイターの集中砲火を浴びガクゾムはその場に釘付けになる。

この星を護る為に戦うのは、ガイアとアグルだけではないのだ。そして奮戦するファイターたちの援護を受けるが、ガイアとアグルはまだダメージによって立ち上がることが出来ないうでいた。

「ぐあ…」

「ぐう…」

だが何とか立ち上がろうとする2人に、少女たちは必死に声援を送る。

「がんばって！」

その声を受け、ガクゾムを睨みつけるとさらに全身に力を込める。

「ヒロ！」

「遙くん！」

自分に想いを寄せてくれている少女が、自分を呼ぶ声が聞こえた。その時、周囲は一層強い光に包まれる。

何度でも、奇跡は起こる。

最終回 虹を越えた先

XIGファイターチームからの援護、そして少女たちからの声援を受けたガイアとアグルの周囲を、突如七色の光の粒子が包み込んだ。

よろよろと立ち上がり、その光を不思議そうに見つめる2人のライフゲージへとその光は吸い込まれるように入っていく。

するとライフゲージが再び青い光を灯し、ガイアのアグルの身体を全快させる。その光の正体は、リナルのものだった。戦う力を持たない種族である彼らは、地球の力を再び遥と博樹に与えることで地球に迫りくる脅威を振り払う力を与えたのだ。

「きれい…」

そんな光の輝きを見て、思わず千歌はそう呟く。そしてその視線の先では、ガイアはアグルに頷くとガクゾムの前に立ち両腕を天に掲げ、その手の間に産まれた光を腕を振り下ろすことで全身に行き渡らせた。

「デヤッ！ウオオオオオオ！」

その様子を見て、みんなは目を輝かせる。どんな時も必ず皆を守りぬいてきてくれた、最強のガイアの誕生に。

「ガイアが変わるぞら！」

再び光に包まれたガイアの身体は、一層マツシブなものとなり二の腕のあたりまで金に縁どられた黒いプロテクターが生まれ、更に全身がほほ赤く染まり銀色の面積が減る。そして体の側面には銀色で縁どった青いラインが生まれることで、ガイアは自身の最強形態―スプリーム・ヴァージョンへと進化した。

「デヤッ！」

拳を強く握りしめ、ファイティングポーズをとったガイアはガクゾムへと駆け出す。するとガクゾムもガイアへと肉迫していくが、ガイアの渾身の回し蹴りを受けて転倒する。

「ラアッ！」

さらに立ち上がるとうとするガクゾムの太ももを蹴り立ち上がる事すら妨害する。そしてガクゾムの頭を掴むと、そのまま力づくで放り

投げる。

強化体となったガクゾムに先程まで圧されていたが、リナルルから更に光を与えられた結果。スプリームヴァージョンとなり強化された筋力を活かし、今度はガイアが一方的にガクゾムを圧していく。

「強い…」

初めて目の前で見えるスプリーム・ヴァージョンの戦闘力に月も思わぬぞう眩く。しかもそれが、最近知り合った少年だというのが信じられなかった。A q o u r s のみんなは慣れているのかもしれないが、それぐらい普段の遥とガイアとして戦う時の遥にはギャップがあった。

「アエリヤアアア!!」

投げ飛ばされ倒れ込んだガクゾムにガイアはさらに駆け寄ると首を掴んで無理やり立たせると、巴投げの要領で投げ飛ばし、さらに起き上がると駆け出してガクゾムを蹴り飛ばしさらに持ち上げると頭から落とす。

更にダメージに悶えるガクゾムを頭上に持ち上げると、ガイアは空高く投げ飛ばしガクゾムは盛大に地面に叩き付けられる。

ガクゾムも接近戦は不利だと悟ったのか、破壊光弾を放ちガイアを攻撃するもガイアは横に転がって回避し、起き上がりざまにフォトンエッジを放つ。

「ウオオオオッ！デリヤアアアッ!!」

スプリーム・ヴァージョンへとヴァージョンアップを果たしたことで、V2時のおよそ二倍の威力で放たれたフォトンエッジだったが、それでもガクゾムは吸収して見せた。

そして増幅し、紫色の光線として跳ね返され再びガイアへとその一撃が迫りくる。

「ハアッ！」

だがその攻撃を、間に割って入ったアグルが粒子が渦を巻くバリア、ウルトラバリアーで弾く。そしてアグルは隣に来たガイアの方を向く。

『遥』

『博樹さん』

『行くぞ！』

『うん！』

それ以上の言葉は必要なかった。アグルの意図を読み取ったガイアは頷くと、それぞれが大技の発射態勢に入る。

「デヤッ！デリヤアアア……」

ガイアは左腕を胸に右腕を天に掲げた後、両腕を大きく前後に回し両手の間にエネルギーを集中させて胸の前に合掌の形に合わせる。

「ハアアアア……ハアッ！」

アグルは両腕をライフゲージの前に構えた後、両腕を水平に広げ右腕を天に掲げると両腕で体の前に大きく円を描くと光球を創り上げ腰だめに構える。

「デヤアッ！！」

「トワアッ！！」

ガイアは右手を下にスライドさせ、アグルは創り上げた光球を両掌で押し出す。

ガイアのフォトンストリームとアグルのフォトンスクリューの同時攻撃ーフォトンスクエアーを受けたガクゾムは、それすら吸収しようとするが長時間におけるフォトンストリームの照射とフォトンスクリューの二発目に耐えきれず、その身を爆散させるのだった。

ガクゾムを倒したことによって、空を覆っていた暗雲もバイアクへーも消滅し。空は青空を取り戻していた。

「やった！」

「ウルトラマンの勝利ですわ！」

青空の下で、ガイアとアグル。2人のウルトラマンは佇んでいた。そして自身たちへと駆け寄る少女たちに気がつく、彼女らへと視線を落とす。

「ありがとう、ウルトラマン」

千歌がそう告げると、2人の巨人は無言で頷く。そして2人は、空を見上げるとそのまま青空へと飛び去って行った。

遥は、今朝ライブを行っていた庭園のあるビルがあった場所に佇んでいた。シルビアが、リナルと共に光を授けてくれなかったら今頃この瓦礫の中で息絶えていただろう。

あの時負った怪我は、光を授かった時に不思議な事に完治していた。それもきつと、この地球が起こしてくれた奇跡なのだろう。初めてウルトラマンガイアになったその日から、何度も自分は地球そのものに救われてきたのだと。この時遥はそう思っていた。

「遥（くん）！」

そうしていると遠くから自分を呼ぶ声が聞こえたのでそちらを見ると、A q o u r sのみんながこちらへと駆け寄ってくるのが見えた。

「みんな…」

みんなの無事な姿を見て、遥はなんとなく身体から力が抜けていくのを感じた。それでも、自分を心配してくれているみんなに笑顔を向ける。

「遥…ほんとに良かった」

「姉さん…ありがとう。僕を信じてくれて」

遥にそう泣きそうになりながら告げる梨子に、遥はそう返す。きつと彼女も、あのままでは遥が助からないであろうことには気がついていたのであろうことは遥も予測していた。

「遥くん…」

「ごめんね花丸ちゃん、いつも心配かけて…でももう大丈夫、僕は生きてる。ここにいますよ」

泣きながら遥へと駆け寄ってきた花丸には、優しくそう告げた。ゾグと初めて戦った日の前日、善子に『花丸はきつと遥の事が好き』そう告げられてから。彼女は特に自分を大事に思ってくれている、心配してくれていることを自覚するようになった。

それなのに、ゾグに敗北した時もフェイトと戦った時も、そして今

回も―いつも心配ばかりさせてしまった事を申し訳なく感じていた。
「うん……」

「みんなもありがとう。みんながいてくれたから、僕は戦えた。この街も、ここに住むみんなもあったかいから、僕はそんな場所を守りたい。って頑張れたんだ」

短くそう返す花丸に頷くと、今度は全員を見渡して遥はそう告げる。みんなの存在が、遥に戦う勇気を与えてくれたのだからと。

「ヒロはそうやって後ろから見てるのが好きなの？」

「勘弁してくれ……」

そんな彼女らの元に、博樹が歩み寄ってくるのに気がついた鞠莉がそう言つて冷やかすと、本気で嫌そうな顔を博樹は見せてくれた。

「博樹さんも、ありがとうございます。アグルがいなかったらきつと……」

そう千歌が告げると、博樹は「ああ」と素っ気なく応じる。

「もしかして照れてる？ 珍し」

そんな博樹の様子を、果南もそう言つて茶化す。すると博樹は凶星だったのか、すぐさま話題を変える。

「そういえば、果南達は何時までこっちにいるんだ？」

「千歌達6人のライブを見届けたら、そのまま発つよ」

今企画している、新しいA q o u r sを静真高校の関係者や街の人に観てもらうためのライブ。それを見届ければ、そのまま彼女達と言葉を交わすことなく。三年生はこの街を発つ、その事に千歌達在校生組は寂しそうな顔をする。

でもそれを口にするには無かった。たとえもう9人でステージに立つことが無くとも、9人でやって来たことは決してなくなならない。心はずつと繋がっていると解つたから。

「ヒロは？」

「オレもそうするかな……遠回りしたが、オレも自分の夢を追うさ」

聞き返されて博樹はどこか空を見ながらそう告げる。『海を知りたい』かつて果南にそう語つた博樹は結局は、アグルとして地球を破滅

から救う為に併走してきた。だが答えを得た今、再びかつて見た夢を追うことを決意したのだという。

「それじゃあ今度こそ、4人ともそれぞれの場所に向かうのですね」
そう言ってダイヤは笑った。

そうしていると不意に遥は倒れそうになり、目の前にいる花丸にもたれかかるような格好になってしまう。

「遥くん!？」

「ごめん花丸ちゃん、なんか…すごい眠いんだ……」

そう言う遥の声は先程までと比べるとか細いものだった。そしてそのまま彼は目を閉じてしまう。

「…おやすみなさい」

そんな遥を抱きとめると、花丸もそう穏やかな顔で告げるのだった。

そして翌日から、予定通り次のライブの準備を進めていった。浦の星の仲間たちと、ステージから何まで全て自分達だけで作り上げていくのだった。

遂にライブを前日に控えた今日。なんとかステージも完成にこぎつけそうだった。虹を模したアーチにブルーシートで作ったAoursの文字、全てここにいる皆で作り上げたものだ。

更には浦の星の生徒だけでなく、静真高等学校の生徒たちも今回のライブの準備を手伝ってくれた。

決め手となったのは、Saint Snowとのライブだった。あのライブの動画を、月がネットに載せてくれたおかげで沢山の生徒の目に留まり本気でAoursを応援したいと思い協力を申し出てくれたのだ。

「よく考えてみたらさ、A q o u r sのステージを自分達で作るの初めてじゃない？」

「そうね」

できあがったアーチを見て、不意にそう呟く曜に梨子もそう同意する。

「新しいスタートにふさわしいってことだね」

そう千歌も告げる。このステージが、自分達の新しいスタートとなる。今までのことは無くならない、ゼロをイチにした。そしてそのステージが、その先へと進む第一歩となるのだ。

「このステージで歌うんだね」

「楽しみね」

そう言葉を交わしていると、不意に花丸が目の前に飛び出してくる。

「緊張…しないずら……」

「ホントだ。なんで…？」

そう善子も同様に不思議そうな顔で告げる。

「きつと、ちよつぱりおおきくなつたのかも」

「マルたちが？」

「うん！」

この前の静真での発表会の時から、そんなに時間は経っていないが色んなことがあった。その出来事が自分達を成長させてくれたのだと、ルビィは思った。

実際そうなのだ、緊張しない。というのは気が抜けている訳では無く、心に余裕ができたと言う事なのだから。

その日は、残りの準備は任せて欲しいという好意に甘えてA q o u r sは先に抜けて帰路についていた。そして練習しようかと悩んでいたところで果南達三年生と出会い、一緒に浦の星前まで来ていた。

沼津の方からバスで学校前まで来ると、バス停閉鎖の張り紙がされていた。元々浦の星の生徒しか利用しなかつたのだから当然と言え

ば当然なのだがやはりもの寂しさを感じる。

夕日で赤く染まった空の下、バス停から学校までの坂を上っている時に不意に曜が告げた。

「なんか懐かしい気持ち」

「まだ卒業式から少ししか経ってないのに」

そんなに日が経った訳では無いのに、この場所に来るのがとても懐かしく感じる。「毎日通っていた道ですから」と道中ダイヤもそう言って笑っていたが、やはりこの気持ちは全員同じだった。

「少し来ないだけで、懐かしくなっちゃうのかもね」

そしてグラウンドが見えてくると、不思議と安心した。

「本当、色んなことがありましたわね」

「毎日に賑やかだったなあ〜」

学校へと続く道からグラウンドを見下ろしてダイヤと鞠莉がそう感慨深げに告げると。善子は「賑やかって言うよりうるさいかもだけど」と冷やかすと「花丸にうるさかったのは善子ちゃんもずら」と逆にからかわれてしまう。

「でも、楽しかった」

そうこう話をしていると、一同は校門の前に辿り着く。

「どうして学校だったの?」

「ここに來ることを提案したのは三年生だったので、千歌がそう問いかける。」

「どうだろ?呼ばれたのかな?」

「でも、ちゃんとあつて安心したずら」

そうはぐらかすように答える果南に、花丸はそう本当にほっとしたように告げるとどつと笑いがこみ上げてきた。

「あっ…開いてる…」

そう最初に気がついたのは曜だった。彼女が向けている視線の先を見ると、校門が少しだけ開いていた。まるで、また中に入ってくることを望んでいるように。そして千歌がゆっくりとそこへと歩み寄っていた。

「大丈夫、無くならないよ」

そう校門に優しく手を触れた千歌はそう告げる。

「浦の星も、この校舎も。グラウンドも図書室も屋上も部室も。海も砂浜もバス停も太陽も船も空も山も街も…A q o u r s も」

そう言って彼女は校門をそっと閉じる。

「帰ろう。全部ここに、ここに残ってる。ゼロには絶対ならないんだよ」

振り返って千歌はそう笑顔で告げる。寂しい気持ちがない訳ではないだろう。それでも笑顔で前を向いていくことを決意したのだ。ここでの思い出を、笑顔の思い出にするために。

「わたしたちの中に残って、ずっとそばにいる。ずっと一緒に歩いて行く。全部わたしたちの一部なんだよ」

「だから」と彼女は円陣を組む時と同じように手を差し出す。

「全部始まりはゼロだった」

そう千歌が告げると、彼女の手全員手を重ねた。

— 始まって。一步一步前に進んで、積み上げて

— でも、気づくとゼロに戻っていて

— それでも、一つ一つ積み上げてきた

— 何とかなる。きつと、何とかなるって信じて

— それでも現実には厳しくて

— 一番叶えたい夢は、叶えられず

— また、ゼロに戻ったような気がしたけれど

— 私達の心の中には、色んな宝物が生まれていて

— それは、絶対消えないものだから…！

— 青い鳥が、あの虹を越えて飛べたんだから。わたしたちにも、

きつとできるよ！

『皆さんこんにちは。わたしたちは浦の星…あつ、元浦の星学院ス

クールアイドル、Aqoursです。今のルビイ達、新生Aqoursを是非、見てください!』

遂に来たライブ当日、ライブ前のあいさつを受け持ちたいとルビイは自分から志願した。これからは姉達の居ない中でやっていくのだから、いつまでも上級生に頼りっぱなしではいけないからと。

1人ステージの上で話す彼女の姿は、一年前では想像できない程堂々としたものだった。それは即ち、一年間での成長と彼女自身が自分に自信を持つことができるようになった証明なのだろう。

特に昔からルビイを知っている博樹たちは、そう強く感じた。「もつと前で観ればいいのに」

駅前の特設ステージ前に集まっている観客から少し離れた遠い位置で一人見守る博樹に果南がそう告げる。

「いいんだよオレは、結局時間とれなくて最後まで居れないしな」

そうヒロは視線を逸らして告げるが、その表情は苦笑いを浮かべていた。

「ヒロって相変わらず冷たいのね」

「鞠莉さん、最後まで居られないのは私達もでしょう」

そう言って鞠莉がからかうのをダイヤが窘める。結局4人とも、6人が新たなスタートを切るのを見届けるとライブが終わるまで待たずにそれぞれの場所へと向かってしまうのだ。

ルビイが舞台袖に戻り、衣装の上に羽織っていた上着を脱ぐと他のメンバーは先に衣装でスタンバイしていた。

「さあ、精一杯歌おう!」

「みんなの為に!」

「思いを込めて!」

「響かせよう!」

「私達の歌を!」

「始まりの歌を!」

そう一人一人が告げると円を組み、それぞれの右手を重ねる。

「イチ!」

「二!」

「サン！」

「ヨン！」

「ゴ！」

「ロク！」

「ナナ！」

「ハチ！」

『キユウ！』

ここにはいないはずの3人の声も、この時6人は聞こえた気がした。そして千歌は息を吸うと大きな声を出す。

「イチからその先へ！その先の未来へ！A q o u r s—」

「サンシャイン!!」

—NEXT SPARKLING!!—

ゼロをイチにした少女たちの、そのイチの先を目指す始まりの歌。少女たちの物語はゼロをイチにして終りでは無く。その先へと進んでいくのだ。

輝きを目指した少女たちは、その輝きの先へと。一つ虹を越えたら、また次の虹を越えるために。

そしてこの先、少女たちがどう輝いて行くのかは誰も知らない。だってそれは、この先の未来のお話なのだから。

—数十年後—

内浦の砂浜を駆ける少女がいた。ふわりとした少しくせつ毛のあ

る赤紫色の髪を肩まで伸ばした少女は、立ち止まると後を追ってくる少女を待っていた。

「待ってよ薫子（かおるこ）、なんでいつつもここに来るとそんな元気なわけ？」

「だってせーちゅ？だよ？」

「あー何だっけ？えーと…」

そう笑顔で返す薫子と呼ばれた少女は、タレ目気味な綺麗な琥珀色の眼を釣り上げて頬を膨らませる。

「A q u o r sだよア・ク・ア。ボク絶対高校生になったらスクールアイドルやるんだ！」

そう言って今度は屈託のない笑みを浮かべる。

その空は青く、虹が架かっていた。

この星には人間が居て、怪獣がいる。そして他にもまだ知らないこの星の仲間が生きている。彼らの存在が再び『ウルトラマン』という光を呼び戻してくれた。

この星を破滅から救う力を持っているのは今の所人類だけだ。だからこそ、この星を破滅させないという意志を人類が持ち続け、その努力を辞めない限りこの世界は滅んだりしない。

そして、そんな人の心が見せる輝きもまた。ずっと消えずに残っていくのだろう。

これからも、ずっと――